

志木市の文化財 第97集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 11

西原大塚遺跡第35地点

2024

埼玉県志木市教育委員会



108 号住居跡出土人面把手付土器



108号住居跡出土遺物・展開写真



102J-5



112J-2



112J-3



112J-7



118J-5



102・112・118号住居跡出土遺物・展開写真

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書 11』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果を志木市教育委員会がまとめたものです。今回は、西原大塚遺跡第 35 地点を掲載しています。

現在、市内には、15 か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

特に、縄文時代中期では、200 軒以上の住居跡が土坑域を囲むように分布しており、「環状集落」と呼ばれる縄文時代特有の集落が形成されていたことが分かっています。また、弥生時代後期から古墳時代前期では、今回の検出例を含め 670 軒を超える住居跡が発見されており、県内屈指の集落跡として知られています。

さて、今回の第 35 地点では、縄文時代中期の住居跡 20 軒・土坑 26 基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡 5 軒・方形周溝墓 2 基、平安時代の住居跡 2 軒、中世以降の溝跡 2 本などの遺構が見つかりました。また、遺物では、108 号住居跡から縄文時代中期の人面把手付土器が出土しており、貴重な発見となっております。

今後、この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者や土地所有者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡（県№09－007）の第35地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、事業者から志木市遺跡調査会（会長 秋山太蔵）が委託を受け、佐々木保俊が調査担当者を務めて実施した。整理作業及び報告書刊行作業は、志木市教育委員会を調査主体者とし、有限会社アルケリサーチに調査支援業務を委託した。
3. 本書の作成において、編集は中村真理・松木綾子が行い、徳留彰紀が監修した。執筆分担は下記のとおり。なお、西原大塚遺跡108号住居跡出土人面把手付土器について、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授中村耕作氏に玉稿を賜った。記して御礼申し上げる。

尾形剛敏 第1章第1節

徳留彰紀 第1章第2節、第2章、第4章第1・2節

松木綾子 第3章第1・3・4・5節

中村真理 第3章第2節

新海達也 第3章第1～5節（石器部分）

藤波啓容 第4章第3節

4. 遺物の実測は、中村真理・松木綾子・大賀秀実・新海達也・田中 歩・本望礼子・山崎芳春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは田中 歩・岩澤朋子が行った。写真撮影は松本和延が行った。
 5. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
6. 調査組織

【志木市遺跡調査会】（平成8年度）

○発掘作業

担 当 者 佐々木保俊

調 査 員 内野美津江

参 加 者 朝香輝郎・足立裕子・阿部公子・伊野部三千子・大平祐子・岸田純一
金野照子・鈴木美佐江・鈴木百合香・砂川春子・高倉光代・高橋恭子
竹内美代子・塚田和枝・土屋富子・永井真理・東浦久美子・久留浪子
成田しのぶ・二階堂美知子・松崎陽子・広沢奈津子・宮川幸佳・柳沢美子
矢野恵子・油橋由美・吉谷顕子

【志木市教育委員会】（令和5年度）

教 育 長 柚木 博

教 育 政 策 部 長 今野美香

生 涯 学 習 課 長 土崎健太

生 涯 学 習 課 副 課 長 吉成和重

生 涯 学 習 課 主 査 徳留彰紀

〃 大久保 聡

生涯学習課主任	尾形則敏
〃	石川千尋
〃	塚原会理（～令和5年6月）
生涯学習課主事	木村結香
生涯学習課主事補	吉田優奈（令和5年8月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬 克（委員）
〃	上野守嘉（委員）
〃	新田泰男（委員）
〃	大木雄平（委員）

○整理作業

担当者	徳留彰紀・大久保 聡・尾形則敏・木村結香
調査員	深井恵子・青木 修
調査補助員	星野恵美子
整理作業員	池野谷有紀・小林詠美子・片山 望・二階堂美知子・松浦恵子・山口優子 秋山良友・福田浩明・田中弥緒

【有限会社アルケリーサーチ】

調査員	藤波啓容
調査補助員	中村真理・松木綾子・大賀秀実・新海達也・山崎芳春
整理作業員	田中 歩・松本和延・岩澤朋子・本望礼子

7. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館
五十嵐 睦・江原 順・照林敏郎・野沢 均・早坂廣人・宮田圭祐・山本典幸

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
第1図 1：10,000「志木市全図」株式会社パスコ調製
第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行
株式会社ゼンリン
2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。
3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
5. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。
8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。
高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚
9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。
J＝縄文時代の住居跡 Y＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡
方＝弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓 H＝奈良・平安時代の住居跡 M＝溝跡
柵＝柵列 D＝土坑 S＝集石 P＝ビット

目 次

巻頭図版

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿 図 目 次／表 目 次／図 版 目 次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	12
第2章 発掘調査の概要	17
第1節 調査に至る経緯	17
第2節 発掘調査の経過	17
第3章 検出された遺構・遺物	22
第1節 縄文時代の遺構・遺物	22
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物	252
第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物	267
第4節 中世以降の遺構・遺物	279
第5節 遺構外出土遺物	286
第4章 調査のまとめ	301
第1節 西原大塚遺跡第35地点出土の縄文時代中期の土器について	301
第2節 西原大塚遺跡の縄文時代中期集落の変遷について	309
第3節 西原大塚遺跡出土の記号土器について	313
付 編	317
I. 勝坂式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器	319
II. ガラス小玉蛍光X線分析	333

図 版

報告書抄録

插图目次

第 1 图 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第 2 图 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)	13
第 3 图 遺構分布図 (1/300)	21
第 4 图 縄文時代遺構全体図 (1/400)	22
第 5 图 101 号住居跡 (1/60)	23
第 6 图 101 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	24
第 7 图 101 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	24
第 8 图 101 号住居跡出土遺物 2 (1/3)	25
第 9 图 102 号住居跡・102 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	28
第 10 图 102 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	29
第 11 图 102 号住居跡出土遺物 2 (1/4)	30
第 12 图 102 号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	31
第 13 图 102 号住居跡出土遺物 4 (1/3)	32
第 14 图 102 号住居跡出土遺物 5 (1/3)	33
第 15 图 103 号住居跡・炉・埋葬 (1/60・1/30)	37
第 16 图 103 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	38
第 17 图 103 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	38
第 18 图 103 号住居跡出土遺物 2 (1/4)	39
第 19 图 103 号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	40
第 20 图 103 号住居跡出土遺物 4 (1/3)	41
第 21 图 103 号住居跡出土遺物 5 (1/3)	42
第 22 图 103 号住居跡出土遺物 6 (1/3・2/3)	43
第 23 图 103 号住居跡出土遺物 7 (1/3・2/3)	44
第 24 图 104 号住居跡・炉・埋葬 (1/60・1/30)	50
第 25 图 104 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	51
第 26 图 104 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	51
第 27 图 104 号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3)	52
第 28 图 104 号住居跡出土遺物 3 (1/3・2/3)	53
第 29 图 104 号住居跡出土遺物 4 (1/4・1/3・2/3)	54
第 30 图 105 号住居跡 (1/60)	58
第 31 图 105 号住居跡炉・遺物出土状態 (1/30・1/60)	59
第 32 图 105 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	59
第 33 图 105 号住居跡出土遺物 2 (1/4)	60
第 34 图 105 号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	61
第 35 图 105 号住居跡出土遺物 4 (1/3・2/3)	62
第 36 图 105 号住居跡出土遺物 5 (1/3・2/3)	63
第 37 图 105 号住居跡出土遺物 6 (1/3)	64
第 38 图 106 号住居跡・炉 (1/60・1/30)	68
第 39 图 106 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	69
第 40 图 106 号住居跡出土遺物 1 (1/4・1/3)	69
第 41 图 106 号住居跡出土遺物 2 (1/3)	70
第 42 图 106 号住居跡出土遺物 3 (1/3・2/3)	71
第 43 图 106 号住居跡出土遺物 4 (1/3)	72
第 44 图 106 号住居跡出土遺物 5 (1/3)	73
第 45 图 107 号住居跡・炉 (1/60・1/30)	76
第 46 图 107 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	77
第 47 图 107 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	77
第 48 图 107 号住居跡出土遺物 2 (1/4・1/3)	78
第 49 图 107 号住居跡出土遺物 3 (1/3)	79
第 50 图 107 号住居跡出土遺物 4 (1/3)	80
第 51 图 107 号住居跡出土遺物 5 (1/3)	81
第 52 图 108 号住居跡・炉 (1/60・1/30)	85
第 53 图 108 号住居跡遺物出土状態 (1/60)	86
第 54 图 108 号住居跡出土遺物 1 (1/4)	88
第 55 图 108 号住居跡出土遺物 2 (1/4)	89
第 56 图 108 号住居跡出土遺物 3 (1/4)	90
第 57 图 108 号住居跡出土遺物 4 (1/4)	91
第 58 图 108 号住居跡出土遺物 5 (1/4)	92
第 59 图 108 号住居跡出土遺物 6 (1/4)	93
第 60 图 108 号住居跡出土遺物 7 (1/4)	94
第 61 图 108 号住居跡出土遺物 8 (1/4)	95
第 62 图 108 号住居跡出土遺物 9 (1/4)	96
第 63 图 108 号住居跡出土遺物 10 (1/4)	97
第 64 图 108 号住居跡出土遺物 11 (1/4)	98
第 65 图 108 号住居跡出土遺物 12 (1/4)	99
第 66 图 108 号住居跡出土遺物 13 (1/4)	100
第 67 图 108 号住居跡出土遺物 14 (1/4)	101
第 68 图 108 号住居跡出土遺物 15 (1/4)	102
第 69 图 108 号住居跡出土遺物 16 (1/4)	103
第 70 图 108 号住居跡出土遺物 17 (1/4・1/3)	104
第 71 图 108 号住居跡出土遺物 18 (1/3)	105
第 72 图 108 号住居跡出土遺物 19 (1/3)	106

第73图	108号住居跡出土遺物 20 (1/3)	107	第111图	114号住居跡出土遺物 4 (1/3·2/3)	163
第74图	108号住居跡出土遺物 21 (1/3·2/3)	108	第112图	114号住居跡出土遺物 5 (1/3·2/3)	164
第75图	108号住居跡出土遺物 22 (1/3·2/3)	109	第113图	115号住居跡·炉 (1/60·1/30)	167
第76图	109号住居跡 (1/60·1/30)	118	第114图	115号住居跡出土遺物 (1/3)	168
第77图	109号住居跡遺物出土状態 (1/60)	119	第115图	116号住居跡·炉 (1/60·1/30)	170
第78图	109号住居跡出土遺物 1 (1/4)	119	第116图	116号住居跡出土状態 (1/60)	171
第79图	109号住居跡出土遺物 2 (1/4·1/3)	120	第117图	116号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	172
第80图	109号住居跡出土遺物 3 (1/3)	121	第118图	116号住居跡出土遺物 2 (1/3)	173
第81图	109号住居跡出土遺物 4 (1/3)	122	第119图	116号住居跡出土遺物 3 (1/3·2/3)	174
第82图	109号住居跡出土遺物 5 (1/3·2/3)	123	第120图	117号住居跡·炉 (1/60·1/30)	177
第83图	109号住居跡出土遺物 6 (1/3·2/3)	124	第121图	117号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	178
第84图	109号住居跡出土遺物 7 (1/3)	125	第122图	117号住居跡出土遺物 2 (1/3·2/3)	179
第85图	110号住居跡·炉·遺物出土状態 (1/60·1/30)	130	第123图	118号住居跡 1 (1/60)	183
第86图	110号住居跡出土遺物 1 (1/4)	131	第124图	118号住居跡 2 (1/60)	184
第87图	110号住居跡出土遺物 2 (1/4·1/3)	132	第125图	118号住居跡·炉 (1/30·1/150)	185
第88图	110号住居跡出土遺物 3 (1/3·2/3)	133	第126图	118号住居跡遺物出土状態 (1/60)	186
第89图	110号住居跡出土遺物 4 (1/3·2/3)	134	第127图	118号住居跡出土遺物 1 (1/4)	187
第90图	111号住居跡·遺物出土状態 (1/60)	137	第128图	118号住居跡出土遺物 2 (1/4)	188
第91图	111号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	138	第129图	118号住居跡出土遺物 3 (1/4)	189
第92图	111号住居跡出土遺物 2 (1/3)	139	第130图	118号住居跡出土遺物 4 (1/4·1/3)	190
第93图	111号住居跡出土遺物 3 (1/3)	140	第131图	118号住居跡出土遺物 5 (1/3)	191
第94图	112号住居跡·炉 (1/60·1/30)	143	第132图	118号住居跡出土遺物 6 (1/3)	192
第95图	112号住居跡遺物出土状態 (1/60)	144	第133图	118号住居跡出土遺物 7 (1/3)	193
第96图	112号住居跡出土遺物 1 (1/4)	145	第134图	118号住居跡出土遺物 8 (1/3)	194
第97图	112号住居跡出土遺物 2 (1/4)	146	第135图	118号住居跡出土遺物 9 (1/3·2/3)	195
第98图	112号住居跡出土遺物 3 (1/4·1/3)	147	第136图	118号住居跡出土遺物 10 (1/3)	196
第99图	112号住居跡出土遺物 4 (1/3)	148	第137图	118号住居跡出土遺物 11 (1/5·1/3·2/3)	197
第100图	112号住居跡出土遺物 5 (1/3·2/3)	149	第138图	119号住居跡·炉 (1/30·1/60)	205
第101图	112号住居跡出土遺物 6 (1/4·1/3·2/3)	150	第139图	119号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	206
第102图	113号住居跡·炉 (1/60·1/30)	154	第140图	119号住居跡出土遺物 2 (1/3)	207
第103图	113号住居跡出土遺物 1 (1/3·2/3)	155	第141图	119号住居跡出土遺物 3 (1/4·1/3·2/3)	208
第104图	113号住居跡出土遺物 2 (1/4·1/3)	156	第142图	120号住居跡·炉 (1/60·1/30)	211
第105图	114号住居跡 1 (1/60)	158	第143图	120号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	212
第106图	114号住居跡 2·炉·埋裏 (1/60·1/30)	159	第144图	120号住居跡出土遺物 2 (1/3·2/3)	213
第107图	114号住居跡遺物出土状態 (1/60)	160	第145图	120号住居跡出土遺物 3 (1/3)	214
第108图	114号住居跡出土遺物 1 (1/4·1/3)	160	第146图	2号埋裏 (1/30)	216
第109图	114号住居跡出土遺物 2 (1/4·1/3)	161	第147图	2号埋裏出土遺物 1 (1/4·1/3)	216
第110图	114号住居跡出土遺物 3 (1/3)	162	第148图	2号埋裏出土遺物 2 (1/3)	217

第149図 縄文時代土坑 1 (1/60)	227	第187図 9号住居跡出土遺物 3 (1/4・1/3)	272
第150図 縄文時代土坑 2 (1/60)	228	第188図 10号住居跡・カマド (1/60・1/30)	275
第151図 縄文時代土坑 3 (1/60)	229	第189図 10号住居跡出土遺物 1 (1/4)	275
第152図 縄文時代土坑出土遺物 1 (1/3)	231	第190図 10号住居跡出土遺物 2 (1/4)	276
第153図 縄文時代土坑出土遺物 2 (1/4・1/3)	232	第191図 12号溝跡 (1/60)	277
第154図 縄文時代土坑出土遺物 3 (1/4・1/3)	233	第192図 13号溝跡 (1/60・1/150)	278
第155図 縄文時代土坑出土遺物 4 (1/4・1/3)	234	第193図 13号溝跡出土遺物 (1/3)	278
第156図 縄文時代土坑出土遺物 5 (1/3)	235	第194図 中世以降遺構全体図 (1/400)	279
第157図 縄文時代土坑出土遺物 6 (1/4・1/3)	236	第195図 7号棟列 1 (1/60・1/300)	280
第158図 縄文時代土坑出土遺物 7 (1/3)	237	第196図 7号棟列 2 (1/60・1/300)	281
第159図 縄文時代土坑出土遺物 8 (1/4・1/3)	238	第197図 7号棟列 3 (1/60・1/300)	282
第160図 縄文時代土坑出土遺物 9 (1/3)	239	第198図 7号棟列出土遺物 (1/3)	283
第161図 縄文時代土坑出土遺物 10 (1/4・1/3)	240	第199図 6～10号集石 (1/30)	285
第162図 縄文時代土坑出土遺物 11 (1/3)	241	第200図 縄文時代遺構外出土遺物 1 (1/4・1/3)	287
第163図 縄文時代土坑出土遺物 12 (1/3)	242	第201図 縄文時代遺構外出土遺物 2 (1/3)	288
第164図 縄文時代集石 (1/30)	249	第202図 縄文時代遺構外出土遺物 3 (1/3)	289
第165図 縄文時代集石出土遺物 1 (1/3)	250	第203図 縄文時代遺構外出土遺物 4 (1/3)	290
第166図 縄文時代集石出土遺物 2 (1/3)	251	第204図 弥生時代後期～古銅器前期遺構外出土遺物①(1/4)	291
第167図 弥生時代後期～古銅器前期遺構全体図(1/400)	252	第205図 奈良・平安時代遺構外出土遺物 (1/4・1/3)	291
第168図 106号住居跡 (1/60)	253	第206図 中世以降遺構外出土遺物 (1/3)	291
第169図 106号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	254	第207図 遺構外出土石器 1 (1/3・2/3)	292
第170図 145号住居跡 (1/60)	256	第208図 遺構外出土石器 2 (1/3)	293
第171図 145号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	256	第209図 遺構外出土石器 3 (1/3・2/3)	294
第172図 146号住居跡 (1/60)	258	第210図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図①(1/2)	304
第173図 146号住居跡出土遺物 (1/4)	258	第211図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図②(1/2)	305
第174図 147号住居跡 (1/60)	259	第212図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図③(1/2)	306
第175図 148号住居跡 (1/60)	260	第213図 西原大塚遺跡縄文時代遺構分布図 (1/1500)	310
第176図 148号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	261	第214図 弥生土器記号形式分類図	314
第177図 5号方形周溝墓 (1/60)	262	第215図 遺跡内及び周辺遺跡出土の輪蓋土器・記号土器	315
第178図 5号方形周溝墓出土遺物 (1/4・1/3)	263	第216図 顔面把手付深鉢・関連土器の器形 (S=120)	320
第179図 6号方形周溝墓 (1/60)	264	第217図 各種の「腕」(S=115)	322
第180図 6号方形周溝墓主体部 (1/30)	265	第218図 「多喜窪重文タイプ」関連資料 (S=115)	324
第181図 6号方形周溝墓出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	265	第219図 関連資料 (S=112)	325
第182図 奈良・平安時代遺構全体図 (1/400)	267	第220図 今福利恵による「彌生式土器の型式分岐」概念図	326
第183図 9号住居跡 (1/60)	268	第221図 土器製作社器・加藤へび文・カエル文の関連図説 (S=112)	327
第184図 9号住居跡カマド・遺物出土状態 (1/30・1/60)	269	第222図 今福利恵による動物表現変遷図	328
第185図 9号住居跡出土遺物 1 (1/4・1/3)	270	第223図 顔面・動物表現の消長	328
第186図 9号住居跡出土遺物 2 (1/4)	271	第224図 後期中葉～後葉の儀礼用土器の複雑化(S=112)	329
		第225図 蛍光X線スペクトル	334

目 次

第 1 表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1	第 21 表 106 号住居跡出土土製品一覧	74
第 2 表 志木市の発掘調査報告書一覧 (1)	8	第 22 表 106 号住居跡出土石器一覧	75
志木市の発掘調査報告書一覧 (2)	9	第 23 表 107 号住居跡出土石器一覧 1	82
志木市の発掘調査報告書一覧 (3)	10	107 号住居跡出土石器一覧 2	83
志木市の発掘調査報告書一覧 (4)	11	第 24 表 107 号住居跡出土土製品一覧	83
第 3 表 西原大塚遺跡発掘調査一覧 (1)	14	第 25 表 107 号住居跡出土石器一覧	84
西原大塚遺跡発掘調査一覧 (2)	15	第 26 表 108 号住居跡出土石器一覧 1	109
西原大塚遺跡発掘調査一覧 (3)	16	108 号住居跡出土石器一覧 2	110
第 4 表 西原大塚遺跡第 35 地点の発掘調査工程表 (1)	19	108 号住居跡出土石器一覧 3	111
西原大塚遺跡第 35 地点の発掘調査工程表 (2)	20	108 号住居跡出土石器一覧 4	112
第 5 表 101 号住居跡出土土器一覧 1	26	108 号住居跡出土石器一覧 5	113
101 号住居跡出土土器一覧 2	27	108 号住居跡出土石器一覧 6	114
第 6 表 101 号住居跡出土土製品一覧	27	第 27 表 108 号住居跡出土土製品一覧	115
第 7 表 101 号住居跡出土石器一覧	27	第 28 表 108 号住居跡出土石器一覧	116
第 8 表 102 号住居跡出土土器一覧 1	34	第 29 表 109 号住居跡出土石器一覧 1	126
102 号住居跡出土土器一覧 2	35	109 号住居跡出土石器一覧 2	127
第 9 表 102 号住居跡出土土製品一覧	35	第 30 表 109 号住居跡出土土製品一覧	128
第 10 表 102 号住居跡出土石器一覧	36	第 31 表 109 号住居跡出土石器一覧 1	128
第 11 表 103 号住居跡出土遺物一覧 1	45	109 号住居跡出土石器一覧 2	129
103 号住居跡出土土器一覧 2	46	第 32 表 110 号住居跡出土石器一覧 1	134
103 号住居跡出土土器一覧 3	47	110 号住居跡出土石器一覧 2	135
第 12 表 103 号住居跡出土土製品一覧	47	第 33 表 110 号住居跡出土土製品一覧	135
第 13 表 103 号住居跡出土石器一覧	48	第 34 表 110 号住居跡出土石器一覧	136
第 14 表 104 号住居跡出土土器一覧 1	55	第 35 表 111 号住居跡出土石器一覧 1	140
104 号住居跡出土土器一覧 2	56	111 号住居跡出土石器一覧 2	141
第 15 表 104 号住居跡出土土製品一覧	56	第 36 表 111 号住居跡出土土製品一覧	141
第 16 表 104 号住居跡出土石器一覧 1	56	第 37 表 111 号住居跡出土石器一覧	142
104 号住居跡出土石器一覧 2	57	第 38 表 112 号住居跡出土石器一覧 1	151
第 17 表 105 号住居跡出土土器一覧 1	64	112 号住居跡出土石器一覧 2	152
105 号住居跡出土土器一覧 2	65	第 39 表 112 号住居跡出土土製品一覧	152
105 号住居跡出土土器一覧 3	66	第 40 表 112 号住居跡出土石器一覧	153
第 18 表 105 号住居跡出土土製品一覧	66	第 41 表 113 号住居跡出土石器一覧	156
第 19 表 105 号住居跡出土石器一覧 1	66	第 42 表 113 号住居跡出土石器一覧	157
105 号住居跡出土石器一覧 2	67	第 43 表 114 号住居跡出土石器一覧 1	164
第 20 表 106 号住居跡出土土器一覧 1	73	114 号住居跡出土石器一覧 2	165
106 号住居跡出土土器一覧 2	74	第 44 表 114 号住居跡出土土製品一覧	165

第 45 表	114 号住居跡出土石器一覽	166	第 68 表	縄文時代土坑出土石器一覽	247
第 46 表	115 号住居跡出土石器一覽	169	第 69 表	縄文時代集石出土石器一覽	251
第 47 表	115 号住居跡出土土製品一覽	169	第 70 表	縄文時代集石出土土製品一覽	251
第 48 表	115 号住居跡出土石器一覽	169	第 71 表	縄文時代集石出土石器一覽	251
第 49 表	116 号住居跡出土石器一覽 1	175	第 72 表	106 号住居跡出土石器一覽 1	254
	116 号住居跡出土石器一覽 2	176		106 号住居跡出土石器一覽 2	255
第 50 表	116 号住居跡出土土製品一覽	176	第 73 表	145 号住居跡出土石器一覽	257
第 51 表	116 号住居跡出土石器一覽	176	第 74 表	146 号住居跡出土石器一覽	258
第 52 表	117 号住居跡出土石器一覽	180	第 75 表	148 号住居跡出土石器一覽	261
第 53 表	117 号住居跡出土土製品一覽	181	第 76 表	5 号方形周溝墓出土石器一覽	263
第 54 表	117 号住居跡出土石器一覽	181	第 77 表	6 号方形周溝墓出土石器一覽	266
第 55 表	118 号住居跡出土石器一覽 1	198	第 78 表	6 号方形周溝墓出土土製品・ガラス製品一覽	266
	118 号住居跡出土石器一覽 2	199	第 79 表	9 号住居跡出土石器一覽 1	272
	118 号住居跡出土石器一覽 3	200		9 号住居跡出土石器一覽 2	273
	118 号住居跡出土石器一覽 4	201		9 号住居跡出土石器一覽 3	274
	118 号住居跡出土石器一覽 5	202	第 80 表	9 号住居跡出土土製品一覽	274
第 56 表	118 号住居跡出土土製品一覽 1	202	第 81 表	9 号住居跡出土鉄製品一覽	274
	118 号住居跡出土土製品一覽 2	203	第 82 表	10 号住居跡出土石器一覽	276
第 57 表	118 号住居跡出土石器一覽 1	203	第 83 表	13 号溝跡出土石器一覽	277
	118 号住居跡出土石器一覽 2	204	第 84 表	7 号横列出土石器一覽	283
第 58 表	119 号住居跡出土石器一覽	209	第 85 表	7 号横列出土鉄製品一覽	283
第 59 表	119 号住居跡出土土製品一覽	209	第 86 表	縄文時代遺構外出土石器一覽 1	294
第 60 表	119 号住居跡出土石器一覽	210		縄文時代遺構外出土石器一覽 2	295
第 61 表	120 号住居跡出土石器一覽 1	214		縄文時代遺構外出土石器一覽 3	296
	120 号住居跡出土石器一覽 2	215		縄文時代遺構外出土石器一覽 4	297
第 62 表	120 号住居跡出土土製品一覽	215		縄文時代遺構外出土石器一覽 5	298
第 63 表	120 号住居跡出土石器一覽	215	第 87 表	縄文時代遺構外出土土製品一覽 1	298
第 64 表	2 号埋藏出土石器一覽	217		縄文時代遺構外出土土製品一覽 2	299
第 65 表	縄文時代土坑一覽	230	第 88 表	赤生時代後期-古墳時代前期遺構外出土石器一覽	299
第 66 表	縄文時代土坑出土石器一覽 1	242	第 89 表	奈良・平安時代遺構外出土石器一覽	299
	縄文時代土坑出土石器一覽 2	243	第 90 表	中世以降遺構外出土石器一覽	299
	縄文時代土坑出土石器一覽 3	244	第 91 表	縄文時代遺構外出土石器一覽 1	299
	縄文時代土坑出土石器一覽 4	245		縄文時代遺構外出土石器一覽 2	300
	縄文時代土坑出土石器一覽 5	246	第 92 表	西原大塚遺跡縄文時代住居跡一覽	311
	縄文時代土坑出土石器一覽 6	247	第 93 表	ガラス製小玉の FP 定量結果	335
第 67 表	縄文時代土坑出土土製品一覽	247			

图版目次

- 卷頭図版 1 108 号住居跡出土人面把手付土器
- 卷頭図版 2 108 号住居跡出土遺物・展開写真
- 卷頭図版 3 102・112・118 号住居跡出土遺物展開写真
- 図版 1 1. 調査前風景
2. 調査区全景
3. 101 号住居跡
4. 102 号住居跡遺物出土状態
5. 102 号住居跡
6. 102 号住居跡
7. 103 号住居跡遺物出土状態
8. 103 号住居跡遺物出土状態
- 図版 2 1. 103 号住居跡遺物出土状態
2. 103 号住居跡・207 号土坑
3. 103 号住居跡炉
4. 103 号住居跡炉
5. 103 号住居跡埋裏
6. 103 号住居跡埋裏
7. 104 号住居跡・209 号土坑遺物出土状態
8. 104 号住居跡遺物出土状態
- 図版 3 1. 104 号住居跡・209 号土坑
2. 104・107・108・111 号住居跡
3. 104 号住居跡炉
4. 104 号住居跡炉体土器
5. 104 号住居跡埋裏
6. 104 号住居跡埋裏
7. 105 号住居跡遺物出土状態
8. 105 号住居跡遺物出土状態
- 図版 4 1. 105 号住居跡遺物出土状態
2. 105 号住居跡
3. 105 号住居跡
4. 105 号住居跡炉
5. 106 号住居跡遺物出土状態
6. 106 号住居跡遺物出土状態
7. 106 号住居跡炉
8. 106 号住居跡炉
- 図版 5 1. 107 号住居跡遺物出土状態
2. 107 号住居跡炉
3. 108 号住居跡遺物出土状態
4. 108 号住居跡遺物出土状態
5. 108 号住居跡遺物出土状態
6. 108 号住居跡遺物出土状態
7. 108 号住居跡遺物出土状態
8. 108 号住居跡遺物出土状態
- 図版 6 1. 108 号住居跡遺物出土状態
2. 108 号住居跡遺物出土状態
3. 108・111 号住居跡
4. 108 号住居跡炉
5. 108 号住居跡炉
6. 108 号住居跡炉
7. 109 号住居跡遺物出土状態
8. 109 号住居跡遺物出土状態
- 図版 7 1. 109 号住居跡遺物出土状態
2. 109 号住居跡
3. 109 号住居跡炉
4. 109 号住居跡炉
5. 110 号住居跡遺物出土状態
6. 110 号住居跡遺物出土状態
7. 110 号住居跡遺物出土状態
8. 110 号住居跡
- 図版 8 1. 110 号住居跡炉
2. 112 号住居跡遺物出土状態
3. 112 号住居跡遺物出土状態
4. 112 号住居跡遺物出土状態
5. 112 号住居跡遺物出土状態
6. 112 号住居跡
7. 112 号住居跡炉
8. 112 号住居跡炉
- 図版 9 1. 113 号住居跡
2. 113 号住居跡炉
3. 114 号住居跡
4. 114 号住居跡遺物出土状態
5. 114 号住居跡炉

- | | | | |
|------|-------------------|------|-----------------------|
| | 6. 114 号住居跡炉 | | 6. 209 号土坑 |
| | 7. 114 号住居跡埋裏 | | 7. 210 号土坑 |
| | 8. 114 号住居跡埋裏 | | 8. 211 号土坑 |
| 図版10 | 1. 115 号住居跡 | 図版15 | 1. 212 号土坑 |
| | 2. 115 号住居跡炉 | | 2. 213 号土坑 |
| | 3. 116 号住居跡遺物出土状態 | | 3. 214 号土坑 |
| | 4. 116 号住居跡遺物出土状態 | | 4. 215 号土坑 |
| | 5. 116 号住居跡 | | 5. 216 号土坑 |
| | 6. 116 号住居跡炉 | | 6. 217 号土坑 |
| | 7. 117 号住居跡 | | 7. 218 号土坑 |
| | 8. 117 号住居跡炉 | | 8. 222 号土坑 |
| 図版11 | 1. 118 号住居跡遺物出土状態 | 図版16 | 1. 222 号土坑遺物出土状態 |
| | 2. 118 号住居跡遺物出土状態 | | 2. 222 号土坑遺物出土状態 |
| | 3. 118 号住居跡遺物出土状態 | | 3. 223・217 号土坑・11 号集石 |
| | 4. 118 号住居跡遺物出土状態 | | 4. 225 号土坑 |
| | 5. 118 号住居跡遺物出土状態 | | 5. 226 号土坑 |
| | 6. 118 号住居跡 | | 6. 228 号土坑 |
| | 7. 118 号住居跡 | | 7. 1 号集石 |
| | 8. 118 号住居跡炉 | | 8. 2 号集石 |
| 図版12 | 1. 118 号住居跡炉 | 図版17 | 1. 2 号集石 |
| | 2. 119 号住居跡 | | 2. 2 号集石掘り方 |
| | 3. 119 号住居跡炉 | | 3. 3 号集石遺物出土状態 |
| | 4. 119 号住居跡炉 | | 4. 3 号集石掘り方 |
| | 5. 119 号住居跡炉 | | 5. 5 号集石 |
| | 6. 120 号住居跡 | | 6. 5 号集石掘り方 |
| | 7. 120 号住居跡炉 | | 7. 11 号集石 |
| | 8. 120 号住居跡炉 | | 8. 11 号集石掘り方 |
| 図版13 | 1. 2 号埋裏 | 図版18 | 1. 106 号住居跡 |
| | 2. 2 号埋裏 | | 2. 106 号住居跡貯蔵穴 |
| | 3. 201 号土坑 | | 3. 145 号住居跡 |
| | 4. 202 号土坑 | | 4. 145 号住居跡 |
| | 5. 203 号土坑 | | 5. 146 号住居跡 |
| | 6. 204 号土坑 | | 6. 147 号住居跡 |
| | 7. 204 号土坑遺物出土状態 | | 7. 148 号住居跡 |
| | 8. 205 号土坑 | | 8. 148 号住居跡入口施設 |
| 図版14 | 1. 206 号土坑 | 図版19 | 1. 148 号住居跡炉出土状態 |
| | 2. 206 号土坑遺物出土状態 | | 2. 5 号方形周溝墓 |
| | 3. 207 号土坑 | | 3. 5 号方形周溝墓 |
| | 4. 208 号土坑 | | 4. 6 号方形周溝墓 |
| | 5. 209 号土坑 | | 5. 6 号方形周溝墓 |

	6. 6号方形周溝墓	図版31	103号住居跡出土遺物3
	7. 6号方形周溝墓	図版32	103号住居跡出土遺物4
	8. 6号方形周溝墓	図版33	103号住居跡出土遺物5
図版20	1. 9号住居跡土層断面	図版34	103号住居跡出土遺物6
	2. 9号住居跡遺物出土状態	図版35	104号住居跡出土遺物1
	3. 9号住居跡カマド土層断面・遺物出土状態	図版36	104号住居跡出土遺物2
	4. 9号住居跡カマド土層断面	図版37	104号住居跡出土遺物3
	5. 9号住居跡カマド遺物出土状態	図版38	105号住居跡出土遺物1
	6. 9号住居跡遺物出土状態	図版39	105号住居跡出土遺物2
	7. 9号住居跡遺物出土状態	図版40	105号住居跡出土遺物3
	8. 9号住居跡石製紡錘車出土状態	図版41	105号住居跡出土遺物4
図版21	1. 9号住居跡炭化材出土状態	図版42	106号住居跡出土遺物1
	2. 9号住居跡炭化材出土状態	図版43	106号住居跡出土遺物2
	3. 9号住居跡	図版44	106号住居跡出土遺物3
	4. 10号住居跡遺物出土状態	図版45	1. 106号住居跡出土遺物4
	5. 10号住居跡カマド遺物出土状態		2. 107号住居跡出土遺物1
	6. 10号住居跡カマド	図版46	107号住居跡出土遺物2
	7. 10号住居跡	図版47	107号住居跡出土遺物3
	8. 12号溝	図版48	107号住居跡出土遺物4
図版22	1. 13号溝	図版49	108号住居跡出土遺物1
	2. 13号溝	図版50	108号住居跡出土遺物2
	3. 13号溝・7号櫛列	図版51	108号住居跡出土遺物3
	4. 7号櫛列	図版52	108号住居跡出土遺物4
	5. 7号櫛列・9・10号集石	図版53	108号住居跡出土遺物5
図版23	1. 6号集石	図版54	108号住居跡出土遺物6
	2. 7号集石	図版55	108号住居跡出土遺物7
	3. 8号集石	図版56	108号住居跡出土遺物8
	4. 9号集石	図版57	108号住居跡出土遺物9
	5. 10号集石	図版58	108号住居跡出土遺物10
	6. 発掘調査風景	図版59	108号住居跡出土遺物11
	7. 発掘調査風景	図版60	108号住居跡出土遺物12
	8. 発掘調査風景	図版61	108号住居跡出土遺物13
図版24	101号住居跡出土遺物1	図版62	108号住居跡出土遺物14
図版25	1. 101号住居跡出土遺物2	図版63	108号住居跡出土遺物15
	2. 102号住居跡出土遺物1	図版64	108号住居跡出土遺物16
図版26	102号住居跡出土遺物2	図版65	108号住居跡出土遺物17
図版27	102号住居跡出土遺物3	図版66	108号住居跡出土遺物18
図版28	102号住居跡出土遺物4	図版67	108号住居跡出土遺物19
図版29	103号住居跡出土遺物1	図版68	108号住居跡出土遺物20
図版30	103号住居跡出土遺物2	図版69	108号住居跡出土遺物21

- 図版70 109号住居跡出土遺物 1
図版71 109号住居跡出土遺物 2
図版72 109号住居跡出土遺物 3
図版73 109号住居跡出土遺物 4
図版74 109号住居跡出土遺物 5
図版75 109号住居跡出土遺物 6
図版76 110号住居跡出土遺物 1
図版77 110号住居跡出土遺物 2
図版78 1. 110号住居跡出土遺物 3
2. 111号住居跡出土遺物 1
図版79 111号住居跡出土遺物 2
図版80 111号住居跡出土遺物 3
図版81 112号住居跡出土遺物 1
図版82 112号住居跡出土遺物 2
図版83 112号住居跡出土遺物 3
図版84 112号住居跡出土遺物 4
図版85 112号住居跡出土遺物 5
図版86 112号住居跡出土遺物 6
図版87 112号住居跡出土遺物 7
図版88 113号住居跡出土遺物
図版89 114号住居跡出土遺物 1
図版90 114号住居跡出土遺物 2
図版91 114号住居跡出土遺物 3
図版92 115号住居跡出土遺物
図版93 116号住居跡出土遺物 1
図版94 116号住居跡出土遺物 2
図版95 116号住居跡出土遺物 3
図版96 117号住居跡出土遺物 1
図版97 117号住居跡出土遺物 2
図版98 118号住居跡出土遺物 1
図版99 118号住居跡出土遺物 2
図版100 118号住居跡出土遺物 3
図版101 118号住居跡出土遺物 4
図版102 118号住居跡出土遺物 5
図版103 118号住居跡出土遺物 6
図版104 118号住居跡出土遺物 7
図版105 118号住居跡出土遺物 8
図版106 118号住居跡出土遺物 9
図版107 118号住居跡出土遺物 10
図版108 118号住居跡出土遺物 11
図版109 118号住居跡出土遺物 12
図版110 1. 118号住居跡出土遺物 13
2. 119号住居跡出土遺物 1
図版111 119号住居跡出土遺物 2
図版112 119号住居跡出土遺物 3
図版113 120号住居跡出土遺物 1
図版114 120号住居跡出土遺物 2
図版115 1. 2号埋裏出土遺物
2. 縄文時代土坑出土遺物 1
図版116 縄文時代土坑出土遺物 2
図版117 縄文時代土坑出土遺物 3
図版118 縄文時代土坑出土遺物 4
図版119 縄文時代土坑出土遺物 5
図版120 縄文時代土坑出土遺物 6
図版121 縄文時代土坑出土遺物 7
図版122 縄文時代土坑出土遺物 8
図版123 縄文時代土坑出土遺物 9
図版124 縄文時代土坑出土遺物 10
図版125 縄文時代集石出土遺物
図版126 106号住居跡出土遺物
図版127 1. 145号住居跡出土遺物
2. 146号住居跡出土遺物
3. 148号住居跡出土遺物
図版128 5号方形周溝墓出土遺物
図版129 6号方形周溝墓出土遺物
図版130 9号住居跡出土遺物 1
図版131 9号住居跡出土遺物 2
図版132 1. 9号住居跡出土遺物 3
2. 10号住居跡出土遺物 1
図版133 1. 10号住居跡出土遺物 2
2. 13号溝出土遺物
3. 7号櫛列出土遺物
図版134 縄文時代遺構外出土遺物 1
図版135 縄文時代遺構外出土遺物 2
図版136 縄文時代遺構外出土遺物 3
図版137 1. 弥生時代後期～古墳時代前期遺構外出土遺物
2. 奈良・平安時代遺構外出土遺物 2
3. 中世以降遺構外出土遺物
図版138 遺構外出土石器 1
図版139 遺構外出土石器 2
図版140 西原大塚遺跡縄文時代住居跡の時期別分布図（暫定版）

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05km²、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

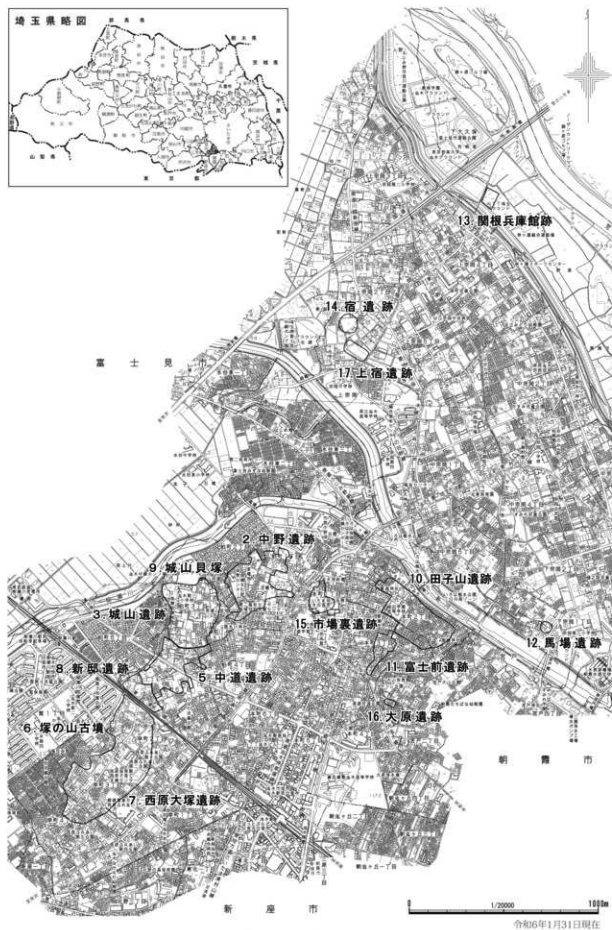
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新郷遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	71,220 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石路集中心点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切式遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,520 m ²	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄（早前～晩）、弥（中～後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石路集中心点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、形跡跡開通、跡道開通等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、跡道開通遺物等
5	中道	55,600 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石路集中心点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石路集中心点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切式遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、古銭等
8	新郷	18,900 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切式遺構、ビツボ跡等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	貝殻屑層	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（早前～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830 m ²	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	15,120 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700 m ²	宅地	集落跡	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600 m ²	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板葺等
合	計	524,580 m ²					

令和6年1月31日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層の第IV層上部・第VI層・第VII層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2か所、平成7（1995）年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。令和元（2019）年には、第224地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VII層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第IV層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑦地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2（2019～2020）年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第IV層下部～第V層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第IV層上部と第VII層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008・2009）年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも石器集中地点1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第IV層下部～第V層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VI層・第VII層で石器集中地点や礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4（2022）年に田子山遺跡第172地点で市内初となる燃糸文期の住居跡が1軒検出された。また、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点では、早期末葉（条痕文系）の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム土層の遺物包含層から燃糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層を

もつ住居跡である。令和元(2019)年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和3～4(2021～2022)年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が3軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成28(2016)年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡2軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1か所、平成25(2013)年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居(敷石住居)1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26(2014)年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28(2015・2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の遺物が比較的まとまって出土している。最新資料として、平成30(2018)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内1式期の住居跡が1軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和3(2021)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が1点発見されている。以降、市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元(2019)年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは壺、甕、高杯、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点の城山遺跡10号住居跡出土遺物は、考古資料として、市指定文化財(令和3年7月1日付け)に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28(2015・2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が650軒以上確認されており、市内

最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅鉋が出土している。

昭和62(1987)年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15(2003)年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18(2006)年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11(1999)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺形土器が出土している。なお、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財(平成25年3月1日付け)に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15(2003)年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7(1995)年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期(7世紀中葉)の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形形で2か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14(2002)年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周

溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器杯や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土鍾1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器杯が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富土見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壇・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村日記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』（註2）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。

この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13(2001)年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状態で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6(1994)年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鋳の札である鉄製品1点と鉄鍬1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ビット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27(2015)年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ビット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25(2013)年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のビットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑(912号土坑)から、人骨(女性2体)と完形品の播鉢が共存する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ(田中 2022)、播鉢は古瀬戸後期IV古～新段階(藤澤 2008)に比定されることから、時期は中世(15世紀中葉～後葉)のものと考えられる。

また、令和元(2019)年と令和3(2021)年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土坑・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果につながった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2～5年)に関連するローム探掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、探掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

第1章 遺跡の立地と環境

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

No.	報告書名 (所在地・遺跡地点名)	発行年	シリーズ名	発行者	編著者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告書	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・高合勝男 谷井 勉・宮野和明
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告書第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
3	新邸遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告書第2集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
4	新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告書第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告書第4集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏 神山健吉
6	中道遺跡発掘調査報告書 (中道遺跡第2地点)	1988	志木市遺跡調査会調査報告書第5集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形明敏
7	城山遺跡長野院地点発掘調査報告書 (城山遺跡第3地点)	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木保俊
8	志木市遺跡群I (城山遺跡第4地点 中野遺跡第6地点 中道遺跡第6地点 西原大塚遺跡第6地点)	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
9	志木市遺跡群II (西原大塚遺跡第8地点 田子山遺跡第1地点 西原大塚遺跡 第9地点 西原大塚遺跡第10地点 中野遺跡第9地点)	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
10	西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
11	志木市遺跡群III (西原大塚遺跡第11地点 城山遺跡第7-9地点)	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
12	志木市遺跡群IV (城山遺跡第11地点 中野遺跡第12地点 田子山遺跡第6-7 地点)	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
13	中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点 発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
14	志木市遺跡群V (市場裏遺跡第3地点 中野遺跡第18地点)	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形明敏
15	志木市遺跡群VI (中野遺跡第31地点 田子山遺跡第29地点 城山遺跡第20 地点)	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形明敏
16	志木市遺跡群VII (西原大塚遺跡第32地点 中道遺跡第33地点 城山遺跡第 25地点 田子山遺跡第32地点 田子山遺跡第37地点)	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏 深井恵子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14 地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡 第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子 山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2 地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
18	志木市遺跡群VIII (城山遺跡第29地点 城山遺跡第32地点 田子山遺跡第39 地点 田子山遺跡第41地点 田子山遺跡第42地点 中道 遺跡第30地点 中道遺跡第37地点 西原大塚遺跡第34地点 中野遺跡第41地点)	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998	—	志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
20	志木市遺跡群9 (中野遺跡第43地点 富士坂遺跡第15地点 田子山遺跡第 47地点 田子山遺跡第48地点 田子山遺跡第49地点 中道 遺跡第41地点 城山遺跡第34地点 城山遺跡第35地点 西原大塚遺跡第36地点)	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
21	志木市遺跡群10 (西原大塚遺跡第37地点 西原大塚遺跡第39地点 中道遺跡 第44地点)	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
22	埋蔵文化財調査報告書1 (田子山遺跡第19地点 田子山遺跡第21地点 田子山遺跡第 25地点 中道遺跡第27地点 大塚遺跡第1地点)	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡第45地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告書第6集	志木市遺跡調査会 小松フォーククラブ連	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳・上田寛
24	志木市遺跡群11 (中野遺跡第50地点 西原大塚遺跡第43地点)	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 内野美津江
25	埋蔵文化財調査報告書2 (中野遺跡第25地点)	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧(1)

No.	報告書名 (所収遺跡地点名)	発行年	シリーズ名	発行者	編著者
26	志木市遺跡第12 (田子山遺跡第69地点 西原大塚遺跡第47地点)	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 深井恵子
27	埋蔵文化財調査報告書3 (城山遺跡第15地点 城山遺跡第16地点)	2002	志木市の文化財第34集	志木市教育委員会	尾形明敏・佐々木保俊 深井恵子・佐々木 潤
28	志木市遺跡第13 (田子山遺跡第78地点 西原大塚遺跡第54地点)	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
29	中野遺跡第49地点・東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告書一	2004	志木市遺跡調査会調査報告書第7集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
30	志木市遺跡第14 (田子山遺跡第81地点 西原大塚遺跡第65地点)	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
31	西原大塚遺跡第111地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2005	志木市遺跡調査会調査報告書第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野天津江 宮川幸佳
32	西原大塚遺跡第110地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2005	志木市遺跡調査会調査報告書第9集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野天津江 宮川幸佳
33	城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2005	志木市遺跡調査会調査報告書第10集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
34	志木市遺跡第15 (西原大塚遺跡第67地点)	2006	志木市の文化財第37集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子
35	新塚遺跡第8地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2007	志木市遺跡調査会調査報告書第11集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
36	中道遺跡第65地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2007	志木市遺跡調査会調査報告書第12集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・藤波啓吾 青柳光彦
37	西原大塚遺跡1-8期 西原特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2009	志木市遺跡調査会調査報告書第13集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野天津江 宮川幸佳
38	志木市遺跡第16 (城山遺跡第46地点 城山遺跡第55地点)	2008	志木市の文化財第38集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
39	西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告書第14集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
40	西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告書第15集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野天津江 宮川幸佳
41	志木市遺跡第17 (城山遺跡第49地点 城山遺跡第57地点 西原大塚遺跡第113地点 西原大塚遺跡第124地点)	2008	志木市の文化財第39集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
42	城山遺跡第61地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告書第16集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
43	城山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告書第17集	志木市遺跡調査会	尾形明敏・藤波啓吾 鈴木 雄・中村真樹
44	埋蔵文化財調査報告書4 (城山遺跡第18地点 城山遺跡第19地点 城山遺跡第21地点 城山遺跡第22地点)	2009	志木市の文化財第40集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
45	志木市遺跡第18 (田子山遺跡第93地点 田子山遺跡第96地点 西原大塚遺跡第137地点 西原大塚遺跡第155地点)	2009	志木市の文化財第41集	志木市教育委員会	尾形明敏・深井恵子 青木 修
46	西原大塚遺跡第108地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2009	志木市の文化財第42集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形明敏 坂上直嗣・青島紀子 高瀬克規・鈴木伸哉 藤城修一
47	中野遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2010	志木市の文化財第43集	志木市教育委員会	佐々木保俊・内野天津江
48	市場前遺跡第13地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2011	志木市の文化財第44集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形明敏 青木 修
49	志木市遺跡第19 (城山遺跡第59地点)	2011	志木市の文化財第45集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 深井恵子・青木 修
50	城山遺跡第63地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2011	志木市の文化財第46集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 坂上直嗣・青島紀子 鈴木伸哉
51	西原大塚遺跡第169地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第47集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形明敏
52	城山遺跡第62地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第48集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 深井恵子・青木 修
53	城山遺跡第72地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第49集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 村上幸司・青島紀子 矢倉健二・石岡智武
54	田子山遺跡第121地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第50集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形明敏 藤波啓吾
55	志木市遺跡第20 (田子山遺跡第107地点 新塚遺跡第10地点 西原大塚遺跡第159地点)	2013	志木市の文化財第51集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 深井恵子・青木 修

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧(2)

№	報告書名 (所収遺跡地点名)	発行年	シリーズ名	発行者	編著者
56	城山遺跡第76地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志本市の文化財第52集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 白崎智隆
57	城山遺跡第64地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志本市の文化財第53集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井憲子 青木 修
58	城山遺跡第71地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志本市の文化財第54集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 中山哲也・二瓶秀幸 植村太郎・加藤夏姫
59	西原大塚遺跡第174地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志本市の文化財第55集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 藤政啓吾・松本純子
60	西原大塚遺跡第179地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2014	志本市の文化財第56集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 二瓶秀幸・末山直子
61	中野遺跡第78地点埋蔵文化財発掘調査報告書	2014	志本市の文化財第57集	志本市教育委員会	大久保 聡・尾形明敏 青木 修
62	志本市遺跡群21 (城山遺跡第62①～③地点 西原大塚遺跡第165地点 西原大塚遺跡第166地点 西原大塚遺跡第171地点)	2014	志本市の文化財第58集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 深井憲子・青木 修
63	埋蔵文化財調査報告書5 (城山遺跡第26地点)	2014	志本市の文化財第59集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 深井憲子・青木 修
64	城山遺跡第82地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2014	志本市の文化財第60集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 宮下孝雄
65	田子山遺跡第131地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2015	志本市の文化財第61集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 宮下孝雄
66	富士原遺跡第23地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2015	志本市の文化財第62集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 清水理史・田中眞秋 藤田 翔
67	埋蔵文化財調査報告書6 (城山遺跡第27地点 城山遺跡第28地点 中道遺跡第56地点)	2015	志本市の文化財第63集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井憲子 青木 修
68	志本市遺跡群22 (西原大塚遺跡第172①～③地点)	2015	志本市の文化財第64集	志本市教育委員会	徳留幸紀・尾形明敏 深井憲子
69	田子山遺跡第132①地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2016	志本市の文化財第65集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 深井憲子
70	埋蔵文化財調査報告書7 (中道遺跡第38地点 中道遺跡第39地点)	2016	志本市の文化財第66集	志本市教育委員会	尾形明敏・深井憲子 青木 修
71	中野遺跡第91地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2017	志本市の文化財第67集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 宅間清公・田中眞江 岩崎浩彦
72	市町界遺跡第23地点 城山遺跡第87地点 西原大塚遺跡第207地点 中野遺跡第95地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2017	志本市の文化財第68集	志本市教育委員会	徳留幸紀・尾形明敏 青木 修
73	中道遺跡第76地点 城山遺跡第91①地点 西原大塚遺跡第211地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2018	志本市の文化財第69集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 深井憲子・青木 修
74	志本市遺跡群23 (西原大塚遺跡第180地点 西原大塚遺跡第182地点 西原大塚遺跡第183地点 西原大塚遺跡第184地点)	2018	志本市の文化財第70集	志本市教育委員会	大久保聡・尾形明敏 深井憲子
75	埋蔵文化財調査報告書8 (田子山遺跡第91地点 中野遺跡第55地点 中野遺跡第57地点)	2018	志本市の文化財第71集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 深井憲子
76	西原大塚遺跡第224地点 中野遺跡第102地点 中野遺跡第104地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2019	志本市の文化財第72集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 深井憲子・青木 修
77	中道遺跡第87地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2020	志本市の文化財第73集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 林 拓雄
78	西原大塚遺跡第224地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2020	志本市の文化財第74集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 成島一成・西川忠春
79	西原大塚遺跡第220地点 西原大塚遺跡第222地点 西原大塚遺跡第227地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2020	志本市の文化財第75集	志本市教育委員会	大久保聡・尾形明敏
80	西原大塚遺跡第216地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2020	志本市の文化財第76集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 青木 修
81	田子山遺跡第160地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2020	志本市の文化財第77集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 石川安司・小林陽子 清水理史
82	城山遺跡第96地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2021	志本市の文化財第78集	志本市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 徳留幸紀・遠行博一 板下敦田・宅間清公
83	西原大塚遺跡第228地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2021	志本市の文化財第79集	志本市教育委員会	尾形明敏・徳留幸紀 大久保聡・宅間清公 小森聡生

第2表 志本市の発掘調査報告書一覧(3)

No.	報告書名 (所収遺跡地点名)	刊行年	シリーズ名	発行者	編著者
84	西原大塚遺跡第 231 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2021	志木市の文化財第 80 集	志木市教育委員会	大久保聡・尾形明敏
85	志木市遺跡群 24 (山崎瓦遺跡第 21 地点 西原大塚遺跡第 199 地点 城山遺跡 第 79 地点)	2021	志木市の文化財第 81 集	志木市教育委員会	大久保聡・尾形明敏 徳留彰紀
86	中野遺跡第 109 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2021	志木市の文化財第 82 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・市川伸弘 観ヶ山真理・越川 学
87	西原大塚遺跡第 223 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2021	志木市の文化財第 83 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・坂下幸明 遠藤知成・小森暢生
88	城山遺跡第 99 地点 中野遺跡第 114 地点 中道遺跡第 92 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2022	志木市の文化財第 84 集	志木市教育委員会	尾形明敏・大久保聡
89	志木市遺跡群 25 (西原大塚遺跡第 174 遺～志地点)	2022	志木市の文化財第 85 集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形明敏 大久保聡・木村結香
90	西原大塚遺跡第 234 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2022	志木市の文化財第 86 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・小林陽子 福京 碧・石川安司
91	中野遺跡第 116 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2022	志木市の文化財第 87 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・木村結香 石川陽子
92	中野遺跡第 117 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2022	志木市の文化財第 88 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・木村結香 小林陽子・道本理史
93	西原大塚遺跡第 235 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2023	志木市の文化財第 89 集	志木市教育委員会	徳留彰紀・大久保聡 尾形明敏・木村結香 市川伸弘
94	中野遺跡第 121 地点 中野遺跡第 123 地点 中道遺跡第 94 地点 田子山遺跡第 172 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2023	志木市の文化財第 90 集	志木市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 徳留彰紀・尾形明敏
95	埋蔵文化財調査報告書 9 (西原大塚遺跡第 70 地点)	2023	志木市の文化財第 91 集	志木市教育委員会	尾形明敏・徳留彰紀 大久保聡・深井憲子
96	志木市遺跡群 26 (中野遺跡第 87 地点 中道遺跡第 74 地点 田子山遺跡第 129 地点)	2023	志木市の文化財第 92 集	志木市教育委員会	大久保聡・徳留彰紀 尾形明敏
97	城山遺跡第 101 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2023	志木市の文化財第 93 集	志木市教育委員会	徳留彰紀・大久保聡 尾形明敏 木村結香 藤竹陽一郎・坂下貴明 遠藤知成
98	中野遺跡第 122 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2023	志木市の文化財第 94 集	志木市教育委員会	大久保聡・尾形明敏 木村結香・原野真由 石橋佳奈・黒沼保子 伊藤 茂・加藤和浩 廣田正史・佐藤正教 山形秀樹 Zsuzsanna Lomtatidze 貝見寛司・佐伯史子 奈良貴史
99	埋蔵文化財発掘調査報告書 10 (西原大塚遺跡第 72 地点)	2024	志木市の文化財第 95 集	志木市教育委員会	尾形明敏・大久保聡 深井憲子
100	中道遺跡第 97 地点 田子山遺跡第 173 地点 埋蔵文化財発 掘調査報告書	2024	志木市の文化財第 96 集	志木市教育委員会	木村結香・尾形明敏 藤田 尚・伊藤 茂 加藤和浩・佐藤正教 廣田正史・山形秀樹 Zsuzsanna Lomtatidze 森 将志
101	埋蔵文化財発掘調査報告書 11 (西原大塚遺跡第 35 地点)	2024	志木市の文化財第 97 集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形明敏 松本綾子・中村真理 新海達也・藤浪啓吾
102	志木市遺跡群 27 (中野遺跡第 85 地点 城山遺跡第 102 地点)	2024	志木市の文化財第 98 集	志木市教育委員会	大久保聡・尾形明敏

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧(4)

第2節 遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町2～4丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。北東—南西方向に約700m、北西—南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で8mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和48(1973)年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元(1989)年から平成19(2007)年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに245回の調査(令和6年1月31日現在)が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約200軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡670軒以上、方形周溝墓38基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の2件が、平成24年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

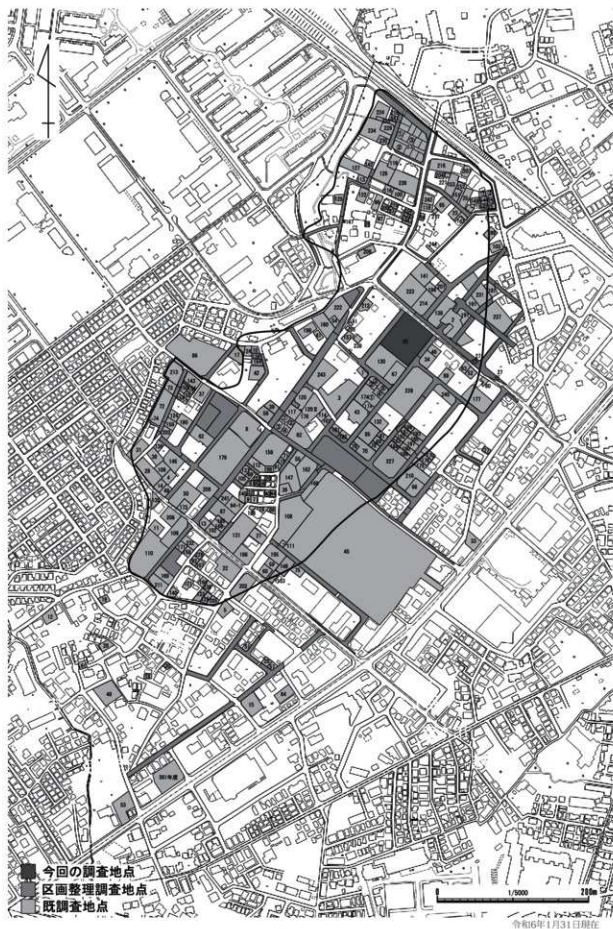
- ①西原大塚遺跡出土の動物形土製品
- ②西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土遺物

【註】

- 註1 『館村旧記』は、館村(現在の志木市柏町・幸町・館)の^{シラシラウツノトキヤノムラ}名主宮原仲右衛門仲愷が、享保12～14(1727～1729)年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18(1486)年6月から10か月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1978 『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十五坊の所在についての一考察『郷土志木』第7号 志木市郷土史研究会
- 2002 『道興をめぐる二つの譯説を糾す』『郷土志木』第31号 志木市郷土史研究会
- 田中 信 2022 『第4章 調査のまとめ 第3節 中世以降について』『西原大塚遺跡第234地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第86集 埼玉県志木市教育委員会
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸原の研究』高志書院



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1 / 5,000)

調査地点	面積 (㎡)	発掘調査期間	調査原因	遺 跡 の 概 要	文献名 第2表文獻No.
第1地点	112.50	昭和46年8月3日 ～12日	学術調査	縄文中期(住居跡5軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.1
第2地点	940.00	昭和55年7月20日 ～8月21日	学術調査	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.2
第3地点	439.00	昭和58年8月23日 ～9月8日	共同住宅	縄文中期(住居跡5軒、土坑2基)	No.3
第4地点	105.00	昭和62年1月5日 ～11日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.4
第6地点	64.32	昭和62年11月18日 ～20日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.5
第7地点	77.44	昭和63年1月20日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(小型穴状溝溝1基)、時期不詳(土坑1基、溝溝1本)	No.7
第8地点	1,227.00	昭和63年3月16日 ～8月6日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑24基)、弥生後期～古墳前期(住居跡13軒、方形周溝溝1基、竪立柱建築遺構1棟)	No.6
第9地点	75.86	昭和63年8月18日 ～9月10日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第10地点	80.54	昭和63年8月27日 ～10月4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑4基、遺物包含む)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第11地点	220.84	平成元年5月16日 ～25日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(方形周溝溝1基)	No.8
第14地点	129.00	平成2年5月26日 ～6月11日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.10
第21地点	265.73	平成3年5月28日 ～29日	事務所併用住宅	弥生後期～古墳前期(方形周溝溝1基)	No.10
第32地点	60.11	平成6年4月7日 ～14日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)	No.9
第34地点	317.00	平成7年8月4日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒、土坑6基)、弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)、奈良～平安(住居跡1軒)	No.11
第35地点	2,540.00	平成8年7月17日 ～平成9年1月9日	共同住宅建設	縄文中期(住居跡20軒、土坑25基、埋壘1基、集石3基)、弥生後期～古墳前期(住居跡5軒、方形周溝溝3基、溝溝2条)、奈良(住居跡2軒)	本報告
第36地点	248.05	平成8年10月15日 ～26日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.13
第37地点	220.00	平成9年4月8日 ～9月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)、時期不詳(土坑4基)	No.14
第39地点	63.76	平成9年8月5日 ～28日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、方形周溝溝1基)	No.14
第43地点	779.60	平成12年1月11日 ～3月24日	農地転用	縄文中期(住居跡10軒、土坑22基)、弥生後期～古墳前期(住居跡9軒)、古墳(1軒)	No.16
第45地点	5,642.42	平成11年8月3日 ～12月24日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡72軒、方形周溝溝1基)、古墳後期(住居跡2軒)	No.15
第47地点	86.12	平成12年4月3日 ～4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑1基)、弥生後期～古墳前期(溝溝1本)	No.17
第54地点	90.74	平成13年9月13日 ～14日	物置建設	縄文中期～後期(土坑7基)、弥生後期～古墳前期(方形周溝溝1基)	No.18
第65地点	115.93	平成14年7月25日 ～8月9日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.19
第67地点	456.20	平成14年9月9日 ～11月29日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡8軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡8軒、竪立柱建築遺構1棟、土坑1基)	No.22
第108地点	684.60	平成21年2月23日 ～4月14日	21.5m ² 機能維持 複合施設建設	縄文中期(住居跡1軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡15軒)	No.28
第110地点	500.00	平成17年2月7日 ～3月10日	集合住宅建設	瓦石器(石部集中2小所)、縄文中期(土坑1基、集石1基)、弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)	No.21
第111地点	80.00	平成17年1月17日 ～1月21日	消防車庫建設	古墳前期(住居跡1軒)	No.20
第113地点	119.75	平成17年2月4日 ～15日	個人住宅建設	縄文早期(貯穴1基)、近世以降(土坑16基)	No.26
第120-1地点	460.56	平成17年6月27日 ～7月7日	保育園建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑62基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒、方形周溝溝1基)	No.25
第120-2地点	566.55	平成18年5月30日 ～6月28日			
第124地点	150.02	平成17年12月19日 ～平成18年1月13日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.26
第131地点	472.21	平成18年11月9日 ～9月29日	集合住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒、方形周溝溝5基)	No.25
第137地点	100.00	平成18年11月9日 ～15日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、時期不詳(ピット5本)	No.27
第138地点	20.00	平成19年2月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(溝溝1本)	No.24
第124地点	150.02	平成17年12月19日 ～平成18年1月13日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.26
第131地点	472.21	平成18年8月30日 ～9月20日	集合住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒、方形周溝溝5基)	No.25

第3表 西原大塚遺跡発掘調査一覧(1)

調査地点	面積 (㎡)	発掘調査期間	調査原因	遺跡の概要	文献名 第2表文献No.
第137地点	100.00	平成18年11月9日 ～15日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)、時期不詳(ピット5本)	No.27
第138地点	20.00	平成19年2月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(溝跡1本)	No.24
第154地点	120.02	平成20年3月17～19日	分譲住宅群建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、奈良・平安(住居跡1軒、ピット1本)、中世以降(土坑1基)	No.24
第155地点	120.00	平成19年3月18日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)	No.27
区画整理	38,242.30	平成元年12月20日 ～平成19年1月12日	区画整理事業	旧石器(石器集中12か所)、縄文中期(竇穴15基)、縄文前期(住居跡2軒、土坑1基)、縄文中期(住居跡101軒、土坑233基、竇穴13基)、縄文後期(住居跡2軒、土坑9基)、弥生前期～古墳前期(住居跡362軒、方形埴輪遺22基)、古墳後期(住居跡6軒)、奈良・平安(住居跡7軒)、中世(土坑155基、井戸跡6基)	No.12 No.23
第169地点	90.00	平成22年10月4日 ～13日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、竇穴柱礎遺構1棟)	No.29
第171地点	90.00	平成22年10月4日 ～13日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、竇穴柱礎遺構1棟)	No.29
第172①～ ③地点	627.54	平成23年10月19日 ～平成24年1月13日	宅地造成	縄文中期(住居跡10軒、竇穴2基、土坑44基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.30
第174①地 点	627.54	平成23年10月19日 ～平成24年1月13日	宅地造成	縄文中期(住居跡10軒、竇穴2基、土坑44基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.59
第174②～ ⑤地点	454.21	②～④:平成23年11月3日 ～平成24年1月13日 ⑤:平成24年9月10日 ～10月22日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡17軒、土坑25基)、弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)、中世(土坑1基)	No.86
第179地点	1,380.00	平成24年6月18日 ～平成24年10月5日	集合住宅建設	旧石器(石器集中1か所)、縄文(土坑10基)、弥生前期～古墳前期(住居跡13軒、土坑2基)、古墳後期～奈良・平安(溝1本)、中世以降(溝跡4本、土坑1基)	No.60
第180地点	79.78	平成24年6月4日 ～平成24年8月1日	個人住宅建設	縄文前期(住居跡1軒)、縄文(土坑5基)、弥生後期～古墳前期(住居跡12軒、土坑2基)	No.74
第182地点	52.76	平成24年10月3日 ～平成24年10月30日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡1軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.74
第183地点	74.94	平成24年9月24日 ～平成24年10月3日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.74
第184地点	25.06	平成24年9月24日 ～平成24年10月3日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)	No.74
第199地点	174.51	平成26年2月3日 ～平成26年2月21日	個人住宅建設	縄文(ピット7本)、中世以降(土坑14基、溝跡1本)	No.85
第200地点	75.55	平成26年11月4日 ～平成26年11月30日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	未報告
第203地点	44.00	平成26年11月14日 ～平成26年11月21日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、中世以降(土坑8基)	未報告
第204地点	104.34	平成26年11月27日 ～平成27年1月16日	個人住宅建設	縄文後期(土坑7基)、縄文(竇穴1基)、弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)	未報告
第207地点	152.09	平成27年10月21日 ～平成27年11月18日	共同住宅建設	縄文(ピット5本)、弥生後期～古墳前期(住居跡3軒、方形埴輪遺1基、土坑1基)	No.72
第211地点	230.00	平成29年4月10日 ～平成29年5月9日	分譲住宅建設	縄文(溝跡1本)、弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)、中世以降(土坑14基、ピット42本)	No.73
第213地点	635.00	平成30年7月4日 ～平成30年8月26日	分譲住宅建設	中世以降(土坑12基、地下室4基、井戸跡1基、板敷埋納1基、ピット6本)	No.76
第216地点	373.94	平成30年6月19日 ～平成30年10月6日	共同住宅建設	縄文後期(住居跡1軒、土坑31基、ピット104本)、弥生後期～古墳前期(住居跡2軒、竇穴柱礎遺構1棟)、中世以降(土坑12基、土坑蓋1基)	No.80
第220地点	119.56	平成30年10月31日 ～平成30年12月1日	道路新設工事	旧石器(石器集中1か所、埋跡1か所)、縄文(竇穴1基)、中世以降(土坑23基、井戸跡1基、道路伏魔溝1本、ピット34本)	No.79
第222地点	94.00	平成30年10月18日 ～平成30年11月7日	分譲住宅建設	縄文中期(住居跡7軒、土坑3基)、弥生後期～古墳前期(方形埴輪遺1本)	No.79
第223地点	366.93	令和2年4月9日 ～令和2年6月19日	分譲住宅建設	縄文(竇穴1基、土坑6基)、弥生後期～古墳前期(住居跡7軒、溝跡1本)、奈良・平安(住居跡2軒、溝跡1本)	No.84
第224地点	370.57	令和元年5月21日 ～令和元年7月31日	分譲住宅建設	旧石器(石器集中4か所、埋跡4か所)、縄文(土坑2基)、中世以降(段切伏魔溝1か所、土坑40基、道路伏魔溝1本、ピット104本)	No.78
第225①地 点	106.61	平成31年4月16日 ～平成31年4月19日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡1軒)、弥生以降(ピット25本)	未報告
第225③地 点	122.46	令和3年2月24日 ～令和3年3月15日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、弥生以降(ピット49本)、中世以降(土坑1基)	未報告
第225④地 点	111.54	令和3年7月28日 ～令和3年8月26日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、竇穴柱礎遺構1棟)、弥生以降(ピット49本)、中世以降(土坑8基、火葬土坑1基)	未報告

第3表 西原大塚遺跡発掘調査一覧(2)

第1章 遺跡の立地と環境

調査地点	面積 (㎡)	発掘調査期間	調査原因	遺 跡 の 概 要	文献名 第2表文献No.
第228地点	2,156.00	令和元年9月2日 ～令和2年3月25日	分譲住宅建設	縄文中期(住居跡14軒、土坑10基)、弥生後期～古墳前期(住居跡26軒、奈良・平安時代(住居跡3軒)、中世以降(欄干4基、土坑1基))	No.83
第231地点	564.22	令和2年4月21日 ～令和2年5月30日	分譲住宅建設	縄文(土坑3基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒、溝跡1本)、古墳後期～平安(住居跡1軒)、中世(欄干状遺構2条、ピット29本)	No.84
第234地点	222.59	令和3年3月3日 ～令和3年4月18日	集合住宅建設	古墳後期(住居跡1軒)、中世以降(土坑30基、井戸跡1基、段切状遺構1か所)	No.90
第235地点	1,542.37	令和3年10月25日 ～令和4年3月31日	分譲住宅建設及び道路新設	旧石器(石器集中3か所、礫群3か所)、縄文(炉穴1基、ピット1本)、弥生後期～古墳前期(住居跡16軒)、古墳後期(住居跡1軒)、中世以降(竪立柱建築遺構1棟、土坑26基、井戸跡2基、段状遺構群1か所、ピット112本)	No.93
第239地点	1,542.37	令和3年10月25日 ～令和4年3月31日	分譲住宅建設及び道路新設	旧石器(石器集中1か所)、縄文(炉穴1基、土坑9基、ピット11本)、弥生後期～古墳前期(住居跡14軒、竪立柱建築遺構1棟、溝跡1本、ピット4本)、中世以降(土坑14基、溝跡1本、ピット22本)	未報告
第241地点	230.00	令和5年5月22日 ～令和5年6月1日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	未報告
第242地点	254.27	令和5年7月3日 ～令和5年7月11日	個人住宅建設	縄文(ピット2本)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	未報告
第243地点	816.97	令和5年5月30日 ～令和5年8月2日	共同住宅建設	縄文(土坑12基、ピット2本)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、方形周溝基3基)、中世以降(土坑29基、溝跡1本、ピット39本)	未報告

第3表 西原大塚遺跡発掘調査一覧(3)

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

(1) 調査に至る経緯

平成8年4月24～26日、志木市教育委員会（以下、教育委員会）は、志木市幸町3丁目7200、7201、7202、7198、7199（面積2,540.00㎡）における共同住宅建設工事計画に先立ち、当該地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会及び確認調査依頼に基づき、確認調査を実施した。その結果、縄文時代の住居跡をはじめとする多数の遺構が確認された。教育委員会は、土木工事主体者と保存に向けた協議を重ねた結果、土木工事計画地全域（面積2,540.00㎡）を対象に、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、土木工事主体者に対し、発掘調査主体者にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、土木工事主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成8年7月16日から平成9年1月11日まで、遺跡調査会を主体とした発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

各遺構の精査経過については、第4表の発掘調査工程表に示し、以下に日付順に説明する。

平成8年

- 4月下旬 確認調査。
- 7月中旬 重機による表土剥ぎ作業開始。
- 7月下旬 表土剥ぎ作業、遺構確認作業開始。
- 8月上旬 201 D確認、精査開始。土層図・平面図・断面図作成、写真撮影。
- 8月中旬 12 M、5方、202 D精査。12 Mと202 Dは写真撮影、平面図・断面図作成。
- 8月下旬 203～205 D、6方精査開始。（C-1）から（D-2）にかけて伸びる溝を13 Mとし、精査開始。引き続き5方精査、住居と重複するため困難を極める。204 Dには大型の深鉢が埋設。
- 9月上旬 102・103 J精査開始。204・205 D写真撮影、平面図・断面図作成。102 Jに焼土の堆積あり。遺物取り上げ後床面確認。
- 9月中旬 104 J、206～208 D、1・2 S精査開始。6方引き続き精査。溝は浅く、南側溝は住居と重複しているため確認困難。主体部から翡翠製の三角形の鍾飾品、ガラス玉、碧玉

- 製管玉出土。主体部断面図作成、レベリング。102 J 写真撮影、平面図・断面図・土層図・断面図作成、レベリング。103 J 遺物出土状況写真撮影、平面図作成。104 J 遺物出土状況、平面図作成。
- 9月下旬 101・105 J、209・210 D、9 H 精査開始。103 J 遺物出土状況図面作成、遺物取り上げ。写真撮影・平面図作成。104 J 壁の確認をほぼ達成。101・103・104 J 土層図後ベルト精査。207 D 写真撮影・平面図作成。
- 10月上旬 106 J、211 D、3 S 精査開始。6 方東側住居を 108 J、西側を 107 J とし、精査開始。9 H は床面付近の焼土堆積が著しく、ブロック状の炭化材が散在していたことから焼失家屋であると断定。ベルト精査、炭化材清掃。土層写真撮影、図面作成。床面南西コーナーで保存状態が非常に良い刀子が完形で出土。101 J 断面図作成、レベリング。103 J 埋裏写真撮影・図面作成、断面図作成、炉土器写真撮影・図面作成。104 J 写真撮影、平面図・断面図作成、レベリング。105 J ビット精査、壁溝精査、土層図作成。208・210 D 図面作成。2 S 掘方写真撮影・図面作成。106 J ビット精査、壁検出。写真撮影、平面図・土層図作成。ベルト精査。
- 10月中旬 109 J、212～214 D 精査開始。105 J 炉切開。106 J 炉図面作成・写真撮影。107・108 J、9 H、3 S 引き続き精査。108 J 覆土上層に礫が多量に出土。
- 10月下旬 北側の埋め戻しを開始。調査区東側遺構確認開始。110 J・111 J 精査開始。111 J は遺物が少ない小型住居。104 J 炉図面作成、埋裏土層・写真撮影・実測。109 J 耳栓出土、壁の検出及び壁溝精査、ベルト精査、ビット精査、遺物実測、平面図作成。108 J 遺物出し及び壁溝精査、遺物写真撮影、遺物出土状況実測。遺物の出土状態は典型的な廃棄パターン。110 J 遺物出土状況写真撮影、110 J 平面図・断面図作成、レベリング。214 D 写真撮影、遺物実測、断面図作成。9 H カマド切開。写真撮影、平面図作成、レベリング。3 S 実測、掘方写真撮影。
- 11月上旬 調査区反転。215 D 精査開始。109 J 炉実測。111 J 壁溝・ビット精査。108 J 遺物出土状況実測、土層図作成、遺物取り上げ、ビット精査、壁溝精査。107 J 土層図作成、ビット精査。9 H カマド切開。
- 11月中旬 106 Y 精査開始、比較的遺物が多い。南コーナー部に凸堤を有する貯蔵穴、主柱穴 2 本と入り口施設と思われるビットを確認。5 S 精査開始。108 J 平面図・断面図・全測図作成。107 J 平面図・全測図・炉断面図作成、レベリング。111 J 平面図・断面図・全測図作成、レベリング。9 H カマド図面作成。215 D 全測図作成。(E-3・4)(F-3・4) G 遺構確認。13 M 全測図・平面図作成。7 号柵列精査開始、全測図作成。
- 11月下旬 112・113 J、145～148 Y、6～10 S、216～219 D 精査開始。112 J 土層図作成、ベルト精査、壁面検出。遺物の出土量は多く、廃棄パターンを持つ住居。113 J 写真撮影、土層図・平面図・断面図・炉図面作成、レベリング。住居中央に硬化面が認められるが周溝は軟弱で壁の立ち上がりも緩やかな為確認しにくい所あり。145146 Y 土層図・平面図・断面図・全測図作成、写真撮影。遺物は少ない。148 Y 土層図作成。7 号柵列写真撮影、平面図・断面図作成、レベリング。13 M 写真撮影、断面図作成、レベリング。6～10 S 実測、写真撮影。

12月上旬 114・115 J、220～223 D、11 S 精査開始。112・113 J 引き続き精査。112 J 写真撮影、平面図・断面図・全測図・炉図面作成、ピット・壁溝精査、ベルト精査、壁面検出、遺物取りあげ、レベリング。113 J 炉図面・全測図作成。114 J 南壁下に埋裏出土、土層図作成、廃棄パターンを呈するが遺物は破片のもの。床面確認、中央部はよく硬化。115 J 写真撮影、炉切開、平面図・炉図面・全測図・断面図作成、レベリング、遺物は非常に少ない。147 Y 写真撮影、平面図・全測図・断面図作成、レベリング。148 Y 写真撮影、平面図・土層図作成、ピット精査、掘り方精査。

12月中旬 北側から埋め戻し作業開始。116～120 J 精査開始。116 J を切る住居を 10 H とする。10 H 精査開始。114 J ベルト精査、ピット・壁面精査、写真撮影、平面図・断面図作成、炉写真撮影、遺物取り上げ、レベリング、炉横位写真撮影・埋裏横位写真撮影。112 J 炉図面・全測図作成、写真撮影。117 J ピット精査、断面図・炉図面・全測図作成、レベリング。10 H 写真撮影、平面図・断面図作成、レベリング、ベルト精査。カマド切開、カマド図面作成、カマド写真撮影。カマド前の裏は入れ子状で3個体が重なり合って横転した状態で出土。119 J 石囲炉の炉石は石棒を使用。

12月下旬 119 J 写真撮影。116 J 写真撮影、平面図・断面図・全測図作成、ピット精査、レベリング。118 J 壁面精査、土層図作成。119 J 炉写真撮影、平面図・炉図面・全測図作成、レベリング。

平成9年

1月上旬 118 J 南側の土坑2基を225・226 D とし、精査開始。116 J と 117 J の間に埋裏、2号埋裏とし、精査開始。227 D 精査開始。118・120 J 遺物出土状況写真撮影・図面作成。118 J は拡張住居と判断。遺物取り上げ、ピット・壁溝精査、写真撮影、平面図・炉図面・全測図作成、レベリング。120 J 写真撮影、平面図・土層図・断面図・炉図面作成。10・11 日埋め戻し作業。

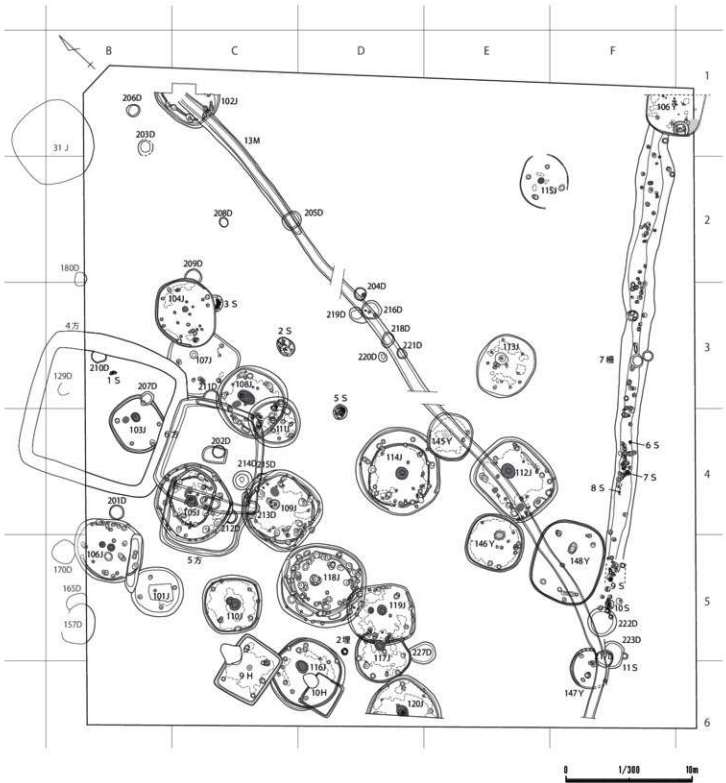
	平成8年7月		8月		9月			10月			11月			12月			平成9年1月		
	20日	31日	10日	20日	31日	10日	20日	30日	10日	20日	31日	10日	20日	30日	10日	20日	31日	10日	
表土削ぎ作業	7/16		7/29																
101J					9/24			10/2											
102J					9/2		9/18												
103J					9/8			10/3											
104J					9/18			10/31											
105J					9/28			10/18											
106J					10/3			10/16											
107J					10/9			10/16			11/12								
108J					10/9			10/16			11/12								
109J					10/15			10/15			11/5								
110J					10/21			10/29			11/12								
111J					10/21			10/29			11/12								
112J					11/21			11/21			12/10								
113J					11/25			11/25			12/2								
114J					12/2			12/2			12/17								
115J					12/3			12/3			12/8								
116J					12/12			12/12			12/28								
117J					12/12			12/12			12/19								
118J					12/16			12/16			1/9								

第4表 西原大塚遺跡第35地点の発掘調査工程表(1)

第2章 発掘調査の概要

	平成8年7月		8月			9月			10月			11月			12月			平成9年1月			
	20日	31日	10日	20日	31日	10日	20日	30日	10日	20日	31日	10日	20日	30日	10日	20日	31日	10日			
119J																	12/18	12/28			
120J																	12/18		1/9		
2棟																			1/6	1/7	
201D			8/8	8/9																	
202D			8/18	8/19																	
203D				8/28	8/29																
204D				8/29	8/30	9/2															
205D				8/29	8/30	9/2															
206D						9/11	8/12														
207D						9/18		9/27													
208D						9/20		10/3													
209D						9/27		10/3													
210D						8/25		10/3													
211D								10/3													
212D								10/15	10/17												
213D								10/15	10/15												
214D								10/15		10/21											
215D										11/7	11/11										
216D												11/28	1/28								
217D												11/28	12/2								
218D												11/28	1/28								
219D												11/28	12/2								
220D													12/2								
221D													12/2								
222D													12/3	12/12							
223D													12/9	12/10							
224D	穴墓																				
225D																			1/6	1/8	
226D																			1/6	1/8	
227D																				1/8	
1S						9/18	9/19														
2S						9/20		10/2													
3S								10/7		10/21											
4S	穴墓																				
5S												11/12	11/18								
6S													11/25	11/28							
7S													11/25	11/28							
8S													11/22	11/25							
9S													11/22	11/25							
10S													11/22	11/25							
11S														12/9	12/9						
106Y												11/11	11/14								
145Y													11/21	11/28							
146Y													11/21	11/28							
147Y													11/25	12/3							
148Y													11/28	12/9							
5方			8/13		8/25																
6方				8/27		9/17															
9H						9/26		11/11													
10H															12/19	12/19					
12M			8/12	8/14																	
13M				8/22	8/29									11/19	11/22						
7棟												11/11	11/25								
埋戻作業																				1/10	1/11

第4表 西原大塚遺跡第35地点の発掘調査工程表(2)



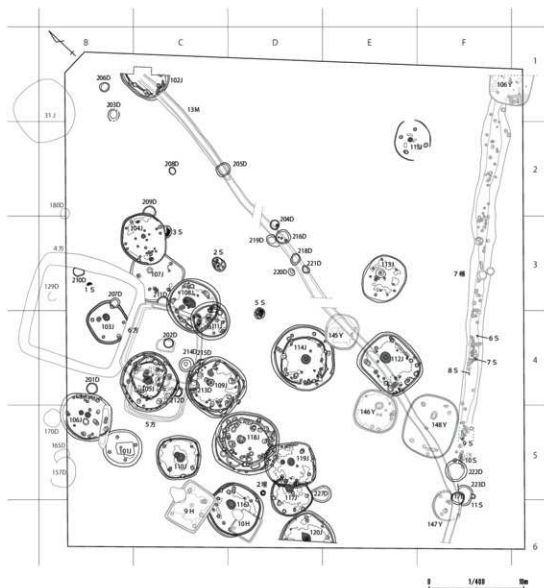
第3図 遺構分布図(1/300)

第3章 検出された遺構・遺物

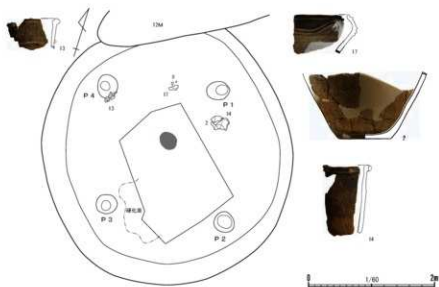
第1節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

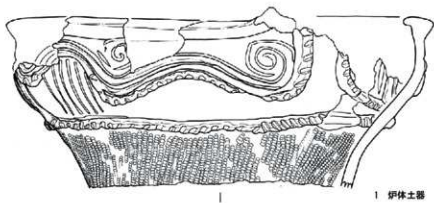
縄文時代の遺構は住居跡 20 軒 (101 ~ 120 J)、埋壘 1 基 (2 埋)、土坑 26 基 (201 ~ 227 D、224 D は欠番)、集石 5 基 (1 ~ 3・5・11 S) を検出し、時期は全て中期中葉～後葉である。なお、特筆すべきこととして多くの遺物が出土している 108 J から人面把手・蛇体把手を伴う深鉢が出土した。



第4図 縄文時代遺構全体図 (1/400)



第6図 101号住居跡遺物出土状態(1/60)



第7図 101号住居跡出土遺物1(1/4)

[土 器] (第7図・第8図9～20、図版24・25-1、第5表)

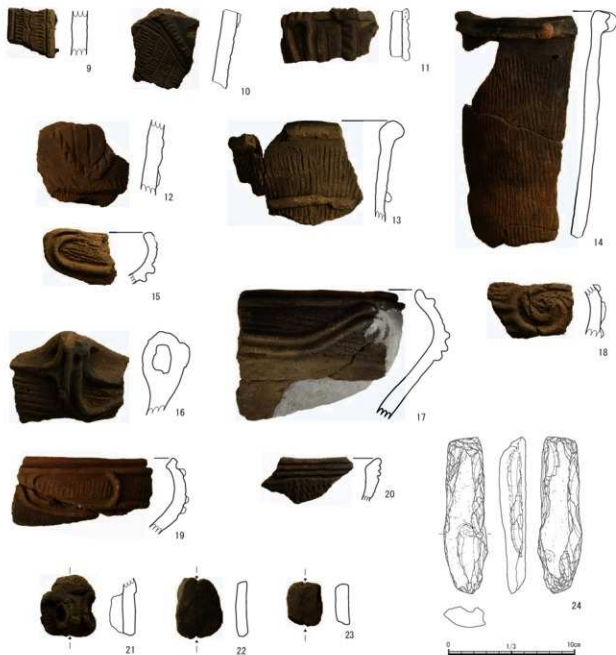
復元個体2点、破片資料18点を図示した。1は胴体土器で、口縁部に文様帯を持つ勝坂3b新式の深鉢形土器である。隆帯を波状に貼付し、沈線による渦巻文を施文する。2は撚糸文を地文とする加曽利E1式の深鉢形土器である。3～6は阿玉台式、7～12は勝坂式、13・14は勝坂3～加曽利E1式、15～19は加曽利E式、20は連弧文土器の深鉢形土器である。

[土 製品] (第8図21～23、図版25-1、第6表)

3点を図示した。21～23は土器片錘である。

[石 器] (第8図24、図版25-1、第7表)

1点を図示した。24は打製石斧である。



第8図 101号住居跡出土遺物2 (1/3)

遺構番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第7図1 図版24-1	深鉢	口縁部～ 胴部上位 50%	高 [162] 口 [44.8] 厚 1.1	キリバー形か/外反する胴部上位/外反して広がる胴部/内湾して立ち上がる口縁部/口唇部は外面に肥厚	地文は単色 L 縦位 / 口縁部区画内は地文無し / 胴部と胴部を押し文を付した横走する 1本の陰帯で両す / 口縁部区画内に陰帯を波状に貼付、陰帯上押し文・波線で加飾 / 沈線で加飾した陰帯下端に押し文を加え、底行状に成形 / 沈線による 2本の赤、縦位波線列 / 陰帯断面がマボコ状、扁平なカマボコ状、陰帯脇などで付付、押し付けて貼付 / 伊体土源	暗赤褐色 / 砂粒中量、礫少量	勝飯 3b 新式
第7図2 図版24-2	深鉢	胴部中位～ 底部 60%	高 [162] 底 13.6 厚 1.1	外積して広がるが立ち上がる胴部 / 平坦な底部	地文は濃赤 L 縦位、底部から 2cm 程度して胴部に施文 / 胴代線なし	橙 / 砂粒・礫少量	加曾利 E1 式
第7図3 図版24-3	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部 / 口唇部外面に肥厚	口縁部は上端 1本、下端 1本の陰帯で両す / 上端陰帯には片側、下端陰帯には両側に半載竹管状と思われる工具の背面を用いた爪形文を施文 / 口縁部区画内に 2本の爪形文を斜位に施文、充填 / 陰帯断面三角状	暗褐色 / 砂粒少量、礫中量、雲母多量	阿玉台 I b 式
第7図4 図版24-4	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	内湾する口縁部	口縁部は下端 1本の陰帯で両す、内側に陰帯による楕円状の区画文 / 上端、下端陰帯上側、楕円形の区画文内側に 2本 1対の結節沈線施文 / 口縁部下端陰帯断面三角形、楕円形区画文陰帯やや歪なカマボコ状	黒褐色 / 砂粒少量、雲母中量	阿玉台 II 式
第7図5 図版24-5	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外積して直線的に立ち上がる胴部	陰帯を V 字状に貼付、下端は波状に垂下 / 爪形交列を横位に施文 / 陰帯断面三角形、陰帯脇などで付付	暗褐色 / 砂粒少量、礫・石英粒・雲母中量	阿玉台 II 式
第7図6 図版24-6	深鉢	波状口縁 先端か 破片	厚 1.2	ほぼ直立	板状 / 楕円形の穴を囲う様に波状沈線を三角状に施文	黒褐色 / 砂粒少量、雲母中量	阿玉台 II-III 式
第7図7 図版24-7	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	やや内湾する口縁部	口縁部上部に角押し文 2列を横位に施文、下部には縦位に充填	褐色 / 砂粒・礫少量	勝飯 1a 式
第7図8 図版24-8	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	上位がやや外反して外積する胴部	半載竹管状工具の裏面を用いた平行沈線による区画文 / 平行沈線に沿う載置文 / 工具の角部分を用いた三角押し文を波状に施文	黒褐色 / 砂粒・礫少量	勝飯 1a 式
第8図9 図版24-9	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	ほぼ直立する胴部	半載竹管状工具の裏面を用いた平行沈線による区画文 / 平行沈線に沿う爪形文、波状沈線	明褐色 / 砂粒少量、礫中量	勝飯 2b 式
第8図10 図版24-10	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	外積する胴部	押し文を付した陰帯による区画文 / 区画内は波線施文し、沈線間に爪形文充填 / 陰帯断面がマボコ状、陰帯幅大きく変化 / 陰帯片側 2本の波線が古い、片側はなどで付付	黒褐色 / 砂粒・礫少量	勝飯 3a 式
第8図11 図版24-11	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	ほぼ直立する胴部	一部に押し文を付した陰帯による区画文 / 区画内縦位沈線 / 陰帯断面がマボコ状、陰帯脇単沈線が 1本沿う	暗褐色 / 砂粒・礫少量	勝飯 3b 式
第8図12 図版24-12	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	やや外積する胴部	地文は濃赤 R 縦位 / 押し文を付した陰帯で濃赤 L 施文部分を画し、上部は三角と思われる区画文、陰帯内側縦位波線列 / 陰帯断面背の低いカマボコ状、陰帯脇単沈線 1本が沿う部分などで付付する部分がある / 縦位陰帯貼付後地文施文	赤褐色 / 砂粒中量、礫少量	勝飯 3b 式
第8図13 図版24-13	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	口縁部は外積、下部はやや直立か / 口唇部外面に肥厚	地文は濃赤 L 縦位 / 横位 1本の陰帯 / 陰帯断面がマボコ状	褐色 / 砂粒・礫少量	勝飯 3b - 加曾利 E1 式
第8図14 図版24-14	深鉢	口縁部～ 胴部下位 破片	厚 0.9	円筒形 / 口縁部から胴部はほぼ直立 / 口唇部は外側に肥厚	地文は濃赤 R 縦位 / 口唇部に連続陰帯が広がる / 口唇部直下は幅 15mm 程の横位ナギが見られる / 外面右上に長軸 5mm 短軸 3mm 深さ 3mm の粒状の穴あり	褐色 / 砂粒中量、礫少量	勝飯 3b - 加曾利 E1 式
第8図15 図版24-15	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部	地文は濃赤 L 横位 / 2本 1対の陰帯による文様、S 字文か / 陰帯断面がマボコ状	橙 / 砂粒少量、礫多量	加曾利 E1a 式
第8図16 図版24-16	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部	地文は濃赤 L 横位 / 口縁波頂部から口縁中位にかけて縞状把手を付す / 把手下端は陰帯として横位に伸び文様を形成するとと思われる / 陰帯断面がマボコ状	黒褐色 / 砂粒・礫少量	加曾利 E1a 式
第8図17 図版24-17	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚 0.9	外反して広がる胴部 / 内湾する口縁部	地文は濃赤 L 縦位、口縁部区画内施文 / 口縁部は上端 1本、下端 1本の陰帯で両す、2本 1対の陰帯による S 字状文 / 胴部無文 / 陰帯断面がマボコ状	黒褐色 / 砂粒中量、礫多量	加曾利 E1a 式
第8図18 図版24-18	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部	地文は濃赤 L 横位 / 2本 1対の陰帯による文様、S 字文か / 2本の陰帯の間から一部地文が見られる / 弧の部分から陰帯が 3本横位に伸びる / 陰帯断面がマボコ状	明褐色 / 砂粒少量、礫中量	加曾利 E1a 式
第8図19 図版24-19	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部 / 口唇部は外積	地文は濃赤 L 縦位 / 口縁部を両する陰帯は上端 1本、下端欠損か / 口縁部区画内 1本または 2本の陰帯による楕円形の文様貼付 / 陰帯断面角状、陰帯脇単沈線が 1本沿う	暗赤褐色 / 砂粒少量、礫中量	加曾利 E2 式

第5表 101号住居跡出土土器一覧1

探出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第8図20 図版24-20	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	やや内湾する口縁部	地文は摺糸R縦位/口縁部に3本1対の沈線が沿う	黒褐/砂粒 少量、礫中 量	連弧文

第5表 101号住居跡出土土器一覽2

探出番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第8図21 図版25-1-21	土器 片踵	95%	4.8/4.3/0.8	33.4	方形か/袂部は1ヶ所(元は2ヶ所か)/肩縁は部分的に磨耗/ 口縁部片利用/彫刻状突起/突起周囲に半截竹管状工具の背面 を使用した押引文	黒褐/砂粒少量、 礫中量	勝坂2式
第8図22 図版25-1-22	土器 片踵	完形	4.8/3.7/0.8	20.6	楕円形/袂部は2ヶ所/肩縁は磨耗/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒・礫 量得少量	中期中葉 ～後葉
第8図23 図版25-1-23	土器 片踵	95%	3.5/2.8/1.0	13.9	方形/袂部は2ヶ所/肩縁は部分的に磨耗/胴部片利用/無文	褐/砂粒・礫少 量、雲母中量	中期中葉 ～後葉

第6表 101号住居跡出土土製品一覽

探出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第8図24 図版25-1-24	打製石斧	緑泥片岩	123.4	36.4	21.4	124.9	短冊形右半が折れた後、再調整が施されている/左側縁に敲打 剥離が認められる/裏面は節理面が広くみられる/左側縁のほ ぼ全面の稜上に溝れが認められる

第7表 101号住居跡出土石器一覽

102号住居跡

遺構(第9図)

[位置] (B・C-1) グリッド。

[検出状況] 北東側の半分ほどが調査区外に伸びる。13Mに切られる。

[構造] 平面形：楕円形を呈すと思われる。主軸方位：N-2°-E。平面プランから西壁と平行するラインを主軸と捉えた。規模：長軸残存長430cm/短軸残存長340cm/深さ78～96cm。壁溝：1条検出された。壁溝の位置を考慮すると拡張が想定される。上幅12～23cm/下幅1～8cm/床面からの深さ3～24cm。壁：約40～65°でやや緩やかな傾斜から一部に浅いテラス状に段を有し、やや急斜に立ち上がる。床面：平坦で全面が硬化している。南東側に粘土範囲を確認し、一部は調査区外に伸びると思われる。直床である。炉：検出されなかった。埋窆：検出されなかった。柱穴：9本検出した。P1～P3の一群とP5を主柱穴ととらえれば、4本柱建物が想定される。

[覆土] 7層に分層できた。

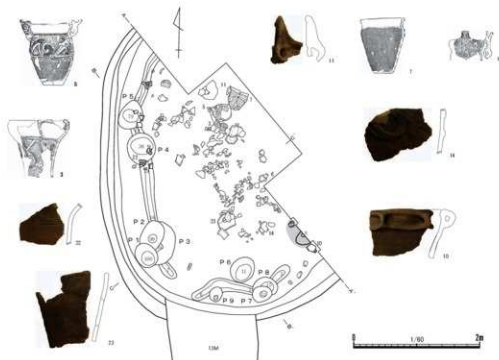
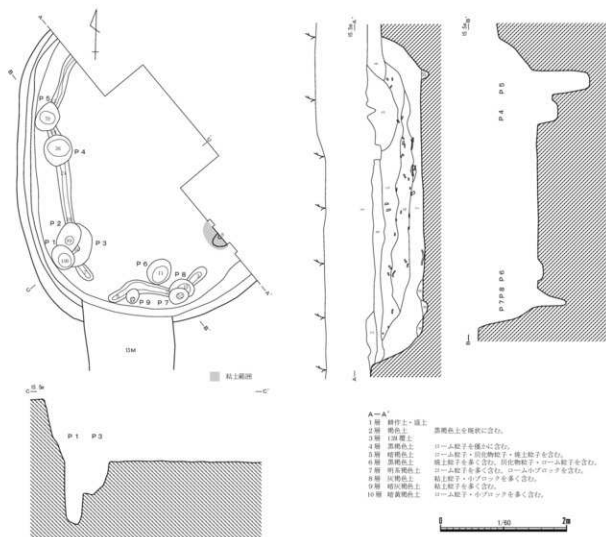
[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。

[時期] 中期中葉期(勝坂3式期)。

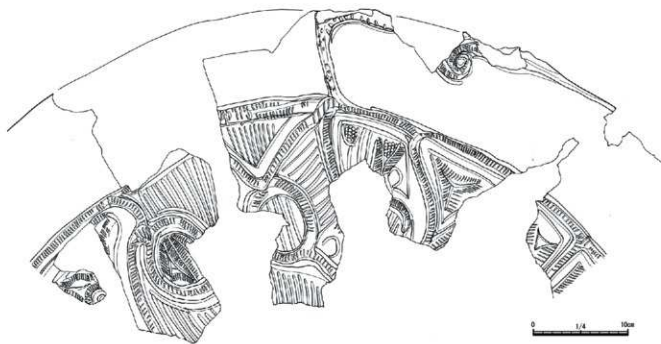
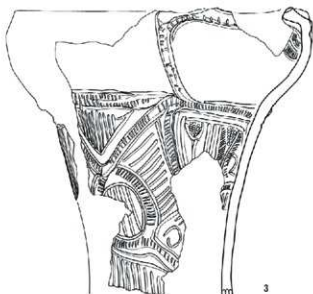
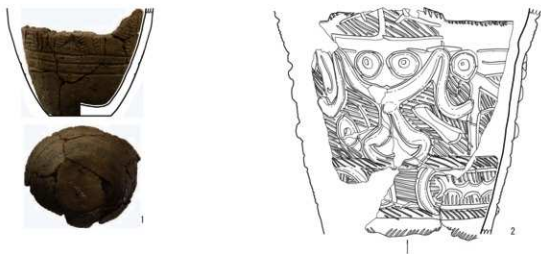
遺物(第10～14図、図版25-2～28、第8～10表)

[土器](第10～13図・第14図25・26、図版25-2～28、第8表)

復元個体9点、破片資料17点を図示した。1は勝坂3a式の深鉢形土器で、沈線による区画文を施文する。2～5は勝坂3b古式の深鉢形土器である。2は隆帯による特徴的な文様が見られ、周囲は沈線を充填する。3は隆帯による区画内に沈線を充填する。4は三叉文、蛇行文が見られ、縦位沈線列に半截竹管状工具の腹面を使用する。5は口縁部の左右に把手を持ち、胴部に文様帯には三叉文、渦巻文



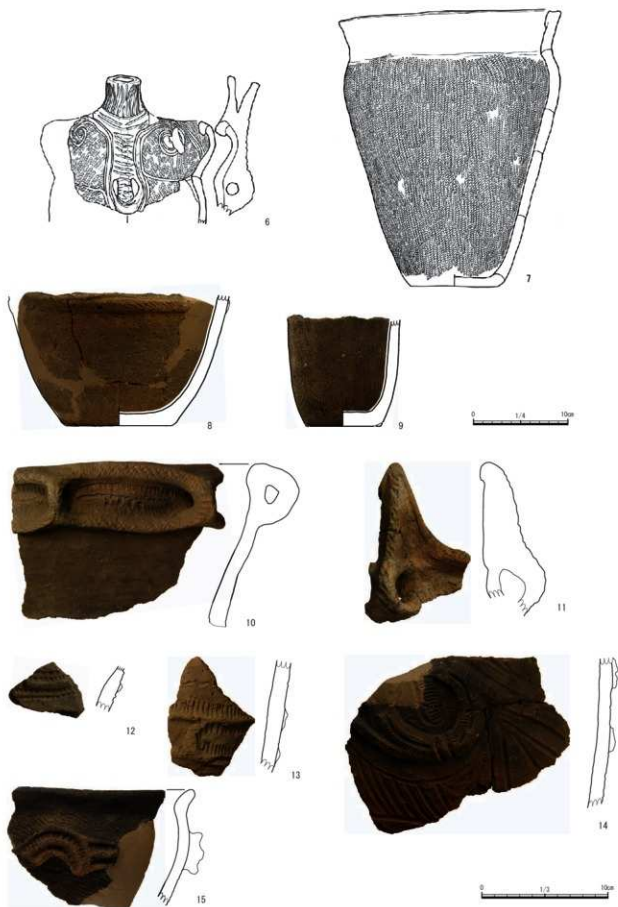
第9図 102号住居跡・102号住居跡遺物出土状態(1/60)



第10図 102号住居跡出土遺物1 (1/4)



第11図 102号住居跡出土遺物2(1/4)



第12図 102号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)

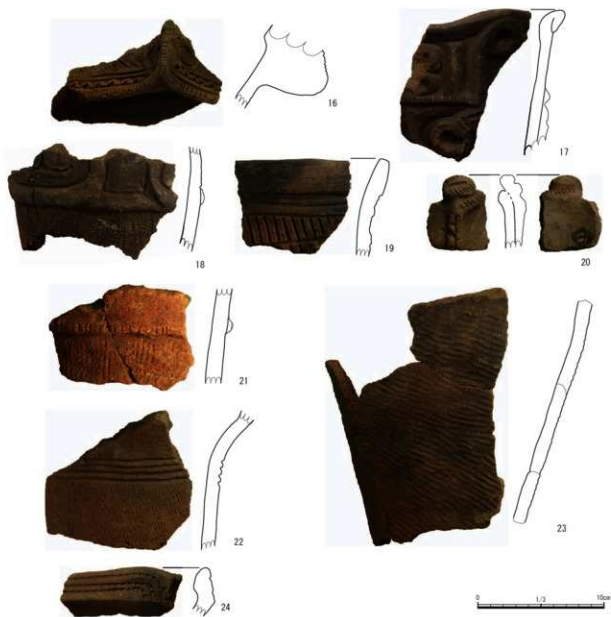
が多く見られる。6は口縁部に円筒状の把手を持ち、沈線による渦巻文を施文する。7は勝坂3b新式の深鉢形土器である。口縁部以外に縄文を施文する。8は勝坂3式の深鉢形土器である。押圧文を付した隆帯が横走り、下位は無文である。9は加曾利E1式の深鉢形土器である。10・11は阿玉台式、12～20は勝坂式、21は勝坂3～加曾利E1式、22は加曾利E式、23は中期後葉～後期の深鉢形土器である。24は勝坂式、25は中期中葉～後葉の浅鉢形土器、26は中期中葉～後葉の浅鉢形土器と思われる土器である。

〔土製品〕(第14図27～31、図版28、第9表)

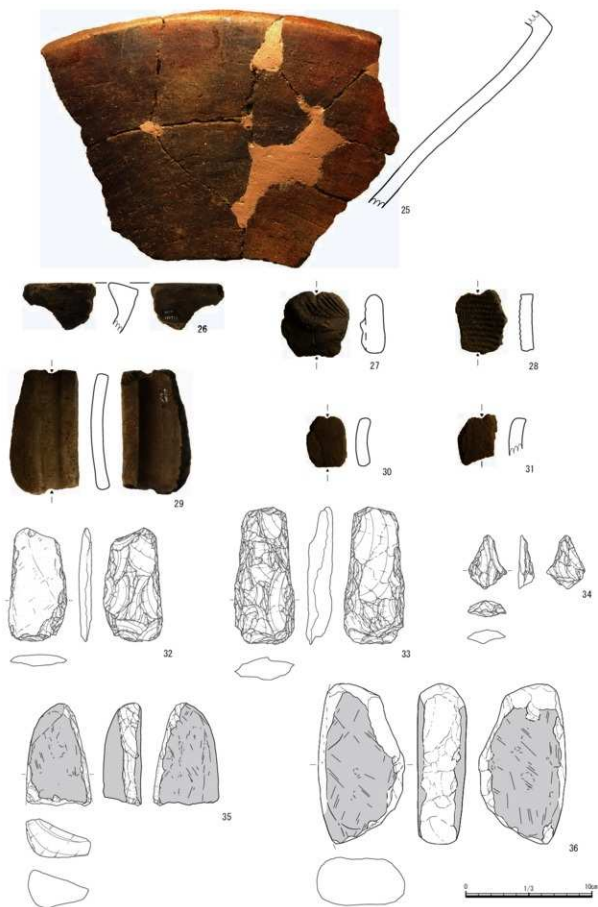
5点を図示した。27～31は土器片錘である。

〔石器〕(第14図32～36、図版28、第10表)

5点を図示した。32・33は打製石斧である。34は二次加工剥片である。35は磨石である。36は石皿である。



第13図 102号住居跡出土遺物4(1/3)



第14図 102号住居跡出土遺物5 (1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第10図1 図版25-2-1	深鉢	胴部中位 ～底部	高[11.4] 底6.4 厚0.9	円筒形か/内湾して やや広がりながら上 ちががる胴部/平坦 な底部	横位3本の沈線で上部の文様帯と下部の無文部分を画す/上 部は平行沈線による区画文/区画文に沿う押圧文、中央に三 文文/区画内横位沈線列	明褐色/砂粒 少量、礫中 量	勝飯3a 式
第10図2 図版25-2-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位	高[23.5] 口[28.0] 厚1.0	バケツ形/胴部から 口縁部まで直線的に 広がる	地文は単筋RL横位/口縁部に把手の痕跡あり、三文文を左 右対称に施文か、周囲に斜位単沈線充填/把手の痕跡下部に 円形文とM字状の隆帯を組み合わせた左右対称の文様施文、 周囲に沈線による文様、円形文を配し斜位単沈線充填/胴部 中位に斜位沈線を付した隆帯を上端1本/下端2本/区画内 内帯をC字状、逆C字状の隆帯で画し楕円状区画を形成/隆 帯内側に沿い平円形刺突文、隆帯間斜位沈線充填/楕円形区 画内帯間斜位単沈線充填/隆帯断面カマボコ状、隆帯盛1本の単 沈線が沿う	褐色/砂 粒中量・礫 少量	勝飯3b 古式
第10図3 図版25-2-3	深鉢	口縁部～ 胴部下位	高[30.2] 口[29.2] 厚1.0	やや外反して立ち上 がる胴部/外反する 頸部/内湾しやや外 傾する口縁部/口脣 部は内面に肥厚	口縁部無文/口縁部に把手が欠損した痕跡あり/口縁部に押 圧文を付した隆帯による渦巻状の文様、刺突文を付した1本 の隆帯が胴部文様帯に垂下/押圧文を付した隆帯によって3 角状、楕円状、不整形に画す/区画内無文/斜位沈線を充 充填、三文文の周囲に押圧文充填、角押圧文充填、沈線による 渦巻文、縦位沈線列間に押圧文充填/隆帯断面形状、隆 帯盛には多くは2本の単沈線、一部1本の単沈線が沿う	橙～褐色砂粒 少量、礫微 量	勝飯3b 古式
第11図4 図版25-2-4	深鉢	口縁部～ 頸部	高[13.8] 厚1.3	キャリバー形か/上 部がやや広がる頸部 /内湾する口縁部	横位1本の隆帯で口縁部と頸部を画す/口縁部区画内縦位隆 帯、半弧状の隆帯で画す/区画内縦位沈線、三文文、蛇行文 を充填/沈線には半截竹管状工具の断面使用が多く見られ る/口縁部区画内隆帯上矢羽根状刺突文、交互刺突文施文/半 截竹管状工具による縦位隆帯に矢羽根状刺突文を付し/口 縁部区画隆帯下端から弧状の隆帯で垂下、僅かに三文文が 見られる/隆帯断面三角状、隆帯盛1本の単沈線が沿う	明黄褐色/砂 粒少量、礫 微量	勝飯3b 古式
第11図5 図版26-5	深鉢	口縁部～ 底部	高34.8 口22.4 底(9.6) 厚1.0	樽形/内湾して立ち 上がる胴部/括れる 頸部/外傾する口縁 部/口脣部は内面に 肥厚	地文は0段多糸RL斜位/口縁部無文/口縁部の対称面に1 単位ずつ把手貼付/欠損している把手は下に内帯状把手が あり、縁と周囲の隆帯上に押圧文を付す/対称面の把手は上 面に深い窪みあり、外面は沈線による渦巻文と沈線に沿って 押圧文・下に内帯状把手/把手外面に縦位・横位の沈線による文 様帯内は隆帯による渦巻文の両端が矢印状になる文様・矢印状 の文様・円形の文様から2本の隆帯が沿う文様を配す/隆 帯上は押圧文・交互刺突文・沈線・2列の三角状・矢羽根 状刺突文等加飾が多く見られる/隆帯間には沈線による文様・ 三文文・渦巻文・押圧文を充填/隆帯断面三角状・台形状、 隆帯盛1本または2本の単沈線が沿う	赤褐色/砂粒 少量、礫微 量	勝飯3b 古式
第12図6 図版26-6	深鉢	口縁部～ 胴部上位	高[15.6] 口[15.8] 厚0.8	内湾する胴部/括れる 頸部/内湾する口 縁部/口脣部は内面 に肥厚	地文は単筋RL横位・横位・斜位/円筒状の把手1単位残存、 下に内帯状把手/把手外面に縦位・横位の沈線による文様 施文、縁に押圧文施文/把手に2本1対の沈線が沿い先端 に渦巻文/頸部に1本の沈線が沿う/口縁部に2本1対の 沈線による渦巻文	明褐色/砂粒 少量、礫微 量	勝飯3b 古式
第12図7 図版26-7	深鉢	口縁部～ 底部	高28.8 口23.4 底9.2 厚1.0	外傾して立ち上がり 上部が内湾する胴部 /やや括れる頸部/ 外傾して広がる口縁 部/口脣部は内面に 肥厚	地文は0段多糸RL斜位/口縁部無文/底面網代痕無し	橙/砂粒・ 礫中量	勝飯3b 新式
第12図8 図版26-8	深鉢	胴部下位 ～底部	高[13.7] 底11.0 厚1.1	底部からやや広がり ながら立ち上がる胴 部/平坦な底部	幅広い隆帯が1本横位に巡る/隆帯上押圧文施文/隆帯下部 無文/隆帯断面扁平なカマボコ状、隆帯盛上端単沈線が1本 沿う、下端まで付けて貼付	明褐色/砂粒 多量、礫少 量	勝飯3 式
第12図9 図版26-9	深鉢	胴部中位 ～底部	高[11.2] 底7.8 厚1.2	内湾してやや広がり ながら立ち上がる胴 部/平坦な底部	地文は懸糸L縦位/底面の縁部分が磨耗/磨代痕なし	褐/砂粒中 量、礫多量	加曾利 E1式
第12図10 図版27-10	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.2	下部がやや外反して 広がりながら立ち上 がる胴部/ほぼ直立す る口縁部	地文は単筋RL横位、隆帯上、内帯状把手側面に施文/口縁 部は上端1本、下端1本の隆帯による楕円形の口縁部区画 文/楕円形区画文の端点は内帯状把手に成形/隆帯内側に幅 広角押圧文施文、中央に先端に丸みを帯びた工具による押圧文 を4列施文、隆帯断面カマボコ状・三角状	褐/砂粒少 量、礫・雲 母中量	阿玉台 IV式
第12図11 図版27-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	ほぼ直立する口縁部	地文は単筋LR縦位か、把手の縁線部分、内帯状把手上に施 文/口縁部に三角形状の把手/突起下部に内帯状突起貼付	橙/砂粒・ 礫少量	阿玉台 IV式
第12図12 図版27-12	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反して外傾する胴 部	隆帯貼付/隆帯盛に三角押圧文と角押圧文が沿う/隆帯断面三角 状	暗褐色/砂粒 ・礫少量	勝飯1b 式

第8表 102号住居跡出土土器一覧1

探検番号 図版番号	種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第12図13 図版27-13	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外積する胴部	横位隆帯と弧状の隆帯による楕円形の区画文/楕円区画文内側に向けて幅広角状の連続押圧文/横位隆帯先端に幅広角状の連続押圧文と横位波状沈線が付着/隆帯断面三角状、隆帯臨半沈線が1本	明褐/砂粒・礫少量	勝坂2a式
第12図14 図版27-14	深鉢	胴部 破片	厚0.9	内湾して立ち上がる胴部	隆帯による円形の文様、隆帯上押圧文・沈線・2列の三角押圧文/単沈線による区画文、区画文内斜位沈線充填・割面押圧文を充填した三叉文/隆帯断面幅広のカタボコ状、隆帯臨1本または2本の単沈線が1本	褐/砂粒少量、礫少量	勝坂3a式
第12図15 図版27-15	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	広がりながら立ち上がる胴部/内湾する口縁部/口唇部は外積	地文は単筋 RL 横位、口縁部上部2cm 下から無文/幅広く高さのある隆帯による弧状の文様、隆帯上に2列1対の角押圧文	黒褐/砂粒・礫少量、雲母微量	勝坂3b新式
第13図16 図版27-16	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚1.0	外積しながら広がる口縁部、胴部は外積するが上部が内湾する口縁部	隆帯による口縁部区画/区画の境目は突起状に成形/隆帯上押圧文/区画内交互刺突・沈線による弧文/半時0地点型	褐/砂粒少量、礫・雲母中量	勝坂3b新式
第13図17 図版27-17	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	円筒形か/ほぼ直立の口縁部、胴部/口唇部上部外面に肥厚、外積	波頂部に隆帯による円形の文様/隆帯による区画文、胴部に円形の文様/隆帯上押圧文、三角押圧文/隆帯断面カタボコ状・幅広のカタボコ状、隆帯臨半沈線が1本	暗褐/砂粒・礫少量	勝坂3b式
第13図18 図版27-18	深鉢	胴部 破片	厚1.1	僅かに内湾して広がる胴部	地文は単筋 RL 斜位/横位隆帯によって文様帯と縄文部分を示す/文様帯には隆帯による楕円区画文、区画文内単沈線による文様無文/楕円区画文無文/隆帯断面幅広のカタボコ状・一部三角状、隆帯臨半沈線が1本	黒褐/砂粒・礫少量	勝坂3b式
第13図19 図版27-19	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	上部がやや外反する口縁部	口縁部上部2.5cm は無文/単沈線を横位に3本無文/横位沈線下位は沈線を斜位に充填、ペン先状工具による横位の押引文が1列見られる	極暗褐/砂粒・礫少量	勝坂3式
第13図20 図版27-20	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	ほぼ直立する口縁部	口唇部に突起あり/突起に繋がる隆帯垂下/突起連続押圧文・横位沈線無文/垂下する隆帯上沈線・楕円形の押圧文/隆帯断面台形、隆帯臨片側単沈線1本	褐/砂粒・礫少量	勝坂3式
第13図21 図版27-21	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外積する胴部	地文は隠系 RL 縦位一部斜位/押圧文を付した横定する1本の隆帯で面す/隆帯上部無文/隆帯断面カタボコ状、隆帯臨無文で付けて貼付	赤褐/砂粒中量・礫少量	勝坂3 ～加賀利E1式
第13図22 図版27-22	深鉢	頸部～胴部 破片	厚1.1	キャリバー形か/胴部はやや内湾/外反する頸部、上部は立ち上がる	地文は隠系 RL 縦位/胴部無文/横位の沈線で頸部無文帯と胴部を示す/沈線は平行沈線の可能性あり	明赤褐/砂粒・礫少量	加賀利E2式
第13図23 図版27-23	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外積し広がりが立ち上がる胴部/上部はやや緩やかに外積	地文は単筋 RL 横位	明赤褐/砂粒中量、礫少量	中期後葉～後期
第13図24 図版27-24	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.1	直線的に開く体部/口縁部はやや内積	口縁部は区画文を脱け、区画文が接する部分はV字の突起状に成形か/区画に沿って3列の角押圧文	褐/砂粒少量、礫・雲母中量	勝坂1a式
第14図25 図版28-25	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.2	口縁的に外積して広がる体部/口縁部は内折	残存部無文/外面に微量の赤色顔料残存/内面に未貫通の孔2ヶ所あり、円形・径1.4cm・断面階状、円形・径0.6cm・断面半球状	黄褐/砂粒少量、礫中量	中期中葉～後葉
第14図26 図版28-26	浅鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや内湾しながら広がる口縁部/口唇部内側に肥厚	残存部無文/内外面、口唇部に赤色顔料が多く残存	黒/砂粒・礫少量	中期中葉～後葉

第8表 102号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第14図27 図版28-27	土器片 片断	完形	5.4/5.4/1.6	57.51	円形/挾部は2ヶ所/周縁はほぼ磨耗/胴部片利用/隆帯による楕円区画、区画内斜位沈線充填	黒褐/砂粒・礫少量	勝坂3式
第14図28 図版28-28	土器片 片断	完形	4.9/3.9/1.0	27.5	方形/挾部は2ヶ所/周縁は部分的に磨耗/胴部片利用/O段多糸丸、無文	褐/砂粒・礫少量	勝坂式
第14図29 図版28-29	土器片 片断	完形	9.9/5.4/1.1	98.1	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は部分的に磨耗/浅鉢口縁部利用/内外面、口唇部に赤色顔料付着	黄褐/砂粒・礫少量	勝坂式
第14図30 図版28-30	土器片 片断	完形	4.1/3.1/1.1	17	方形/挾部は2ヶ所/周縁はほぼ磨耗/胴部片利用/無文	赤褐/砂粒少量、礫・雲母中量	中期中葉～後葉
第14図31 図版28-31	土器片 片断	25%	3.6/3.1/1.1	14.9	方形か/挾部1ヶ所残存/周縁はほぼ磨耗/胴部片利用/無文	明赤褐/砂粒・礫少量	中期中葉～後葉

第9表 102号住居跡出土土器製品一覽

神岡番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第14図32 図版28-32	打製石斧	頁岩	90.1	46.5	10.0	59.6	撥片 / 基部は一部折れて欠損している / 表面に磨礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の上部から中央部にかけての稜上に潰れが認められる / 右側縁は上部の一部に稜上に潰れが認められる
第14図33 図版28-33	打製石斧	ホルンフェルス	110.7	49.0	21.1	140.4	撥片 / 裏面刃部が磨減している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第14図34 図版28-34	二次加工 削片	頁岩	42.9	31.3	15.0	10.9	表面面左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第14図35 図版28-35	磨石	斑縞岩	81.4	55.2	29.8	160.4	表裏面全面に磨痕か
第14図36 図版28-36	石皿	閃緑岩	128.6	70.8	38.8	535.7	扁平石皿 / 表裏面ほぼ全面に平坦な使用面

第10表 102号住居跡出土石器一覧

103号住居跡

遺 構 (第15・16図)

[位 置] (B-3・4) グリッド。

[検出状況] 南東隅が4方に、北東隅が207Dに切られる。

[構 造] 平面形：隅丸方形。主軸方位：N-13°-E。炉と埋裏の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸残存長445cm / 短軸410cm / 深さ32~42cm。壁溝：1条検出された。上幅20~28cm / 下幅8~14cm / 床面からの深さ5~12cm。壁：約74~85°で急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、軟弱で、直床である。炉の西側に焼土範囲を確認した。炉：埋裏炉。深鉢形土器の口縁部(第17図1)が埋設されている。長軸76cm / 短軸63cm / 床面からの深さ24cm。埋裏：南端に1基検出された。深鉢形土器の口縁部(第17図2)が埋設されている。掘込規模は長軸56cm / 短軸42cm / 床面からの深さ40cm。柱穴：4本検出した。P1~P4を主柱穴ととらえ、4本柱建物を想定する。

[覆 土] 5層に分層できた。

[遺 物] 炉体土器(第17図1)、埋裏(第17図2)の他、住居南東部の覆土下~中層で完形・略完形の土器がまとまって出土した。深鉢形土器(第19図11)の底部に107J出土の破片が、小形深鉢形土器(第19図13)と深鉢形土器(第19図17)が109J出土の破片とそれぞれ遺構間接合している。

[時 期] 中期後葉期(加曾利E1b式期)。

遺 物 (第17~23図、図版29~34、第11~13表)

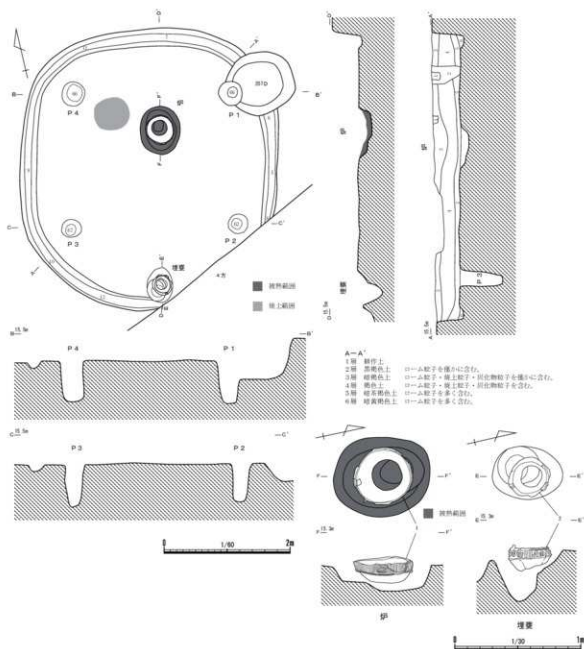
[土 器] (第17~20図・第21図28~32、図版29~32、第11表)

復元個体13点、破片資料19点を図示した。1~10は加曾利E1b式の深鉢形土器である。1は炉体土器である。口縁部区画を持ち、区画内は縦位沈線を充填する。把手の痕跡が4単位あるが、全て欠損している。2は埋裏である。燃糸文を地文し、1と同様に把手の痕跡が4単位見られるが全て欠損している。3・4は口縁部区画に端部が渦巻状を呈する弧状文を配し、渦巻部分から区画下端隆帯に複数の隆帯が垂下する。5は口縁部区画内の弧状文端部の渦巻文が突起状となるものとならないものを交互に配置する。6は口縁部区画内に隆帯による楕円状の文様、渦巻状の文様を施文する。7は隆帯による渦巻文を施文する。8~10は胴部に2本1対の直状の隆帯、1本の波状隆帯が垂下する。11は

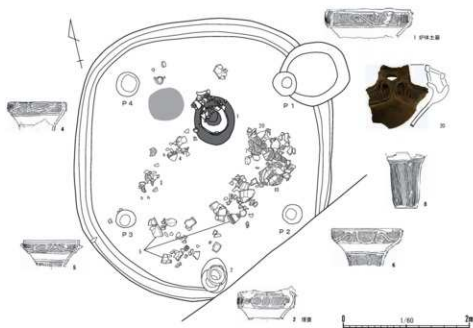
加曾利E1c式の深鉢形土器である。口縁部は無文で横位隆帯で画す。胴部には2本1対の隆帯が垂下し、沈線による文様を施文する。隆帯断面は角状である。底部は107J出土の破片が接合している。12は加曾利E2a式の深鉢形土器である。胴部に横位沈線が巡り、2本1対の沈線が波状に垂下する。13は加曾利E式の小形深鉢形土器である。109J出土の破片と遺構間接合している。14・15は阿玉台式、16～18は勝坂式、19～26は加曾利E式、27～29は曾利式、30は連弧文の深鉢形土器である。17は109J出土の破片が遺構間接合している。31・32は浅鉢形土器で、31は勝坂式、32は中期中葉～後葉である。32には内外面共に赤色顔料が付着する。

[土製品] (第21図33～52、図版32・33、第12表)

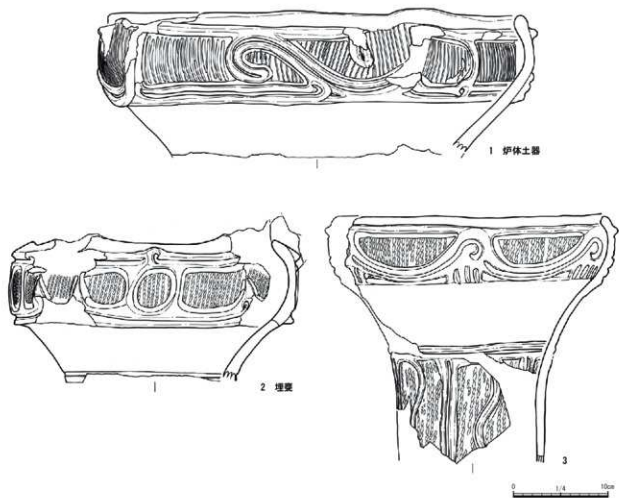
20点を図示した。33～50は土器片鈍、51・52は土製円盤である。



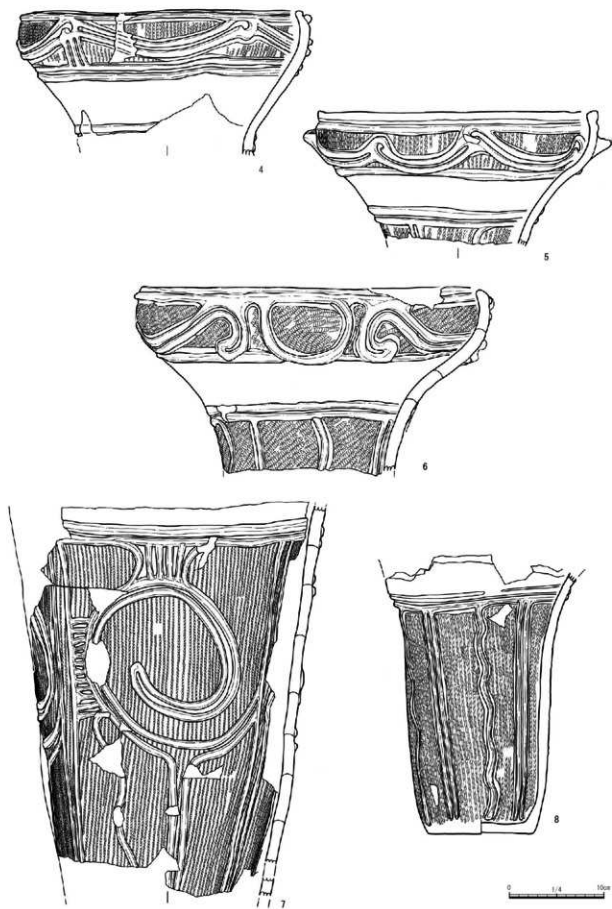
第15図 103号住居跡・炉・埋裏 (1/60・1/30)



第 16 図 103 号住居跡遺物出土状態 (1 / 60)



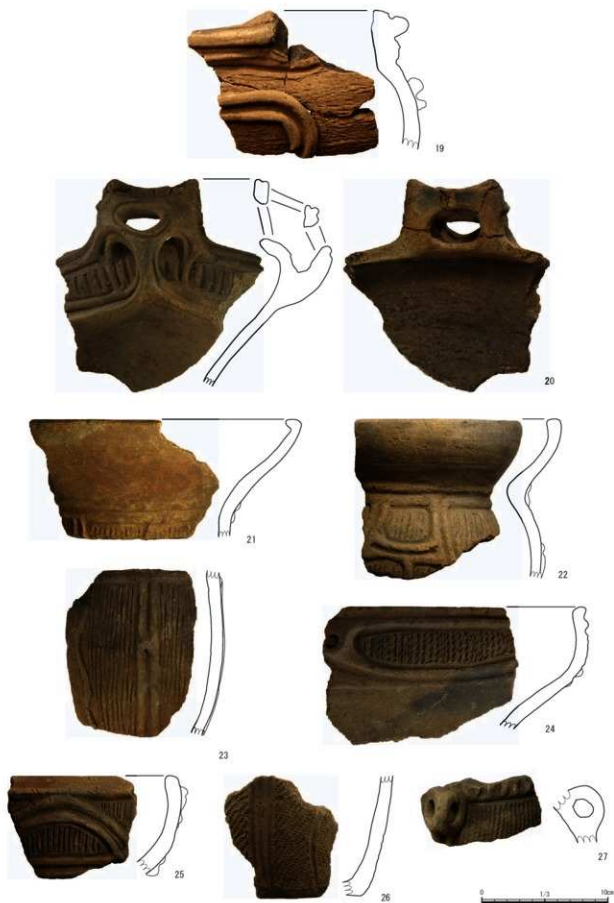
第 17 図 103 号住居跡出土遺物 1 (1 / 4)



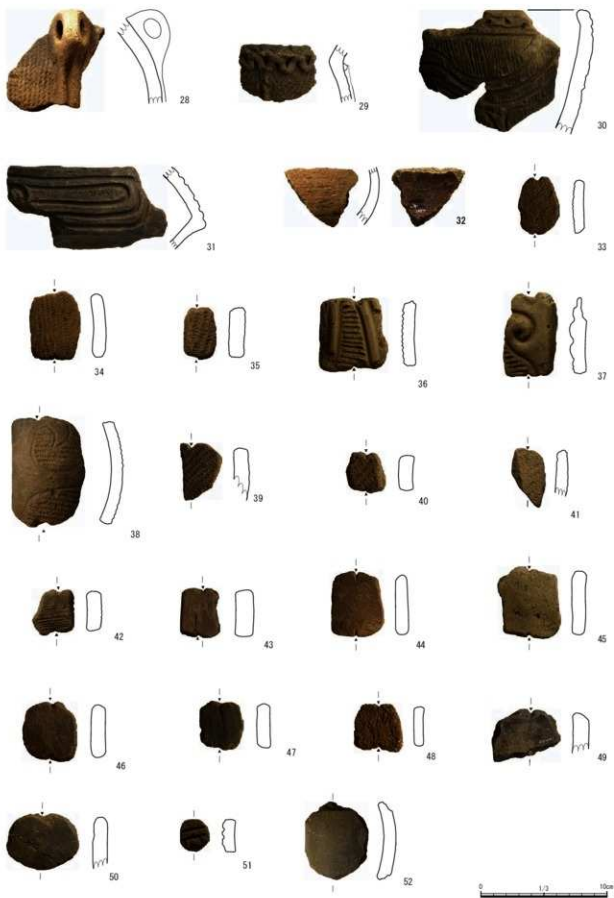
第18図 103号住居跡出土遺物2(1/4)



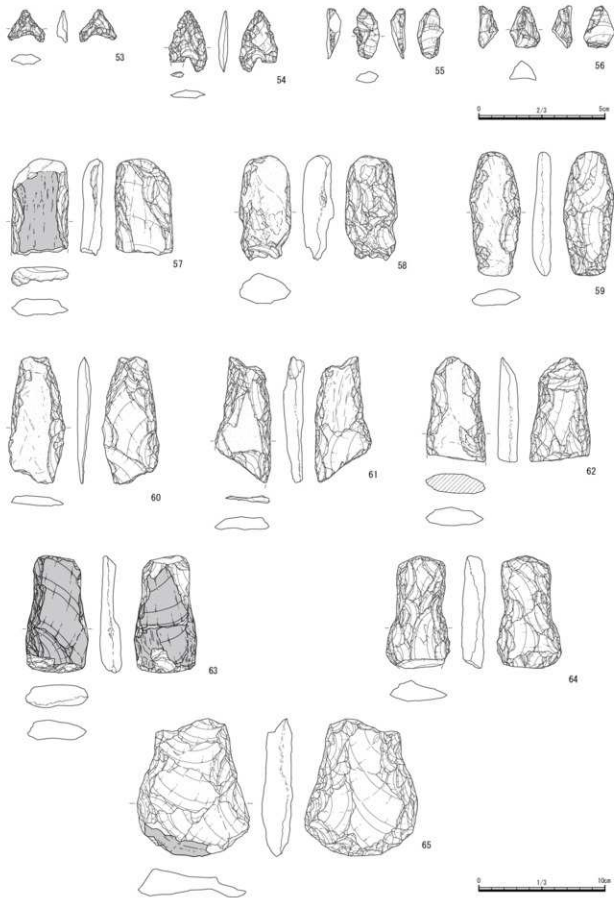
第19図 103号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)



第20図 103号住居跡出土遺物4 (1/3)



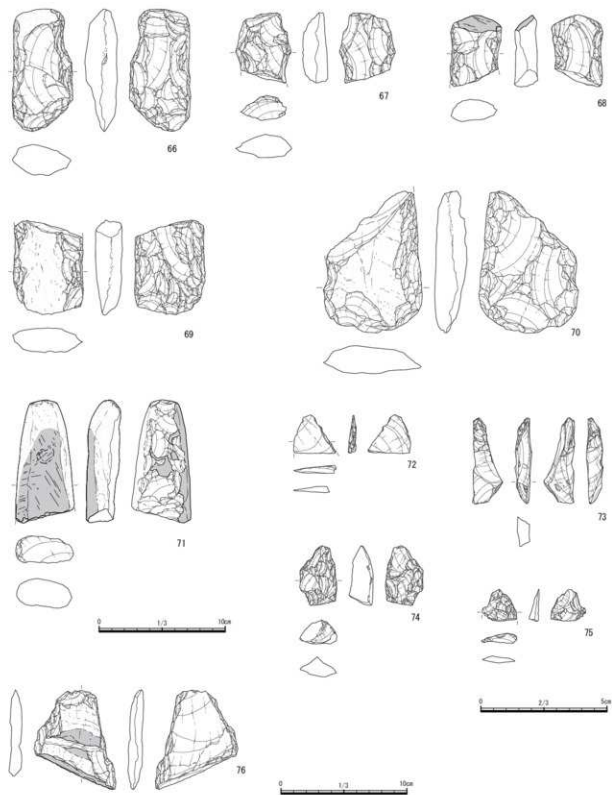
第21図 103号住居跡出土遺物5 (1/3)



第22図 103号住居跡出土遺物6 (1/3・2/3)

[石器] (第22・23図、図版33・34、第13表)

24点を図示した。53・54は石鏃である。55・56は楔形石器である。57～70は打製石斧である。71は磨製石斧である。72～75は二次加工剥片である。76は砥石である。



第23図 103号住居跡出土遺物7 (1/3・2/3)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第17図1 図版29-1	深鉢	口縁部～ 頸部 90%	高[14.8] 口43.6 厚1.2	キャリバー形/ 外反する頸部/ 内湾する口縁部	口縁部を上端1本、下端2本の隆帯で直す/2本1対の隆帯による傾位S字状の文様を4単位配す。右側の渦巻状部分は把手 になると思われるが全て欠損/口縁部区内に傾位沈線(一部 斜位)充填/区画下端に沈線による両端渦巻状を呈する文様を 施文/頸部無文/隆帯断面マボコ状/円柱土	灰に黄橙 /砂粒中量、 礫少量	加曾利 E1b式
第17図2 図版29-2	深鉢	口縁部～ 頸部 90%	高[17.4] 口23.8 厚1.0	キャリバー形/ 外反して広がる 頸部/内湾する 口縁部	地文は燃糸L縦位。口縁部区画内無文/把手の剥落面を4単位 見られる/隆帯による口縁部区画、柄杓の区画が通なる/区 画上下端に沈線による両端渦巻状を呈する文様を施文/頸部 無文/下端に横位隆帯が僅かに残存/隆帯断面マボコ状/埋 裏	明黄橙/砂 粒少量、礫 少量	加曾利 E1b式
第17図3 図版29-3	深鉢	口縁部～ 胴部上位 40%	高[26.0] 口[28.5] 厚0.9	キャリバー形/ ほぼ直立に立ち 上る頸部/外 反して広がる頸 部/内湾する口 縁部	地文は燃糸L縦位。口縁部区画内、胴部に施文/口縁部を上端 1本、下端1本の隆帯で直す。下端の隆帯は底面と一体化し ている部分がある/区画内は2本1対の隆帯により端部が渦巻状を 呈する弧状文、渦巻状文下には区画下端隆帯に向かって4～5 本の隆帯が垂下/頸部無文/頸部無文帯と胴部を横走する2本 1対の隆帯によって直す/胴部には2本1対の直位の隆帯を5単 位、1本の波状隆帯5単位が交互に垂下/隆帯断面マボコ状/ 内側底面は下にいく程凹凸があり粗い	橙～黒/砂 粒少量、礫 微量	加曾利 E1b式
第18図4 図版30-4	深鉢	口縁部～ 胴部上位 90%	高[15.3] 口28.9 厚1.1	キャリバー形/ 外反して広がる 頸部/内湾して 広がる口縁部	地文は燃糸L縦位。口縁部区画内、胴部に施文/口縁部を上端 1本、下端2本の隆帯で直す/2本1対の隆帯により端部が渦 巻状を呈する弧状文を配す。5単位/5単位の渦巻文のうち3 単位は下端から3本の隆帯が区画下端隆帯に向かって垂下、5 単位の内3単位の弧状文の弧の部分から3本以上の隆帯が区画 下端隆帯に向かって垂下/燃糸無文+L隆帯区画隆帯貼付/頸 部無文/頸部と胴部を横走する2本1対の隆帯で直す/胴部 には2本1対に隆帯が直ちに垂下/隆帯断面マボコ状/胴部付 近の内側底面は凹凸が見られ粗い	青赤黒/砂 粒・礫中量	加曾利 E1b式
第18図5 図版30-5	深鉢	口縁部～ 胴部上位 90%	高[14.2] 口29.2 厚1.0	キャリバー形/ 外反する頸部上 位/外反して広 がる頸部/やや 内湾して立ち上 る口縁部	地文は燃糸L縦位/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で直す/ 口縁部区画内には2本1対の隆帯により端部が渦巻状を呈する 弧状文7単位/内4単位は渦巻文が突起状、突起状のものそ うでない渦巻文を交互に配置/頸部無文/頸部と胴部を横走す る2本1対の隆帯で直す/胴部には2本1対の直位の隆帯4単位、 1本の波状隆帯4単位が交互に垂下/隆帯断面マボコ状	暗緑/砂粒 多量、礫微 量	加曾利 E1b式
第18図6 図版30-6	深鉢	口縁部～ 胴部上位 80%	高[19.8] 口35.2 厚1.3	キャリバー形/ 外反する頸部/ 外反して広がる 頸部/内湾して 外反する口縁部	地文は0段多条L縦位・斜位。口縁部区画内・胴部に施文/ 口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で直す/口縁部区画内には 2本1対の隆帯による端部が渦巻状を呈する文様を4単位(渦 巻状の部分3単位残存、1単位は渦巻状の部分欠損)、1本の 隆帯による柄杓状の文様1単位/頸部無文/頸部と胴部を横走 する2本1対の隆帯で直す/胴部には2本1対の隆帯が1単位 ずつ対称面に直ちに垂下、間に1本の波状隆帯2単位と直位の 隆帯1単位を交互に垂下/隆帯断面マボコ状・台形状	灰に黄橙 /砂粒中量、 礫少量	加曾利 E1c式
第18図7 図版31-7	深鉢	頸部下位 ～胴部下位 50%	高[41.6] 厚1.1	頸部に向かい直 線的に外挿する 胴部	地文は燃糸L縦位/残存頸部無文/横位2本の隆帯で頸部無文 帯と直す/2本1対の隆帯による渦巻文、直ちに垂下/波状に 垂下する1本の隆帯/渦巻文の上部に6本、横に12本の隆帯を 貼付/隆帯断面マボコ状	橙/砂粒少 量、礫中量	加曾利 E1b式
第18図8 図版31-8	深鉢	頸部～底 部 90%	高[29.4] 底11.0 厚0.9	下位がやや内湾 し中位からやや 外反する頸部/ 外反する頸部	地文は燃糸L縦位/頸部無文/頸部無文帯と胴部を横走する2 本1対の隆帯で直す/2本1対の直位の隆帯5単位と1本の波 状隆帯5単位が交互に垂下/隆帯断面マボコ状/底面現代 産無し/内側の底面は凹凸があり粗い	橙/砂粒中 量、礫少量	加曾利 E1b式
第19図9 図版31-9	深鉢	胴部中位 40%	高[13.7] 厚1.0	ほぼ直立の胴部、 上部はやや外反	地文は燃糸L縦位/2本1対の直ちに垂する隆帯2単位、1 本の波状に垂下する隆帯2単位を交互に施文/隆帯断面マボコ 状	褐/砂粒少 量、礫中量	加曾利 E1b式
第19図10 図版31-10	深鉢	胴部下位 ～底部 90%	高[8.3] 底11.1 厚0.9	僅かに内湾し広 がるが立ち上 る胴部/平坦な 底部	地文は燃糸L縦位/底面付近は縦位平行沈線を複数施文、燃糸 文を施しきれなかった部分を補う目的で/2本1対の直ちに 垂下する隆帯4単位と1本の波状に垂下する隆帯4単位を交互 に施文/垂下する直位の隆帯は2本を貼付し1対したものと 幅広の隆帯の中心に1本の沈線を加え2本としたものがある/ 隆帯断面扁平なマボコ状、隆帯の抑えがやや甘い/底面現代 産無し	橙/砂粒・ 礫少量	加曾利 E1b式
第19図11 図版31-11	深鉢	口縁部～ 胴部上位、 胴部中位 ～底部 30%	高(25.0) 口(20.0) 底(11.0) 厚1.0	中位がやや内湾 し上部は広がっ て立ち上る胴 部/外湾して広 がる口縁部/平 坦な底部	地文は0段多条LR縦位/口縁部無文、頸部の横位1本の隆帯 で区画/横位隆帯下部施文文帯/胴部文様2本1対の隆帯が垂 下、2本1対の沈線によるJ字状の文様、2本1対の沈線が垂下、 外反く字状の隆帯/隆帯断面角状、横位隆帯帯で付けて貼付 胴部の文様隆帯幅半沈線が1本沿う/地文一隆帯貼付、頸部横 位隆帯との前後関係は不明、107]と連続関係否	暗緑/砂 粒・礫少量	加曾利 E1c式
第19図12 図版31-12	深鉢	胴部中位 ～下位 90%	高[12.3] 厚1.1	内湾する頸部	地文は単筋LR縦位/中位に3本の単沈線が通る/2本1対の 沈線が8単位波状に垂下	橙/砂粒・ 礫少量	加曾利 E2a式

第11表 103号住居跡出土遺物一覧1

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第19図13 図版31-13	小形 深鉢	胴部下半 ～底部	高 [3.1] 底 5.8 90%	やや内湾しながら 広がる胴部/ 平坦な底部	地文は単筋 RL 縦位。胴部無文/103J と 109J の遺構間接合	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E 式
第19図14 図版31-14	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	やや外積する胴 部	1本の隆帯が波状に垂下/爪形文を横位に施文/隆帯断面カマ ボコ状・扁平なカマボコ状	にぶい黄褐色 / 砂粒・礫 少量、雲母 中量	阿玉台 II 式
第19図15 図版31-15	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	内湾する口縁部/ 口唇部は外積	地文は単筋 RL 縦位/隆帯による口縁部区画/区画内側に平行 沈線が沿う。内側に縄文施文/左側の区画河土の境点には円形 の窪みのある突起を貼付	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、 雲母中量	阿玉台 III 式
第19図16 図版31-16	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	やや外積する胴 部	爪形文を付した隆帯による区画文/隆帯交差部分には短隆帯を横 位に2本貼付し突起状に成形/隆帯に1本または2本の沈線が 沿う/区画内に半截竹管状工具の痕面を使用した平行沈線を斜 位に充填/隆帯断面扁平なカマボコ状・角形状。隆帯脇単沈線 が1本沿う	褐/砂粒・ 礫少量	勝飯3a 式
第19図17 図版31-17	深鉢	口縁部中 位～胴部 破片	厚 1.2	頸部にはほぼ直立/ 中位から下位に かけて内湾する 口縁	頸部に横走する隆帯で区画/口縁部に押印文を付した縦位隆帯 で区画。斜位の隆帯は文様か/口縁部に単沈線による渦巻文を 充填。渦巻文間沈線充填/隆帯断面台形状。縦位隆帯脇単沈線 が沿う。横位隆帯上端まで付けて貼付/内面の調整は粗く横位 の深い沈線が多数見られる/103J と 109J の遺構間接合	明褐色/砂 粒・礫少量	勝飯3b 新式
第19図18 図版32-18	深鉢	胴部 破片	厚 1.4	ほぼ直立する胴 部	押印文を付した隆帯による円形の文様/半円形弓状の文様。三 角押文・押印文を充填/隆帯断面台形状。隆帯脇まで付けて貼 付	黒褐色/砂 粒中量、礫少 量	勝飯3b 式
第20図19 図版32-19	深鉢	口縁部 破片	厚 1.3	中位が内湾し上 位はほぼ直立す る口縁部	地文は横系 L 横位/口唇部に太い隆帯を横位に2本貼付し一 部突起状に成形/太い隆帯の中央に1本の沈線が付した有刺隆帯 を弧状に貼付/この破片の他同様の隆帯形状・貼付方法で同一 個体と思われる口縁部片が 105J から出土/いずれも接合せず 同一個体かは不明であるが胎土が非常に似ている破片が 104J・ 105J・107J・108J・109J・110J・114J・118J から出土。多 くは 103J・105J・109J から出土	褐/砂粒・ 礫微量	加曾利 E1a 式
第20図20 図版32-20	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚 0.9	外積しながら広 がる胴部/外積 しながら内湾す る口縁部	口縁部に中空の把手/口縁部は上端2本、下端2本の隆帯で画 す/口縁部区画内縦位沈線列/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒多 量、礫中量	加曾利 E1b 式
第20図21 図版32-21	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚 0.8	ほぼ直立する頸 部/中位まで外 積して広がり、 上位は内湾しな がら立ち上がる 口縁部/口唇部 内側に三角状に 肥厚	地文は横系 L 縦位。胴部に施文/口縁部無文/頸部2本1対の 隆帯が走る/胴部2本1対の直状の隆帯が垂下、1本の隆帯が 波状に垂下/隆帯断面カマボコ状	明褐色/砂 粒・礫少量	加曾利 E1b 式
第20図22 図版32-22	深鉢	口縁部～ 胴部中位 破片	厚 0.9	内湾する胴部/ 括れる胴部/外 積しながら内湾 する口縁部	地文は横系 L 縦位/口縁部無文/頸部2本1対の隆帯が走る/ 胴部に1本または2本1対の隆帯による文様貼付/隆帯断面/ マボコ状	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E1b 式
第20図23 図版32-23	深鉢	胴部上位 ～下位 破片	厚 1.0	内湾する胴部	地文は横系 L 縦位/上部に横位1本の隆帯/1本の隆帯が波状 に垂下/2本1組の隆帯が直状に垂下/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒・ 礫少量	加曾利 E1b 式
第20図24 図版32-24	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚 1.0	外積しながら広 がる胴部/内湾 する口縁部	地文は横系 L 縦位。口縁部区画内に施文/隆帯による口縁部区 画/区画端の突起状の部分に沈線による渦巻文/頸部無文/隆 帯断面カマボコ状	褐/砂粒・ 礫多量	加曾利 E1c 式
第20図25 図版32-25	深鉢	口縁部 破片	厚 1.2	内湾する口縁部	口縁部を隆帯で画す。上端1本下端欠損/区画内に2本1対の 隆帯による弧状の文様貼付/区画内縦位沈線列/隆帯断面カマ ボコ状・台形状	明褐色/砂 粒・礫少量	加曾利 E1～2 式
第20図26 図版32-26	深鉢	胴部下位 ～底部 破片	厚 0.9	やや外積し立ち 上がる胴部/平 坦な底部	地文は単筋 RL 縦位。胴部に施文/3本1対の沈線が直状に垂下。 沈線部の縄文は磨消された様に見える/1本の沈線が波状に垂下/ 底面磨代痕なし/内面に黒色の付着物微量あり	褐/砂粒・ 礫少量	加曾利 E3a 式
第20図27 図版32-27	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	内湾する胴部	地文は横系 L 縦位/縦線状把手。把手下部から2本の隆帯が 直状に垂下/把手横に隆帯横走。隆帯上端から紐状の隆帯が斜 位に複数本伸びる/隆帯断面カマボコ状/斜位の紐状隆帯は押 さえて貼付/紐状隆帯下には地文の横系文が見える/掲載番号 27 と 28 は同一個体	にぶい黄褐色 / 砂粒・礫少 量	曾利1 式

第11表 103号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第21図28 図版32-28	深鉢	胴部 破片	厚1.2	内湾する胴部	地文は偶糸L縦位/最奥欠把手付、把手下部から2本の隆帯が直状に垂下/隆帯断面カマゴ状/掲載番号27と28は同一個体	にぶい黄褐色/砂粒・礫少量	前期I式
第21図29 図版32-29	深鉢	胴部～胴部 破片	厚0.8	内湾する胴部/ 括れる胴部	地文は単筋RL縦位/胴部の括れ部に細状の隆帯が波状に横走/1本の隆帯が直状に垂下/胴部波状隆帯上部無文	暗褐/砂粒・礫少量	前期II式
第21図30 図版32-30	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	外傾して上端が 内湾する口縁部	地文は偶糸L縦位/口縁部に3本の沈線が並る、沈線間に交互斜交文施文/3本1対の沈線による連文施文、下部に副文様が付随	暗褐/砂粒・礫少量	連気文 2b段飾
第21図31 図版32-31	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚0.9	内屈する口縁部 ～体部	沈線による文様/体部無文	暗褐/砂粒・礫少量	勝坂3b式
第21図32 図版32-32	浅鉢	体部 破片	厚0.9	内湾する体部	残存部無文/内外面に赤色顔料残存	明褐/砂粒少量・礫少量	中期中葉～後葉

第11表 103号住居跡出土土器一覽3

探検番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第21図33 図版32-33	土器 片鉢	完形	4.6/3.2/8.5	14.7	楕円形/扱部は2ヶ所/周縁はぼろぼろ/胴部片利用/単筋LR施文/	にぶい褐色/砂粒・礫微量、繊維を含む	前期
第21図34 図版32-34	土器 片鉢	完形	5.4/4.0/9.7	32.3	方形/扱部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/0段多糸RL施文	明赤褐/砂粒・礫少量	勝坂式
第21図35 図版32-35	土器 片鉢	完形	4.1/2.6/1.2	16.8	方形/扱部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/0段多糸RL施文	褐/砂粒多量、礫少量	勝坂式
第21図36 図版32-36	土器 片鉢	完形	5.7/5.7/9.6	46.3	方形/扱部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部付近の破片利用/隆帯による文様か/隆帯間沈線充満/隆帯断面台形、隆帯脇1本の単沈線が付随	にぶい黄褐色/砂粒・礫少量	加曾利E2式
第21図37 図版32-37	土器 片鉢	完形	6.6/4.1/0.9	46.6	方形/扱部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/浅鉢口縁部付近～体部の破片を利用/沈線による連文施文/沈線充満	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫少量	加曾利E2式
第21図38 図版32-38	土器 片鉢	完形	8.8/5.8/1.0	80.1	楕円形/扱部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部偏利用/沈線による渦巻状の文様を施文し、内側に縄文施文/単筋RL施文/口縁部上部、口唇部に僅かに赤色顔料残存	褐/砂粒中量、礫微量	加曾利E4式
第21図39 図版32-39	土器 片鉢	30%	14.7/13.4/1.1	19.1	円形または楕円形か/扱部1ヶ所残存/周縁はぼろぼろ/胴部片利用/単筋RL施文	褐/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図40 図版32-40	土器 片鉢	完形	3.1/2.8/1.2	12.3	方形/扱部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋LR施文	褐/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図41 図版32-41	土器 片鉢	50%	14.3/12.7/0.8	11.7	方形か/扱部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋LR施文	にぶい褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図42 図版32-42	土器 片鉢	90%	3.4/3.2/1.2	17.4	方形/扱部は2ヶ所/周縁ごく一部磨耗/胴部片利用/染線文施文	暗褐/砂粒・礫少量	中期中葉～後葉
第21図43 図版32-43	土器 片鉢	完形	3.9/3.1/1.4	24.4	方形/扱部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文	褐/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図44 図版32-44	土器 片鉢	完形	5.2/4.1/1.1	32	方形/扱部は2ヶ所/周縁はぼろぼろ/胴部片利用/無文	明赤褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図45 図版32-45	土器 片鉢	完形	5.5/4.6/1.2	42.1	方形/扱部は2ヶ所/周縁一部磨耗/胴部片利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図46 図版32-46	土器 片鉢	完形	4.7/4.2/1.2	34.2	円形/扱部は2ヶ所/周縁はぼろぼろ/胴部片利用/無文	褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図47 図版32-47	土器 片鉢	完形	3.8/3.4/1.0	19.3	方形/扱部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉
第21図48 図版32-48	土器 片鉢	完形	3.8/3.8/7.7	15.2	方形/扱部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文/表面割落か	明赤褐/砂粒中量、礫少量、雲母多量	中期中葉～後葉
第21図49 図版32-49	土器 片鉢	40%	14.0/15.3/1.3	32.9	円形または楕円形か/扱部1ヶ所残存/周縁ごく一部磨耗/胴部片利用/無文/光沢のある黒色の付着物あり	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫中量	中期中葉～後葉
第21図50 図版32-50	土器 片鉢	50%	14.4/15.6/1.1	37.3	円形または楕円形か/扱部1ヶ所残存/周縁一部磨耗/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒中量、礫少量	中期中葉～後葉
第21図51 図版32-51	土製 円盤	完形	2.6/2.3/0.9	7.4	楕円形/周縁の一部磨耗/胴部片利用/沈線、交互斜交文施文	褐/砂粒・礫少量	勝坂2～3式
第21図52 図版32-52	土製 円盤	完形	6.2/5.0/1.0	40.8	楕円形/周縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/僅かに押圧文と思われる痕跡が縁に見られる	にぶい黄褐色/砂粒多量、礫微量	中期中葉～後葉

第12表 103号住居跡出土土製品一覽

神岡番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 22 図 53 図版 33-53	石 錐	黒曜石	12.7	14.7	4.3	0.5	凹基無茎 / 側縁は緩やかな弧状を呈する / 残りは浅く弧状
第 22 図 54 図版 33-54	石 錐	黒曜石	23.9	15.8	3.7	1.1	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 残りは深く直線状 / 左脚部欠損
第 22 図 55 図版 33-55	楔形石器	黒曜石	20.4	11.0	5.8	0.9	上下に両極側縁が認められる
第 22 図 56 図版 33-56	楔形石器	黒曜石	17.0	12.2	8.3	1.1	上下に両極側縁が認められる
第 22 図 57 図版 33-57	打製石斧	頁岩	77.0	45.1	18.6	83.5	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の上部の稜上に潰れが認められる
第 22 図 58 図版 33-58	打製石斧	頁岩	83.9	41.8	25.9	116.5	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の上部から中央部にかけての稜上に潰れが認められ、上部と中央部の一部が面状になっている / 右側縁は中央部の稜上に潰れが認められる / 表面の一部が赤色化しており、焼融の可能性がある
第 22 図 59 図版 33-59	打製石斧	砂岩	98.4	41.1	15.3	77.2	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 22 図 60 図版 33-60	打製石斧	頁岩	100.3	45.2	10.5	55.7	撥形 / 表面が磨滅している / 刃部の一部折れて欠損している / 表面に原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の上部の稜上に潰れが認められる
第 22 図 61 図版 33-61	打製石斧	頁岩	97.0	45.4	15.8	70.0	撥形 / 基部と刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 右側縁の稜上に局所的に潰れが僅かに認められる / 表面の一部が赤色化しており、焼融の可能性がある
第 22 図 62 図版 33-62	打製石斧	砂岩	83.5	47.4	16.0	88.9	撥形 / 基部と刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められ、左側縁の中央部の一部が面状になっている
第 22 図 63 図版 33-63	打製石斧	頁岩	94.7	50.3	17.1	100.8	撥形 / 表面は磨滅している / 両側縁に敲打割離が認められる / 磨滅によって両側縁の潰れの有無はわからない
第 22 図 64 図版 33-64	打製石斧	ホルンフェルス	92.6	52.4	18.9	110.0	撥形 / 刃部は一部折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが僅かに認められる
第 22 図 65 図版 34-65	打製石斧	頁岩	110.9	89.3	20.8	243.6	撥形 / 基部は折れて欠損している / 表面刃部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第 23 図 66 図版 34-66	打製石斧	ホルンフェルス	96.6	48.8	25.9	153.9	撥形 / 表面基部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の上半と下半の稜上に潰れが認められる
第 23 図 67 図版 34-67	打製石斧	頁岩	55.5	44.7	19.6	54.5	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打割離は認められない
第 23 図 68 図版 34-68	打製石斧	頁岩	55.5	42.9	19.3	61.0	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面の一部には原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の稜上に潰れが認められる
第 23 図 69 図版 34-69	打製石斧	砂岩	75.6	55.7	21.3	123.5	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 23 図 70 図版 34-70	打製石斧	砂岩	111.5	80.1	25.9	240.8	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 23 図 71 図版 34-71	磨製石斧	緑色凝灰岩	98.4	47.8	22.8	182.1	刃部は折れて欠損している / 基部は敲打を伴う割離によって調整される / 体部は裏面の一部に研磨前の痕跡が見られる
第 23 図 72 図版 34-72	二次加工 剥片	黒曜石	15.3	17.0	3.4	0.6	表面側右側縁に連続的な二次的割離が認められる
第 23 図 73 図版 34-73	二次加工 剥片	黒曜石	33.9	12.9	6.9	2.1	表面側右側縁に不連続的な二次的割離が認められる
第 23 図 74 図版 34-74	二次加工 剥片	黒曜石	24.3	15.0	11.2	2.8	表面側右側縁に不連続的な二次的割離が認められる
第 23 図 75 図版 34-75	二次加工 剥片	黒曜石	12.7	13.9	4.3	0.4	表面側右側縁に不連続的な二次的割離が認められる
第 23 図 76 図版 34-76	破石	緑泥片岩	74.1	69.7	11.4	63.0	表面に 2ヶ所溝が認められる / 中央部付近に位置する溝は、断面が逆「台形」に近い形状である / 下部に位置する、もう一つの溝は残存状況が悪く、詳細は不明である

第 13 表 103 号住居跡出土石器一覧

104号住居跡

遺 構 (第24・25図)

[位 置] (B・C-2・3) グリッド。

[検出状況] 107 J・3 Sを切り、209 Dに切られる。

[構 造] 平面形:ほぼ円形。主軸方位:N-48°-E。炉と埋裏の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模:長軸540cm/短軸480cm/深さ32~54cm。壁溝:1条検出されたが、南側から東側にかけては確認できなかった。上幅14~25cm/下幅4~10cm/床面からの深さ4~14cm。壁:約74~86°で急斜に立ち上がる。床面:やや平坦であるが、中央部分が軟弱でわずかに低くなる。直床である。北側と南西側の壁際近くにそれぞれ2ヶ所の硬化面を確認した。炉:石囲埋裏炉。深鉢形土器(第26図1)が埋設されている。長軸44cm/短軸39cm/床面からの深さ20cm。埋裏:南西端に1基検出された。深鉢形土器(第26図2)が埋設されている。掘込規模は長軸30cm/短軸25cm/床面からの深さ17cm。柱穴:23本検出した。P1~P4を主柱穴ととらえ、4本柱建物を想定するが、P5~P8も主柱穴の可能性が有り、建替の可能性がある。

[覆 土] 5層に分層できた。

[遺 物] 炉体土器(第26図1)、埋裏(第26図2)の他、炉の北側から土器が比較的まとまって出土した。

[時 期] 中期後葉期(加曾利E2c式/連弧文2b段階期)。

遺 物 (第26~29図、図版35~37、第14~16表)

[土 器] (第26・27図・第28図13~24、図版35・36、第14表)

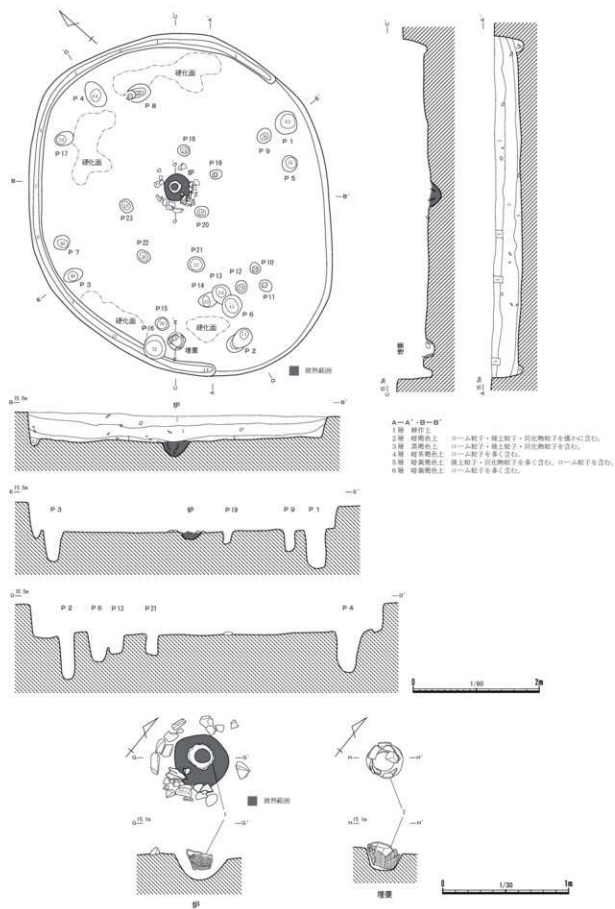
復元個体9点、破片資料15点を図示した。1は炉体土器で、連弧文2b段階の深鉢形土器である。縄文を地文とし、横走る3本の沈線間は地文を磨消される。2は埋裏で、加曾利E2c式の深鉢形土器である。3~5は連弧文2b段階の深鉢形土器で、いずれも条線文を地文とする。3は副文様が見られ、文様の沈線間は地文が消えている部分がある。4は胴部上位に連弧文を2段階施文する。5はやや形の崩れた連弧文を施文する。6は連弧文3段階の深鉢形土器である。2本の沈線による波状文を施し、沈線間の地文は磨消される。7は堀之内1式の深鉢形土器である。地文はなく、胴部括れ部には2本の沈線間に刺突文を付した文様が巡り、胴部下部には沈線が波状に垂下し、蕨手状の文様が見られる。8は加曾利E式の小形深鉢である。9は加曾利E3~4式の台付鉢の台部である。器面は荒れており、地文は条線文と思われる。10は阿玉台式、11~17は勝坂式、18~21は加曾利E式、22・23は曾利式の深鉢形土器である。24は浅鉢形土器で、勝坂式と思われる。

[土 製品] (第28図25~30、図版36、第15表)

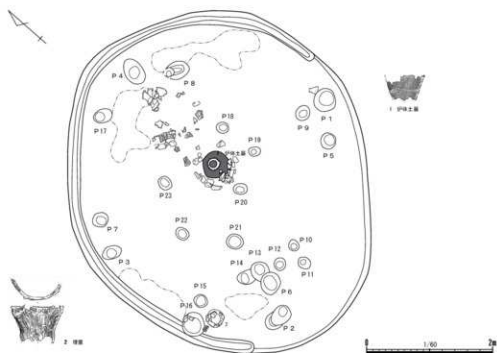
6点を図示した。25~30は土器片錘である。

[石 器] (第28図31~33・第29図、図版37、第16表)

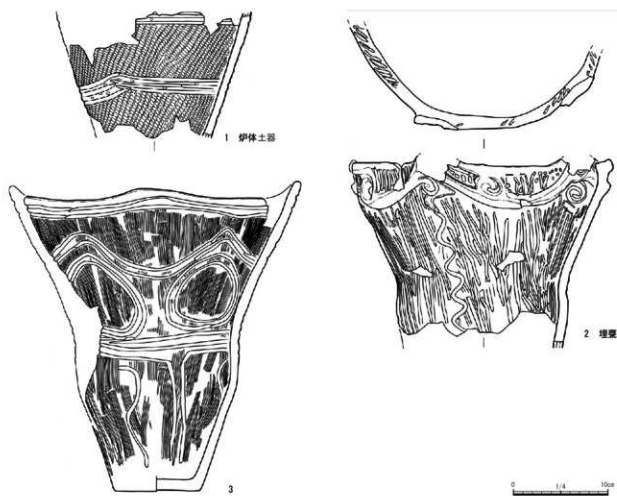
13点を図示した。31は楔形石器である。32~37は打製石斧である。38・39は二次加工剥片である。40は磨石である。41・42は石皿である。43は砥石である。



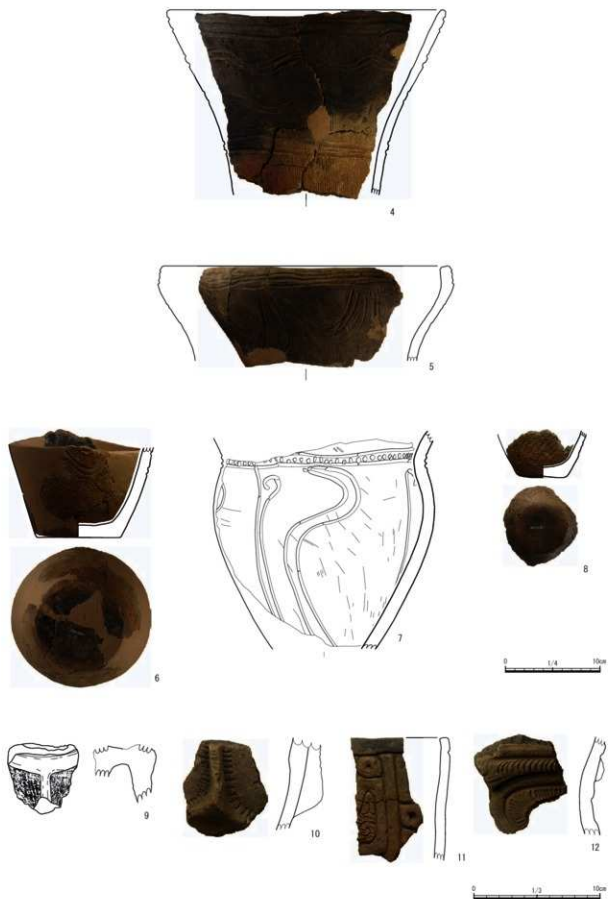
第24図 104号住居跡・炉・埋葬 (1/60・1/30)



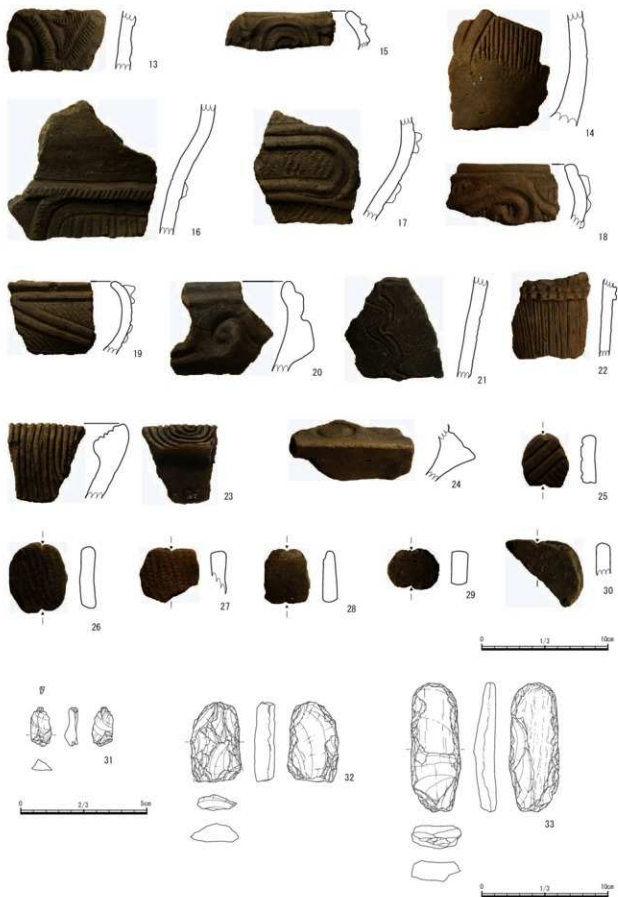
第25図 104号住居跡遺物出土状態(1/60)



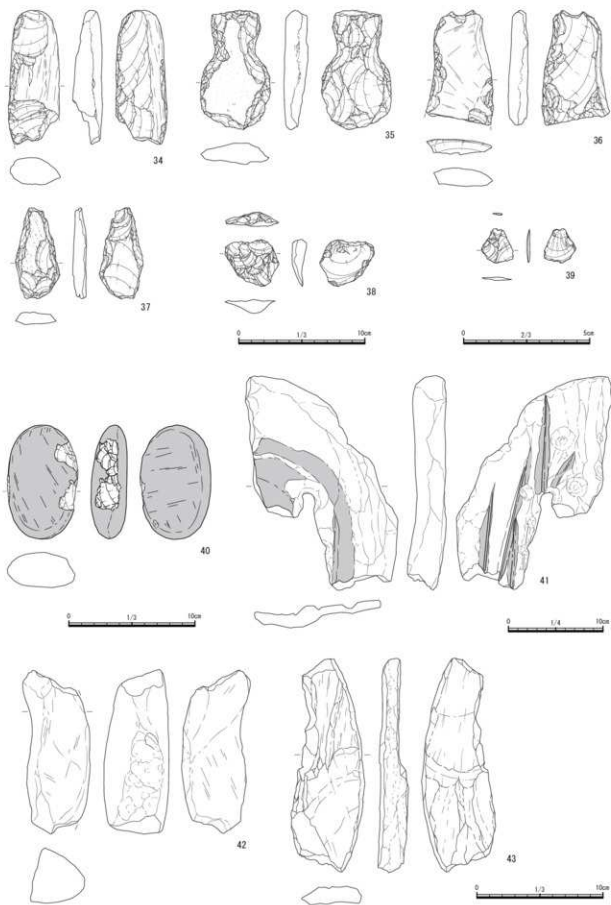
第26図 104号住居跡出土遺物1(1/4)



第27図 104号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第28図 104号住居跡出土遺物3 (1/3・2/3)



第29図 104号住居跡出土遺物4 (1/4・1/3・2/3)

博物館 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第26図1 図版35-1	深鉢	胴部中位～ 下位 70%	高 [13.2] 厚 0.9	下位から外傾し広 がる胴部	地文は単節 RL 縦位 / 3 本 1 対の沈線が横走、沈線間の地文磨消し / 印体土器	橙 / 砂粒中 量、礫微量	連弧文 2b段階
第26図2 図版35-2	深鉢	口縁部～胴 部下位 80%	高 [19.8] 口 27.0 厚 1.0	キャリバー形 / 中 位で括れ下位が内 湾する胴部 / 外傾 し広がる頸部 / や や内湾する口縁部	地文は縦位沈線 / 口唇部に斜位の沈線を充填 / 口縁部を下 端 1 本の隆帯で平円状に画す (3 単位残存、内 2 単位は半 分欠損) / 区画内中央に隆帯による渦巻文、縦位沈線充填 / 区画同士が接する部分に沈線による渦巻文 / 1 本の波状沈 線から 5 単位垂下、渦巻文下位から垂下するものとなし ものが混在 / 地文に比べやや強めに引かれた 2 ～ 3 本の直 位の沈線が見られるが地文が垂下する沈線の判断は困難 (やや傾きが違う 2 本 1 対の直位沈線が見られる) / 隆帯断 面カマボコ状 / 埋塵	橙 / 砂粒中 量、礫少量	加曽利 E2c 式
第26図3 図版35-3	深鉢	口縁部～底 部 60%	高 32.6 口 (30.6) 底 9.0 厚 1.0	外傾しながら立ち 上がり中位で括れ 上位で外傾する胴 部 / 外傾する口縁 部 / 平坦な底部	地文は縦位条線文 / 波状口縁 (2 単位残存、4 単位欠) / 口 縁に 2 本 1 対の沈線が混在 / 2 本 1 対の沈線による連弧文、 波頂部下位に 2 本 1 対の沈線による円形の文様施文 / 胴部 括れ部に 3 本 1 対の沈線が横走、下端の 1 本は 2 本 1 対 の直位に垂下する沈線に繋がる / 2 本 1 対の直位に垂下す る沈線間に 1 本の波状沈線が垂下 / 沈線間の地文が一部磨 消されるが地文が残っている部分が多く見られる	橙～黒褐 / 砂 粒・礫少量	連弧文 2b段階
第27図4 図版35-4	深鉢	口縁部～胴 部中位 30%	高 [19.5] 口 (29.0) 厚 1.0	中位はやや直立だ が上位は外傾して 広がる胴部 / 外傾 し広がる口縁部	地文は縦位条線文 / 口縁部には 2 本の沈線が混在 / 2 本 1 対の沈線による連弧文を 2 段施す連弧文は波状に近い / 胴部に 2 本の沈線が横走 / 沈線間に磨消しが一見見られ るが大部分は残っている	橙～黒褐 / 砂 粒・礫少量	連弧文 2b段階
第27図5 図版35-5	深鉢	口縁部～胴 部上位 破片	高 [10.0] 口 (30.0) 厚 1.1	外傾する胴部 / や や内湾しながら外 傾し上部は内湾す る口縁部	地文は縦位条線文 / 口縁部には 3 本の沈線が混在 / 沈線 による斜れた連弧文状の文様、沈線の本数は 2 ～ 4 本見られ る	明褐 / 砂粒少 量、礫微量	連弧文 2b段階
第27図6 図版35-6	深鉢	胴部下位～ 底部 40%	高 [9.5] 底 8.8 厚 1.2	外傾して広がりな がら立ち上がる胴 部 / 平坦な底部	地文は単節 RL 縦位 / 地文は施文単位の区隔が広く疎ら / 2 本 1 対の沈線による波状文、沈線間磨消し / 網代文なし	橙 / 砂粒少 量、礫微量	連弧文 3段階
第27図7 図版36-7	深鉢	胴部中位～ 下位 40%	高 [22.0] 厚 1.3	内湾しながら立ち 上がり、上位が括 れる胴部	胴部上位の括れ部に 2 本の沈線間に刺突文を付した文様が 混在 / 胴部下位に沈線による線手状の文様が混在、2 本 1 対の沈線が波状に垂下	褐 / 砂粒中 量、礫少量	内 1 式 I 式
第27図8 図版36-8	小形 深鉢	胴部下半～ 底部 60%	高 [4.8] 底 5.0 厚 0.7	外傾して広がりな がら立ち上がる胴 部 / 平坦な底部	地文は単節 RL 縦位 / 網代文なし	明赤褐 / 砂 粒・礫少量	加曽利 E 式
第27図9 図版36-9	台付 鉢	台部 80%	高 [5.0]	残存部はほぼ直立 / 側面に孔の痕跡 が見られる	地文は縦位条線文か、表面が荒れ詳細不明 / 上部に 1 本の 隆帯が回り、そこから隆帯が複数垂下 / 隆帯断面カマボコ 状	明褐 / 砂粒・ 礫多量	加曽利 E3 ～ E4 式
第27図10 図版36-10	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	下位はやや内湾し 上位はやや外傾す る口縁部	育の高い隆帯を逆 T 字状に貼付 / 隆帯上一部押圧文 / 隆帯 に爪形文が押し引状に沿う / 隆帯間などで付けて貼付	にぶい褐 / 砂 粒微量・礫少 量、雲母多量	阿玉台 皿式
第27図11 図版36-11	深鉢	口縁部～胴 部 破片	厚 0.8	ほぼ直立する胴部 / 僅かに内湾する 口縁部	横位 1 本の沈線が口縁部上部を区画、上部無文 / 平行沈線 による区画、区画内沈線による三叉文、渦巻文、押圧文充 填 / 中央に窪みのある円形の文様 / 内面に黒色の付着物が 少量あり	赤褐 / 砂粒少 量、礫微量	勝飯 3a 式
第27図12 図版36-12	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	外反する胴部	爪形文を付した隆帯による区画文 / 区画文内側に 2 本の沈 線が沿う / 更に内側に押圧文が沿う / 隆帯断面カマボコ状、 隆帯脇には単沈線が沿う	褐 / 砂粒少 量・礫微量	勝飯 3a 式
第28図13 図版36-13	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	ほぼ直立する胴部	押圧文を付した隆帯による区画文 / 三叉文の周囲に押圧文 充填 / 右端に棒状の押圧文が僅かに残存 / 隆帯断面台形、 隆帯脇には単沈線 1 本が沿う	にぶい黄褐 / 砂粒・礫少量	勝飯 3a 式
第28図14 図版36-14	深鉢	胴部下半～ 底部付近 破片	厚 1.3	内湾しながら立ち 上がる胴部	2 本の斜位沈線、区画文か / 半截竹筒状工具断面による平 行沈線を縦位に充填 / 底部付近は無文	明褐 / 砂粒少 量、礫微量	勝飯 3a 式
第28図15 図版36-15	深鉢	口縁部 破片	厚 0.6	強く内湾する口縁 部	多条の紐状の隆帯を逆 U 字状に貼付、逆 U 字状の文様 河土を粘土瘤状の突起で連結 / 隆帯断面カマボコ状、隆帯 間などで付けて貼付	にぶい黄褐 / 砂粒少量、礫 微量	勝飯 3b 新式
第28図16 図版36-16	深鉢	口縁部～胴 部上半 破片	厚 1.0	ほぼ直立の胴部 / 内湾する口縁部	口縁部無文 / 押圧文を付した横位隆帯で口縁部を画し、 帯円区画文を形成 / 区画文内側に 2 本の沈線が沿う / 沈線 間縦位沈線列 / 隆帯断面台形、隆帯脇には単沈線が沿う	灰黄褐 / 砂粒 中量、礫微量	勝飯 3b 新式

第14表 第104号住居跡出土土器一覧1

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第28図17 図版36-17	深鉢	口縁部一隅 破片	厚1.0	外積する胴部 / 外積しながら内湾する口縁部	地文は単節 RL 縦位 / 弧状の隆帯、太い隆帯の中央に1本の沈線が付した背節隆帯	にぶい黄褐色な粒少量、礫微量	勝版3b 新式
第28図18 図版36-18	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾し口脣部がやや直立する口縁部	地文は横糸 L 縦位 / 隆帯によって口縁部を囲す、上端隆帯1本、下端欠損 / 2本1対の隆帯による渦巻文施文 / 隆帯断面マボコ状	明濁 / 砂粒中量、礫微量	加曾利 E1b式
第28図19 図版36-19	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	地文は単節 RL 横位 / 口縁部隆帯で囲す、上端2本の隆帯、下端欠損 / 2本1対の隆帯を斜位に貼付 / 隆帯断面角状	にぶい濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E2式
第28図20 図版36-20	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	外積しながら内湾し口脣部が直立する口縁部	口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で囲す / 突起状の部分に沈線による渦巻文 / 隆帯断面マボコ状	黒濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E2式
第28図21 図版36-21	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外積する胴部	地文は単節 RL 縦位 / 2本1対の沈線が波状に重下	黒 / 砂粒少量、礫中量	加曾利 E2式
第28図22 図版36-22	深鉢	胴部 破片	厚0.8	ほぼ直立する胴部	地文は縦位条線文 / 押圧文を付した2本の隆帯を横位に貼付 / 隆帯断面マボコ状 / 隆帯上端には1本の単粒隆帯が削り、隆帯下端は押し付けて貼付	明濁 / 砂粒中量、礫少量	曾利1 式
第28図23 図版36-23	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	外積し内側に大きく肥厚する口縁部	平織竹管状工具の腹面による重畳文と思われる / 口縁部側の肥厚部分にも重畳文施文 / 104-23 と 105-19 は同一個体の可能性あり	明濁 / 砂粒・礫少量	曾利2 式
第28図24 図版36-24	浅鉢	口縁部一体 破片	厚1.1	内折する口縁部	沈線による楕円形等の文様 / 体部無文	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	勝版式 か

第14表 104号住居跡出土土器一覧2

発掘番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ / 幅 / 厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第28図25 図版36-25	土器片断	完形	4.2/3.6/1.1	24	楕円形 / 袂部は2ヶ所 / 両縁はほぼ磨耗 / 胴部片利用 / 平行沈線施文 / 平行沈線に沿う瓜形文	濁 / 砂粒・礫微量	勝版3式
第28図26 図版36-26	土器片断	完形	5.5/4.5/1.2	40.4	楕円形 / 袂部は2ヶ所 / 両縁は全面磨耗顕著 / 胴部片利用 / 単節 LR 施文	黒濁 / 砂粒中量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第28図27 図版36-27	土器片断	60%	[4.2]/4.6/1.2	27.9	方形か / 袂部1ヶ所残存 / 両縁はほぼ磨耗 / 胴部片利用 / 単節 LR 無文	明赤濁 / 砂粒中量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第28図28 図版36-28	土器片断	完形	4.3/3.5/1.1	23.3	方形 / 袂部は2ヶ所 / 両縁の磨耗は未発達 / 胴部片利用 / 無文	灰黄濁 / 砂粒少量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第28図29 図版36-29	土器片断	完形	3.1/4.0/1.2	21.5	楕円形 / 袂部は2ヶ所 / 両縁は一部磨耗 / 胴部片利用 / 無文	明濁 / 砂粒少量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第28図30 図版36-30	土器片断	50%	[5.1]/[6.1]/1.1	32.9	方形か / 袂部1ヶ所残存 / 両縁はほぼ磨耗 / 胴部片利用 / 無文	黒濁 / 砂粒中量、礫微量	中期中葉 ～後葉

第15表 104号住居跡出土土製品一覧

発掘番号 図版番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第28図31 図版37-31	楕形石器	黒曜石	15.7	8.5	5.3	0.5	上下に両側割離が認められる
第28図32 図版37-32	打製石斧	片状砂岩	63.3	39.8	15.9	54.1	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない / 表面の一部が赤色化しており、焼熱の可能性がある
第28図33 図版37-33	打製石斧	緑泥片岩	102.1	39.5	16.6	93.7	短冊形 / 表裏面に原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の稜上に局所的に潰れが僅かに認められる
第29図34 図版37-34	打製石斧	砂岩	105.6	40.9	23.4	112.9	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表裏面に原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、面状になっている / 右側縁の潰れはほとんど見られない
第29図35 図版37-35	打製石斧	砂岩	94.9	56.6	19.8	116.4	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない / 右側縁は中央部の稜上に潰れが認められる

第16表 104号住居跡出土石器一覧1

神宮番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第29図36 図版37-36	打製石斧	砂岩	93.2	54.5	15.8	110.8	撥形/刃部は折れて欠損している/表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる/左側縁の上部の稜上に潰れが認められる/右側縁は上部から中央部にかけての稜上に潰れが認められる
第29図37 図版37-37	打製石斧	緑泥片岩	71.5	34.3	10.6	33.1	平面形状は不明/体部のみ残存/表面の一部に原礫面が残存する/左側縁に敲打剥離が認められる/左側縁の潰れはほとんど見られない
第29図38 図版37-38	二次加工 剥片	黒曜石	18.6	21.7	5.7	1.6	主要剥離面側右側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第29図39 図版37-39	二次加工 剥片	黒曜石	13.4	13.2	1.6	0.2	背面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第29図40 図版37-40	磨石	砂岩	89.9	56.1	28.6	201.3	表裏面全面に磨痕
第29図41 図版37-41	石皿	緑泥片岩	226.8	161.6	41.4	1207.5	表面の使用面の消耗が激しく、中央付近が薄くなっている/表面に1ヶ所、裏面に7ヶ所凹み/裏面には少なくとも4ヶ所溝/表裏面の一部が赤色化しており、焼熱の可能性がある/炉内から出土
第29図42 図版37-42	扁平石皿	閃緑岩	131.3	49.7	51.0	482.8	表裏面ほぼ全面に平坦な使用面/炉内から出土
第29図43 図版37-43	砥石	緑泥片岩	169.3	57.1	23.0	271.8	表面に1ヶ所溝が認められる/溝の断面は逆「台形」に近い形状である

第16表 104号住居跡出土石器一覧2

105号住居跡

遺構(第30・31図)

[位置] (B・C-4・5) グリッド。

[検出状況] 212 Dを切り、5・6方に切られる。

[構造] 平面形:円形。主軸方位:N-43°-E。P5とP7の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模:長軸640cm/短軸618cm/深さ28~53cm。壁溝:2条ないし、一部では3条検出された。いずれも壁溝の中に壁柱穴を巡らせている。上幅20~43・9~25・8~12cm/下幅4~21・4~14・4~7cm/床面からの深さ2~14・3~32・5~7cm。壁:約70~87°で急斜に立ち上がる。床面:やや凹凸がある。直床である。主に中央部分と南側の壁近くに硬化面が点在している。炉:地床炉。炉内に石が数個出土している。石囲炉の可能性もある。長軸88cm/短軸87cm/床面からの深さ27cm。埋裏:検出されなかった。柱穴:17本検出した。壁溝が2条検出されていることと、ピットの規模・配置から、建替1回・拡張1回・建替1回程度を想定する。拡張前は、P12、P13、P14・15、P17を主柱穴とした4本柱建物で、P14・15の位置から、建替1回を想定する。拡張後の住居跡として、P1、P2~4、P5・6、P7、P8、P9・10を主柱穴とした、6本柱建物を想定する。P3とP4、P5とP6、P9とP10の位置から、建替1回を想定する。拡張前と拡張後の住居は、別の住居の可能性があり、重複と考えることもできるが、ここでは拡張前後の住居跡と捉える。

[覆土] 5層に分層できた。

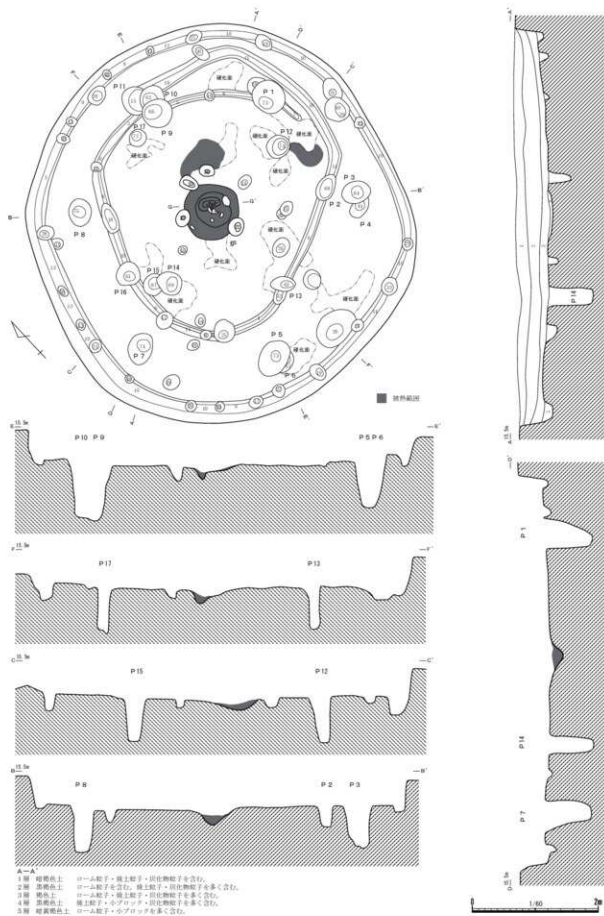
[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。

[時期] 中期後葉期(加曾利E1c式期)。

遺物(第32~37図、図版38~41、第17~19表)

[土器] (第32~34図・第35図19~24、図版38~40、第17表)

復元個体5点、破片資料19点を図示した。1は加曾利E式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、



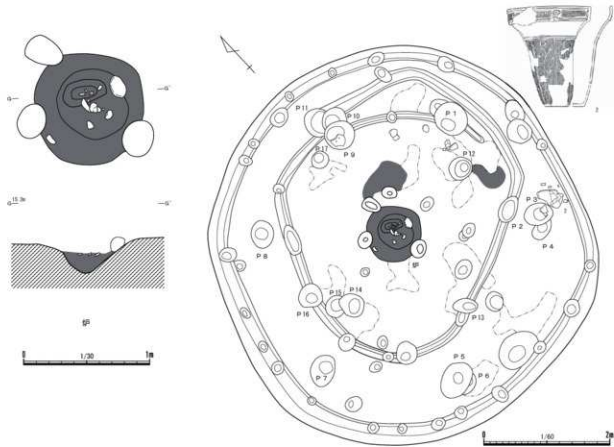
胴部の縄文を施文するが不明瞭である。2・3は加曾利E1c式の深鉢形土器である。2は口縁部区画に渦巻文を付し、胴部には隆帯が垂下する。3は胴部で、縄文を地文とし、隆帯による文様を施す。4は加曾利E2c式の深鉢形土器である。条線文を地文とし、口縁部には隆帯による楕円状の区画を施す。曾利式の影響が見られる。5は連弧文2段階の深鉢形土器である。沈線による連弧文を施す。6は阿玉台式、7～9は勝坂式、10～18は加曾利E式、19～22は曾利式、23・24は連弧文土器の深鉢形土器である。

【土製品】(第35図25～30、図版40、第18表)

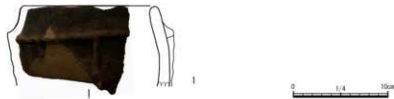
6点を図示した。25～30は土器片錘である。

【石器】(第35図31～40・第36・37図、図版40・41、第19表)

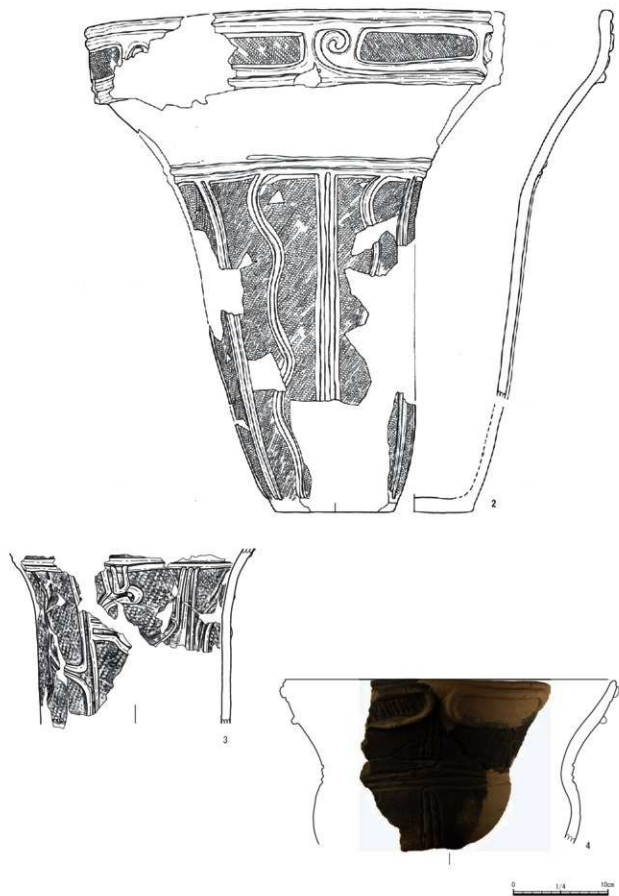
24点を図示した。31～34は石鏃である。35～45は打製石斧である。46～49は二次加工剥片である。50は不規則剥離のある剥片である。51は磨+凹+敲石である。52・53は石皿である。54は砥石である。



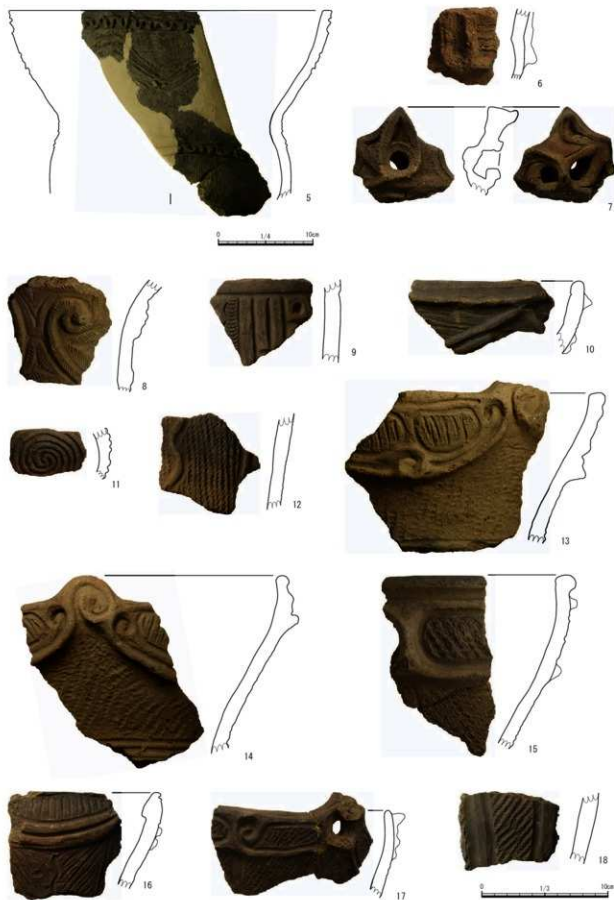
第31図 105号住居跡炉・遺物出土状態(1/30・1/60)



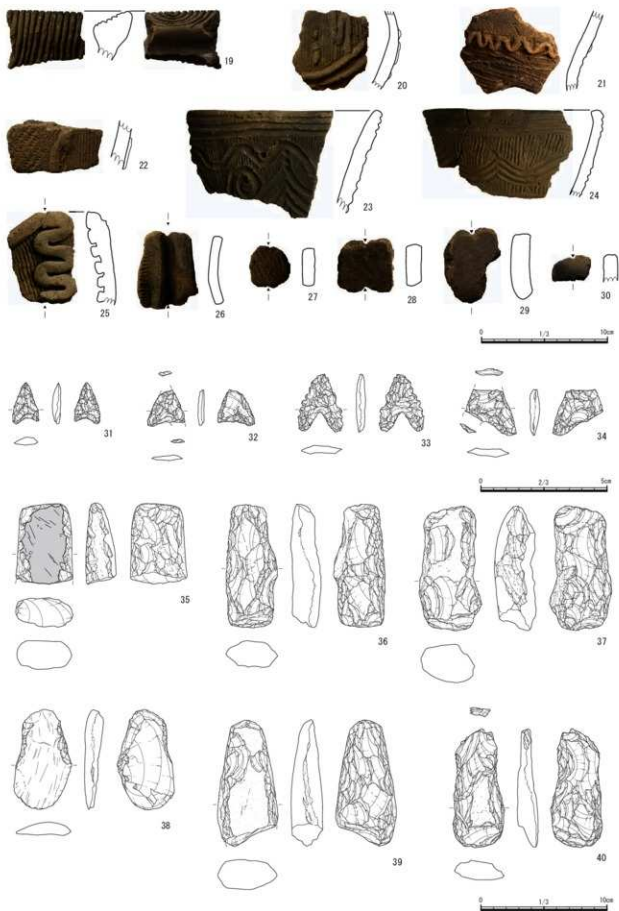
第32図 105号住居跡出土物1(1/4)



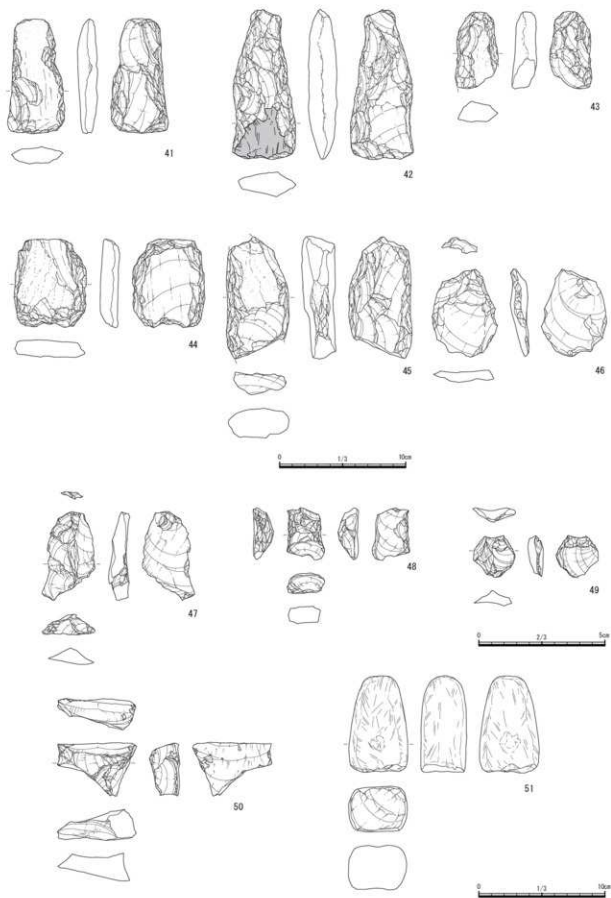
第33図 105号住居跡出土遺物2(1/4)



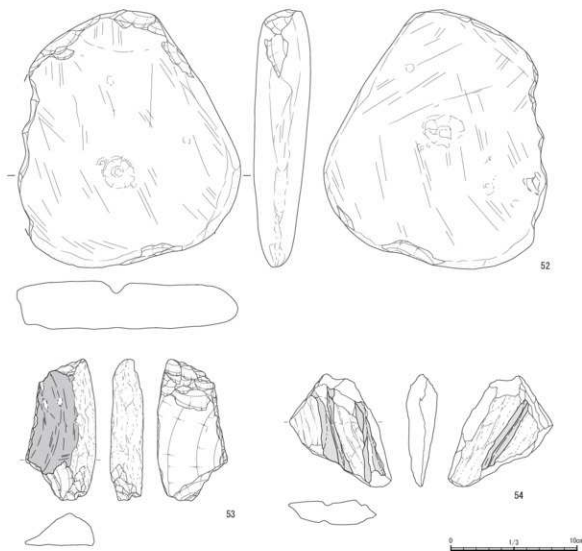
第34図 105号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)



第35図 105号住居跡出土遺物4 (1/3・2/3)



第36図 105号住居跡出土遺物5 (1/3・2/3)



第37図 105号住居跡出土遺物6(1/3)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第32図1 図版38-1	深鉢	口縁部～ 胴部 30%	高 [8.5] 口 (14.0) 厚 1.2	円筒形か/やや内湾 しながら立ち上がる 口縁部～胴部	地文はLR縦位か、胴部に施文されるが非常に不明瞭/口縁部無文/横位1本の隆帯で口縁部を画す/横位隆帯から3本の隆帯が直状に垂下/1ヶ所隆帯間に沈線が垂下/隆帯断面カマボコ状、隆帯断面で付けて貼付	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E式
第33図2 図版38-2	深鉢	口縁部～ 底部 70%	高 53.0 口 44.0 底 12.4 厚 1.0	キャリバー形/外傾 しながら立ち上がる 胴部/外反して広がる 頸部/やや内湾し 立ち上がる口縁部/ 平坦な底部	地文は単節RL、口縁部区画内横位施文、胴部縦位施文/口縁部区画、下端1本の隆帯で画す/区画内は沈線による長方形区画に縄文充填、下位には横位沈線を配し左端は縄文を呈する(縄文は4単位残存、元は6単位か)/頸部無文/頸部無文と胴部を横走る2本1対の隆帯で画す/胴部には2本1対の直状の隆帯6単位と1本の波状隆帯5単位が交互に垂下するが1ヶ所は直状の隆帯が並ぶ/隆帯断面形状/口縁部区画の文様、隆帯断面形状等はやや新しい印象を受ける/外面胴部に黒色の付着物あり	橙～暗褐/ 砂粒中量、 礫少量	加曾利 E1c式
第33図3 図版38-3	深鉢	胴部上位～ 下位 50%	高 [18.5] 口 (18.5) 厚 1.0	キャリバー形か/上 位は外反し広がり、 下位はほぼ直立する 胴部	地文は単節RL縦位/上部に2本の隆帯が横位に走る/2本1対の直状の隆帯が垂下(4単位残存)、隆帯間に2本1対の隆帯による縄文、1本の隆帯を波状に垂下等の文様を貼付/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E1c式
第33図4 図版39-4	深鉢	口縁部～ 胴部中位 30%	高 [17.2] 口 (34.8) 厚 1.2	中位で括れ下位で内 湾する胴部/外傾す る口縁部	地文は縦位条線文/1本の隆帯による楕円状の区画、区画内斜位沈線を充填/胴部括れ部に3本の沈線が走る/口縁部区画間に1本の垂下する沈線をU字状に囲った文様施文、下部には反転した文様施文/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒・ 礫中量	加曾利 E2c式

第17表 105号住居跡出土土器一覽1

縄文番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	彫形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第34図5 図版39-5	深鉢	口縁部～ 胴部中央 20%	高19.2 口34.0 厚0.9	上位が括れ下位が内 湾し広がる胴部/や や内湾しながら外 積し広がる口縁部	地文は縦糸線文/口縁部と括れ部のやや下に米粒状の刺 突を交互にした蛇行文状の文様/3本1対の沈線による やや波状に近い連弧文	灰黄褐/砂 粒少量、礫 ・礫少量	連弧文 2b段飾
第34図6 図版39-6	深鉢	口縁部付近 破片	厚0.9	下位は内湾し上位は 外積する口縁部付近	隆帯をV字状に貼付、弧状の部分から左右に伸びる/U字 状隆帯の左右に平行沈線を波状に複数施文/U字状の隆帯 内側に角押文が1列沿う/隆帯断面三角状、隆帯幅まで付 けて貼付	明赤褐/砂 粒微量、礫 中量、書母 多量	阿玉台 Ⅱ式
第34図7 図版39-7	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	先端がやや内湾する 口縁部	口縁部に中空の把手貼付/外面孔1つ、内面孔2つ/押圧 文を付した隆帯で加飾/一部の隆帯幅短縮角押文施文/内 面の縁の一部に押圧文施文、隆帯断面台形状	暗褐/砂粒 中量、礫微 量	勝飯1 ～2式
第34図8 図版39-8	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反する胴部	押圧文を付した隆帯による渦巻文、渦巻文の中心は突起状 /三文文の周囲に押圧文充填、隆帯断面台形状、隆帯幅1 本の単沈線が沿う	褐/砂粒・ 礫微量	勝飯3a 式
第34図9 図版39-9	深鉢	胴部 破片	厚1.2	ほぼ直立する胴部	単沈線による区画/縦位沈線に沿って華文文(温灰マーク 文)が沿う/中心に円形の窪みのある方形の文様	暗褐/砂粒 中量、礫微 量	勝飯3a 式
第34図10 図版39-10	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部	地文は懸糸L横位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下 端欠損/2本1対の隆帯による文様/隆帯断面カマゴコ状・ 三角状	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1a式
第34図11 図版39-11	深鉢	口縁部付近 破片	厚1.0	内湾する口縁部付近	沈線による渦巻文	褐/小礫少 量、礫微量	加曾利 E1b式
第34図12 図版39-12	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外積する胴部	地文は懸糸L横位/1本の隆帯が波状に垂下/2本の隆帯 が直状に垂下/隆帯断面カマゴコ状	明褐～黒褐 /砂粒少量、 礫微量	加曾利 E1式
第34図13 図版39-13	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積しながら広がる 胴部/やや内湾し外 積する口縁部	地文は単節RL縦位/隆帯と先端に渦巻文を持つ沈線による 口縁部区画、区画内縦位沈線を充填した楕円区画を複数 施文/口縁部区画の境点には隆帯と沈線による渦巻文施文 /胴部上位に横位沈線施文/105J-13、14は同一個体/ピット 内から出土	明黄褐/砂 粒・礫中量	加曾利 E2c式
第34図14 図版39-14	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積しながら広がる 胴部/やや内湾し外 積する口縁部	地文は単節RL縦位/隆帯と先端に渦巻文を持つ沈線による 口縁部区画、区画内縦位沈線を充填した楕円区画施文 /口縁部区画の境点には隆帯と沈線による渦巻文施文 /105J-13、14は同一個体/ピット内から出土	明黄褐/砂 粒・礫中量	加曾利 E2c式
第34図15 図版39-15	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積しながら広がる 胴部/内湾する口縁 部	地文は複節LR縦位/隆帯による口縁部区画/2本1対の 直状の沈線が垂下/沈線間煮酒/隆帯断面台形状	明黄褐/砂 粒・礫少量	加曾利 E3a式
第34図16 図版39-16	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外積する胴部/やや 内湾する口縁部/口 唇部内側に肥厚	地文は沈線、口縁部区画内縦位施文、胴部矢羽根状施文/ 隆帯による口縁部区画/胴部に1本の沈線が波状に垂下、 これを中心に地文の沈線を矢羽根状に施文/口縁部区画の 境点と思われる部分から2本以上の沈線が直状に垂下/ 隆帯断面台形状	極暗赤褐/ 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E3a式
第34図17 図版39-17	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外積する胴部/外積 しながら内湾する口 縁部	地文は単節RL縦位施文/口縁部に横位把手の前縁あり、 円形の孔あり/口唇部に沈線施文、突起上には渦巻文とな る/隆帯による口縁部区画、区画端に沈線による渦巻文 /横位把手部分、口縁部区画渦巻文部分から2本1対の直状 の沈線が垂下/沈線間煮酒/隆帯断面台形状～カマゴコ状	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E3b式
第34図18 図版39-18	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外積する胴部	地文は単節LR縦位/2本1対の直状の沈線が垂下/沈線 間煮酒	暗灰黄/砂 粒・礫微量	加曾利 E3式
第35図19 図版40-19	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	外積し内側に大きく 肥厚する口縁部	平截竹管状工場の腹面による重弧文と思われる/口縁内 側の肥厚部分にも重弧文施文/104-23、105-19は同一個 体の可能性あり	暗褐/砂粒・ 礫少量	曾利Ⅱ 式
第35図20 図版40-20	深鉢	胴部 破片	厚0.9	内湾する胴部	地文は縦位線文/2本の隆帯を弧状に貼付/短状の隆帯を 短く直状、蛇行するように貼付/隆帯断面カマゴコ状、2 本の隆帯は隆帯幅まで付け、短状の隆帯は押し付けて貼付	褐～黒褐/ 砂粒・礫少 量	曾利Ⅱ 式
第35図21 図版40-21	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外積しながら広がる 胴部	短状の隆帯を横位波状に貼付/隆帯上部無文/隆帯下部横 位単沈線充填/隆帯断面カマゴコ状、押し付けて貼付	褐/砂粒・ 礫少量	曾利Ⅱ 式か
第35図22 図版40-22	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外積する胴部	1本の隆帯が波状に垂下/隆帯の左右で地文が異なる、右 側縦位線文縦位施文、左側単節RL縦位施文/横位地文には 左端に縦位沈線が見られる/隆帯断面カマゴコ状/地文・ 隆帯貼付/下側の破断面に黒色の付着物あり	明褐/砂粒 微量、礫中 量	曾利Ⅱ 式か

第17表 105号住居跡出土土器一覧2

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第35図23 図版40-23	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.2	外積する胴部/外積 する口縁部	地文は縦位条線文/口縁部に3本の沈線が巡る/1本の沈線による横位波状文、渦巻文/円形の押文が縦位に3つ、 単趾で1つ/3本の沈線による連弧文	灰黄褐色/砂 粒微量、礫 少量、磨の 粒少量	連弧文 2B段附 着
第35図24 図版40-24	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	外積しながら上部が やや内湾する口縁部	地文は懸糸L縦位/口縁部に3本の沈線が巡る/3本の沈 線による連弧文、沈線間磨消	にぶい濁/ 砂粒、礫微 量	連弧文 3A段附 着

第17表 105号住居跡出土土器一覽3

検出番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第35図25 図版40-25	土器 片断	完形	7.5/5.4/1.1	76	方形/挾部は2ヶ所/両縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/地 文は懸糸L縦位、口縁部に條文/波状口縁/口縁に沿って隆帯 貼付/波頂部から隆帯が走行して垂下/隆帯断面角状、押し付 けて貼付	にぶい黄褐色/砂 粒微量、礫少 量	磨板3b 新式
第35図26 図版40-26	土器 片断	95%	6.0/4.7/1.0	44.9	方形/挾部は2ヶ所/両縁は一部磨耗/口縁部片利用/地文は 懸糸L縦位、隆帯下部に條文/横位1本の隆帯貼付/隆帯断面 方マゴコ状、底部磨などで付けて貼付	暗褐色/砂粒少 量、礫微量	磨板3 ～加曾利 E1式
第35図27 図版40-27	土器 片断	完形	3.2/3.2/1.0	13.8	方形/挾部は2ヶ所/両縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は単 筋L	暗濁/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第35図28 図版40-28	土器 片断	95%	4.1/4.3/1.2	31.4	方形/挾部は2ヶ所/両縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	暗濁/砂粒、礫 少量	中期中葉 ～後葉
第35図29 図版40-29	土器 片断	70%	5.7/4.4/1.4	40.8	楕円形/挾部は1ヶ所残存/両縁の磨耗は未発達/口縁部片利 用/無文	濁灰/砂粒少量、 礫中量	中期中葉 ～後葉
第35図30 図版40-30	土器 片断	30%	[2.5]/4.0/1.0	14.9	方形分/挾部は1ヶ所残存/両縁の磨耗は未発達/胴部片利 用/無文	にぶい黄褐色～黒 /砂粒少量、礫 微量	中期中葉 ～後葉

第18表 105号住居跡出土土製品一覽

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第35図31 図版40-31	石鏡	黒曜石	16.6	10.8	3.6	0.5	凹基無茎/側縁は直線状/挟りは浅く弧状
第35図32 図版40-32	石鏡	黒曜石	13.3	15.0	2.6	0.5	凹基無茎/側縁は直線状/挟りは浅く弧状/先端部と右腰部欠 損
第35図33 図版40-33	石鏡	チャート	23.0	18.4	3.8	1.4	凹基無茎/側縁は直線状/側縁縁/挟りは深く直線状/先端部 一部欠損
第35図34 図版40-34	石鏡	黒曜石	18.2	20.8	3.9	1.1	凹基無茎/側縁は直線状/挟りは深く弧状/先端部と左腰部欠 損
第35図35 図版40-35	打製石斧	閃緑岩	65.1	45.5	24.1	109.6	短冊形/磨製石斧の転用/刃部は折れて欠損している/両側縁 に敲打跡が認められる/両側縁のほぼ全面の稜上に濡れが認 められ、面状になっている
第35図36 図版40-36	打製石斧	片状砂岩	99.6	42.2	23.8	118.3	短冊形/両側縁に敲打跡が認められる/左側縁の下部の稜上 に濡れが認められ、一部は面状になっている/右側縁の濡れは ほとんど見られない
第35図37 図版40-37	打製石斧	頁岩	99.2	50.0	32.9	203.1	短冊形/刃部は折れて欠損している/表面の一部に原礫面が残 存し、両側縁に敲打跡が認められる/左側縁のほぼ全面の稜 上に濡れが認められ、中央部が面状になっている/右側縁もほ ぼ全面の稜上に濡れが認められ、面状になっている
第35図38 図版40-38	打製石斧	頁岩	78.1	45.3	14.2	48.8	短冊形/基部は一部折れて欠損している/表面は原礫面が広く 残存し、両側縁に敲打跡が認められる/両側縁の中央部の稜 上に濡れが認められる
第35図39 図版40-39	打製石斧	砂岩	100.2	48.4	25.4	154.5	楕円形/刃部は折れて欠損している/表面は原礫面が広く残存し、 両側縁に敲打跡が認められる/両側縁のほぼ全面の稜上に濡 れが認められ、中央部が面状になっている
第35図40 図版40-40	打製石斧	緑色片岩	94.9	42.0	15.6	74.3	楕円形/基部は一部折れて欠損している/表面の刃部は磨減して いる/両側縁に敲打跡が認められる/左側縁の濡れはほとんど 見られない/右側縁は中央部の稜上に局所的に濡れが僅かに 認められる
第36図41 図版40-41	打製石斧	頁岩	91.7	45.9	16.2	82.0	楕円形/表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打跡が認め られる/左側縁の上部から中央部にかけての稜上に局所的に濡 れが僅かに認められる/右側縁は中央部の稜上に濡れが僅かに 認められる

第19表 105号住居跡出土石器一覽1

神図番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第36図42 図版41-42	打製石斧	砂岩	118.4	49.8	23.1	151.4	撥形 / 基部は一部折れて欠損している / 表面刃部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる / 右側縁は上部と下部の稜上に局部的に潰れが僅かに認められる
第36図43 図版41-43	打製石斧	砂岩	62.2	34.4	18.4	45.1	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第36図44 図版41-44	打製石斧	絹雲母片岩	70.4	56.6	14.7	91.8	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第36図45 図版41-45	打製石斧	ホルンフェルス	96.1	50.5	26.0	179.9	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、面状になっている
第36図46 図版41-46	二次加工 削片	チャート	35.1	25.8	7.1	6.6	背面側右側縁に連続的な二次的剥離が認められる
第36図47 図版41-47	二次加工 削片	黒曜石	36.3	22.1	8.2	3.9	背面側左端に不連続な二次的剥離が認められる
第36図48 図版41-48	二次加工 削片	黒曜石	19.9	14.9	8.3	2.7	表面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第36図49 図版41-49	二次加工 削片	黒曜石	16.9	16.9	6.1	1.2	主要剥離面側打点付近に不連続な二次的剥離が認められる
第36図50 図版41-50	不規則剥離のある 削片	黒曜石	21.0	31.2	11.7	5.5	主要剥離面側両側縁に不規則剥離が認められる
第36図51 図版41-51	第十四 敲石	閃緑岩	77.4	47.7	35.7	255.5	表裏面全面に磨痕 / 敲打による浅い凹みが表裏面に1ヶ所ずつみられ、磨痕の前段階 / 細かい敲打痕が両縁にみられる
第37図52 図版41-52	石皿	安山岩	207.4	177.3	42.6	2428.5	扁平石皿 / 表裏面ほぼ全面に平坦な使用面 / 表面に1ヶ所、裏面に1ヶ所凹み
第37図53 図版41-53	石皿	緑泥片岩	113.4	55.8	26.3	198.5	表面の使用面の消耗が激しく、中央付近が薄くなっている
第37図54 図版41-54	敲石	緑泥片岩	96.4	70.3	23.2	143.7	表面に4ヶ所、裏面に1ヶ所溝が認められる / 溝の断面は「V」字に近い形状である

第19表 105号住居跡出土石器一覧2

106号住居跡

遺構 (第38・39図)

[位置] (B-4・5) グリッド。

[検出状況] 12Mに切られる。

[構造] 平面形：ほぼ円形。主軸方位：N-S。P9とP13、P1とP19のそれぞれの中間を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸残存長590cm / 短軸510cm / 深さ27～45cm。壁溝：1条検出されたが、北側から東側にかけては確認できなかった。上幅12～30cm / 下幅3～17cm / 床面からの深さ1～7cm。壁：約48°～69°でやや緩やかに立ち上がる。床面：やや凹凸がある。直床である。炉：中央に埋裏炉、その北東に地床炉の2基がある。長軸58・47cm / 短軸56・45cm / 床面からの深さ18・3cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：22本検出した。P1、P9、P14・15、P19を主柱穴ととらえ、4本柱建物を想定するが、P2、P3、P5、P12も主柱穴の可能性があり、炉が2基検出されたことと合わせ、拡張ないし建替の可能性もある。

[覆土] 6層に分層できた。

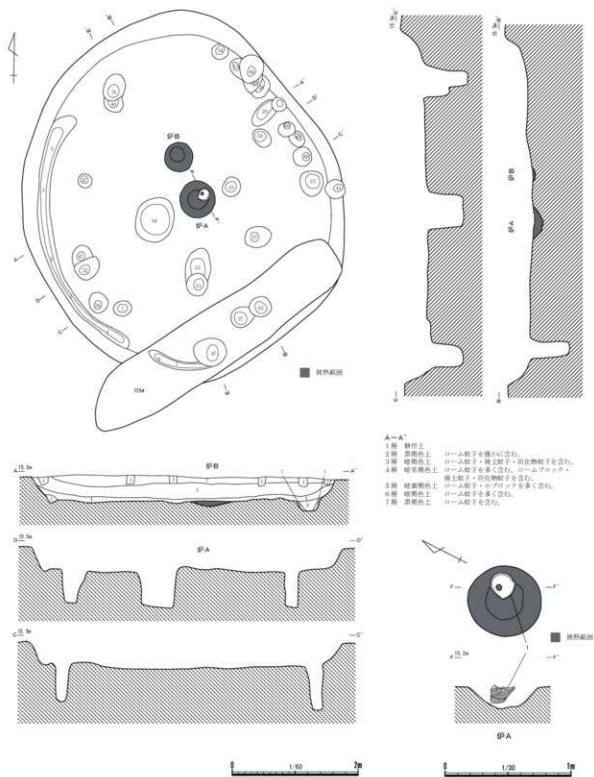
[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。炉体土器(第40図1)が出土している。

[時期] 中期後葉期(連弧文3a段階期)。

遺物 (第40～44図、図版42～45-1、第20～22表)

[土器] (第40図・第41図3～33、図版42・43、第20表)

復元個体2点、破片資料21点を図示した。1は炉体土器で連弧文3a段階の深鉢形土器である。沈



第38図 106号住居跡・炉 (1/60・1/30)

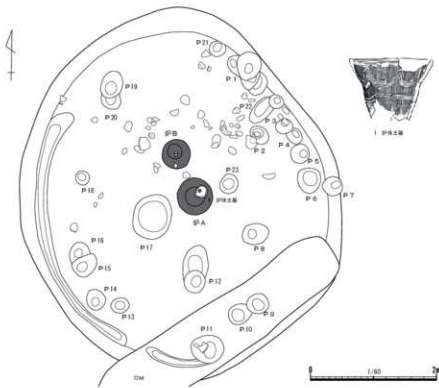
線による連弧文はやや形が崩れている。2は加曾利E3a式の深鉢形土器である。口縁部区画内には沈線による渦巻文、円形刺突文を施文する。3・4は阿玉台式、5～7は勝坂式、8は勝坂3式～加曾利E式、9～17は加曾利E式、18～20は曾利式、21・22は連弧文土器の深鉢形土器である。23は勝坂式の浅鉢形土器である。

〔土製品〕(第41図24～27、図版43、第21表)

4点を図示した。24～27は土器片鏟である。

〔石器〕(第42～44図、図版43・44・45-1、第22表)

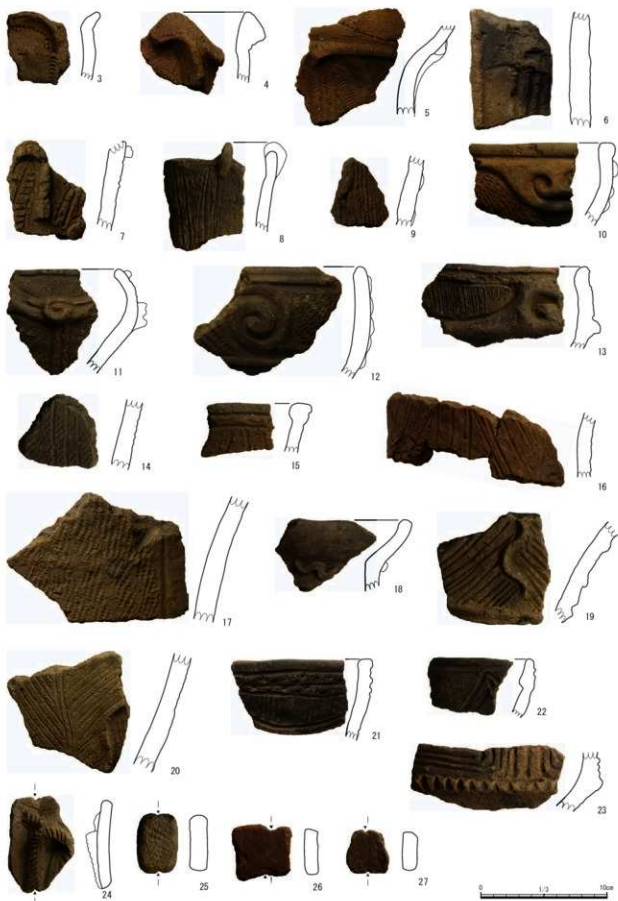
17点を図示した。28は石鏃である。29は楔形石器である。30～35は打製石斧である。36・37は二次加工剥片である。38は磨石である。39は磨+凹+蔽石である。40はスタンプ形石器である。41～43は石皿である。44は砥石である。



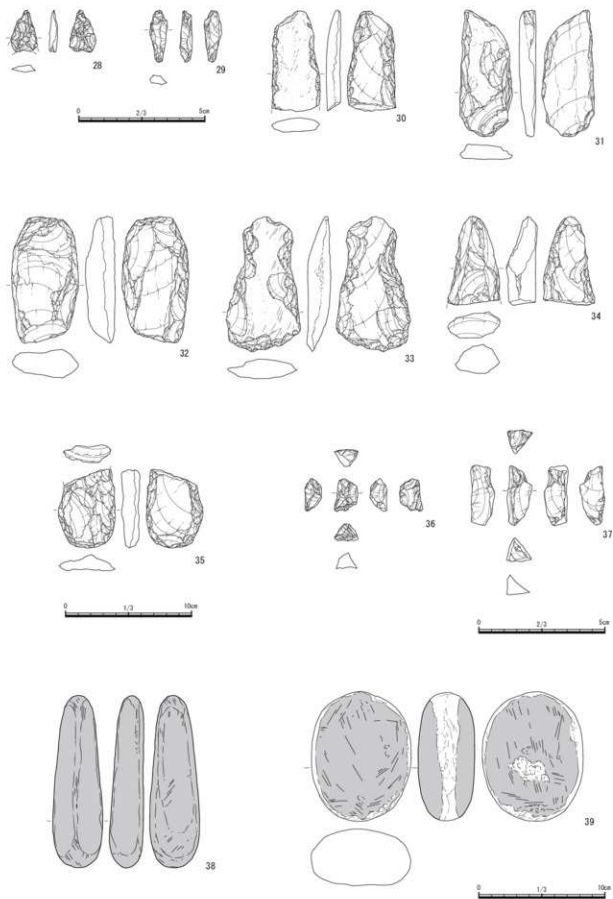
第39図 106号住居跡遺物出土状態(1/60)



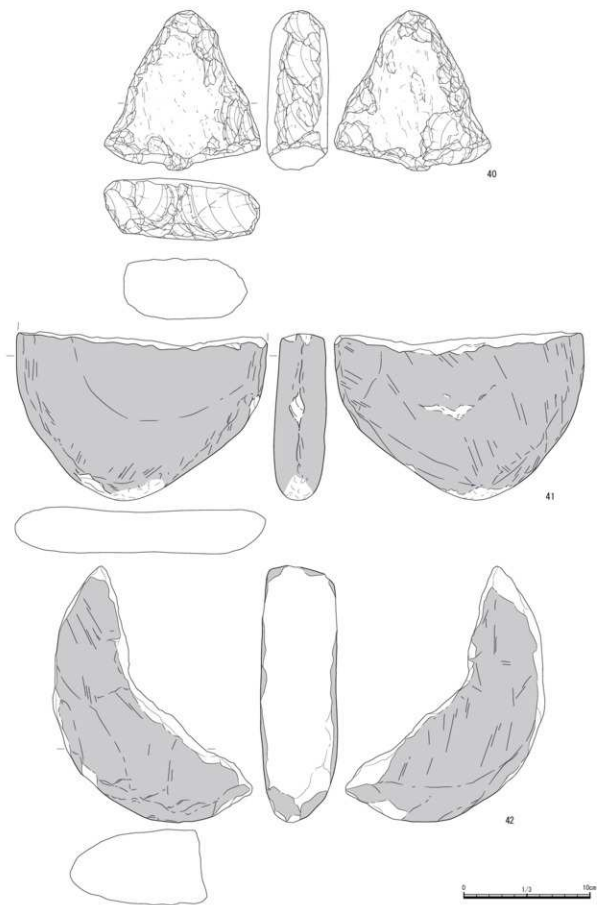
第40図 106号住居跡出土遺物1(1/4・1/3)



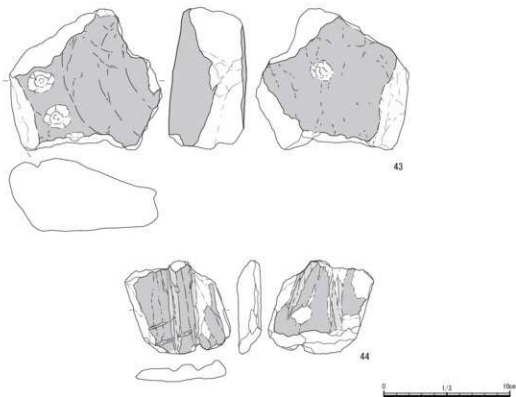
第41図 106号住居跡出土遺物2 (1/3)



第42図 106号住居跡出土遺物3 (1/3・2/3)



第43図 106号住居跡出土遺物4（1/3）



第44図 106号住居跡出土遺物5(1/3)

縄文番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第40図1 図版42-1	深鉢	口縁部～ 胴部下位 60%	高116.2 口22.0 厚1.0	外傾して広がりながら立ち上がり上部がやや外傾する胴部/外傾しながら広がる口縁部	地文は縦位条線文、1単位が幅1.5cm程10条見られる部分あり/口縁部上端、胴部括弧部に2本1対の沈線が横走/3本1対の沈線による連弧文/沈線間地文が一部消される/伊体土器	赤褐色/砂粒・礫中量	連弧文 3a段階
第40図2 図版42-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位 25%	高119.2 口28.0 厚1.3	外傾して広がる胴部/外傾し口唇部がやや内湾する口縁部	地文は1段3条LR縦位/隆帯による口縁部区画/区画内沈線による渦巻文・内形刺突文・縄文施文/胴部には1本の沈線が直状に垂下、/2本1対の直状の沈線が垂下し沈線間無文が見られる、隆帯断面コマゴコ状/外面の剥落が多く見られる	赤褐色/砂粒・礫少量、礫微量、粗の粒少量	加曾利 E3a式
第41図3 図版42-3	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部、先端は外傾	口縁部に平円状の隆帯を突起状に貼付/先端に丸みを帯びた工具による角押文が1列突起に沿う、突起の先端からは縦位に垂下	明褐色/砂粒・礫少量、雲母中量	阿玉台 1a式
第41図4 図版42-4	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	ほぼ直立する口縁部	破片口縁の先端/縁に背の高い隆帯を貼付、1本は垂下/隆帯に平行沈線が沿う/縁に貼付した隆帯上に単形丸施文、区画内にも僅かに直線が見られる/隆帯断面背の高い三角状/床面から出土	明褐色/砂粒微量・礫中量、雲母多量	阿玉台 IV式
第41図5 図版42-5	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外反する胴部/内湾する口縁部	口縁部無文/押印文を付した隆帯によって区画/区画内三叉文・周囲に押印文充填/隆帯断面台形状、隆帯縁1本の単沈線が沿う、一部で付けて貼付/ピット内から出土	明褐色/砂粒・礫少量	勝坂3a 式
第41図6 図版42-6	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	ほぼ直立する胴部	隆帯を直状に貼付/隆帯による楕円状の文様か(表面剥落のため不明瞭)/沈線による文様/隆帯断面台形状、隆帯縁1本の単沈線が沿う	褐色/黒褐色/砂粒・礫中量	勝坂3b 式
第41図7 図版42-7	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外傾する胴部	押印文を付した隆帯を波状に貼付/隆帯間に押印文・沈線を施文/隆帯断面台形状/隆帯縁まで付け一部1本の単沈線が沿う	褐色/砂粒・礫微量	勝坂3 式
第41図8 図版42-8	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部/やや外傾する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部に突起あり/突起下位に半截竹筒状工具の腹面による直状の平行沈線2本施文	暗褐色/砂粒・礫少量	勝坂3b 新・加曾利 E1a式

第20表 106号住居跡出土土器一覧1

第3章 検出された遺構と遺物

埋蔵番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第41図9 図版42-9	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外積する胴部	地文は隠糸L縦文/1本の隆帯が波状に垂下/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少量、礫中量	加曾利E1式
第41図10 図版42-10	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	地文は単節LR横文/口縁部は隆帯によって湾す、上端1本、下端欠損/隆帯と沈線による渦巻文、渦巻文からは2本の隆帯が伸びる/隆帯断面カマボコ状/床面から出土	明褐/砂粒・礫少量	加曾利E1c式
第41図11 図版42-11	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外積しながら広がる 胴部/内湾する口縁部	地文は単節RL縦文/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で湾す/下端の隆帯上には沈線を付し渦巻文状部分は突起状に成形/渦巻文から2本1対の直線の隆帯が垂下/頸部無文飾を持たないが、隆帯が垂下し隆帯の断面は角状を呈す	暗褐/砂粒・礫少量	加曾利E1～2式
第41図12 図版42-12	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	内湾する口縁部	地文は単節RL横文/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で湾す/区内沈線と隆帯による渦巻文施文/隆帯断面角状・カマボコ状	暗褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E2a～b式
第41図13 図版42-13	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	内湾する口縁部	地文は縦文条線文/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で湾す/沈線による渦巻文/隆帯断面角状～カマボコ状	暗褐/砂粒微量、礫中量	加曾利E2c式
第41図14 図版42-14	深鉢	胴部 破片	厚1.3	外積する胴部	地文は単節RL縦文/3本1対の沈線が直状に垂下	にぶい黄褐/砂粒微量、礫少量、雲母微量	加曾利E2式
第41図15 図版42-15	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや外積する口縁部/ 口唇部は内側に肥厚	口縁部に2本の沈線が通る/縦文、斜位の沈線施文/曾利式の影響/106-15と106-16は同一個体	明褐/砂粒・礫少量/粗粒の粒多量	加曾利E3b式
第41図16 図版42-16	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外反して立ち上 がる胴部	3本1対の沈線が直状に垂下/沈線間を斜位沈線が充填/曾利式の影響/106-15と106-16は同一個体	明褐/砂粒・礫少量/粗粒の粒多量	加曾利E3b式
第41図17 図版42-17	深鉢	胴部 破片	厚1.4	外反する胴部	地文は単節RL縦文/1本の沈線が直状に垂下、沈線右側は横文磨消	明褐/砂粒微量、礫少量	加曾利E3式
第41図18 図版42-18	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚1.0	括れる胴部/やや内湾 しながら外積する口縁部/ 口唇部内側に肥厚	地文は単節RL縦文/口縁部無文/頸部に1本の紐状の隆帯が波状に通る/隆帯断面カマボコ状、押し付けて貼付	暗褐/砂粒少量、礫微量	曾利II式
第41図19 図版42-19	深鉢	口縁部付 近 破片	厚1.2	外積する口縁部付近	隆帯が横位に通る/1本の隆帯が波状に垂下/隆帯の裏面に沈線充填/波状の隆帯貼付～沈線充填/隆帯断面カマボコ状	黄褐/砂粒・礫微量	曾利III式
第41図20 図版42-20	深鉢	胴部 破片	厚1.3	外積する胴部	1本の隆帯と平行沈線が波状に垂下/隆帯、沈線間を斜位の沈線が充填、羽形根状/隆帯断面三角状/波状の隆帯と沈線施文～斜位の沈線充填/破断面に黒色の付着物あり	にぶい黄褐/砂粒・礫微量	曾利III式
第41図21 図版43-21	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	やや内湾しながら外積 する口縁部	地文は隠糸L縦文/口縁部に3本の沈線が通る・沈線間に半截竹管状工具の先端を用いた円形刺突文を交互に施文/2本の沈線による連弧文	黒褐/砂粒・礫微量	連弧文2b段階
第41図22 図版43-22	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	外積する口縁部/先端を 内側に折り返し内面に肥厚	地文は縦文条線文、口縁部に施文/口縁部に1本の沈線が通る/2本1対の沈線による連弧文	黒褐/砂粒少量、礫中量	連弧文2b段階
第41図23 図版43-23	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.2	内湾する口縁部～体部	胴折部に押圧文施文/沈線による文様/体部無文/表面に剥落が多い	橙～暗褐/砂粒・礫中量	唐坂3b式

第20表 106号住居跡出土土器一覽2

埋蔵番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第41図24 図版43-24	土器片鏝	完形	7.5/5.2/0.9	55.4	不整形/袂部は2ヶ所/肩縁は一部磨耗/胴部片利用/押圧文を付した隆帯による区画、隆帯筋1本の単沈線が始り	にぶい黄橙/砂粒中量、礫微量	唐坂3b式
第41図25 図版43-25	土器片鏝	完形	4.8/3.3/1.3	30.2	方形/袂部は2ヶ所/肩縁は顕著に磨耗/胴部片利用/地文は単節LR	にぶい黄橙/砂粒多量、礫微量	中期中葉～後葉
第41図26 図版43-26	土器片鏝	完形	4.3/4.7/1.1	29.7	方形/袂部は2ヶ所、上部の袂部は不明瞭、欠けたものか/肩縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	赤褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉
第41図27 図版43-27	土器片鏝	完形	3.5/3.4/1.1	18.5	楕円形か/袂部は2ヶ所/肩縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	暗褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉

第21表 106号住居跡出土土製品一覽

神岡番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 42 図 28 図版 43-28	石鏡	黒曜石	16.8	10.8	3.4	0.5	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 挟りは弧状 / 両側部欠損
第 42 図 29 図版 43-29	楔形石器	黒曜石	20.7	7.0	5.1	0.7	上下に両極距離が認められる
第 42 図 30 図版 43-30	打製石斧	砂岩	80.6	38.9	11.3	51.3	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 42 図 31 図版 43-31	打製石斧	緑泥片岩	100.1	42.1	13.6	79.3	短冊形 / 刃部は一部折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の下部の稜上に潰れが認められる / 右側縁は潰れはほとんど見られない
第 42 図 32 図版 43-32	打製石斧	緑泥片岩	100.7	53.3	22.9	173.6	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 42 図 33 図版 43-33	打製石斧	砂岩	108.3	59.6	19.0	122.9	楕円形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第 42 図 34 図版 43-34	打製石斧	ホルン フェルス	71.8	42.2	23.2	76.4	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の稜上に扇形的に潰れが認められる
第 42 図 35 図版 43-35	打製石斧	砂岩	61.7	45.0	14.5	46.0	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 42 図 36 図版 43-36	二次加工 削片	黒曜石	13.6	9.0	6.8	0.8	表面側末端に不連続な二次的剥離が認められる
第 42 図 37 図版 43-37	二次加工 削片	黒曜石	23.1	10.9	8.1	1.9	背面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第 42 図 38 図版 43-38	磨石	安山岩	135.1	40.0	27.4	208.3	裏面に磨痕
第 42 図 39 図版 43-39	磨石+	閃緑岩	102.1	79.8	46.2	592.4	表裏面全面に磨痕 / 敲打による浅い凹みに裏面に 1ヶ所みられ、磨痕の後段階 / 細かい敲打痕が両縁にみられる
第 43 図 40 図版 44-40	スタンプ 形石器	砂岩	123.2	122.7	46.1	956.4	分割した礫を素材としており、作業面である前面およびその周辺には削片剥離が認められる / 同じく両側縁も削片剥離によって調整されている
第 43 図 41 図版 44-41	石皿	閃緑岩	129.4	198.9	37.6	1682.3	扁平石皿 / 表裏面ほぼ全面に平坦な使用面
第 43 図 42 図版 44-42	石皿	閃緑岩	203.9	158.7	61.1	1774.4	扁平石皿 / 表裏面ほぼ全面に平坦な使用面
第 44 図 43 図版 44-43	石皿	安山岩	112.5	126.3	60.1	975.0	表面の使用面の消耗が激しく、中央付近が薄くなっている / 裏面に 2ヶ所、裏面に 1ヶ所凹み / 裏面の一部がすずしに覆われており、加熱の可能性はある
第 44 図 44 図版 45-1-44	灰石	緑泥片岩	74.2	75.1	16.7	133.8	表面に 4ヶ所、裏面に複数ヶ所溝が認められる / 溝の多くは深く、断面は「V」字に近い形状である

第 22 表 106 号住居跡出土石器一覧

107 号住居跡

遺 構 (第 45・46 図)

[位 置] (B・C-3) グリッド。

[検出状況] 108 J を切り、104 J・4 方に切られる。

[構 造] 平面形: 円形を呈すと思われる。主軸方位: N-6°-W。P3 と P5 の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模: 長軸残存長 520cm / 短軸残存長 510cm / 深さ 34 ~ 53cm。壁満: 検出されなかった。壁: 約 52 ~ 69° でやや緩やかに立ち上がる。床面: やや凹凸がある。直床である。炉: 石囲炉。こぶし大の石をやや楕円形に配置している。長軸 60cm / 短軸 59cm / 床面からの深さ 26cm。埋裏: 検出されなかった。柱穴: 7 本検出した。P1、P2・3、P4、P5・6、P7 を主柱穴ととらえ、5 本柱建物と想定するが、P2、P6 の存在や、P4・P5・P7 が複数の柱穴の重複していることなどから、建替 1 回程度が想定される。

[覆 土] 4 層に分層できた。

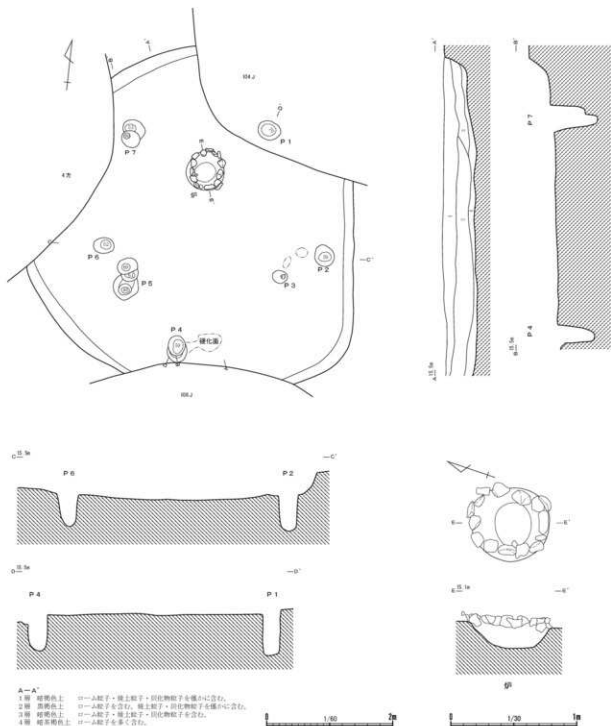
[遺 物] 土器、土製品、石器が出土した。深鉢形土器 (第 47 図 2) に 103 J 出土の破片が遺構間接合している。

[時 期] 中期後葉期 (加曽利 E 2 a 式期)。

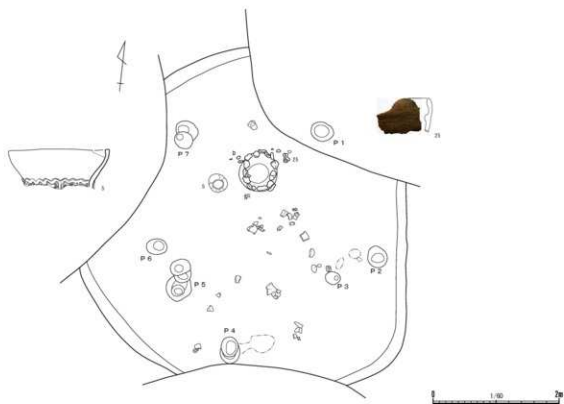
遺物 (第47～51図、図版45-2～48、第23～25表)

[土器] (第47～49図・第50図26～28、図版45-2・46・47、第23表)

復元個体5点、破片資料23点を図示した。1は勝坂3b新式の深鉢形土器である。外傾して開く器形で、底部は屈折底部になると思われる。2は加曾利E1c式の深鉢形土器で、103Jから出土した破片と遺構間接合している。垂下する隆帯と沈線による渦巻文を施文する。3・4は加曾利E2a式の深鉢形土器である。3は口縁部区画内に沈線を矢羽根状に充填する。4は頸部が無文で、横走する直状の沈線、波状沈線を施文する。5は曾利II式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、頸部に紐状の隆帯



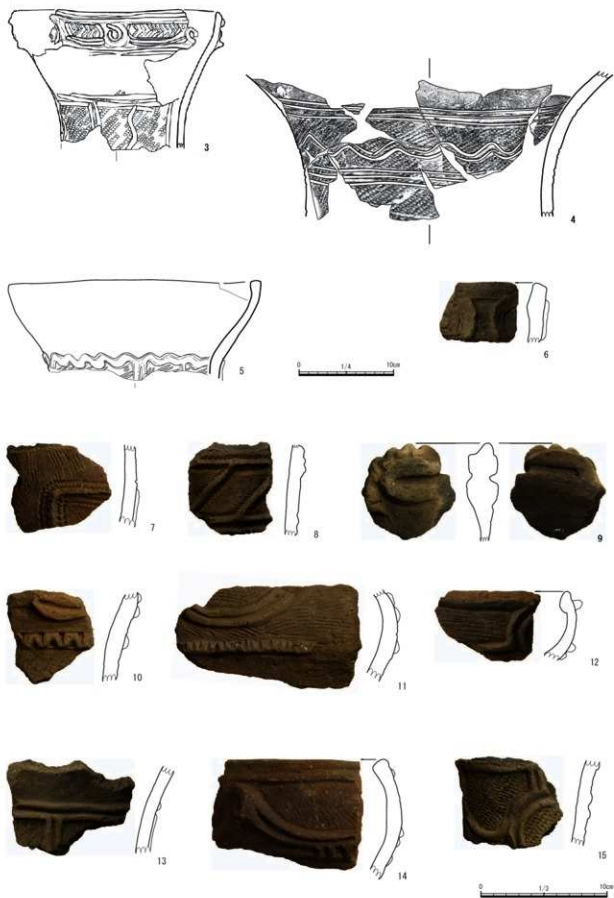
第45図 107号住居跡・炉 (1/60・1/30)



第46図 107号住居跡遺物出土状態(1/60)



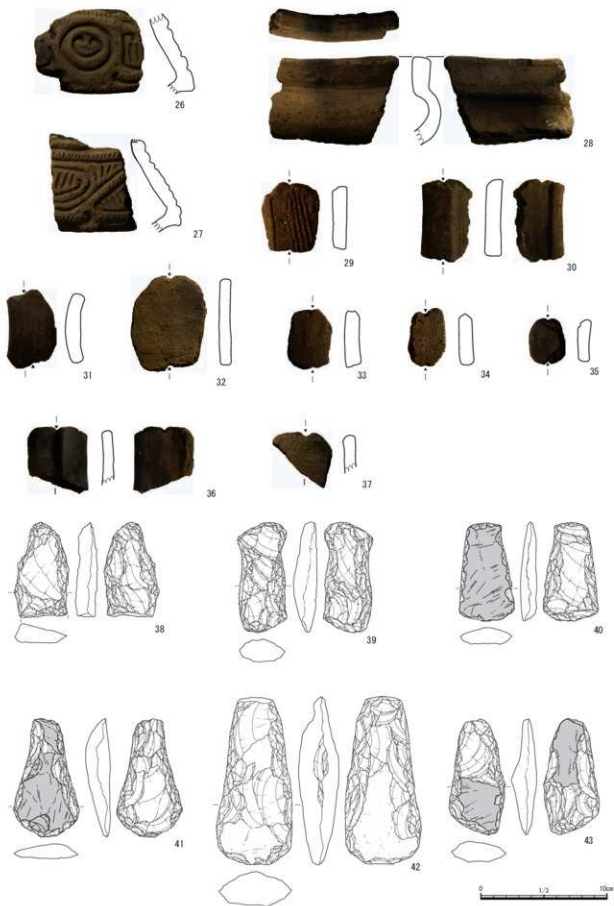
第47図 107号住居跡出土遺物1(1/4)



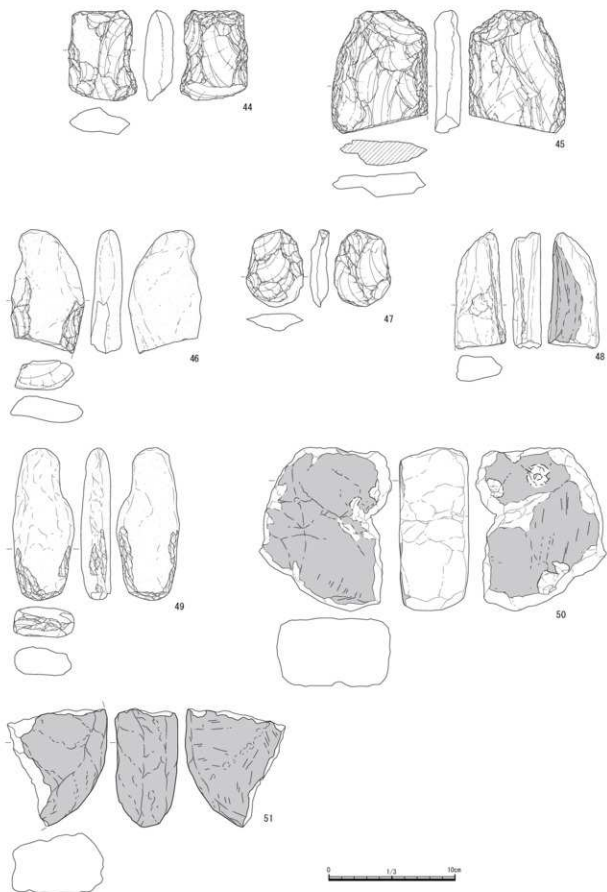
第48図 107号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第49図 107号住居跡出土遺物3 (1/3)



第50図 107号住居跡出土遺物4(1/3)



第51図 107号住居跡出土遺物5(1/3)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第47図1 図版45-2-1	深鉢	胴部 10%	高18.6 厚1.4	下位で括れ上位は 外積しながら広がる 胴部	交互刺突文を付した隆帯が1本傾位に沿る / 傾位隆帯に直状の 隆帯が垂下、一部押圧文が見られる / 垂下する隆帯間に1本の 傾位沈線 / 隆帯断面形状、隆帯単弧状が1本沿う、一部な で付けて貼付	黒褐 / 砂粒 中量、礫微 量	勝飯3b 新式
第47図2 図版45-2-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位、 胴部中位 ～底部 30%	高25.0 口20.0 底(11.0) 厚1.0	中位がやや内湾し 上位は広がって立 ち上がり上部はや や内湾して広がる口 縁部 / 平内底部	地文は0段多条LR縦位 / 口縁部無文、胴部の傾位1本の隆帯 で区画 / 傾位隆帯下端無文 / 胴部文様2本1対の隆帯が 垂下、2本1対の沈線によるJ字状の文様、2本1対の沈線が 垂下、反転く字状の隆帯 / 隆帯断面形状、傾位隆帯型で付 けて貼付、胴部の文様隆帯単弧状が1本沿う / 地文・隆帯貼付、 傾位隆帯隆帯との前後関係は不明、107と遺構照合	暗褐 / 砂 粒・礫少量	加曾利 E1c式
第48図3 図版45-2-3	深鉢	口縁部～ 胴部下位 50%	高14.4 口21.6 厚0.8	キャリバー形 / 下 位は直線的に立ち 上がり上位はやや 反転する胴部 / 外 反して広がる口縁 部 / 内湾して広がる 口縁部	地文は単節LR縦位 / 口縁部に隆帯による構内状の区画が5単 位残存 / 区画の上下隆帯間に渦巻文を付して区切る区画(3単 位)、隆帯を構内状に貼付し画する区画(2単位)あり / 区画内 に沈線を傾位矢羽根状に充填、1区画は傾位沈線を充填 / 胴部 無文 / 胴部と胴部を横走する2本1対の沈線で画す、沈線より 上位に渦巻文はみ出す部分の一部あり / 胴部には2本1対 の直状の沈線4単位、波状の沈線4単位が交互に垂下 / 隆帯 断面方マボコ状 / 3層から出土	黒褐 / 砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E2a式
第48図4 図版45-2-4	深鉢	頸部～胴 部中位 40%	高15.0 厚1.1	外反する胴部 / 強 く外反する頸部	地文は単節LR縦位 / 胴部無文 / 傾位3本1対の沈線で頸部と 胴部を画す / 2本1対の沈線による傾位の波状文 / 波状文下部 に3本1対の沈線が傾位に沿る、下部にも傾位1本の沈線が 僅かに見られる / 内面は胴部中位以下は黒色 / 非接合であるが 1081から同一個体と思われる破片2点出土 / 3層から出土	にぶい・黄褐 / 砂粒少量、 雲母微量	加曾利 E2a式
第48図5 図版45-2-5	深鉢	口縁部～ 胴部 80%	高10.6 口26.6 厚1.1	外積しながら広が り上位はやや内湾 する口縁部 / 口唇 部は内側に肥厚	地文は単節LR縦位 / 口縁部無文 / 頸部に1本の結状の隆帯が 沿る / 頸部の隆帯から2本1対または1本の隆帯が垂下 / 隆 帯断面方マボコ状	暗褐 / 砂粒 中量、礫少 量	曾利Ⅱ 式
第48図6 図版45-2-6	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	上部はやや内湾下 部は内湾する口縁 部	口唇部に押圧文を付す / 隆帯による構内状区画 / 隆帯内側に 沿って1本の結状沈線文、左側区画には更に内側に1本 見られる	にぶい・黄褐 / 砂粒・礫 少量、雲母 多量	阿玉台 1b式
第48図7 図版45-2-7	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	地文は単節LR縦位・斜位、胴部・隆帯上層文 / 隆帯貼付、隆 帯には先端が加工された竹管状工具による爪形文を押し引く / 隆帯断面形状	赤褐 / 砂粒 微量、礫少 量、雲母多 量	阿玉台 Ⅲ式
第48図8 図版46-8	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	2本の隆帯間に斜位の隆帯を2本貼付し菱形の区画形成 / 隆 帯間に三角片状の隆帯 / 隆帯断面三角状	褐 / 砂粒中 量	勝飯1b 式
第48図9 図版46-9	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	傾位U字状の把手、縁に押圧文を付した隆帯貼付 / 口縁残存 部無文	にぶい・黄褐 / 砂粒中量、 礫微量	勝飯3b 式
第48図10 図版46-10	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外反する胴部	地文は0段多条LR縦位 / 交互刺突文を付した傾位隆帯で無文 飾部を画す / 傾位隆帯上部に連続隆帯	暗 / 砂粒中 量、礫微量	勝飯3b 式
第48図11 図版46-11	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外積する頸部 / 内 湾する口縁部	地文は懸糸L傾位・斜位 / 押圧文を付した隆帯で口縁部と頸部 を画す / 幅広の隆帯中央に1本の沈線を付し2本に成形 / 頸 部無文 / 隆帯断面方マボコ状 / 傾位隆帯は押さえがけ新式が 見られる	明褐 / 砂 粒・礫中量	加曾利 E1a式
第48図12 図版46-12	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部	地文は懸糸R傾位 / 口縁部は隆帯によって画す、上層1本、 下層欠損 / 2本1対の隆帯による弧状文 / 隆帯断面方マボコ状	暗褐 / 砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1a式
第48図13 図版46-13	深鉢	頸部～胴 部 破片	厚0.9	外反する頸部～胴 部	地文は懸糸L傾位 / 胴部無文 / 頸部と胴部を2本の傾位隆帯で 画す / 2本1対の隆帯が直状に垂下 / 隆帯断面方マボコ状	暗 / 砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1b式
第48図14 図版46-14	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積する頸部 / 内 湾する口縁部	地文は単節R傾位 / 口縁部は隆帯によって画す、上層1本、 下層1本 / 2本1対の隆帯による弧状文、先端に渦巻文、渦巻 文部分には突起状 / 弧の部分から3本の短い直状の隆帯が口縁部 下端の隆帯に垂下 / 残存頸部無文 / 隆帯断面方マボコ状	暗赤褐 / 砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E1c式
第48図15 図版46-15	深鉢	胴部 破片	厚1.0	下部がやや内湾す る胴部	地文は単節LR縦位 / 2本1対の隆帯による弧状文、短L傾位 隆帯2本が上部に接する / 隆帯が直状に垂下 / 隆帯断面方マ ボコ状	にぶい・黄褐 / 砂粒中量、 礫少量	加曾利 E1式
第49図16 図版46-16	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外積して広がる頸 部 / 内湾する口縁 部	地文は単節RL斜位 / 口縁部は上層1本、下層1本の隆帯で画 す / 区画の境目に沈線による渦巻文、先端は傾位に伸びる / 胴 部無文、破片下端に僅かに傾位沈線が見られる / 隆帯断面方角 状 / 107-16と17は同一個体	暗～黒褐 / 砂粒・礫中 量	加曾利 E2a式
第49図17 図版46-17	深鉢	頸部～胴 部 上半 破片	厚1.0	途中から急激に外 積する胴部 / 外積 しながら広がる頸 部	地文はRL傾位 / 胴部無文、傾位3本の沈線で胴部と画す / 胴 部3本1対の直状の沈線が垂下、右端に波状に垂下する1本 の沈線あり / 107-16と17は同一個体 / 3層から出土	暗～黒褐 / 砂粒・礫中 量	加曾利 E2a式

第23表 107号住居跡出土土器一覧1

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第49図18 図版46-18	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	やや内湾する口縁部/ 口唇部は直立/ 外反する胴部	地文は0段多糸丸。口縁部縦位施文、胴部縦位施文/ 口縁部下位無文/口縁部無文部下位隆帯によって両す。上端1本、下 隆帯2本/胴部無文帯無し/胴部には半蔵竹管状工具の痕面を 使用した平行沈線が1本波状に垂下/隆帯断面角状～方マボコ状	暗褐/砂粒 中量、礫少量	加曾利 E2b式
第49図19 図版46-19	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外傾する胴部	地文は帯系R縦位、原体が太く条帯や節の長さも長い/2本の 隆帯が直状に垂下、隆帯間に1本の隆帯が波状に垂下、先端は 沈線による渦巻文/隆帯断面方マボコ状～台形/107-19と20 は同一個体	にぶい、黄褐 /砂粒中量、 礫微量	曾利I 式
第49図20 図版46-20	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外反する胴部	地文は帯系R縦位、原体が太く条帯や節の長さも長い/2本1 対の隆帯を直状、弧状、横位に貼付、間に横位の短い隆帯で繋 ぐ/隆帯断面方マボコ状～台形/107-19と20は同一個体	褐/砂粒中量、 礫微量	曾利I 式
第49図21 図版46-21	深鉢	口縁部 破片	厚1.5	外傾する口縁部/ 口唇部は内側に肥 厚	半蔵竹管状工具の痕面による平行沈線、重直文または斜行文か/ 紐状の隆帯が波状に垂下/平行沈線～紐状の隆帯貼付	にぶい、黄褐 /砂粒多量、 礫少量	曾利II 式
第49図22 図版46-22	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾する胴部	上部に横位1本の隆帯貼付/隆帯による渦巻文と思われる文 様、横位隆帯とC字状の隆帯で繋ぐ/隆帯間沈線充満/隆帯断 面方マボコ状	黒褐/砂粒中 量、礫多量	曾利III 式
第49図23 図版46-23	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	外傾する口縁部	地文は帯系各線文/口縁部に2本1対の沈線が横位に巡る/3 本1対の沈線による連弧文	黒褐/砂粒 中量、礫微量	連弧文 2b段階
第49図24 図版47-24	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外傾し上部がやや 内湾する口縁部/ 外反する胴部	地文は帯系L縦位/口縁部に2本1対の沈線が巡る、沈線間 地文磨消/2本1対の沈線による連弧文(一部変形)/副文様 胴部左側に3本1対の沈線が巡る/沈線間地文磨消が確 かに地文が残る	黒褐/砂粒 中量、礫微量	連弧文 3a段階
第49図25 図版47-25	浅鉢	口縁部 破片	厚1.0	外傾する口縁部	外面無文/突出部内面に隆帯による渦巻文/内面に楕円状の痕 みあり、刺突痕のような意図したものは不明	明褐/砂粒少 量、礫多量	例五台 式
第50図26 図版47-26	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.1	内屈する口縁部～ 体部	押圧文を付した隆帯による区画/区画内縦位沈線充満/区画内 沈線による楕円形の区画文、区画内縦位沈線列/体部無文/文 様帯下部に先端が渦巻状になった横位沈線施文/107-26と27 は同一個体	明黄褐/砂粒 少量、礫 微量	加曾利 E1式
第50図27 図版47-27	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.1	内屈する口縁部～ 体部	隆帯による区画/文様帯上下、隆帯上押圧文を付す/区画内縦 位沈線充満/円の内側にU字状の文様を加えた沈線による文 様/体部無文/文様帯下部に先端が渦巻状になった横位沈線施 文/107-26と27は同一個体	明黄褐/砂粒 少量、礫 微量	加曾利 E1式
第50図28 図版47-28	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚1.1	内湾する体部/外 傾する口縁部	外面口縁部、口唇部に多量、内面口唇部に少量の赤色顔料残存	褐/砂粒・ 礫中量	中期中 葉～後 葉

第23表 107号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第50図29 図版47-29	土器 片鉢	完形	3.4/4.3/1.2	37.1	方形/挾部は2ヶ所/肩縁はごく一部磨耗/胴部片利用/半 蔵竹管状工具の痕面による平行沈線を多糸施文、一部1cm程 間隔が空く	明赤褐/砂粒・礫 中量、雲母多量	曾利I式 か
第50図30 図版47-30	土器 片鉢	90%	6.5/3.9/0.6	37.8	方形か/挾部は2ヶ所/肩縁はごく一部磨耗/口縁部片利用/ 内外面に赤色顔料残存	褐/砂粒中量、礫 少量	中期中葉 ～後葉
第50図31 図版47-31	土器 片鉢	完形	6.1/3.9/1.0	35.6	楕円形/挾部は2ヶ所/肩縁は磨耗/口縁部片利用/無文	暗褐/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第50図32 図版47-32	土器 片鉢	完形	7.6/6.1/0.9	59	楕円形/挾部は2ヶ所/肩縁の一部磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第50図33 図版47-33	土器 片鉢	90%	4.7/3.5/1.1	24.5	楕円形/挾部は2ヶ所/肩縁の磨耗は未発達/胴部片利用/ 無文	褐/砂粒少量、礫 微量	中期中葉 ～後葉
第50図34 図版47-34	土器 片鉢	完形	4.6/3.0/1.1	18.1	楕円形/挾部は2ヶ所/肩縁は一部磨耗/胴部片利用/無文/ 4/層から出土	暗/砂粒微量、礫 中量	中期中葉 ～後葉
第50図35 図版47-35	土器 片鉢	完形	3.6/2.8/0.9	13.9	楕円形/挾部は2ヶ所/肩縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無 文	黒褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第50図36 図版47-36	土器 片鉢	50%	[5.1]/4.7/0.8	37.4	方形か/挾部は1ヶ所残存/肩縁はごく僅かに磨耗/口縁部 片利用/内外面に赤色顔料残存	黒/砂粒中量、礫 少量	中期中葉 ～後葉
第50図37 図版47-37	土器 片鉢	40%	[4.2]/4.7/0.8	18.4	方形か/挾部は1ヶ所残存/肩縁はごく僅かに磨耗/胴部片 利用/内面に赤色顔料残存	にぶい、黄褐/ 砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第24表 107号住居跡出土土製品一覽

調査番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第50図38 図版47-38	打製石斧	ホルン フェルス	75.9	43.2	16.9	70.7	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第50図39 図版47-39	打製石斧	砂岩	86.8	39.7	18.9	74.5	短冊形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、中央部は面状になっている
第50図40 図版47-40	打製石斧	緑色凝灰 岩	78.7	43.9	13.4	64.8	楕形 / 磨製石斧の転用 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第50図41 図版47-41	打製石斧	頁岩	93.5	52.1	19.3	82.3	楕形 / 表面は磨滅している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第50図42 図版47-42	打製石斧	ホルン フェルス	132.3	59.8	32.2	284.1	楕形 / 表面刃部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁に潰れはほとんど見られない / 右側縁は中部の稜上に潰れが認められる
第50図43 図版48-43	打製石斧	砂岩	91.8	44.6	20.0	75.1	楕形 / 表面刃部と裏面基部から中央部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第51図44 図版48-44	打製石斧	砂岩	72.6	55.0	21.8	103.4	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面の一部に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第51図45 図版48-45	打製石斧	砂岩	99.0	77.0	20.1	194.3	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる / 右側縁の潰れはほとんど見られない
第51図46 図版48-46	二次加工 剥片	砂岩	99.5	59.0	24.7	182.0	表面両側縁に連続的な二次的剥離が認められる
第51図47 図版48-47	剥片	ホルン フェルス	61.7	45.0	14.2	37.6	短長剥片 / 打面は原礫面からなり、バルブはほとんど発達しておらず、未端はフェザーエッジである
第51図48 図版48-48	磨石	緑泥片岩	90.5	41.8	22.4	126.6	裏面に磨痕 / 敲打による浅い凹みが表面に1ヶ所みられる
第51図49 図版48-49	敲石	片状砂岩	119.2	48.5	23.7	202.7	両側面に剥離を伴う敲打痕
第51図50 図版48-50	石皿	閃緑岩	130.2	105.4	54.7	1146.6	扁平石皿 / 表裏面はほぼ全面に平坦な使用面 / 裏面に1ヶ所凹み / 一部がすずみ覆われており、被熱の可能性はある
第51図51 図版48-51	石皿	安山岩	98.6	83.3	51.0	468.3	表面の使用面の消耗は激しくはないが、中央付近がやや薄くなっている

第25表 107号住居跡出土石器一覽

を横位に貼付する。6・7は阿玉台式、8～10は勝坂式、11～18は加曾利E式、19～22は曾利式、23・24は連弧文土器の深鉢形土器である。25は阿玉台式、26・27は加曾利E式、28は中期中葉～後葉の浅鉢形土器である。

〔土製品〕(第50図29～37、図版47、第24表)

9点を図示した。29～37は土器片錘である。

〔石器〕(第50図38～43・第51図、図版47・48、第25表)

14点を図示した。38～45は打製石斧である。46は二次加工剥片である。47は剥片である。48は磨石である。49は敲石である。50・51は石皿である。

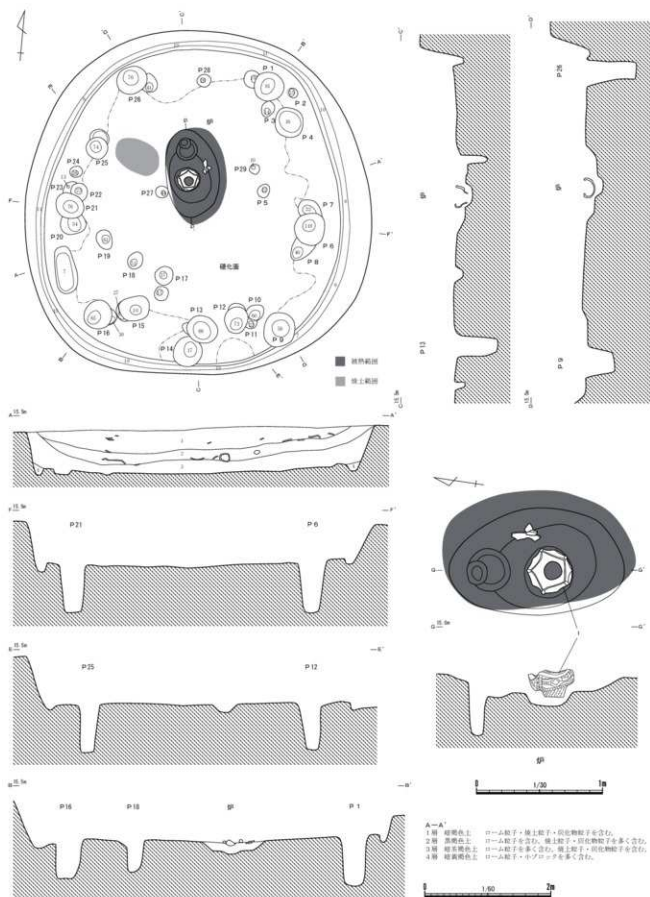
108号住居跡

遺構(第52・53図)

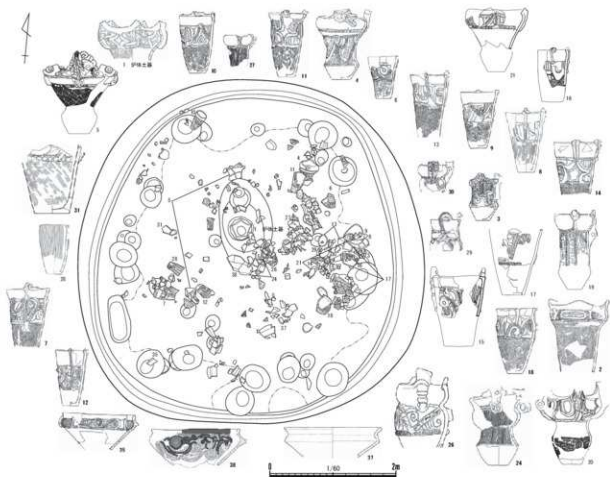
〔位置〕(C-3・4)グリッド。

〔検出状況〕107J・111J、6方に切られる。

〔構造〕平面形：ほぼ円形。主軸方位：N-5°-W。P9とP16の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸550cm / 短軸546cm / 深さ50～77cm。壁溝：1条検出された。上幅16～50cm / 下幅5～13cm / 床面からの深さ2～19cm。壁：約62～80°でやや斜的に立ち上がる。床面：概ね平坦である。中央部分に硬化面を確認した。直床である。炉：埋裏炉。楕円形を呈し、中央



第52図 108号住居跡・炉(1/60・1/30)



第53図 108号住居跡遺物出土状態(1/60)

に深鉢形土器の口縁部(第54図1)が埋設されている。北寄りに浅い掘り込みとピットが確認された。長軸140cm/短軸84cm/床面からの深さ29cm。埋裏:検出されなかった。柱穴:29本検出した。P1、P6、P9、P16、P21、P26を主柱穴ととらえ、6本柱建物を想定する。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] 炉体土器(第54図1)の他、1・2層を中心に遺物が非常に多量に出土した。人面把手付土器(第57～59図7)が出土している。深鉢形土器(第66図25)に114J、深鉢形土器(第72図69)に111Jから出土した破片が遺構間接合している。

[時期] 中期中葉期(勝坂3b新式期)。

[遺物](第54～75図、図版49～69、第26～28表)

[土器](第54～72図、図版49～68、第26表)

復元個体39点、破片資料39点を図示した。1は炉体土器で、勝坂3b新式の深鉢形土器である。口縁部文様帯を持ち、頸部位下は縄文を地文とする。文様帯内は押圧文を付した隆帯による区画文を配し、区画間間に縦位沈線文列、三叉文等を施文する。2～30は勝坂3b新式の深鉢形土器である。2は波状口縁で、口縁部に楕円状の区画文を持つ。3は把手を持ち、隆帯による区画文内に縦位沈線、三角押文を充填する。4は胴部に文様帯を持ち、口縁部には把手が見られる。5は口縁部に人面把手と蛇の頭をモチーフとした把手が向かい合う土器である。人面把手には目、鼻、口の表現がある。また、把

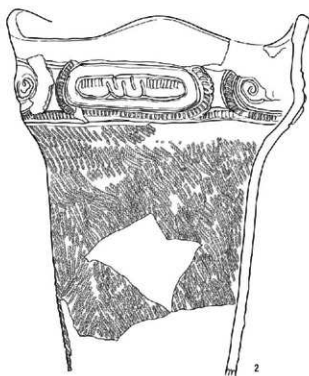
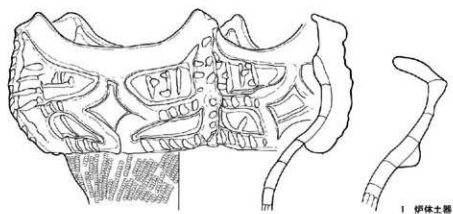
手以外にも口縁部上面には三角形の粘土板に隆帯を貼付し、蛇を模したと思われる文様も見られる。6～17は円筒形を呈する。口縁部は無文で、突起を把手を持ち、そこから文様帯に向けて隆帯が垂下するものが多い。胴部上位に文様帯を持ち、隆帯による渦巻文やU字状の文様を貼付する。また、隆帯によって区画され、区画内は縦位沈線列、沈線による渦巻文、三叉文等を施す。文様帯下位は縄文を施文する。隆帯上には交互刺突文、矢羽根状刺突文も見られる。18はやや樽形を呈する。押圧文を付した隆帯による渦巻文を配し、三叉文を施文する。19は隆帯によって区画し、沈線による文様を充填する。底部は屈折底部となる。20～23は口縁部に文様帯を持ち、胴部中位が無文で底部が屈折底部となる。20は口縁部に4単位の把手があり、胴部下位は縄文を地文とする。21は押圧文を付した隆帯で口縁部を画し、沈線による三叉文等を施文する。22は波状口縁で、波頂部から隆帯が垂下し、区画する。隆帯上には交互刺突文、矢羽根状刺突文を付す。23は胴部で、連鎖状隆帯を弧状に貼付する。隆帯内側には沈線による文様を施文する。24は自縄自巻LRを地文とし、口縁部には大型の把手が見られる。25は口唇部に連鎖状隆帯が巡り、沈線を付した隆帯を弧状に貼付する。114 J から出土した破片が遺構間接合している。26は口縁部に把手を持ち、胴部上位に文様帯を施文する。27は縄文を地文とし、口縁部は無文で、頸部には押圧文を付した隆帯が巡る。28は縦位沈線を施す。29は口縁部が無文で、口縁部の把手から胴体へ隆帯が垂下する。胴部には括れ部を形成する。30は口縁部が無文で把手を付す。頸部には隆帯が巡り、胴部にも隆帯が見られる。31は勝坂3 b 式の深鉢形土器である。円筒形を呈すると思われる、押圧文を付した隆帯が横位に巡る。32は加曾利 E 4 式の深鉢形土器である。口縁上位に1本の沈線が巡り、無文部分と縄文部分を区画する。縄文を地文とし、胴部上位には無文帯による渦巻文、円形の文様を付す。下位は逆U字状の無文部分が見られる。33は勝坂3 b 式の小形の深鉢形土器である。沈線による文様を施す。34～38は浅鉢形土器である。34は波状口縁で、上面から見ると口縁が隅丸方形に見える。口縁内側に段を持つ。阿玉台式にあたると思われる。35は勝坂3 b 新式にあたる。口縁部上位は無文で、隆帯による楕円状の区画文、連なる横位S字状の文様が見られる。楕円状区画文の内側には縦位沈線を施し、1本おきに押圧文を付す。36は勝坂3 b 式、37は勝坂3 b 新式にあたる。38は大木8 a 式にあたる。縄文を地文とし、文様帯は体部下位にまで及ぶ。隆帯による文様を施し、横位の端状把手を貼付する。外面には多くの赤色顔料が残存する。また、内面には黒色顔料による文様が見られる。39は中期のミニチュア土器の底部である。残存部は無文で底面に網状痕は見られない。40～44は阿玉台式、45は阿玉台式の系統と思われるもの、46～62は勝坂式、63は勝坂式に並行する時期と思われるもの、64～70は加曾利 E 式、71・72は曾利式、73は連弧文土器の深鉢形土器である。74～76は中期中葉の浅鉢形土器で、いずれも赤色顔料が残存する。69には111 J から出土した破片が遺構間接合している。77は中期、78は中期にあたると思われるミニチュア土器である。

[土製品] (第73図、図版68、第27表)

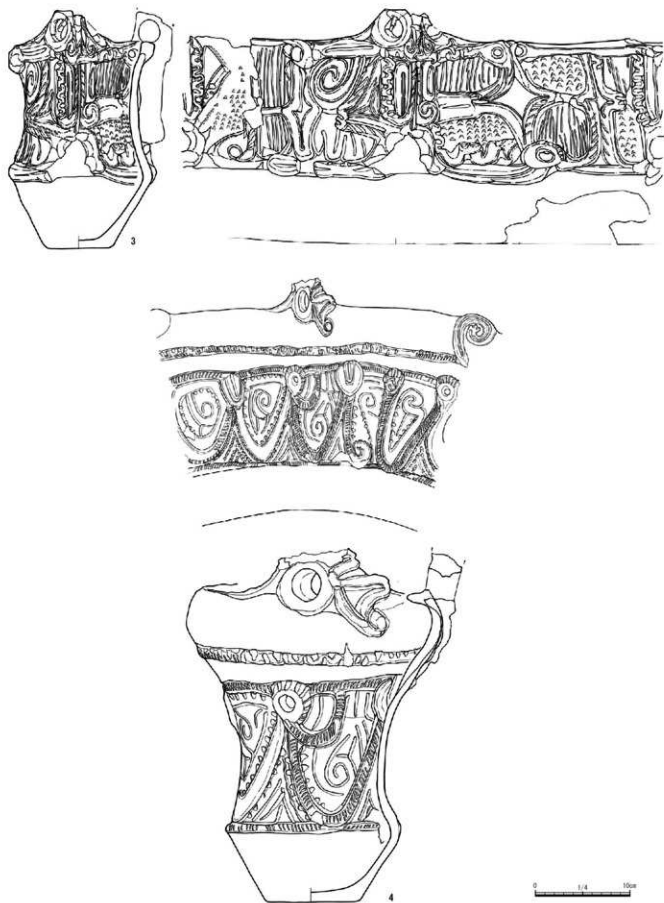
30点を図示した。79～106は土器片鍾、107・108は土製円盤である。

[石器] (第74・75図、図版68・69、第28表)

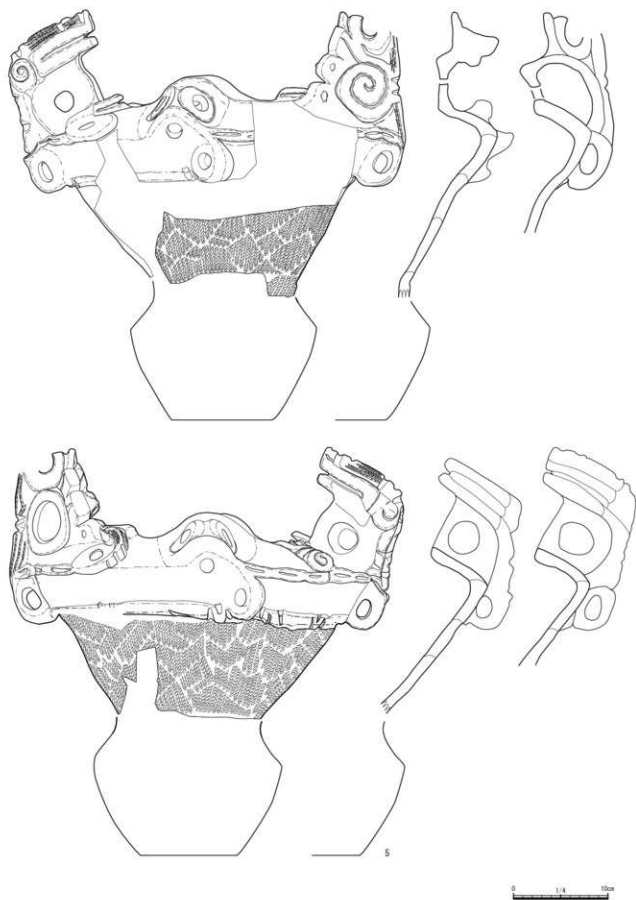
18点を図示した。109は楔形石器である。110～123は打製石斧である。124・125は二次加工剥片である。126は石核である。



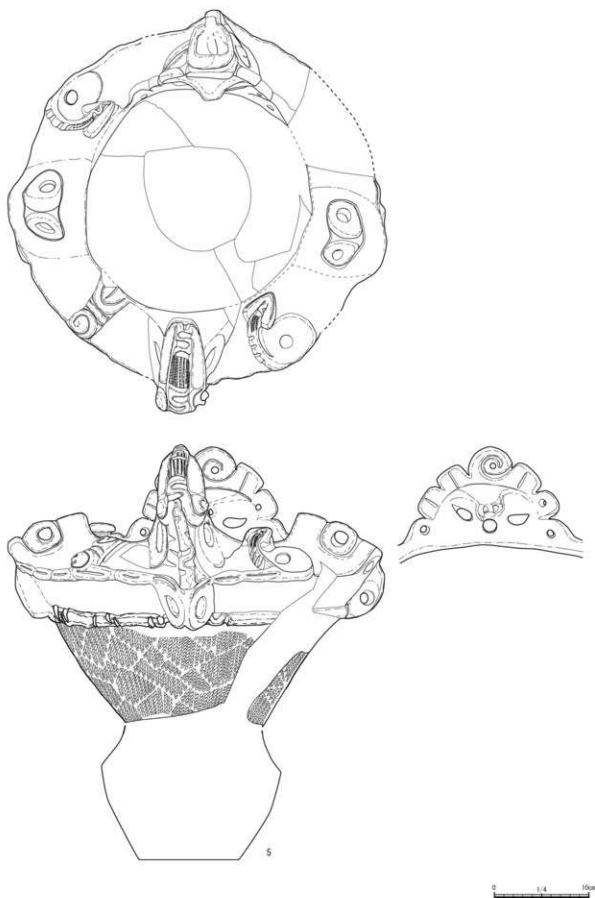
第54図 108号住居跡出土遺物1(1/4)



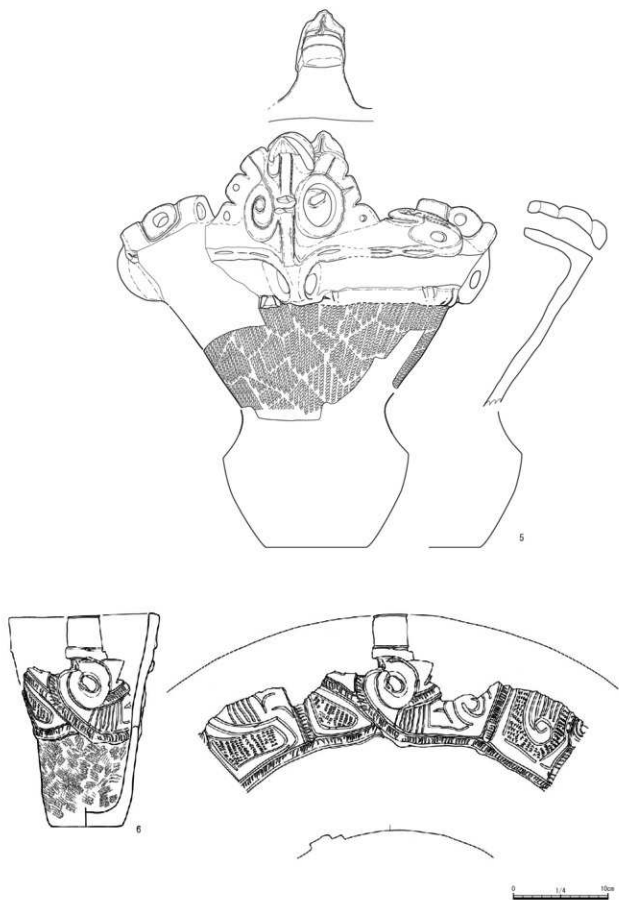
第55図 108号住居跡出土遺物2(1/4)



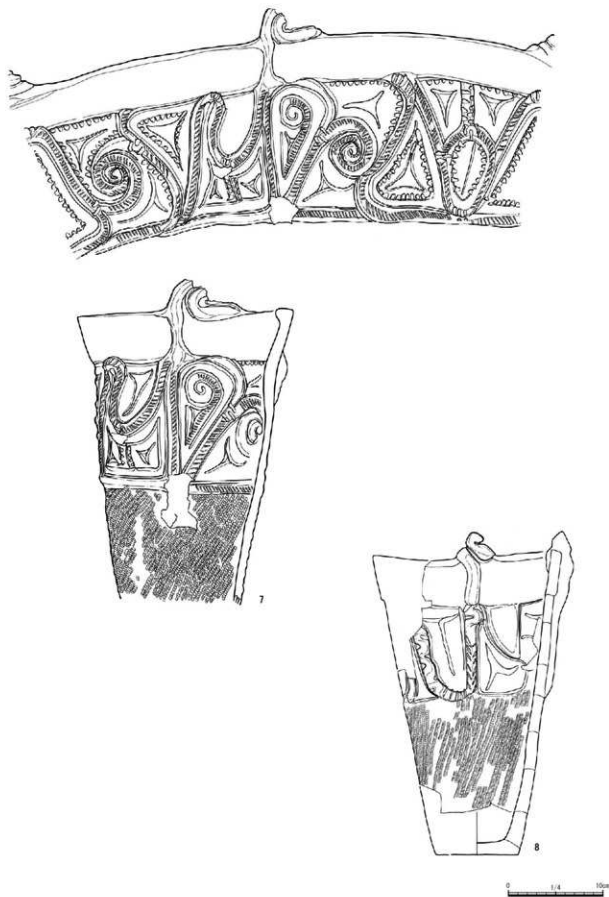
第56図 108号住居跡出土遺物3 (1/4)



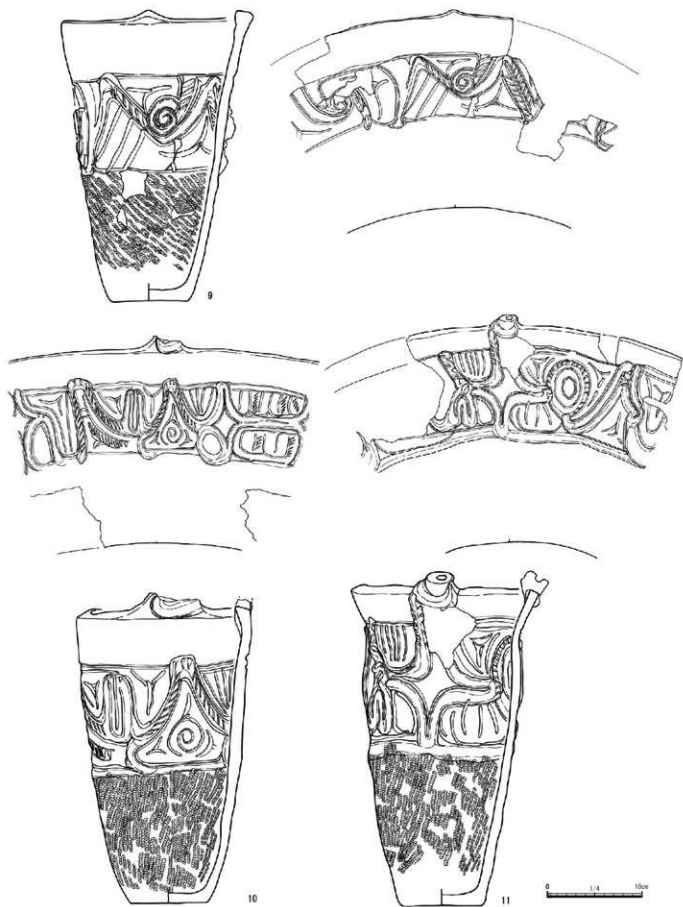
第57図 108号住居跡出土遺物4(1/4)



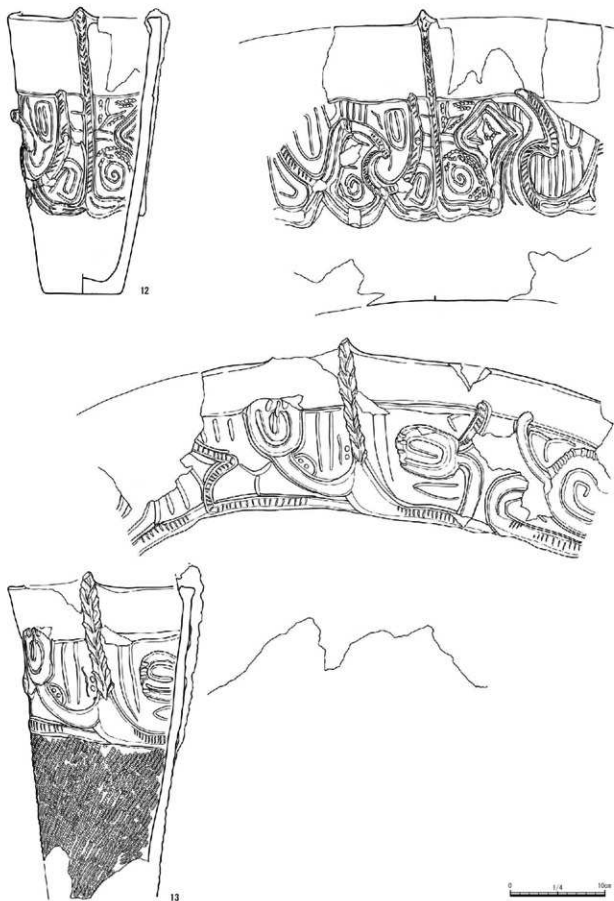
第58図 108号住居跡出土遺物5(1/4)



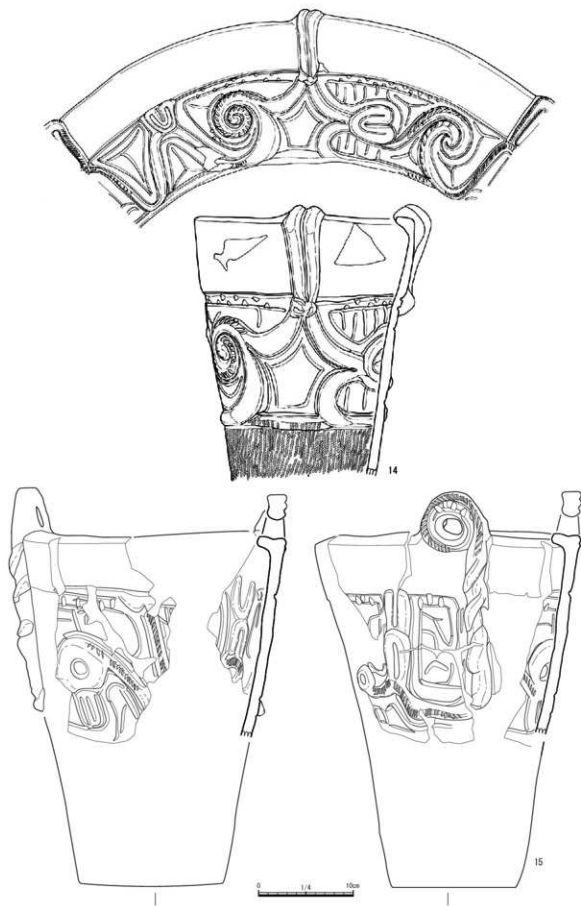
第59図 108号住居跡出土遺物6(1/4)



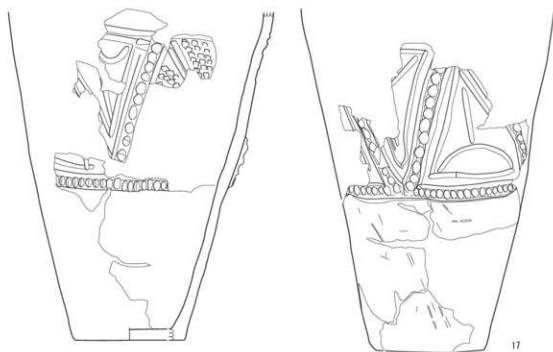
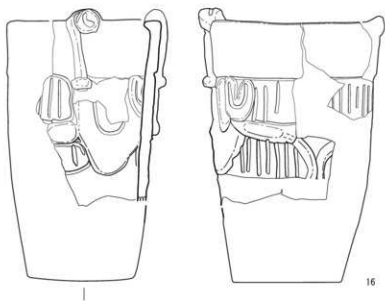
第60図 108号住居跡出土遺物7(1/4)



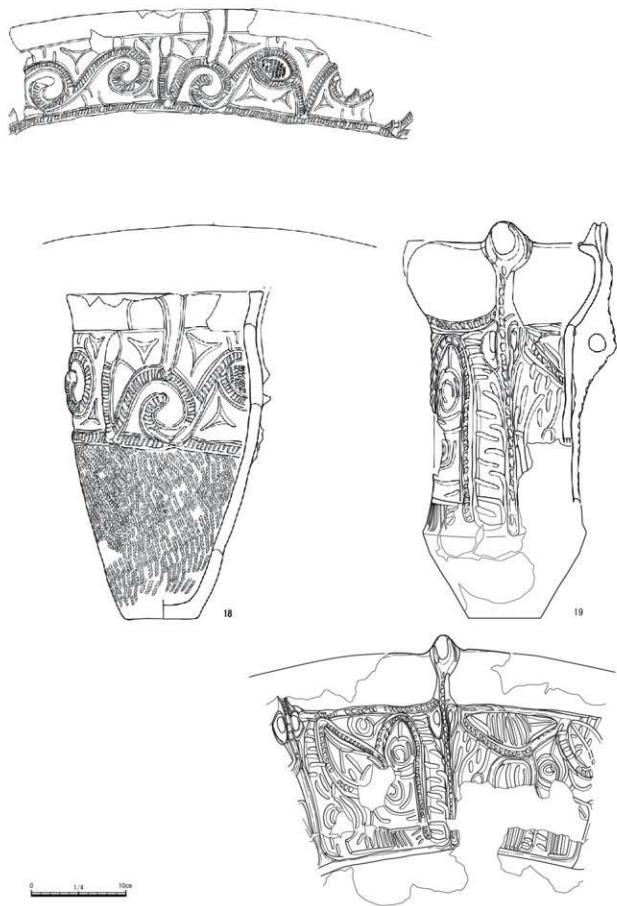
第61図 108号住居跡出土遺物8(1/4)



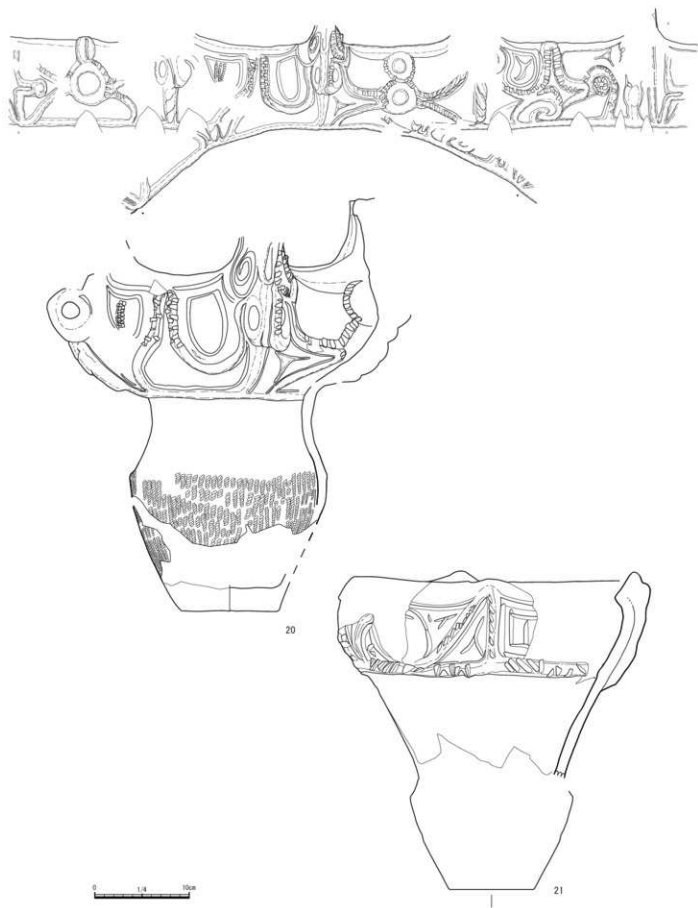
第62図 108号住居跡出土遺物9(1/4)



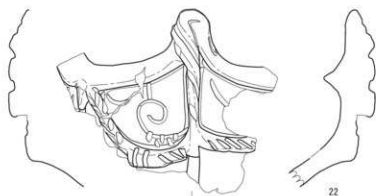
第63図 108号住居跡出土遺物10(1/4)



第64図 108号住居跡出土遺物11(1/4)



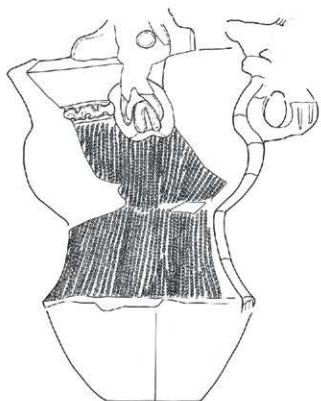
第65図 108号住居跡出土遺物 12 (1/4)



22



23



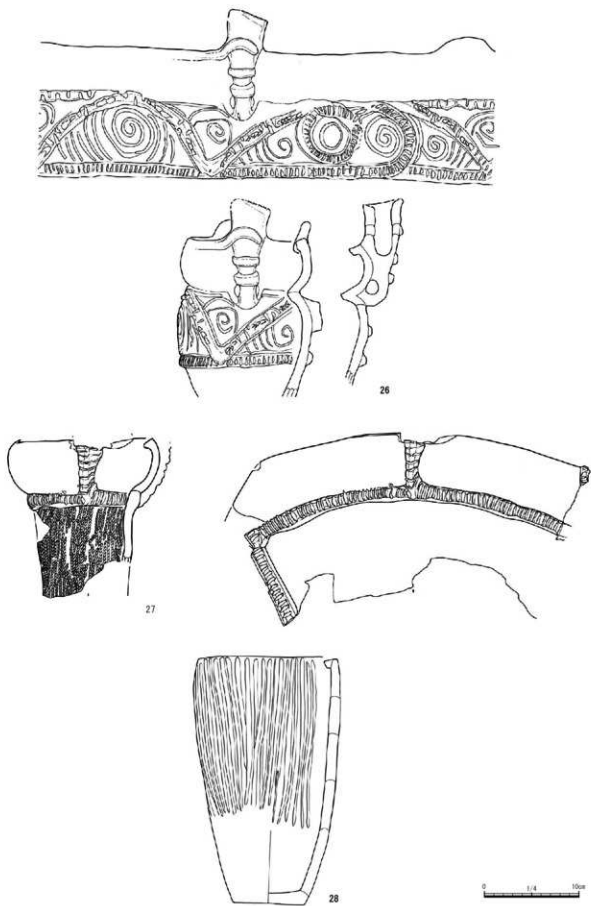
24



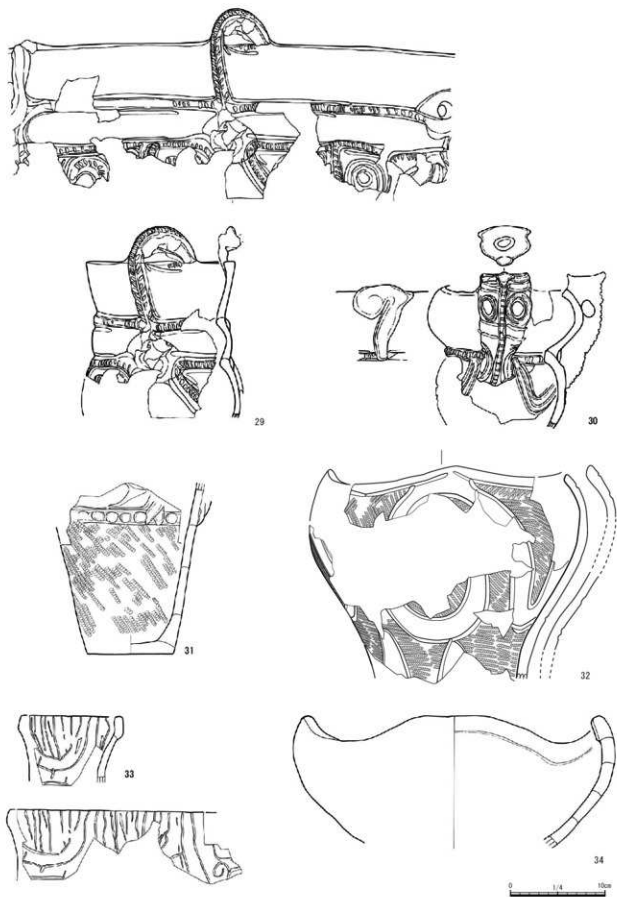
25



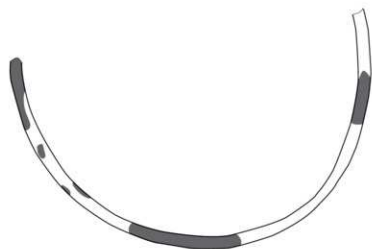
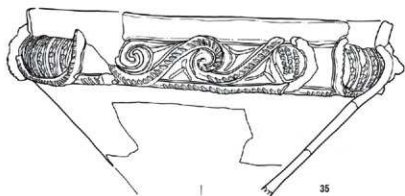
第66図 108号住居跡出土遺物13(1/4)



第67図 108号住居跡出土遺物 14 (1/4)



第68図 108号住居跡出土遺物 15 (1/4)



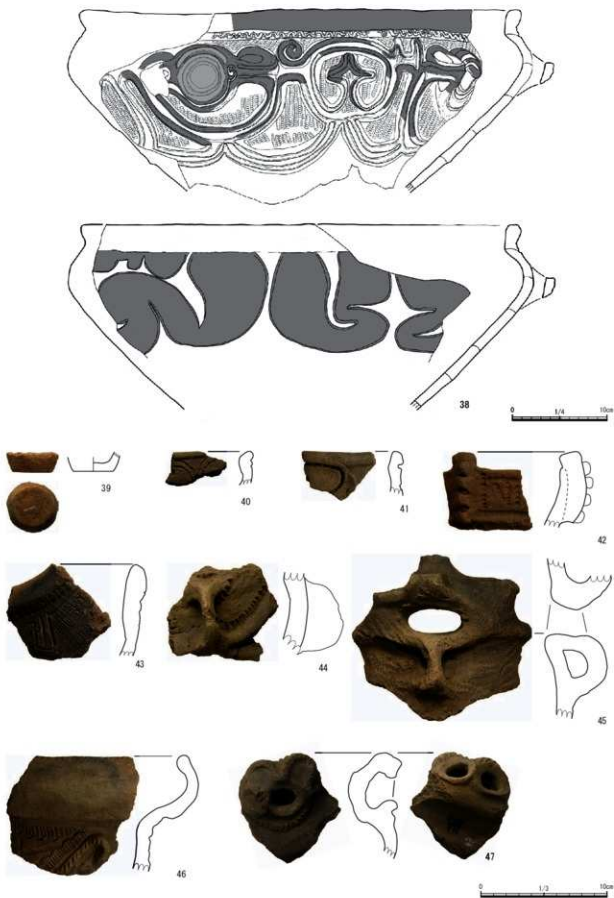
36



37



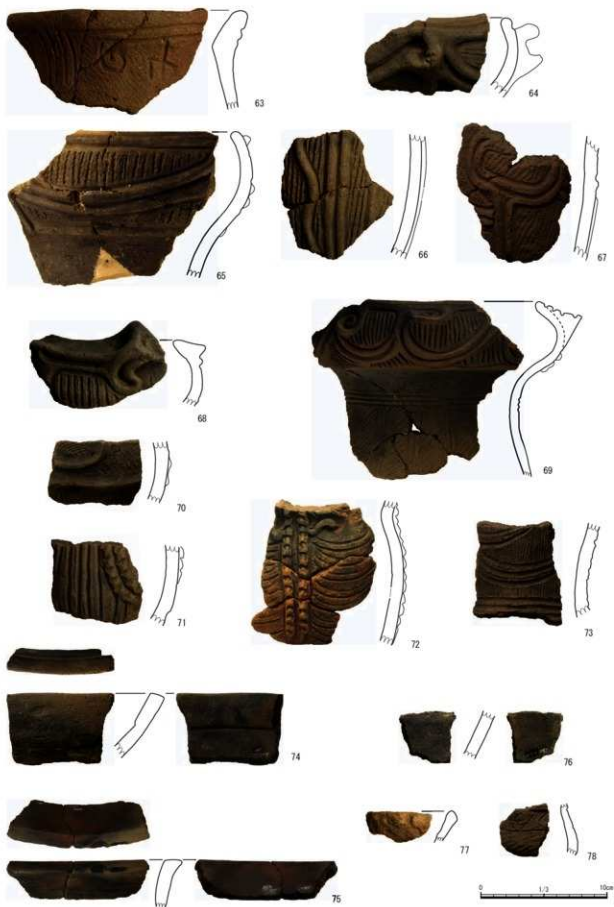
第69図 108号住居跡出土遺物16(1/4)



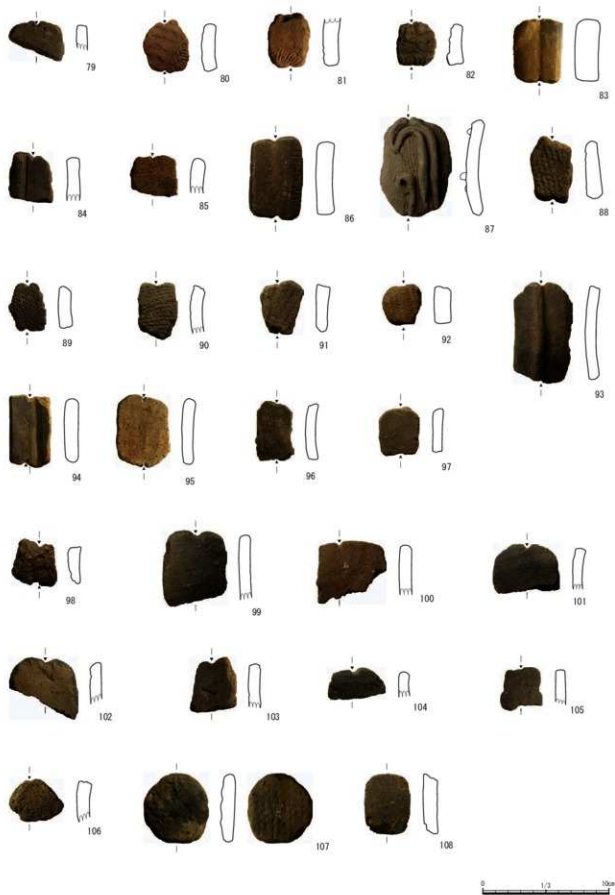
第70図 108号住居跡出土遺物 17 (1/4・1/3)



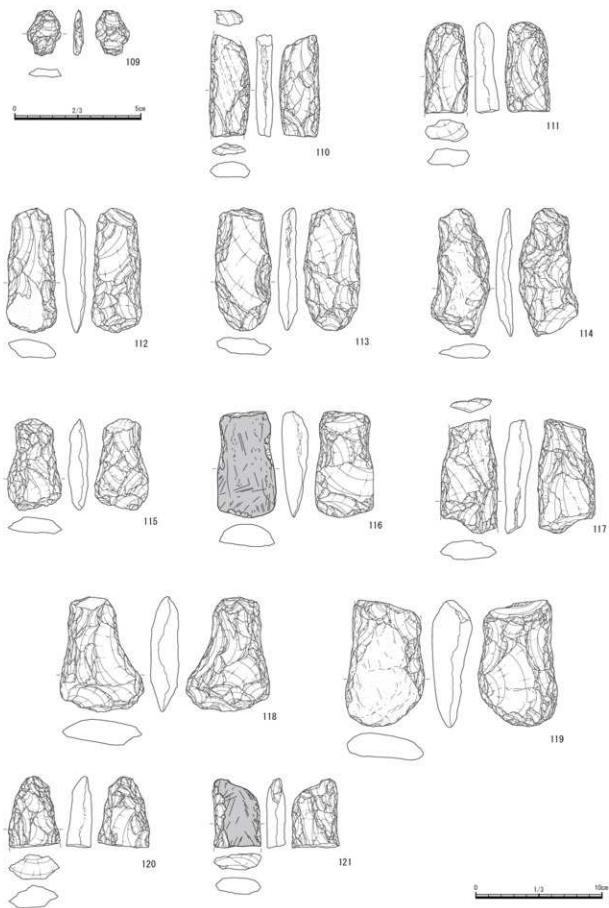
第71図 108号住居跡出土遺物 18 (1/3)



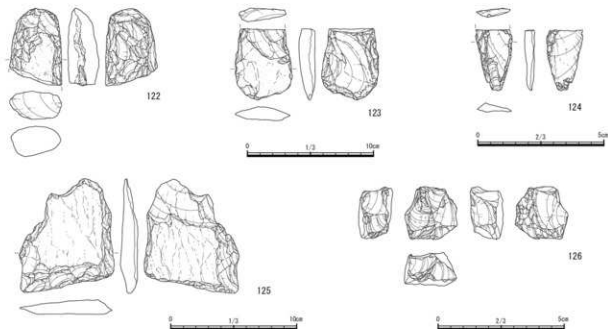
第72図 108号住居跡出土遺物 19 (1/3)



第73図 108号住居跡出土遺物20(1/3)



第74図 108号住居跡出土遺物21(1/3・2/3)



第75図 108号住居跡出土遺物 22 (1/3・2/3)

図版番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第54図1 図版49-1	深鉢	口縁部～ 胴部上位 100%	高 [20.8] 口 28.8 厚 1.2	キャリバー形 / やや外反する胴部上位 / 外反して広がる頸部 / 内湾する口縁部 / 波頂部が5単位の波状口縁 / 上面からみると口縁部が五角形を呈す	地文は RL 縦文 / 5単位の波状口縁 / 口縁部区画内は波頂部から首が高く押圧文・矢羽根状刺突文を付た隆帯が重下し 5区画に分割される。隆帯による菱形の文様の両側に縦位沈線列・三叉文・交互刺突文等を加えた区画 (2単位) / 隆帯による渦巻文を施す区画 (2単位) / 隆帯断面台形状・カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が沿う / 胴体土器	橙 / 砂粒中量、礫少量	勝坂 3b 新式
第54図2 図版49-2	深鉢	口縁部 胴部下位 80%	高 [38.4] 口 32.4 厚 1.2	キャリバー形 / やや外傾して立ち上がり上位が外反する胴部 / 下位は内湾し上位はやや外反する口縁部 / 4単位の波状口縁	地文は単節 RL 横位・斜位・縦位 / 口縁部区画と横文無文部を押圧文を付した1本の横位隆帯で帯す / 口縁部区画内C字状・逆C字状の隆帯と横位隆帯を組み合わせて楕円状区画文を形成 (5単位) / C字状・逆C字状の隆帯上に押圧文を付し、一部断面にも矢羽根状に付す / 楕円状区画内は中央の交互沈線文の両端に渦巻文を配す区画 (1単位残存)・中央の交互沈線文の左右に横位押圧文を配す区画 (2単位残存)が見られる。交互に配置か / 隆帯断面台形状・三角状、隆帯脇区画内2本の沈線、区画外1本の単沈線が沿う	明褐色 / 砂粒中量、礫微量	勝坂 3b 新式
第55図3 図版50-3	深鉢	口縁部～ 底部 90%	高 24.8 口 13.8 底 6.9 厚 1.0	屈折底部 / 外反する胴部 / やや外反する口縁部 / 外面に肥厚する口唇部	対称面に1単位ずつ棒状の把手あり、大きさに差があり、小さい把手は上部欠損 / 把手から90°の位置にそれぞれ縦線状突起・円形窪みのある突起が1単位ずつあり / 大きい棒状把手には上部に縦線状突起・側面に交互刺突文を付した隆帯・隆帯による渦巻文 / 小さい棒状把手には側面に交互刺突文を付した隆帯 / 隆帯によってU字状・逆U字状、三角状の区画に帯す / 区画内縦位沈線列・三角陣列・比較による三叉文・渦巻文等無文 / 一部隆帯上は押圧文を付す / 連続状隆帯 / 胴部文様帯下無文 / 隆帯断面台カマボコ状・三角状、隆帯脇1本の単沈線が沿う / 底面副代痕無し	明褐色 / 砂粒中量、礫微量	勝坂 3b 新式
第55図4 図版50-4	深鉢	口縁部～ 底部 90%	高 [37.2] 口 19.8 底 9.6 厚 1.0	屈折底部 / 外反する胴部 / 外傾し内湾する口縁部 / 平坦な底部	口縁部の対称面に1単位ずつ把手を貼付 / 頸部に横位1本の隆帯が帯る。隆帯上は交互刺突文の部分と押圧文無文後に上端に沿ってU字状の刺突文を付す部分が帯在 / 胴部上位と下位に押圧文を付した隆帯が横走し帯す / 幅広い隆帯・押圧文を付した隆帯・一部押圧文を付した幅広い隆帯によるU字状の区画文、先端が渦巻状を呈する隆帯が1単位重下 / 文様帯上端隆帯との境点には環状の突起・渦巻状の突起、沈線によるU字状の文様を付した粘土板状の突起を付す / 区画内沈線による渦巻文・三叉文状の文様・弧状の沈線等充填、一部沈線にU字状の刺突文が沿う / U字状の区画内は隆帯に沿って沈線・角押圧文充填 / 隆帯断面台形状・カマボコ状・隆帯脇1本または2本の単沈線・U字状の刺突文が沿う / 底面副代痕無し	明褐色～褐 / 砂粒・礫中量	勝坂 3b 新式

第26表 108号住居跡出土土器一覧1

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第56～58 図5 図版50～ 53.5	深鉢	口縁部～ 胴部中位 90%	高 [30.1] 口 24.4 底 9.0 厚 1.1	外積して広がる胴部/ く字状に強く内折 する口縁部	地文は単節 RL 斜位 / 口縁部折部に連続的隆帯が広がる / 口縁部は 人面把手1単位と蛇状の把手1単位が向き合う様に対称面に配 置 / 人面把手は中空で目はアーモンド形・口は楕円形・鼻は鼻 孔の表現あり、顔頂部に渦巻文を配し人面に沿って方形・孔の ある半円形の粘土を貼付、背面は右側に円形の孔を縦に沈嵌し よる渦巻文 / 背面顔頂部にU字状の突文を配すが一部欠損 / 隆 帯下位の縦線状把手まで垂下 / 胴部上面には蛇を模したと思 われる矢印状の隆帯のモチーフ、顔と思われる一角の部分には 断面に口と思われる沈嵌が引かれる。対称面に同様のモチーフ あり / 人面把手と向き合う様に蛇の頭状のモチーフ、目と口の 表現あり、背面下位に縦線状把手 / 把手側にU字状の隆帯と渦 巻文を組み合わせた装飾。対称面のもは欠損 / 人面把手から 90°の位置に前後左右に孔のある中空の把手、下位に円形の窪み のある突起 / 胴部上位に交互刺突文を付した1本の隆帯が横走、 下位に渦巻文 / 人面把手背面・蛇状のモチーフ・蛇頭状の把手 等に三角刺突列 / 一部ミガキ半調整等も見られるが外面顔面の手 まはざらつている	明黄褐色 / 砂 粒・礫多量	勝阪3b 新式
第58図6 図版54.6	深鉢	口縁部～ 底部 70%	高 22.4 口 (15.8) 底 7.6 厚 1.1	円筒形 / 外積しながら 立ち上がり内折する 胴部 / 直線的に外 積する口縁部 / 平坦 な底部	地文は無節 L 縦位・横位・斜位 / 口縁部無文 / 口縁部無文部と 文様帯を横走する1本の沈嵌で面す / 文様帯と渦巻文部分を 押圧文を付した横走する隆帯で面す / 胴部上位～中位に文様帯 / 縦位隆帯と先端にU字状の文様を付した隆帯で面す / 隆帯下位 は円形の文様 / 縦位沈嵌文列・三角刺突列・刺突文を斜位に沈嵌、 沈嵌による渦巻文 / 隆帯断面台形状、隆帯に1本または2 本の単沈嵌が沿う / 底面網代直無し	橙～黒褐色 / 砂粒中量、 礫少量	勝阪3b 新式
第59図7 図版51～ 54.7	深鉢	口縁部～ 底部付近 90%	高 [34.0] 口 22.6 厚 0.9	円筒形 / 外積しながら 立ち上がり上位が やや反折する胴部 / 外積しやや広がる口 縁部 / 口唇部は内側 に肥厚する	地文は0段多条 RL 縦位 / 口縁部の対称面に1単位ずつ把手を 貼付 / 文様帯内は押圧文・交互刺突文を付した隆帯で三角状・ 楕円状等に面し、押圧文を付した隆帯による渦巻文を配す / 区 画文に三叉文・沈嵌による渦巻文・一部に刺突文充填 / 隆帯 断面台形状・カマボコ状、隆帯脇1本または2本の沈嵌・U字 状の刺突文が沿う	褐色 / 砂粒中 量、礫少量	勝阪3b 新式
第59図8 図版54.8	深鉢	口縁部～ 底部 40%	高 34.1 口 (20.0) 底 8.8 厚 1.1	円筒形 / 外積しながら 直線的に立ち上る 胴部 / 直線的に外 積する口縁部 / 平坦 な底部	地文は0段多条 RL 縦位 / 口縁部無文 / 口縁部に突起1単位あり、 突起から断面三角状の隆帯が1本垂下 / 胴部上位に文様帯 / 文様帯と渦巻文部を明確に面す隆帯等は無し / 文様帯内縦位 隆帯、弧状の隆帯で面す / 隆帯上押圧文・交互刺突文、矢羽 根状刺突文を付す / 両端が粘土帯状に幅広になった隆帯を字 状に貼付 / 区画内沈嵌による三叉文・渦巻文 / 隆帯断面カマボコ状・ 三角状、隆帯脇1本の単沈嵌が沿う / 底面網代直無し / 外面胴 部中位に黒色の付着物 / 1層から出土	橙～黒褐色 / 砂粒中量、 礫微量	勝阪3b 新式
第60図9 図版54.9	深鉢	口縁部～ 胴部 70%	高 30.6 口 20.2 底 8.2 厚 1.0	円筒形 / 外積しながら 直線的に立ち上る 胴部 / 直線的に外 積する口縁部 / 口唇 部は内側に肥厚する / 平坦な底部	地文は0段多条 LR 縦位 / 口唇部に1単位あり / 口縁部無 文 / 胴部上位～中位に文様帯 / 口縁部無文部と文様帯内隆帯の 境点の境がなく同化 / 文様帯内隆帯で面す / 隆帯上一部押圧 文を付す、隆帯には一部粘土帯状の幅広の部分あり / 隆帯上よ る渦巻状の文様 / 沈嵌による三叉文 / 隆帯断面台形状・カマボ コ状、隆帯脇1本の単沈嵌が沿う	橙 / 砂粒中 量、礫少量	勝阪3b 新式
第60図10 図版55-10	深鉢	口縁部～ 底部 90%	高 32.8 口 18.2 底 8.0 厚 1.3	円筒形 / 僅かに内湾 しながら立ち上る 胴部 / やや内湾して 立ち上る口縁部 / 口 唇部内面で断面三 角状に肥厚	地文は0段多条 RL 縦位 / 口唇部に1単位の把手(欠損) / 口縁 部無文 / 口縁部と文様帯を横走する1本の沈嵌で面す / 文様帯 内は隆帯によって三角状・半円状・楕円状等に面す / 隆帯上は 一部に押圧文・沈嵌が見られる / 区画内は沈嵌による渦巻文・ 三叉文・縦位沈嵌文列、押圧文等無文 / 隆帯断面台形状・カマボ コ状、隆帯脇1本または2本の単沈嵌が沿う / 底面網代直無し	明褐色～黒褐色 / 砂粒中量、 礫少量	勝阪3b 新式
第60図11 図版55-11	深鉢	口縁部～ 底部 80%	高 35.2 口 20.1 底 8.6 厚 1.0	円筒形 / 外積しながら 直線的に立ち上る 胴部 / 直線的に外 積する口縁部 / 内側 に肥厚する口唇部	地文は0段多条 RL 縦位 / 口縁部無文 / 口縁部に突起あり / 文様 帯内は隆帯によって半円状・三角状等に面す / 縦位沈嵌文列、 三叉文、交互沈嵌文 / 隆帯の一部押圧文 / 交互刺突文・沈 嵌を付し、粘土帯状の幅広の部分も見られる / 隆帯による楕円 状の文様貼付、縁に押圧文内面に沈嵌による楕円を配す / 文様 帯と渦巻文部分横走する1本の隆帯で面す。隆帯上にも渦 巻文が沿う / 底面網代直無し	明褐色 / 砂 粒・礫中量	勝阪3b 新式
第61図12 図版55-12	深鉢	口縁部～ 底部 90%	高 30.3 口 15.9 底 8.1 厚 1.2	円筒形 / 外積しながら 直線的に立ち上る 胴部 / 直線的に外 積する口縁部 / 口唇 部は内側に肥厚する / 平坦な底部	口縁部・胴部下位無文 / 胴部中位に文様帯 / 押圧文を付した隆帯 が口唇部から1本垂下 / 口縁部無文部と文様帯を1本の横走する 沈嵌で面す / 文様帯と胴部下位無文部を明確に面す隆帯等は見ら れない / 文様帯内は押圧文・矢羽根状刺突文・沈嵌を付した隆帯 で不規則面に面す / 区画内縦位沈嵌文列・沈嵌による渦巻文等の 文様・三叉文・三角刺突文 / 隆帯断面三角状・カマボコ状・台 形状、隆帯脇1本または2本の単沈嵌が沿う / 2層から出土	橙～黒褐色 / 砂粒中量、 礫少量	勝阪3b 新式

第26表 108号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第61図13 図版56-13	深鉢	口縁部～ 胴部下位 80%	高33.4 口20.0 厚0.9	円筒形/外傾しなが ら直線的に立ち上 がる胴部/直線的に外 傾する口縁部/口脣 部は内側に肥厚する	地文は0段多条RL縦位/口縁部無文/胴部上位に文様帯/文 様帯と縄文飾文部分を押圧文を付した横走する1本の隆帯で両 側/口縁部から矢羽根状刺突文を付した1本の隆帯が垂下、文様 帯内の隆帯に繋がる/文様帯内には押圧文を付した隆帯で不整形 に溝す/区画内縦位紋列/沈線による三文文、円形刺突文、 沈線による渦巻文・横位U字状の文様/隆帯による渦巻文の側 面に押圧文/隆帯によるU字状・横位U字状の文様/隆帯断面 台形状・三角状、隆帯脇1本の単沈線が沿う/2層から出土	明黄褐色～黒 褐色/砂粒少 量、礫微量	勝坂3b 新式
第62図14 図版56-14	深鉢	口縁部～ 胴部下位 90%	高20.2 口16.0 厚0.8	円筒形/外傾しなが ら直線的に立ち上 がる胴部/直線的に外 傾する口縁部/口脣 部内面で断面三角状 に肥厚	地文は0段多条RL斜位/口縁部無文/口縁部に押圧文を付した 隆帯を横円状に貼付した突起と2本の隆帯を垂下させた突起を 対称面に付す/胴部上位～中心に文様帯/口縁部と文様帯一部 境に交互刺突横位飾文/文様帯と縄文飾文部分を横走する1本 の隆帯で両側す/文様帯内隆帯による三角状の区画文、逆U字状 の区画文等を配す/沈線による三文文、押圧文を付した隆帯に よる渦巻文、沈線を付した隆帯によるU字状・横位U字状の文 様/隆帯文様間を沈線による三文文、交互沈線文を充填/隆帯 と文様帯の境に交互刺突横位文/粘土帯状の幅広い隆帯による 五角形状の文様/隆帯断面カマボコ状・三角状・台形状、隆 帯脇1本または2本の単沈線が沿う/1層から出土	褐色/砂粒少 量、礫微量	勝坂3b 新式
第62図15 図版57-15	深鉢	口縁部～ 胴部上位 60%	高26.5 口28.0 厚1.1	円筒形/やや外傾す る胴部/やや外傾す る口縁部	口縁部無文/口縁部の対称面に環状の把手、把手から環状の 隆帯が垂下/胴部は押圧文を付した隆帯、連続状隆帯で不規則 に溝す/区画内内は沈線による三文文、交互刺突文を施文、隆 帯による環状の文様/隆帯断面台形・カマボコ状、隆帯脇2本 1対の沈線が沿う	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	勝坂3b 新式
第63図16 図版57-16	深鉢	口縁部～ 胴部上位 50%	高22.2 口16.3 厚1.1	円筒形/ほぼ直立の 胴部/ほぼ直立の口 縁部	地文はRL縦位/口縁部無文/口脣部に突起、突起から隆帯が垂 下、対称面の口脣部に突起の痕跡あり/胴部上位から中心に文 様帯/隆帯によるU字状の文様、連続状隆帯、突起から隆帯 に繋がる幅広い隆帯の隆帯/縦位沈線が沿う、交互沈線文/隆帯 断面三角状・カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が縦部分と接 かない部分あり	暗褐色/砂粒 少量、礫微 量	勝坂3b 新式
第63図17 図版58-17	深鉢	胴部上位 ～底部 40%	高34.5 底(11.5) 厚1.1	円筒形か/外傾しな がら立ち上がる胴部 /平坦な底部	胴部上位から中心に文様帯/文様帯内押圧文を付した隆帯で三 角状に溝す/区画内内は沈線による三文文、交互刺突文を施文、 隆帯下部無文/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本または 2本の単沈線が沿う/2層から出土	褐色/砂粒中 量、礫少量 、粒色粒多量	勝坂3b 新式
第64図18 図版58-18	深鉢	口縁部～ 底部 80%	高34.4 口20.4 底7.8 厚12.2	樽形/外傾しなが ら立ち上がり上位は 内湾する胴部/下位が やや内傾し上位は外 傾する口縁部/口脣 部は内側に肥厚する	地文は単節RL縦位・斜位/口縁部無文/口縁部から1本渦巻文 に向て垂下/口縁部と文様帯を横走する1本の沈線で両側す/ 文様帯と縄文飾文部分を押圧文を付した横走する1本の隆帯で 両側す/胴部上位～中心に文様帯/隆帯内には押圧文を付した 隆帯(一部の隆帯上沈線飾文)による渦巻文、横円状の区画文飾 文/横円状区画内に三角刺突文/文様帯内沈線による三文文飾文 /交互沈線文/隆帯断面台形状・カマボコ状、隆帯脇1本の単沈 線が沿う/底部に副代痕なし	褐色/砂物中 量、礫微量	勝坂3b 新式
第64図19 図版59-19	深鉢	口縁部～ 底部 60%	高42.2 口(19.8) 厚0.9	屈折底部/ほぼ直立 して立ち上がる胴部 /外反する頸部/内 湾する口縁部/口縁 部先端が内折	口縁部無文/対面に1単位ずつ把手貼付(1単位は上部欠損)/ 把手は口縁部に横円形の粘土を貼付した溝から押圧文を付した 1本の隆帯が垂下、頸部に環状状把手貼付/胴部に文様帯/文 様帯内には押圧文、矢羽根状刺突文を付した隆帯による平円状・ 三角状・不整形な区画文飾文/区画内三文文、同心円状の文様・ 縦位紋列・交互沈線文/文様帯下部無文/隆帯断面三角状・ 台形状・カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	暗褐色/砂粒 中量、礫少 量	勝坂3b 新式
第65図20 図版60-20	深鉢	口縁部～ 底部 70%	高43.5 口39.0 底10.5 厚1.2	外傾しながら立ち上 がり胴部内湾し括 れる胴部/外反する 頸部/内湾し上位は 内側に内湾する口縁 部	地文は0段多条RL斜位/口縁部に4単位の把手あり、把手側 面に渦巻文・側面に押圧文を付した隆帯による区画文、円形 の文様・渦巻文、沈線による三文文、縦位3列の押圧文(1ヶ所)/ 胴部中部無文/隆帯断面台形状・三角状、隆帯脇に1本又は2 本の沈線が沿う部分と沈線が沿わない部分あり	暗褐色/砂 粒・礫少量	勝坂3b 新式
第65図21 図版61-21	深鉢	口縁部～ 胴部上位 60%	高21.5 口(29.2) 厚1.1	外傾して広がる胴部 /外傾して内湾す る口縁部	口縁部に突起状の部分あり(1単位残存)/斜位の沈線または交 互刺突文を付した1本の隆帯で口縁部を両側す/円形の粘土から 1本または2本の隆帯が弧状に伸びる文様・三文文/口縁部文 様帯下部無文/隆帯断面三角状・カマボコ状、隆帯脇1本の単 沈線が沿う	暗褐色/砂粒 中量・礫少 量	勝坂3b 新式
第66図22 図版61-22	深鉢	口縁部	高21.0 口(34.0) 厚1.1	上位は内湾し下位は 外傾する口縁部	口縁部に把手あり、把手から隆帯が垂下、途中で左右に伸び半 円状の区画文形成/隆帯上は矢羽根状の押圧文、縦位、斜位の 押圧文あり/区画内は沈線による渦巻文、交互刺突文等の文様 を充填/円形の窪みのある突起	黒褐色/砂粒 中量、礫少 量	勝坂3b 新式
第66図23 図版61-23	深鉢	胴部	高10.4 厚1.2	内湾する胴部、上位 は外反	矢羽根状の押圧文を付した隆帯が1本横位に走る/横位隆帯から 連続状隆帯を弧状に貼付(3単位残存、元は4単位と思われる)、 横位隆帯と接する部分に3つの押圧文大型文/弧状の隆帯内は沈 線による文様、外側は無文	暗褐色/砂粒 少量、礫微 量	勝坂3b 新式
第66図24 図版61-24	深鉢	口縁部～ 胴部下位 50%	高32.0 口(22.8) 厚1.5	屈折底部/中心は外反 し上位は内湾する胴部 /括れる頸部/外傾し 上位が平坦する口縁部	地文は白濁巻文LR縦位/口縁部に大型の把手/口縁部無文/頸 部に交互刺突文を付した隆帯が1本横走/2層から出土	暗～暗褐色/ 砂粒中量、 礫少量	勝坂3b 新式

第26表 108号住居跡出土土器一覽3

第3章 検出された遺構と遺物

検出番号 図版番号	種別 種類	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第 66 図 25 図版 62-25	深鉢	口縁部～ 頸部 30%	高 [15.2] 口 24.0 厚 0.9	外反する頸部/内湾する口縁部付近	地文は 0 段多条 瓦 斜位・縦位/口唇部に連続状隆帯が走る/口縁部下端に矢羽根状刺突文・刺突文を付した隆帯が走る/沈線が付した隆帯を弧状に配す/隆帯断面カマボコ状/108Jと114Jとの連続間接合	暗褐色/砂粒中量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 67 図 26 図版 62-26	深鉢	口縁部～ 胴部下位 90%	高 [21.0] 口 12.2 厚 1.0	内湾する胴部/括れる胴部/内湾する口縁部/口唇部は内側に肥厚	口縁部無文/口唇部に半円状の突起 1 単位/突起の対称面に、把手 1 単位、上面に孔があり深さ 4cm 程、下端に眼鏡状把手、外面に 3 本の隆帯を横位に貼付/一部胴部に交互刺突文を付した隆帯を横位に貼付/胴部上位に文様帯、押圧文を付した 1 本の横位隆帯で下位の無文帯と両す/文様帯内は三角押圧文・交互刺突文・押圧文を付した隆帯で半円状・三角状、円形内に区画/区画文沈線による渦巻文、渦巻文の周囲に弧状の沈線を充填/隆帯断面カマボコ状・台形状・三角状、隆帯幅 1 本の単沈線が沿う	明褐色/砂粒中量、礫少量	勝阪 3b 新式
第 67 図 27 図版 63-27	深鉢	口縁部 90%	高 [16.8] 口 14.9 厚 0.9	やや外傾して立ち上がる胴部/外反する頸部/内湾する口縁部/口唇部内側に肥厚	地文は 0 段多条 瓦 縦位・斜位/口縁部に対称面に 1 単位ずつ直状の隆帯垂下、矢羽根状刺突文を付した断面三角状の隆帯は頸部横位隆帯まで垂下、押圧文を付した隆帯は途中欠損のため胴部に垂下する隆帯と繋がるか不明/押圧文を付した隆帯 1 本が胴部に横走/頸部から胴部に押圧文を付した隆帯 1 本が直状に垂下/隆帯断面三角状・台形状、頸部隆帯幅沈線無し、垂下する隆帯幅 1 本の単沈線が沿う	明褐色/砂粒少量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 67 図 28 図版 63-28	深鉢	口縁部～ 底部 100%	高 25.9 口 14.6 底 7.5 厚 1.1	下位はやや内湾し中位からほぼ直立に立ち上がる胴部/ほぼ直立の口縁部/口唇部は内側に肥厚/平坦な底面	縦位の単沈線を充填/底面から 6cm 程は無文/底面に網代紋なし、襷敷が見られる/外面胴部上位に黒色の付着物が少量見られる	褐色・黒褐色/砂粒多量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 67 図 29 図版 63-29	深鉢	口縁部～ 胴部上位 90%	高 20.2 口 16.0 厚 0.8	下位は内湾し上位に括れるある胴部/括れる胴部/外傾し直状に広がる口縁部/口唇部は内側に肥厚	口唇部に半円状の把手を貼付し、先端が胴部の横位隆帯に垂下/把手には押圧文・垂下する隆帯上には矢羽根状刺突文・半円状の把手の対称面の口唇部から隆帯が 1 本頸部の眼鏡状把手に垂下/頸部・胴部の括れ部に押圧文を付した(一部押圧文無し)1 本の隆帯がそれぞれ横走/胴部中位に押圧文を付した隆帯による区画文、渦巻文/区画文内沈線による渦巻文/隆帯断面台形状・三角状・カマボコ状、隆帯幅 1 本の単沈線が沿う/2層から出土	褐色/砂粒少量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 68 図 30 図版 63-30	深鉢	口縁部～ 胴部 70%	高 [16.4] 口 13.4 厚 0.7	内湾する胴部/括れる胴部/内湾しやや外傾する口縁部	口縁部無文/把手 1 単位/把手には上面に 1 つ・口縁部と胴部に 1 つずつ左右に貫通する孔あり、突起上面から押圧文を付した隆帯が 1 本垂下、隆帯から左右に複数の沈線無文/押圧文を付した隆帯が 1 本頸部に走る/胴部には隆帯上に沈線を加飾した隆帯による文様貼付/隆帯断面台形状、隆帯幅 1 本の単沈線が沿う	褐色/砂粒少量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 68 図 31 図版 63-31	深鉢	胴部中位～ 底部 80%	高 [17.9] 底 9.0 厚 1.0	円筒形か/やや広がりながら立ち上がる胴部/平坦な底面	地文は単筋 瓦 横位/1 本の連続状隆帯で上位文様帯部分と下位無文部分と両す/連続状隆帯上に 2 本の隆帯が僅かに現存/文様帯部分に三叉文/隆帯断面カマボコ状・台形状、隆帯幅位置部 1 本の沈線が沿う、一部押し付けて貼付/底面網代紋なし	明褐色/砂粒少量、礫微量	勝阪 3b 式
第 68 図 32 図版 64-32	深鉢	口縁部～ 胴部中位 50%	高 [22.4] 口 [25.7] 厚 0.9	外反する胴部/内湾する口縁部	地文は LR 縦位・斜位・口縁部上位は羽状か/口縁部上端の無文帯を口縁部に沿う 1 本の沈線で両す/胴部上位は無文帯による円形・渦巻状の文様、下位は逆 U 字状の無文帯/2層から出土	灰褐色/砂粒少量、礫微量、赤色粒多量	加曾利 E4 式
第 68 図 33 図版 64-33	小形深鉢	口縁部～ 胴部 40%	高 [7.1] 口 10.5 厚 0.9	外反して広がる胴部、ほぼ直立する口縁部	3 本の沈線を半円状に施文、口縁と沈線間に縦位沈線を充填/半円状の沈線間には一部交互沈線無文/沈線による渦巻文/直状の沈線を口縁部から多数垂下/文様は全体的に粗い	赤褐色/砂粒少量、礫微量	勝阪 3b 式
第 68 図 34 図版 64-34	浅鉢	口縁部～ 底部下位 40%	高 [13.8] 口 [31.6] 厚 1.0	内湾し広がりながら立ち上がる体部/波頭部は強く内湾、間隙部分はやや内湾強まる口縁部/上面から見た形状は隅丸方形	無文	明褐色/砂粒中量、礫少量	阿玉台式か
第 69 図 35 図版 64-35	浅鉢	口縁部～ 体部下位 70%	高 [18.4] 口 38.4 厚 0.9	下位は外傾し広がる体部/内湾し上位はやや外傾する口縁部	口縁部無文/押圧文を付した横位 1 本の隆帯で体部と文様帯を両す(一部隆帯上押圧文無し)/押圧文を付した隆帯による楕円状の区画文、区画文内縦位沈線列、1 本おきに沈線に沿って押圧文・楕円状区画文間を押圧文を付した隆帯による横位 S 字状の文様を 1 単位または 2 単位配す、弧の内側に三角押圧文列/沈線による渦巻文等施文/横位 S 字状も文様周囲に三叉文充填/体部無文/隆帯断面台形状・三角状、隆帯幅 1 本の単沈線が沿う、横位隆帯下端はなで付けて貼付、一部隆帯の絶たれあり	褐色/砂粒中量、礫微量	勝阪 3b 新式
第 69 図 36 図版 64-36	浅鉢	口縁部～ 体部 60%	高 [7.2] 口 [40.0] 厚 0.8	僅かに外傾する口縁部/内湾する体部	無文/口唇部、内面に赤色顔料残存	赤褐色/砂粒・礫少量	勝阪 3b 式

第 26 表 108 号住居跡出土土器一覧 4

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第69図37 図版64-37	浅鉢	口縁部～ 体部下位 80%	高116.4 口49.2 厚1.2	外傾して広がり上位 で内折する体部/外 傾し広がる口縁部	無文/外面体部屈曲部上位、内面口縁部に少量の赤色顔料残存 /2層から出土	褐～黒褐/ 砂粒・礫中量	勝坂3b 新式
第70図38 図版65-38	浅鉢	口縁部～ 体部 30%	高119.5 口46.7 厚0.7	外傾して広がる体部 内湾して上位が直線 的に外傾する口縁 部	地文は単筋RL斜位/口縁部外形部分無文、下位に交互刻突文に よる蛇行文様の文様が横走/体部下位で2本1対の隆帯を波状 に貼付し無文部と面す/上位に隆帯による円形の文様・十字状 の文様・渦巻文・楕状把手/外面には赤色顔料が多量に残存し、 内側には黒色顔料による文様が描かれる	明黄褐/砂 粒中量、礫 少量	大木8a 式
第70図39 図版65-39	ミニ チャム 土器	底部 100%	底42.5 口径4.2 厚0.7	平坦な底面	残存部無文/底面に網代復し	明褐/砂粒 少量、礫微 量	中期
第70図40 図版65-40	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部、口 唇部は外傾	2列の結節沈線文による逆U字状の文様	褐/砂粒・ 礫微量、雪 母少量	阿玉台 1b式
第70図41 図版65-41	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部、口 唇部は外傾	隆帯による楕円状の区画文/区画隆帯内側に1本の結節沈線文が沿う/隆帯断面歪んだ三角状～カマボコ状	いぶい/褐/ 砂粒・礫・ 雪母少量	阿玉台 1b式
第70図42 図版65-42	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	僅かに内湾する口縁 部	椀状の粘土を縦位に貼付、4つの粘土帯を上に乗せて貼付/隆帯 による口縁部区画、上端は口縁と同化、下端は1本の隆帯/先端 に丸みを帯びた工具による角押文を区画に沿って施文、区画内に 縦位、V字状に施文/隆帯断面三角状/2層から出土	明赤褐/砂 粒・礫中量	阿玉台 1b式
第70図43 図版65-43	深鉢	口縁部 破片	厚0.8～ 1.3	上位はやや外反、下 位はやや内湾する口 縁部	口縁部に沿う押引状の爪形文、内側に沈線と沈線によるU字状 の文様施文/内側に彫り沈線を充填	黒褐/砂粒・ 礫微量、雪 母少量	阿玉台 Ⅲ式
第70図44 図版65-44	深鉢	口縁部付 近 破片	厚1.2	内湾する口縁部付近	眼鏡状の把手、孔は無く貫通していない/把手から隆帯が楕円 状に伸びる、隆帯内側に沿って幅広角状の押圧文施文/隆帯断面 三角状～台形状	いぶい/褐/ 砂粒・礫微 量	阿玉台 Ⅲ式
第70図45 図版65-45	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部/把 手はほぼ直立	地文は単筋RL横位・斜位/中央に楕円形の孔のある把手、上部 は欠損しているが左右に貫通する孔の跡あり/上面にも縦文 施文/眼鏡状把手、縄文は眼鏡状把手側にも無文	褐/砂粒中量 、礫微量	阿玉台 Ⅲ式の系 統か
第70図46 図版65-46	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部/ 強く外反する胴部/ 内湾する口縁部	口唇部に押圧文施文/口縁部無文/口縁部と胴部を縦位1本の 隆帯で面した赤線があるが隆帯が断面とはほぼ同化/胴部に1本 の沈線が巡る/押圧を付した隆帯を逆U字状に貼付/沈線に沈 線が沿い、幅広角状文と爪形文(温泉マーク文)、内側に沈線に よる三叉文/隆帯断面台形状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐/砂粒微 量、礫少量	勝坂2b 式
第70図47 図版66-47	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	口縁部に中位の把手、外面の孔1つ、内面の孔2つ/外面は押 圧文を付した隆帯を貼付/内面は上部に縦位の三角押文を充填、 側面に爪形文を施文/隆帯断面台形状・カマボコ状、隆帯脇な で付けて貼付/残存部口縁部無文	黒褐/砂粒 ・礫少量	勝坂2 ～3式
第71図48 図版66-48	深鉢	口縁部～ 胴部中位 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部/ ほぼ直立する口縁部	地文は0段多条RL斜位/口縁部無文/胴部上位に文様帯あり、 隆帯によるU字状の区画・隆帯右側は幅広の連続状隆帯/左側 隆帯上には交互の押圧文、矢羽根状刻突文/区画内沈線による三 叉文/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐/砂粒中量 、礫微量	勝坂3b 新式
第71図49 図版66-49	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部/内 側は肥厚し外反する 口唇部	口縁部上部無文/粘土層を突起状に貼付、組状の隆帯による渦 巻文施文/組状の隆帯を波状に貼付	暗褐/砂粒 中量、礫・ 雪母微量	勝坂3b 新式
第71図50 図版66-50	深鉢	胴部 破片	厚1.3	上位内湾、下位はや や外傾する胴部	押圧文を付したC字状の隆帯を貼付し、上端は側面と同化する 楕円状の区画文/区画内側に沈線による楕形S字状の文様、楕 形3本の沈線施文/隆帯断面台形状、隆帯脇外側などで付けて貼付、 内側沈線が沿う	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	勝坂3b 新式
第71図51 図版66-51	深鉢	口縁部付 近～上位 破片	厚0.8	やや外傾する胴部上 位/内湾する口縁部 付近	地文は単筋RL斜位/2本1対の隆帯で渦巻状、波状の文様施文 /隆帯断面角状・カマボコ状、隆帯脇などで付けて貼付、接着 が悪い	褐/砂粒・ 礫少量	勝坂3b 新式
第71図52 図版66-52	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外反する胴部	地文は渦巻R、横位隆帯上部縦位施文、下部縦位施文/押圧文 を付した隆帯が直状に垂下、縦位波状の隆帯と接する、逆U字 状/隆帯断面カマボコ状、直状の隆帯脇と波状隆帯上端などで付 けて貼付	黒褐/砂粒 ・礫中量	勝坂3b 新式
第71図53 図版66-53	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外傾する胴部	幅広の隆帯を弧状に貼付、上部と下部で幅が異なる、側面に押 圧文/縦位隆帯と弧状の隆帯を縦位の隆帯が繋ぐ、横位隆帯上 1本の沈線施文・弧状の隆帯との境目に押圧文施文/隆帯断面 台形状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	いぶい/黄褐/ 砂粒・礫 中量	勝坂3b 新式
第71図54 図版66-54	深鉢	把手部 破片	厚0.7	内湾しなから外傾す る把手部/縁は内側 に肥厚/器を平載し たような形状	外面に矢羽根状刻突文を付した隆帯が垂下/隆帯の左右に半球 状の粘土層貼付	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	勝坂3b 式
第71図55 図版66-55	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直率する胴部	2本の隆帯を接して1本にした隆帯を直状に垂下/下部押圧文 を付した隆帯による渦巻文/比較的による三叉文/隆帯断面台形 状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐/砂粒中量 、礫微量	勝坂3b 式

第26表 108号住居跡出土土器一覽5

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第71図56 図版66-56	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外積する胴部	連続した隆帯を縦位に貼付/一部隆帯が弧状に沿う	明赤陶/砂粒・礫微量	勝飯3b式
第71図57 図版66-57	深鉢	把手部 破片	厚2.4	ほぼ直立する把手	波頂部は孔が左右に貫通、波頂部下部は内外面に孔が貫通/外面に押圧文を付した隆帯を波状に貼付、先端は渦巻く・隆帯側に半球状の隆みあり/把手縁に沿う押圧文/沈線による三文文・沈線充填/内面一部に斜位沈線無文	明赤陶/砂粒・礫微量	勝飯3式
第71図58 図版66-58	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/内側に肥厚する口唇部	口唇部に孔のある把手/把手上部に粘土が剥落した痕跡あり/把手両側面に押圧文を付した隆帯による加飾/残存部口縁無文	にぶい黄褐色/砂粒・礫微量	勝飯3式
第71図59 図版66-59	深鉢	胴部～ 頸部 破片	厚1.0	外反する口縁部～頸部	縦線状把手/把手下部に1本の隆帯を縦位に貼付/把手下部に押圧文を付した隆帯が僅かに残存/2本の垂下する沈線間に矢羽根状の刺突文	暗赤陶/砂粒少量・礫微量	勝飯3式
第71図60 図版66-60	深鉢	胴部 破片	厚1.3	ほぼ直立する胴部	地文は単筋L縦位/横位隆帯で胴部下部を画す/上部は押圧文を付した隆帯による渦巻文・渦巻文内部に円形刺突文・隆帯に沿う沈線/隆帯周囲に沈線による文様を充填か/横位隆帯断面方マボコ状、隆帯脇まで付けて貼付/渦巻文隆帯断面台形状、隆帯脇1本の単沈線に沿う	濁/砂粒少量・礫微量	勝飯3式
第71図61 図版66-61	深鉢	胴部 破片	厚1.3	ほぼ直立する胴部	地文は単筋L縦位/押圧文を付した隆帯を横位に貼付/108J-61、62は同一個体	明赤陶/砂粒・礫少量	勝飯3式
第71図62 図版67-62	深鉢	胴部 破片	厚1.1	下位はやや内湾し上位はほぼ直立する胴部/平坦な底部	地文は単筋L縦位/108J-61、62は同一個体/3層から出土	明赤陶/砂粒・礫少量	勝飯3式
第72図63 図版67-63	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	内積する胴部/外積する口縁部	地文はRRの反響/口縁部に沿って1本の沈線無文、途中までは2本/口縁に沿って沈線による渦巻文、U字状の文様の間に2本の沈線を加えた文様等様々な文様を無文	暗赤陶/砂粒少量・礫微量	勝飯式 期並行か
第72図64 図版67-64	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	内湾する口縁部	地文は単筋L横位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端欠損/2本の隆帯の先端が突起状になり渦巻文無文、渦巻文下位から弧状の隆帯垂下/隆帯断面方マボコ状	暗赤陶/砂粒中量・礫少量	加曾利E1b式
第72図65 図版67-65	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外反する頸部/内湾する口縁部	地文は単筋L縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端1本/2本1対の隆帯による文様/1本の短い縦位隆帯/隆帯断面方マボコ状/頸部無文	黒濁/砂粒中量・礫微量	加曾利E1b式
第72図66 図版67-66	深鉢	胴部 破片	厚1.1	内湾する胴部	地文は単筋L縦位/1本の隆帯が波状に垂下/2本1対の隆帯、1本の隆帯が直位に垂下/隆帯断面方マボコ状/内面に黒色の付着物が少量残存	濁/砂粒少量・礫微量	加曾利E1b式
第72図67 図版67-67	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや内湾する胴部	地文は単筋RL縦位/2本1対の隆帯による文様/隆帯断面台形状～マボコ状	濁/砂粒少量・礫微量	加曾利E1c式
第72図68 図版67-68	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	口縁部に把手あり、左右の孔が貫通、正面には沈線による渦巻文/区画内縦位沈線充填/口縁に沿って先端に渦巻文のある沈線無文	にぶい黄褐色/砂粒・礫少量	加曾利E1～2式
第72図69 図版67-69	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.6	やや内湾する胴部/強く外反して広がる頸部/内湾する口縁部	地文は単筋RL縦位/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で画す/2本1対の弧状の隆帯先端に渦巻文無文、1つは突起状/口縁部区画内縦位沈線充填/頸部無文/頸部と胴部を横走する3本1対の沈線で画す/胴部に3本1対の沈線が直位に垂下/4単位残存/隆帯断面角状・マボコ状/11日出土の破片と遺構間適合	暗赤陶/砂粒・礫微量	加曾利E2a式
第72図70 図版67-70	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚1.0	内湾する口縁部付近～胴部	地文は横位隆帯上部単筋RL縦位、下部条線文縦位/横位隆帯の上下で地文が異なる/上部は隆帯を弧状に貼付、内部にも渦巻文/隆帯断面台形状・マボコ状、隆帯脇まで付けて貼付	にぶい黄褐色/砂粒少量・礫微量	加曾利E3式か
第72図71 図版67-71	深鉢	胴部 破片	厚1.0	内湾する胴部	地文は沈線縦位/押圧文を付した隆帯を弧状に貼付	明赤陶/砂粒・礫少量	曾利1式
第72図72 図版67-72	深鉢	頸部～胴部 破片	厚0.9	内湾する胴部/外反する頸部	押圧文を付した隆帯が2本直位に垂下/隆帯の左右から総状の隆帯が頸部に巡る/弧状の沈線を充填/隆帯断面方マボコ状	暗赤～赤黒陶/砂粒少量・礫微量	曾利1式 後集
第72図73 図版67-73	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外反する胴部	地文は縦位条線文、胴部に施文/3本1対の沈線による連弧文、2段/3本1対の沈線が横位に貼付	濁/砂粒少量・礫中量	連弧文 2b段段
第72図74 図版67-74	浅鉢	口縁部 破片	厚1.0	外積する口縁部	無文/口唇部に少量、内面に多量の赤色顔料が残存	明赤～黒/砂粒・礫微量	中野中集～後集
第72図75 図版67-75	浅鉢	口縁部 破片	厚1.0	外反する口縁部/外側に肥厚する口唇部	無文/外面、口唇部、内面に多量の赤色顔料が残存	にぶい濁～黒/砂粒微量・礫少量	中野中集～後集
第72図76 図版67-76	浅鉢	胴部 破片	厚0.9	外積する胴部	残存部無文/内面に赤色顔料が多く残存	黒/砂粒少量・礫微量	中野中集～後集
第72図77 図版67-77	ミニチュア土器	口縁部 破片	厚0.8	やや外積する口縁部	口縁部付近に2ヶ所突起状の膨らみが見られる/器面全体に凹凸あり	明濁/砂粒・礫微量	中期
第72図78 図版68-78	ミニチュア土器	胴部 破片	厚0.8	上部は外反し下部は内湾する胴部	地文は無筋L横位/横位2本の沈線、沈線間に角片形でU字状の文様無文、工具は先端にやや丸みを帯びる/やや小形の土器	濁/砂粒少量・礫微量	中期か

第26表 108号住居跡出土土器一覽6

神宮番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第73図79 図版68-79	土器 片鏝	30%	[3.1]/4.3/0.8	12.2	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は顕著/胴部片利用/結節状文様	にぶい黄褐色/砂粒・礫微量	阿玉台式か
第73図80 図版68-80	土器 片鏝	完形	3.3/3.7/1.0	19.1	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/爪形文に波状文様が沿う	赤褐色/砂粒・礫微量	勝版2b式
第73図81 図版68-81	土器 片鏝	90%	[4.4]/3.3/1.2	26.5	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/爪形文に波状文様が沿う	明褐色/砂粒・礫微量	勝版2b式
第73図82 図版68-82	土器 片鏝	完形	3.5/3.1/1.0	16.1	楕円形か/抉部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/押圧文を付した隆帯貼付/半乾竹管状工具の断面による平行状線あり、隆帯断面がマゴコ状、隆帯脇1本の単比線が沿う	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫微量	勝版3式
第73図83 図版68-83	土器 片鏝	完形	5.1/3.8/1.8	46.9	方形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/口縁部片利用/弧状の隆帯	明褐色/砂粒中量、礫微量	勝版3式
第73図84 図版68-84	土器 片鏝	60%	[3.9]/3.5/1.0	22.8	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/押圧文を付した隆帯貼付、隆帯断面がマゴコ状、隆帯脇1本の単比線が沿う	黒褐色/砂粒少量、礫微量	勝版3式
第73図85 図版68-85	土器 片鏝	50%	[3.3]/3.7/1.1	18.2	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/胴部片利用/地文は0段多条線、無文	明褐色/砂粒・礫微量	勝版3式
第73図86 図版68-86	土器 片鏝	完形	6.6/4.1/1.3	59.3	方形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/地文は断糸文Lか/隆帯貼付、隆帯断面が台形、隆帯脇などで付て貼付	褐色/砂粒少量、礫微量	勝版3 ~加曾利E1式
第73図87 図版68-87	土器 片鏝	完形	7.9/5.4/1.0	66.7	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁はほぼ磨耗/口縁部付近の破片利用/地文は断糸文L、横位/2本1対の隆帯による弧状の文様/横位1本の隆帯の先端が丸まる文様/隆帯断面がマゴコ状	暗灰黄/砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第73図88 図版68-88	土器 片鏝	完形	5.3/3.1.2	25.8	不整形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は複節LRI/波線文様	にぶい黄褐色/砂粒・礫微量	加曾利E1式
第73図89 図版68-89	土器 片鏝	完形	3.8/2.8/1.0	14.6	方形か/抉部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/地文は断糸L、無文	黒褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図90 図版68-90	土器 片鏝	90%	[4.5]/3.1/1.0	16.7	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は断糸L、無文	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図91 図版68-91	土器 片鏝	80%	4.2/[3.5]/1.1	17.6	方形か/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は単節RI、無文	にぶい黄褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図92 図版68-92	土器 片鏝	60%	3.2/[3.1]/1.3	15.4	楕円形か/抉部は1ヶ所残存、もう1ヶ所は非常に不可解だが反対側に抉部と思われる痕跡が僅かに残る/胴部片利用/地文は単節RI、無文	褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図93 図版68-93	土器 片鏝	完形	8.0/4.6/0.8	62.2	楕円形か/抉部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/無文/外面に多量、口唇部と内面に微量の赤色顔料残存	暗褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図94 図版68-94	土器 片鏝	完形	5.8/3.2/1.2	32.1	方形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/口縁部片利用/無文/赤色顔料残存	暗褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図95 図版68-95	土器 片鏝	完形	5.7/4.2/0.9	34	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	明褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図96 図版68-96	土器 片鏝	完形	4.8/3.9/0.8	17.5	方形/抉部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	暗褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図97 図版68-97	土器 片鏝	完形	3.8/3.2/0.8	15.6	方形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒・礫微量、雲母中量	中期中葉 ~後葉
第73図98 図版68-98	土器 片鏝	70%	3.8/3.6/[1.0]	14.4	方形か/抉部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/外面割落のため文様不明	黒褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図99 図版68-99	土器 片鏝	80%	[6.0]/5.1/0.9	40.1	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	黒褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図100 図版68-100	土器 片鏝	30%	[4.9]/[5.6]/1.0	36.3	方形か/抉部は1ヶ所残存/残存する周縁はほぼ磨耗/胴部片利用/無文	赤褐色/砂粒・礫少量	中期中葉 ~後葉
第73図101 図版68-101	土器 片鏝	40%	[3.9]/5.3/0.8	24.8	楕円形か/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	黒褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図102 図版68-102	土器 片鏝	30%	[4.6]/5.4/0.9	25.2	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文/内面に赤色顔料が僅かに残存	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図103 図版68-103	土器 片鏝	70%	[4.2]/3.9/0.9	19.2	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	黒褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図104 図版68-104	土器 片鏝	30%	[2.5]/4.5/0.8	12.1	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文/縁に焼成前穿孔の孔と思われる痕跡あり、内面微量の赤色顔料残存	黒褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図105 図版68-105	土器 片鏝	50%	[3.3]/3.3/0.8/	11.6	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	暗褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図106 図版68-106	土器 片鏝	40%	[3.5]/[4.2]/1.1	14.2	方形か/抉部は1ヶ所残存/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図107 図版68-107	土製 円盤	完形	5.6/5.2/1.0	34.5	楕円形/周縁は顕著に磨耗/底部片利用/網代痕あり	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉 ~後葉
第73図108 図版68-108	土製 円盤	完形	4.8/3.6/1.1	28.3	方形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	灰黄褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ~後葉

第27表 108号住居跡出土土製品一覽

神岡番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 74 図 109 図版 68-109	楔形石器	黒曜石	18.4	13.2	3.9	0.9	上下に両側割離が認められる
第 74 図 110 図版 68-110	打製石斧	頁岩	80.9	32.0	13.5	50.9	短冊形 / 基部と刃部は折れて欠損している / 表面に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる / 右側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、一部が面状になっている
第 74 図 111 図版 68-111	打製石斧	ホルンフェルス	72.1	35.2	19.0	68.6	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 74 図 112 図版 68-112	打製石斧	ホルンフェルス	99.4	40.5	17.9	87.4	短冊形 / 基部は一部折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の中央部の稜上に潰れが認められ、一部が面状になっている / 右側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 113 図版 68-113	打製石斧	ホルンフェルス	97.8	45.6	14.2	92.9	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 左側縁中央部が磨滅している / 両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の中央部の稜上に潰れが認められる / 右側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 114 図版 68-114	打製石斧	ホルンフェルス	101.0	46.6	11.5	61.8	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 115 図版 69-115	打製石斧	ホルンフェルス	73.1	43.4	16.1	51.5	楕形 / 基部は一部折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 116 図版 69-116	打製石斧	緑色凝灰岩	84.9	47.1	21.8	118.1	楕形 / 磨製石斧の転用 / 基部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第 74 図 117 図版 69-117	打製石斧	片状砂岩	91.6	46.2	21.1	102.2	楕形 / 基部と刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の稜上に箇所的に潰れが僅かに認められる
第 74 図 118 図版 69-118	打製石斧	ホルンフェルス	92.2	68.0	22.4	147.8	楕形 / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 119 図版 69-119	打製石斧	砂岩	100.0	63.2	31.8	234.2	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、左側縁が面状になっている / 右側縁の潰れはほとんど見られない
第 74 図 120 図版 69-120	打製石斧	砂岩	56.7	41.2	19.8	50.8	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁に潰れはほとんど見られない / 右側縁は箇所的に潰れが僅かに認められる
第 74 図 121 図版 69-121	打製石斧	ホルンフェルス	55.3	37.5	14.9	45.9	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 左側縁に潰れはほとんど見られない / 右側縁は箇所的に潰れが僅かに認められる
第 75 図 122 図版 69-122	打製石斧	砂岩	59.7	42.4	25.4	83.0	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、面状になっている
第 75 図 123 図版 69-123	打製石斧	ホルンフェルス	57.1	45.4	13.3	40.9	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 75 図 124 図版 69-124	二次加工 刮片	黒曜石	24.2	14.6	3.8	1.2	両側縁に連続的な二次的割離が認められる
第 75 図 125 図版 69-125	二次加工 刮片	緑泥片岩	92.3	78.1	12.8	100.9	表面側末端に不連続な二次的割離が認められる
第 75 図 126 図版 69-126	石核	黒曜石	21.4	21.7	14.7	6.7	正面側において、上面を打面として刮片が行われている

第 28 表 108 号住居跡出土石器一覧

109 号住居跡

遺 構 (第 76・77 図)

[位 置] (C・D-4・5) グリッド。

[検出状況] 213・215 D を切り、5・6 方に切られる。

[構 造] 平面形：ほぼ円形。主軸方位：N-6°-W。P5 と P11、P7 と P9 のそれぞれの中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸 610cm / 短軸 597cm / 深さ 52 ~ 70cm。壁満：2 条検出されたが、1 条の部分もある。いずれも壁満の中に壁柱穴を巡らせている。上幅 11 ~ 25・30 ~ 46cm / 下幅 5 ~ 13・5 ~ 28cm / 床面からの深さ 5 ~ 21・2 ~ 20cm。壁：約 63 ~ 80°でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦である。中央部分に硬化面を確認した。直床である。炉：石囲炉。被熱範囲の北側部分の掘り込みを囲むようにやや楕円形に石を配置している。東側にも被熱範囲が認め

られるが建替によるものと思われる。石皿（第84図91・92）が破損後、炉石として転用されている。長軸残存長66cm／短軸73cm／床面からの深さ30cm。埋竈：検出されなかった。柱穴：51本検出した。P1～4、P5～7、P8・9、P10・11、P12・13を主柱穴ととらえ、5本柱建物を想定する。周溝と主柱穴の位置関係から、建て替え1回、拡張1回を想定する。

〔覆土〕6層に分層できた。1・2層に遺物を多量に含む。

〔遺物〕土器、土製品、石器が出土した。小形の深鉢形土器（第79図7）と深鉢形土器（第80図19）はそれぞれ103 J との遺構間接合、深鉢形土器（第79図13）は118 J より同一個体と思われる破片が出土している。

〔時期〕中期後葉期（加曾利E1c式期）。

〔遺物〕（第78～84図、図版70～75、第29～31表）

〔土器〕（第78～80図・第81図29～39、図版70～73、第29表）

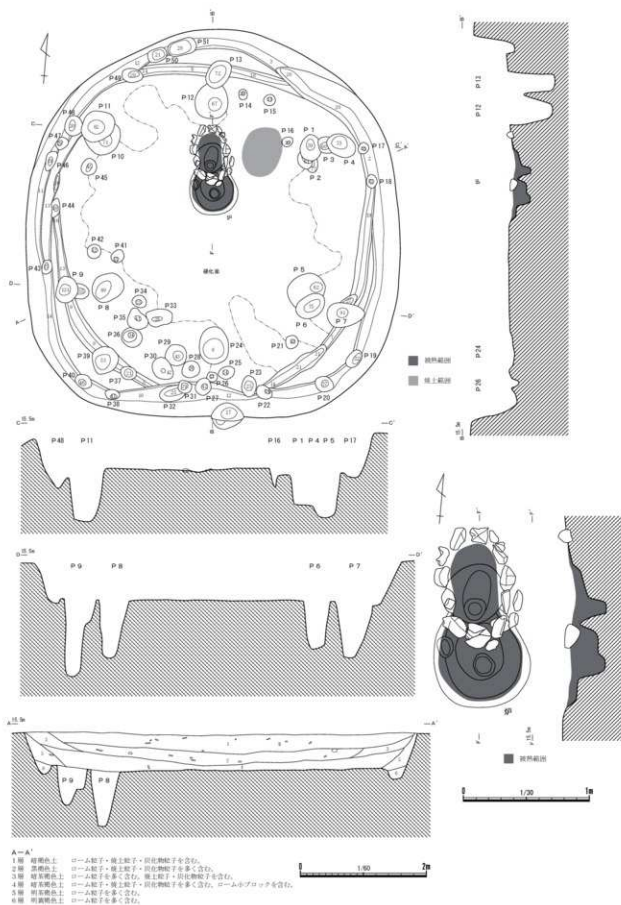
復元個体12点、破片資料27点を図示した。1は加曾利E1c式の深鉢形土器である。キャリパー形を呈し、燃糸文を地文とする。頸部から口縁部にかけての歪みが大きく、口縁部では位置によって4cm程の高低差がある。2は加曾利E1c式の深鉢形土器である。口縁部区画内には隆帯による渦巻文を施文する。頸部無文帯はなく、胴部には沈線によるM字状の文様を付す。3は加曾利E1c式の深鉢形土器である。燃糸文を地文とする。口縁部は無文で、2本1対の隆帯が頸部に横走り、胴部に垂下する。4は加曾利E1～2式の深鉢形土器である。胴部には直状の隆帯と波状の沈線が垂下する。5は曾利Ⅱ式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、頸部には紐状の隆帯を斜格子状に施文する。6～8は小形の深鉢形土器である。6は加曾利E1式で、胴部に波状の隆帯が垂下する。7は加曾利E式で、103 J との遺構間接合である。8は加曾利E式と思われる土器で、2本1対の隆帯で口縁部を画し、縦位沈線を充填する。9・10は加曾利E1式の浅鉢形土器である。いずれも沈線による長方形の渦巻文を施文する。11は加曾利E2式の浅鉢形土器である。縄文を地文とし、区画何には渦巻文を施文する。12はミニチュア土器である。中期にあたると思われる。沈線による渦巻文等の文様を施す。13は諸磯c式の深鉢形土器である。118 J より同一個体と思われる破片が出土している。14は阿玉台式、15～22は勝坂式、23～32は加曾利E式、33・34は曾利式、35・36は連弧文土器の深鉢形土器である。19は103 J より出土の破片と遺構間接合している。37は勝坂3式と思われるもの、38は中期中葉～後葉の浅鉢形土器である。39は小形の鉢と思われる土器で、中期にあたると思われる。

〔土製品〕（第81図40～53・第82図54～60、図版73、第30表）

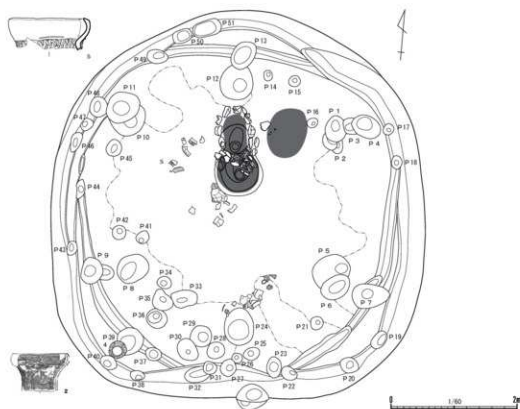
21点を図示した。40～58は土器片錘、59・60は土製円盤である。

〔石器〕（第82図61～74・第83・84図、図版73～75、第31表）

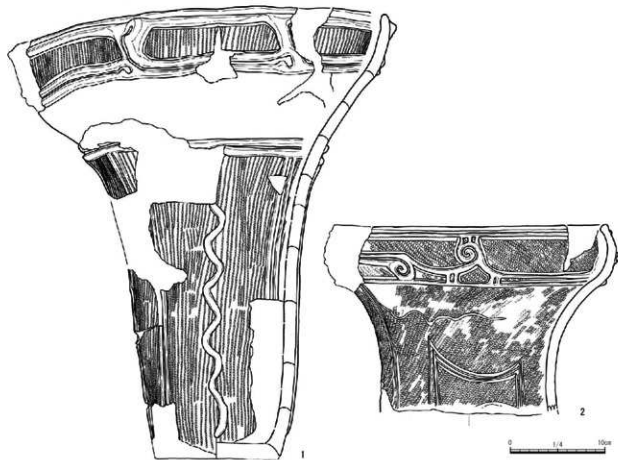
32点を図示した。61～64は石鏃である。65は石錐である。66・67は楔形石器である。68～82は打製石斧である。83～86は二次加工剥片である。87・88は石核である。89は剥片である。90は磨+敲石である。91・92は石皿であり、破損後、炉石として転用されている。



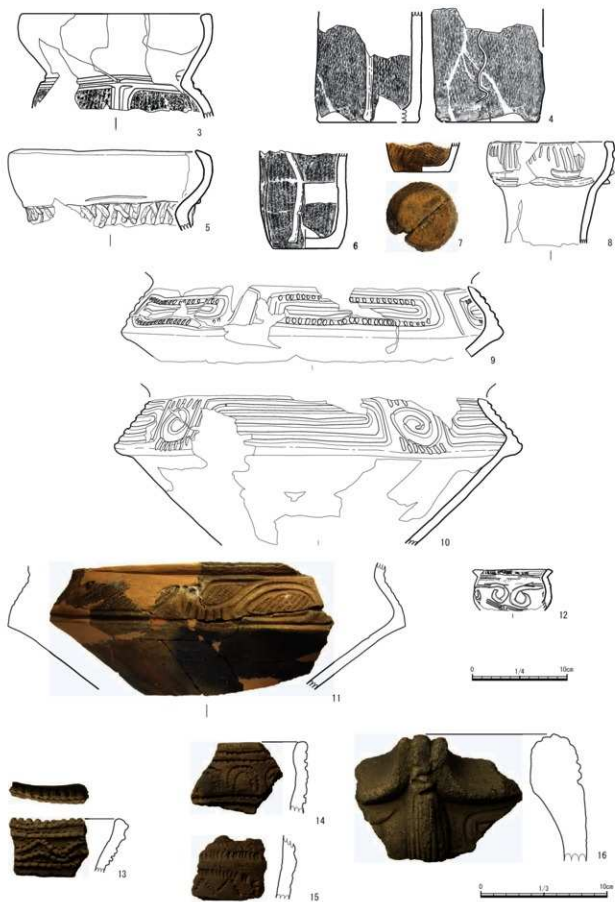
第76図 109号住居跡 (1/60・1/30)



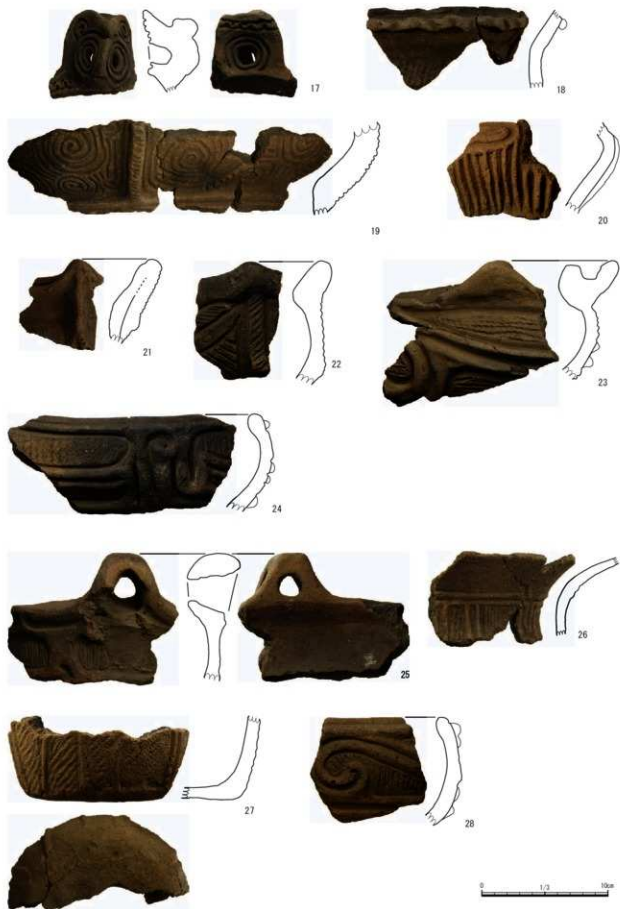
第77図 109号住居跡遺物出土状態 (1/60)



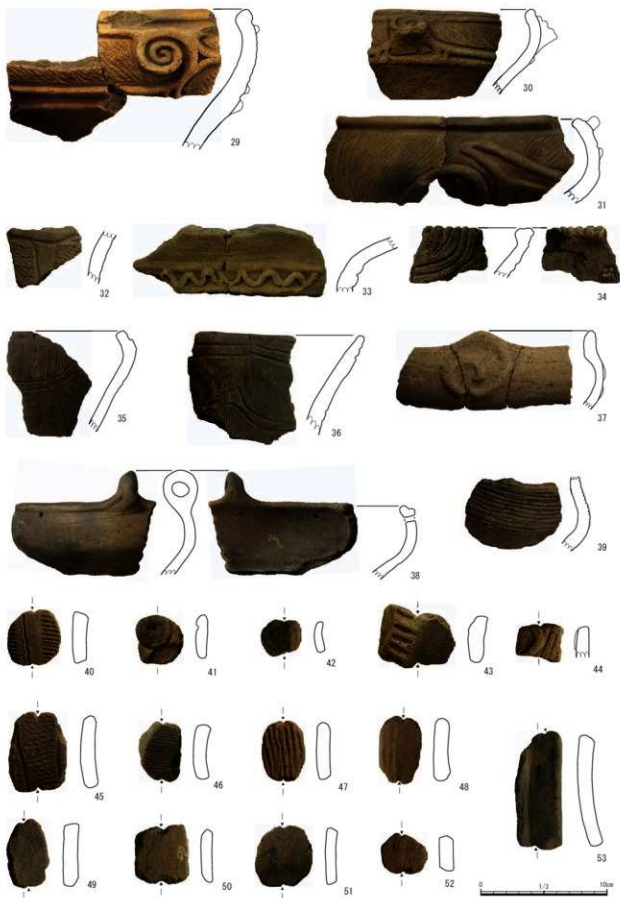
第78図 109号住居跡出土遺物1 (1/4)



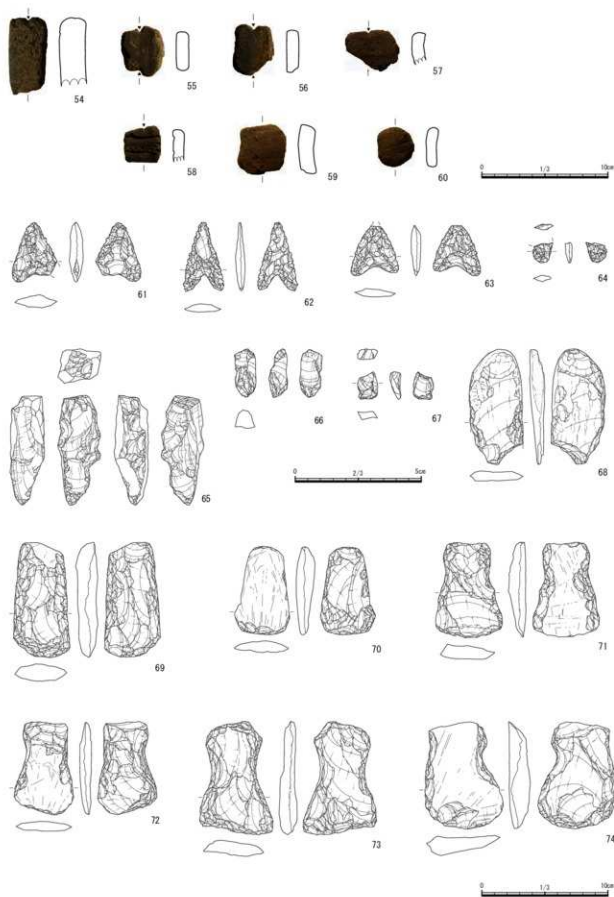
第79図 109号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第80図 109号住居跡出土遺物3 (1/3)



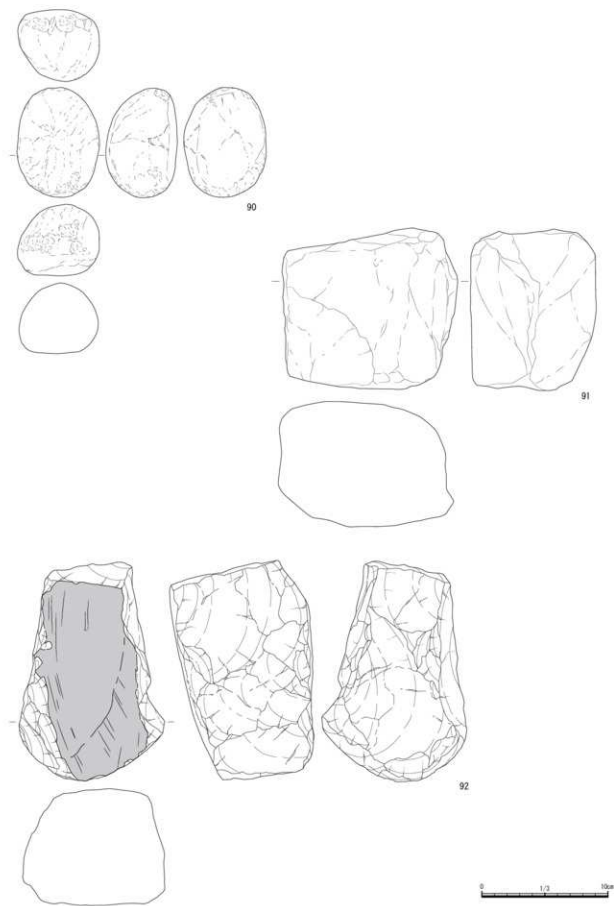
第81図 109号住居跡出土遺物4(1/3)



第82図 109号住居跡出土遺物5 (1/3・2/3)



第83図 109号住居跡出土遺物6 (1/3・2/3)



第84図 109号住居跡出土遺物7(1/3)

発掘番号 図版番号	種別 図種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第78図1 図版70-1	深鉢	口縁部～ 底部 60%	高148.3 口39.0 底(13.2) 厚1.2	キャリパー形/や や内湾し。直状に 立ち上がり上位が 外反する胴部/外 反する頸部/やや 内湾する口縁部/ 頸部から上位は非 常に歪みが大きく、 口縁部にも4cm程 の高差差がある	地文は黒糸L縦文/口縁部を上端1本、下端2本の隆帯で画す/ 口縁部区画内には沈線による渦巻文を付した突起(1単位残存)/ 頸部無文/胴部には2本1対の直状の隆帯4単位と1本の波状 隆帯4単位が交互に垂下/隆帯断面カマボコ状/1層から出土	暗褐色/砂 粒・礫少量	加曾利 E1c式
第78図2 図版70-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位 90%	高[20.1] 口28.6 厚0.9	キャリパー形/や や外反しながら上 上がる胴部/外反 しながら広がる 頸部/内湾しなが ら広がる口縁部	地文は単節縦、口縁部区画内横位無文、口縁部区画下位は縦位 無文/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で画す/区画内は2 本1対または1本の隆帯により端部が渦巻状を呈する文様を配 す(渦巻文は6単位残存)/口縁部区画の上端隆帯から2～3本 の隆帯が渦巻文に向かって垂下(4単位)/胴部は1本の垂下する 波状沈線の高側に3本1対の沈線が直状に垂下・2本1対の弧 状の沈線で繋ぐ文様が対称面に1単位ずつ/対称面の文様が1本 の横位波状沈線で繋ぎ、間にM字状の文様無文/隆帯断面角状	黄褐色/砂 粒・礫中量	加曾利 E1c式
第79図3 図版70-3	深鉢	口縁部～ 胴部上位 50%	高[10.7] 口20.2 厚0.9	内湾する胴部上位/ 括れる頸部/内 湾しながら広がる 口縁部	地文は黒糸L縦文/口縁部無文/頸部に2本1対の隆帯が凸る /頸部隆帯から2本1対の隆帯が直状に垂下(5単位残存)、内1 単位は2本の隆帯間の沈線が縦手状/隆帯断面角状/2層、4 層から出土	明褐色/砂粒 多量、礫少 量	加曾利 E1c式
第79図4 図版70-4	深鉢	胴部中位 ～底部 60%	高[11.7] 口10.4 厚1.0	直立して立ち上 がる胴部/平坦な 底部	地文は黒糸L縦文/1本の隆帯が直状に垂下(1単位残存)、1本 の沈線が波状に垂下(3単位残存)/隆帯断面カマボコ状	明褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1～2 式
第79図5 図版70-5	深鉢	胴部～ 頸部 90%	高[8.1] 口18.4 厚1.0	括れる頸部/内湾 しやや外積する口 縁部	地文は黒糸L縦文、頸部に僅かに残存/口縁部無文/頸部に結 状の隆帯を斜格子状に施文、隆帯の割れが多い/隆帯断面カマ ボコ状	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	曾利II 式
第79図6 図版70-6	小形 深鉢	胴部中位 ～底部 80%	高[10.0] 底6.8 厚0.9	ほぼ直立に立ち 上がり上位が僅かに 外反する胴部/平 坦な底部	地文は黒糸L縦文/1本の隆帯が波状に垂下(7単位)/隆帯断面 カマボコ状/底面に網状痕無し	明黄褐色/砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E1式
第79図7 図版70-7	小形 深鉢	胴部下平 ～底部 90%	高[3.1] 底5.8 厚0.6	やや内湾しなが ら広がる胴部/平 坦な底部	地文は単節縦、縦文、胴部無文/103と109の遺構間接合	にぶい黄緑 /砂粒少量、 礫微量	加曾利 E式
第79図8 図版70-8	小形 深鉢	口縁部～ 胴部中位 40%	高[10.7] 口(13.0) 厚0.8	キャリパー形/外 積する胴部/外反 する頸部/内湾す る口縁部	2本1対の隆帯で口縁部を画す/口縁部区画内縦位沈線充填/口 縁部区画下位無文/隆帯が多く剥落/隆帯断面三角状/カマボコ 状/2層から出土	黒褐色/砂粒 多量、礫微 量	加曾利 E2か
第79図9 図版70-9	浅鉢	口縁部付 近～体部 70%	高[7.4] 厚1.0	外積して開く体 部/内湾する口縁 部付近	縦位沈線で6つに区画/区画内は沈線による長方形に渦巻文、 沈線間上下2ヶ所に押圧文施文/体部無文/1層、2層から出土	暗褐色/砂粒・ 礫中量	加曾利 E1式
第79図10 図版71-10	浅鉢	口縁部付 近～体部 下位40%	高[15.2] 厚0.9	外積し広がる胴 部/内折する口縁 部付近	沈線による渦巻文、上下に短沈線を充填した沈線による渦巻文(3 単位残存)、間に沈線による長方形に渦巻文施文	暗褐色/砂粒・ 礫多量	加曾利 E1式
第79図11 図版71-11	浅鉢	口縁部付 近～体部 25%	高[12.9] 厚0.9	外積し広がる胴 部/内折する口縁 部付近	地文は単節縦、横位、区画内に施文/沈線と隆帯による区画、沈 線による渦巻文/体部無文/隆帯断面角状	明褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E2式
第79図12 図版71-12	ミニ チュア 土器	口縁部～ 胴部 40%	高[4.3] 口(8.4) 厚0.6	内湾する胴部/外 積して広がる口縁 部	2本1対の沈線による両端が渦巻状になる文様(2単位残存)/渦 巻部分下位に沈線によるT字状の文様/内外面に赤色顔料が付着	明褐色/砂粒 少量、礫微 量	中期
第79図13 図版71-13	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	やや内湾しなが ら外積する口縁部	口唇部に短隆帯を帯付し凸凹に成形/上端2本下端1本の横位 短節浮線文の間に2本の結節浮線文を波状に貼付/接合はしない が1181から同一個体と思われる破片出土	暗褐色/砂粒少 量、礫微量	諸儀c 式
第79図14 図版71-14	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾し口唇部がや や外反する口縁部	2本1対の角押文を横位に施文、上部と下部/横位の角押文の間 に2本1対の角押文を逆U字状に施文	にぶい黄 /砂粒・礫微 量	阿玉台 1b式
第79図15 図版71-15	深鉢	胴部 破片	厚1.0	隆帯を横位に貼付、高さが低く下端は胴部と同位/隆帯上端に幅 広角押文、角押文が沿う/隆帯下部に幅広角押文を指弓状に施文、 内側に角押文を鋸歯状に施文/隆帯断面角状～カマボコ状、隆帯 に幅広角押文が沿う、一部などで付けて貼付		明褐色/砂 粒・礫微量	勝飯1a 式
第79図16 図版71-16	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部/ 突起部外積	波頂部中央に交互刺突文施文/波頂部下部に沈線を多数付した幅 広の隆帯が垂下/沈線による三叉文、楕円状の文様無文	にぶい黄緑 /砂粒中量、 礫中量	勝飯3b 新式
第80図17 図版71-17	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部/ 把手部はほぼ直立	口縁部に把手貼付、外面に彫刻状の孔2つ、内面孔1つ/孔の 周囲に沈線による円を複数施文/把手左右の間に沈線による渦巻 文施文/把手内面上部に交互刺突文を横位に施文/口縁に沿って 交互刺突文施文、下位に僅かに横文が見られる、単節縦、Lか	暗褐色/砂粒 少量、礫微 量	勝飯3b 新式

第29表 109号住居跡出土土器一覽1

探検番号 図版番号	種別 部種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 形式
第80図18 図版71-18	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	やや内湾する胴部/ 外積する口縁部	地文は単節RL縦位/押圧文を付した隆帯が1本口縁に巡る/口縁部から1本の隆帯が直状に垂下/隆帯下部3cm程は無文/隆帯断面ハマボコ状	黒褐/砂粒 中量、礫微量	勝阪3b 新式
第80図19 図版71-19	深鉢	口縁部中位 ～胴部 破片	厚1.2	頸部はほぼ直立/中位から下位にかけて内湾する口縁	頸部に横走する隆帯で区画/口縁部に押圧文を付した縦位隆帯で区画、斜位の隆帯は文様か/口縁部に単沈線による渦巻文を充填、渦巻文間沈線充填/隆帯断面台形状。縦位隆帯端部沈線が沿う、横位隆帯上端まで付けて貼付/内面の調整は粗く横位の深い、溝底が多数見られる/103と109の遺構間接合	明褐/砂粒・ 礫少量	勝阪3b 新式
第80図20 図版71-20	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	下位は外積上位は 強くない、鋭する口 縁部	縦い隆帯を縦位に多数貼付/上部に隆帯を二重の楕円状に貼付	明褐/砂粒 少量、礫中量	勝阪3b 新式
第80図21 図版71-21	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	外反する口縁部	地文は器系L縦位/波頂面から押圧文を付した1本の隆帯が垂下、先端が二叉になる/1本の横位沈線が回り上部無文、下部器系文/隆帯断面背の高い台形状、隆帯脇まで付けて貼付	褐/砂粒・ 礫微量	勝阪3b 式
第80図22 図版72-22	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部/ 突起部外積	押圧文を付した隆帯が口縁突起部から直状に垂下/区画内に斜位沈線を充填/隆帯断面台形状、隆帯に沈線が沿う	明褐/砂粒 ・礫微量	勝阪3 式
第80図23 図版72-23	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部/ 口唇部内側に肥厚	地文は器系L横位/口唇部に突起形成、上面に沈線による渦巻文施文/2本1対の隆帯による文様施文/隆帯断面ハマボコ状	いぶい黄褐 /砂粒少量、 礫微量	加賀利 E1a式
第80図24 図版72-24	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	地文は器系L縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端1本/器系文を飾る区画には2本1対の隆帯が横位に伸び/区画間縦位隆帯3本貼付、隆帯間に先施渦巻文の沈線施文/隆帯断面ハマボコ状/2層から出土	黒/砂粒・ 礫中量	加賀利 E1a式
第80図25 図版72-25	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/ 口唇部内側に肥厚	口縁部に中空の把手貼付/唇面より胎土をやや厚めに貼付し口縁部区画を成形、楕円形の窪みを区画とし内側に縦位沈線充填、楕円区画の上下に先施渦巻文となった沈線による文様施文	暗赤褐/砂粒 少量、礫微量	加賀利 E1b式
第80図26 図版72-26	深鉢	胴部上 ～胴部 破片	厚0.7	外反する胴部上 位/外反して広がる 破片	地文は器系L縦位/頸部無文/2本の横位隆帯で頸部と胴部を囲す/胴部には2本1対で直状に垂下する隆帯、四角状の文様/隆帯断面ハマボコ状	褐/砂粒少量、 礫多量	加賀利 E1b式
第80図27 図版72-27	深鉢	胴部下位 ～底部 破片	厚1.0	外積しながら立ち 上がる胴部/平坦な 底部	地文は単節RL縦位/1本の直状に垂下する隆帯、左右に1本の波状に垂下する隆帯、更に左右に2本1対の直状に垂下する隆帯/隆帯断面ハマボコ状・台形状/層代変し	褐/砂粒・ 礫少量	加賀利 E1c式
第80図28 図版72-28	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で囲す/口縁部区画と隆帯と沈線による渦巻文施文、/区画内沈線で充填/隆帯断面ハマボコ状	黒/砂粒中量、 礫微量	加賀利 E1～2 式
第81図29 図版72-29	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.3	外反する頸部/ 内湾する口縁部	地文は単節RL縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端2本/隆帯と沈線による渦巻文、渦巻文下部に2本の縦位短隆帯/頸部無文/隆帯断面角状一ハマボコ状	褐/砂粒中量、 礫微量	加賀利 E2a式
第81図30 図版72-30	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.7	外積する頸部/ 内湾する口縁部	地文は単節RL縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端2本/区画の接点を突起状に成形、沈線による渦巻文施文、突起両脇に2本1対の短隆帯を縦位に貼付/頸部無文/隆帯断面角状/外面器面やや荒れ	明黄褐/砂粒 中量、礫微量	加賀利 E2a式
第81図31 図版72-31	深鉢	口縁部	厚0.8	内湾する口縁部	地文は単節RL縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端欠損/1本または2本の隆帯による文様、渦巻文/縦位2本の沈線が直状に垂下/隆帯断面角状一ハマボコ状	明褐～褐/ 砂粒中量、 礫微量	加賀利 E2式
第81図32 図版72-32	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反する胴部	地文は単節RL縦位/横位沈線上部地文磨消/2本1対の直状の沈線が垂下/沈線間磨消	明黄褐/砂粒・ 礫微量、 楕の粒中量	加賀利 E3式
第81図33 図版72-33	深鉢	口縁部下位 ～胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する頸部/ 外反する口縁部 下位	口縁部下位無文/頸部に組状の隆帯が2本巡る、間に組状の隆帯を波状に貼付	明黄褐/砂粒 少量、礫中量	曾利1 ～2式
第81図34 図版72-34	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	外積する口縁部/ 口唇部内側に肥厚	沈線による重弧文	黒褐/砂粒 中量、礫微量	曾利皿 式
第81図35 図版73-35	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外積する胴部/ 外積し上部が強く内 湾する口縁部	地文は縦位条線文/口縁部に沿ってへう状の工具を押しきし沈線部に施文、途中強く押し込み斜交文状に施文/2本1対の沈線を弧状に施文/1層から出土	黒褐/砂粒 中量、礫微量	連文 2b段階
第81図36 図版73-36	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外反する胴部/ 外積する口縁部	地文は縦位条線文/口縁に2本の沈線が巡る/2本1対の沈線による連文文/沈線間地文が一部消える	黒褐/砂粒 少量、礫微量	連文 2b段階
第81図37 図版73-37	浅鉢	口縁部 破片	厚0.6	内湾する口縁部	口唇部が突起あり/突起下部に隆帯による渦巻文/外面に赤色顔料が多く残存	褐/砂粒微 量、礫中量	勝阪3 式か
第81図38 図版73-38	浅鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.8	外積する胴部/ 内湾する口縁部	口縁部に把手あり、片側面に円形の窪みあり/把手から口縁に沿って隆帯が伸びる/隆帯下に焼成前の穿孔が2ヶ所残存(1ヶ所は半分欠損)、径5mm/隆帯断面ハマボコ状/赤色顔料が少量残存	褐～黒褐/ 砂粒少量、 礫微量	中期甲 ～後一 式
第81図39 図版73-39	小形 鉢か	胴部	厚1.0	内湾する胴部、上 位は外反するか	平煎片管状工具の腹面による平行沈線を密集させて横位に施文/下部は無文	明褐/砂粒 ・礫少量	中期

第29表 109号住居跡出土土器一覽2

第3章 検出された遺構と遺物

神代番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第81図40 図版73-40	土器 片断	完形	4.3/4.1/1.1	28.2	円形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/押圧文に波状沈線が沿う/1層から出土	暗褐/砂粒少量、 礫少量、雲母少量	勝坂2式
第81図41 図版73-41	土器 片断	80%	[3.7]/4.0/1.0	15.8	円形/抉部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/円形の文様	暗～黒/砂粒中 量、礫少量	勝坂2 ～3式
第81図42 図版73-42	土器 片断	80%	2.8/[3.1]/0.7	8.1	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は極一部磨耗/胴部片利用/0段多袋丸	黒褐/砂粒・礫 少量	勝坂3式
第81図43 図版73-43	土器 片断	完形	4.5/6.1/1.2	39.5	方形/抉部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/口縁部付近の破片利用/弧状の沈線/帛帯を4本貼付	灰黄褐/砂粒少 量、礫少量	加曾利 E1b式
第81図44 図版73-44	土器 片断	50%	[2.8]/3.6/1.0	14.3	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/磨糸し/波状の沈線	灰黄褐/砂粒少 量、礫少量	加曾利 E1b式
第81図45 図版73-45	土器 片断	完形	6.2/4.5/1.2	45.4	方形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/磨糸し/沈線による文様	黒褐/砂粒・礫少 量	連弘文か
第81図46 図版73-46	土器 片断	完形	4.6/3.3/1.0	22.2	方形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/磨糸丸	黒褐/砂粒多量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第81図47 図版73-47	土器 片断	完形	4.8/3.4/1.0	23.7	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/磨糸丸	赤褐/砂粒少量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第81図48 図版73-48	土器 片断	完形	5.2/3.5/1.0～ 1.5	28.8	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は磨耗が未発達/口縁部片利用/無文	明褐/砂粒中量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第81図49 図版73-49	土器 片断	完形	5.4/3.3/1.1	26.5	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	暗褐/砂粒中量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第81図50 図版73-50	土器 片断	完形	4.6/4.4/0.9	25.7	方形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	褐/砂粒中量、礫 少量	中期中量 ～後葉
第81図51 図版73-51	土器 片断	完形	5.8/4.4/0.8	28.4	円形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	灰黄褐/砂粒・礫 少量	中期中量 ～後葉
第81図52 図版73-52	土器 片断	完形	3.2/3.7/1.1	17.5	楕円形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	暗赤褐/砂粒少 量、礫少量	中期中量 ～後葉
第81図53 図版73-53	土器 片断	90%	9.3/3.5/0.6～ 1.5	55.9	方形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文/外面に赤色顔料が微量残存	暗褐/砂粒多量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第82図54 図版73-54	土器 片断	90%	[6.0]/3.0/2.0	47.3	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/口縁部片利用/無文	明黄褐/砂粒多 量、礫少量	中期中量 ～後葉
第82図55 図版73-55	土器 片断	90%	4.0/3.3/1.0	17.4	方形/抉部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	灰黄褐/砂粒少 量、礫少量	中期中量 ～後葉
第82図56 図版73-56	土器 片断	90%	3.9/3.1/0.9	16.5	方形/抉部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	灰黄褐/砂粒中 量、礫少量	中期中量 ～後葉
第82図57 図版73-57	土器 片断	30%	[3.3]/4.2/9.0	15.6	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/胴部片利用/無文	褐/砂粒・礫少 量	中期中量 ～後葉
第82図58 図版73-58	土器 片断	60%	[2.9]/2.8/0.8	10.3	方形/抉部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/半截竹管状工具の断面による沈線/3つ並んだ押圧文	灰黄褐/砂粒・礫 少量	中期
第82図59 図版73-59	土製 円盤	完形	4.0/3.8/1.2	24.4	方形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒少量、 礫少量	中期中量 ～後葉
第82図60 図版73-60	土製 円盤	完形	3.1/2.9/0.9	10.4	円形/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒少量、 礫少量	中期中量 ～後葉

第30表 109号住居跡出土土製品一覽

神代番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第82図61 図版73-61	石鏝	黒曜石	23.3	18.3	5.7	2.0	凹基無茎/側縁は直線状/抉りは浅く弧状/右側部欠損
第82図62 図版73-62	石鏝	チャート	27.2	16.3	3.8	1.3	凹基無茎/側縁は直線状/側縁抉りは深く直線状/先端部一部欠損
第82図63 図版73-63	石鏝	チャート	19.3	19.1	4.1	1.4	凹基無茎/側縁は緩やかな弧状を呈する/抉りは弧状/先端部一部欠損
第82図64 図版73-64	石鏝	黒曜石	9.6	9.2	3.2	0.2	片断部のみ残存
第82図65 図版74-65	石鏝	黒曜石	43.8	19.4	13.7	9.1	断面三角形の断面を構成する各面に二次的割離あるいは不規則割離が認められる
第82図66 図版74-66	楔形石器	黒曜石	19.9	8.8	7.6	1.1	上下に両極割離が認められる
第82図67 図版74-67	楔形石器	黒曜石	10.8	8.1	4.5	0.4	上下に両極割離が認められる
第82図68 図版74-68	打製石斧	緑泥片岩	91.5	42.7	11.9	63.6	短冊形/刃部は折れて欠損している/両側面基部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる/両側縁の潰れはほとんど見られない
第82図69 図版74-69	打製石斧	砂岩	91.2	45.2	17.2	93.8	短冊形/左側縁下部が磨滅している/表面基部付近に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる/両側縁の潰れはほとんど見られない

第31表 109号住居跡出土石器一覽1

神宮番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第82図70 図版74-70	打製石斧	頁岩	69.7	43.9	13.8	45.4	楕形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第82図71 図版74-71	打製石斧	砂岩	75.6	53.2	13.3	59.2	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第82図72 図版74-72	打製石斧	頁岩	72.9	47.2	9.6	39.9	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが僅かに認められる
第82図73 図版74-73	打製石斧	緑泥片岩	90.0	59.0	14.3	85.0	楕形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第82図74 図版74-74	打製石斧	ホルンフェルス	85.4	62.5	17.2	111.3	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図75 図版74-75	打製石斧	頁岩	69.8	42.2	17.4	54.2	楕形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図76 図版74-76	打製石斧	砂岩	111.2	56.8	19.4	145.2	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の潰れはほとんど見られない / 右側縁は上部の稜上に潰れが認められる
第83図77 図版74-77	打製石斧	頁岩	47.5	44.3	12.2	28.8	平面形状は不明 / 表裏面ともに磨滅している / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図78 図版74-78	打製石斧	片岩系	83.3	59.8	21.4	140.8	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、裏面も一部原礫面が残存する / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図79 図版74-79	打製石斧	砂岩	105.4	71.1	23.4	234.1	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存する / 欠損によって両側縁の敲打剥離・潰れの有無はほとんどわからない
第83図80 図版74-80	打製石斧	緑泥片岩	102.4	35.9	10.0	47.3	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の稜上に局所的に潰れが認められる / 右側縁は潰れはほとんど見られない
第83図81 図版74-81	打製石斧	結晶片岩	50.1	38.6	7.7	17.2	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図82 図版75-82	打製石斧	ホルンフェルス	42.3	47.1	11.0	19.5	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第83図83 図版75-83	二次加工 剥片	黒曜石	20.0	31.4	9.0	2.8	表面側右側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第83図84 図版75-84	二次加工 剥片	黒曜石	13.6	14.1	3.7	0.6	主要剥離面側右側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第83図85 図版75-85	二次加工 剥片	黒曜石	14.0	11.2	3.6	0.5	表面側右側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第83図86 図版75-86	二次加工 剥片	黒曜石	13.7	10.8	3.0	0.4	主要剥離面側右側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第83図87 図版75-87	石核	黒曜石	20.0	35.1	18.4	12.9	正面側において、上面を打面として剥片が行われている
第83図88 図版75-88	石核	黒曜石	12.9	15.0	10.7	2.1	正面側において、上面を打面として剥片が行われている
第83図89 図版75-89	剥片	黒曜石	16.5	18.0	4.7	1.2	縦長剥片 / 断片のため、詳細は不明である
第84図90 図版75-90	磨石	ホルンフェルス	90.0	65.4	57.7	481.8	裏面に磨痕 / 下面に敲打痕
第84図91 図版75-91	石皿	閃緑岩	124.9	134.6	105.5	2625.0	扁平石皿 / 表面に平坦な使用面 / 一部がすずみ覆われており、被熱の可能性はある / 炉内から出土 / 伊石として転用
第84図92 図版75-92	石皿	閃緑岩	165.4	119.7	105.5	2734.4	扁平石皿 / 表面に平坦な使用面 / 一部がすずみ覆われており、被熱の可能性はある / 炉内から出土 / 伊石として転用

第31表 109号住居跡出土石器一覧2

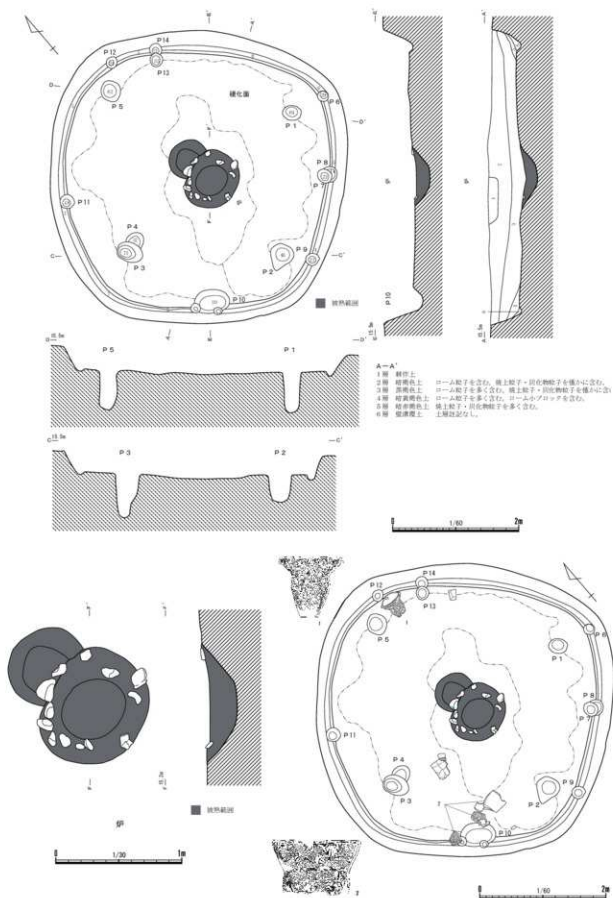
110号住居跡

遺構(第85図)

[位置] (C-5) グリッド。

[検出状況] ほかの遺構との切り合い関係なし。

[構造] 平面形: 隅丸方形。主軸方位: N-40°-E。P2とP3・4の中間と炉の中心を通るラ



第85図 110号住居跡・炉・遺物出土状態(1/60・1/30)

インを主軸と捉えた。規模：長軸 463cm / 短軸 462cm / 深さ 26 ~ 54cm。壁溝：1 条検出された。上幅 24 ~ 38cm / 下幅 2 ~ 9cm / 床面からの深さ 2 ~ 8cm。壁：約 56 ~ 70° で緩やかに立ち上がる。床面：概ね平坦である。中央部分と周溝の間の部分にドーナツ状に硬化面が確認された。直床である。炉：石囲炉。こぶし大の石をやや円形に配置し、北側に張り出し部分がある。長軸 120cm / 短軸 96cm / 床面からの深さ 28cm。埋蔵：検出されなかった。柱穴：14 本検出した。P 1、P 2、P 3、P 5 を主柱穴ととらえ、4 本柱建物を想定する。

[覆 土] 5 層に分層できた。

[遺 物] 土器、土製品、石器が出土した。深鉢形土器(第 86 図 1)が北隅から、深鉢形土器(第 87 図 2)が P 10 付近からそれぞれ出土した。

[時 期] 中期後葉期(加曾利 E 2 c 式期/連弧文 2 b 段階期)。

[遺 物](第 86 ~ 89 図、図版 76 ~ 78 - 1、第 32 ~ 34 表)

[土 器](第 86 ~ 87 図・第 88 図 16 ~ 21、図版 76 ~ 77、第 32 表)

復元個体 2 点、破片資料 19 点を図示した。1 は加曾利 E 2 c 式の深鉢形土器である。縦糸条線文を地文とする。口縁部の区画端部は突起状に成形し、渦巻文を付す。胴部には沈線による横位 S 字状の文様を施文する。2 は連弧文 2 b 段階の深鉢形土器である。3 本 1 対の沈線による連弧文を施し、副文様も見られる。3 ~ 5 は勝坂式、6 ~ 13 は加曾利 E 式、14 ~ 17 は曾利式、18 は連弧文土器の深鉢形土器である。19 は阿玉台式、20 は加曾利 E 式、21 は中期中葉~後葉の浅鉢形土器である。

[土 製品](第 88 図 22 ~ 26、図版 77、第 33 表)

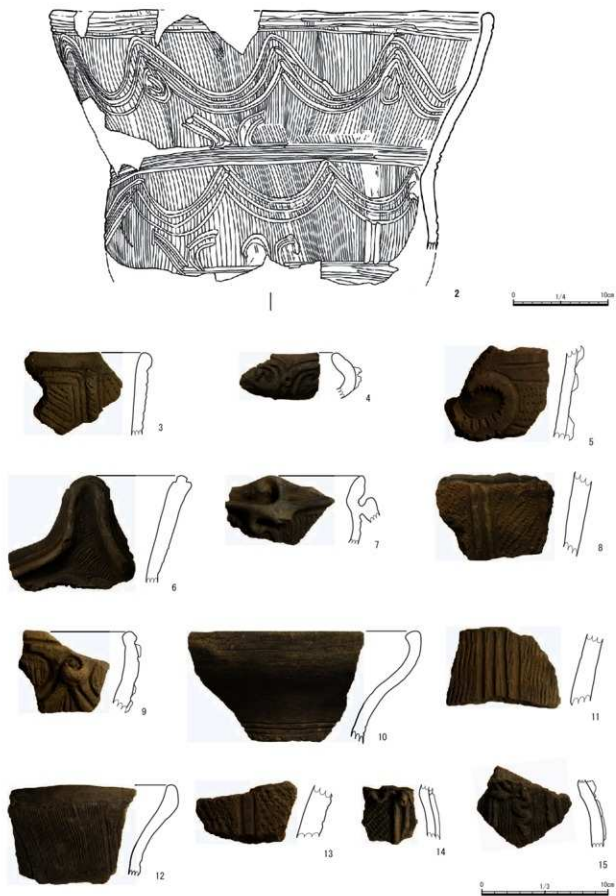
5 点を図示した。22 ~ 26 は土器片錘である。

[石 器](第 88 図 27 ~ 32・第 89 図、図版 77・78 - 1、第 34 表)

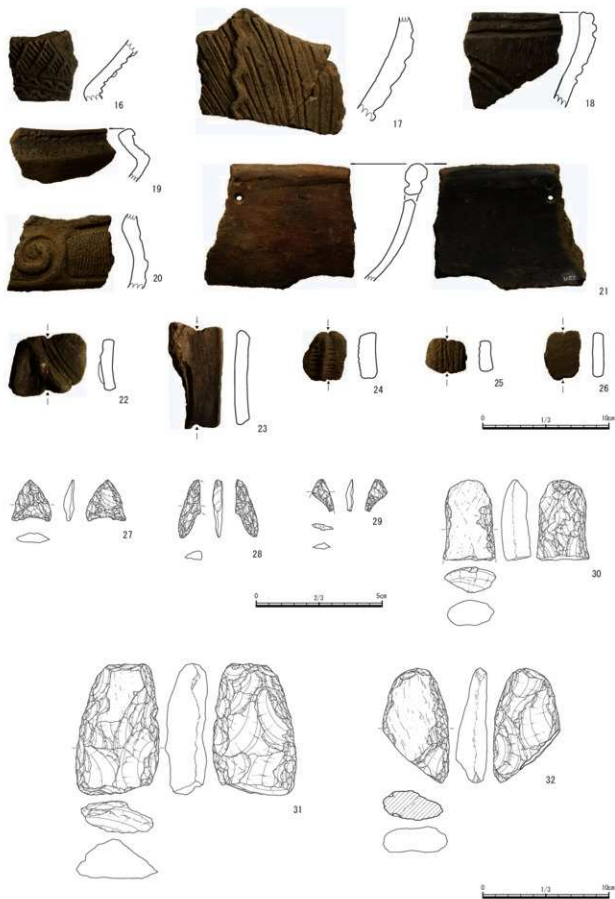
11 点を図示した。27 ~ 29 は石鏃である。30 ~ 33 は打製石斧である。34 は二次加工剥片である。35 は磨+敲石である。36 は敲石である。37 は石皿である。



第 86 図 110 号住居跡出土遺物 1 (1 / 4)

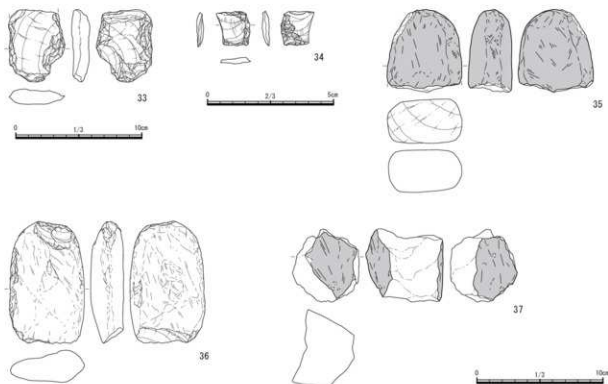


第87図 110号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第88図 110号住居跡出土遺物3 (1/3・2/3)

第3章 検出された遺構と遺物



第89図 110号住居跡出土遺物4 (1/3・2/3)

標記番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第86図1 図版76-1	深鉢	口縁部～ 底部(底 面欠損) 90%	高 [31.4] 口 32.1 厚 1.0	外横しながら立ち 上がり上位で内湾 し括りたる胴部/外 横し広がり上位は やや内折する口縁 部	地文は縦糸条線文/口縁部を下端2本の隆帯で画し、区画の境 点を突起状に成形、沈線による渦巻文を付す/口縁部区画 9単位、渦巻文を付した突起9単位(1単位欠損)/渦巻文上 部に3本の縦位沈線が付された突起が1単位あり/区画内縦 位沈線列/区画下に2本1対の波状沈線垂下1ヶ所垂下 しない区画あり/胴部には3本1対の沈線による横位S字 状の文様2単位、反転したS字状の文様1単位/横位S字 状の渦巻部分からそれぞれ2本1対の波状沈線(3単位)、 2本1対の直状の沈線(1単位)垂下/胴部中に少量の黒色 の付着物あり	浅黄褐色～黒褐 /砂粒中量、 礫微量	加曾利 E2c式
第87図2 図版76-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位 80%	高 [28.6] 口 46.2 厚 1.3	中位で内湾し上位 が括りたる胴部/外 横して広がる口縁 部	地文は縦糸条線文/口縁部に3本1対の沈線が巡る/口縁部 に3本1対の沈線による連弧文/連弧文の波頂部10単位/ 沈線による円形や半円形の文様が連弧文波頂部直下にあるも の5単位、直上1単位、並びは不規則/括れ部に逆ハの字状 の副文様4単位、並びは不規則/括れ部に3本1対の沈線が 巡る/胴部に3本1対の沈線による連弧文、波頂部直下に沈 線による円形の文様2単位残存、逆ハの字状の文様2単位残 存、波底部から直状の沈線垂下1単位/胴部下位に2本の横 位沈線が僅かに残存、胴部は連弧文を多めに無文か	黒褐/砂粒中 量、礫少量	連弧文 2b段階
第87図3 図版76-3	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	ほぼ直立する口縁 部/口唇部外面に 肥厚	押圧文を付した直状の隆帯が垂下、肥厚した口唇部と共に区 画を形成/口縁と隆帯に平行沈線が沿う/区画内に三角押圧 文を斜位に充填/隆帯断面台形状、隆帯断面台形状、隆 帯がやや不良	にぶい黄褐/ 砂粒少量、礫 中量	勝板3a 新式
第87図4 図版76-4	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	強く内湾する口縁 部	多条の細状の隆帯を逆U字状に貼付/逆U字状の隆帯同士 の接点には指状工具の先端を使用した円形刺突文施文/隆帯 は割れが多い	暗褐/砂粒少 量、礫微量	勝板3b 新式
第87図5 図版76-5	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	外横する胴部	側面に押圧文を付した隆帯による文様/沈線を横位に複数施 文、一部沈線間に方形の刺突文を充填/隆帯断面台形状、隆 帯胎土1本の単沈線が沿う	褐/砂粒多 量、礫中量	勝板3b 式
第87図6 図版76-6	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	外横する口縁部	地文は縦糸条線文、斜位/口縁部把手状に成形/口縁に沿っ て隆帯貼付/把手直下に半蔵竹管状工具の腹面による平行沈 線による文様が僅かに見られる	暗褐/砂粒中 量、礫微量	加曾利 E1a式

第32表 110号住居跡出土土器一覧1

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第87図7 図版77-7	深鉢	口縁部 破片	厚0.5	内湾する口縁部/ 突起部は外傾	地文は褐色L縦位/口縁部を隆帯で囲す。上端1本、下端欠損/欠損しているが口縁部突起下部に横状把手の痕跡あり/口縁部区画の隆帯から1本の隆帯が蛇行して垂下/隆帯断面カマボコ状	暗褐/砂粒・ 礫微量	加曾利 E1b式
第87図8 図版77-8	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外傾する胴部	地文は単節RL縦位/2本1対の隆帯が直状に垂下/1本の隆帯が波状に垂下/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒・礫 中量	加曾利 E1c式
第87図9 図版77-9	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部	上端1本、下端2本の隆帯で口縁部を囲す/区画内縦位隆帯充填/区画の接点を突起状に成形。沈積による渦巻文/突起下部から2本の直状の沈積垂下	明褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E2式
第87図10 図版77-10	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.8	ほぼ直立する頸部/ 下部で外反し上部 で強く内湾する口 縁部	地文は単節黒文と思われ、残存部が僅かのため詳細不明/口縁部無文/頸部に平行沈積が巡る/口縁部上部に横位沈積状の調整痕と思われる摩痕が多く残る/頸部付近に縦位沈積状の摩痕が見られる	暗褐/砂粒少 量、礫中量	加曾利 E2式
第87図11 図版77-11	深鉢	胴部 破片	厚1.5	外傾する胴部	地文は褐色R縦位/4本の沈積が直状に垂下/沈積間には多くが磨消されるが部分的に残存。沈積が幅広で沈積間が狭いため意図的に消したのか沈積施文の跡に消えたのか不明	褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E2～3 式
第87図12 図版77-12	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外反しながら広がる 胴部/内湾する 口縁部	地文は縦位条線文/口縁部以下に施文/口新部2.5cm程は地文の条線文磨消/1本、2本沈積を直状に垂下/胴部に2本の沈積が巡る	暗褐/砂粒・ 礫微量	加曾利 E2式か
第87図13 図版77-13	深鉢	胴部 破片	厚1.6	外傾する胴部	地文は複節LRL縦位/2本1対の直状の沈積が垂下/沈積間磨消	褐/砂粒・礫 中量	加曾利 E3式
第87図14 図版77-14	深鉢	頸部～胴 部 破片	厚0.7	内湾する胴部/外 傾する頸部	地文は単節RL縦位/頸部に隆帯が波状に巡る/頸部に粘土層を1つ貼付。粘土層から2本1対の隆帯が直状に垂下/隆帯断面形状カマボコ状。波状隆帯押し付けて貼付/地文→隆帯貼付	暗褐/砂粒・ 礫微量	曾利Ⅱ 式
第87図15 図版77-15	深鉢	頸部～胴 部 破片	厚0.8	内湾する胴部/外 傾する頸部	地文は縦位条線文/胴部に1本の細状の隆帯が巡る。上部にU字状。斜位の細状の隆帯が僅かに残る/頸部1本の隆帯が波状に垂下、2本1対の隆帯が直状に垂下。隆帯断面カマボコ状。隆帯押し付けて貼付	暗褐/砂粒中 量、礫微量	曾利Ⅱ 式
第88図16 図版77-16	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外傾する口縁部付 近/括れる頸部	平截竹管状工具の腹面を使用した平行沈積を斜位に充填。粗状の隆帯を格子状に貼付/頸部には米粒状の刺突文を交互に蛇行文状に施文2列残存/細状の隆帯は押し付けて貼付	褐/砂粒・礫 微量	曾利Ⅱ 式
第88図17 図版77-17	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	外傾しながら内湾 する口縁部付近	1本の隆帯が波状に垂下/沈積による斜位文/隆帯断面カマボコ状。隆帯間などで付けて貼付、一部押し付けて貼付/斜位文→隆帯貼付	暗/砂粒少 量、礫微量	曾利Ⅲ 式
第88図18 図版77-18	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	下位は外反し上位 は内湾して立ち上 がる口縁部	地文は縦位条線文/口縁部に2本の沈積が巡る/2本1対の沈積による渦巻文になるか/沈積間の地文は磨消	暗褐/砂粒 3段階	津弧文 3段階
第88図19 図版77-19	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚0.6	強く内湾する口縁 部～体部/口唇部 外面に肥厚	口縁と体部の短軸部に2本1対の輪状沈積が沿う	暗褐/砂粒微 量、礫少量、 雲母多量	阿玉台 Ⅱ式
第88図20 図版77-20	浅鉢	口縁部付 近 破片	厚0.8	内湾する口縁部付 近/上位は外傾	地文は褐色L縦位/区画内に施文/隆帯による長方形の区画/隆帯と沈積による渦巻文/隆帯断面カマボコ状	明黄褐/砂粒 少量、礫微量	加曾利 E1～2 式
第88図21 図版77-21	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚0.7	内湾しながら広がる 体部/内湾しながら 外傾する口縁部/ 口唇部外側に肥厚/	残存部無文/円形の補修孔が縦に並んで2ヶ所。上部は穿孔途中、下部は穿孔孔の径6mm、内面の径8mm、いずれも断面楕円状/下部外面孔の径9mm、内面の径8mm。内外面両方から穿孔/内面色調は黒	明赤褐/砂粒 少量、礫微量	中期中葉～ 第一葉 Ⅱ

第32表 110号住居跡出土土器一覽2

検出番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第88図22 図版77-22	土器 片鉢	完形	4.9/5.7/0.9	48.2	方形/挾部は2ヶ所/肩線は顕著に磨耗/口縁部片利用/ 弧状の隆帯に3本の沈積が沿う	灰黄褐/砂粒少 量、礫微量、雲 母s中量	阿玉台Ⅲ式
第88図23 図版77-23	土器 片鉢	80%	8.3/4.3/1.0	47	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/口縁部片利用/ 弧状の沈積/赤色顔料が微量に残存	褐/砂粒中量、 礫微量、雲母多 量	阿玉台式か
第88図24 図版77-24	土器 片鉢	80%	3.9/3.5/1.2	23.4	方形か/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/1 本の隆帯/隆帯幅縮小刺突文施文	褐/砂粒・礫微 量	陶板1式
第88図25 図版77-25	土器 片鉢	完形	2.7/3.2/1.1/	11.6	方形/挾部は2ヶ所/肩線はごく一部磨耗/胴部片利用 褐色L	にぶい黄褐/砂 粒少量、礫微量	中期中葉～ 第一葉
第88図26 図版77-26	土器 片鉢	完形	3.8/2.8/0.8	14.1	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/無 文	にぶい黄褐/砂 粒少量、礫微量	中期中葉～ 第一葉

第33表 110号住居跡出土土器製品一覽

神岡番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 88 図 27 図版 77-27	石鏡	チャート	16.4	15.7	4.7	0.8	凹基無茎 / 鏡縁は緩やかな弧状を呈する / 挟りは浅く弧状
第 88 図 28 図版 77-28	石鏡	石英	22.0	9.2	4.0	0.6	片翼部断片 / 鏡縁
第 88 図 29 図版 77-29	石鏡	黒曜石	11.9	10.7	2.7	0.2	先端部のみ残存
第 88 図 30 図版 77-30	打製石斧	砂岩	65.6	41.9	21.9	79.9	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は磨礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、一部が面状になっている
第 88 図 31 図版 78-1-31	打製石斧	砂岩	106.4	67.0	33.6	300.4	冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面基部付近に磨礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の中央部の稜上に潰れが認められる / 右側縁は上部から中央部にかけて局所的に潰れが僅かに認められる
第 88 図 32 図版 78-1-32	打製石斧	砂岩	91.2	53.0	24.5	123.4	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面に磨礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の潰れはほとんど見られない / 右側縁はほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 89 図 33 図版 78-1-33	打製石斧	ホルン フェルス	57.9	45.2	14.9	48.5	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 89 図 34 図版 78-1-34	二次加工 剥片	黒曜石	13.9	12.8	2.8	0.7	主要剥離面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第 89 図 35 図版 78-1-35	磨+敲石	閃緑岩	62.5	59.8	34.7	216.6	表裏面全面に磨痕 / 両縁に敲打痕
第 89 図 36 図版 78-1-36	敲石	緑泥片岩	97.1	59.8	26.5	257.9	両側面に敲打痕
第 89 図 37 図版 78-1-37	石皿	閃緑岩	59.1	53.7	61.9	199.8	扁平石皿 / 表裏面はほぼ全面に平坦な使用面

第 34 表 110 号住居跡出土石器一覧

111 号住居跡

遺 構 (第 90 図)

[位 置] (C・D-3・4) グリッド。

[検出状況] 108 J を切る。

[構 造] 平面形：円形。主軸方位：N-2°-E。P 6 と P 9、P 3 と P 16 のそれぞれの中間を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸 420cm / 短軸 408cm / 深さ 53 ~ 74cm。壁溝：1 条検出された。上幅 28 ~ 44cm / 下幅 6 ~ 11cm / 床面からの深さ 2 ~ 19cm。壁：約 65 ~ 81° でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦である。中央部分と周溝の間の部分に硬化面が点在している。直床である。炉：検出されなかった。埋甕：検出されなかった。柱穴：16 本検出した。P 3、P 6、P 9、P 16 を主柱穴ととらえ、4 本柱建物と想定する。P 1、P 2、P 5、P 10、P 15 も主柱穴となる可能性がある。

[覆 土] 5 層に分層できた。

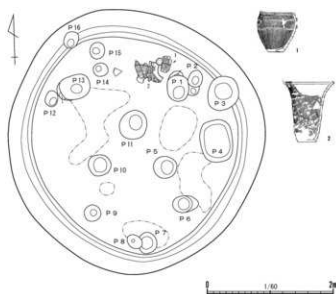
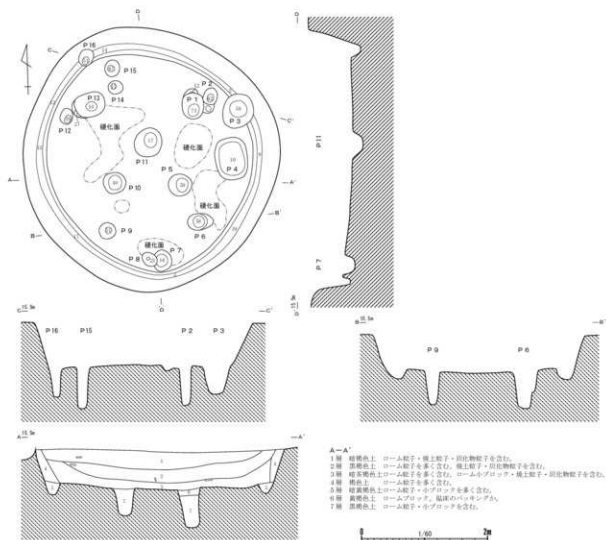
[遺 物] 住居北側から復元個体 2 点が出土した。深鉢形土器 (第 91 図 7) は 118 J 出土の破片と同一個体と思われる、深鉢形土器 (第 92 図 17) は 108 J 出土の破片と遺構間接合している。

[時 期] 中期後葉期 (加曾利 E 1 a 式)。

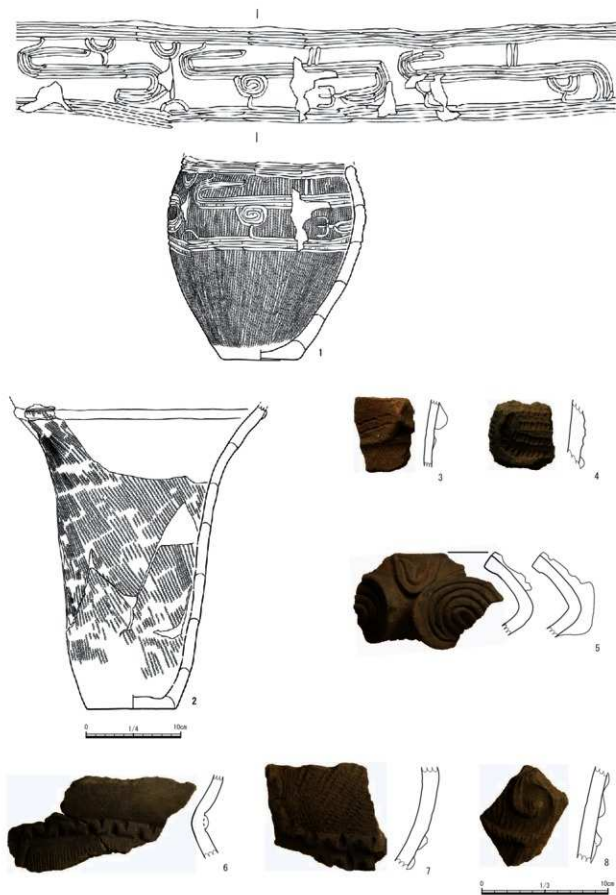
遺 物 (第 91 ~ 93 図、図版 78-2 ~ 80、第 35 ~ 37 表)

[土 器] (第 91 図・第 92 図 9 ~ 19、図版 78-2 ~ 80、第 35 表)

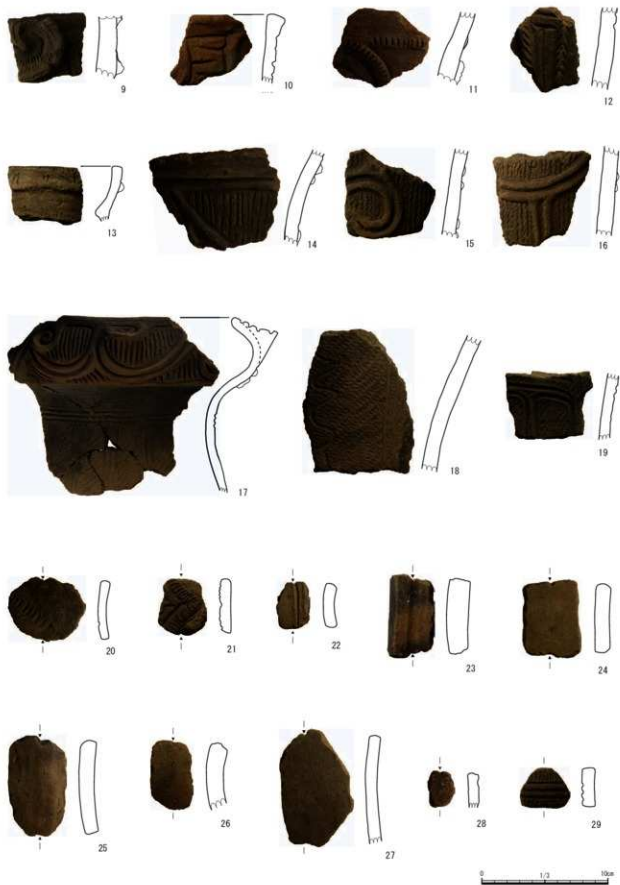
復元資料を 2 点、破片資料 17 点を図示した。1 は加曾利 E 1 a 式の深鉢形土器である。胴部上位に 3 本 1 対の沈線による文様を施す。2 は加曾利 E 1 式の深鉢形土器である。燃糸文を地文とし、上端に隆帯が横走る。3 は阿玉台式、4 ~ 12 は勝坂式、13 は勝坂 3 ~ 加曾利 E 1 式、14 ~ 19 は加曾利 E 式の深鉢形土器である。7 は 118 J 34 と同一個体と思われる。また、17 は 108 J 出土の破片と遺構間接合している。



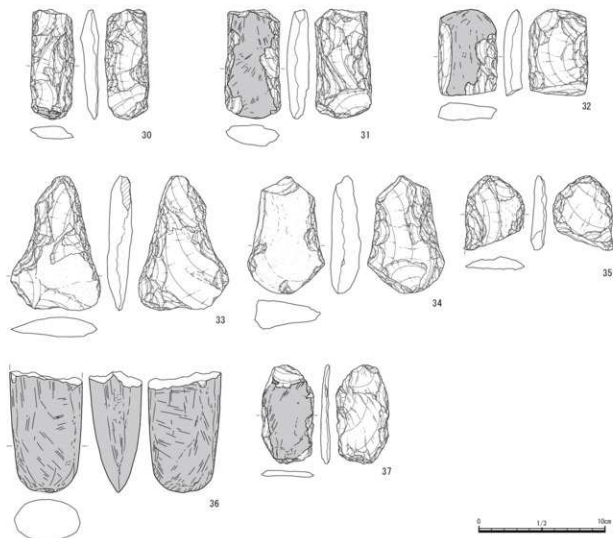
第90図 111号住居跡・遺物出土状態(1/60)



第91図 111号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第92図 111号住居跡出土遺物2 (1/3)



第93図 111号住居跡出土遺物3 (1/3)

探出番号 図版番号	種別 図種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土	前期 型式
第91図1 図版78-2-1	深鉢	胴部上位 ~底部 100%	高 [21.6] 底 8.0 厚 1.0	内湾しながら立ち上がる 胴部 / 平坦な底面	地文は惣糸 L 縦位 / 3本1対の沈線が胴部上端と中位にそれぞれ横走し区画、沈線間に3本1対の沈線による横 S 字状の文様、沈線による渦巻文・半円状の文様が付随 / 沈線間の地文は多くが磨消される / 底面に刷代痕無し	赤褐 / 砂粒中量、礫少量	加曾利 E1a 式
第91図2 図版79-2	深鉢	胴部上位 ~底部 40%	高 [31.8] 底 9.4 厚 1.1	外湾しながら立ち上がり 上位が強く外反する 胴部 / 平坦な底面	地文は惣糸 L 斜位 / 胴部上端に1本の横位隆帯が認められる / 隆帯断面台形状 / 底面に僅かに刷代痕あり	赤褐 / 砂粒・礫少量	加曾利 E1 式
第91図3 図版79-3	深鉢 破片	胴部 破片	厚 0.7	ほぼ直立する胴部	背の低い隆帯を1本横位に貼付 / 隆帯による楕円状の区画、区画の接点は突起状 / 区画内に規則的結節沈線文を横位に無文 / 隆帯断面三角状、隆帯脇まで付けて貼付 / 1層から出土	明赤褐 / 砂粒中量、礫微量、雲母多量	阿玉台 II 式
第91図4 図版79-4	深鉢 破片	胴部 破片	厚 1.2	ほぼ直立する胴部	隆帯による楕円状の区画 / 区画隆帯に幅広角押文が沿う / 区画内に2列の横位幅広角押文無文 / 隆帯断面カマゴコ状	褐 / 砂粒・礫微量	勝坂1a 式
第91図5 図版79-5	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	強く内湾する口縁部、 口唇部は内側に肥厚	隆帯を楕円状に貼付、隆帯の高さは一定でなくは左右が突起状に高い / 内側に沈線による同心円状の文様無文 / 楕円状の隆帯上部に粘土板を半楕円状に貼付し沈線による U 字状の文様と三文文を無文する / 楕円状の隆帯下部に縦位沈線の先端と思われる歯跡が複数見られる	褐 / 砂粒中量、礫微量	勝坂3b 新式
第91図6 図版79-6	深鉢	口縁部付近 ~胴部 破片	厚 1.1	内湾する胴部 / 括れる 頸部 / 内湾しながら強く 外湾する口縁部	地文は惣糸 R 縦位 / 口縁部無文 / 頸部に交互刺突文を付した隆帯が1本認められる / 頸部から隆帯が直状に垂下 / 隆帯断面台形状	暗褐 / 砂粒・礫少量	勝坂3b 新式

第35表 111号住居跡出土土器一覽1

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第91図7 図版79-7	深鉢	胴部 破片	厚1.2	内湾する胴部	地文はRL縦位/押印文を付した隆帯をL字状、横位に貼付/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇まで付けて、一部押し付けて貼付/118/34と同一個体か	褐/砂粒少量、礫微量	階板3b 新式
第91図8 図版79-8	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外傾する胴部	地文は単筋RL縦位・横位・斜位、隆帯上と渦巻文内側に施文/隆帯による渦巻文/渦巻文下部に縦位隆帯貼付し/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少量、礫微量	階板3b 新式
第92図9 図版79-9	深鉢	胴部 破片	厚1.4	ほぼ直立する胴部	2列の押し文、2本の横位沈線を付した隆帯による渦巻文/隆帯内側の一部に押し文が付着/隆帯内側には縦位、横位沈線による文様施文/隆帯断面の形状、隆帯内側一部沈線、押し文が付着、外側まで付けて貼付	暗褐/砂粒少量、礫微量	階板3b 式
第92図10 図版79-10	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	ほぼ直立する口縁部、 口唇部外側に肥厚	隆帯による区画文/区画文内に単沈線を左右交互に施文/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が付着	褐/砂粒少量、礫微量	階板3式
第92図11 図版79-11	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚1.3	外傾する胴部/やや内 湾する口縁部付近	押し文を付した横位隆帯で口縁部を画す/口縁部付近無文/横位隆帯下部押し文を付した隆帯による区画、区画内弧状の沈線が見られる/横位隆帯断面の低いカマボコ状、隆帯脇まで付けて貼付/区画隆帯断面直んだ台形状、隆帯脇1本の単沈線が付着	赤褐/砂粒少量、礫微量	階板3式
第92図12 図版79-12	深鉢	胴部 破片	厚1.2	ほぼ直立する胴部	矢羽根状突文を付した隆帯による区画/区画内には沈線によるT字状の文様/隆帯断面三角状、隆帯脇1本の単沈線が付着	暗褐/砂粒少量、礫微量	階板3式
第92図13 図版79-13	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	括れる頸部/内湾する 口縁部	地文は帯系L縦位/口縁部に横位1本の隆帯が認められる/隆帯上部2つ1組の押し文または短沈線による文様、3本の沈線による文様/横位隆帯と帯系間には2cm程の無文帯/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇まで付けて貼付	にふい、黄褐/砂粒・礫微量	階板3～ 加曾利E1 式
第92図14 図版79-14	深鉢	頸部下半～ 胴部 破片	厚1.0	外反する頸部下半～胴 部	地文は帯系L縦位/2本1対の横位隆帯で頸部と胴部を画す/頸部無文/胴部に隆帯を弧状に貼付/隆帯断面カマボコ状	暗褐/砂粒中量、礫少量	加曾利E1b 式
第92図15 図版79-15	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	地文は帯系L縦位/2本1対の隆帯による渦巻文/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒中量、礫少量	加曾利E1b 式
第92図16 図版79-16	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は帯系L縦位/2本1対の隆帯を弧状に貼付、2本1対の隆帯が弧状の隆帯に接し直法に垂下/隆帯断面カマボコ状	暗褐/砂粒中量、礫微量	加曾利E1b 式
第92図17 図版79-17	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.6	やや内湾する胴部/強 く外反して広がる頸部 /内湾する口縁部	地文は単筋RL縦位/口縁部に上端1本、下端1本の隆帯を画す/2本1対の弧状の隆帯先端に渦巻文施文、1つは突起状/口縁部区画内縦位沈線充填/頸部無文/頸部と胴部を横走する3本1対の沈線で画す/胴部に3本1対の沈線が直法に垂下(4単位残存)/隆帯断面角状・カマボコ状/108/出土の破片と遺構照合	暗褐/砂粒・礫微量	加曾利E2a 式
第92図18 図版79-18	深鉢	胴部 破片	厚1.1	上部が外反する胴部	地文は単筋RL縦位/3本1対の沈線が直法に垂下/1本の沈線が弧状に垂下	明褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E2式
第92図19 図版80-19	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾する胴部	地文はRL縦位/沈線による文様施文	暗褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E2式

第35表 111号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第92図20 図版80-20	土器 片断	完形	5.0/6.1/0.8	29.2	楕円形/挾部は2ヶ所/肩線はごく一部磨耗/胴部片利用/凹形文	黒褐/砂粒・礫微量、雲母少量	阿玉台II 式
第92図21 図版80-21	土器 片断	完形	4.5/3.7/0.8	20.5	楕円形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/隆帯に平行沈線が付着/平行沈線間押し文	暗褐/砂粒・礫微量	階板2～ 3式
第92図22 図版80-22	土器 片断	完形	3.7/2.4/0.8	11.9	楕円形/挾部は2ヶ所/肩線はごく一部磨耗/胴部片利用/沈線	にふい、褐/砂粒・礫微量	中期中層 ～後葉
第92図23 図版80-23	土器 片断	完形	6.5/3.5/0.9	48.9	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/口縁部片利用/内外面/口唇部に少量の赤色顔料残存	明褐～黒/砂粒中量、礫微量	中期中層 ～後葉
第92図24 図版80-24	土器 片断	完形	6.2/4.6/1.2	52.3	方形/挾部は2ヶ所/肩線はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	にふい、褐/砂粒・礫少量	中期中層 ～後葉
第92図25 図版80-25	土器 片断	完形	7.9/4.5/1.1	56.1	楕円形/挾部は2ヶ所/肩線はごく一部磨耗/胴部片利用/無文/赤色顔料が微量残存	明褐～黒/砂粒・礫微量	中期中層 ～後葉
第92図26 図版80-26	土器 片断	完形	5.3/3.3/1.3	31.55	方形/挾部は1ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/無文/1層から出土	明褐/砂粒・礫微量	中期中層 ～後葉
第92図27 図版80-27	土器 片断	90%	19.2/5.4/0.9	69.7	不整形/挾部は1ヶ所残存/肩線は一部磨耗/胴部片利用/無文	褐/砂粒少量、礫微量、雲母中量	中期中層 ～後葉
第92図28 図版80-28	土器 片断	80%	2.9/2.1/0.7	5.9	楕円形/挾部は1ヶ所残存/肩線は一部磨耗/胴部片利用/無文	にふい、褐/砂粒・礫微量	中期中層 ～後葉
第92図29 図版80-29	土器 片断	完形	3.1/3.9/1.1	16	三角形/肩線は顕著に磨耗/胴部片利用/帯系L/2本の平行沈線/1層から出土	黒褐/砂粒・礫微量	加曾利E1 式か

第36表 111号住居跡出土土製品一覽

神代番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 93 図 30 図版 80-30	打製石斧	頁岩	87.2	35.3	14.7	50.0	短冊形 / 基部は一部折れて欠損している / 左側縁下部や表面内面が磨滅している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 31 図版 80-31	打製石斧	頁岩	86.8	45.0	17.5	98.9	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 表面は磨滅面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 32 図版 80-32	打製石斧	ホルン フェルス	68.7	47.4	14.7	73.0	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は磨滅面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 33 図版 80-33	打製石斧	ホルン フェルス	107.0	71.3	19.5	147.9	楕形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 34 図版 80-34	打製石斧	ホルン フェルス	93.1	61.7	23.2	130.7	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面は磨滅面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 35 図版 80-35	打製石斧	砂岩	58.6	47.1	10.7	32.6	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れはほとんど見られない
第 93 図 36 図版 80-36	磨製石斧	緑色凝灰 岩	97.9	58.7	41.7	365.2	基部は折れて欠損している / 体部は表裏面ともに全面研磨面に覆われている
第 93 図 37 図版 80-37	不規則剥離のある 剥片	頁岩	78.1	41.7	7.5	28.7	裏面側両側縁に不規則剥離が認められる

第 37 表 111 号住居跡出土石器一覧

〔土製品〕(第 92 図 20～29、図版 80、第 36 表)

10 点を図示した。20～28 は土器片鉢、29 は土製円盤である。

〔石 器〕(第 93 図、図版 80、第 37 表)

8 点を図示した。30～35 は打製石斧である。36 は磨製石斧である。37 は不規則剥離のある剥片である。

112 号住居跡

遺 構 (第 94・95 図)

〔位 置〕(E・F-4) グリッド。

〔検出状況〕146 Y、13 M に切られる。

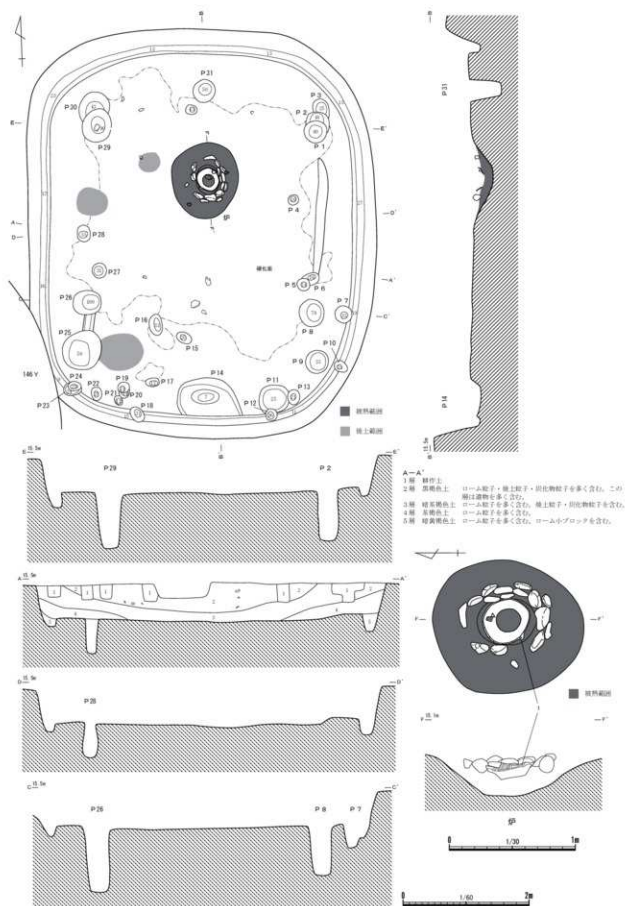
〔構 造〕平面形：隅丸方形。主軸方位：N-2°-E。P 9 と P 25、P 8 と P 26 のそれぞれの中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸 648cm / 短軸 549cm / 深さ 36～62cm。壁溝：2 条検出されたが、内側の壁溝はわずかである。上幅 16・30～50cm / 下幅 8・26～50cm / 床面からの深さ 6・9～27cm。壁：約 74～80° でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、東側の壁際は高くなり、P 1 と P 6 の間に段差が見られる。中央部分に硬化面を確認した。炉の西側に 2 ヶ所、P 25 の東側に被熱赤化範囲が認められる。直床である。炉：石囲埋裏炉。やや楕円形を呈し、深鉢形土器の口縁部 (第 96 図 1) が埋設されている。長軸 120cm / 短軸 108cm / 床面からの深さ 30cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：31 本検出した。P 1、P 8、P 9、P 25、P 26、P 29 を支柱穴ととらえ、6 本柱建物を想定する。P 14 は入口施設の可能性がある。建替・拡張は想定できない。

〔覆 土〕5 層に分層できた。

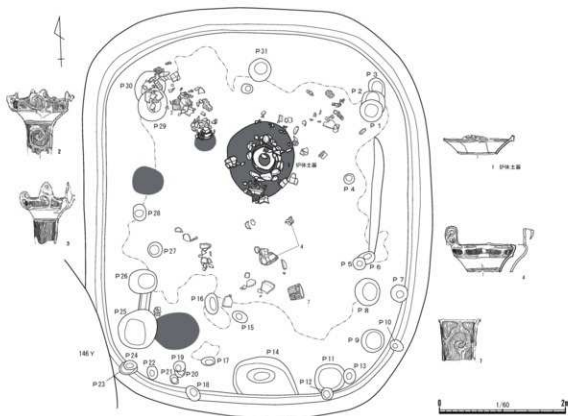
〔遺 物〕土器、土製品、石器が出土した。炉体土器 (第 96 図 1) が出土している。

〔時 期〕中期後葉期 (加曾利 E 1 b 式期)。

遺 物 (第 96～101 図、図版 81～87、第 38～40 表)



第94図 112号住居跡・炉(1/60・1/30)



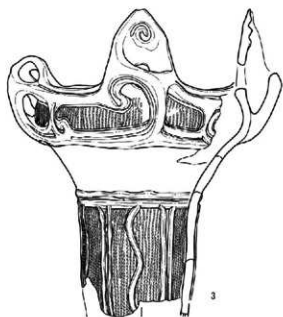
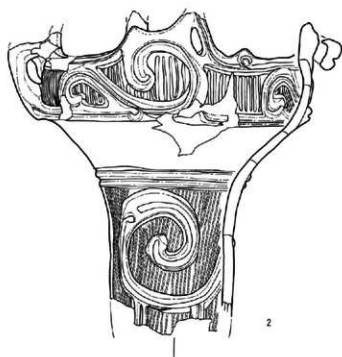
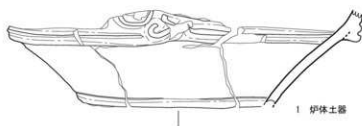
第95図 112号住居跡遺物出土状態(1/60)

〔土器〕(第96～98図・第99図16～25、図版81～85、第38表)

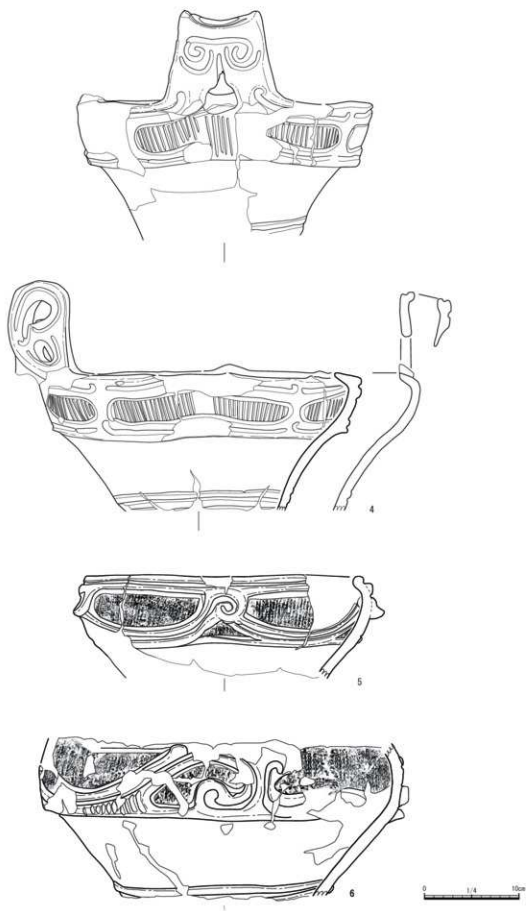
復元資料を10点、破片資料15点を図示した。1は炉体土器で、加曾利E1b式の深鉢形土器である。ほぼ頸部しか残存していないものの、口縁部区画下端に把手と思われる痕跡があること、他の復元個体が加曾利E1b式であることから、加曾利E1b式に帰属させた。2～9は加曾利E1b式の深鉢形土器である。2～4はいずれも口縁部に大型の把手を持つ。2は口縁部区画内に配した横位S字状の隆帯のを把手の一部として成形する。3は4単位の把手のうち、1単位を大きく成形し、先端に渦巻文を施す。4は中空の把手が1単位残存するが、他にも欠損した痕跡が見られるため、元は4単位の把手を持っていたと思われる。5は燃糸文を地文とし、口縁部区画内には先端が渦巻状となる弧状文を施す。6は口縁部上位が欠損しているが、口縁部区画内には2本1対の隆帯による弧状文の先端は渦巻状となり、口縁部区画下端と弧状文の間には一部縦位沈線を数本施文する部分が見られる。隆帯の剥落が多い。7は胴部で幅広の隆帯による渦巻文を施文する。8は胴部に2本1対の直状の隆帯と1本の波状隆帯が垂下する。9は縦位沈線で4単位の画した胴部に、それぞれ沈線による渦巻文を施し、弧状の沈線を充填する。10は曾利Ⅲ式の深鉢形土器である。縦位条線文を地文とし、2本1対の直状の隆帯と1本の波状隆帯が交互に垂下する。11・12は勝坂式、13～17は加曾利E式、18は曾利式、19は連弧文土器の深鉢形土器である。20・21は勝坂式、22～25は加曾利E式の浅鉢形土器である。

〔土製品〕(第99図26～第100図27～35、図版85、第39表)

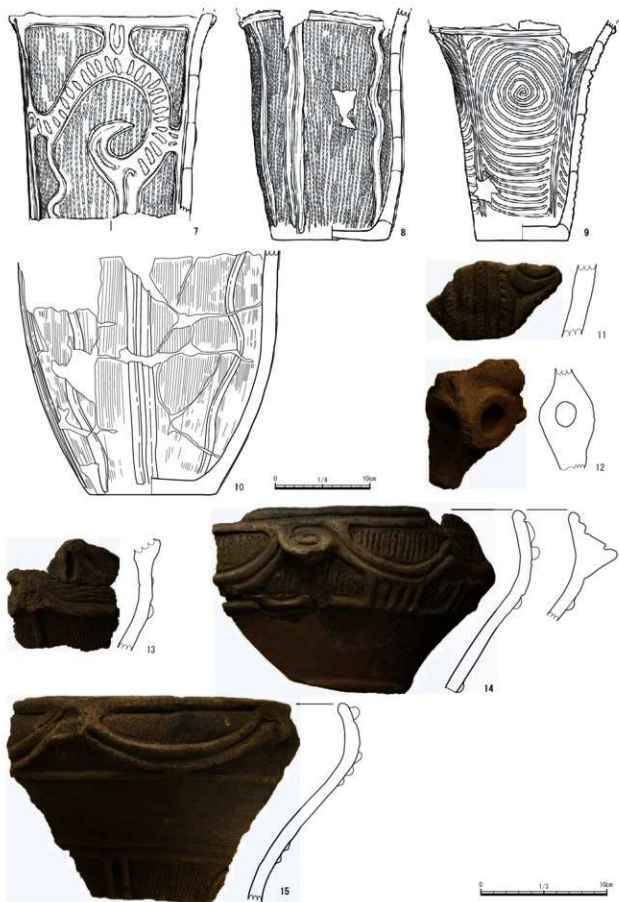
10点を図示した。26は土偶、27～35は土器片鍾である。26は土偶の左足と思われる。指は4本あり、沈線によって指を分割する。親指は他の指とやや離れる。残存部に文様は無い。



第96図 112号住居跡出土遺物1(1/4)



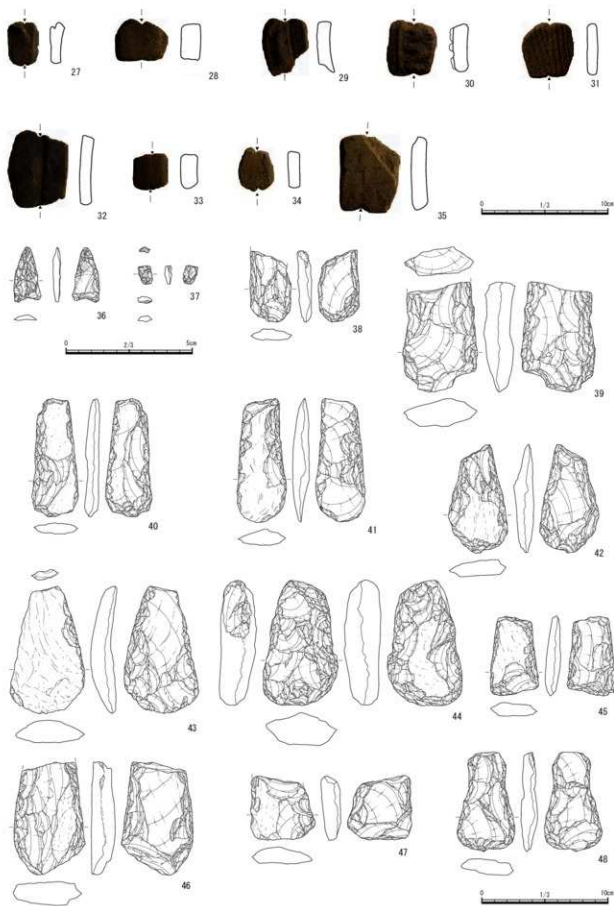
第97図 112号住居跡出土遺物2(1/4)



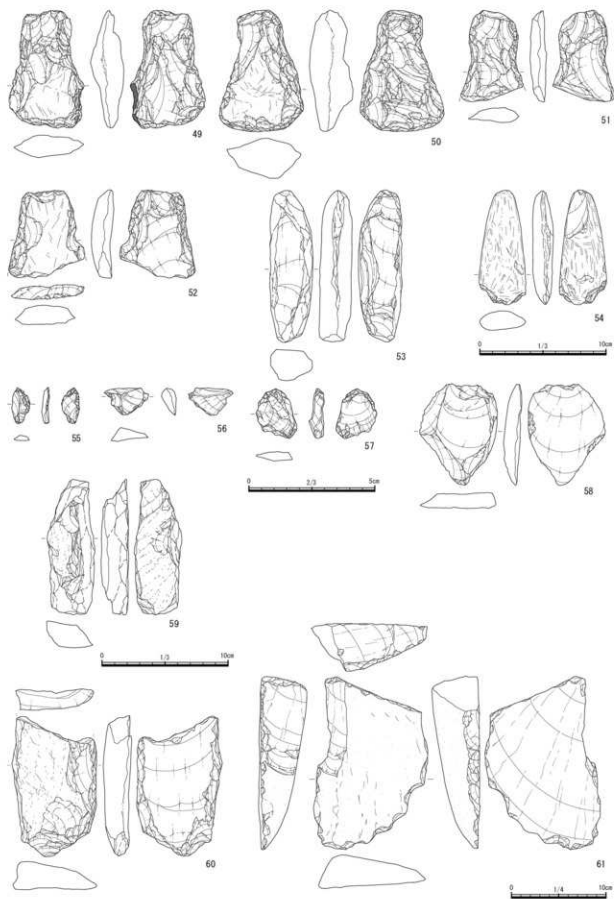
第98図 112号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)



第99図 112号住居跡出土遺物4(1/3)



第100図 112号住居跡出土遺物5 (1/3・2/3)



第101図 112号住居跡出土遺物6 (1/4・1/3・2/3)

探検番号 図版番号	種別 種類	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第96図1 図版81-1	深鉢	口縁部下 端～頸部 95%	高 [9.4] 厚 1.0	外積して広がる頸 部/やや内湾する 口縁部下端	口縁部と頸部を横位隆帯で画す/口縁部下面に把手の痕跡/沈積 による渦巻文/頸部無文/頸部下端に1本の隆帯が走る/隆帯断 面カマボコ状。隆帯の裾角が目立つ/胎土粗	暗褐色/砂粒 中量、礫少量	加曾利 E1b式
第96図2 図版81-2	深鉢	口縁部～ 胴部下位 90%	高 [34.3] 口 28.4 厚 1.0	キヤリバー形/直 線的に立ち上がる 胴部/外反して広 がる頸部/内湾し て広がる口縁部	地文は隠糸L縦位/口縁部を上端1本、下端2本の隆帯で画す/ 口縁部区画内2本1対の隆帯で横位5字状文を4単位配す/横 位5字文の右側渦巻部分を大型の把手として成形(把手は1単位 欠損)/口縁部区画内縦位沈積を充填/縦位沈積充填→口縁部区 画隆帯+横位5字状文配付/把手部の口唇部付近に沈積による渦 巻文が1単位あり/頸部と胴部を横化する2本1対の隆帯で画す /頸部無文/胴部に2本1対の直状隆帯を対称面に1単位ずつ つ配し正面側と裏側の2面に画す/正面側は2本1対の隆帯に よる渦巻文1単位、2本1対の隆帯部の沈積は途中で渦巻文が見 られる、2本1対の隆帯が渦巻文下部に接して垂下、2単位あり /裏側は2本1対の隆帯による渦巻文1単位/隆帯断面カマボ コ状、隆帯部に1本の単沈積が沿う	暗褐色/砂 粒・礫中量	加曾利 E1b式
第96図3 図版81-3	深鉢	口縁部～ 胴部下位 90%	高 [33.0] 口 21.5 厚 0.9	キヤリバー形/直 線的に立ち上がる 胴部/外反して広 がる頸部/内湾し て広がる口縁部	地文は隠糸L縦位/口縁部を隆帯で画す/把手4単位、内1単 位は他より大きく、孔と沈積による渦巻文状文飾/口縁部区画 は4単位に画す。隆帯と沈積による渦巻文が把手側面の渦巻文と 1対になる/頸部無文/頸部と胴部を2本1対の隆帯で画す/胴 部に2本1対の直状の隆帯6単位と1本の波状隆帯5単位を交 互に垂下、2本1対の直状隆帯が2単位並ぶ部分が1ヶ所あり/ 隆帯断面カマボコ状、口縁部区画隆帯に一部陥凹あり/隠糸無 文→口縁部隆帯+把手配付	赤褐色/砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E1b式
第97図4 図版82-4	深鉢	口縁部～ 頸部 70%	高 [24.2] 口 31.6 厚 1.0	キヤリバー形/外 反する頸部/内湾 する口縁部/口唇 部内面で断面三角 状に肥厚	中空の把手が1単位残存。他把手の痕跡が3単位あり、元は対 称面に4単位と思われる/横位隆帯で口縁部を画す/口縁部区 画内に沈積による鴨口状の区画施文、縦位沈積充填/口縁部区 画の上端下端には先端が渦巻状となる横位沈積を付す。上端は渦 巻が右側、下端は渦巻が左側/頸部無文/頸部と胴部の間に3本 の沈積が横走しているように見えるが一部には凸凹があり隆帯が 2本横走する。大型の把手がつくことに加曾利E1b式が多いこと に加曾利E1b式とした。	ぶい/黄褐色 /砂粒・礫 中量	加曾利 E1b式
第97図5 図版82-5	深鉢	口縁部～ 頸部 50%	高 [10.7] 口 (29.4) 厚 1.0	外積する頸部/外 積して内湾する口 縁部	地文は隠糸L縦位/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で画す /2本1対の隆帯により端部が渦巻状を呈する弧状文を配す。渦 巻部分はやや突起状(6単位)。/隆帯断面カマボコ状	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1b式
第97図6 図版83-6	深鉢	口縁部～ 頸部 50%	高 [16.6] 厚 1.1	キヤリバー形/外 積する頸部/内湾 する口縁部	地文は隠糸L縦位施文/口縁部と頸部を1本の隆帯で画す。口 縁部区画内隆帯は欠損/区画内に2本1対の隆帯により端部 に渦巻文を呈する弧状文を配す。弧状文と口縁部区画下端隆帯間 に弧状の沈積を充填/頸部無文/頸部下端に2本1対の横位隆 帯が横走/隆帯断面カマボコ状/隆帯の裾角が多く見られる	暗褐色/砂粒 ・礫少量	加曾利 E1b式
第98図7 図版83-7	深鉢	胴部上位 ～下部 100%	高 [21.8] 厚 1.1	上位は外反、中位 ～下部は直線的に 立ち上がる胴部	地文は隠糸L縦位/横位隆帯で胴部を画す/波状隆帯が1本ず つ対称面に垂下し、正面側と裏側の2面に画す/正面側は2本1 対の直状に垂下する隆帯間に幅広の隆帯による渦巻文施文、隆 帯上短沈積を充填し先端は隆帯の中央に1本の沈積施文/渦巻文下 端には直状の隆帯が横し中央に先端が弧状となった沈積施文/裏 面も同様に幅広の隆帯による渦巻文を施す/隆帯上の短沈積の 裾角が正面のものより狭い。渦巻文の一部から隆帯が1本波状に垂 下/隆帯断面カマボコ状・幅広、隆帯部に沈積が沿う	明黄褐色/砂 粒・礫中量	加曾利 E1b式
第98図8 図版83-8	深鉢	胴部上位 ～底部 90%	高 [24.1] 底 11.9 厚 1.0	上位は外反し中位 が内湾して立ち上 がる胴部/平坦な 底部	地文は隠糸L縦位/上部に2本の隆帯が横走/2本1対の直状に 垂下する隆帯3単位と1本の波状に垂下する隆帯3単位が交互 に垂下、間に直状の隆帯が1本のみ垂下する部分が1単位/隆 帯断面面低いカマボコ状・台形状/底面網代無し/2層から 出土	明赤褐色/砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E1b式
第98図9 図版83-9	深鉢	胴部上位 ～底部 90%	高 [23.5] 底 9.7 厚 1.1	下部は外積し上位 は外反しなから広 がる胴部/平坦な 底部	上部に1本の隆帯が横走/2本1対の直状に垂下する沈積4単位 で胴部を4つに画す/胴部上位に半沈積による渦巻文を施文し、 区画内を弧状の沈積で充填/隆帯断面カマボコ状/内面の器面は 全体的に凸凹があり粗い/底面網代無し	赤褐色/砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E1b式
第98図10 図版83-10	深鉢	胴部中位 ～底部 70%	高 [26.1] 底 12.5 厚 1.4	内湾して立ち上 がる胴部/平坦な 底部	地文は隠糸縦施文、胴部に施文/2本1対の直状の隆帯4単位と 1本の波状隆帯4単位が交互に垂下/隆帯断面カマボコ状/底面 網代無し	ぶい/黄褐色 /砂粒多量、 礫少量	曾利 式
第98図11 図版84-11	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	外積する胴部	押圧文を付した隆帯で画す/三文文、周囲にU字状の刺突文施 文/隆帯断面台形状、隆帯部2本の単沈積が沿う	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	勝板3 式
第98図12 図版84-12	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	括れる胴部	縦線状把手、一部押圧文施文/把手上部に縦位隆帯が見られる/ 把手下部から幅広の隆帯を貼付/把手周囲に僅かに半円状の刺突 文が見られる/隆帯断面台形、隆帯部間であけて配付、一部隆 帯短沈積が沿う	明褐色/砂 粒	勝板3 式
第98図13 図版84-13	深鉢	口縁部付 近～胴部 上位 破片	厚 0.9	やや外積する胴部 上位/内湾する口 縁部付近	地文は隠糸L、口縁部区画内横位施文+胴部縦位施文/先端に渦 巻文を配す横位隆帯で口縁部を画す/口縁部区画内に隆帯と沈積 による文様の痕跡が見られる/隆帯断面カマボコ状	暗褐色/砂粒 多量、礫微 量	加曾利 E1a式

第38表 112号住居跡出土土器一覧1

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 図種	遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第98図14 図版84-14	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外積する頸部/内 湾する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で画す /2本1対の隆帯を波状に配す。端部の小突起には沈線による渦 巻文脈文/弧の部分、突起部分から隆帯が複数本重下/頸部無文 /破片下端に横位隆帯が僅かに残存/隆帯断面カマボコ状	にぶい黄褐色 /砂粒中量、 礫少量	加曾利 E1b式
第98図15 図版84-15	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚0.8	キャリヤー形/やや 外反する胴部上 位/外積する頸部 /内湾する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で画す /2本1対の隆帯により端部が渦巻状を呈する弧状文を配す/頸 部無文/胴部と胴部を横走る2本の対の隆帯で画す/胴部に2 本1対の直状の隆帯が重下、1本の隆帯が波状に重下/隆帯断面 カマボコ状	暗褐色/砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E1b式
第99図16 図版84-16	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚1.0	外積する頸部/内 湾する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で画す /2本1対の隆帯を斜位に配す。端部がやや突起状となり沈線に よる渦巻文を施文/渦巻文下部から幅広い隆帯が重下、中央に浅 い縦位沈線が見られる/頸部無文/隆帯断面カマボコ状・三角状	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1b式
第99図17 図版84-17	深鉢	胴部下位 ～底部 破片	厚1.0	直状に立ち上がる 胴部/平坦な底部	地文は黒糸L縦位/2本1対の直状の隆帯が2単位重下、1本の 直状の隆帯が1単位重下/底面網代無し/内面に帯状の黒色の 付着物が少量見られる	暗褐色/砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E1b式
第99図18 図版84-18	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚1.0	括れる胴部/外積 する口縁部付近	口縁部付近無文/胴部に横位平行沈線を多数施文/胴部上位に2 本の組状の隆帯を波状に貼付/隆帯断面カマボコ状	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	曾利II 式
第99図19 図版85-19	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	外積して広がる口 縁部	地文はRL縦位/口縁部に3本一対の沈線が強く/3本1対の沈 線による連弧文と思われる	暗褐色/砂粒 少量、礫微 量	連弧文
第99図20 図版85-20	浅鉢	口縁部 破片	厚1.0	下位は内折し上位 は外積する口縁部	口唇部に円形の隆みあり/隆みの位置から矢羽根状刺突文を付し た隆帯が重下/隆帯横に沈線による渦巻文、横位沈線と三角押文 を横位に施文/渦巻文下部に交互刺突文/隆帯断面三角状	明褐色/砂粒 中量、礫微 量	勝版3b 式
第99図21 図版85-21	浅鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部	口縁部に突出部あり、隆帯による逆S字状の文様/隆帯断面カマ ボコ状、隆帯脇まで付けて貼付	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	勝版3 式
第99図22 図版85-22	浅鉢	口縁部付 近～体部 上位 破片	厚0.9	やや外積する胴部 上位/内湾する口 縁部付近	上端1本、下端1本の押圧文を付した隆帯で画す/区画内にC 字状の隆帯で区画、隆帯上矢羽根状刺突文を付す/沈線による渦 巻文を配し右側は縦位沈線充填、2本の横位沈線を中央に施文し 上下に縦位沈線充填/隆帯を斜位に貼付し上下に弧状の沈線を充 填/隆帯断面三角状・カマボコ状	赤褐色/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E1式
第99図23 図版85-23	浅鉢	口縁部付 近～体部 上位 破片	厚1.1	体部と口縁部の境 で内折	矢羽根状刺突文を縦位に施文し画す/長方形区画に沿って内側に 沈線を施文	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1式
第99図24 図版85-24	浅鉢	口縁部付 近～体部 上位 破片	厚0.9	体部と口縁部の境 で内折	2本1対の隆帯を斜位に貼付/沈線による渦巻文、隆帯断面カマ ボコ状	暗褐色/砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1式
第99図25 図版85-25	浅鉢	口縁部付 近 破片	厚1.0	内積する口縁部付 近	弧状の沈線を同心円状に施文/補修孔あり、楕円形、外面長軸 1.5cm・短軸1.0cm、内面長軸1.0cm・短軸0.8cm	明赤褐色/砂 粒・礫微量	加曾利 E1式

第38表 112号住居跡出土土器一覽2

発掘番号 図版番号	種別 図種	遺存状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第99図26 図版85-26	土鍋	左足 以外 欠形	[4.8]/2.8/[2.0]	19.8	足の傾き、縦指の表現から左足と思われる/指は4本、 それぞれを沈線で区切り縦指は他の指とやや離れる/足 裏は平坦/残存部に文様無し	黒褐色/砂粒中量、礫 微量	中期 中
第100図27 図版85-27	土器 片断	欠形	3.5/2.4/0.7	10	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/V字 状の突起の一部/波状沈線	にぶい褐色/砂粒少量、 礫微量、雲母中量	阿玉台II 式
第100図28 図版85-28	土器 片断	50%	[3.3]/4.2/1.5	25.4	方形か/挾部は1ヶ所残存/肩線は一部磨耗/口縁部片 利用/僅かに幅広い角押文が見られる	暗褐色/砂粒中量、礫微 量、雲母中量	勝版1 ～2式
第100図29 図版85-29	土器 片断	70%	[4.6]/3.6/0.8	19.3	方形/挾部は1ヶ所再残/肩線は顕著に磨耗/胴部片利用/ RL斜位/隆帯貼付/隆帯断面カマボコ状	暗褐色/砂粒少量、礫微量、 雲母中量	勝版3式
第100図30 図版85-30	土器 片断	完形	4.4/3.8/1.1	29.4	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/直状 波状の組状隆帯/4個から出土	黒褐色/砂粒・礫微量	曾利式
第100図31 図版85-31	土器 片断	完形	4.4/4.1/0.8	22	方形/挾部は2ヶ所/肩線は顕著に磨耗/胴部片利用/ 磨無し	褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ～後葉
第100図32 図版85-32	土器 片断	完形	6.1/4.7/1.7	43.7	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/口縁部片利用/ 無文/外面と口唇部に少量の赤色顔料残存	暗褐色/砂粒少量・礫 微量	中期中葉 ～後葉
第100図33 図版85-33	土器 片断	完形	2.8/2.7/1.3	14.7	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/口縁部片利用/ 無文	褐色/砂粒・礫微量	中期中葉 ～後葉
第100図34 図版85-34	土器 片断	完形	3.4/2.8/0.9	12.9	楕円形/挾部は2ヶ所/肩線の磨耗は未発達/口縁部片 利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒・ 礫微量	中期中葉 ～後葉
第100図35 図版85-35	土器 片断	80%	[6.2]/[5.9]/1.1	49.4	方形/挾部は2ヶ所/肩線は一部磨耗/胴部片利用/無 文	明黄褐色/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第39表 112号住居跡出土土製品一覽

[石器] (第100図36～48・第101図、図版86・87、第40表)

26点を図示した。35、36は石鏃である。37～52は打製石斧である。53は磨製石斧である。54～60は二次加工剥片である。

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第100図36 図版86-36	石鏃	黒曜石	21.4	11.0	2.8	0.6	円錐形 / 側縁は緩やかな弧状を呈する / 扱りは弧状 / 右側部一部欠損
第100図37 図版86-37	石鏃	黒曜石	7.4	5.6	2.7	0.1	片側部のみ残存
第100図38 図版86-38	打製石斧	頁岩	55.6	32.9	11.3	24.9	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる
第100図39 図版86-39	打製石斧	ホルンフェルス	83.7	59.1	23.1	147.8	短冊形 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる
第100図40 図版86-40	打製石斧	砂岩	93.3	36.6	10.1	45.2	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第100図41 図版86-41	打製石斧	ホルンフェルス	98.3	39.5	13.5	60.0	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第100図42 図版86-42	打製石斧	砂岩	85.1	46.2	15.5	62.6	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第100図43 図版86-43	打製石斧	ホルンフェルス	100.4	59.3	19.4	111.1	短冊形 / 基部は一部折れて欠損している / 表面のはほぼ全面に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第100図44 図版86-44	打製石斧	砂岩	99.7	60.2	29.3	213.9	短冊形 / 両側縁に敲打剥離が認められる
第100図45 図版86-45	打製石斧	砂岩	63.1	39.1	11.8	35.2	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第100図46 図版86-46	打製石斧	頁岩	89.1	57.1	19.1	130.4	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の稜上に局所的に潰れが認められる
第100図47 図版86-47	打製石斧	砂岩	53.1	51.5	15.5	47.2	短冊形 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる
第100図48 図版86-48	打製石斧	砂岩	78.7	45.7	13.0	50.2	短冊形 / 基部は一部折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる
第101図49 図版86-49	打製石斧	頁岩	93.7	59.5	26.4	123.0	短冊形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の稜上に局所的に潰れが認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる / 被熱の可能性はある
第101図50 図版86-50	打製石斧	ホルンフェルス	95.8	67.5	33.8	203.4	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる
第101図51 図版87-51	打製石斧	ホルンフェルス	72.3	50.5	13.7	49.6	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる
第101図52 図版87-52	打製石斧	砂岩	68.8	60.7	16.5	81.7	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の稜上に局所的に潰れが認められる
第101図53 図版87-53	打製石斧	結晶片岩	119.4	34.6	24.9	155.3	平面形状は不明 / 右半のみ残存 / 右側縁に敲打剥離が認められる
第101図54 図版87-54	磨製石斧	緑色凝灰岩	90.5	37.7	16.0	78.5	体部は表裏面ともに全面研磨面に覆われている / 被熱の可能性はある
第101図55 図版87-55	二次加工剥片	黒曜石	14.4	7.1	3.1	0.3	裏面側右側縁に連続的な二次的剥離が認められる
第101図56 図版87-56	二次加工剥片	黒曜石	11.0	18.0	6.0	0.7	表面側左側縁に不連続的な二次的剥離が認められる
第101図57 図版87-57	二次加工剥片	黒曜石	20.0	16.8	5.7	1.4	裏面側左端に不連続的な二次的剥離が認められる
第101図58 図版87-58	二次加工剥片	ホルンフェルス	80.5	61.4	14.8	71.5	主要剥離面側両側縁に不連続的な二次的剥離が認められる
第101図59 図版87-59	二次加工剥片	結晶片岩	106.2	39.7	20.9	104.6	表面側右側縁に不連続的な二次的剥離が認められる
第101図60 図版87-60	二次加工剥片	結晶片岩	148.5	93.2	30.6	480.4	表面側左端に不連続的な二次的剥離が認められる
第101図61 図版87-61	二次加工剥片	砂岩	181.6	115.4	48.7	1025.2	表面側右側縁に不連続的な二次的剥離が認められる

第40表 112号住居跡出土石器一覧

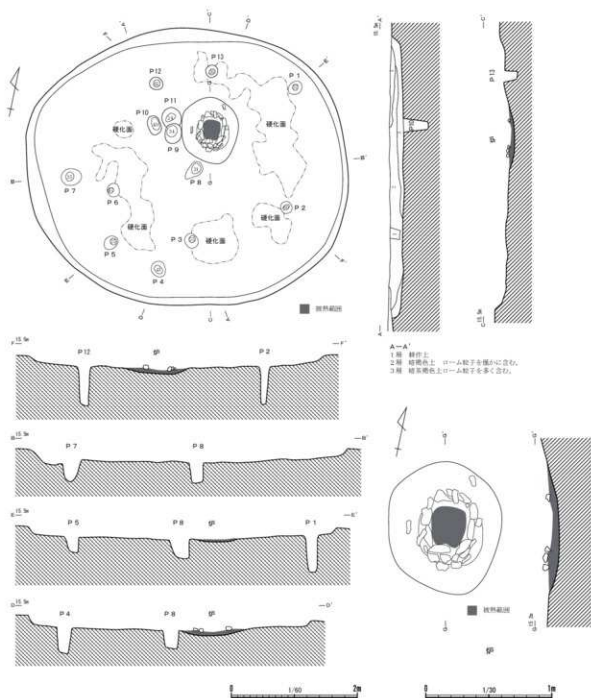
113号住居跡

遺構(第102図)

[位置] (E-3) グリッド。

[検出状況] ほかの遺構との切り合い関係なし。

[構造] 平面形：楕円形。主軸方位：N-11°-W。P2とP6の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸510cm/短軸435cm/深さ8~23cm。壁溝：検出されなかった。壁：約32~70°で緩やかに立ち上がる。床面：やや凹凸がある。直床である。炉：石囲炉。やや楕円形に石を配置し、その内側に被熱範囲が確認された。長軸105cm/短軸90cm/床面からの深さ4~12cm。



第102図 113号住居跡・炉 (1/60・1/30)

埋塞：検出されなかった。柱穴：13本検出した。P1、P2、P3、P6、P12を主柱穴ととらえ、5本柱建物を想定する。建て替え・拡張は想定できない。

〔覆土〕2層に分層できた。

〔遺物〕土器、石器が出土した。

〔時期〕中期中葉～後葉期（阿玉台Ⅲ～加曾利E1式期）。

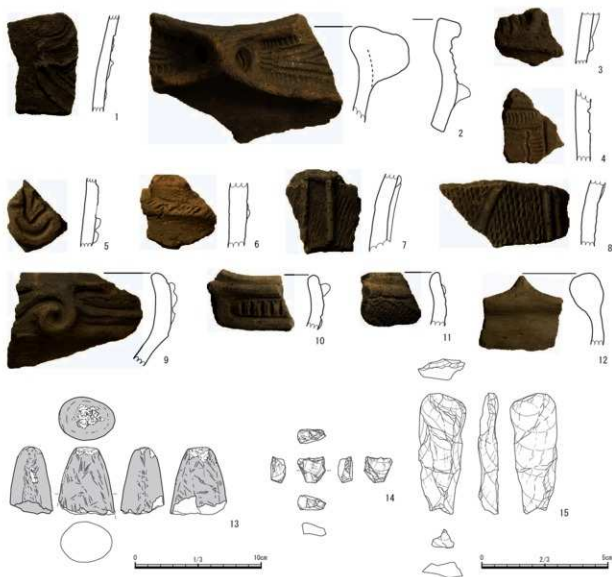
〔遺物〕(第103・104図、図版88、第41・42表)

〔土器〕(第103図1～12、図版88、第41表)

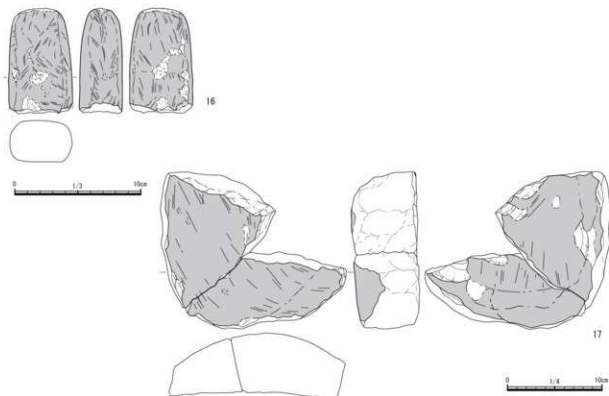
破片資料12点を図示した。1～3は阿玉台式、4～6は勝坂式、7～11は加曾利E式の深鉢形土器である。12は加曾利E1式の浅鉢形土器と思われる。

〔石器〕(第103図13～15・第104図、図版88、第42表)

5点を図示した。13は磨製石斧である。14は二次加工剥片である。15は剥片である。16は磨十四+敲石である。17は石皿である。



第103図 113号住居跡出土遺物1 (1/3・2/3)



第104図 113号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第103図1 図版88-1	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外反する胴部	隆帯を傾位M字状に粗く付けて貼付/隆帯部1部に複列の結節状沈線が沿う/隆帯断面三角状	暗褐色/砂粒・礫少量、雲母多量	阿玉台II式
第103図2 図版88-2	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚1.1	内湾する頸部/内湾する口縁部/やや外傾する口唇部	隆帯による口縁部区画/隆帯上縁文飾、単筋屈/区画の端点に巻貝状把手/区画には爪形文、三角押文が沿い中央に沈線文飾/頸部無文/隆帯断面背の高い三角状～カマボコ状/伊内から出土	褐/砂粒少量、礫中量、雲母多量	阿玉台III式
第103図3 図版88-3	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾する胴部	1本の隆帯を傾位に貼付/隆帯による楕円状と思われる区画/区画内隆帯に沿って押圧文飾文/隆帯断面三角状	褐/砂粒微量、礫少量、雲母多量	阿玉台III式
第103図4 図版88-4	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	2本の沈線による区画文/区画に爪形文、波状沈線が沿う	褐/砂粒・礫少量	膳版2a式
第103図5 図版88-5	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	隆帯による「し」字状の文飾、隆帯上沈線、押圧文飾文/隆帯断面角状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐色/砂粒・礫少量	膳版3b式
第103図6 図版88-6	深鉢	胴部 破片	厚1.3	ほぼ直立する胴部	押圧文を付した隆帯による区画/区画下部無文	褐色/砂粒少量、礫微量	膳版3式
第103図7 図版88-7	深鉢	胴部 破片	厚1.2	上位が外反し広がる胴部	地文は燃糸L縦位/隆帯を傾位に貼付/傾位隆帯から2本の直状の隆帯が垂下	暗褐色/砂粒少量、礫多量	加曾利E1b式
第103図8 図版88-8	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾する胴部	地文は燃糸L縦位/2本の直状の隆帯が垂下/1本の隆帯が破状に垂下/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少量、礫中量	加曾利E1b式
第103図9 図版88-9	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外傾し広がる頸部/内湾する口縁部	地文は口縁部区画内に僅かに見られるがほぼ消えているため詳細不明、縄文か/隆帯によって口縁部を画す、区画内隆帯で2段に画す/沈線と隆帯による渦巻文/頸部無文/隆帯断面角状～カマボコ状	暗褐色/砂粒・礫中量	加曾利E2a式
第103図10 図版88-10	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	隆帯によって口縁部を画す/区画内傾位沈線充填/隆帯断面カマボコ状～やや重んだカマボコ状	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫微量	加曾利E2式
第103図11 図版88-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部/やや外傾する口唇部	地文は単筋屈、横位/隆帯によって口縁部を画すか、上端隆帯1本、下端欠損/隆帯断面カマボコ状	明黄褐色～黒褐色/砂粒・礫中量	加曾利E3式
第103図12 図版88-12	浅鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	波状口縁/外面無文/波頂部側面に沈線による渦巻文飾文、口唇部に沈線、押圧文飾文	明黄褐色/砂粒少量、礫微量	加曾利E1式か

第41表 113号住居跡出土土器一覽

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第103図13 図版88-13	磨製石斧	緑色凝灰岩	55.1	45.4	35.2	120.9	基部のみ残存 / 基部は敲打を伴う剥離によって調整される / 表裏面ともほぼ全面研磨面に覆われている / 一部背面に敲打が認められ、左面は研磨後の後段階、右は面は研磨前の前段階
第103図14 図版88-14	二次加工 剥片	黒曜石	10.3	10.6	5.9	0.7	表面側上面に不連続な二次的剥離が認められる
第103図15 図版88-15	剥片	チャート	48.6	19.7	7.5	6.8	縦長剥片 / 打面は薄剥離面からなり、バルブは発達しており、末端形状は欠損のため不明である
第104図16 図版88-16	磨十四 載石	閃緑岩	84.3	51.6	34.7	295.5	表裏面全面に磨痕 / 敲打による浅い凹みが表裏面に1ヶ所ずつみられ、磨痕の後段階 / 細かい敲打直が連続みられる
第104図17 図版88-17	石皿	閃緑岩	192.9	164.9	69.5	2615.6	扁平石皿 / 表裏面はほぼ全面に平坦な使用面 / 一部がすずみ覆われており、被熱の可能性はある

第42表 113号住居跡出土石器一覧

114号住居跡

遺 構 (第105～107図)

〔位 置〕(D・E-4)グリッド。

〔検出状況〕145 Yに切られる。

〔構 造〕平面形:円形。主軸方位:N-10°-E。炉と埋壘の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模:長軸696cm / 短軸残存長666cm / 深さ39～61cm。壁溝:2条検出されたことから、拡張ないし建替住居と思われる。外側の壁溝は南西側の一部は検出されなかった。上幅7～18・20～48cm / 下幅2～9・3～11cm / 床面からの深さ2～15・2～8cm。壁:約60～80°でやや急斜に立ち上がる。床面:概ね平坦である。内側の壁溝の内側に硬化面を確認した。直床である。炉:石囲埋壘炉と思われるが、西側の一部にしか石が検出されなかった。深鉢形土器の口縁部(第108図1)が埋設されている。長軸100cm / 短軸96cm / 床面からの深さ28cm。埋壘:南端に1基検出された。深鉢形土器(第108図2)が埋設されている。掘込規模は長軸47cm / 短軸42cm / 床面からの深さ24cm。柱穴:45本検出した。拡張前はP5、P15、P36、P42を主柱穴ととらえ、4本柱建物を想定し、建替はないと思われる。拡張後はP1、P43・44、P3、P7・8、P12、P23、P30・31、P39・40の7本柱を想定し、1回程の建替があったと思われる。

〔覆 土〕4層に分層できた。

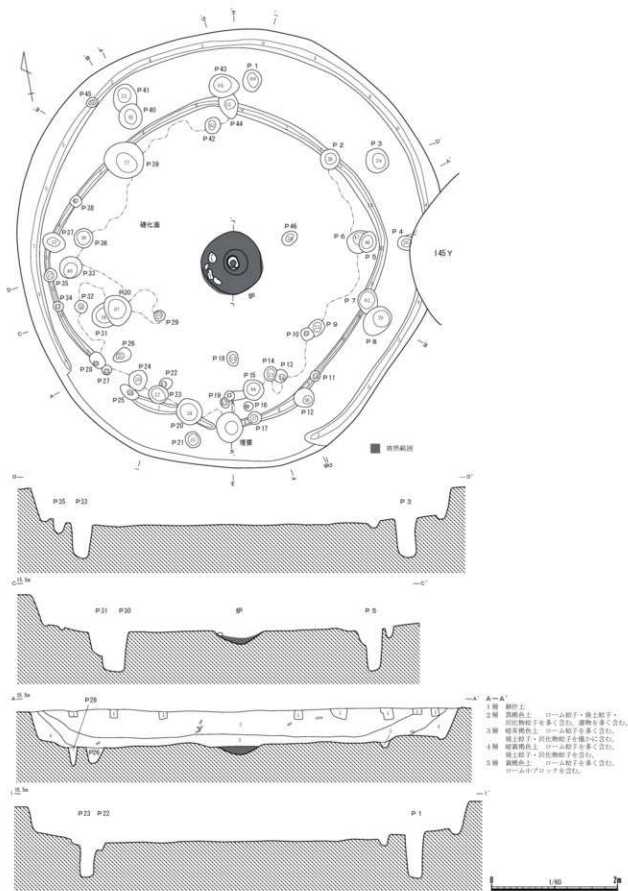
〔遺 物〕土器、土製品、石器が出土した。炉体土器(第108図1)、埋壘(第108図2)が出土している。

〔時 期〕中期後葉期(加曾利E2c式/連弧文2b段階期)。

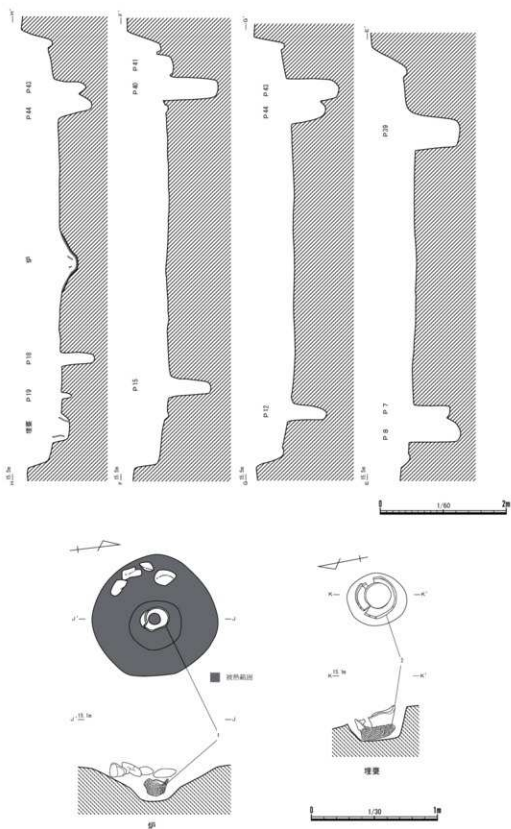
遺 物(第108～112図、図版89～91、第43～45表)

〔土 器〕(第108・109図・第110図14～21、図版89・90、第43表)

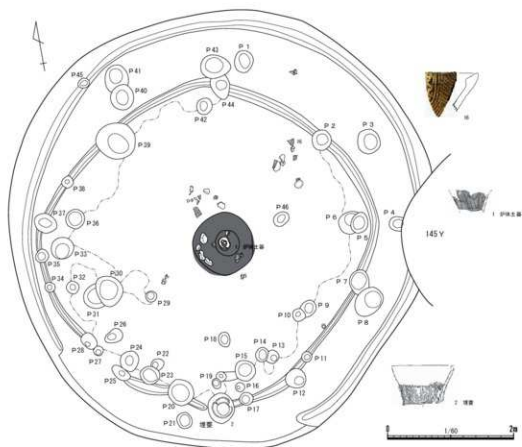
復元資料を6点、破片資料15点を図示した。1は炉体土器で、連弧文2b段階の深鉢形土器である。縦位条線文を地文とし、胴部が残存する。沈線による連弧文を施文する。2は埋壘で、曾利Ⅱ式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部は縄文を地文とする。頸部には紐状の隆帯が波状に巡る。胴部には隆帯が波状、鉤状に垂下する。3は勝坂3b新式の深鉢形土器である。口唇部に連鎖状隆帯が巡り、下端には矢羽根状刺突文を付した横位隆帯が巡る。縄文を地文とし、沈線を付した隆帯を弧状に貼付する。108 Jから出土した破片が遺構間接合している。4は小形深鉢で中期にあたると思われる。5は台付鉢の台部である。加曾利E3～4式と思われ、隆帯を逆U字状に貼付する。6は加曾利E式の有孔罅付土器である。罅部分に穿孔する。7～20は深鉢形土器である。7は阿玉台式、8～10は勝坂式、



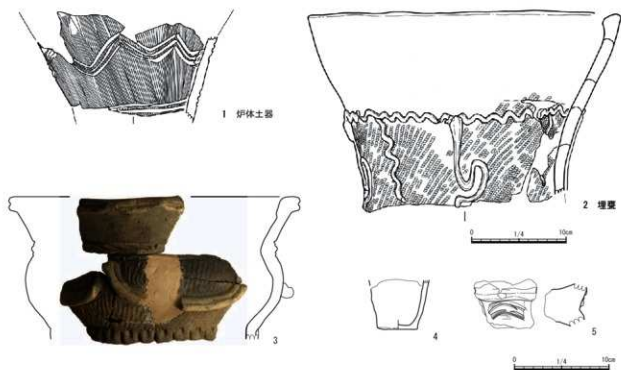
第105図 114号住居跡1 (1/60)



第106図 114号住居跡2・炉・埋裏(1/60・1/30)



第107図 114号住居跡遺物出土状態(1/60)



第108図 114号住居跡出土遺物1(1/4・1/3)

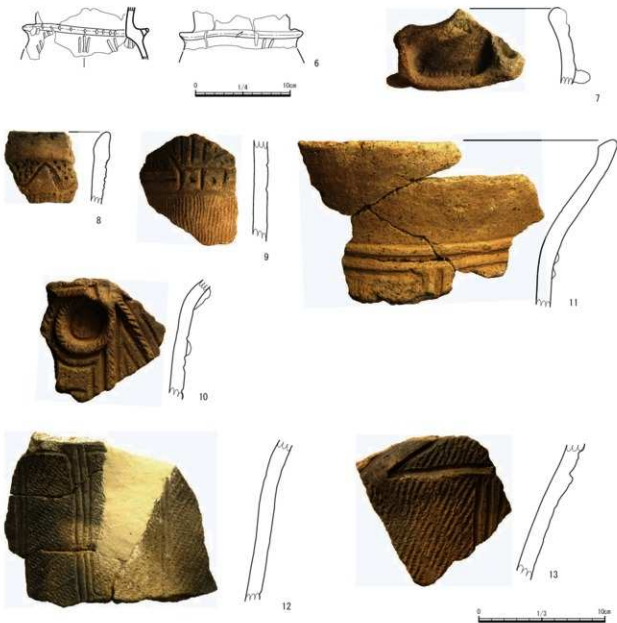
11～15は加曾利E式、16～18は曾利式、19は連弧文土器、20は連弧文土器・加曾利E2式に並行すると思われる土器である。8は沈線を鋸歯状に施し、沈線上側に円形刺突文を充填する。破片下端には押引文が僅かに見られる。勝坂1式にあたるものか。20は条線文を地文とし、口縁部上端と破片中位に2本の沈線が横走る。また2本1対の沈線も垂下する。連弧文2b段階、加曾利E2式に並行するものと思われる。

[土製品] (第110図22～30、図版90、第44表)

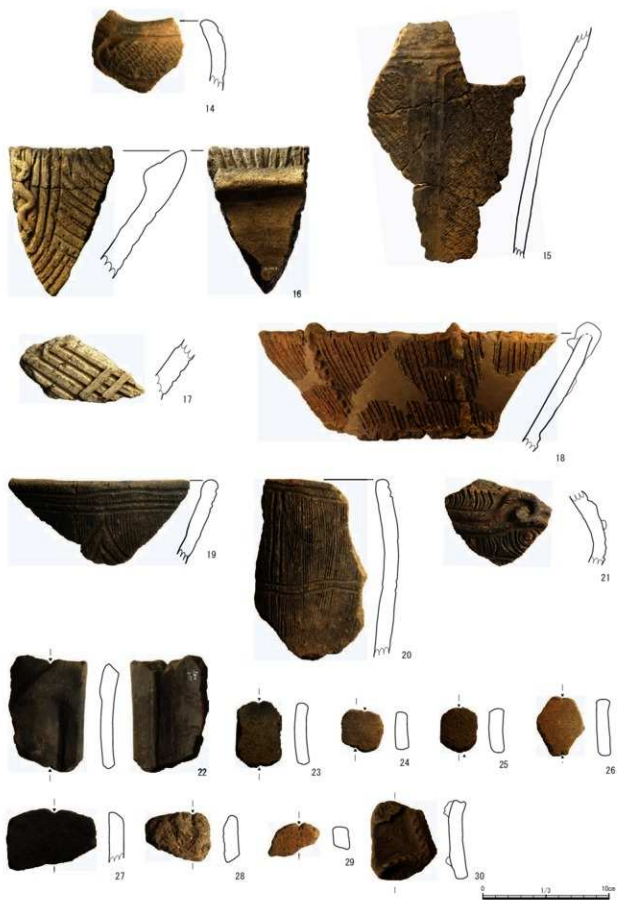
9点を図示した。22～29は土器片鏟、30は土製円盤である。

[石器] (第111・112図、図版91、第45表)

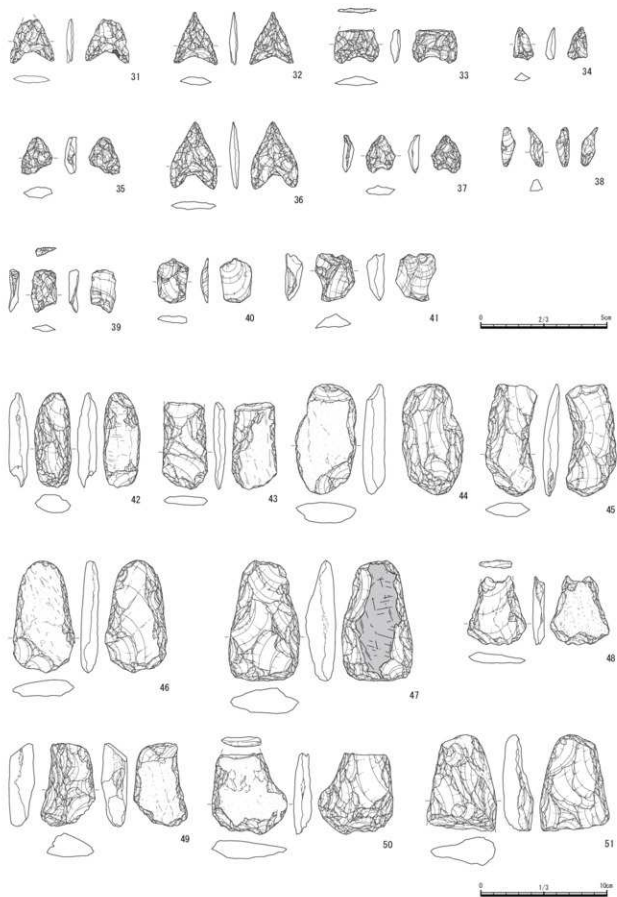
31点を図示した。31～37は石鏟である。38～41は楔形石器である。42～51は打製石斧である。52～59は二次加工剥片である。60は打製石斧調整剥片である。61は石皿である。



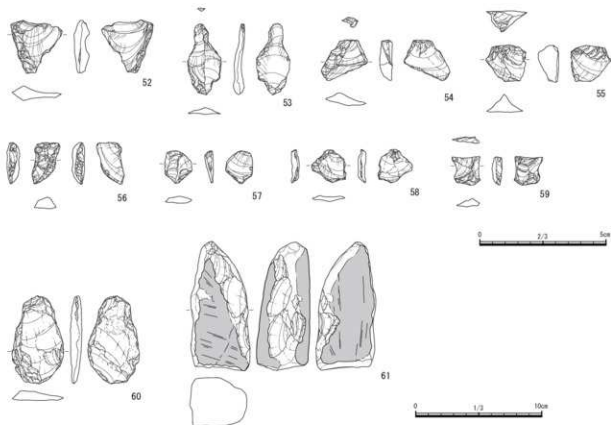
第109図 114号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第110図 114号住居跡出土遺物3 (1/3)



第111図 114号住居跡出土遺物4 (1/3・2/3)



第112図 114号住居跡出土遺物5 (1/3・2/3)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第108図1 図版89-1	深鉢	胴部上位 ～下位 50%	高 [11.6] 口 0.9	広がりながら立ち 上がる胴部	地文は縦文条線文、1単位が幅1.6cm10条見られる部分あり 3本1対の沈線による連弧文/胴部中位に3本1対の沈線が横走/砂体土層	橙/砂粒・ 礫多量	連弧文2b 段階
第108図2 図版89-2	深鉢	口縁部～ 胴部中位 90%	高 [20.1] 口 32.8 口 1.1	やや外反する胴部/ やや内高しながら 外傾する口縁部/口 唇部は内側に肥厚	地文は単節RL縦位/口縁部無文/胴部に1本の細状の隆帯が弧状に巡る/胴部から扇状の波状隆帯(4単位残存)、 扇状の粗状隆帯(5単位残存)を交互に無文、一ヶ所は鉤状の隆帯が2単位並ぶ/埋埋	赤褐/砂粒 中量、礫微 量	曽利皿式
第108図3 図版89-3	深鉢	口縁部～ 胴部 30%	高 [15.2] 口 24.0 口 0.9	外反する胴部/内 湾する口縁部付近	地文は0段多条RL斜位・縦位/口唇部に連続状隆帯が巡る /口縁部下端に矢羽根状刺突文・刺突文を付した隆帯が 巡る/沈線を付した隆帯を弧状に配す/隆帯断面がマゴコ 状/108jと114jとの遺構間接合	暗褐/砂粒 中量、礫微 量	帯板3b新 式
第108図4 図版89-4	小形 深鉢	胴部～底 部 100%	高 [5.2] 底 4.2 口 0.5	やや外傾しながら 立ち上がる胴部/ 平坦な底部	無文/底面に網代痕無し	褐/砂粒・ 礫微量	中期
第108図5 図版89-5	台付 鉢	台部 50%	高 [3.4]	やや括れる	上端に1本の横位隆帯、下位に隆帯を逆U字状に貼付	褐/砂粒中 量、礫微量	加賀利E3 ～4式
第109図6 図版89-6	有孔 踵付 土器	口縁部付 近～胴部 上位 90%	高 [5.5] 口 0.7	内湾する胴部上位/ やや外傾する口縁 部付近	口縁部無文/踵に孔を垂直に穿孔、対称面に1単位ずつ残 存、その他欠損のため不明瞭/踵下位には2本1対の沈線 による文様	明褐/砂粒 中量、礫微 量	加賀利E式
第109図7 図版89-7	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部	隆帯による口縁部区画/区画内隆帯に沿って爪形文施文	明褐/砂粒 中量、礫微 量、雲母多 量	阿玉台皿式
第109図8 図版89-8	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	直立する口縁部	口縁部上位無文/沈線による扇束状の文様、沈線上側に円 形刺突文充填/幅広角押文状の押引文を横位に施文	褐/砂粒少 量、礫微量、 雲母中量	帯板1式か 雲母中量

第43表 114号住居跡出土土器一覽1

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第109図9 図版89-9	深鉢	胴部 破片	厚1.0	直立する胴部	地文は無節R斜文/平行沈線による区画文/区画文内に三角押文・沈線による文様の周囲に押文充填/中央に円形押文のある正方形の文様	褐/砂粒中量・礫微量	磨坂3b式
第109図10 図版89-10	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外反する胴部	押文文を付した隆帯による区画文・円形の文様/区画内沈線による文様/隆帯断面台形状・隆帯幅2本の沈線が白う	褐/砂粒多量・礫微量	磨坂3b式
第109図11 図版89-11	深鉢	胴部～ 頸部 破片	厚1.2	外反する胴部/外積して広がる口縁部	地文は縦位黒糸のようであるが僅かなため不明瞭/口縁部無文/胴部に2本1対の隆帯が横走/2本1対の隆帯が直状に垂下/隆帯断面台形状	褐/砂粒・礫中量	加曾利E1式
第109図12 図版90-12	深鉢	胴部	厚0.9	上位がやや外反する胴部	地文は単節RL縦位/直状の平行沈線が垂下/平行沈線には半載竹管状工具の痕面を使用・地文が磨消される	黒褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E2式
第109図13 図版90-13	深鉢	口縁部付 近～胴部 上位 破片	厚1.1	外積する胴部上位/外積しながらやや内湾する口縁部付近	地文は0段多条LR縦位/隆帯を斜位に貼付/口縁部区画下端は彫部にやや盛り上がり横位沈線によって区画/胴部に3本1対の沈線が直状に垂下し沈線間の隆帯を磨消す/隆帯断面幅広台形状	褐/砂粒少量・礫微量	加曾利E3a～b式
第110図14 図版90-14	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	内湾する口縁部	地文は単節RL縦位/沈線による楕円状の口縁部区画	褐色/砂粒・礫微量	加曾利E3b式
第110図15 図版90-15	深鉢	口縁部付 近～胴部 中位 破片	厚0.8	上位が外反する胴部/内湾する口縁部付近	地文は単節LR縦位/口縁部付近に地文は無く2本の沈線を横位に無文/胴部は2本の沈線が直状に垂下し沈線間の隆帯を磨消す	暗褐/砂粒・礫少量・赤褐色の粒を少量含む	加曾利E3c式
第110図16 図版90-16	深鉢	口縁部 破片	厚1.5	外積して広がる口縁部/口唇部は内側に肥厚	平行沈線による重弧文/口唇部から紐状の隆帯が直状に垂下/平行沈線には半載竹管状工具の痕面を使用	灰黄褐色/砂粒・礫微量	曾利II型
第110図17 図版90-17	深鉢	口縁部付 近 破片	厚1.5	外積する口縁部付近	沈線と隆帯による斜格子文	浅黄褐色/砂粒・礫微量	曾利II～III式
第110図18 図版90-18	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	外積して広がる口縁部/口唇部は内側に肥厚	地文は縦位沈線文/口唇部に押文施文/口唇部から直状の隆帯が垂下し、交互斜突文を施し蛇行状に成形(2単位残存)/口縁部下端に交互斜突文を付した隆帯が直る	明褐/砂粒中量・礫少量	曾利III式
第110図19 図版90-19	深鉢	口縁部	厚1.1	外積する口縁部	地文は縦位条線文/口縁部上位に3本の横位沈線が横走/3本1対の沈線による連弧文	黒褐/砂粒少量・礫微量	垂弧文2b段階
第110図20 図版90-20	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚1.0	内湾する胴部/内湾する口縁部	地文は縦位条線文/口縁部上位・胴部上位に2本1対の沈線が横走/口縁部横位沈線から2本1対の直状の沈線が垂下/内面彫部は凹凸がやや粗い	黒褐/砂粒中量・礫少量	垂弧文2b段階・加曾利E2式に並行か
第110図21 図版90-21	浅鉢	体部 破片	厚1.0	内湾する胴部	2本1対の隆帯による渦巻文/周囲を沈線による重弧状の文様・弧状の文様を充填/隆帯断面カマボコ状/外面に赤色顔料残存	暗褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E1式

第43表 114号住居跡出土土器一覽2

探検番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第110図22 図版90-22	土器 片断	完形	8.9/6.1/0.9	95.7	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片断利用/隆帯による渦巻状の文様/外面・内面に赤色顔料残存	黒褐/砂粒中量・礫微量	磨坂3b式
第110図23 図版90-23	土器 片断	完形	5.2/3.6/0.9	26.16	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は磨耗が未発達/胴部片断利用/無文	明褐/砂粒中量・礫微量	中期中量～後量
第110図24 図版90-24	土器 片断	完形	3.3/3.4/0.9	14.7	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片断利用/無文	褐/砂粒・礫微量	中期中量～後量
第110図25 図版90-25	土器 片断	完形	3.6/2.9/1.1	15.2	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片断利用/無文	明褐/砂粒少量・礫微量	中期中量～後量
第110図26 図版90-26	土器 片断	80%	4.7/3.8/0.9	20.4	菱形状/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片断利用/無文	明褐/砂粒少量・礫微量	中期中量～後量
第110図27 図版90-27	土器 片断	40%	[4.6]/7.0/1.1	46.4	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片断利用/無文	黒/砂粒少量・礫微量	中期中量～後量
第110図28 図版90-28	土器 片断	50%	[4.1]/5.2/[1.3]	29.4	方形か/挾部は1ヶ所残存・位置が右側に片寄る/周縁は一部磨耗/胴部片断利用/外面剥落のため文様は不明	褐/砂粒少量・礫微量・雲母中量	中期中量～後量
第110図29 図版90-29	土器 片断	20%	[2.5]/4.0/[1.2]	14.0	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片断利用/無文	明褐/砂粒・礫少量	中期中量～後量
第110図30 図版90-30	土製 円盤	完形	6.2/5.2/1.1	51.9	不整形/周縁は顕著に磨耗/胴部片断利用/押文を付した隆帯による区画文/区画文隆帯内側に沿って押文直施文	暗褐/砂粒・礫微量	磨坂2式

第44表 114号住居跡出土土製品一覽

神宮番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第111図31 図版91-31	石鏝	硬質頁岩	17.4	17.3	3.0	0.7	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 扱りは深く直線状 / 先端部欠損
第111図32 図版91-32	石鏝	チャート	20.9	17.3	3.5	0.8	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 扱りは浅く弧状
第111図33 図版91-33	石鏝	黒曜石	13.2	17.9	3.9	0.9	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 扱りは浅く弧状 / 先端部欠損
第111図34 図版91-34	石鏝	黒曜石	12.3	8.0	3.8	0.3	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 扱りは浅く弧状
第111図35 図版91-35	石鏝	黒曜石	12.9	13.9	4.7	0.8	凹基無茎 / 側縁は直線状 / 扱りは浅く弧状 / 右側部欠損
第111図36 図版91-36	石鏝	チャート	26.6	18.7	3.7	1.5	凹基無茎 / 側縁は緩やかな弧状を呈する / 扱りは深く屈曲する
第111図37 図版91-37	石鏝	黒曜石	14.2	12.3	4.5	0.7	凹基無茎 / 側縁は緩やかな弧状を呈する / 扱りは浅く弧状 / 右側部欠損
第111図38 図版91-38	楔形石器	黒曜石	16.5	5.5	5.2	0.4	上下に両極剥離が認められる
第111図39 図版91-39	楔形石器	黒曜石	16.9	10.2	4.2	0.7	上下に両極剥離が認められる
第111図40 図版91-40	楔形石器	黒曜石	17.6	12.6	3.2	0.7	上下に両極剥離が認められる
第111図41 図版91-41	楔形石器	黒曜石	18.9	16.1	7.3	1.5	上下に両極剥離が認められる
第111図42 図版91-42	打製石斧	頁岩	74.8	29.0	15.9	43.8	短冊形 / 刃部は一部折れて欠損している / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第111図43 図版91-43	打製石斧	砂岩	68.4	36.1	9.6	29.5	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第111図44 図版91-44	打製石斧	片状砂岩	86.8	49.0	18.0	93.8	短冊形 / 基部は一部折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第111図45 図版91-45	打製石斧	ホルンフェルス	89.5	41.1	12.3	49.6	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れは不明瞭である
第111図46 図版91-46	打製石斧	片状砂岩	88.4	49.5	14.1	75.1	短冊形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第111図47 図版91-47	打製石斧	砂岩	95.3	56.3	22.5	140.7	短冊形 / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第111図48 図版91-48	打製石斧	緑泥片岩	55.8	46.1	9.3	32.1	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、中央部が面状になっている
第111図49 図版91-49	打製石斧	ホルンフェルス	66.1	44.1	20.4	66.9	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、中央部が面状になっている
第111図50 図版91-50	打製石斧	砂岩	67.3	60.8	14.9	66.8	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる / 表面の一部が凸出しており、被験の可能性がある
第111図51 図版91-51	打製石斧	緑泥片岩	76.2	55.0	23.8	113.0	短冊形 / 表面は不明 / 基部のみ残存 / 表面の一部に原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる / 右側縁もほぼ全面の稜上に潰れが認められ、一部は局所的に面状になっている
第112図52 図版91-52	二次加工 削片	黒曜石	21.3	20.6	6.2	1.4	裏面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図53 図版91-53	二次加工 削片	黒曜石	29.0	14.0	4.6	1.0	表面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図54 図版91-54	二次加工 削片	黒曜石	12.9	19.0	4.9	1.1	主要剥離面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図55 図版91-55	二次加工 削片	黒曜石	14.5	15.8	8.5	1.4	表面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図56 図版91-56	二次加工 削片	黒曜石	16.8	9.9	5.4	0.9	表面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図57 図版91-57	二次加工 削片	黒曜石	12.9	10.8	3.3	0.4	裏面側末端に不連続な二次的剥離が認められる
第112図58 図版91-58	二次加工 削片	黒曜石	13.1	13.5	2.6	0.4	背面側左側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第112図59 図版91-59	二次加工 削片	黒曜石	11.6	11.0	4.2	0.5	主要剥離面側末端に不連続な二次的剥離が認められる
第112図60 図版91-60	打製石斧 調整削片	緑泥片岩	70.1	41.4	8.7	31.5	裏面に打製石斧の側縁調整面を取り込んでいる
第112図61 図版91-61	石皿	閃緑岩	104.5	48.7	40.9	291.4	扁平石皿 / 表裏面はほぼ全面に平坦な使用面

第45表 114号住居跡出土石器一覧

115号住居跡

遺構 (第113図)

[位置] (E・F-2) グリッド。

[検出状況] ほかの遺構との切り合い関係なし。

[構造] 平面形：楕円形を呈すと思われる。主軸方位：N-20°-E。P1とP5、P2とP3のそれぞれの中間を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸残存長414cm／短軸残存長399cm／深さ8cm。壁溝：検出されなかった。壁：約37°～53°で緩やかに立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、中央部分がわずかに低くなる。炉の周辺などに一部硬化面を確認した。直床である。炉：埋裏炉で、円形を呈し、東側と南側にL字形に土器片(第114図1)や石(第114図8)が埋設されている。長軸51cm／短軸46cm／床面からの深さ10cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：5本検出した。P1、P2、P3・4、P5を主柱穴ととらえ、4本柱建物を想定する。

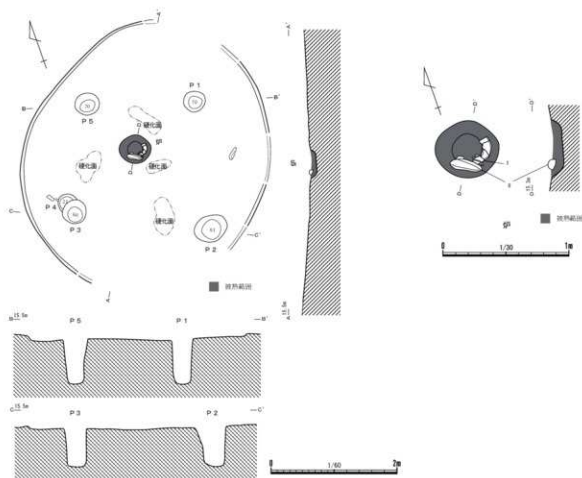
[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。炉体土器(第114図1)、敲石(第114図8)も炉内より出土している。

[時期] 中期中葉期(勝坂3b古式期)。

遺物 (第114図、図版92、第46～48表)

土器 (第114図1～4、図版92、第46表)

破片資料4点を図示した。1～3は勝坂式、4は中期後半の深鉢形土器である。1は炉体土器で隆帯



第113図 115号住居跡・炉 (1/60・1/30)

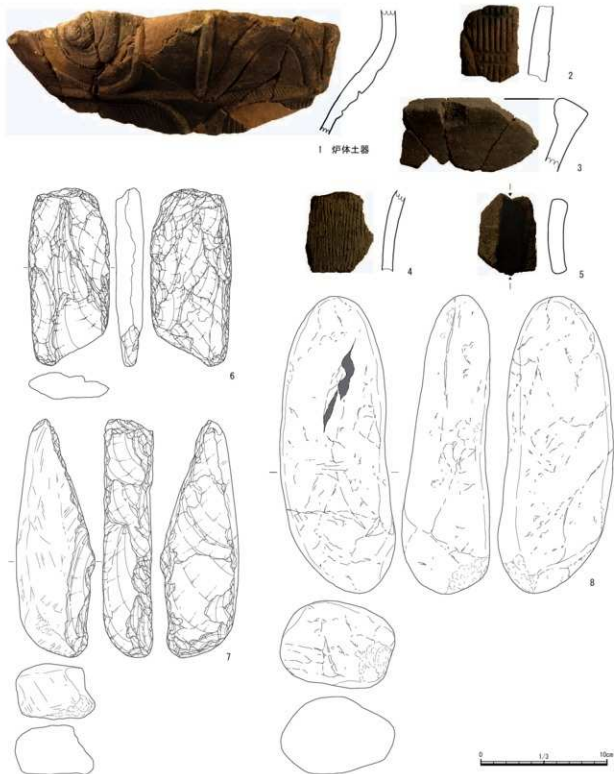
による楕円状の区画や渦巻文を施文する。2は半截竹管状工具の腹面による縦位平行沈線を充填する。

〔土製品〕(第114図5、図版92、第47表)

1点を図示した。5は土器片錘である。

〔石器〕(第114図6～7、図版92、第48表)

3点を図示した。6は打製石斧である。7は二次加工剥片である。8は敲石で炉内より出土している。



第114図 115号住居跡出土遺物(1/3)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第114図1 図版92-1	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚1.1	外積する胴部/外 積しながら内積す る口縁部付近	押圧文を付した横位隆帯で口縁ふと胴部を画す/口縁部には押圧 文を付した隆帯による渦巻文、縦位2本の隆帯間に逆U字状に隆 帯を付した文様を貼付/胴部は押圧文を付した隆帯による楕円状 区画を成形、区画内縦位沈線/隆帯断面カマボコ状～台形 状、隆帯幅1本の単位沈線が沿う、一部で付けて貼付/器体土質	褐/砂粒少 量、礫微量	勝坂3b 古式
第114図2 図版92-2	深鉢	胴部 破片	厚1.5	やや外反する胴部	弧状の平行沈線、区画になるか/縦位平行沈線を充填/横位の三 角押圧文を破片上部に1列、下部に2列施文	明褐/砂 粒・礫微量	勝坂2 式
第114図3 図版92-3	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	やや外反して立ち 上がる口縁部/口 縁部は内側に肥厚	残存部無文	橙/砂粒・ 礫中量	勝坂式
第114図4 図版92-4	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外反する胴部	地文は燃糸L縦位と思われる、線状になり不明瞭	にぶい黄褐 /砂粒中量、 礫少量	中期後 葉

第46表 115号住居跡出土土器一覽

探検番号 図版番号	種別 器種	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第114図5 図版92-5	土器 片断	90%	{6.3}/4.6/1.2	47.6	方形か/挾部は2ヶ所/縦線は一部磨耗/口縁部片利用/無文	黒褐/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第47表 115号住居跡出土土製品一覽

探検番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第114図6 図版92-6	打製石斧	緑色片岩	142.6	64.7	21.8	280.7	短冊形/刃部は折れて欠損している/両側縁に敲打割離が認め られる/両側縁のほぼ全面の縁上に潰れが認められる/表面の 一部が赤色化しており、焼熱の可能性はある
第114図7 図版92-7	二次加工 剥片	安山岩	191.2	65.1	38.2	692.5	表面割右側縁に不連続な二次的割離が認められる
第114図8 図版92-8	敲石	砂岩	239.9	86.2	65.9	1989.3	下面に敲打痕/炉内より出土/卵石として転用か

第48表 115号住居跡出土土器一覽

116号住居跡

遺構(第115・116図)

[位置] (C・D-5・6) グリッド。

[検出状況] 9・10Hに切られる。

[構造] 平面形：円形。主軸方位：N-11°-E。P7とP8の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸580cm/短軸562cm/深さ48cm。壁溝：1条検出された。上幅11～26cm/下幅4～8cm/床面からの深さ6～12cm。壁：約66～87°でやや急斜に立ち上がる。床面：やや凹凸がある。直床である。ドーナツ状に柱穴付近に硬化面が点在する。炉：土器と石が検出され、石埋埋裏炉の可能性ある。長軸108cm/短軸85cm/床面からの深さ10cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：15本検出した。P2・3、P5、P7、P8、P10、P11、P13を主柱穴ととらえ、7本柱建物想定する。

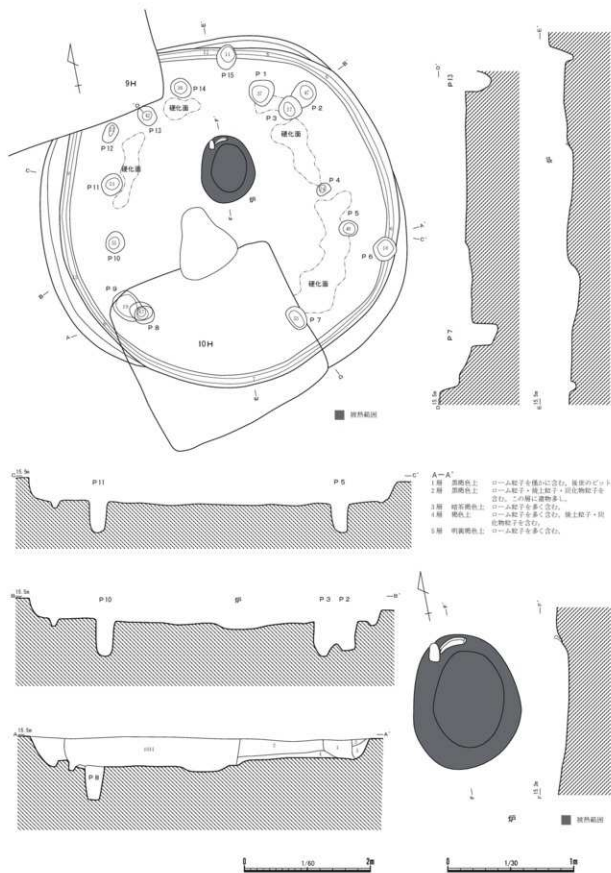
[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。

[時期] 中期後葉期(加曾利E1b式期)。

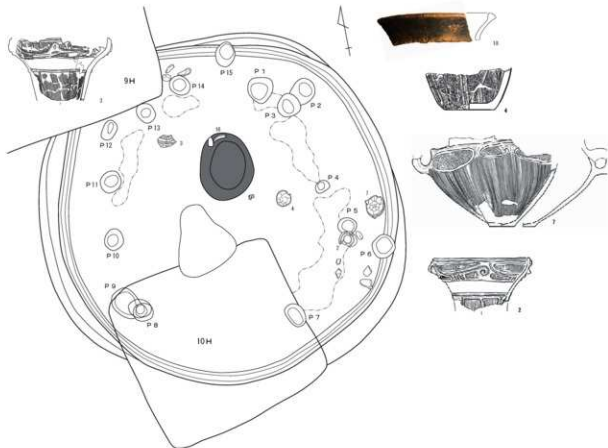
遺物(第117～119図、図版93～95、第49～51表)

[土器](第117図・第118図12～21、図版93・94、第49表)

復元資料を7点、破片資料14点を図示した。1は加曾利E1a式の深鉢形土器である。燃糸文を地文とし、2本1対の隆帯で文様を付す。2・3は加曾利E1b式の深鉢形土器である。いずれも燃糸文



第115図 116号住居跡・炉 (1/60・1/30)



第116図 116号住居跡出土状態(1/60)

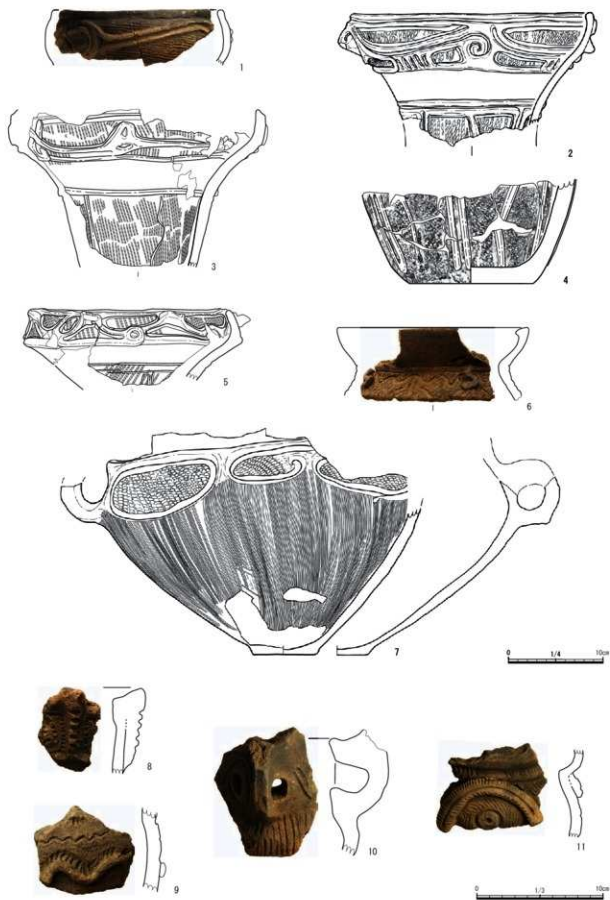
を地文とし、口縁部区画を持つ。区画内の文様下端から区画下端の隆帯に向かって、複数の短い隆帯が垂下する。3は胴部の垂下する隆帯に混じって波状の沈線が垂下する。4・5は加曾利E1c式の深鉢形土器である。4は口縁部区画を持ち、区画内部の隆帯による弧状文の端部は突起状となる。頸部は無文で、胴部は沈線が垂下する。5は縄文を地文とし、直上の隆帯と波状の隆帯が交互に垂下する。6は曾利Ⅱ式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部は縄文を施す。文様の施文には、半截竹管状工具の腹面による平行沈線が用いられ、頸部には直状と波状の平行沈線が巡る。また、頸部にはS字状の隆帯を貼付する。7は加曾利E3式の両耳壺である。体部上位には沈線による楕円形の区画を施し、内側に縄文を施文する。区画下位は縦位条線文を施す。把手は1単位残存し、対称面の把手は欠損している。8～12は勝坂式、13～15は加曾利E式、16・17は曾利式の深鉢形土器である。18・19は加曾利E1式と思われる浅鉢形土器である。18は炉からの出土で、19と同一個体の可能性がある。20・21は加曾利E1～2式の浅鉢形土器である。

【土製品】(第118図22～31、図版94、第50表)

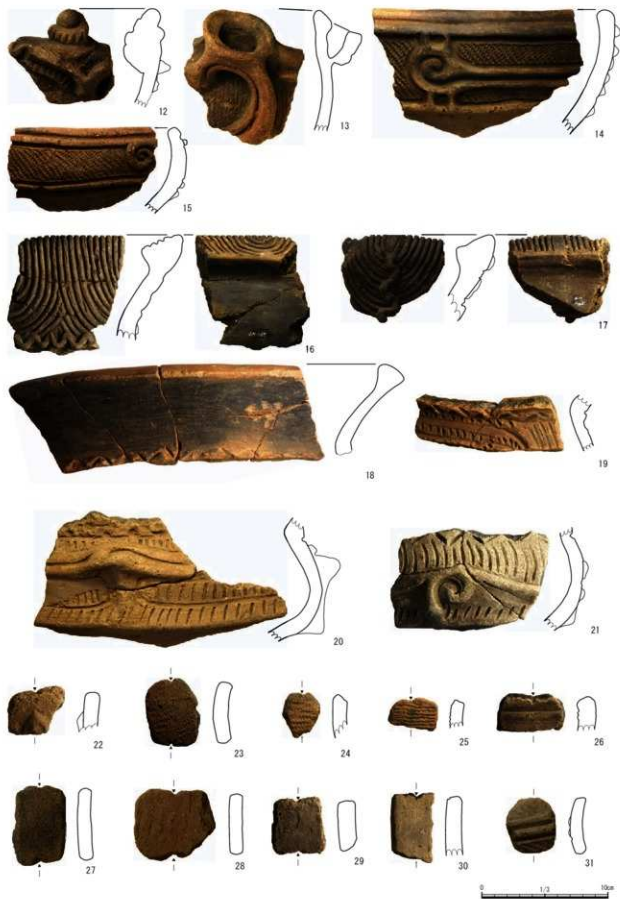
10点を図示した。22～30は土器片錘、31は土製円盤である。

【石器】(第119図、図版95、第51表)

11点を図示した。32・33は石籤である。34は楔形石器である。35～37は打製石斧である。38・39は磨製石斧である。40は二次加工剥片である。41は石核である。42は磨石である。

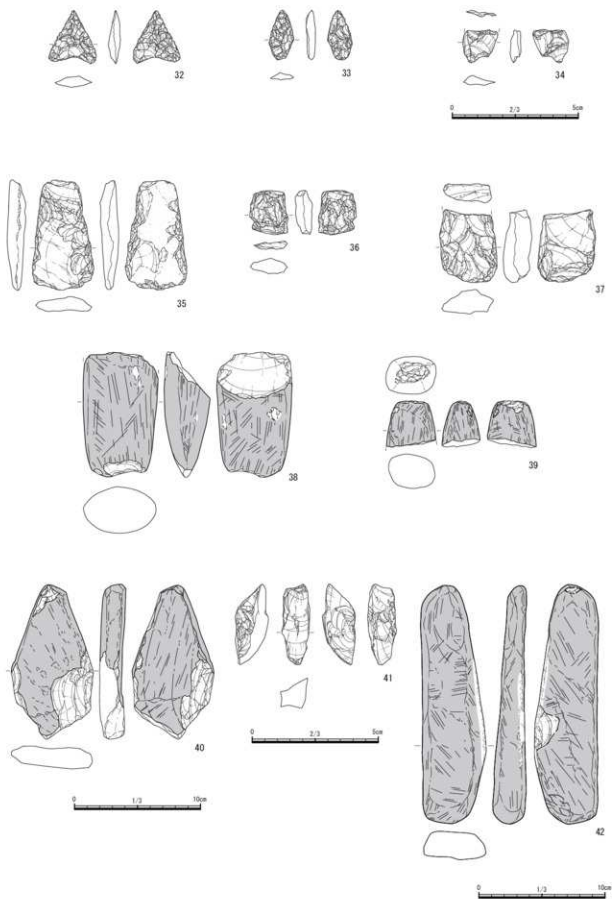


第117図 116号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第118図 116号住居跡出土遺物2 (1/3)

第3章 検出された遺構と遺物



第119図 116号住居跡出土遺物3 (1/3・2/3)

探検番号 図版番号	種別 遺存状態	部位 遺存状態	法量 (cm)	路形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第117図1 図版93-1	深鉢	口縁部 40%	高16.1 口(18.0) 厚0.7	内湾する口縁部	地文は黒系L縦位/端部が渦巻状となる2本1対の隆帯を 重ねた施文/隆帯断面力マボコ状	褐/砂粒中 量、礫微量	加曾利 E1a式
第117図2 図版93-2	深鉢	口縁部～ 胴部上位 80%	高14.2 口24.6 厚0.9	キャリバー形/やや 外反する胴部/外 反して広がる胴部/ 内湾して広がる口 縁部	地文は黒系L縦位/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で 囲す/2本1対の隆帯により端部が渦巻状を呈する弧状文を 配す(3単位現存、1単位は変形)、対称面にある2つの渦巻 帯は突起状で他は突起状でない/弧の部分から下端の区画隆 帯に向かってそれぞれ3本、6本、7本の短隆帯が下向の 胴部無文/頸部と胴部を横走する2本1対の隆帯で囲す/胴 部に2本1対の直状の隆帯(3単位現存)、1本の波状隆帯(3 単位現存)が交互に垂下/隆帯断面力マボコ状	褐/砂粒・礫 少量	加曾利 E1b式
第117図3 図版93-3	深鉢	口縁部～ 胴部上位 40%	高115.8 底13.0 厚1.1	キャリバー形/や や外反する胴部上 位/外反する胴部/ 内湾する口縁部	地文は黒系L縦位/隆帯による口縁部区画/口縁部区画内に 横位1本の隆帯、端部は渦巻状、途中三角状の文様、区画下 端の隆帯に向かって数本の隆帯が垂下/頸部無文/頸部と 胴部を横位1本の隆帯で囲す/胴部には直状の隆帯(2単 位現存)と波状の沈線(1単位現存)が垂下/隆帯断面力マボコ 状	暗褐/砂粒多 量、礫微量	加曾利 E1b式
第117図4 図版93-4	深鉢	口縁部～ 胴部上位 40%	高8.2 口20.4 厚0.8	キャリバー形/外 反する胴部上位/ 外反する胴部/内 湾する口縁部	地文は単節RL、口縁部区画内斜位・横位、胴部縦位/隆帯 による口縁部区画/口縁部区画内に端部が突起状になった 弧状文、突起部には沈線による渦巻文/頸部無文/頸部上 位に2本の沈線が横走、3本1対の沈線が垂下/隆帯断面力 マボコ状	黒褐～赤褐/ 砂粒中量、礫 微量	加曾利 E1c式
第117図5 図版93-5	深鉢	胴部下位～ 底部 95%	高111.0 底13.0 厚1.8	内湾して立ち上 がる胴部/平坦な底 部	地文は単節RL縦位/2本1対の直状の隆帯(6単位)と1本 の波状隆帯(5単位)が交互に垂下/隆帯断面力マボコ状	明黄褐/砂粒 多量、礫中量	加曾利 E1c式
第117図6 図版93-6	深鉢	口縁部～ 胴部上位 20%	高7.6 口20.0 厚0.9	やや内湾し外積す る口縁部/括れる 胴部/内湾する胴 部上位/口唇部は 内側に肥厚	地文は単節LR横位/口縁部無文/頸部に1本の直状の平行 沈線・波状の平行沈線が認められる/頸部にS字状の隆帯貼付(2 単位現存)/弧状の平行沈線の上部に短直状の平行沈線を加 えた文様/平行沈線には半截竹管状工具の痕面を使用	暗褐/砂粒少 量、礫微量	曾利Ⅱ 式
第117図7 図版93-7	両耳 壺	口縁部～ 底部 50%	高123.8 底6.6 厚1.0	外積して広がりに 上る胴部/肥厚な 口縁部/やや内湾する口縁部	地文は単節LR縦位、体部上位区画内に施文、縦位条線文、 体部に施文/体部上位に楕状把手1単位現存、対称面にもあ ると思われる欠損/把手から1本の隆帯が横走、楕円状 の区画の一部を形成/体部上位に楕円状の隆帯が傾位に連なる 、区画内施文文脈/区画以下には条線文/底面に網代敷し 押圧文を付した隆帯を縦位に貼付し区画を形成/区画内側に 角押文が付う/区画内側に角押文による文様が僅かに見られる	明褐/砂粒中 量、礫少量	加曾利 E3b式
第117図8 図版93-8	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	ほぼ直立する口縁 部/口唇部は内側 に肥厚	押圧文を付した隆帯を縦位に貼付し区画を形成/区画内側に 角押文が付う/区画内側に角押文による文様が僅かに見られる	褐/砂粒・礫 微量	勝坂1a 式
第117図9 図版93-9	深鉢	胴部 破片	厚1.0	内湾する胴部	隆帯を波状に貼付/隆帯に幅広の広形文が付う/沈線を波状 に施文/隆帯断面力マボコ状	に黄褐/砂粒 少量、礫微量	勝坂2a 式
第117図10 図版93-10	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	把手部分は直立し 下位は内湾する口 縁部	地文は黒系R縦位/楕圓状の把手、内側は中央に孔が1つ	褐/砂粒少 量、礫微量	勝坂3b 式
第117図11 図版93-11	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚0.8	内湾する口縁部/ 括れる胴部/内湾 する胴部	地文は単節RL横位・斜位/口縁部無文/頸部に矢羽根状刺 突文を付した隆帯が巡る/中央に沈線・線に押圧文を付した 隆帯を弧状に貼付、中央に沈線による円形の文様を付す/弧 状の隆帯内側の縄文は充填縄文	に黄褐/砂粒 少量、礫微量	勝坂3b 式
第118図12 図版93-12	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/口 唇部は内側に肥厚	口縁部に渦巻状の突起あり/隆帯をY字状に貼付(一部交互 刺突文を付す)/隆帯下端に沿って半截竹管状工具の先端に よる刺突文を付す	暗褐/砂粒中 量、礫微量	勝坂3 式
第118図13 図版93-13	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部	地文は黒系L縦位/口縁部に把手付、把手から口縁部区画 内の文様へ繋がる	明赤褐/砂粒 中量、礫微量	加曾利 E1b式
第118図14 図版94-14	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積する胴部/内 湾する口縁部	地文は単節RL横位/口縁部は上端1本、下端1本の隆帯で 囲す/2本1対の隆帯を横位に貼付し先端は渦巻状、渦巻部 の上下から区画隆帯に向かって2本の隆帯が伸びる/頸部 無文/隆帯断面力マボコ状	黒褐/砂粒・ 礫少量	加曾利 E1c式
第118図15 図版94-15	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	外積する胴部/内 湾する口縁部	地文は単節RL横位/口縁部は上端1本、下端2本の隆帯で 囲す/区画内に渦巻文脈/頸部無文/隆帯断面力向状	褐/砂粒・礫 中量	加曾利 E1～2 式
第118図16 図版94-16	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	外積する口縁部/口 唇部は内側に肥厚	平行沈線による重弧文/頸部には短状の隆帯を波状に貼付/ 平行沈線には半截竹管状工具の痕面を使用/116-16と116- 17は同一個体	灰黄褐/砂粒 少量、礫微量	曾利Ⅱ 式
第118図17 図版94-17	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	外積する口縁部/口 唇部は内側に肥厚	平行沈線による重弧文/口縁部上位から隆帯が波状に垂下/ 平行沈線には半截竹管状工具の痕面を使用/116-16と116- 17は同一個体	灰黄褐/砂粒 少量、礫微量	曾利Ⅱ 式
第118図18 図版94-18	浅鉢	口縁部 破片	厚1.1	外反する口縁部/口 唇部は内側に肥厚	下端に押圧文を網状状に施文/116-18と116-19は同一個体 の可能性が有る/内から出土	黒褐/砂粒中 量、礫微量	加曾利 E1式か

第49表 116号住居跡出土土器一覧1

第3章 検出された遺構と遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第118図 19 図版94-19	浅鉢	口縁部付近 破片	厚0.9	括弧の口縁部付近	上端に押圧文を刺突状に施文/弧状の隆帯、押圧文を横位に施文/弧状の隆帯右側は縦位沈線充填か/隆帯断面カマボコ状/116-18と116-19は同一個体の可能性がある	黒褐色/砂粒中量、礫微量	加曾利E1式か
第118図 20 図版94-20	浅鉢	口縁部付近～体部 上位破片	厚1.1	上位は外積し下位は内湾する口縁部/外積する体部	破片上位に刺突文を横位に施文、交互刺突文か/2本1対の隆帯を横位に貼付し、突起部分は沈線による渦巻文を付す/隆帯周囲を沈線によって囲し、縦位沈線を充填/体部・口縁部の屈曲部に沿って沈線を刺突文状に施文/隆帯断面カマボコ状	明黄褐色/砂粒多量、礫微量	加曾利E1～2式
第118図 21 図版94-21	浅鉢	口縁部付近～体部 上位破片	厚1.2	内湾する口縁部付近	1本の隆帯を弧状に貼付し、間に隆帯による渦巻文を付す/周囲に弧状の沈線を充填/上端に刺突状の押圧文が見られる/隆帯断面カマボコ状	にぶい黄褐色/砂粒少量、礫微量	加曾利E1～2式

第49表 116号住居跡出土土器一覽2

検出番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第118図22 図版94-22	土器 片鏝	30%	[3.6]/[4.7]/1.1	24.4	方形/挾部は1ヶ所残存/周囲は一部磨耗/胴部片利用/単部RL/粘土層または隆帯の一部か	褐色/砂粒・礫微量	加曾利E1式か
第118図23 図版94-23	土器 片鏝	完形	5.4/4.1/1.1	34.6	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単部LR	褐色/砂粒・礫少量	中期中層～後葉
第118図24 図版94-24	土器 片鏝	80%	[3.6]/[2.9]/1.1	13.3	楕円形/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/単部RL	褐色/砂粒・礫微量	中期中層～後葉
第118図25 図版94-25	土器 片鏝	40%	[2.5]/[3.8]/0.9	13.5	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/底面L	明褐色/砂粒少量、礫微量	中期中層～後葉
第118図26 図版94-26	土器 片鏝	40%	[3.0]/[5.2]/1.4	29.6	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/沈線施文	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中層～後葉
第118図27 図版94-27	土器 片鏝	完形	6.2/4.0/1.0	39.8	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒・礫少量	中期中層～後葉
第118図28 図版94-28	土器 片鏝	90%	5.6/6.4/1.0	49.8	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	黒褐色/砂粒中量、礫微量	中期中層～後葉
第118図29 図版94-29	土器 片鏝	90%	[4.4]/[4.2]/1.3	36.4	方形/挾部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	黒褐色/砂粒中量、礫微量	中期中層～後葉
第118図30 図版94-30	土器 片鏝	90%	[5.4]/[3.3]/1.2	34.9	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/無文	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中層～後葉
第118図31 図版94-31	土製 円盤	完形	4.4/3.8/1.0	21.2	楕円形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単部RLか/2本1対の直状の隆帯	にぶい黄褐色/砂粒中量、礫微量	加曾利E1c式

第50表 116号住居跡出土土製品一覽

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第119図32 図版95-32	石鏡	黒曜石	20.7	19.0	5.0	1.3	凹基無茎/御縁は直線状で縦断面/挟りは狭く弧状
第119図33 図版95-33	石鏡	黒曜石	19.9	9.8	3.8	0.7	片御縁のみ残存
第119図34 図版95-34	楕形石器	黒曜石	13.8	13.0	3.8	0.7	左右に両側刺離が認められる
第119図35 図版95-35	打製石斧	ホルンフェルス	87.1	49.1	14.5	72.9	楕形/裏面の中央部から下部が磨減している/両御縁に敲打刺離が認められる/左御縁に潰れはほとんどみられない/右御縁は中央部の稜上に潰れが認められる
第119図36 図版95-36	打製石斧	頁岩	34.9	30.8	13.9	17.8	平面形状は不明/基部のみ残存/表面に一部取離面が残存し、両御縁に敲打刺離が認められる/両御縁に潰れはほとんどみられない
第119図37 図版95-37	打製石斧	ホルンフェルス	59.1	46.3	21.3	73.4	平面形状は不明/刃部のみ残存/両御縁に敲打刺離が認められる/両御縁に潰れはほとんどみられない
第119図38 図版95-38	磨製石斧	緑色凝灰岩	100.8	59.7	37.0	294.1	基部は折れて欠損している/体部は表裏面ともに全面研磨面に覆われている
第119図39 図版95-39	磨製石斧	砂岩	36.0	39.9	30.5	65.4	基部のみ残存/基部は敲打を伴う刺離によって調整される/表裏面ともにほぼ全面研磨面に覆われている
第119図40 図版95-40	二次加工剥片	結晶片岩	121.1	64.5	19.3	210.3	両御縁の一部に敲打を伴う刺離が認められる
第119図41 図版95-41	石槌	黒曜石	33.6	13.9	11.2	4.2	正面側において、上面を打面として剥片が行われている
第119図42 図版95-42	磨石	砂岩	188.0	55.3	26.1	357.3	裏面に磨痕

第51表 116号住居跡出土石器一覽

117号住居跡

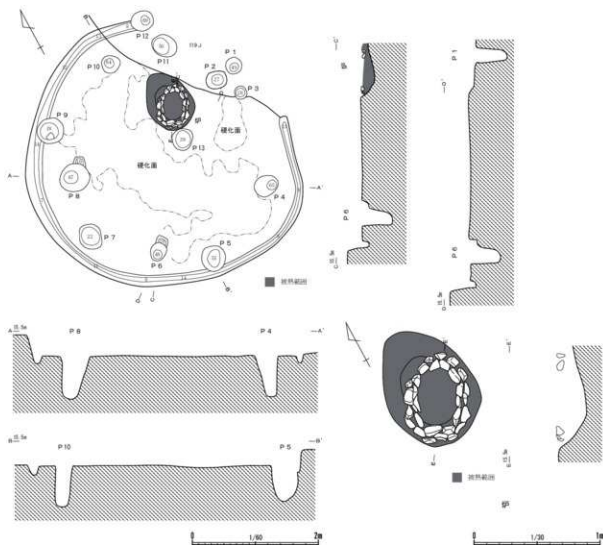
遺構(第120図)

[位置] (D-5・6) グリッド。

[検出状況] 120 J、227 Dを切り、119 Jに切られる。

[構造] 平面形：やや円形を呈すと思われる。主軸方位：N-28°-E。P4とP8の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸436cm / 短軸残存長415cm / 深さ24~34cm。壁溝：3条検出された。上幅12~27cm / 下幅4~12cm / 床面からの深さ7~14cm。壁：約73~87°でやや急斜に立ち上がる。床面：平坦である。炉の周辺以外の住居中央部分に硬化面を確認した。直床である。炉：石囲炉。楕円形に石を配置し、掘り込み及び被熱範囲と石の配置の長軸は異なる。長軸98cm / 短軸71cm / 床面からの深さ23cm。埋嚢：検出されなかった。柱穴：13本検出した。P1、P4、P5、P6、P8、P10、P11を主柱穴ととらえ、7本柱建物を想定する。

[遺物] 土器、土製品、石器が出土した。深鉢形土器(第121図1)は118 J、深鉢形土器(第122図19)は119 J出土の破片と遺構間接合している。



第120図 117号住居跡・炉 (1/60・1/30)

[時期] 中期後葉期（連弧文2 b段階期）。

[遺物]（第121・122図、図版96・97、第52～54表）

[土器]（第121図・第122図16～20、図版96・97、第52表）

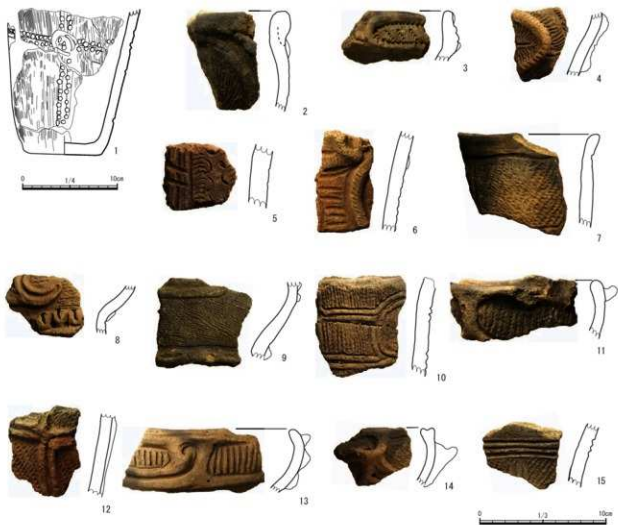
復元資料を1点、破片資料19点を図示した。1は連弧文2 b段階の深鉢形土器である。地文は縦位条線文で、2列の円形刺突文を十文字状に施文し、交差部分に沈線による円形の文様を施文する。117 Jと118 Jとの遺構間接合で、接合はしないものの胎土や円形刺突文の状態から119 J 16と同一個体の可能性がある。2は阿玉台式、3～6は勝版式、7は勝版3～加曾利E 1式、8～17は加曾利E式、18は曾利式、19・20は連弧文土器の深鉢形土器である。19は119 J出土の破片と遺構間接合している。

[土製品]（第122図21～27、図版97、第53表）

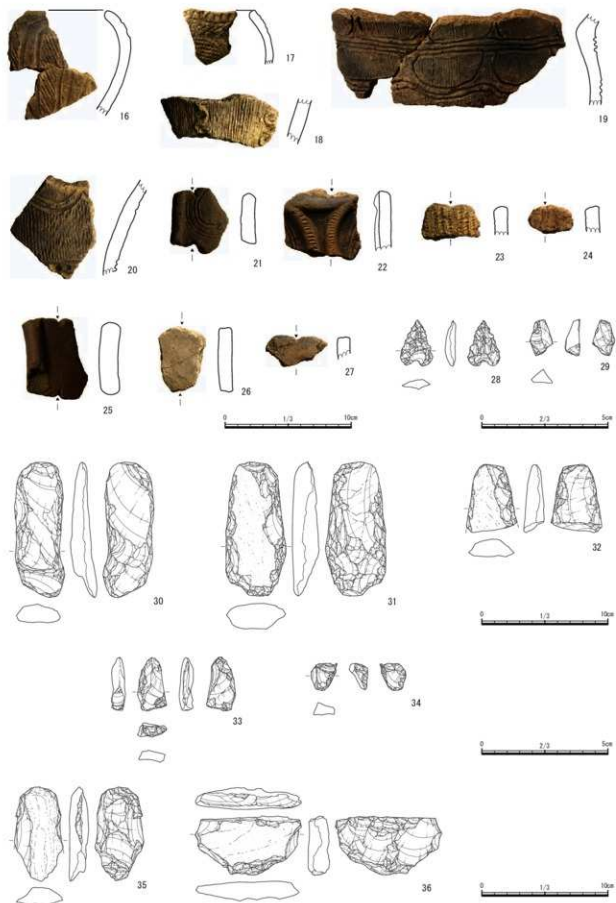
7点を図示した。21～27は土器片錘である。

[石器]（第122図28～36、図版97、第54表）

9点を図示した。28は石鏃である。29は楔形石器である。30～32は打製石斧である。33～36は二次加工剥片である。



第121図 117号住居跡出土遺物1（1/4・1/3）



第122図 117号住居跡出土遺物2 (1/3・2/3)

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第121図1 図版96-1	深鉢	胴部中位 ～底部 40%	高116.5 底9.4 厚0.9	直状にやや外傾して 立ち上りがある胴部/平 坦な底部	地文は縦位条線文/2列の円形刺突文を十文字状に施文、交 差部分に沈線による円形の文様施文(2単位残存)/底面に網 代痕あり/117と118Jの遺構間接合で、胎土や円形刺突 文の状態から119J-16は同一個体の可能性がある	橙/砂粒・礫 中量	連弧文 2b段階
第121図2 図版96-2	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/口 唇部は外側に肥厚	地文は縦位条線文/2本の隆帯を弧状に貼付/隆帯断面扁平 なカマボコ状・角状/外面に光沢のある黒色の付着物が少 量見られる	黒褐色/砂粒 少量、礫微量	阿玉台 式
第121図3 図版96-3	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	下位が内折する口縁 部	隆帯による楕円状の区画文/区画文内側に三角押文が沿う /区画文中央に斜位の三角押文列施文/区画文下位隅に隆 帯断面カマボコ状	暗褐/砂粒・礫 微量	階級1b 式
第121図4 図版96-4	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾し上位がやや内 湾する胴部	押圧文を付した隆帯による楕円状の区画/隆帯内側に爪形 文が沿い中央に横位1本の沈線施文/隆帯外側に爪形文・ 三角押文が沿い、隆帯断面に縦位沈線を複数本施文/隆帯 断面カマボコ状・背の高いカマボコ状、隆帯弧形爪文が沿 う	明褐/砂粒中 量、礫微量	階級2a 式
第121図5 図版96-5	深鉢	胴部 破片	厚1.4	やや外傾する胴部	沈線を縦位・横位に施文、区画か/爪形文による蓮華文(温 泉マーク文)	暗赤褐/砂粒 少量、礫微量	階級3 式
第121図6 図版96-6	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾する胴部	押圧文を付した隆帯を横位・U字状・弧状に貼付/弧状の 隆帯横に横位沈線列/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本の 単沈線が沿う	明褐/砂粒少 量、礫微量	階級3 式
第121図7 図版96-7	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚0.9	円筒形か/直状の胴 部/上位が外傾する 口縁部	地文は単筋RL縦位/口縁部に1本の沈線が横走、上位無文/ 胴部に縦位・横位の沈線が僅かに見られる	明褐/砂粒少 量、礫微量	階級3 ～加曾 利E1 式
第121図8 図版96-8	深鉢	口縁部下 位～胴部	厚0.8	外反する胴部/内湾 する口縁部	地文は横系L横位/胴部に交互刺突文を付した1本の隆帯が 横走/隆帯による弧状の文様	橙/砂粒・礫 微量	加曾利 E1a式
第121図9 図版96-9	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚0.9	外反する胴部/内湾 する口縁部付近	地文は横系L横位/胴部に隆帯が横走、隆帯上押圧文か/2 本の隆帯による文様/隆帯断面カマボコ状	明褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1a式
第121図 10 図版96-10	深鉢	胴部 破片	厚1.0	下位は直立し上位は やや外傾する胴部	地文は横系L縦位/半截竹管状工具の断面による平行沈線 2本による弧状等の文様施文/平行沈線間の地文は磨消さ れる	にぶい黄褐/ 砂粒少量、礫 微量	加曾利 E1a式
第121図 11 図版96-11	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部	地文は横系L縦位/把手が欠損した痕跡あり/隆帯による 口縁部区画/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1b式
第121図 12 図版96-12	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾する胴部	地文はLRL縦位/2本1対の隆帯による十文字状の文様/ 隆帯断面カマボコ状	赤褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1式
第121図 13 図版96-13	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚0.7	内湾する口縁部	口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で囲す/区画内縦位沈 線充填/沈線による満巻文、やや突起状/隆帯断面カマボ コ状/残存胴部無文	橙/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1～2 式
第121図 14 図版96-14	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	内湾する口縁部	地文は単筋RL縦位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下 端欠損/突起した沈線による満巻文/隆帯断面カマボコ 状/器面の厚さが薄いため小形の土器か	明褐/砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1～2 式
第121図 15 図版96-15	深鉢	胴部～胴 部上位 破片	厚1.0	外反する胴部～胴部 上位	地文は単筋RL縦位/胴部無文部分と胴部に3本1対の横 走する沈線で囲す/胴部に3本1対の波状の沈線が垂下	灰黄褐/砂粒 少量、礫微量	加曾利 E2式
第122図 16 図版96-16	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	上位が強く内湾する 口縁部	地文は無筋L縦位、口縁部に施文、口縁部上位は横位施文 /沈線による逆U字状の文様、沈線間施文磨消し	にぶい黄褐/ 砂粒・礫微量	加曾利 E3c式
第122図 17 図版96-17	深鉢	口縁部 破片	厚0.5	内湾する口縁部	地文は単筋RL斜位、口縁部に施文、口縁部上位は横位施文 /口縁部に楕円状の押圧文と1本の沈線が沿う/沈線による 横位U字状の文様、沈線間施文磨消し	にぶい黄褐/ 砂粒・礫微量	加曾利 E4式
第122図 18 図版96-18	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾する胴部	地文は縦位条線文/1本の隆帯を波状に垂下、交互押圧して 波状に整えた形跡が見られる	にぶい黄褐/ 砂粒中量、礫 微量	曾利E 式
第122図 19 図版97-19	深鉢	胴部中位 破片	厚0.9	括れる胴部	地文は縦位条線文/括れ部に3～4本の沈線が横走、上端 の1本は上位にV字状の影文様に加る/下端に3本1 対の沈線による波状文、上端の1本は八字状の副文様に見 える/117と119Jとの遺構間接合	暗褐/砂粒中 量、礫少量	連弧文 2b段階
第122図 20 図版97-20	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外反する胴部	地文は横系L縦位/2本1対の沈線による連弧文/下位に横 位沈線に沿う円形刺突文	明褐/砂粒・ 礫微量	連弧文 2段階

第52表 117号住居跡出土土器一覽

埋蔵番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第122図21 図版97-21	土器 片鏝	90%	5.2/4.6/1.0	31.2	不整形/残部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/4本1対の条腿による弧状の文様	灰褐色/砂粒・礫少量、雲母中量	阿玉台Ⅱ式
第122図22 図版97-22	土器 片鏝	40%	5.6/5.6/0.9	52.0	方形/残部は1ヶ所残存/周縁は磨耗に磨耗/胴部片利用/隆帯を横位に貼付、押圧文を付した隆帯を弧状に貼付、楕円状の区画か/区画内縦位沈線列/隆帯断面方マゴコ状、隆帯脇まで付けて貼付	明褐色/砂粒少量、礫少量、雲母多量	勝坂3式
第122図23 図版97-23	土器 片鏝	30%	2.9/4.5/0.9	19.4	方形か/残部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋肋	黄褐色/砂粒中量、礫微量	勝坂3式
第122図24 図版97-24	土器 片鏝	30%	2.3/3.5/1.0	10.6	方形か/残部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/胴部片利用/沈線が見られるが文様かは不明	明褐色/砂粒・礫微量	中期中葉～後葉
第122図25 図版97-25	土器 片鏝	80%	6.6/4.8/1.6	68.8	方形/残部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文	明褐色/砂粒中量、礫微量、雲母中量	中期中葉～後葉
第122図26 図版97-26	土器 片鏝	60%	5.1/3.7/1.1	26.0	円形か/残部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/無文	灰褐色/砂粒・礫微量	中期中葉～後葉
第122図27 図版97-27	土器 片鏝	10%	2.3/4.8/0.9	12.4	方形か/残部は1ヶ所残存/周縁は磨耗に磨耗/胴部片利用/無文	灰褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉

第53表 117号住居跡出土土製品一覧

埋蔵番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第122図28 図版97-28	石敷	黒曜石	17.9	12.9	4.2	0.7	凹基無茎/側縁は直線状で鋭角縁/縁は浅く弧状
第122図29 図版97-29	楔形石器	黒曜石	13.4	8.9	6.0	0.5	上下に両側刺離が認められる
第122図30 図版97-30	打製石斧	ホルンフェルス	106.1	42.4	17.6	81.5	短冊形/両側縁に敲打刺離が認められる/左側縁の下部の稜上に潰れが認められる/右側縁に潰れはほとんどみられない
第122図31 図版97-31	打製石斧	砂岩	106.7	48.3	21.4	133.7	楕円形/表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打刺離が認められる/両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第122図32 図版97-32	打製石斧	砂岩	55.7	40.4	16.6	39.3	平面形状は不明/基部のみ残存/表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打刺離が認められる/両側縁の稜上に局所的に潰れが僅かに認められる
第122図33 図版97-33	二次加工 刮片	黒曜石	21.2	11.1	5.4	1.4	表面側左側縁に不連続な二次的刺離が認められる
第122図34 図版97-34	二次加工 刮片	黒曜石	12.2	9.1	6.3	0.7	表面側上端に不連続な二次的刺離が認められる
第122図35 図版97-35	二次加工 刮片	結晶片岩	74.7	39.0	15.5	49.9	裏面側上端に不連続な二次的刺離が認められる
第122図36 図版97-36	二次加工 刮片	砂岩	46.4	84.4	17.2	87.8	表面側下端に不連続な二次的刺離が認められ、一部は敲打に伴う

第54表 117号住居跡出土石器一覧

118号住居跡

遺構(第123～126図)

[位置] (C・D-5) グリッド。

[検出状況] 119 J に切られ、225・226 D を切る。主柱穴や壁溝の形状や分布状況から、〈拡張前〉、〈拡張後①〉、〈拡張後②〉として捉えた。

[構造] 〈拡張前〉平面形：楕円形。主軸方位：N-21°-W。P4とP48、P13とP44、P21とP36の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸537cm/短軸482cm/深さ64～78cm。壁溝：1条検出された。上幅21～36cm/下幅7～20cm/床面からの深さ16～34cm。壁：約60°で緩やかに立ち上がる。床面：柱穴：59本検出した。P4、P13、P21、P36、P44、P48を主柱穴ととらえ、6本柱建物を想定する。

〈拡張後①〉平面形：楕円形。主軸方位：N-25°-W。P1とP54、P7とP47、P14とP40のそれぞれの中間を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸660cm/短軸558cm/深さ62～68cm。壁溝：

1条検出された。上幅25～49cm／下幅5～21cm／床面からの深さ4～18cm。壁：約64°で緩やかに立ち上がる。床面：柱穴：P1、P7、P14、P19、P35、P40、P47、P54を主柱穴ととらえ、8本柱建物を想定する。

〈拡張後②〉平面形：円形。主軸方位：N-16°-W。P1とP54、P7とP52、P34とP27のそれぞれの中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸720cm／短軸654cm／深さ50～55cm。壁溝：1条検出された上幅35～47cm／下幅2～10cm／床面からの深さ1～7cm。壁：約60～80°でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、中央部分がわずかに低くなる。直床である。炉：埋裏炉。楕円形で、浅鉢形土器（第127図1）が埋設されている。長軸91cm／短軸76cm／床面からの深さ23cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：P1、P7、P15、P27、P34、P43、P52、P54を主柱穴ととらえ、8本柱建物を想定する。遺構確認当初、重複を想定し精査を進め、検出された複数の周溝に基づき、切り合いを想定して分層を行ったが、床面や炉の検出状況から、重複ではなく、拡張住居であると判断した。P52については当初は224Dとしていたが、住居に伴うピットと認定し、224Dについては欠番とした。

〔覆 土〕9層に分層できた。

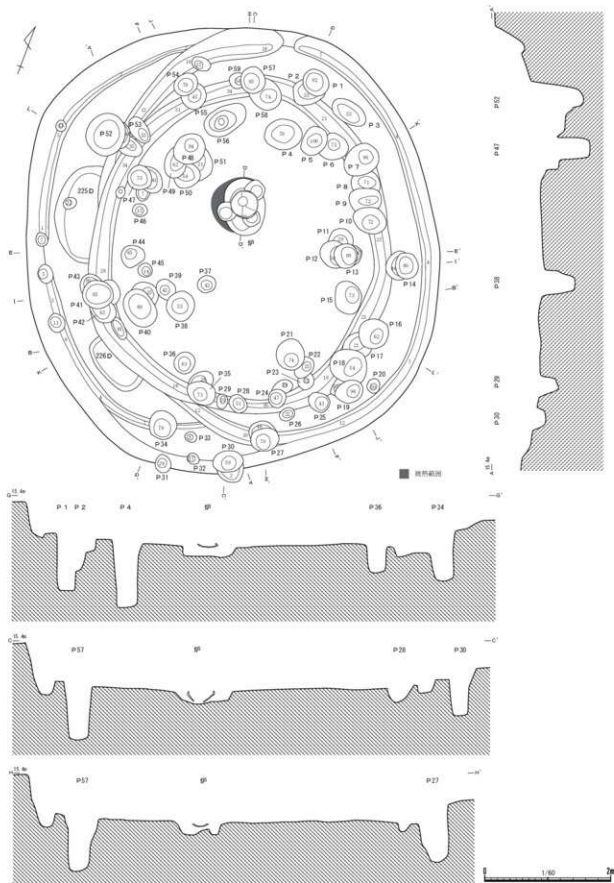
〔遺 物〕土器、土製品、石器が出土した。炉体土器（第127図1）が出土している。深鉢形土器（第129図20）は117J、深鉢形土器（第133図56）は120J出土の破片と遺構間接合している。

〔時 期〕中期後葉期（加曾利E1a式期）。

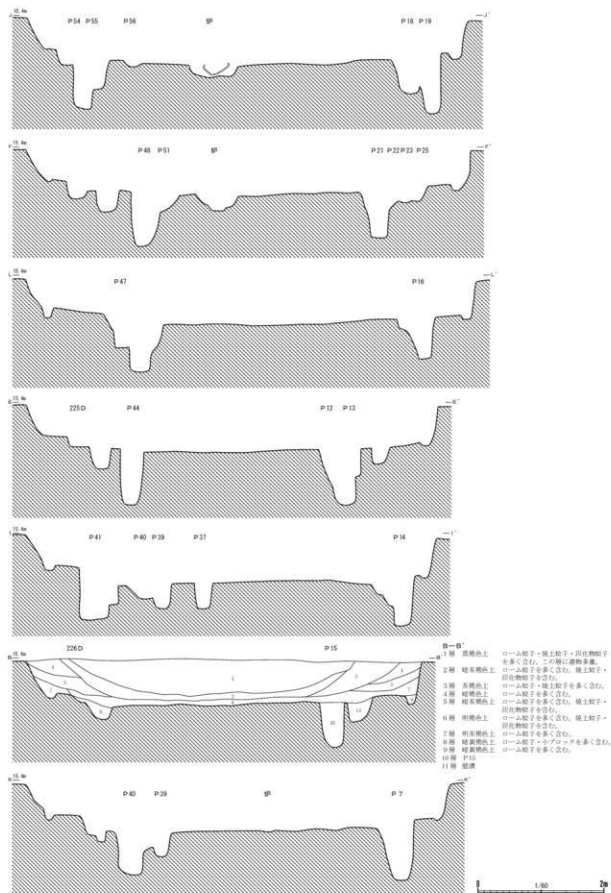
〔遺 物〕（第127～141図、図版98～110-1、第55～57表）

〔土 器〕（第127～133図・第134図62～68、図版98～106、第55表）

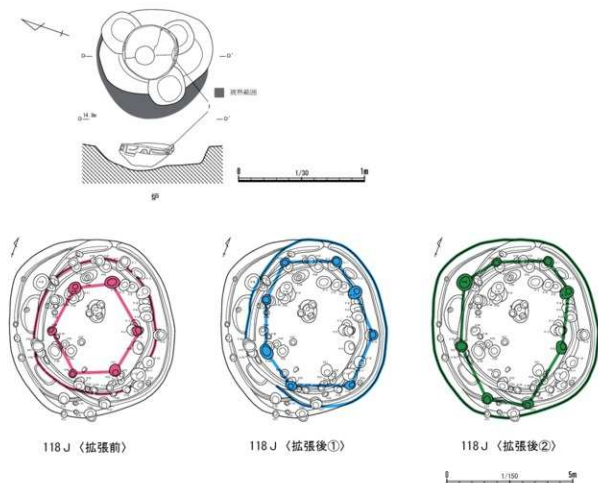
復元資料を26点、破片資料42点を図示した。1は炉体土器で、加曾利E1式の深鉢形土器である。口縁の張り出し部分にかけて文様を施文するが、張り出し部分はほぼ欠損している。文様は沈線によるもので、右側は渦巻文、左側は長方形の渦巻文となる。2・3は勝飯3b新式の深鉢形土器である。2は4単位の波状口縁で、内1単位には把手が見られる。地文は縄文である。3は胴部上位に沈線を主体とする文様帯を持ち、突起も見られる。胴部下位は燃糸文を施文する。4～16は加曾利E1a式の深鉢形土器である。4は沈線による渦巻文等の文様を施文し、胴部中位の沈線間には円形刺突文を施す。5は口縁部が無文で頸部以下は燃糸文を地文とする。胴部には隆帯による十字状、円形等の文様を貼付する。6は隆帯による楕円形区画を口縁部に4単位設け、地文は燃糸文を施文する。7は口縁部に環状の突起が見られ、胴部上位には直状と波状の平行沈線が巡る。8は口縁部に沿って隆帯が巡り、胴部には直状と波状の平行沈線が見られる。9は口縁部に1単位の把手が見られ、直状と波状の平行沈線が巡る。10は隆帯による口縁部区画を設け、区画内には隆帯による横位S字状、菱形の文様を施す。11は口縁部に把手が1単位見られる。隆帯によって口縁部区画を設け、区画内には渦巻文、十文字文等施文する。胴部には平行沈線によって渦巻文、十文字文等が付属した懸垂文が5単位見られる。12は口縁部に山形の突起が3単位残存し、内1単位には沈線による渦巻文を施す。隆帯による口縁部区画内には先端が渦巻く弧状文が連なる。13は隆帯による口縁部区画を設け、区画内は隆帯による渦巻文等の文様を付す。頸部には平行沈線が巡る。14は口縁部から胴部にかけて縦位燃糸文を地文とする。頸部に巡る隆帯には押圧文を付し、口縁部区画内には隆帯による横位S字状の文様を施す。15は隆帯による口縁部区画を設け、胴部上位には直状の沈線と波状沈線が巡る。16は口縁部がほぼ欠損しているが、波状に突出した部分が1単位残存する。口縁部に沿って隆帯と押圧文が巡ると思われる。頸



第123図 118号住居跡1 (1/60)

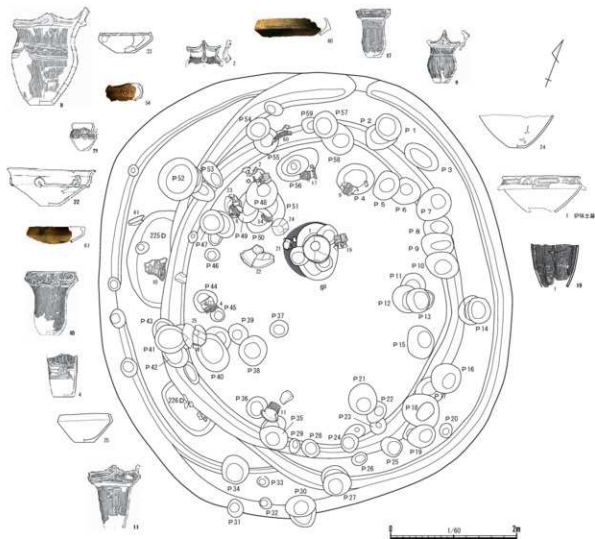


第124図 118号住居跡2 (1/60)



第125図 118号住居跡炉・拡張変遷図(1/30・1/150)

部は無文で、胴部には沈線が垂下する。17・18は加曾利E1b式の深鉢形土器である。17は燃糸文を地文とし、胴部にはH字状の隆帯を貼付する。18は燃糸文を地文とし、隆帯が垂下する。19は加曾利E2式の深鉢形土器である。縄文を地文とし、直状の沈線、波状の沈線が垂下し、十文字状の文様も見られる。20は連弧文2段階の深鉢形土器である。縦线条線文を地文とし、2列の円形刺突文を十文字状に施文する。117Jとの遺構間接合である。また、胎土や円形刺突文の状態から、119J16と同一個体の可能性がある。21は勝坂3b新式の小形深鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部上位に隆帯や沈線による文様を施す。眼鏡状把手が1単位残存する。22～24は加曾利E1a式の浅鉢形土器である。22は隆帯による文様を貼付する。体部には補修孔が1ヶ所見られる。23は内面に赤色顔料が少量残存する。25は加曾利E1式の浅鉢形土器である。26はミニチュア土器である。残存部は無文で中期中葉～後葉にあたると思われる。27～29は阿玉台式、30～41は勝坂式の深鉢形土器である。42・43は勝坂3式と思われる深鉢形土器である。口縁部に把手が見られる。44は勝坂3～加曾利E式にあたると思われる深鉢形土器である。燃糸文を地文とし、幅広の浅い沈線で直状の懸垂文や円形の文様を施文する。一部の沈線間は地文が消されている。45～54は加曾利E式、55は曾利式、56は連弧文土器の深鉢形土器である。56は120Jとの遺構間接合である。57～61は加曾利E1式の浅鉢形土器である。62～66は中期中葉～後葉の浅鉢形土器である。いずれも赤色顔料が見られる。67は勝坂2式、68は加曾利E式と思われるもののミニチュア土器である。



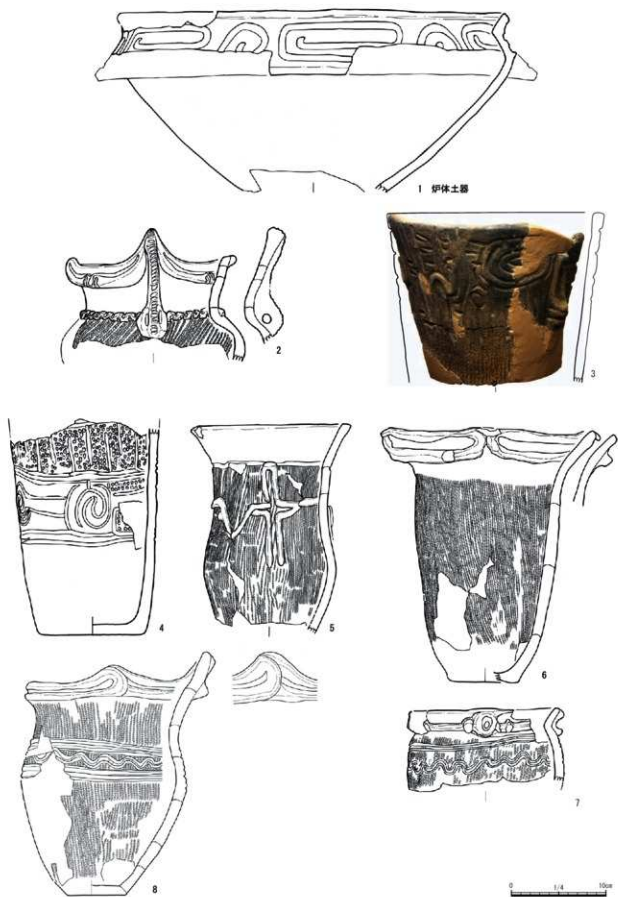
第126図 118号住居跡遺物出土状態(1/60)

[土製品] (第134図69～98・第135図99～109、図版107、第56表)

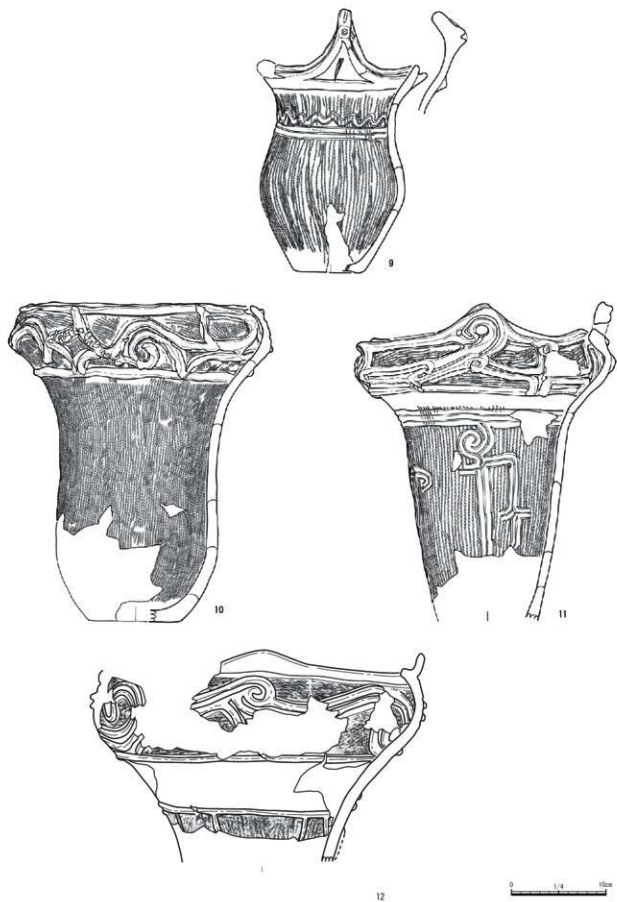
41点を図示した。69～107は土器片鉢、108・109は土製円盤である。84は挾部が3ヶ所残存しているため、元は4ヶ所あったと思われる。

[石器] (第135図110～121・第136・137図、図版108～110-1、第57表)

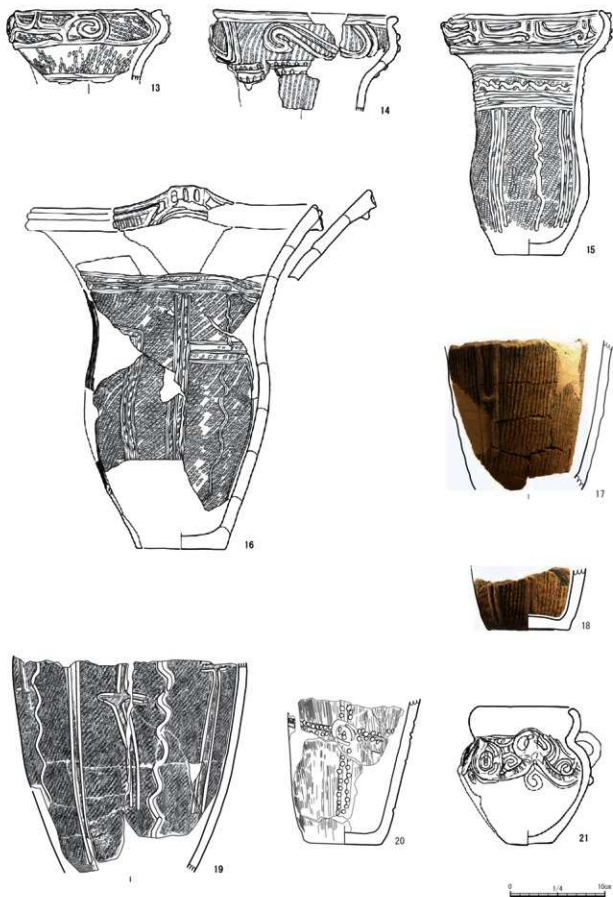
32点を図示した。110は石畿である。111は楔形石器である。112～133は打製石斧である。134は磨製石斧である。135～138は二次加工剥片である。139は磨+凹石である。140・141は石皿である。



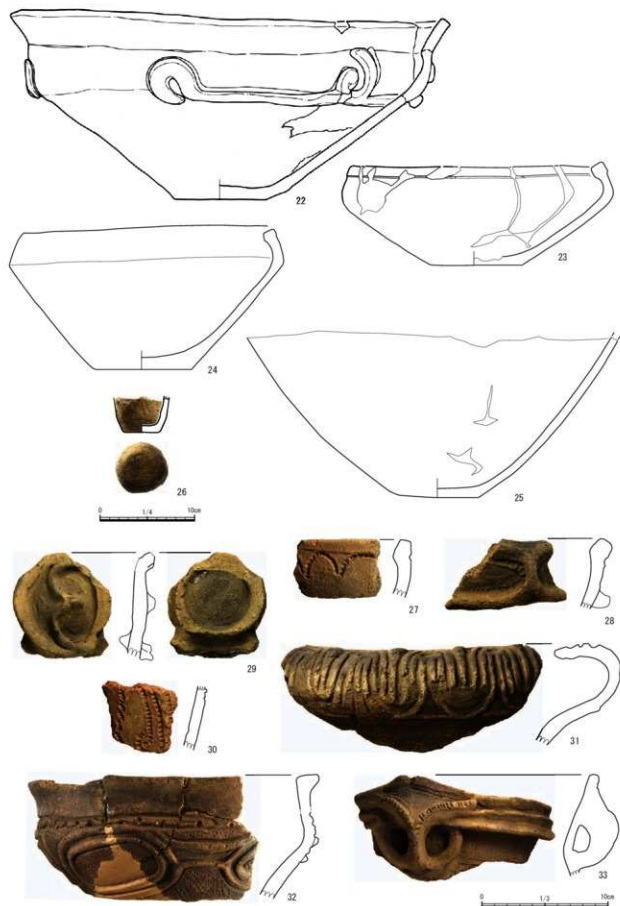
第127図 118号住居跡出土遺物1 (1/4)



第128図 118号住居跡出土遺物2 (1/4)



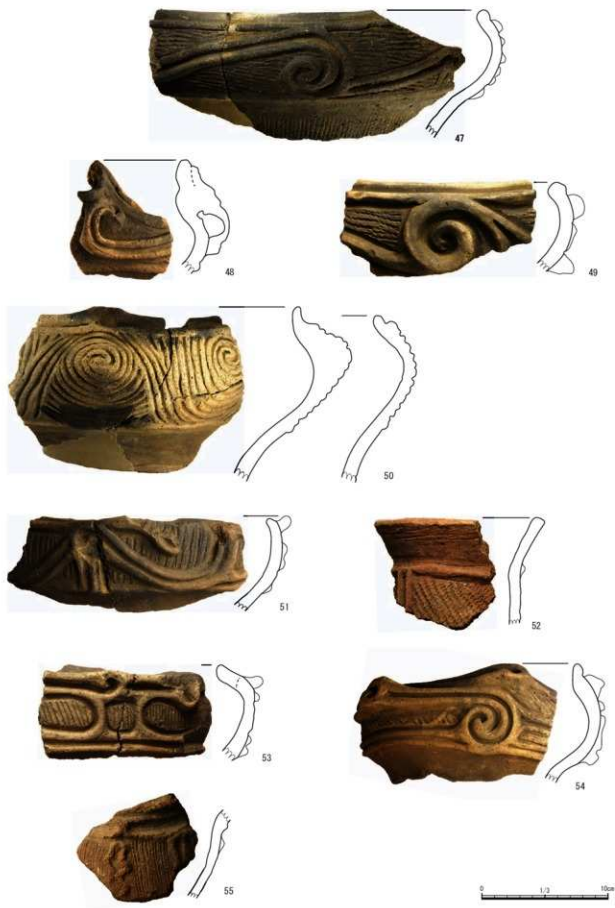
第129図 118号住居跡出土遺物3 (1/4)



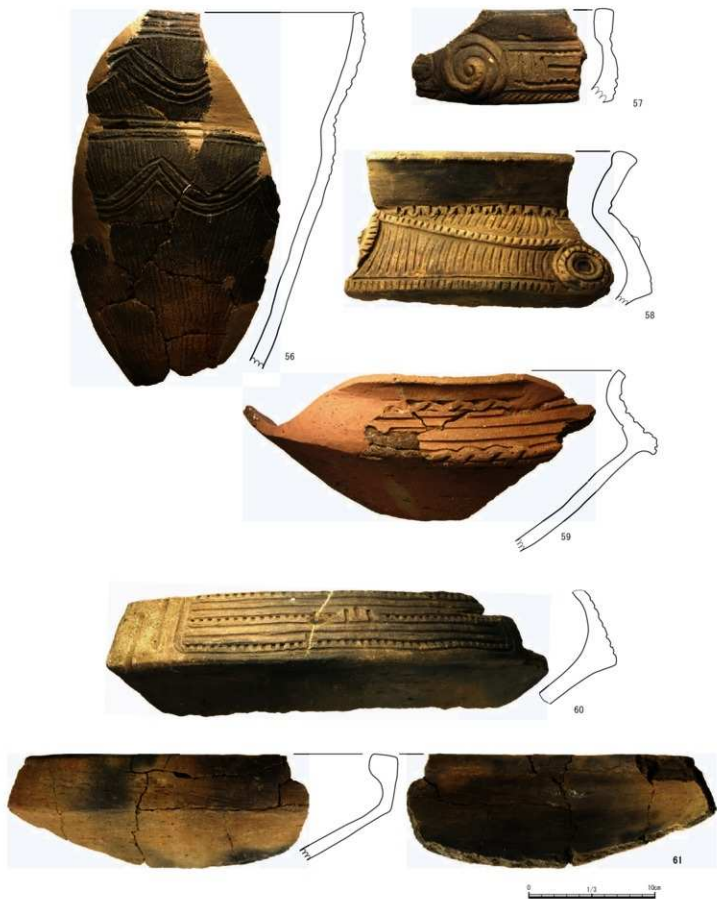
第130図 118号住居跡出土遺物4 (1/4・1/3)



第131图 118号住居跡出土遺物5 (1/3)



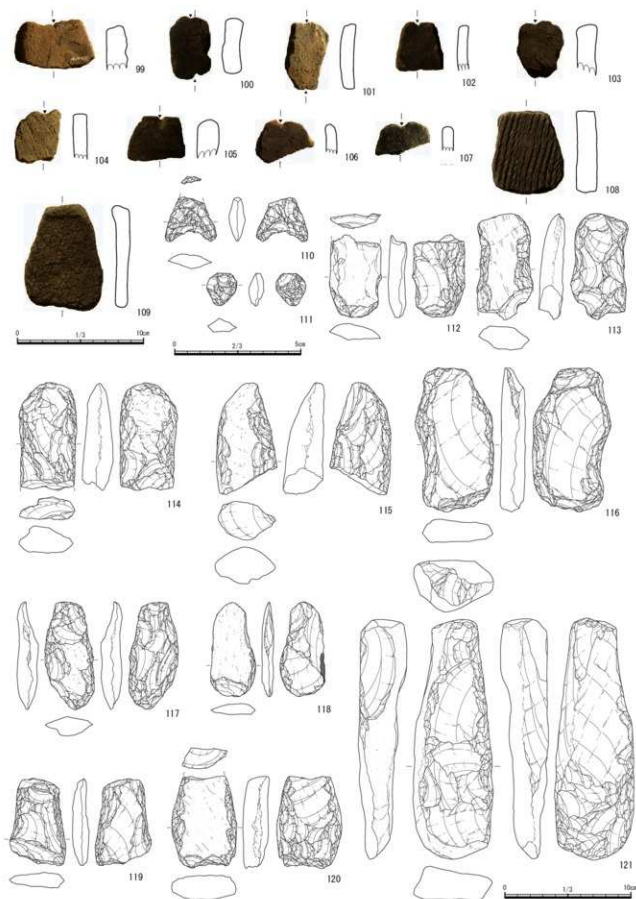
第132図 118号住居跡出土遺物6 (1/3)



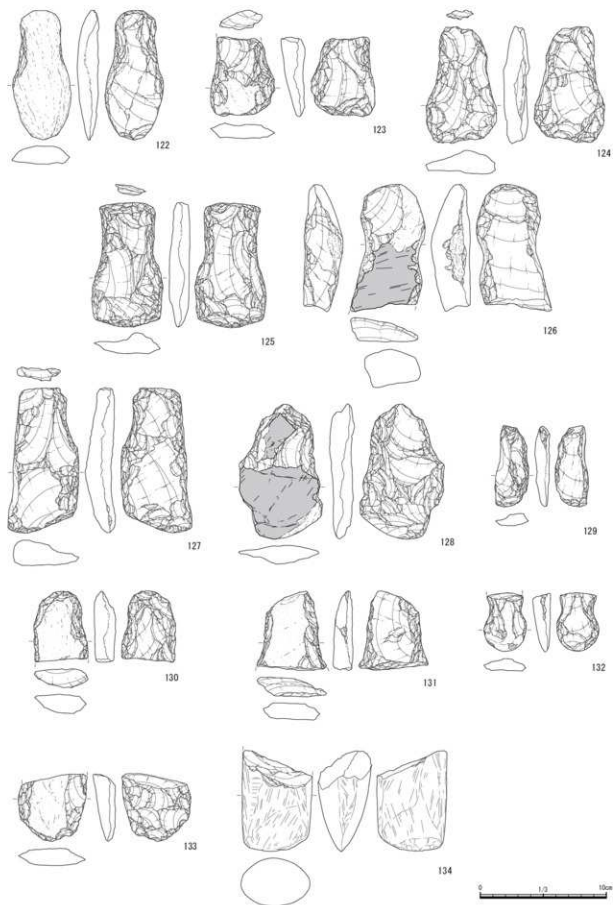
第133図 118号住居跡出土遺物7(1/3)



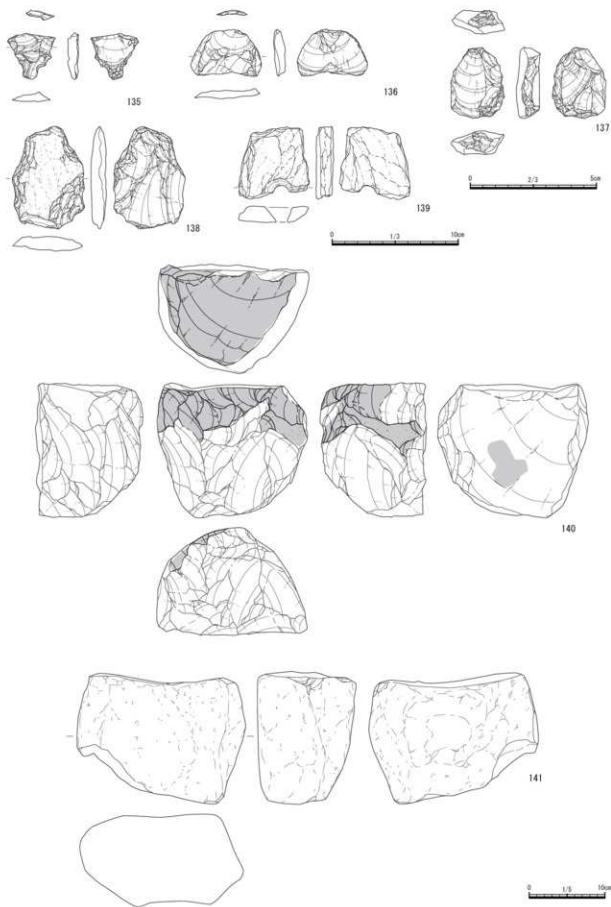
第134図 118号住居跡出土遺物8 (1/3)



第135図 118号住居跡出土遺物9 (1/3・2/3)



第136図 118号住居跡出土遺物10(1/3)



第137図 118号住居跡出土遺物11 (1/5・1/3・2/3)

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 遺構	部位 遺存状態	法 量 (cm)	形 態・形態	文 様・特徴	胎 土	時期 型式
第127図1 図版98-1	浅鉢	口縁部～ 底部下位	高 [19.2] 口40.6 厚 1.2	やや内湾しながら広がる体部 / 口縁部で内折し文様帯部分が外側に張り出す / 口縁上部外縁	口縁上部、体部は無文 / 口縁の張り出し部にかけて沈線による文様を施すが張り出し部はほぼ欠損 / 残存する部分からの推測では沈線によって右側に渦巻文を施し、左側は長方形に渦巻く(1対6単位) / 右側の渦巻文は右巻きと左巻きが見られる、左巻きは連続して3単位、右巻きは連続して2単位並ぶ、1単位はどちらか不明 / 砂体土器	褐 / 砂粒中量、礫微量、雲母中量	加曾利E1式
第127図2 図版98-2	深鉢	口縁部～ 胴部上位	高 [14.1] 口17.6 厚 1.1	内湾する胴部 / 括れる頸部 / 外縁して広がる口縁部	地文は凹線多条L縦位 / 4単位の波状口縁、内1単位は波頂部から押圧文を付した隆帯が頸部の環状突起部に垂下 / 口縁に沿って1本の隆帯を貼付、隆帯上部の部分に交互刺突文を付す / 頸部に交互刺突文を付した隆帯が1本横走 / 隆帯断面三角状・コマボコ状	黒濁 / 砂粒少量、礫微量	勝坂3b新式
第127図3 図版98-3	深鉢	口縁部～ 胴部	高 [18.0] 口(23.0) 厚 0.9	外積する胴部 / 外積する口縁部	地文は凹糸L縦位 / 胴部上位に沈線を主とした文様帯、交互刺突文・縦位沈線・沈線による円形の文様・胴部に突起貼付・「し」字状に能行して垂下する隆帯 / 文様帯と凹糸無文部分を通す隆帯や沈線はない / 隆帯断面コマボコ状	黒濁 / 砂粒中量、礫少量	勝坂3b新式
第127図4 図版98-4	深鉢	胴部上位～ 底部	高 [22.6] 底 11.0 厚 1.0	僅かに外積して立ち上がる胴部 / 平坦な底部	胴部上位から中位に文様帯 / 下位の無文帯と文様帯を2本の横位沈線で画す / 残存部分文様帯の上位に交互刺突文が写り、沈線間には刺突文を充填 / 文様帯の上位と下位を横位2本の沈線で画す / 残存部分文様帯下位に沈線による渦巻文4単位無文、渦巻文間横位沈線を施文、一部沈線間刺突文充填 / 底部網代直なし	赤濁 / 砂粒・礫中量	加曾利E1a式
第127図5 図版99-5	深鉢	口縁部～ 底部下位	高 [22.0] 口16.8 厚 0.8	下部は内湾し上位はほぼ直立する胴部 / やや外反する頸部 / 外縁して広がる口縁部 / 平坦な底部	地文は凹糸L縦位 / 口縁部無文 / 口縁部無文帯と凹糸無文帯を横位1本の沈線で画す / 隆帯による十字状・円形・9字状・V字状の文様、それぞれを横位隆帯で繋ぐ / 隆帯断面コマボコ状	明濁 / 砂粒中量、礫少量	加曾利E1a式
第127図6 図版99-6	深鉢	口縁部～ 底部	高 26.4 口21.6 底 7.4 厚 1.2	やや内湾しながら立ち上がる胴部 / 外反して広がる頸部 / 外反して広がる口縁部 / 平坦な底部	地文は凹糸L縦位 / 口縁部に隆帯による楕円状の区画(4単位) / 頸部、底部付近は地文なし / 底部網代直なし	明濁 / 砂粒・礫中量	加曾利E1a式
第127図7 図版99-7	深鉢	口縁部～ 胴部上位	高 [8.7] 口15.8 厚 1.0	内湾する胴部 / 外積する口縁部	地文は凹糸L縦位 / 口縁部に横位1本の隆帯が走る、環状の突起3単位残存(元は4単位か) / 胴部上位に波状と波状の平行沈線が1本ずつ横走	ぶよい黄濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第127図8 図版99-8	深鉢	口縁部～ 底部	高 25.8 口19.4 底 6.1 厚 1.1	下部は外積しながら立ち上がり上位が括れる胴部 / 外縁して広がる頸部 / 平坦な底部	地文は凹糸L縦位、口縁部下位無文 / 口縁部に波頂部2単位(大きな異なる) / 口縁に沿って1本の隆帯が横走、波頂部(大)C字状の隆帯を貼付 / 胴部括れ部よりやや上位に上下2本の平行沈線間に1本の波状平行沈線を施した文様が横位に走る / 平行沈線は半乾竹管状工具の腹面を使用し地文を磨消す / 隆帯断面コマボコ状 / 底部網代直なし	明濁 / 砂粒中量、礫少量	加曾利E1a式
第128図9 図版100-9	深鉢	口縁部～ 底部	高 27.6 口16.2 底 12.2 厚 1.1	外積して立ち上がり中位が内湾する胴部 / 外反して広がる口縁部 / 平坦な底部	地文は凹糸L縦位 / 口縁に沿って2本1対の隆帯が走る / 口縁部把手1単位・波頂部が1ヶ所 / 把手外面に円形刺突文1つ / 頸部に1本の波状の平行沈線2本と直状の平行沈線が横走 / 平行沈線は半乾竹管状工具の腹面を使用し地文を磨消す	明黄濁 / 砂粒中量、礫微量	加曾利E1a式
第128図10 図版100-10	深鉢	口縁部～ 底部	高 33.4 口23.8 底(9.6) 厚 1.0	キャリバー形 / 下部は内湾しながら立ち上がり中位でやや外反する胴部 / やや外積し内湾する口縁部 / 平坦な底部	地文は凹糸L、口縁部区画内上位横位・斜位無文、口縁部区画内下位から縦位無文が見られ頸部は縦位無文 / 口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で画す / 口縁部区画内2本1対の隆帯による横位S字状・菱形・渦巻状等の文様無文 / 隆帯上一部交互刺突文無文 / 隆帯断面コマボコ状 / 凹糸L無文・隆帯貼付 / 底部網代直なし	明濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第128図11 図版100-11	深鉢	口縁部～ 胴部下位	高 [32.5] 口23.2 厚 0.8	キャリバー形 / やや内湾しながら立ち上がる胴部 / 外反して広がる頸部 / やや外積し内湾する口縁部	地文は凹糸L、口縁部区画内横位無文、胴部縦位無文 / 口縁部区画内から伸びた隆帯による渦巻状の把手、中央に孔あり(1単位) / 口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で画す / 区画内(2本1対)の隆帯による渦巻文、内1単位の渦巻文の下位には2つの小さな渦巻文貼付 / 口唇部に渦巻文1単位あり、渦巻文から隆帯が3本垂下 / 頸部無文 / 頸部と胴部を横走する平行沈線で画す / 胴部には直状に垂下する平行沈線に渦巻文、十字文等が付属した文様が5単位 / 平行沈線は半乾竹管状工具の腹面を使用し地文を磨消す / 隆帯断面コマボコ状	褐 / 砂粒中量、礫微量	加曾利E1a式
第128図12 図版101-12	深鉢	口縁部～ 胴部上位	高 [22.0] 口(33.4) 厚 1.0	やや外反する胴部上位 / 外反する頸部 / 内湾する口縁部	地文は凹糸L口縁部横位、胴部縦位 / 口縁部に山状の突起が3単位残存、内1単位は沈線による渦巻文無文 / 隆帯による口縁部区画、上端1本、下端1損 / 2本1対の隆帯による先端が渦巻く弧状文が横位に連なる / 頸部無文 / 胴部無文と胴部を2本1対の横走する隆帯で画す / 胴部には2本の直状の隆帯間に1本の波状隆帯が垂下するもの・3単位(内1単位は右の隆帯が欠損していると思われる)・1本の波状隆帯が1単位残存 / 隆帯断面コマボコ状	橙 / 砂粒中量、礫微量	加曾利E1a式

第55表 118号住居跡出土土器一覧1

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第129図 13 図版101-13	深鉢	口縁部～ 胴部 80%	高17.4 口15.3 厚0.8	外反して広がる頸部 /内湾する口縁部/ 口唇部外側に肥厚	地文は懸糸L、口縁部区画内横位筋文、頸部以下縦位筋文/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で囲す/口縁部区画内2本1対の隆帯による渦巻文1単位・両端に渦巻文があり区画上隆帯から短い隆帯が垂下する文様1単位、H字状の文様1単位/頸部下端に半截竹管状工具による平行沈線が走る/隆帯断面力マボコ状	明褐色/砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第129図 14 図版101-14	深鉢	口縁部～ 胴部上位 60%	高110.1 口19.2 厚0.9	キャリバー形/やや外傾する胴部上位/外反して広がる頸部/やや内湾する口縁部/口唇部外側に肥厚	地文は懸糸L縦位/口縁部を押圧文を付した2本の隆帯で囲す/口縁部区画内2本1対の隆帯による横位5字状の文様筋文(2単位残存)、欠損している文様が2単位あり/隆帯断面力マボコ状。隆帯の一部本の単沈線が沿うがほとんどは押さえつけ、などで付けて貼付	赤褐/砂粒・礫中量	加曾利E1a式
第129図 15 図版101-15	深鉢	口縁部～ 底部 ほぼ完形	高25.8 口15.8 底7.0 厚0.8	キャリバー形/中位が内湾し立ち上がり直して立ち上がる胴部/外反して広がる頸部/平坦な底部	地文は単筋RL、口縁部区画内横位筋文、胴部縦位筋文/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で囲す/区画内隆帯による横位5字状の文様を筋文(6単位)/区画の上端隆帯から渦巻文に向かって隆帯が2本垂下・渦巻文の両側に隆帯を矢印状に貼付したものが2単位・1本の隆帯を横位に貼付したものが1単位あり/胴部無文/1本の波状沈線の上下に3本1対の沈線が横走し胴部と胴部を囲す/胴部は3本1対の直状沈線4単位と1本の波状沈線4単位が交互に垂下/隆帯断面形状角状、面取りされた隆帯、隆帯偏1本の単沈線が沿う/底面網代直なし/縦文筋文→口縁部隆帯貼付/隆帯の割れが多く見られる	橙～黒褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第129図 16 図版102-16	深鉢	口縁部～ 底部 40%	高38.6 口(29.2) 底9.2 厚1.3	外傾しながら立ち上がり上位は内湾して括れる胴部/外傾して広がる頸部/外傾して広がる口縁部/平坦な底部	地文は0段多条RL縦位/口縁部に波状に突出した部分あり、この1単位以外口縁部欠損のため、突出部単位数不明/口唇突出部断面に3つの押圧文、口縁に沿って1本の隆帯と押圧文が走ると思われる/胴部無文胴部と胴部を横走する3本1対の沈線で囲す/胴部に3本1対の直状沈線にクラック状の沈線を付した文様を筋文(4単位)、内2単位には垂下する波状沈線が伴う/文様間に波状沈線が1単位垂下/底面の縁と中央部分に網代直あり	明褐～暗褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式
第129図 17 図版102-17	深鉢	胴部～底 部付近 60%	高115.4 厚1.1	外傾して立ち上がる胴部	地文は懸糸L縦位/隆帯をH字状に貼付/隆帯断面力マボコ状	明褐/砂粒中量、礫微量	加曾利E1b式
第129図 18 図版102-18	深鉢	胴部～底 部 100%	高16.7 底9.6 厚1.0	やや内湾して立ち上がる胴部/平坦な底部	地文は懸糸L縦位/2本1対の隆帯が垂下(5単位)/隆帯断面力マボコ状/底面網代直無し	明褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E1b式
第129図 19 図版102-19	深鉢	胴部上位～ 下位 60%	高122.1 厚0.8	内湾しながら立ち上がる胴部	地文は単筋RL縦位/2本1対の直状に垂下する沈線、1本の波状に垂下する沈線、2本1対の十字状の沈線、反転した十字状の沈線	褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E2式
第129図 20 図版102-20	深鉢	胴部中位～ 底部 40%	高116.5 底9.4 厚0.9	直状にやや外傾して立ち上がる胴部/平坦な底部	地文は縦位条線文/2列の円形刺突文を十字状に筋文、交差部分に沈線による円形の文様筋文(2単位残存/底面に網代直あり/117)と118)の遺構間接合で、胎土や円形刺突文の状態から119-16は同一個体の可能性がある 口縁部無文/交互刺突文を付した縦線状把手1単位残存、下位に沈線による渦巻文/把手右側は押圧文を付した隆帯を波状に貼付し直す/右側区画内沈線によるU字状・渦巻文筋文/把手左側は押圧文を付した隆帯で囲し一部沈線を付した隆帯を円形に貼付/左側区画内沈線による渦巻文等文マボコ状・台形状、隆帯偏1本の単沈線が沿う/底面網代直なし	橙/砂粒・礫中量	津波宮2b段階
第129図 21 図版102-21	小形深鉢	口縁部～ 底部 70%	高25.8 口15.8 底7.0 厚0.8	外傾し広がりながら立ち上がり上位が内湾する胴部、括れる頸部/内湾する口縁部/平坦な底部	体部の紐部部に1本の横位隆帯貼付、両端に隆帯による環状の文様貼付(1単位残存、1単位は半分欠損)/体部の紐部部に補修孔ヶ所あり、外面径1.6cm・内面径1.3cm/底面網代直無し	暗褐/砂粒中量、礫少量	樽坂3b新式
第130図 22 図版102-22	浅鉢	口縁部～ 底部 60%	高19.0 口46.8 底9.6 厚1.1	外傾して広がり立ち上がる体部/外傾する口縁部/平坦な底部	体部の紐部部に1本の横位隆帯貼付、両端に隆帯による環状の文様貼付(1単位残存、1単位は半分欠損)/体部の紐部部に補修孔ヶ所あり、外面径1.6cm・内面径1.3cm/底面網代直無し	明褐～黒/砂粒・礫中量	加曾利E1a式
第130図 23 図版103-23	浅鉢	口縁部～ 底部 90%	高10.9 口26.8 底10.2 厚0.8	外傾し広がりながら立ち上がり上位が内湾する胴部/やや内湾する口縁部/口唇部は内側に肥厚/平坦な底部	無文/底面に網代直無し/内面に赤色顔料が少量残存	明褐/砂粒・礫中量	加曾利E1a式
第130図 24 図版103-24	浅鉢	体部上位～ 底部 95%	高116.6 底8.8 厚0.8	外傾しながら立ち上がる体部/平坦な底部	無文/底面に網代直無し	明黄褐/砂粒・礫少量	加曾利E1a式
第130図 25 図版103-25	浅鉢	口縁部～ 底部 100%	高14.8 口26.4 底10.8 厚0.8	外傾し広がりながら立ち上がり上位が内湾する胴部/やや内湾する口縁部/口唇部は内側に肥厚/平坦な底部	無文/底面に網代直無し	明黄褐/砂粒多量、礫少量	加曾利E1式

第55表 118号住居跡出土土器一覧2

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第130図 26 図版103-26	ミニ チュア土 器	胴部～底 部 100%	高14.0 底3.8 厚0.5	やや内湾して立ち上 がる胴部/平坦な底 部	残存部無文/底面網代直無し	にぶい黄褐色 灰・砂粒・ 礫微量	中層中 葉～後 葉
第130図 27 図版103-27	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	粘結沈澱文による波状文	明褐色/砂 粒・礫少 量、雲母 中量	阿玉台 1b式
第130図 28 図版103-28	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部	隆帯による楕円形の口縁部区画/区画内側に沿って爪形文が殆 う/隆帯断面カマゴコ状	暗褐色/砂 粒・礫微 量、雲母 中量	阿玉台 皿式
第130図 29 図版103-29	深鉢	把手部 破片	厚1.0	ほぼ直立する把手	楕円形の把手/縁に1本の隆帯が巡る/中央に隆帯による縦 位の弧状文/隆帯断面三角状・角状	にぶい黄褐 色/砂粒中 量、礫微 量、雲母 中量	阿玉台 皿式
第130図 30 図版103-30	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外積する胴部	角押文を縦位・波状に施文	明褐色/砂 粒・礫微 量	勝坂1a 式
第130図 31 図版103-31	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚1.0	外反する胴部上位/ 強く内湾する口縁部	横位1本の隆帯で文様部分と無文部分を画す/隆帯による波 状文(4単位残存)/隆帯断面台形状/カマゴコ状/隆帯の割が れが見られる/内面に帯状の黒色の付着物が多量に見られる	褐色/砂粒中 量、礫少 量	勝坂3b 新式
第130図 32 図版104-32	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	下位は内湾しながら 外積し上端はほぼ直 立する口縁部	地文は黒糸L縦位・横位、口縁部に施文/口縁部直立部分は 無文/無文部分下端に平行沈線を横位に施文、交互刺突文を付 す/2本1対の隆帯による楕円状の文様を横位隆帯で繋ぐ/隆 帯断面カマゴコ状、隆帯脇1本の単沈線が殆う	暗褐色/砂粒 中量、礫 微量	勝坂3b 新式
第130図 33 図版104-33	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.7	外反する頸部/外積 して広がる口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部上端が山形の突起状を呈す(1単位 残存)/突起下位に曲線状把手、上端に押印文施文/口縁に沿っ て2本1対の隆帯が巡る/口縁部山形突起部分・曲線状把手 横に平載竹管状工具の腹面による平行沈線が見られる	褐色/砂粒少 量、礫微 量	勝坂3b 新式
第131図 34 図版104-34	深鉢	胴部 破片	厚1.3	外積しながら内湾 する胴部	地文は単脚R縦位、胴部に施文/押印文・交互刺突文を付し た隆帯によるH字状の文様/下端横位隆帯上に沈線と波線状 に付す/11目7と同一個体の可能性あり	暗褐色/砂粒 少、礫微 量	勝坂3b 新式
第131図 35 図版104-35	深鉢	胴部 破片	厚1.3	やや外積する胴部	連筋状隆帯による区画と渦巻文、連筋状隆帯には多くが隆帯 上に沈線を付すが一部三脚文を付す/区画内は三脚押文列を充 填/隆帯断面カマゴコ状・台形状、隆帯には1本または2本 の沈線が殆う	黒褐色/砂粒 少量、礫 微量、赤色 砂粒少量	勝坂3b 新式
第131図 36 図版104-36	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外反する胴部	地文は黒糸R縦位/平行沈線による三重角文/平行沈線には 平載竹管状工具の腹面を使用	暗褐色/砂 粒・礫少 量	勝坂3b 新式
第131図 37 図版104-37	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	矢羽根状刺突文・押印文を付した隆帯を縦位に貼付/隆帯間 に沈線による蛇行文状の文様施文/隆帯断面台形状・三角状、 隆帯脇単沈線が1本殆う	褐色/砂粒微 量、礫中 量	勝坂3b 新式
第131図 38 図版104-38	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	やや外積する口縁部 /ほぼ直立する胴部 /口唇部内面で肥 厚する	口唇部から押印文を付した隆帯が1本垂下/口縁部無文帯下 位より2本の隆帯が垂下、区画文か/沈線による三叉文状の 文様/隆帯断面台形状・カマゴコ状、隆帯脇単沈線が1本殆 う	褐色/砂粒少 量、礫中 量	勝坂3b 新式
第131図 39 図版104-39	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	口縁部上位無文/交互刺 突文、矢羽根状刺突文を付した隆帯を 三角状、沈線を付した隆帯をU字状に貼付/沈線による円形 の文様/隆帯断面三角状、隆帯脇1本の単沈線が殆う	灰黄褐色/砂 粒少量、礫 微量	勝坂3b 新式	
第131図 40 図版104-40	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚0.7	外反する胴部上位/ 外反する口縁部	地文は単脚LR、胴部左側横位施文・右側斜位施文/口縁部上 端に連筋状隆帯が巡る/口縁部から1本の隆帯が垂下、押印 文を付した横位隆帯と横し、接点は突起を形成、突起下部か ら三脚押文を付した隆帯が2本斜位に垂下/隆帯断面台形状	にぶい赤褐 色/砂粒少 量、礫微 量	勝坂3b 式
第131図 41 図版104-41	深鉢	胴部 破片	厚1.1	内湾する胴部	押印文を付した横位隆帯で無文部と区画/押印文を付した隆帯 を横位に貼付し、先端は渦巻状となる/隆帯断面カマゴコ状・ 台形状	明褐色/砂粒 中量、礫 微量	勝坂3 式
第131図 42 図版104-42	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部	地文は単脚LR縦位か/左右に孔が貫通した三角状の把手/隆 帯を横位に2本貼付/把手左側に隆帯の剥落痕が見られる/ 隆帯断面カマゴコ状	明褐色/砂粒 少量、礫 微量	勝坂3b 式か
第131図 43 図版104-43	深鉢	口縁部付 近 破片	厚1.1	内湾する口縁部付近	地文は黒糸L縦位、押印文を付した横位隆帯で無文部と画す/ 隆帯上位には沈線による弧状の文様・縦位縦線列施文/隆帯断 面台形状	にぶい明褐 色/砂粒少 量、礫微 量	勝坂3b 式か
第131図 44 図版104-44	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	ほぼ直立する口縁部	地文は黒糸L縦位/幅広の沈線を縦位に複数施文、一部沈線 間の地文磨消/沈線間の地文を磨消した2本の沈線下位に沈 線を弧状に施文	にぶい明褐 色/砂粒少 量、礫微 量	勝坂3 ～加曾利 E1式か
第131図 45 図版104-45	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外反する胴部/外反 する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁に沿って隆帯を貼付	褐色/砂粒・ 礫中量	加曾利 E1a式

第55表 118号住居跡出土土器一覧3

探検番号 図版番号	種別 図種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第131図 46 図版105-46	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外積する頸部/内湾する口縁部、上位は外反	地文は黒糸L横位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端1横/区画内先端が湾曲し1本の横位隆帯/2本1対の隆帯による渦巻状の文様/頸部無文/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒少量・礫微量	加曾利E1a式
第132図 47 図版105-47	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.8	外反する頸部/内湾する口縁部	地文は黒糸L、口縁部区画内横位筋文・頸部に縦位筋文/上端1本、下端1本の隆帯で口縁部を囲す/2本1対の隆帯による渦巻文/2本1対の隆帯の先端が小さく湾曲し、2本の隆帯が垂下/頸部上位に2cm程無文/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E1a式
第132図 48 図版105-48	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部	地文は黒糸L横位か/2本1対の隆帯による渦巻状の文様、口縁部の把手に繋がる/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒少量・礫微量	加曾利E1a式
第132図 49 図版105-49	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	地文は黒糸L横位/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端欠損/隆帯による大きな渦巻文/隆帯断面カマボコ・台形状	灰黄褐/砂粒・礫微量	加曾利E1a～b式
第132図 50 図版105-50	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚1.0	外反する胴部上位/内湾する口縁部	口縁部に小突起(1単位残存)/上端1本、下端1本の隆帯で口縁部を囲す/口縁部区画内沈線による同心円状の文様/胴部上位無文/隆帯断面カマボコ状/外面口縁部上位に黒色の付着物が微量見られる	灰・黄褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E1b式
第132図 51 図版105-51	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外積する頸部/内湾する口縁部	地文は黒糸L縦位/口縁部を上端1本、下端1本の隆帯で囲す/2本1対の隆帯による弧状文、刺繍した把手と繋がると思われる/弧状文から区画下端の隆帯に2本の隆帯が垂下/頸部無文/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E1b式
第132図 52 図版105-52	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.9	外積する口縁部/ほぼ直立する胴部	地文は複節RLR横位/口縁部無文/胴部に横位の隆帯が1本返る/胴部から2本1対の隆帯が垂下/隆帯断面カマボコ状	明赤褐/砂粒少量・礫少量	加曾利E1c式
第132図 53 図版105-53	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	隆帯による口縁部区画/区画上端に先端が渦巻状になる横位沈線文/沈線による楕円形区画内縦位沈線充填	灰・明褐/砂粒中量・礫少量	加曾利E1～2式
第132図 54 図版105-54	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚0.9	外反する頸部/内湾する口縁部	地文は0段多条RL横位/口縁部沈線による渦巻文を付した突起あり/隆帯による口縁部区画/区画内に隆帯による渦巻文、渦巻文に繋がる横位隆帯の途中は突起状となり沈線による渦巻文を付す/頸部無文/下端の破損面に黒色の付着物が多く見られる	明褐/砂粒少量・礫微量	加曾利E2a式
第132図 55 図版105-55	深鉢	胴部 破片	厚0.9	上部は外反し下位は内湾する胴部	地文は縦位条線文/上端に隆帯が横位に返る/隆帯を波状・直状に筋文/隆帯断面カマボコ状	赤褐/砂粒中量・礫微量	曾利Ⅲ式
第133図 56 図版105-56	深鉢	口縁部～ 胴部下位 破片	厚1.0	外積しながら立ち上がり上位で括れる胴部/やや内湾する口縁部	地文は黒糸L縦位、全面に筋文/口縁部上位と胴部括れ部に3本1対の沈線が横位に返る/口縁部上位部に3本1対の沈線による並文文/器高に対して括れる位置が高い/118Jと120Jの遺構間接合	黒褐/砂粒少量・礫微量	並弧文2b段弱
第133図 57 図版106-57	浅鉢	口縁部 破片	厚1.2	上位はほぼ直立し下位は内湾する口縁部	口縁部上位無文、下位に文様帯/隆帯を渦巻状に貼付、右側に押圧文が付った横位沈線、交互沈線文/胴部に沿って押圧文筋文	黒褐/砂粒中量・礫微量	加曾利E1式
第133図 58 図版106-58	浅鉢	口縁部～ 体部上位 破片	厚1.4	外積する体部上位/やや内湾し上端は外積する口縁部	口縁部上端は無文/口縁部無文部と文様帯を交互刺突文で囲す/体部と文様帯を横位1本の沈線と押圧文で囲す/文様帯内に押圧文を付した環状の隆帯を付す、押圧文付した隆帯が胴位に伸び左側の欠損した文様に繋がる/縦位沈線列/隆帯断面カマボコ・台形状	灰・黄褐/砂粒少量・礫微量	加曾利E1式
第133図 59 図版106-59	浅鉢	口縁部～ 体部中位 破片	厚0.9	外積して広がる体部/下位は内折して上位は外反する口縁部	口縁部上位は無文/横位沈線を複数本筋文/上端沈線に交互刺突文を付し蛇行文状に成形/下端沈線の一部に隆帯を波状に付す	明褐/砂粒多量・礫少量	加曾利E1式
第133図 60 図版106-60	浅鉢	口縁部下 ～体部上 位 破片	厚1.2	外積して広がる体部上位/内湾する口縁部	幅広の沈線による交互沈線文/平行沈線による長方形の区画文/U字状の刺突筋文、中央に1ヶ所交互刺突筋文	灰・黄褐/砂粒中量・礫少量	加曾利E1式
第133図 61 図版106-61	浅鉢	口縁部～ 体部 破片	厚0.9	外積して広がる体部/やや内湾する口縁部/口唇部は内側に肥厚	残存部無文/内外面に少量の赤色顔料が見られる	橙/砂粒少量・礫微量	加曾利E1式
第134図 62 図版106-62	浅鉢	口縁部 破片	厚1.4	ほぼ直立する口縁部	残存部無文/口唇部・内面に赤色顔料残存	黒褐/砂粒・礫微量	中期中葉～後葉
第134図 63 図版106-63	浅鉢	体部 破片	厚0.8	内湾する体部	残存部無文/内外面に赤色顔料残存、外面は波状の文様か	黒/砂粒中量・礫微量	中期中葉～後葉
第134図 64 図版106-64	浅鉢	体部 破片	厚1.0	下位は外傾斜し上位はやや内湾する体部	残存部無文/内外面に赤色顔料残存	黒褐/砂粒・礫微量	中期中葉～後葉
第134図 65 図版106-65	浅鉢	体部 破片	厚0.9	外積して広がる体部	残存部無文/内面に赤色顔料による直線状の文様	灰・黄褐/砂粒中量・礫微量	中期中葉～後葉

第55表 118号住居跡出土土器一覧4

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第134図 66 図版106-66	浅鉢	底部 破片	厚0.8	外積する底部	残存部無文/内面に赤色顔料残存	黒/砂粒少 量、礫微量	中期中 Ⅱ～後 Ⅰ
第134図 67 図版106-67	ニ チュ ア土 器	胴部～底 部 破片	厚0.8	やや内湾して立ち上 がる胴部/平坦な底 部	沈積による区画文/区画内横位沈積充填	褐/砂粒・ 礫微量	勝板2 式
第134図 68 図版106-68	ニ チュ ア土 器	胴部 破片	厚0.5	上位は括れ下位は内 湾する胴部	地文は単節LR/平行沈積が重下/沈積による弧状の文様	にぶい黄褐色 /砂粒・礫 微量	加曾利 E式か

第55表 118号住居跡出土土器一覽5

発掘番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第134図69 図版107-69	土器 片鉢	完形	5.8/4.6/1.0	40.5	不整形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/弧状の隆帯に3本の条線が沿う	黒褐/砂粒・礫 微量/書母中量	阿玉台II 式
第134図70 図版107-70	土器 片鉢	完形	4.6/4.6/1.4	45.4	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/口縁部片利用/隆帯に2列の三角押文が沿う	赤褐/砂粒・礫 微量	勝板1b 式
第134図71 図版107-71	土器 片鉢	70%	[4.8]/5.0/1.1	32.9	楕円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/底部片利用/隆帯に幅広の角押文が沿う。爪形文か	にぶい黄褐色/砂 粒・礫微量	勝板2式
第134図72 図版107-72	土器 片鉢	完形	3.7/3.0/0.8	15.2	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/押圧文に波状沈積が沿う/直状の沈積	明褐/砂粒少量、 礫微量	勝板2 ～3式
第134図73 図版107-73	土器 片鉢	完形	5.1/4.5/0.9	25.4	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/押圧文を付した弧状の隆帯/平行沈積による文様か	明黄褐/砂粒多 量、礫微量	勝板3式
第134図74 図版107-74	土器 片鉢	完形	4.6/4.2/1.7	44.6	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/平載竹管状工具の背面を斜めに突き刺した刺突文/右側面に1本沈積が見られる	灰黄褐/砂粒・ 礫微量	勝板3式
第134図75 図版107-75	土器 片鉢	完形	3.7/3.2/1.1	17.4	円形か/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/押圧文が2列	灰黄褐/砂粒・ 礫微量	勝板3式
第134図76 図版107-76	土器 片鉢	80%	4.3/4.4/0.9	23.3	方形か/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/単節LRか/押圧文を付した直状の隆帯/沈積による文様	黒褐/砂粒中量、 礫微量	勝板3式
第134図77 図版107-77	土器 片鉢	90%	7.2/6.4/0.9	63	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単節LR/押圧文を付した直状の隆帯	明褐/砂粒・礫 微量	勝板3式
第134図78 図版107-78	土器 片鉢	90%	5.4/4.3/1.1	35	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/押圧文と交互斜交文を付した直状の隆帯	にぶい黄褐色/砂 粒多量、礫微量	勝板3式
第134図79 図版107-79	土器 片鉢	40%	[6.1]/[3.3]/0.9	22.7	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/平行沈積による区画か、平載竹管状工具の腹面による平行沈積も充填	褐/砂粒少量、 礫微量	勝板3式
第134図80 図版107-80	土器 片鉢	80%	3.6/3.7/1.2	21.4	方形か/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/0段多糸RL	にぶい黄褐色/砂 粒少量、礫微量	勝板3式
第134図81 図版107-81	土器 片鉢	90%	[3.9]/[3.8]/0.9	18.4	方形か/挾部は2ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/器系L/直状の沈積、沈積間書消か	明褐/砂粒少量、 礫微量	加曾利E 式
第134図82 図版107-82	土器 片鉢	完形	5.3/3.6/1.0	28	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無節L/2本の沈積	にぶい黄褐色/砂 粒少量、礫微量	加曾利E 式または 連弧文か
第134図83 図版107-83	土器 片鉢	完形	4.1/3.0/1.0	16.3	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/単節LR/紐状の隆帯を波状に貼付	褐/砂粒少量、 礫微量	曾利II式
第134図84 図版107-84	土器 片鉢	70%	[3.3]/[3.5]/0.9	14.9	方形か/挾部は3ヶ所残存、元は4ヶ所か/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は単節LR/2本1対の沈積による弧状文	灰黄褐/砂粒・ 礫微量	連弧文か
第134図85 図版107-85	土器 片鉢	完形	4.4/3.8/1.4	32	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/2本1対の直状の隆帯/僅かに押圧文が見られる	にぶい黄褐色/砂 粒中量、礫微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図86 図版107-86	土器 片鉢	90%	3.9/3.0/0.8	13.5	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/単節LR	褐/砂粒・礫 微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図87 図版107-87	土器 片鉢	90%	4.0/2.8/1.2	19	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単節LR	明褐/砂粒・礫 少量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図88 図版107-88	土器 片鉢	80%	3.4/[2.7]/0.9	12.5	方形/挾部は2ヶ所/周縁は磨耗が未発達/胴部片利用/器系L	黒褐/砂粒・礫 微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図89 図版107-89	土器 片鉢	完形	4.7/3.9/0.8	22.6	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/器系L	にぶい褐/砂粒・ 礫微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図90 図版107-90	土器 片鉢	完形	8.8/5.6/0.9	78.6	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文/赤色顔料が微量に残存	にぶい黄褐色/砂 粒中量、礫微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図91 図版107-91	土器 片鉢	完形	7.7/5.1/0.9	50.9	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文/赤色顔料が多く残存	にぶい黄褐色/砂 粒中量、礫微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ
第134図92 図版107-92	土器 片鉢	完形	4.4/3.6/1.0	24.8	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒少量、 礫微量	中期中Ⅱ ～後Ⅰ

第56表 118号住居跡出土土製品一覽1

神岡番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第134図93 図版107-93	土器片鏝	完形	5.0/3.6/1.1	29.1	方形/挾部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒中量・ 礫微量、雲母中量	中期中葉 ～後葉
第134図94 図版107-94	土器片鏝	完形	4.8/2.3/1.3	25.7	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文	にぶい黄褐/砂粒・ 礫微量	中期中葉 ～後葉
第134図95 図版107-95	土器片鏝	完形	5.0/2.7/1.3	20.6	方形/挾部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/無文	黒褐/砂粒・礫 微量	中期中葉 ～後葉
第134図96 図版107-96	土器片鏝	完形	2.7/2.5/1.1	10.7	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	橙/砂粒・礫微 量	中期中葉 ～後葉
第134図97 図版107-97	土器片鏝	70%	[7.0]/5.5/1.3	75.9	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/口縁部片利用/無文	黒褐/砂粒・礫 微量、雲母少量	中期中葉 ～後葉
第134図98 図版107-98	土器片鏝	50%	[7.1]/[8.3]/1.1	82.4	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒微量、 礫少量、雲母中 量	中期中葉 ～後葉
第135図99 図版107-99	土器片鏝	50%	[4.1]/6.1/1.7	44.6	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/底部片利用/網代痕無し	明褐/砂粒・礫 微量、雲母多量	中期中葉 ～後葉
第135図100 図版107-100	土器片鏝	90%	4.8/3.1/1.5	27.7	方形/挾部は2ヶ所/周縁はごく一部磨耗/口縁部片利用/無文	黒/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図101 図版107-101	土器片鏝	70%	5.4/[3.1]/1.0	23.9	方形か/挾部は2ヶ所/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/無文	にぶい黄褐/砂粒 少量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図102 図版107-102	土器片鏝	60%	[3.8]/3.7/0.9	16.9	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒少量・ 礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図103 図版107-103	土器片鏝	80%	[4.4]/3.6/1.4	27.5	不整形/挾部は1ヶ所残存/周縁はごく一部磨耗/底部片利用/無文	黒褐/砂粒少量・ 礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図104 図版107-104	土器片鏝	30%	[4.0]/[3.6]/1.0	21.4	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	にぶい黄褐/砂粒 少量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図105 図版107-105	土器片鏝	50%	[3.3]/4.5/1.8	31.2	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/口縁部片利用/無文	にぶい黄褐/砂粒 中量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図106 図版107-106	土器片鏝	60%	[3.4]/4.6/0.8	12.5	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/底部片利用/無文	黒褐/砂粒・礫 微量	中期中葉 ～後葉
第135図107 図版107-107	土器片鏝	30%	[2.4]/4.5/0.8	11.7	円形か/挾部は1ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	黒/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第135図108 図版107-108	土製 円盤	完形	6.5/5.6/1.3	85.6	不整形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/磨擦L/103J-19と同 一物体か、胎土が非常に良く似る	灰黄褐/砂粒・ 礫微量	加曾利 E1a式
第135図109 図版107-109	土製 円盤	完形	8.2/6.2/0.9	73.2	不整形/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文/上端に隆部の 様な痕跡	にぶい明褐/砂粒 中量、礫微量	中期中葉 ～後葉

第56表 118号住居跡出土土製品一覽2

神岡番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第135図110 図版108-110	石鏝	黒曜石	17.7	20.6	6.5	1.7	円基無室/側縁は直線状で鋭角縁/挟りは鋭く弧状/先端部欠損
第135図111 図版108-111	楔形石器	黒曜石	13.7	11.8	5.7	0.8	上下に向極鋭縁が認められる
第135図112 図版108-112	打製石斧	ホルン フェルス	66.1	42.3	13.8	50.3	短冊形/基部は折れて欠損している/両側縁に敲打割離が認められる/両側縁の潰れは不明瞭である
第135図113 図版108-113	打製石斧	砂岩	84.3	45.3	18.2	88.9	短冊形/基部は折れて欠損している/裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる/左側縁のはば全面の稜上に潰れが認められる/右側縁もはば全面の稜上に潰れが認められ、上部の一部は面状になっている
第135図114 図版108-114	打製石斧	緑色凝灰 岩	85.3	43.8	24.6	134.2	短冊形/基部は折れて欠損している/裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる/両側縁に敲打割離が認められる/左側縁のはば全面の稜上に潰れが認められ、上部は面状になっている/右側縁もはば全面の稜上に潰れが認められる
第135図115 図版108-115	打製石斧	砂岩	89.8	48.5	29.9	140.1	短冊形/基部は折れて欠損している/裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる/左側縁のはば全面の稜上に潰れが認められ、中央部は面状になっている/右側縁もはば全面の稜上に潰れが認められる
第135図116 図版108-116	打製石斧	緑泥片岩	114.3	62.0	19.0	212.2	短冊形/基部は一部折れて欠損している/裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる/両側縁に敲打割離が認められる/左側縁の中央部から下部の稜上に潰れが認められ、中央部から下部は面状になっている/右側縁は上部に潰れが認められる
第135図117 図版108-117	打製石斧	砂岩	84.7	39.5	16.3	58.1	短冊形/表面中央部から下部に原礫面が残存し、両側縁に敲打割離が認められる/両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる

第57表 118号住居跡出土石器一覽1

検出番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 135 図 118 図版 108-118	打製石斧	頁岩	75.3	36.4	9.6	31.7	撥形 / 両側縁ともに大半は欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、右側縁に僅かに敲打剥離が認められる / 潰れも右側縁に僅かに認められる
第 135 図 119 図版 108-119	打製石斧	頁岩	68.8	44.8	12.5	44.2	撥形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れは不明瞭である
第 135 図 120 図版 108-120	打製石斧	砂岩	75.1	52.5	21.0	124.9	撥形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められ、一部は面状になっている
第 135 図 121 図版 108-121	打製石斧	砂岩	189.9	64.0	38.7	524.0	撥形 / 両側縁に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁のほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 136 図 122 図版 108-122	打製石斧	砂岩	102.9	47.1	17.0	95.4	撥形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められる
第 136 図 123 図版 108-123	打製石斧	ホルン フェルス	64.2	51.5	16.7	63.8	撥形 / 基部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 右側縁の中央部の稜上に潰れが認められる / 右側縁の潰れは不明瞭である
第 136 図 124 図版 109-124	打製石斧	ホルン フェルス	92.4	56.6	19.1	111.0	撥形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れは不明瞭である
第 136 図 125 図版 109-125	打製石斧	頁岩	98.5	57.7	15.8	124.2	撥形 / 表面刃部が磨滅している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の上部の稜上に潰れが認められる
第 136 図 126 図版 109-126	打製石斧	砂岩	104.5	56.6	31.0	218.3	撥形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められ、中央部は面状になっている
第 136 図 127 図版 109-127	打製石斧	砂岩	114.8	55.9	22.7	156.0	撥形 / 左側縁に原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の潰れは不明瞭である / 右側縁は上部から中央部にかけて潰れが認められる
第 136 図 128 図版 109-128	打製石斧	ホルン フェルス	107.1	65.2	17.3	131.1	撥形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の潰れは不明瞭である
第 136 図 129 図版 109-129	打製石斧	頁岩	64.0	26.6	11.4	23.0	平面形状は不明 / 右半のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 右側縁の中央部の稜上に局所的に潰れが僅かに認められる
第 136 図 130 図版 109-130	打製石斧	片状砂岩	56.0	42.9	16.9	53.0	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の潰れは不明瞭である / 右側縁はほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第 136 図 131 図版 109-131	打製石斧	ホルン フェルス	62.9	55.9	15.6	63.5	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁ともに稜上に局所的に潰れが僅かに認められる
第 136 図 132 図版 109-132	打製石斧	ホルン フェルス	46.4	33.3	14.2	25.1	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の一部の稜上に潰れが認められる
第 136 図 133 図版 109-133	打製石斧	砂岩	53.1	55.2	17.4	52.3	平面形状は不明 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、左側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の一部の稜上に潰れが認められる / 右側縁は潰れが認められない
第 136 図 134 図版 109-134	磨製石斧	緑色凝灰 岩	79.6	55.6	43.0	252.2	刃部のみ残存 / 体部は表面ともに全面研磨面に覆われている
第 137 図 135 図版 109-135	二次加工 削片	黒曜石	18.3	19.3	4.7	1.2	裏面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる
第 137 図 136 図版 109-136	二次加工 削片	黒曜石	18.6	28.6	3.9	2.4	表面側上端に不連続な二次的剥離が認められる
第 137 図 137 図版 109-137	二次加工 削片	黒曜石	28.8	21.9	10.0	5.6	裏面側左側縁や下端に不連続な二次的剥離が認められる
第 137 図 138 図版 109-138	二次加工 削片	片状砂岩	81.1	57.4	12.3	62.0	両面側上端に不連続な二次的剥離が認められる
第 137 図 139 図版 109-139	磨+凹石	絹雲母片 岩	55.9	58.4	13.9	66.1	表面に磨面 / 回転による円錐形の凹みか表面に 1ヶ所みられ、磨面の前凹縁
第 137 図 140 図版 110-1-140	石皿	笠山岩	173.8	223.3	131.1	6755.0	扁平石皿 / 表面の一部に使用面らしき磨面が認められる / 一部がすずしに覆われており、加熱の可能性がある
第 137 図 141 図版 110-1-141	石皿	閃緑岩	177.1	197.2	142.8	6635.0	扁平石皿 / 表面に平坦な使用面

第 57 表 118 号住居跡出土石器一覽 2

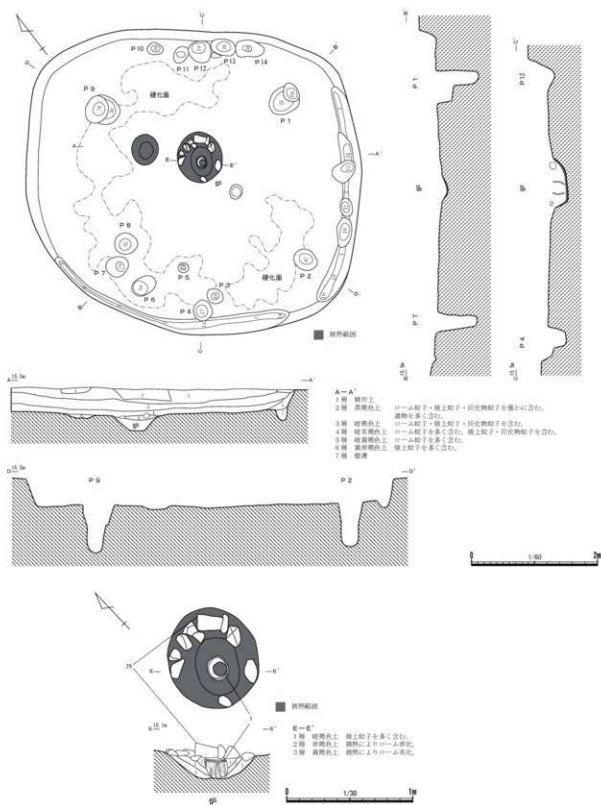
119 号住居跡

遺 構 (第 138 図)

[位 置] (D-5) グリッド。

[検出状況] 117・118 J を切る。

[構 造] 平面形: 隅丸方形。主軸方位: N-38°-E。P2 と P7 の中間と炉の中心を通るライン



第138图 119号住居跡・炉 (1/30・1/60)

を主軸と捉えた。規模：長軸 533cm / 短軸 481cm / 深さ 24 ~ 44cm。壁溝：1条検出されたが、北側半分については確認できなかった。上幅 8 ~ 31cm / 下幅 4 ~ 10cm / 床面からの深さ 1 ~ 18cm。壁：約 64 ~ 82° でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、中央部分がわずかに低くなる。炉の北西側に被熱範囲が認められる。直床である。炉：石囲埋炭炉。主に北東側に半円状に石が配置される。深鉢形土器の口縁部（第 139 図 1）、石棒（第 141 図 29）が埋設されている。長軸 80cm / 短軸 72cm / 床面からの深さ 27cm。埋篋：検出されなかった。柱穴：14 本検出した。P 1、P 2、P 7、P 9 を主柱穴ととらえ、4 本柱建物进行想定する。

[覆 土] 5 層に分層できた。

[遺 物] 土器、土製品、石器、骨片が出土した。炉体土器（第 139 図 1）が出土している。深鉢形土器（第 140 図 14）は 117 J 出土の破片との遺構間接合、深鉢形土器（第 140 図 16）は 117 J、118 J 出土の破片と同一個体の可能性がある。炉体土器と共に石棒（第 141 図 29）、骨片（図版 112）が出土している。

[時 期] 中期後葉期（加曾利 E 2 c 式期）。

[遺 物]（第 139 ~ 141 図、図版 110 - 2 ~ 112、第 58 ~ 60 表）

[土 器]（第 139 図・第 140 図 4 ~ 17、図版 110 - 2・111、第 58 表）

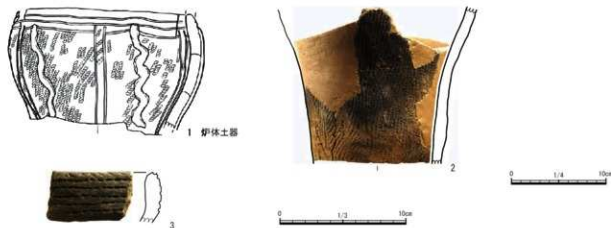
復元資料を 2 点、破片資料 15 点を図示した。1 は炉体土器で、加曾利 E 2 c 式の深鉢形土器である。縄文を地文とし、胴部には波状隆帯と直状の沈線が垂下する。内面の器面は非常に荒れており、口縁部も偽口縁の可能性がある。2 は勝坂 3 式と思われる深鉢形土器である。地文以外の文様は見られない。3 は阿玉台式、4 ~ 7 は勝坂式、8 ~ 13 は加曾利 E 式、14 ~ 16 は連弧文土器の深鉢形土器である。14 は 117 J との遺構間接合で、16 は 117 J 1、118 J 20 と同一個体の可能性がある。17 は加曾利 E 式の浅鉢形土器と思われる。

[土 製品]（第 140 図 18、図版 111、第 59 表）

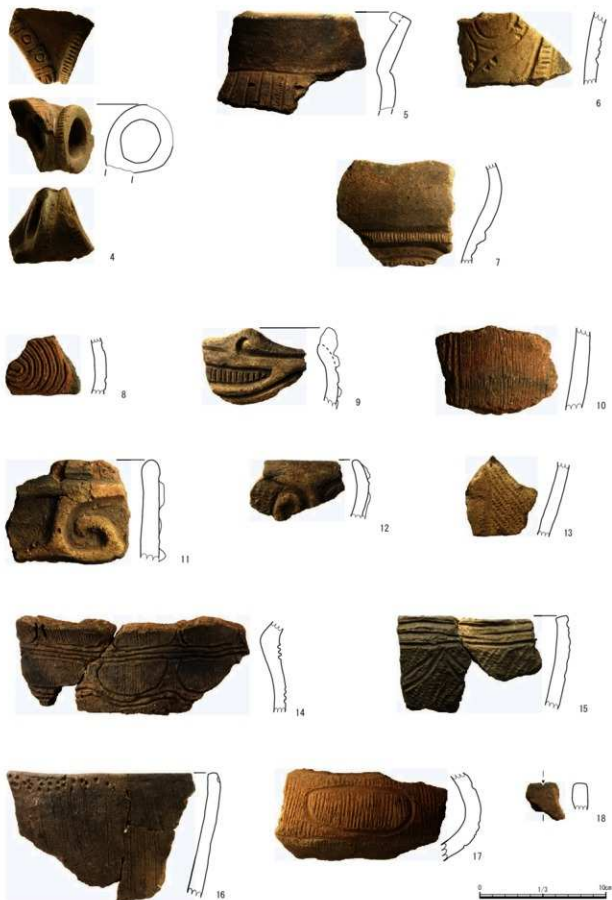
1 点を図示した。18 は土器片錘である。

[石 器]（第 141 図、図版 111 ~ 112、第 60 表）

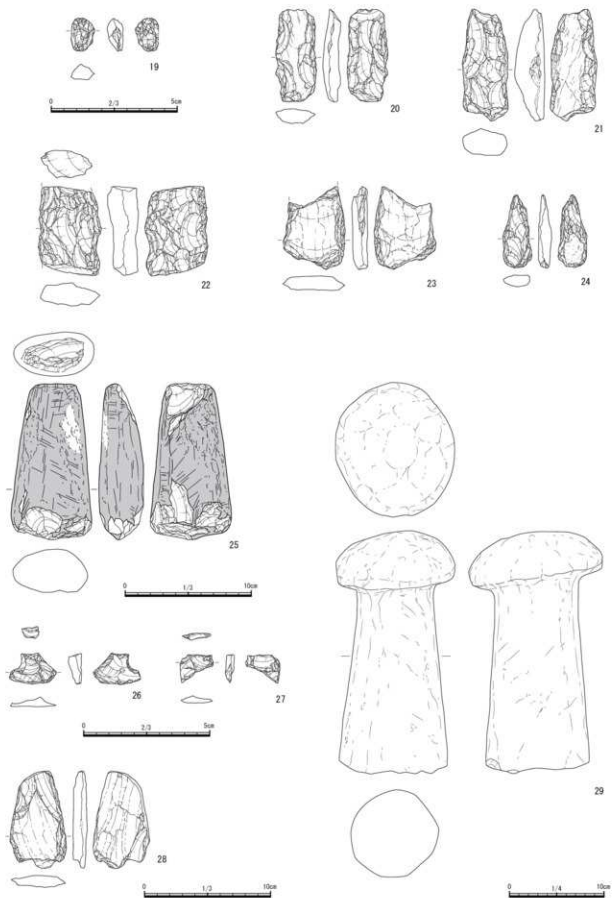
11 点を図示した。19 は楔形石器である。20 ~ 24 は打製石斧である。25 は磨製石斧である。26 ~ 28 は二次加工剥片ある。29 は石棒であり、石囲炉の炉石として転用された可能性がある。



第 139 図 119 号住居跡出土遺物 1 (1/4・1/3)



第140図 119号住居跡出土遺物2 (1/3)



第141図 119号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3・2/3)

探検番号 図版番号	種別 種類	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第139図1 図版110-2-1	深鉢	口縁部～ 胴部中位 100%	高112.8 口17.5 厚1.1	括れる胴部/内湾する口縁部	地文は単筋RL縦文/口縁上部に3本1対の沈線が横走/1本の波状隆帯6単位と2本1対の直状の沈線6単位が交互に垂下/隆帯断面扁平な角状、押し付けて貼付/地文-隆帯貼付/内面表面は下位に比べ上位は非常に荒れている/偽口縁の可能性あり/砂土土器	明赤褐/砂粒中量、微少量	加曾利E2c式
第139図2 図版110-2-2	深鉢	胴部中位 40%	高116.7 厚1.0	下位はやや内湾し上位は括れ内湾する胴部	地文は単筋RL縦文・斜位	橙～黒褐/砂粒少量、微少量	勝坂3式か
第139図3 図版110-2-3	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや内湾する口縁部	口唇部に押圧文施文/結節沈線文を横位に5列施文、工具の先端はやや斜位	黒褐/砂粒少量、微少量	阿玉台1b式
第140図4 図版110-2-4	深鉢	把手部 破片	-	眼瞼状把手	縁の一部に押圧文施文/左側内側に沈線による円形文を正方形で囲んだ文様・円形文周囲を押圧文で充填	明褐/砂粒少量・微少量	勝坂2～3式
第140図5 図版110-2-5	深鉢	口縁部～ 胴部上位 破片	厚1.1	内湾する胴部上位/外積する口縁部/口唇部は内側に肥厚	口縁部無文/口縁部と文様帯を横位1本の沈線で両す/縦位沈線列、沈線間押圧文充填・交互斜突文施文	暗褐/砂粒少量・微少量	勝坂3a式
第140図6 図版110-2-6	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外積する胴部	押圧文を付した隆帯を斜位に貼付、区画文の一部か/沈線による円形の文様・刺突文・交互斜突文/隆帯断面台形状、隆帯幅1本の単沈線が沿う	橙/砂粒中量、微少量	勝坂3b式
第140図7 図版110-2-7	深鉢	口縁部付 近～頸部	厚1.0	内湾する口縁部/ほぼ直立する頸部	口縁部無文/頸部に押圧文を付した1本の隆帯が横走/2本1対の沈線は楕円状と思われる/隆帯断面台形状、隆帯幅1本の単沈線が沿う	褐/砂粒中量、微少量	勝坂3式
第140図8 図版110-2-8	深鉢	口縁部付 近 破片	厚0.9	内湾する口縁部付近	沈線による渦巻文	明赤褐/砂粒中量、微少量	加曾利E1b式
第140図9 図版110-2-9	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/外積する突起部	突起部に沈線による渦巻文/隆帯による口縁部区画/口縁部区画内縦位沈線充填/区画内に2本の隆帯による文様貼付/隆帯断面台形状	暗褐/砂粒少量・微少量	加曾利E1～2式
第140図10 図版111-10	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外積する胴部	地文は縦位条線文/3本1対の直状の沈線が垂下	赤褐/砂粒多量、微少量	加曾利E2c式
第140図11 図版111-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	直立する口縁部	地文は単筋LR横位か、不明磨/隆帯による口縁部区画、上端1本、下端欠損/隆帯による渦巻文/隆帯断面台形状	褐/砂粒少量・微少量	加曾利E2式
第140図12 図版111-12	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	地文は単筋RL縦文/隆帯による口縁部区画/隆帯による渦巻文/隆帯断面台形状・カマボコ状	暗褐/砂粒少量、微少量	加曾利E3式
第140図13 図版111-13	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外積し上位がやや内湾する胴部	地文は単筋LR縦位/先端が弧状の縦位沈線、沈線内側無文	にぶい黄橙/砂粒・微少量	加曾利E3c～4式
第140図14 図版111-14	深鉢	胴部中位 破片	厚0.9	括れる胴部	地文は縦位条線文/括れ部に3～4本の沈線が横走、上端の1本は上位にハの字状の副文様に繋がる/下端に3本1対の沈線による波状文、上端の1本はハ字状の副文様に繋がる/117と119Jとの遺構間接合	暗褐/砂粒中量、微少量	連弧文2b段階
第140図15 図版111-15	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	やや外積する口縁部	地文はRL縦位/口縁部上位に3本1対の沈線が沿る/2本1対の沈線による連弧文	黒褐/砂粒・微少量	連弧文
第140図16 図版111-16	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	外積し上位はやや内湾する口縁部	地文は縦位条線文/2列または3列の円形刺突文が口縁部に沿う、円形刺突文の無い部分あり/胎土、円形刺突文の形状から117J・118J・20と同一個体の可能性がある	黒褐/砂粒・微少量	連弧文の系統
第140図17 図版111-17	浅鉢 か	口縁部付 近	厚1.3	内湾する口縁部付近	地文は縦位条線文/横位隆帯の割断面があり、割断面下位は無文/沈線による楕円形の文様	橙/砂粒中量、微少量	加曾利E3式か

第58表 119号住居跡出土土器一覽

探検番号 図版番号	種別 種類	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (mm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第140図18 図版111-18	土器 片断	40%	3.0/1.2/9/1.2	10	方形か/残部は1ヶ所残存/周縁は部分的に磨耗/口縁部利用/無文	暗褐/砂粒少量、微少量	中期中量～後量

第59表 119号住居跡出土土製品一覽

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第141図19 図版111-19	楔形石器	黒曜石	13.6	10.2	6.6	0.7	上下に両側割離が認められる
第141図20 図版111-20	打製石斧	頁岩	74.0	33.4	13.6	38.3	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁に潰れはほとんどみられない
第141図21 図版111-21	打製石斧	砂岩	88.3	37.5	23.6	91.8	楕形 / 刃部は折れて欠損している / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁の中央部の稜上に潰れが認められ、中央部は面状になっている
第141図22 図版111-22	打製石斧	砂岩	71.7	51.3	24.6	109.2	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 両側縁に敲打割離が認められる / 両側縁に潰れはほとんどみられない
第141図23 図版111-23	打製石斧	絹雲母片岩	65.9	49.3	11.9	53.1	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 右側縁に敲打割離が認められる / 左側縁の潰れの有無は欠損によって不明である / 右側縁に潰れはほとんどみられない
第141図24 図版111-24	打製石斧	緑泥片岩	58.1	23.2	10.5	17.3	平面形状は不明 / 体部のみ残存 / 左側縁に敲打割離が認められる / 左側縁に潰れはほとんどみられない / 右側縁に潰れの有無は欠損によって不明である
第141図25 図版111-25	磨製石斧	緑色凝灰岩	124.5	65.1	35.1	433.5	基部は敲打を伴う割離によって調整される / 表面ともにはほぼ全面研磨面に覆われている / 一部両側面に敲打が認められ、研磨痕の前段階
第141図26 図版111-26	二次加工 削片	黒曜石	12.0	18.8	5.2	0.9	裏面側右側縁に不連続な二次的割離が認められる
第141図27 図版111-27	二次加工 削片	黒曜石	11.2	13.6	3.8	0.4	裏面側右側縁に不連続な二次的割離が認められる
第141図28 図版111-28	二次加工 削片	絹雲母片岩	76.7	44.3	11.4	45.9	表面側左側縁に不連続な二次的割離が認められる
第141図29 図版112-29	石棒	安山岩	2675.4	1325.1	1492.1	5035.0	有頭 / 下半は折れて欠損している / 体部はほぼ全面研磨面に覆われている / 体部表面の一部にすが付着しており、加熱の可能性があり / 炉内から出土 / 石路8%の石として転用か

第60表 119号住居跡出土石器一覧

120号住居跡

遺 構 (第142図)

[位 置] (D・E-6) グリッド。

[検出状況] 南側半分が調査区外に伸びる。117 J に切られる。

[構 造] 平面形：隅丸方形を呈すと思われる。主軸方位：N-50°-W。P2とP6の中間と炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。規模：長軸599cm / 短軸残存長321cm / 深さ155cm。壁溝：1条検出された。上幅16～39cm / 下幅4～14cm / 床面からの深さ2～9cm。壁：約69～78°でやや急斜に立ち上がる。床面：概ね平坦であるが、中央部分がわずかに低くなる。直床である。炉：埋裏炉。楕円形で、断面はすり鉢状で段を有する。深鉢形土器の口縁部(第143図1)が埋設されている。長軸90cm / 短軸残存長87cm / 床面からの深さ36cm。埋裏：検出されなかった。柱穴：6本検出した。P1、P5、P6、未調査区である南側に1本を想定し、主柱穴ととらえると、4本柱建物を想定する。

[覆 土] 6層に分層できた。

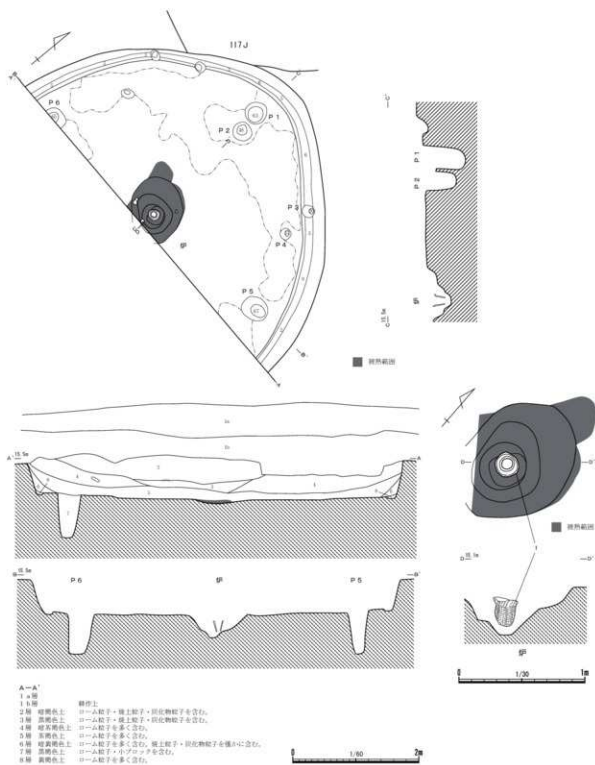
[遺 物] 土器、土製品、石器が出土した。炉体土器(第143図1)が出土している。深鉢形土器(第144図16)は118 J 出土の破片と遺構間接合している。

[時 期] 中期後葉期(加曾利E2c式 / 曾利Ⅲa式期)。

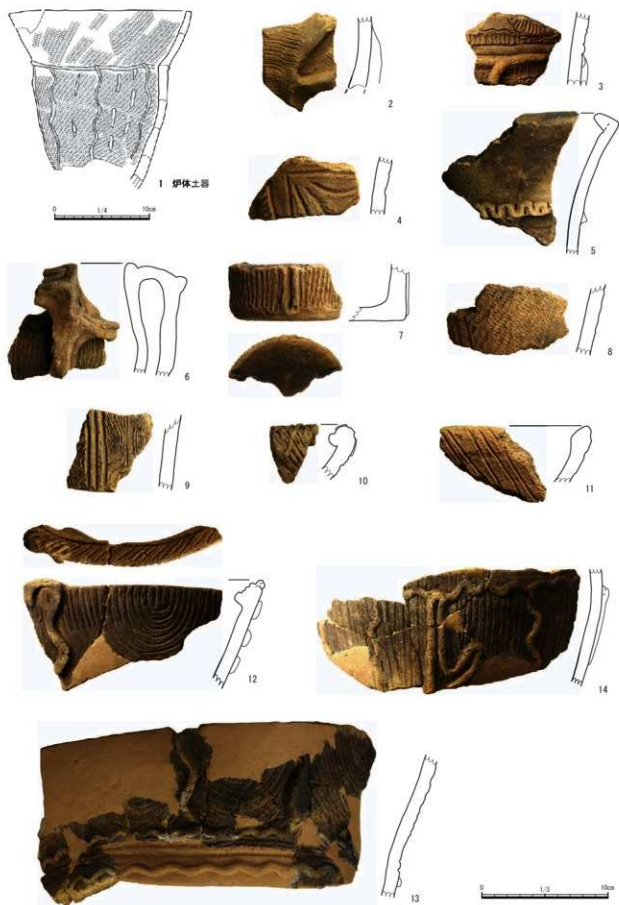
遺 物 (第143～145図、図版113・114、第61～63表)

[土 器] (第143図・第144図15～19、図版113・114、第61表)

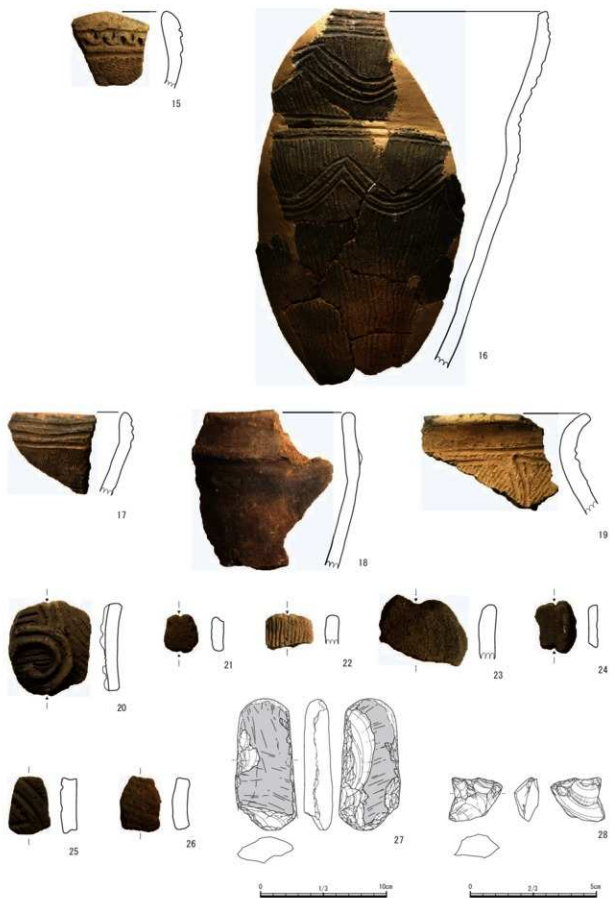
復元資料を1点、破片資料18点を図示した。1は炉体土器で、曾利Ⅲa式の深鉢形土器である。地文である縄文を全面に施文する。頸部に紐状の隆帯が波状に巡り、そこから胴部に隆帯が波状に垂下する。2は阿玉台式、3～5は勝坂式、6～9は加曾利E式、10～14は曾利式、15～17は連弧文土器、



第142図 120号住居跡・炉(1/60・1/30)



第143図 120号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第144図 120号住居跡出土遺物2 (1/3・2/3)

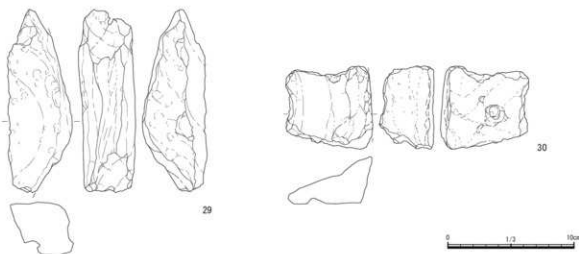
18は後期にあたると思われる土器の深鉢形土器である。12～14は同一個体で、16は118 J出土の破片が遺構間接合している。19は加曾利E式の浅鉢形土器と思われる。

[土製品] (第144図20～26、図版114、第62表)

7点を図示した。20～24は土器片鏃、25・26は土製円盤である。

[石器] (第144図27～28・第145図、図版114、第63表)

4点を図示した。27は打製石斧である。28は二次加工剥片である。29・30は石皿である。



第145図 120号住居跡出土遺物3 (1/3)

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第143図1 図版113:1	深鉢	口縁部～ 底部付近 90%	高 [18.6] 口 19.7 厚 1.0	やや内湾しなから 外積する胴部 / 括 れる頸部 / 内湾し なから外積する口 縁部 /	地文は単節 Ⅷ 縦位、全面に施文 / 頸部に 1本の紐状の隆帯が通 る / 頸部から紐状の隆帯が波状に垂下 (10単位)、波状隆帯間に 2本の縦線状の隆帯が垂下する部分が1ヶ所、1本の波線状の隆 帯が垂下する部分が1ヶ所あり隣接する / 波線状の隆帯は割が れではなく元々波線状に貼付したと思われる / 隆帯断面方マボコ 状 / 口縁部内面の裏面は凹凸があり粗い / 胴部外面に黒色の付着 物が多く見られる / 砂土器	赤褐色 / 砂 粒中量、礫 少量、1cm 以上の礫を 含む	曾利Ⅲ a式
第143図2 図版113:2	深鉢	口縁部 破片	厚 1.2	ほぼ直立する口縁 部	地文は縦位条線文 / 隆帯を貼付 / 隆帯断面台形状	にぶい濁 / 砂粒・礫少 量、雲母中 量	阿玉台 皿式
第143図3 図版113:3	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外積する胴部	横位隆帯を貼付し、隆帯にかかる様に隆帯による横円状区画文を 配す / 横位隆帯に半截竹管状工具の痕跡による平行沈線が沿う / 横円状区画文内側・平行沈線に幅広角押文と波状沈線が沿う / 隆 帯断面方マボコ状	濁 / 砂粒少 量、礫微量	曾利2a 式
第143図4 図版113:4	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外積する胴部	押圧文を付した隆帯、区画文か / 弧状の沈線による文様 / 隆帯断 面台形状、隆帯脇2本の単沈線が沿う	濁 / 砂粒微 量、礫少量	曾利3b a式
第143図5 図版113:5	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚 0.9	外反する口縁部 / 口唇部内面で断面 三角状に肥厚	口縁部無文 / 頸部に交互刺突文を付した隆帯が1本通る、下位 にも隆帯が刺刺した痕跡が見られる / 隆帯断面方マボコ状	にぶい黄泥 / 砂粒少量、 礫微量	曾利3 式
第143図6 図版113:6	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部	地文は濃赤Ⅷ 縦位、口縁部に施文 / 口縁部に把手あり	濁 / 砂粒少 量、礫微量	加曾利 E1b式
第143図7 図版113:7	深鉢	胴部下位 ～底部 破片	厚 1.3	直立して立ち上 がる胴部 / 平坦な底 部	地文は濃赤Ⅷ 縦位、胴部に施文 / 2本1対の直状の隆帯が垂下、 下端はU字状に繋がる / 隆帯断面方マボコ状、底面網状痕無し	明濁 / 砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E1b式
第143図8 図版113:8	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	外積する胴部	地文は単節 Ⅷ 縦位、胴部に施文 / 2本1対の直状沈線が垂下し、 沈線間の裏文を磨消す / 内面に微量の黒色の付着物あり	濁 / 砂粒・ 礫微量	加曾利 E3式
第143図9 図版113:9	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外積する胴部	地文は波状の条線文 / 3本1対の沈線が垂下、沈線間は地文が磨 消されるが一部残る	濁 / 砂粒・ 礫微量	加曾利 E3式

第61表 120号住居跡出土土器一覽1

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第143図 10 図版113-10	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	外積する口縁部/ 先端は内側に内側	平截竹管状工具による平行沈線と細部の隆帯による斜格子文/内 折した口唇部の先端に断面円形の隆帯を貼付、口唇部と隆帯の 間に沈線が通る	灰白、黄緑 /砂粒少量、 礫微量	曽利Ⅱ 式
第143図 11 図版113-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	やや内湾する口 唇部/口唇部は内側 に肥厚	沈線による斜格子文	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	曽利Ⅲ 式
第143図 12 図版113-12	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	外積する口縁部/ 口唇部は内側に肥 厚	沈線による重弧文/口縁部から組状の隆帯が波状に垂下/隆帯断 面方マボコ状/120J・12・13・14は同一個体	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	曽利Ⅲ 式
第143図 13 図版113-13	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外積する口縁部/ 括れる胴部	沈線による重弧文/口縁部から組状の隆帯が波状に垂下/胴部に 2本の沈線が走り、上下に1本ずつ波状隆帯が沿う/隆帯断面方 マボコ状・台形状・三角状/120J・12・13・14は同一個体	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	曽利Ⅲ 式
第143図 14 図版113-14	深鉢	胴部 破片	厚1.0	内湾する胴部	地文は縦位沈線/上位に1本の波状隆帯が通る/上位の隆帯か ら1本の波状隆帯(2単位残存)が垂下、間に鉤状の隆帯を弧文 /隆帯断面方マボコ状・三角状/120J・12・13・14は同一個体	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	曽利Ⅲ 式
第144図 15 図版113-15	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや内湾する口縁 部	地文は単筋RL縦位、口縁部に弧文/交互斜突文で横位の蛇行文 状に成形	明褐/砂粒 少量、礫微 量	連弧文 2a段階
第144図 16 図版114-16	深鉢	口縁部～ 胴部下位 破片	厚1.0	外積しながら立ち 上が上位で括れ る胴部/やや内湾 する口縁部	地文は懸糸L縦位、全面に無文/口縁部上位と胴部括れ部に3 本1対の沈線が横位に走る/口縁部と胴部に3本1対の沈線 による連弧文/器高に対して括れの位置が高い、118Jと120Jの遺 構間接合	黒褐/砂粒 少量、礫微 量	連弧文 2b段階
第144図 17 図版114-17	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部	地文は縦位染線文、口縁部に無文/口縁部上位に3本1対の沈 線が通る/破片下端に僅かに横位沈線が見られる	明褐/砂粒少 量、礫微量	連弧文 2b段階
第144図 18 図版114-18	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.0	外積し上位はやや 内湾する胴部/内 積する口縁部	口縁部に沿って1本の隆帯が通る/無文だが隆帯上位は横位・ 下位は縦位のミガキが見られる	明褐/砂粒 中量、礫微 量	後期か な
第144図 19 図版114-19	浅鉢 か	口縁部 破片	厚1.3	外反する口縁部	地文は単筋RL縦位/口縁部上位無文/無文部との境に2本の沈 線が走り、下端の沈線は弧状に垂下する	褐/砂粒・ 礫少量、白 色粒中量	加曽利 E2式

第61表 120号住居跡出土土器一覽2

検出番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第144図20 図版114-20	土器片 鉢	完形	7.3/6.4/1.1	81.8	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋 RL/2本1対の直状の隆帯・渦巻状の隆帯、沈線充填	黒褐/砂粒中量、 礫微量、雲母中量	加曽利 E1a式
第144図21 図版114-21	土器片 鉢	完形	3.1/2.6/1.0	9.7	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋 RL	明褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第144図22 図版114-22	土器片 鉢	40%	3.8/3.7/1.1	15.2	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/ 懸糸L	明褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第144図23 図版114-23	土器片 鉢	40%	5.0/6.9/1.3	49.7	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は磨耗が未発達/底部片利 用/無文	褐/砂粒少量、礫 中量、雲母中量	中期中葉 ～後葉
第144図24 図版114-24	土器片 鉢	60%	4.0/3.0/0.9	11.6	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	灰白/黄緑/砂粒 少量、礫微量	中期中葉 ～後葉
第144図25 図版114-25	土製 円盤	完形	4.5/3.2/1.2	21.4	方形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/2本1対の弧状の沈線/ 三角形文、周囲に平行沈線充填	褐/砂粒・礫微量	階坂3式
第144図26 図版114-26	土製 円盤	完形	4.2/3.1/1.2	20.3	方形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/単筋RL	明褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第62表 120号住居跡出土土製品一覽

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第144図27 図版114-27	打製石斧	砂岩	104.6	48.2	48.4	152.2	短冊形/表裏面ともに原礫面が広く残存し、両側縁に鋭打 痕が認められる/左側縁のほぼ全部の稜上に潰れが認められ、 上部は面状になっている/右側縁もほぼ全部の稜上に潰れが 認められる
第144図28 図版114-28	二次加工 刮片	黒曜石	19.4	20.5	9.8	2.8	表面側上端に不連続な二次的剥離が認められる
第145図29 図版114-29	石皿	安山岩	145.2	54.0	45.7	355.9	扁平石皿/表裏面ほぼ全面に平坦な使用面
第145図30 図版114-30	石皿	玄武岩	66.0	71.3	43.4	111.1	表面の使用面の消耗が激しく、中央付近が薄くなっている

第63表 120号住居跡出土土器一覽

(3) 埋窠

2号埋窠

遺 構 (第146図)

[位 置] (D-5) グリッド。

[検出状況] 切り合いなし。

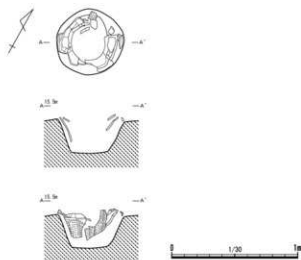
[構 造] 平面形：円形。規模：長軸0.53m/短軸0.52m/深さ26cm。長軸方向：N-60°-E。

[時 期] 中期後葉期（加曾利E3b式期）。

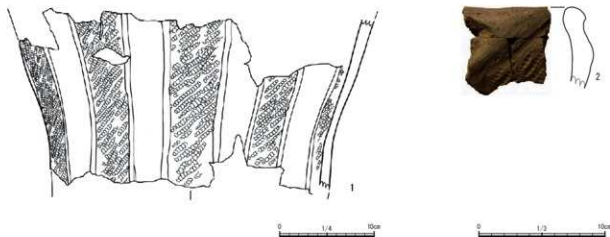
遺 物 (第147・148図、図版115-1、第64表)

[土 器] (第147・148図、図版115-1、第64表)

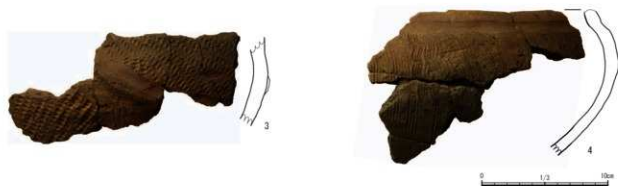
復元資料1点、破片資料3点を図示した。1は加曾利E3b式の深鉢形土器である。大型の土器である。2・3も加曾利E3式の土器で、1～3は同一個体の可能性がある。4は加曾利E3式の鉢形土器である。



第146図 2号埋窠 (1/30)



第147図 2号埋窠出土遺物1 (1/4・1/3)



第148図 2号埋襲出土遺物2(1/3)

検出番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第147図1 図版115-1-1	2埋	深鉢	胴部 70%	高17.4 厚1.0	上位が外反する胴部	地文はRL縦位/2本1対の沈線が直状に垂下。沈線間は地文無し/一部沈線に縄文がのっている部分あり/沈線間の地文が無い部分に縄文を磨消した痕跡が僅かにあり/1～3は同一個体の可能性あり	明褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E3b式
第147図2 図版115-1-2	2埋	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	内湾する口縁部	地文は単節 RL 縦位/隆帯による口縁部区画/区画から沈線が直状に垂下。沈線左側は地文磨消/隆帯断面カマボコ状/1～3は同一個体の可能性あり	明褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E3式
第148図3 図版115-1-3	2埋	深鉢	口縁部 付近～ 胴部破片	厚1.0	内湾する口縁部付 近～胴部	地文は単節 RL。口縁部区画内横位、胴部縦位/隆帯による口縁部区画/区画から沈線が直状に垂下。沈線右側は地文磨消隆帯断面カマボコ状/1～3は同一個体の可能性あり	明褐/砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E3式
第148図4 図版115-1-4	2埋	鉢	口縁部～ 胴部破片	厚1.0	外傾する胴部/内 湾する口縁部	地文は縦位波状・直状の条線文/口縁部に沿って1本の幅広い沈線地文/沈線上位無文	明褐～ふ い黄橙/砂 粒・礫微量	加曾利 E3式

第64表 2号埋襲出土土器一覽

(4) 土坑

201号土坑

〔遺 構〕(第149図)

〔位 置〕(B-4)グリッド。

〔検出状況〕切り合いなし。

〔構 造〕平面形:円形。規模:長軸1.18m/短軸1.17m/深さ25cm。長軸方向:N-4°-E。壁:60~70°で立ち上がる。

〔覆 土〕焼土粒・炭化物を含む暗褐色土を基調とする。202Dの覆土と類似している。

〔遺 物〕少量の遺物が出土した。

〔時 期〕中期中葉～後葉期(阿玉台Ⅲ～曾利Ⅰ時期)。

〔遺 物〕(第152図、図版115、第66表)

〔土 器〕(第152図、図版115、第66表)

破片資料2点を図示した。1は阿玉台式、2は曾利式の深鉢形土器である。

202号土坑

〔遺 構〕(第149図)

〔位 置〕(C-4)グリッド。

〔検出状況〕6方の主体部に切られる。

〔構 造〕平面形:円形。規模:長軸1.03m/短軸1.00m/深さ28cm。長軸方向:N-3°-E。壁:

80°～90°で立ち上がる。

〔覆土〕 焼土粒・炭化物を含む暗褐色土を基調とする。201 Dの覆土と類似している。

〔遺物〕 覆土下層から少量の遺物が出土した。

〔時期〕 中期後葉期（加曾利E式期）。

〔遺物〕 (第152図、図版115、第66表)

〔土器〕 (第152図、図版115、第66表)

破片資料3点を図示した。1は加曾利E式、2は加曾利E式と思われるもの、3は中期後葉の深鉢形土器である。

203号土坑

〔遺構〕 (第149図)

〔位置〕 (B-1)グリッド。

〔検出状況〕 切り合いなし。

〔構造〕 平面形：楕円形か。規模：長軸1.26m/短軸1.17m/深さ51cm。長軸方向：N-79°-E。壁：60°～70°で立ち上がる。

〔覆土〕 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 206 D出土の破片と遺構間接合する浅鉢形土器(第153図1)が出土した。

〔時期〕 中期中葉期（勝坂2b式期）。

〔遺物〕 (第153図、図版115-1・116、第66表)

〔土器〕 (第153図、図版115-1・116、第66表)

復元資料1点、破片資料1点を図示した。1は中期中葉～後葉の浅鉢形土器である。206 D出土の破片が遺構間接合している。赤色顔料が口唇部、内面に多く残存するが、外面は僅かである。内面には赤色顔料による文様が施され、口縁部付近は波状文が見られる。2は勝坂式の深鉢形土器である。

204号土坑

〔遺構〕 (第149図)

〔位置〕 (D-3)グリッド。

〔検出状況〕 13Mに切られる。

〔構造〕 平面形：円形。規模：長軸0.99m/短軸0.93m/深さ41cm。長軸方向：N-63°-E。壁：80°～90°で立ち上がる。

〔覆土〕 土器中の覆土はローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 掘り込みと同規模の大型の深鉢形土器(第154図1)が出土した。また、この土器内に遺物はほぼ確認できなかった。

〔時期〕 中期中葉期（勝坂3b古式期）。

〔所見〕 深鉢形土器の出土状況から、墓坑の可能性はある。

〔遺物〕 (第154図、図版117～119、第66表)

〔土器〕 (第154図、図版117～119、第66表)

復元個体1点、破片資料2点を図示した。1は大型の勝坂3b古式の深鉢形土器である。口縁部、胴

部中位、胴部下位の3つの文様帯を持ち、それぞれの間には無文様帯がある。口縁部の文様帯には突起が1単位残存する。突起の隣には、隆帯による渦巻状の文様を配す。三叉文、沈線による文様を施し、沈線間には押圧文を加える。胴部中位の文様帯には、隆帯による三角状の区画と渦巻状の文様の組み合わせを1単位とした区画が2単位残存し、元は3単位あったと思われる。隆帯による渦巻状の文様の中心は突起状になる。周囲には沈線による三角状の区画を設け、中心に三叉文を施文する。胴部下位の文様帯には、隆帯による渦巻状の文様が5単位連なる。周囲には三叉文を施す。口縁部の文様帯の隆帯上、胴部下位の一部の隆帯上には押圧文が見られるが、胴部中位の文様帯の隆帯上に押圧文は見られない。2は勝坂式、3は中期中葉～後葉の深鉢形土器である。

205号土坑

遺構 (第149図)

位置 (C・D-2) グリッド。

検出状況 13 Mに切られる。

構造 平面形:楕円形。規模:長軸1.53 m/短軸1.29 m/深さ54 cm。長軸方向:N-77°-W。壁:60°~70°で立ち上がる。

覆土 上層(2層)はローム粒子を僅かに含む暗褐色土、中層(3・4層)はローム粒子を多く含み、焼土粒子~小ブロック、炭化物粒子を含む茶褐色~暗茶褐色土を基調とする。中層下位(5層)はローム粒子を多く含み、焼土粒子~小ブロックを多く含む。下層上位(6層)は炭化物粒子を多く含み、焼土粒子~小ブロック、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。下層中央(7層)はロームブロックを含む黄褐色土で、熱を受けボロボロの状態であった。下層下位(8層)はローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

遺物 少量の遺物が出土した。

時期 中期中葉期(勝坂3式期)。

所見 坑底は明らかに焼けた状態であった。

遺物 (第155図、図版119、第66表)

土器 (第155図、図版119、第66表)

破片資料4点を図示した。1~4は勝坂式の深鉢形土器である。

206号土坑

遺構 (第149図)

位置 (B-1) グリッド。

検出状況 切り合いなし。

構造 平面形:円形。規模:長軸1.03 m/短軸1.01 m/深さ19 cm。長軸方向:N-18°-E。壁:30°~40°で立ち上がる。

覆土 不明。

遺物 覆土上~中層から遺物が出土している。203 D出土の破片と遺構間接合する浅鉢形土器(第155図1)が出土した。

時期 中期中葉期(勝坂3式期)。

遺物 (第155・156図、図版119、第66表)

土器 (第155図1・第156図2～6、図版119、第66表)

復元資料1点、破片資料4点を図示した。1は中期中葉～後葉の浅鉢形土器である。203 D出土の破片と遺構間接合している。赤色顔料が口唇部、内面に多く残存するが、外面は僅かである。内面には赤色顔料による文様が施され、口縁部付近は波状文が見られる。2～4は勝坂式、6は加曾利E式の深鉢形土器である。

207号土坑

遺構 (第149図)

位置 (B-3) グリッド。

検出状況 103 J を切る。

構造 平面形:円形。規模:長軸1.05 m/短軸0.97 m/深さ66cm。長軸方向:N-71°-W。壁:約60°で立ち上がる。

覆土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

遺物 破片の土器、土製品などが出土した。

時期 中期中葉～後葉期(勝坂3～加曾利E1式期)。

遺物 (第156図、図版119、第66・67表)

土器 (第156図1～10、図版119、第66表)

破片資料10点を図示した。1～4は勝坂式、5～8は加曾利E式、9は曾利式の深鉢形土器である。10は加曾利E式の鉢形土器である。

土製品 (第156図11、図版119、第67表)

1点を図示した。11は土器片錘である。

208号土坑

遺構 (第149図)

位置 (C-2) グリッド。

検出状況 切り合いなし。

構造 平面形:楕円形。規模:長軸0.79 m/短軸0.66 m/深さ5cm。長軸方向:N-23°-E。壁:40°～50°で立ち上がる。

覆土 上層(2層)はローム粒子を僅かに含む暗褐色土、中層(3・4層)はローム粒子を多く含み、焼土粒子～小ブロック、炭化物粒子を含む茶褐色～暗茶褐色土を基調とする。中層下位(5層)はローム粒子を多く含み、焼土粒子～小ブロックを多く含む。下層上位(6層)は炭化物粒子を多く含み、焼土粒子～小ブロック、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。下層中央(7層)はロームブロックを含む黄褐色土で、熱を受けボロボロの状態であった。下層下位(8層)はローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

遺物 北西側に土器がややまとまって出土した。

時期 中期中葉期(勝坂3式期)。

遺物 (第156図、図版120、第66表)

[土 器] (第156図、図版120、第66表)

破片資料5点を図示した。1・2は阿玉台Ⅲ式にあたると思われるもの、3～5は勝坂式の深鉢形土器である。1・2と3・4はそれぞれ同一個体と思われる。

209号土坑

遺 構 (第149図)

[位 置] (C-2・3) グリッド。

[検出状況] 104 Jを切る。

[構 造] 平面形:円形。規模:長軸0.66 m/短軸0.62 m/深さ28cm。長軸方向:N-68°-W。壁:約85°で立ち上がる。

[覆 土] 1層と3層はローム粒子を多く含む暗黄褐色土、2層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土である。

[遺 物] 主に中央部分の覆土中層からやや多量の土器、土製品、石器が出土した。

[時 期] 中期中葉～後葉期(勝坂3b～加曾利E1式期)。

遺 物 (第157図・第158図8～10、図版120、第66～68表)

[土 器] (第157図・第158図8、図版120、第66表)

復元資料2点、破片資料6点を図示した。1は口縁部に突起を持つ勝坂3b古式の深鉢形土器である。突起が1単位残存するが、対面にもあったと思われる。口縁部と胴部下半は無文で、胴部上半に文様帯を施文する。文様体内は、平行沈線による三角状の区画を施し、中央に三叉文を付し周囲を押圧文で充填する。また、斜位の平行沈線を充填し、三角押文を横位、斜位に施す。その他、平行沈線による文様を充填する。2は中期中葉～後葉の深鉢形土器で、縦位燃糸Rを地文とする。3は阿玉台式、4～7は勝坂式、8は加曾利E式の深鉢形土器である。

[土 製品] (第158図9、図版120、第67表)

1点を図示した。9は土器片鍾である。

[石 器] (第158図10、図版120、第68表)

1点を図示した。10は打製石斧である。

210号土坑

遺 構 (第149図)

[位 置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 4方に切られる。

[構 造] 平面形:楕円形か。規模:長軸1.16 m/短軸不明/深さ12cm。長軸方向:N-52°-W。壁:約50°で立ち上がる。

[覆 土] 不明。

[遺 物] 土坑確認面より上層から大型の土器破片を含む遺物がまとまって出土した。

[時 期] 中期後葉期(加曾利E1b式期)。

遺 物 (第158図、図版121、第66表)

[土 器] (第158図、図版121、第66表)

破片資料1点を図示した。1は加曾利E式の深鉢形土器である。

211号土坑

遺構(第149図)

位置(C-3)グリッド。

検出状況6方に切られる。

構造平面形:円形か。規模:長軸不明/短軸1.23m/深さ23cm。長軸方向:N-56°-E。壁:約60°で立ち上がる。

覆土焼土粒・炭化物を含む暗褐色土を基調とする。201号土坑の覆土に似る。

遺物少量の遺物が出土した。

時期中期後葉期(加曾利E1~2式期)。

遺物(第158図、図版121、第66表)

土器(第158図、図版121、第66表)

破片資料2点を図示した。1・2は加曾利E式の深鉢形土器である。

212号土坑

遺構(第150図)

位置(C-4)グリッド。

検出状況105Jに切られる。

構造平面形:楕円形か。規模:長軸不明/短軸1.04m/深さ不明。長軸方向:N-22°-W。壁:不明。

覆土ローム粒子を含む黒褐色土で、201号土坑・211号土坑の覆土と類似している。

遺物少量の遺物が出土した。

時期中期中葉~後葉期(勝坂3~中期後葉期)

遺物(第158図、図版121、第66表)

土器(第158図、図版121、第66表)

破片資料2点を図示した。1は勝坂式、2は中期後葉の深鉢形土器である。

213号土坑

遺構(第150図)

位置(C-4)グリッド。

検出状況109J、5・6方に切られる。

構造平面形:楕円形か。規模:長軸不明/短軸1.07m/深さ33cm。長軸方向:N-35°-E。壁:約60°で立ち上がる。

覆土ローム粒子を含む黒褐色土で、201号土坑・211号土坑の覆土と類似している。

遺物少量の遺物が出土した。

時期中期後葉期(加曾利E式期)。

遺物(第158図、図版121、第66表)

〔土器〕(第158図、図版121、第66表)

破片資料2点を図示した。1は加曾利E式、2は曾利式の深鉢形土器である。

214号土坑

〔遺構〕(第150図)

〔位置〕(C-4)グリッド。

〔検出状況〕109J、6方に切られる。

〔構造〕平面形：円形か。規模：長軸1.57m/短軸不明/深さ48cm。長軸方向：N-90°-E。壁：約40°で立ち上がる。

〔覆土〕上層(1・2層)はローム粒子を含み、焼土粒子・炭化物粒子を微量～中量含む黒褐色～暗褐色土を基調とする。下層(3～5層)はローム粒子～小ブロックを多く含み、明褐色～暗茶褐色土を基調とする。3層には焼土粒子・炭化物粒子が僅かに含まれる。

〔遺物〕復元資料2点を含む土器、土製品、石器が覆土上～中層から出土した。

〔時期〕中期中葉期(勝坂3b式期)。

〔遺物〕(第159図、図版121・122、第66～68表)

〔土器〕(第159図1～11、図版121・122、第66表)

復元資料2点、破片資料9点を図示した。1は勝坂3b新式の深鉢形土器である。押圧文を付した隆帯が1本口縁部に巡る。胴部には押圧文を付した隆帯による十字状の文様を施文する。2は勝坂3式の深鉢形土器である。上端に押圧文を付した隆帯が巡り、隆帯上位には沈線による文様が見られる。隆帯下位は無文である。3～9は勝坂式、10は加曾利E式と思われる、深鉢形土器である。7・8は同一個体の可能性がある。11は中期中葉と思われる深鉢形土器である。

〔土製品〕(第159図12、図版122、第67表)

1点を図示した。12は土製円盤である。赤色顔料が少量見られる。

〔石器〕(第159図13・14、図版122、第68表)

2点を図示した。13・14ともに打製石斧である。

215号土坑

〔遺構〕(第150図)

〔位置〕(C-4)グリッド。

〔検出状況〕109J、6方に切られる。

〔構造〕平面形：楕円形か。規模：長軸不明/短軸不明/深さ27～44cm。長軸方向：N-42°-W。壁：60～70°で立ち上がる。

〔覆土〕ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕少量の土器、土製品などが出土した。

〔時期〕中期中葉期(勝坂3式期)。

〔遺物〕(第160図、図版122、第66・67表)

〔土器〕(第160図1・2、図版122、第66表)

破片資料2点を図示した。1・2は勝坂式の深鉢形土器である。

[土製品] (第160図3、図版122、第67表)

1点を図示した。3は土器片錘である。

216号土坑

[遺構] (第150図)

[位置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 219 Dを切り、13 Mに切られる。

[構造] 平面形:円形。規模:長軸1.50 m/短軸1.46 m/深さ37cm。長軸方向:N-6°-E。壁:約40°~50°で立ち上がる。内部に3基のピットを持つ。

[覆土] 上層(3層)はローム粒子を多く含む暗茶褐色土、下層(4層)はローム粒子を多く含み、ローム小ブロックを含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 少量の土器、石器などが出土した。

[時期] 中期中葉~後葉期(勝坂3式~連弧文2 b段階期)

[所見]

[遺物] (第160図、図版122、第66・68表)

[土器] (第160図1~4、図版122、第66表)

破片資料4点を図示した。1は阿玉台式、2は勝坂式、3・4は連弧文土器の深鉢形土器である。

[石器] (第160図5、図版122、第68表)

1点を図示した。5は打製石斧である。

217号土坑

[遺構] (第150図)

[位置] (F-5・6) グリッド。

[検出状況] 223 Dを切り、147 Y、13 Mに切られる。

[構造] 平面形:円形。規模:長軸1.34 m/短軸1.24 m/深さ35cm。長軸方向:N-11°-W。壁:70°~80°で立ち上がる。

[覆土] 上層(2層)はローム粒子・炭化物粒子・炭化物片を含む黒褐色土を基調とし、下層(3層)はローム粒子を多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 大型の土器破片を含む遺物が覆土上~中層から出土した。

[時期] 中期中葉~後葉期(勝坂3式~加曾利E 2式期)。

[遺物] (第160図、図版122、第66表)

[土器] (第160図、図版122、第66表)

破片資料4点を図示した。1は勝坂式、2・3は加曾利E式の深鉢形土器である。4は勝坂式の浅鉢形土器である。

218号土坑

[遺構] (第150図)

[位置] (D-3) グリッド。

〔検出状況〕13 Mに切られる。

〔構造〕平面形：楕円形。規模：長軸1.20 m／短軸0.94 m／深さ34 cm。長軸方向：N-83°-E。壁：50°～60°で立ち上がる。

〔覆土〕上層（1層）はローム粒子を多量、炭化物粒子を微量含む暗茶褐色土、下層（2層）はローム粒子を多量、ローム小ブロックを含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕大型の土器破片を含む遺物が覆土上～中層から出土した。

〔時期〕中期中葉～後葉期（勝坂3式～加曾利E1式期）。

〔遺物〕（第160図、図版122、第66表

〔土器〕（第160図、図版122、第66表

破片資料1点を図示した。1は勝坂3～加曾利E1式の深鉢形土器である。

219号土坑

〔遺構〕（第150図）

〔位置〕（D-3）グリッド。

〔検出状況〕216 D、13 Mに切られる。

〔構造〕平面形：楕円形か。規模：長軸不明／短軸1.22 m／深さ25 cm。長軸方向：N-32°-W。壁：約25°で皿状に立ち上がる。

〔覆土〕上層（2層）・下層（3層）ともローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土を基調とし、下層はローム粒子を多く含む。

〔遺物〕少量の遺物が出土した。

〔時期〕中期中葉期（勝坂3式期）。

〔遺物〕（第161図、図版122、第66表

〔土器〕（第161図、図版122、第66表

破片資料2点を図示した。1は勝坂式の深鉢形土器である。2は勝坂式の浅鉢形土器である。

220号土坑

〔遺構〕（第150図）

〔位置〕（D-3）グリッド。

〔検出状況〕切り合いなし。

〔構造〕平面形：楕円形。規模：長軸0.79 m／短軸0.64 m／深さ26 cm。長軸方向：N-71°-W。壁：50°～60°で立ち上がる。

〔覆土〕ローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕図示できる遺物は出土しなかった。

〔時期〕中期

221号土坑

〔遺構〕（第151図）

〔位置〕（D-3）グリッド。

〔検出状況〕13 Mに切られる。

〔構造〕平面形：楕円形。規模：長軸0.91 m／短軸0.68 m／深さ27cm。長軸方向：N-8°-E。壁：40°～50°で立ち上がる。

〔覆土〕ローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕少量の遺物が出土した。

〔時期〕中期中葉期（勝坂2～3式期）。

〔遺物〕（第161図、図版122、第66表）

〔土器〕（第161図、図版122、第66表）

破片資料2点を図示した。1・2は勝坂式の深鉢形土器である。

222号土坑

〔遺構〕（第151図）

〔位置〕（F-5）グリッド。

〔検出状況〕10 S、13 Mに切られる。

〔構造〕平面形：円形。規模：長軸2.27 m／短軸2.22 m／深さ66cm。長軸方向：N-62°-W。壁：約60°で立ち上がる。

〔覆土〕上層（1・2層）はローム粒子を微量～多量含む暗褐色～暗茶褐色土で、2層には焼土粒子・炭化物を含む。中層（3～5層）はローム粒子を微量～中量、焼土粒子・炭化物粒子を中量～多量含む暗褐色～黒色土を基調とし、4層は小礫を多量含み、4・5層には遺物が多い。下層（6・7層）はローム粒子を多く含む暗茶褐色～暗黄褐色土を基調とし、6層には焼土粒子・炭化物粒子を微量含む。

〔遺物〕復元資料2点を含む土器、土製品、石器などが覆土上～中層から出土した。

〔時期〕中期中葉～後葉期（勝坂3式～加曾利E1式期）。

〔遺物〕（第161図1～7・第162図8～17、図版123・124、第66～68表）

〔土器〕（第161図1～7・第162図8～13、図版123・124、第66表）

復元資料2点、破片資料11点を図示した。1は加曾利E1b式の深鉢形土器である。頸部は無文で、胴部は燃糸しを地文とする。胴部には4本の隆帯が波状に垂下する。2は加曾利E1b式の深鉢形土器である。口縁部区画内には2本1対の隆帯による渦巻文を施す。胴部には隆帯による渦巻文を中心とする文様が見られ、裏面にも渦巻文の一部と思われる隆帯が見られることから、同様の文様が施されたと考えられる。3は阿玉台式、4～7は勝坂式、8～12は加曾利E式、13は曾利式の深鉢形土器である。8・9は同一個体の可能性がある。

〔土製品〕（第162図14・15、図版124、第67表）

2点を図示した。14・15は土器片鍾である。

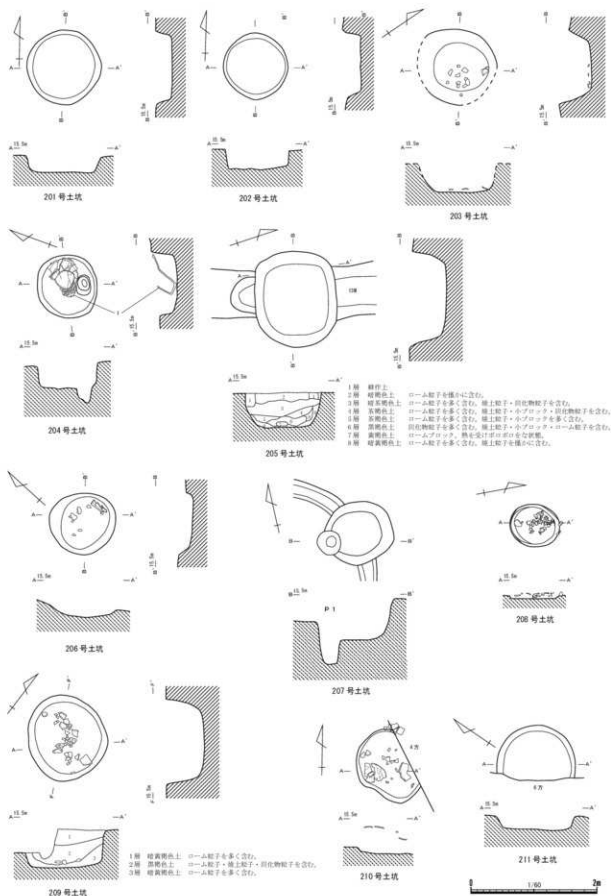
〔石器〕（第162図16・17、図版124、第68表）

2点を図示した。16は打製石斧である。17は敲石である。

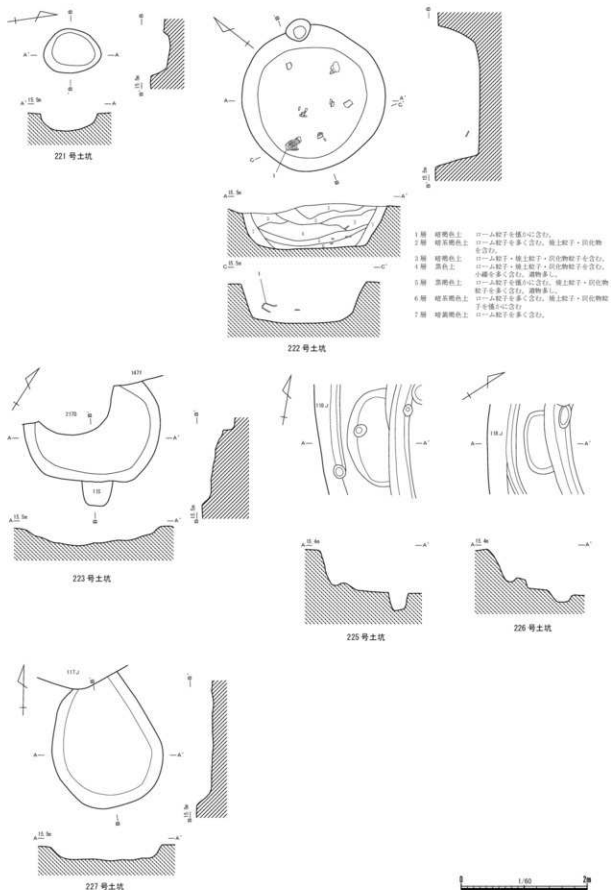
223号土坑

〔遺構〕（第151図）

〔位置〕（F-5・6）グリッド。



第149図 縄文時代土坑1 (1/60)



第151図 縄文時代土坑3 (1/60)

[検出状況] 217 D、11 S、13 Mに切られる。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 2.15 m / 短軸不明 / 深さ 29cm。長軸方向：N-57°-E。壁：約 20°で立ち上がる。

[覆土] ローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 少量の遺物が出土した。

[時期] 中期中葉期（勝坂3式期）。

[遺物] (第162図、図版124、第66表)

[土器] (第162図、図版124、第66表)

破片資料3点を図示した。1は阿玉台式、2・3は勝坂式の深鉢形土器である。

225号土坑

[遺構] (第151図)

[位置] (D-5) グリッド。

[検出状況] 118 Jに切られる。

[構造] 平面形：楕円形か。規模：長軸 1.56 m / 短軸不明 / 深さ 66cm。長軸方向：N-12°-W。壁：約 30°で立ち上がる。

遺構名	グリッド	平面形	規模 (m)			長軸方位	壁	時期
			長軸	短軸	深さ			
201D	B-4	円形	1.18	1.17	0.25	N-4°-E	60~70°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (阿玉台式～曾利1式期)
202D	C-4	円形	1.03	1.00	0.28	N-3°-W	80~90°で立ち上がる	中期後葉期 (加曾利E1式期)
203D	B-1	楕円形か	1.26	1.17	0.51	N-79°-E	60~70°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂2b式期)
204D	D-3	円形	0.99	0.93	0.41	N-63°-E	80~90°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3b新式期)
205D	C・D-2	楕円形	1.53	1.29	0.54	N-77°-W	60~70°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
206D	B-1	円形	1.03	1.01	0.19	N-18°-W	30~40°で皿状に立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
207D	B-3	円形	1.05	0.97	0.66	N-71°-E	約60°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3～加曾利E1式期)
208D	C-2	楕円形	0.79	0.66	0.05	N-23°-E	40°~50°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
209D	C-2・3	円形	0.66	0.62	0.28	N-68°-W	約85°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3b～加曾利E1式期)
210D	B-3	楕円形か	1.16	不明	0.12	N-52°-W	約50°で立ち上がる	中期後葉期 (加曾利E1b式期)
211D	C-3	円形か	不明	1.23	0.23	N-56°-E	約60°で立ち上がる	中期後葉期 (加曾利E1～2式期)
212D	C-4	楕円形か	不明	1.04	不明	N-22°-W	不明	中期中葉～後葉期 (勝坂3～中期後葉期)
213D	C-4	楕円形か	不明	1.07	0.33	N-35°-W	約60°で立ち上がる	中期後葉期 (加曾利E1式期)
214D	C-4	円形か	1.57	不明	0.48	N-90°-E	約40°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3b式期)
215D	C-4	楕円形か	不明	不明	0.27~0.44	N-42°-W	60~70°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
216D	D-3	円形	1.50	1.46	0.37	N-6°-E	40~50°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3式～連文文2b段階期)
217D	F-5・6	円形	1.34	1.24	0.35	N-11°-W	70~80°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3式～加曾利E2式期)
218D	D-3	楕円形	1.20	0.94	0.34	N-83°-E	50~60°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3式～加曾利E1式期)
219D	D-3	楕円形か	不明	1.22	0.25	N-32°-W	約25°で皿状に立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
220D	D-3	楕円形	0.79	0.64	0.26	N-71°-W	50~60°で立ち上がる	中期
221D	D-3	楕円形	0.91	0.68	0.27	N-8°-E	40~50°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂2～3式期)
222D	F-5	円形	2.27	2.22	0.66	N-62°-W	約60°で立ち上がる	中期中葉～後葉期 (勝坂3式～加曾利E1式期)
223D	F-5・6	楕円形	2.15	不明	0.29	N-57°-E	約20°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
224D	欠番							
225D	D-5	楕円形か	1.56	不明	0.66	N-12°-W	約30°で立ち上がる	中期中葉期 (勝坂3式期)
226D	D-5	楕円形か	1	不明	0.62	N-62°-W	約70°で立ち上がる	中期中葉～後葉期
227D	D・E-5・6	楕円形	不明	1.69	0.24	N-25°-W	40~50°で立ち上がる	不明

第65表 縄文時代土坑一覧

〔覆 土〕ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺 物〕少量の土器、土製品などが出土した。

〔時 期〕中期中葉期（勝坂3式期）。

〔遺 物〕（第163図、図版124、第66・67表）

〔土 器〕（第163図1、図版124、第66表）

破片資料1点を図示した。1は勝坂式の深鉢形土器である。

〔土 製品〕（第163図2、図版124、第67表）

1点を図示した。2は土器片錘である。

226号土坑

〔遺 構〕（第151図）

〔位 置〕（D-5）グリッド。

〔検出状況〕118 Jに切られる。

〔構 造〕平面形：楕円形か。規模：長軸1.00 m／短軸不明／深さ62cm。長軸方向：N-62°-W。

壁：約70°で立ち上がる。

〔覆 土〕ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺 物〕少量の土器、石器などが出土した。

〔時 期〕中期中葉～後葉期

〔遺 物〕（第163図、図版124、第66・68表）

〔土 器〕（第163図1、図版124、第66表）

破片資料1点を図示した。1は中期中葉～後葉の土器である。底面のみのため器種は不明である。

〔石 器〕（第163図2・3、図版124、第68表）

2点を図示した。2は打製石斧である。3は石皿である。

227号土坑

〔遺 構〕（第151図）

〔位 置〕（D・E-5・6）グリッド。



第152図 縄文時代土坑出土遺物1（1／3）

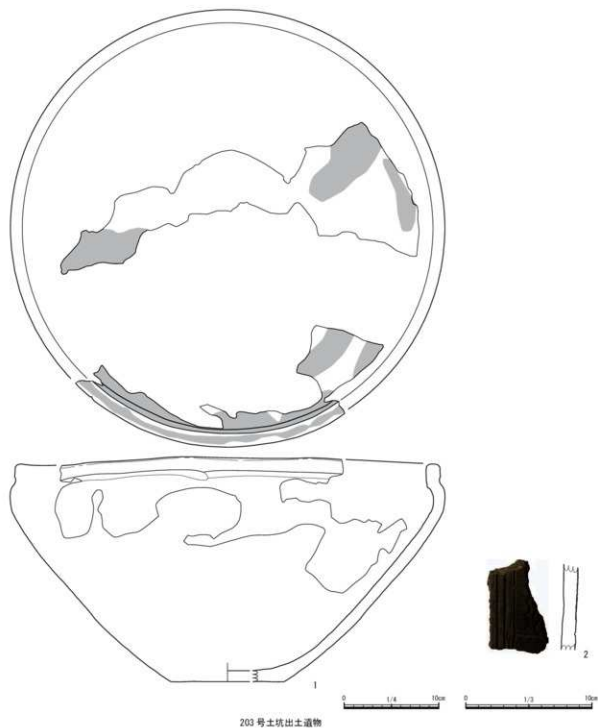
〔検出状況〕 117 J に切られる。

〔構造〕 平面形：楕円形。規模：長軸不明／短軸 1.69 m／深さ 24 cm。長軸方向：N - 25° - W。壁：40°～50°で立ち上がる。

〔覆土〕 ローム粒子を多量に含む暗茶褐色土を基調とする。

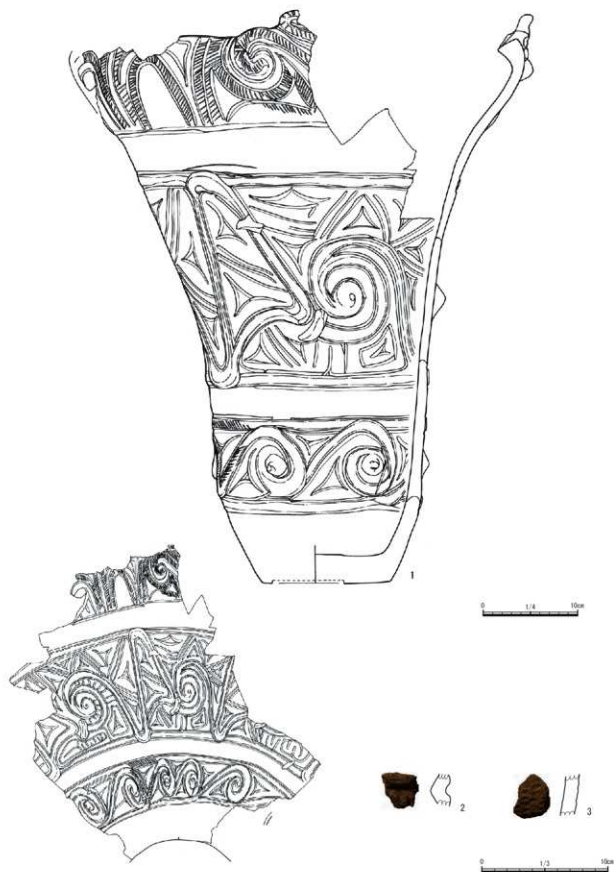
〔時期〕 不明

〔遺物〕 遺物は出土しなかった。



203号土坑出土遺物

第153図 縄文時代土坑出土遺物2（1/4・1/3）



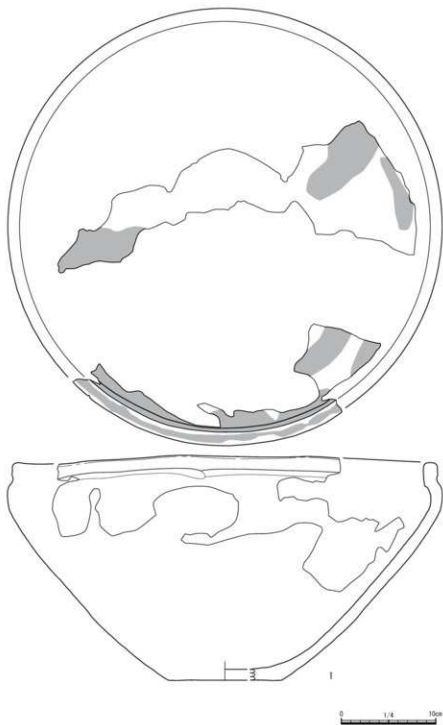
204号土坑出土遺物

第154図 縄文時代土坑出土遺物3 (1/4・1/3)

第3章 検出された遺構と遺物



205号土坑出土遺物

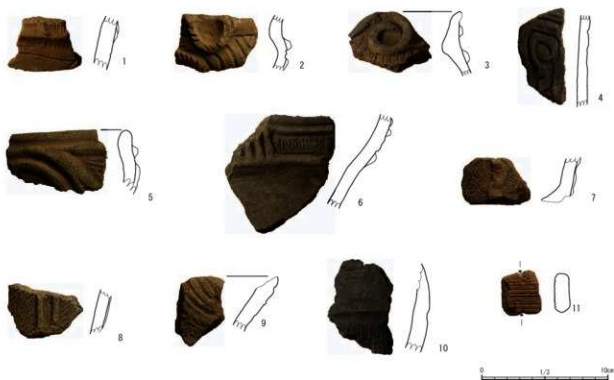


206号土坑出土遺物

第155図 縄文時代土坑出土遺物4（1/4・1/3）



206号土坑出土遺物

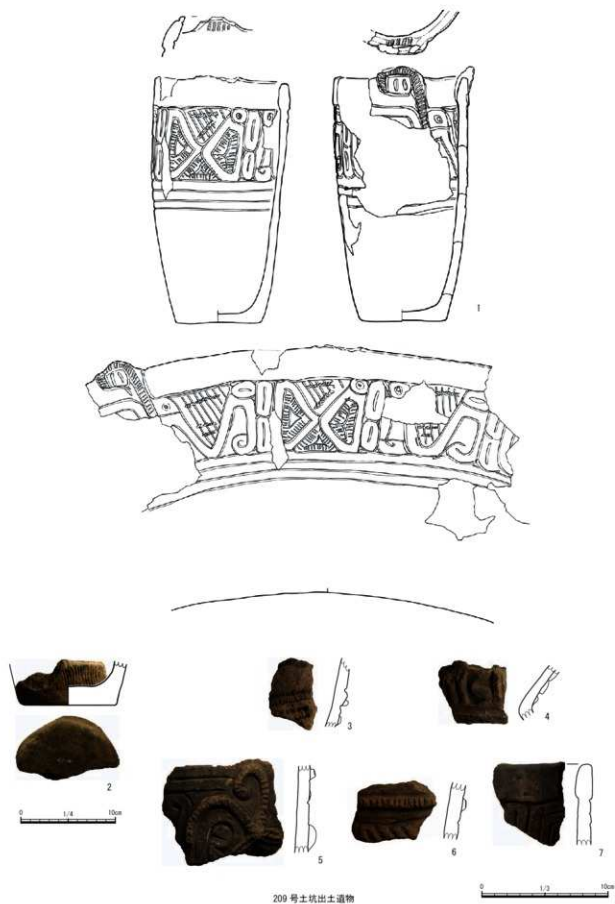


207号土坑出土遺物



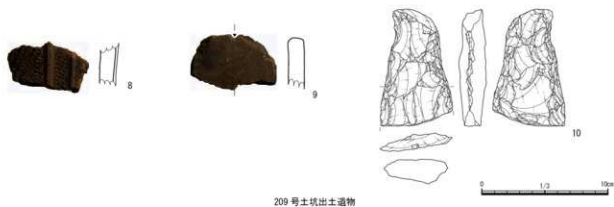
208号土坑出土遺物

第156図 縄文時代土坑出土遺物5 (1/3)

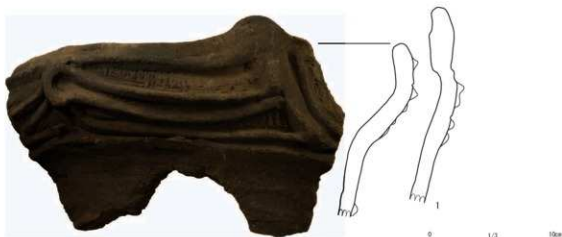


209号土坑出土遺物

第157図 縄文時代土坑出土遺物6 (1/4・1/3)



209号土坑出土遺物



210号土坑出土遺物



211号土坑出土遺物

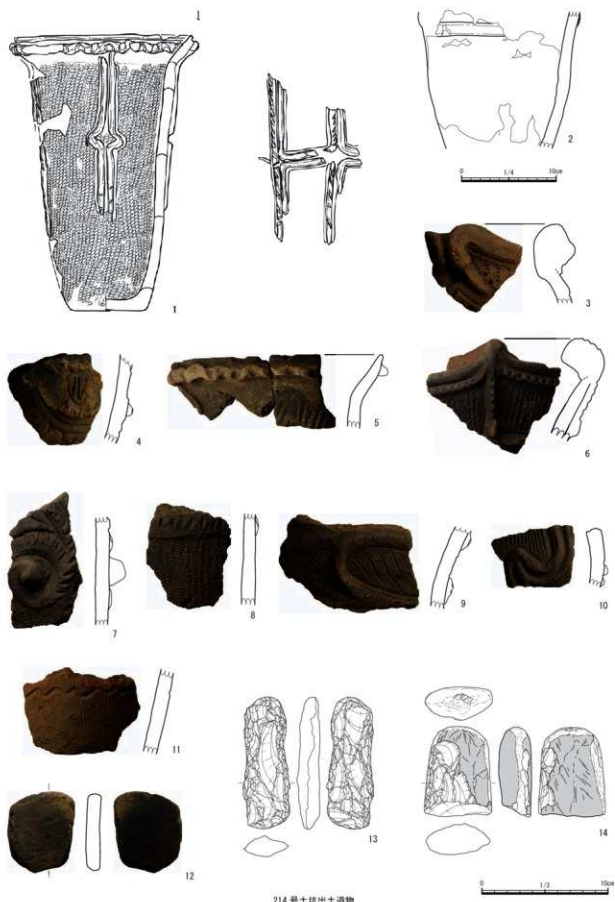


212号土坑出土遺物



213号土坑出土遺物

第158図 縄文時代土坑出土遺物7 (1/3)



214号土坑出土遺物

第159図 縄文時代土坑出土遺物8（1/4・1/3）



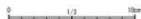
1



2



3



215号土坑出土遺物



1



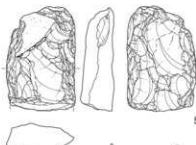
2



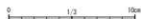
3



4



5



216号土坑出土遺物



1



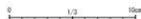
2



3



4



217号土坑出土遺物



1



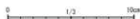
218号土坑出土遺物

第160図 縄文時代土坑出土遺物9 (1/3)

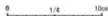
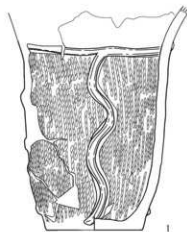
第3章 検出された遺構と遺物



219号土坑出土遺物

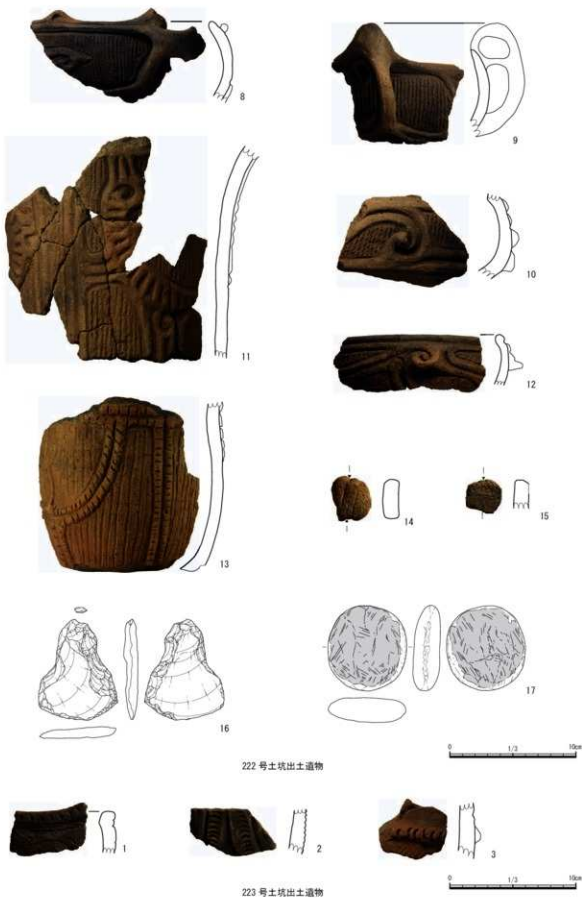


221号土坑出土遺物

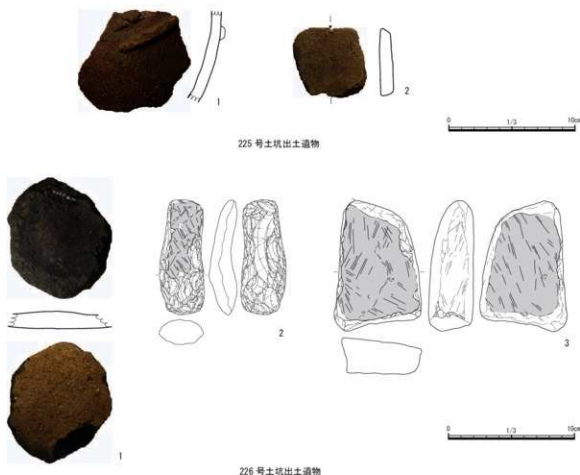


222号土坑出土遺物

第161図 縄文時代土坑出土遺物 10 (1/4・1/3)



第162図 縄文時代土坑出土遺物 11 (1/3)



第163図 縄文時代土坑出土遺物 12 (1/3)

神岡番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第152図1 図版115-1	20D	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾し上位は直立 に立ち上がる口縁 部	押圧文を付した隆帯による口縁部区画/隆帯内側に沿う2 本1対の平行沈線/平行沈線による半円状の文様	明黄褐/砂 粒微量、礫 少量、雲母 多量	阿玉台 皿式
第152図2 図版115-2	20D	深鉢	胴部 破片	厚0.7	やや外傾する胴部	地文は縦位沈線/押圧文を付した2本の隆帯が直状に垂下	褐/砂粒・ 礫微量	曾利I 式
第152図1 図版115-1	20D	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外傾する胴部	地文は単節L縦位/2本1対の直状の沈線が垂下/沈線間 磨消/磨消は沈線外側にもはみ出す	にぶい、褐/ 砂粒微量、 礫少量、赤 褐色の粒を多 く含む	加曾利 E3式
第152図2 図版115-2	20D	深鉢	口縁部付 近 破片	厚0.9	外傾する口縁部付 近	隆帯による渦巻文の一部か	にぶい、黄褐 /砂粒・礫 微量	加曾利 E式か
第152図2 図版115-3	20D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	地文は隠糸L縦位/2本1対の沈線が直状に垂下/破片上 端下端にも横位沈線か	にぶい、黄褐 /砂粒少量、 礫微量	中期後 葉
第153図1 図版116-1	20D	浅鉢	体部~底 部 10%	高(23.0) 口(44.5) 底(12.0) 厚1.2	外傾して広がる り、上位は内湾す る体部/直立する 口縁部/平坦な底 部	残存部外面無文/内側には赤色顔料による文様/底面副代 直無し/203Dと206Dの遺構間接合	暗褐/砂粒 多量、礫微 量	中期中 葉~後 葉
第153図2 図版115-2	20D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	直立する胴部	沈線による区画(平行沈線か)/区画内側に沿って爪形文施 文、内側に半円状刺突文施文	肌/砂粒・ 礫少量	開板2b 式

第66表 縄文時代土坑出土土器一覧1

探検番号 図版番号	出土 遺構	種別 部種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式
第154図1 図版117・ 118	204D	深鉢	口縁部～ 底部 60%	高61.0 口(48.2) 底(13.4) 厚1.2	胴部下位はやや外 傾斜、上位は強く 外反/口縁部は内 湾しながら外傾/ 口唇部は内側に肥 厚/底部は平坦	文様帯が口縁部・胴部中位・胴部下位にみられ、それぞれ には無文帯あり/口縁部に突起が1単位残存/口縁部 文様帯には押印文を付した隆帯による渦巻状の文様・沈線 による逆U字状の文様・三文文、沈線間には押印文施文/ 胴部中位の文様帯は隆帯による三角状の区画と渦巻状の文 様の組み合わせを1単位とした区画が2単位残存(元は3 単位か)、渦巻状の文様の中心は突起状、周囲は沈線によ る区画を設け三文文・交互沈線文・斜位沈線列で充填/胴 部下位の文様帯は隆帯による渦巻状の文様が横位に連なる (渦巻状の文様は5単位)、周囲に三文文を充填、一部隆帯 上に押印文施文/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本の単沈 線が沿う(一部2本の沈線)	褐/砂粒・ 礫少量	勝坂3b 古式
第154図2 図版119-2	204D	深鉢	頸部 破片	厚1.1	括れる頸部	交互刺突文	にぶい赤褐 /砂粒・礫 少量	勝坂3 式
第154図3 図版119-3	204D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外傾する胴部	地文は単部LR縦位	明褐/砂粒 少量、礫 少量	中期中 葉～後 葉
第155図1 図版119-1	205D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外傾する胴部	隆帯による区画か/隆帯に沿って角形文施文	明褐/砂粒 少量、礫 少量	勝坂1 式
第155図2 図版119-2	205D	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外傾する胴部	爪形文を付した隆帯/隆帯脇に爪形文が沿う/隆帯断面カ マボコ状	明褐/砂粒 ・礫微量	勝坂2 式
第155図3 図版119-3	205D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾する胴部	地文は単部LR縦位/押印文を付した隆帯による区画、楕 円状か/隆帯断面カマボコ状	明褐/砂粒少 量、礫微量	勝坂3 式
第155図4 図版119-4	205D	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外反する胴部	押印文を付した隆帯/隆帯の片側に沈線が沿う/隆帯断面 三角状	褐/砂粒・ 礫少量	勝坂3 式
第155図1 図版119-1	206D	浅鉢	体部～底 部 10%	高(23.0) 口(44.5) 底(12.0) 厚1.2	外傾して広がる り、上位は内湾す る体部/直立する 口縁部/平坦な底 部	残存部外面無文/内側には赤色顔料による文様/底面礫代 装無し/203Dと206Dの遺構間接合	暗褐/砂粒 多量、礫 微量	中期中 葉～後 葉
第156図2 図版119-2	206D	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや内湾する口縁部	口縁上部無文/幅広角押文を横位に施文	暗褐/砂粒 ・礫微量	勝坂1 式
第156図3 図版119-3	206D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	2本1対の沈線によるV字状に文様、沈線間押印文施文/ 中心に刺突文のある円形の文様	黒褐/砂粒 中央、礫 微量	勝坂3 式
第156図4 図版119-4	206D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや内湾する胴部	押印文を付した隆帯で面す/2本1対の沈線による文様、 沈線間押印文/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒・ 礫微量	勝坂3 式
第156図5 図版119-5	206D	深鉢	胴部 破片	厚1.5	ほぼ直立する胴部	押印文を付した隆帯による区画/横位隆帯下端に押印文施 文/弧状の隆帯内側に沈線が沿う/隆帯断面カマボコ状	黒褐/砂粒 少量、礫 微量	勝坂3 式
第156図6 図版119-6	206D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外傾する胴部	地文は単部LR縦位/沈線が1本直状に垂下	明赤褐/砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E式
第156図1 図版119-1	207D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外傾する胴部	隆帯を横位に貼付、上端に弧状の隆帯、区画か/隆帯に幅 広角押文と角押文が沿う/僅かに三角押文も見られる/隆 帯断面カマボコ状	明褐/砂粒 ・礫微量	勝坂1a 式
第156図2 図版119-2	207D	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	上位はやや外反 し、下位は内湾す る口縁部	口縁部上部に押印文を付した半弧状の隆帯、突起の一部か /口縁部1cmは無文/押印文を付した隆帯を弧状に貼付 周囲を沈線で充填/隆帯断面カマボコ状	橙/砂粒少 量、礫少 量	勝坂3 式
第156図3 図版119-3	207D	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾する口縁部、 突起部は外傾	口縁部に半円状の突起/突起部は隆帯による渦巻文/隆帯 下位は沈線充填/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒・ 礫少量	勝坂3 式
第156図4 図版119-4	207D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	沈線による区画か、内側に沈線による渦巻文	黒/砂粒少 量、礫微量	勝坂3 式
第156図5 図版119-5	207D	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部	地文は懸糸L縦位/口縁部上端は1本の隆帯で面す、下端 は欠損/2本1対の隆帯を弧状に貼付/隆帯断面カマボコ 状	黄褐/砂粒 ・礫中量	加曾利 E1a式
第156図6 図版119-6	207D	深鉢	口縁部付 近～頸部 破片	厚0.9	外反する頸部/内 湾する口縁部付近	地文は懸糸L縦位/口縁部は上部欠損、下端1本の隆帯で 面す/区画内2本1対の横位隆帯/縦位隆帯が複数/口縁部 区画下端隆帯に向かって直状に垂下/頸部無文/隆帯断面 カマボコ状	にぶい黄褐 /砂粒中量、 礫微量	加曾利 E1b式

第66表 縄文時代土坑出土土器一覧2

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	出土 遺構	種別 種類	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第156図7 図版119-7	207D	深鉢	底部付近 破片	厚0.8	やや外積する胴部	地文は単筋丸縦文/1本の隆帯が直状に垂下/隆帯断面がマボコ状/隆帯は上から押されたようにへこむ部分がある	明濁/砂粒少量、礫微量	加曾利E1c式
第156図8 図版119-8	207D	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外積する胴部	地文は単筋丸縦文/2本1対の隆帯が直状に垂下/断面がマボコ状	にぶい黄褐色/砂粒微量、礫少量	加曾利E1c式
第156図9 図版119-9	207D	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	外積する口縁部	沈線による重弧文	黄濁/砂粒少量、礫微量	曾利皿式
第156図10 図版119-10	207D	鉢	口縁部付近 破片	厚1.3	内湾する口縁部	地文は縦位条線文/幅広の横位沈線で区画、上位は無文	黒/砂粒・礫微量	加曾利E3式
第156図1 図版120-1	208D	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	上位が外積する口縁部/口唇部は外部に肥厚	口縁に1本の沈線と押印文が沿う/縦位の複数の沈線と条線文/208D-1、2は同一個体	明濁/砂粒少量、礫多量、雲母多量	阿玉台皿式か
第156図2 図版120-2	208D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外積する胴部	沈線による渦巻文/渦巻文横に沈線を縦位に施文/渦巻文下に条線文充填/208D-1、2は同一個体	明濁/砂粒少量、礫多量、雲母多量	阿玉台皿式か
第156図3 図版120-3	208D	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	内湾する口縁部/口唇部は内側に肥厚	口縁部無文/頸部に押印文を付した隆帯を1本横位に貼付/隆帯断面がマボコ状/隆帯下端1本の単沈線が沿う/208D-3、4は同一個体の可能性あり	明濁/砂粒少量、礫微量	勝飯3b古式
第156図4 図版120-4	208D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反する胴部	押印文を付した隆帯による区画/沈線による渦巻文、周囲に押印文充填/隆帯幅1本又は2本の沈線が沿う/沈線には押印文が沿う/208D-3、4は同一個体の可能性あり	明濁/砂粒・礫微量	勝飯3b古式
第156図5 図版120-5	208D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	内湾する胴部	押印文を付した弧状の隆帯/沈線による三角状の区画、区画内三叉文、周囲に押印文充填/隆帯には1本の単沈線が沿う	明濁/砂粒・礫中量	勝飯3b古式
第157図1 図版120-1	200D	深鉢	口縁部～ 底部 90% 破片	高27.0 口14.1 底9.0 厚1.0	円筒形/下位はやや外傾し、上位はほぼ直立する胴部/直立する口縁部/口唇部は内側に肥厚	口縁部に突起が1単位あり/突起外面には沈線による長方形区画の中心に2本の縦位沈線を施す、押印文を付した隆帯が周囲を走り先端は胴部へ垂下/突起内面には三角状の区画を施文/突起の対面にも突起があったか/口縁部無文/胴部上半に文様帯、下半の隆帯部分とは横位平行沈線で囲み/文様帯内は平行沈線による区画と文様、三角状の区画中央に三叉文を付し周囲に押印文充填、三角状の区画内に平行沈線を斜位に充填後三角印文を横位に施文	暗赤濁/砂粒少量、礫微量	勝飯3b古式
第157図2 図版120-2	200D	深鉢	胴部下位 ～底部 50% 破片	高14.3 底10.0 厚1.3	やや外積する胴部/平坦な底部	地文は横糸R縦位/底面に副文喪失	明濁/砂粒中量、礫微量	中野中葉～後葉
第157図3 図版120-3	200D	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外積する胴部	隆帯による楕円形又は長方形の区画/2列の角押文	濁/砂粒少量、礫微量	阿玉台皿式
第157図4 図版120-4	200D	深鉢	口縁部下 位～胴部 破片	厚0.7	括れる胴部/外積する口縁部下位	1本の隆帯が被状に垂下/被状の隆帯に左右に直状の隆帯が垂下/隆帯断面がマボコ状(直状の隆帯)、カマゴコ状～三角状(被状の隆帯)/左側直状の隆帯は半截竹管状で工具で上から押さえて貼付	濁濁/砂粒中量、礫微量	勝飯3b新式
第157図5 図版120-5	200D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	押印文又は2列の三角印文を付した隆帯による文様/横位の平行沈線/平行沈線による9字状の文様/隆帯内側に沈線が沿い、中央に交互沈線文施文/隆帯断面がマボコ状、隆帯幅1本の単沈線が沿う	黒濁/砂粒少量、礫微量	勝飯3b式
第157図6 図版120-6	200D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外積する胴部	押印文を付した隆帯を横位に貼付/隆帯幅2本の沈線が沿う/沈線下に三角印文を数列斜位に施文/隆帯断面がマボコ状	濁/砂粒中量、礫微量	勝飯3b式
第157図7 図版120-7	200D	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	ほぼ直立する口縁部	口縁上位無文/平行沈線による文様・区画/区画内には区画に沿って沈線施文	黒濁/砂粒少量、礫微量	勝飯3式
第158図8 図版120-8	200D	深鉢	胴部 破片	厚1.2	ほぼ直立する胴部	地文は単筋丸縦文/2本1対の隆帯が直状に垂下/断面が形状	暗濁/砂粒中量、礫微量	加曾利E1c式
第158図1 図版121-1	210D	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚1.1	外反する胴部/内湾する口縁部	地文は横糸L縦位/口縁部に半円形の突起あり(1単位残存)/口縁部は隆帯によって囲み、上端1本、下端1本/2本1対の隆帯による弧状文、先端に渦巻文/渦巻文下位から隆帯が左右に1本ずつ伸びる/胴部無文/破片下部に付した横位隆帯が見られる/隆帯断面がマボコ状/内面の調整は粗く、粘土帯の痕跡が見られる	にぶい黄濁/砂粒少量、礫微量	加曾利E1b式
第158図1 図版121-1	211D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外反する胴部	地文は横糸L縦位/1本の隆帯を横位に貼付/隆帯断面がマボコ状	濁/砂粒中量、礫微量	加曾利E1式

第66表 縄文時代土坑出土土器一覽3

探検番号 図版番号	出土 遺構	種別 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第158図2 図版121-2	211D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外積する胴部	地文は単節RL縦位/1本の沈線が直状に垂下/1本の沈線が波状に垂下	橙/砂粒少量、礫少量	加曾利E2式
第158図1 図版121-1	212D	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外反する胴部	押印文を付した1本の横位隆帯。上位に弧状の隆帯/隆帯断面カマゴコ状/隆帯脇に1本の単沈線が沿う	明褐色/砂粒少量、礫少量	勝飯3式
第158図2 図版121-2	212D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外積する胴部	地文は懸糸L縦位/3本の沈線を横位に施文	明褐色/砂粒・礫少量	中期後葉 加曾利
第158図1 図版121-1	213D	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	地文は懸糸L縦位/口縁部に突起あり/突起下位から隆帯が2本垂下/隆帯断面カマゴコ状	赤褐色/砂粒・礫少量	加曾利E1b式
第158図2 図版121-2	213D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外反する胴部	地文は縦位条線文/2本1対の隆帯が直状に垂下/隆帯断面カマゴコ状	赤褐色/砂粒少量、礫少量	勝飯Ⅲ式
第159図1 図版121-1	214D	深鉢	口縁部～ 底部	高29.4 口(18.8) 底8.5 厚0.9	外積する胴部/外反する口縁部/平坦な底部	地文は単節RL斜位/口縁部に押印文を付した隆帯が1本横走/押印文を付した隆帯による十字状の文様2単位、十字が2つ繋がった文様1単位/底部に網代痕無し	明褐色/砂粒・礫少量、礫少量	勝飯3b 新式
第159図2 図版121-2	214D	深鉢	胴部 破片	高14.3 厚1.3	内湾する胴部	上端に押印文を付した1本の隆帯が横走/隆帯上位に僅かに沈線による文様が見られる/隆帯下位は無文/隆帯断面カマゴコ状	暗赤褐色/砂粒・礫少量、赤色の粒子を多く含む	勝飯3式
第159図3 図版121-3	214D	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	上位はやや外反、下位は内湾する口縁部	口縁部に突起あり/突起下位から隆帯が伸び区画を形成/隆帯に沿って三角押印文/区画内三角文列を斜位に充填/隆帯断面三角状	明褐色/砂粒中量、礫少量、赤中量	勝飯1b 新式
第159図4 図版121-4	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外積する胴部	押印文を付した隆帯による区画/区画内縦位沈線充填。沈線による渦巻文等の文様を施し沈線間押印文充填/隆帯断面カマゴコ状。隆帯脇平反沈線が沿う	にこい、黄褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3a 式
第159図5 図版121-5	214D	深鉢	口縁部～ 胴部上位	厚0.9	やや外反する胴部/上位/外積する口縁部	地文は単節RL縦位/押印文を付した1本の隆帯が口縁に沿う/隆帯下位2cm幅無文/2本1対の隆帯が直状に垂下/隆帯断面カマゴコ状	暗褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3b 新式
第159図6 図版121-6	214D	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	外積する口縁部/口唇部は内側に肥厚	口縁部に沈線と押印文を付した隆帯が沿う/口縁部頂部から1本の押印文を付した隆帯が直状に垂下、下端は突起状/破片下端に横位隆帯/隆帯断面カマゴコ状、隆帯脇などで付て貼付。一部単沈線が沿う	黒褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3b 新式
第159図7 図版121-7	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は0段多糸RL斜位/一部に押印文を付した隆帯による渦巻文、渦巻文の中心部は突起状/隆帯断面カマゴコ状/214D-7、8は別一物体の可能性あり	黒褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3b 式
第159図8 図版121-8	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は0段多糸RL斜位/押印文を付した隆帯を横位に貼付/隆帯断面扁平な角状/214D-7、8は別一物体の可能性あり	黒褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3b 式
第159図9 図版121-9	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外積する胴部	横位の隆帯を2本貼付し、隆帯間にC字状の隆帯を貼付し楕円状の区画を形成/楕円状区画の隆帯上には押印文を付す/区画内には斜位沈線を充填/隆帯断面カマゴコ状～三角状、隆帯脇1本の単沈線が沿う。沈線無し	暗褐色/砂粒中量、礫少量	勝飯3b 式
第159図10 図版122-10	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや内湾する胴部	地文は懸糸R縦位/隆帯による文様	暗褐色/砂粒少量、礫少量	加曾利E1式か
第159図11 図版122-11	214D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外積する胴部	地文は無節L斜位/1本の横位波状沈線施文	明褐色/砂粒少量、礫少量	中期前葉
第160図1 図版122-1	215D	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/内側に肥厚する口唇部	押印文を付した隆帯をY字状に貼付/隆帯断面台形～カマゴコ状。隆帯脇1本の単沈線が沿う	にこい、黄褐色/砂粒・礫少量	勝飯3式
第160図2 図版122-2	215D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	押印文を付した隆帯が1本直状に垂下/隆帯の左右には沈線による文様・区画施文か/隆帯断面カマゴコ状、隆帯に2本の沈線が沿う	赤褐色/砂粒・礫少量	勝飯3式
第160図1 図版122-1	216D	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	ほぼ直立する口縁部	粘土帯を横位に貼付し成形した突起	褐/砂粒・礫少量、雲母多量	阿玉台1a～b式
第160図2 図版122-2	216D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	地文は懸糸L縦位/押印文を付した隆帯を1本横位に貼付/隆帯断面カマゴコ状	赤褐色/砂粒少量、礫少量	勝飯3b式
第160図3 図版122-3	216D	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	外積する口縁部/口唇部は内側に肥厚	地文は縦位条線文/口縁に3本の沈線が沿う	にこい、黄褐色/砂粒多量、礫少量	連弧文2b段階
第160図4 図版122-4	216D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外積する胴部	地文は懸糸L縦位/沈線を横位に施文/沈線上に刺突文を交互に付し、蛇行文状に成形	黒褐色/砂粒中量、礫少量	連弧文2段階

第66表 縄文時代土坑出土土器一覧4

発掘番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第160図1 図版122-1	217D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	ほぼ直立する口縁部	地文は黒系Ⅰ層位 / 口縁部に沿って青の高い隆帯を貼付し中央に横位沈線を付す	黒 / 砂粒少量、礫微量	勝飯3b 新式
第160図2 図版122-2	217D	深鉢	口縁部～ 頸部 破片	厚 1.2	外反する頸部、内湾する口縁部	地文は単節ⅠL層位 / 口縁部は隆帯によって画す、上端1本、下端1本 / 区内内隆帯による渦巻文 / 頸部無文 / 破片下端に横位沈線	黒褐 / 砂粒中量、礫微量、1cm程の礫あり	加曾利E2a式
第160図3 図版122-3	217D	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部	地文は黒位条線文 / 隆帯による口縁部区画、上端1本 / 隆帯を弧状に貼付 / 隆帯断面方マボコ状	黒褐 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E2式
第160図4 図版122-4	217D	浅鉢	体部 破片	厚 0.9	内湾する体部	隆帯を環状に貼付、隆帯上三角押文充填 / 環状の隆帯右側には縦位沈線、左側には隆帯に沿って押圧文施文 / 隆帯断面方形状 / 破片下位は無文	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫少量	勝飯3式
第160図1 図版122-1	218D	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	ほぼ直立する口縁部	地文は単節ⅠL層位 / 口縁部に沿って1本の沈線施文 / 沈線上位無文	にぶい黄褐色 / 砂粒中量、礫少量	勝飯3～加曾利E1式
第161図1 図版122-1	219D	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	ほぼ直立する胴部	押圧文を付した1本の隆帯が直状に垂下 / 沈線による文様、沈線部に押圧文施文 / 隆帯断面方マボコ状、隆帯臨平沈線が沿う	赤褐 / 砂粒中量、礫微量	勝飯3式
第161図2 図版122-2	219D	浅鉢	体部 破片	厚 1.4	内湾する体部	沈線による文様施文 / 破片下端に爪形施文	褐 / 砂粒中量、礫微量	勝飯3式
第161図1 図版122-1	221D	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	ほぼ直立する胴部	爪形文を付した半隆帯が直状に垂下 / 半隆帯に沿って押圧文施文、施文した押圧文の上に半円形の刺突文を付す / 半隆帯には1本の単沈線が沿う	明褐色 / 砂粒中量、礫微量	勝飯2b式
第161図2 図版122-2	221D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部 / 口唇部は内側に肥厚	口縁部上部に隆帯を円形に貼付、突起状 / 隆帯断面方マボコ状	にぶい黄褐色 / 黒色粒中量、礫少量	勝飯3式
第161図1 図版123-1	222D	深鉢	頸部～底部 80%	高 [23.2] 底 10.2 厚 1.0	キャリアー形か / 外反する頸部 / 下位は内湾し上位はほぼ直立する胴部 / 平坦な底面	地文は黒系Ⅰ層位 / 頸部と胴部を1本の隆帯で画す / 胴部に4本の隆帯が波状に垂下 / 隆帯断面方マボコ状	にぶい黄褐色 / 砂粒中量、礫微量	加曾利E1b式
第161図2 図版123-2	222D	深鉢	口縁部～ 底部 30%	高 35.7 底 (9.0) 厚 1.0	キャリアー形 / やや内湾する頸部 / 括れる頸部 / 内湾する口縁部	地文は単節ⅠL層位 / 口縁部は隆帯によって画す、上端1本、下端1本 / 口縁部区内には2本1対の隆帯による渦巻文 / 頸部無文 / 頸部と胴部を2本1対の横走する隆帯で画す / 左右に2本1対の隆帯を、間に2本1対の隆帯による渦巻文の文様、渦巻文の文様に2本1対の隆帯が直状に垂下・1本の隆帯が波状に垂下 / 渦巻部分から1本の隆帯が波状に垂下 / ほぼ欠損しているが渦巻文の文様は対面にも1単位あると思われる / 隆帯断面方マボコ状	昏 / 砂粒中量、礫少量	加曾利E1b式
第161図3 図版123-3	222D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部	口唇部に押圧文を1列施文 / 口縁に沿って押圧文、角押文を付す / 3列の角押文を波状に施文	明褐色 / 砂粒、礫微量、雲母中量	阿玉台1b式
第161図4 図版123-4	222D	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	ほぼ直立する口縁部	隆帯によるY字状の突起、突起右側には縦位沈線	黒褐 / 砂粒中量、礫微量	勝飯3b式
第161図5 図版123-5	222D	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	やや外反する胴部	押圧文を付した隆帯を横位に貼付、上位に弧状の隆帯を貼付、楕円状の区画か / 区内内隆帯に2本1対の沈線が沿う / 区内内隆帯沈線充填 / 隆帯断面方マボコ状、台形状	灰黄褐 / 砂粒少量、礫微量	勝飯3b式
第161図6 図版123-6	222D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	やや外傾する口縁部	波頂部に隆帯による渦巻文 / 内面波頂部には楕円形の隆帯	明赤褐 / 砂粒少量、礫少量	勝飯3式
第161図7 図版123-7	222D	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	ほぼ直立する胴部	押圧文を付した隆帯を斜位に貼付 / 三文文と思われる文様 / 隆帯断面方マボコ状、隆帯臨2本の沈線が沿う	暗褐 / 砂粒中量、礫微量	勝飯3式
第162図8 図版123-8	222D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部	地文は黒系Ⅰ層位 / 楕状把手1単位現存 / 口縁部に三角状の小突起、沈線による渦巻文を付し沈線は横位に伸びる / 隆帯による口縁部区画 / 区内内に2本1対の隆帯による文様、端部は三角状 / 隆帯断面方マボコ状 / 222D-8、9は同一個体の可能性あり	黒褐 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E1b式
第162図9 図版123-9	222D	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	内湾する口縁部	地文は黒系Ⅰ層位 / 楕状把手1単位現存、把手先端の突起状の部分は左右に孔があり貫通 / 隆帯による口縁部区画 / 222D-8、9は同一個体の可能性あり	黒褐 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E1b式
第162図10 図版123-10	222D	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部	地文は黒系Ⅰ層位 / 隆帯によって口縁部を画す、上端隆帯1本、下端隆帯1本 / 2本1対の隆帯による渦巻文 / 頸部無文 / 隆帯断面方マボコ状	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫少量、礫微量	加曾利E1b式
第162図11 図版123-11	222D	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	上位は外反し下位はほぼ直立する胴部	地文は黒系Ⅰ層位 / 2本の隆帯を弧状に貼付、先端は渦巻状、2本の隆帯間には短い隆帯を棒子状に貼付 / 直状に垂下する隆帯 / 隆帯断面方マボコ状 / 内面下端に黒色の付着物が部状に現存	明褐色 / 砂粒少量、礫微量	加曾利E1b式

第66表 縄文時代土坑出土土器一覽5

縄文番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (m)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第162図 12 図版123-12	222D	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	内湾する口縁部	地文は単節丸縦帯/陰帯による口縁部区画/突起に赤帯 文脈文/区画内2本1対の陰帯による文脈/陰帯断面マ マボコ状、台形状	褐/砂粒・ 礫微量	加曽利 E1c～ 2式
第162図 13 図版124-13	222D	深鉢	頸部～底 部付近 破片	厚1.0	内湾する頸部/外 反する頸部	地文は縦帯沈線/頸部に押圧文を付した陰帯が広がる/頸部 陰帯から押圧文を付した2本の陰帯が直状に垂下/押圧文 を付した2本の陰帯を弧状に貼付し、下端の陰帯から2本 の陰帯が直状に垂下/頸部から1本の陰帯が弧状の陰帯に 向かって弧状に垂下/っ陰帯断面マボコ状、陰帯端1本 の単沈線が沿う/陰帯貼付後に地文の沈線無文	橙/砂粒少 量、礫微量	曾利1 式
第162図1 図版124-1	223D	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	上位はほぼ直立し 下位は内湾する口 縁部	波状口縁文は突起のある口縁部/口縁部に沿って押圧文脈 文/2列の結節沈線が口縁部に沿う/2列の結節沈線による 弧状の文様	黒褐/砂粒 少量、礫 微量、赤 多量	阿玉台 II式
第162図2 図版124-2	223D	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外湾する胴部	平行沈線による区画か/沈線に沿って爪形文脈文、2列の 爪形文の間は三叉文か	灰黄褐/砂 粒中量、礫 微量	勝坂3 式
第162図3 図版124-3	223D	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は単節1R横位施文後単節丸縦帯施文/爪形文を付した 陰帯を1本横位に貼付/陰帯上位無文、下位無文施文/ 陰帯断面マボコ状	明赤褐/砂 粒中量、礫 微量	勝坂3 式
第163図1 図版124-1	225D	深鉢	胴部 破片	厚0.9	内湾する胴部	地文は単節丸縦帯/押圧文を付した陰帯2本を斜位に貼 付/陰帯断面台形状	赤褐/砂粒 中量、礫 微量	勝坂3 式
第163図1 図版124-1	230D	不明	底部 破片	厚1.3	平坦な底部	副代直無し	明褐(外面) 黒(内面)/ 砂粒多量、 礫微量、赤 母多量	中期中 葉～後 葉

第66表 縄文時代土坑出土土器一覽6

縄文番号 図版番号	出土 位置	種別 器種	遺存 状態	長さ/幅/ 厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第156図11 図版119-11	207D	土器 片鏝	完形	3.4/3.1/1.1	16.8	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/条 線文脈文	赤褐/砂粒・礫 中量	中期後葉
第158図9 図版120-9	200D	土器 片鏝	50%	4.3/[6.7]/1.2	45.1	円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利 用/無文	褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第159図12 図版122-12	214D	土製 片鏝	90%	6.2/5.3/1.0	52.6	方形/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/内面に赤色顔料 残存	にぶい黄褐/砂 粒中量、礫 微量	中期中葉 ～後葉
第160図3 図版124-3	215D	土器 片鏝	完形	3.7/3.9/0.9	17.3	方形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/ 地文は単節丸	暗褐/砂粒多量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第162図14 図版124-14	222D	土器 片鏝	80%	[3.4]/[3.3]/1.2	13.3	円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/ 平行沈線による文様	明黄褐/砂粒中 量、礫微量	勝坂式
第162図15 図版124-15	225D	土器 片鏝	80%	[2.6]/[2.7]/1.1	10.1	円形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利 用/丸	にぶい黄褐/砂 粒少量、礫 微量	中期中葉 ～後葉
第163図2 図版124-2	225D	土器 片鏝	80%	[5.7]/[5.4]/0.9	42.7	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利 用/無文	褐/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第67表 縄文時代土坑出土土器製品一覽

縄文番号 図版番号	出土 遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
第158図10 図版120-10	200D	打製石斧	ホルン フェルス	92.2	58.6	22.3	127.5	撥形/基部と刃部は折れて欠損している/両側縁に敲打 剥離が認められる
第159図13 図版122-13	214D	打製石斧	砂岩	105.4	37.7	18.5	86.9	短冊形/両側縁に敲打剥離が認められる/両側縁の中央 部に稜上に潰れが認められる
第159図14 図版122-14	214D	打製石斧	砂岩	72.2	53.8	26.4	147.0	平面形状は不明/基部のみ残存/表裏面ともに原礫面が 広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる/両側縁の ほぼ全面の稜上に潰れが認められる
第160図5 図版122-5	216D	打製石斧	砂岩	82.4	56.4	26.5	159.7	平面形状は不明/基部のみ残存/両側縁に敲打剥離が認 められる
第162図16 図版124-16	222D	打製石斧	ホルン フェルス	79.1	63.2	11.2	47.4	撥形
第162図17 図版124-17	222D	敲石	砂岩	68.1	62.5	20.9	120.8	敲打痕が両側縁にみられる
第163図2 図版124-2	226D	打製石斧	砂岩	137.0	56.1	34.2	279.0	短冊形/両側縁に敲打剥離が認められる/左側縁の上部 から中央部にかけての稜上に潰れが認められる
第163図3 図版124-3	226D	石皿	閃緑岩	104.1	69.2	34.7	391.1	扁平石皿/表裏面はほぼ全面に平坦な使用面

第68表 縄文時代土坑出土土器一覽

(5) 集石

1号集石

遺構 (第164図)

位置 (B-3) グリッド。

検出状況 4方に切られる。

構造 平面形：掘り込みは検出されなかった。断面形：掘り込みは検出されなかった。規模：長軸なし／短軸なし／深さなし。礫の分布：礫が楕円状に分布している。

覆土 不明。

遺物 土器が少量出土した。

時期 中期中葉期(勝坂2～3式期)。

遺物 (第165図、図版125、第69表)

土器 (第165図、図版125、第69表)

破片資料2点を図示した。1は勝坂式、2は中期中葉～後葉の深鉢形土器である。

2号集石

遺構 (第164図)

位置 (C-3) グリッド。

検出状況 切り合いなし。

構造 平面形：楕円形。断面形：たらい状。規模：長軸1.60m／短軸1.26m／深さ25cm。礫の分布：礫は西側にやや多いものの全面に広がり、上層に含まれる。

覆土 不明。

遺物 土器が少量出土した。

時期 中期中葉～後葉期

遺物 (第165図、図版125、第69表)

土器 (第165図、図版125、第69表)

破片資料1点を図示した。1は中期中葉～後葉の深鉢形土器である。

3号集石

遺構 (第164図)

位置 (C-3) グリッド。

検出状況 104 Jに切られる。

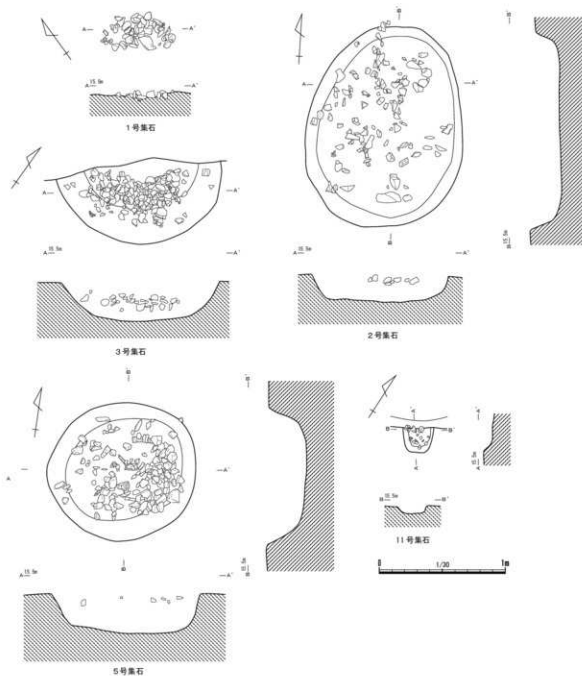
構造 平面形：楕円形か。断面形：椀状か。規模：長軸不明／短軸不明／深さ31cm。礫の分布：104 Jに切られるため全体の分布は不明であるが、残存部ではやや南東側に礫が集中している。また、中層に分布している。

覆土 小炭化材片を含む黒褐色土を基調とする。

遺物 土器が少量出土した。

時期 中期中葉～後葉期(勝坂3式～加曾利E1式期)。

遺物 (第165図、図版125、第69表)



第164図 縄文時代集石（1／30）

〔土 器〕（第165図、図版125、第69表）

破片資料2点を図示した。1は勝坂式の深鉢形土器である。2は勝坂式の浅鉢形土器である。

5号集石

〔遺 構〕（第164図）

〔位 置〕（D-3・4）グリッド。

〔検出状況〕切り合いなし。

〔構 造〕平面形：円形。断面形：椀状。規模：長軸1.17m／短軸1.09m／深さ32cm。礫の分布：掘り込みの中央付近に分布するが、東側から南側にかけて集中する。上層から中層にかけて分布している。

[覆 土] 炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 土器、土製品が出土した。

[時 期] 中期中葉～後葉期（勝坂3式～加曾利E式期）。

[遺 物] (第165図、図版125、第69・70表)

[土 器] (第165図、図版125、第69表)

破片資料3点を図示した。1は勝坂式、2は加曾利E3式と思われるもの、3は中期中葉の深鉢形土器である。

[土 製品] (第165図、図版125、第70表)

1点を図示した。4は土器片鏟である。

11号集石

[遺 構] (第164 図)

[位 置] (F-4) グリッド。

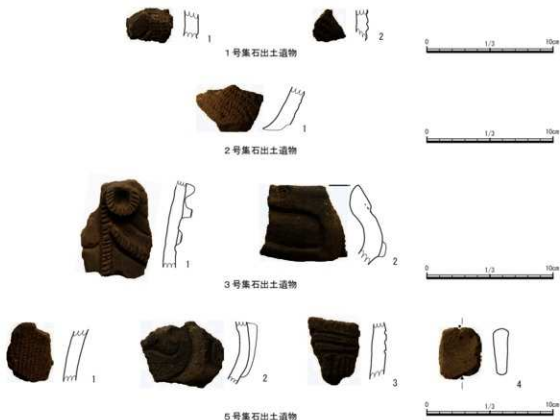
[検出状況] 223 Dに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形か。断面形：皿状。規模：長軸不明／短軸0.47 m／深さ12cm。礫の分布：掘り込み中に広がって分布し、上層に集中している。

[覆 土] 不明。

[遺 物] 土器、石器が出土した。

[時 期] 中期中葉～後葉期



第165図 縄文時代集石出土遺物1 (1/3)

遺物 (第166図、図版125、第69・71表)

[土器] (第166図1、図版125、第69表)

破片資料1点を図示した。1は中期中葉～後葉の深鉢形土器である。

[石器] (第166図2、図版125、第71表)

1点を図示した。2は磨+敲石である。



第166図 縄文時代集石出土遺物2 (1/3)

神田番号 図版番号	出土 遺構	種別 遺存形態	部位	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第165図1 図版125-1	1S	深鉢	胴部 破片	厚0.5	ほぼ直立する胴部	沈線による弧状の文様 / 押圧文無文	黒褐 / 砂粒中量、 礫微量	勝板2 ～3式
第165図2 図版125-2	1S	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は単筋LR縦位	黒褐 / 砂粒・礫 微量	中期中葉 ～後葉
第165図1 図版125-1	2S	深鉢	底部付近 破片	厚1.1	外積する底部付近	地文は単筋RL横位	明褐 / 砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉
第165図1 図版125-1	3S	深鉢	胴部 破片	厚0.9	ほぼ直立する胴部	押圧文を付した隆帯が1本直状に垂下。上端には 隆帯を環状に貼付、直状の隆帯から右側に1本隆 帯が伸びる / 隆帯周辺に沈線による文様無文 / 隆 帯断面台形状、隆帯筋1本の単沈線が沿う	褐 / 砂粒・礫微 量	勝板3式
第165図2 図版125-2	3S	浅鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部	隆帯による方形の区画	暗褐 / 砂粒少量、 礫微量	勝板3式
第165図1 図版125-1	5S	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外反する胴部	地文は0段多条RL斜位	赤褐 / 砂粒・礫微 量	勝板3式
第165図2 図版125-2	5S	深鉢	口縁部付近 破片	厚0.8	内湾する口縁部付 近	地文は単筋RL横位 / 隆帯による区画、文様か / 隆 帯断面方マボコ状	黒褐 / 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E3式か
第165図3 図版125-3	5S	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立する胴部	地文は撚糸R縦位 / 3本1対の沈線が横走	黒褐 / 砂粒中量、 礫微量	中期後葉
第166図1 図版125-1	11S	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外積する胴部	地文は撚糸L縦位	にぶ・黄褐 / 砂 粒少量、礫微量	中期中葉 ～後葉

第69表 縄文時代集石出土土器一覧

神田番号 図版番号	出土 位置	種別	遺存 状態	長さ / 幅 / 厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式
第165図4 図版125-4	5S	土器 片鏝	完形	4.1/3.3/1.1	20.5	方形 / 快部は2ヶ所 / 周縁は磨耗が未発達 / 胴部片利用 無文	橙 / 砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉

第70表 縄文時代集石出土土製品一覧

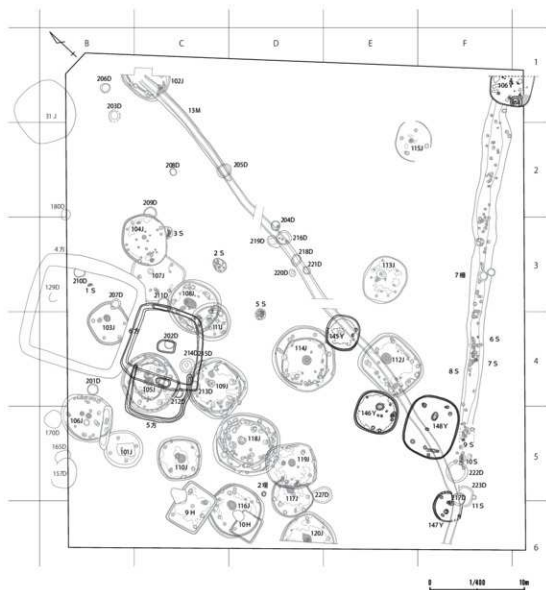
神田番号 図版番号	出土 遺構	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第166図2 図版125-2	11S	磨+敲石	砂岩	94.6	93.9	33.5	335.3	裏面に磨痕 / 敲打痕が右側縁にみられる

第71表 縄文時代集石出土土器一覧

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は住居跡5軒（106・145～148 Y）、方形周溝墓2基（5・6方）を検出した。6方の主体部からガラス製小玉、碧玉製管玉、翡翠製小玉が出土した。



第167図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構全体図（1／400）

(2) 住居跡

106号住居跡

遺構(第168図)

[位置] (F-1) グリッド。

[検出状況] 13 Mに切られる。南側は区画整理第13 I地点で調査済みであり、北東側は調査区外となる。

[構造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸不明/短軸4.47 m/深さ22～52 cm。壁：70～80°で立ち上がる。主軸方位：N-55°-E。壁溝：検出されなかった。床面：壁際、中央付近、貯蔵穴の周囲に硬化面が点在する。炉：検出されなかった。貯蔵穴：南西隅付近に位置し、38×36 cmの円形で、深さは28 cm。北側に高さ1～6 cmの凸堤を有する。柱穴：主柱穴はP1、P2と考えられる。P1は45×32 cmの楕円形で、深さ50 cm。P2は28×24 cmの楕円形で、深さ51 cm。赤色砂利層：貯蔵穴東側に検出された。入口施設：P3が入口施設と考えられる。21×21 cmの円形。掘り方：検出されなかった。

[覆土] 3層(2層～4層)に分層される。ローム粒子を微量～多量含んだ暗黄褐色～黒褐色土をを基調とする(2・3層)。4層は壁寄りに小石を多く含む。

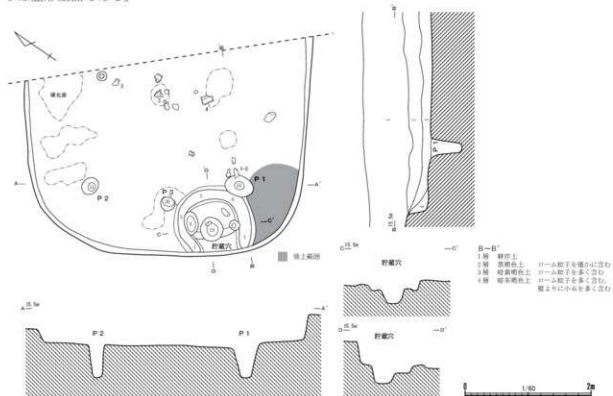
[遺物] 壺(無頸壺含む)・甕形土器が出土した。

[時期] 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭。

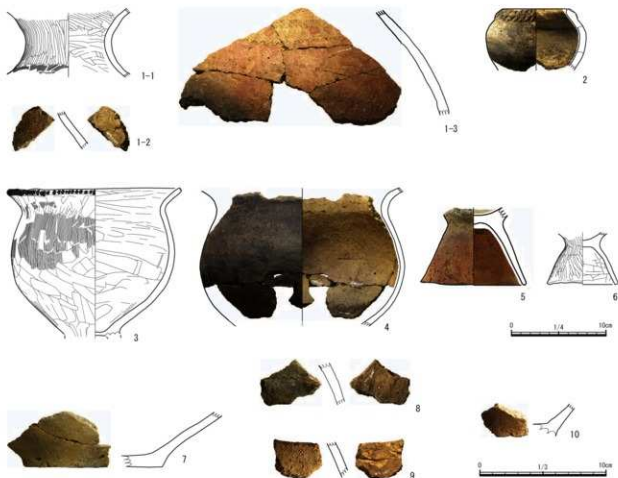
遺物(第169図、図版126、第72表)

[土器](第169図、図版126、第72表)

復元個体6点、破片資料4点を図示した。1は壺形土器で、同一個体と思われる3点を掲載した。2は小形の無頸壺形土器である。3～6・10は甕形土器で3・5・6・10は台付甕形土器である。7～9は壺形土器である。



第168図 106号住居跡(1/60)



第169図 106号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

検出番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第169図1 図版126-1	壺	頸部～ 胴部破片	高 [6.5] (頸部破片のみ) 厚 0.7	頸部は弓なりに外反する	外面：頸部縦位擦磨き。上位に木口状工具による横位のナデ / 胴部無節縄文 L / 胴部無節縄文 L・R・L・R の羽状縄文・下位の L・R の両方にかかるように円形朱彩文 2 個・端未結節の S 字状結節文 S 無節 R 1 段 / 胴部横位。左下がりの刷毛のち縦位。右下がりの擦磨き / 内面：頸部横位・右下がりの木口状工具によるナデのち横位・右下がりの擦磨き / 胴部一部に縦位の木口状工具によるナデ・横位のナデ / 胴部横位のナデ / 赤彩あり / 内面の一部に剝落が見られる	外面：にぶい・黄褐色・赤彩部分ににぶい・赤彩・明赤褐色 / 内面：にぶい・黄褐色・赤彩部分明赤褐色 / 白色粒子多量、赤色粒子、砂粒、小礫微量
第169図2 図版126-2	無頸壺	口縁部～ 胴部 25%	高 [6.6] 口 (7.0) 厚 0.7	胴部は大きく内湾し、口縁部との境は内面に粘土帯による段差が見られる。口縁部は直線的に内傾する	外面：折り返し口縁に 2 段の刻み / 横位のナデのち横位の擦磨き / 内面：口縁部内面輪積み痕より上位は横位の擦磨き、輪積み痕より下位は横位の木口状工具によるナデ	外面：浅黄・暗灰黄 / 内面：浅黄 / 黒色粒子多量、白色粒子、赤色粒子、砂粒、小礫少量
第169図3 図版126-3	台付壺	口縁部～ 胴部 80%	高 [15.6] 口 18.2 厚 0.7	胴部はあまり強らず。緩やかなくの字に屈曲する頸部から口縁部は直線的に開き、最大径を呈す	外面：口唇部に単節縄文 RL の押捺による刻み、口縁部に右下がりの木口状工具によるナデ。胴部から胴部には縦位の細かい刷毛と胴部中位には横位もしくは右下がりナデ。接合部付近には縦位の細かい刷毛 / 内面：口縁部から胴部の一部まで横位の刷毛。胴部は主に横位のナデ、接合部付近に刷毛が一部みられる / 胴部下端に煤状の付着物あり	外面：黄褐色・黒褐色 / 内面：浅黄褐色・黒褐色 / 白色粒子、赤色粒子、砂粒、小礫少量
第169図4 図版126-4	甕	口縁部～ 胴部 20%	高 [14.3] 厚 0.5	胴部はややつぶれた球胴状で、頸部は弓なりに外反する	外面：頸部に横位の刷毛 / 胴部縦位の刷毛のち横位のナデ / 胴部横位と右下がりの刷毛と一部に横位のナデ / 胴部下位の一部分に縦位の刷毛 / 内面：口縁部から頸部横位の刷毛 / 胴部から胴部に横位のナデ、胴部中心一部に右下がり / 左下がりの木口状工具によるナデ / 胴部下位の一部分に右下がりの刷毛	外面：褐色 / 内面：にぶい・黄褐色 / 白色粒子多量、赤色粒子、砂粒少量、小礫微量

第72表 106号住居跡出土土器一覽1

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第169図5 図版126-5	台付甕	接合部～ 脚台部 破片	高 [8.2] 脚 11.2 厚 0.8	脚台部は直線的に ハの字形に開く	外面：接合部と脚台部下端には横位のナデ、ほかの脚台部には縦位のナデ / 内面：木口状工具による横位のナデ	外面：淡赤橙・灰白 内面：にぶい橙 / 白色粒子、赤色粒子、 砂粒、小礫少量
第169図6 図版126-6	台付甕	接合部～ 脚台部 破片	高 [5.5] 脚 7.8 厚 0.4	脚台部は上部がわずかに内湾して開く	外面：接合部には丁寧な縦位の隠書き、脚台部には横位のナデののち縦位の隠書き / 内面：接合部は指頭によるナデ、脚台部には横位の細かい刷毛 / やや小型	外面：にぶい黒・黒 内面：橙・赤黒 / 白色粒子多量、砂粒、 小礫少量
第169図7 図版126-7	甕	胴部～ 底部 破片	高 [4.1] 底 (8.0) 厚 0.7	底部から直線的に大きく開いて立ち上がる	外面：縦位のナデ / 内面：横位のナデ / 粗粒斑あり	外面：灰黄 内面： 浅黄 / 白色粒子、砂 粒、小礫多量
第169図8 図版126-8	甕	胴部 破片	厚 0.7	直線的に内挿する	外面：単脚 LR・S 字状結節文 L・LR の3段の縄文 / 内面：横位のナデ / 赤彩あり	外面：暗オリーブ 内面：暗灰黄 / 白色 粒子、砂粒、小礫少 量
第169図9 図版126-9	甕	胴部 破片	厚 0.6	直線的に内挿する	外面：単脚 LR・RL の3段の羽状縄文 / 内面：横位のナデ	外面：にぶい橙 内 面：灰褐 / 赤色粒子 多量、砂粒、小礫少 量
第169図 10 図版126-10	甕	底部 破片	厚 0.6	底部から直線的に開く	外面：縦位の刷毛ののち横位の隠書き / 内面：横位のナデ	外面：にぶい橙 内 面：にぶい橙 / 白色 粒子、赤色粒子多量、 砂粒、小礫少量

第72表 106号住居跡出土土器一覽2

145号住居跡

遺 構 (第170図)

[位 置] (E-4) グリッド。

[検出状況] 114 J を切り、13 M に切られる。

[構 造] 平面形：円形。規模：長軸 3.72 m / 短軸 3.53 m / 深さ 44～49cm。壁：65～80°で立ち上がる。主軸方位：N-35°-W。壁溝：住居西側に半周程確認された。上幅 14～23cm・下幅 6～8cm / 床面からの深さ 4～7cm。床面：壁際、炉の周辺を除き硬化している。炉：地床炉。住居中央のやや北寄りに位置する。長軸 66cm × 短軸 50cm の焼土範囲が確認された。貯蔵穴：住居南東側に位置し、36 × 25cm の楕円形で、深さ 8cm。凸堤は伴わない。柱穴：主柱穴は検出されなかった。赤色砂利層：検出されなかった。入口施設：P1 が入口施設と考えられる。30 × 21cm の楕円形で、深さ 25cm。掘り方：検出されなかった。

[覆 土] 4層 (2～5層) に分層される。上層 (2層) にはローム粒子を含む暗褐色土、中層 (3層) にはローム粒子を多く含む焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層 (4層) はローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

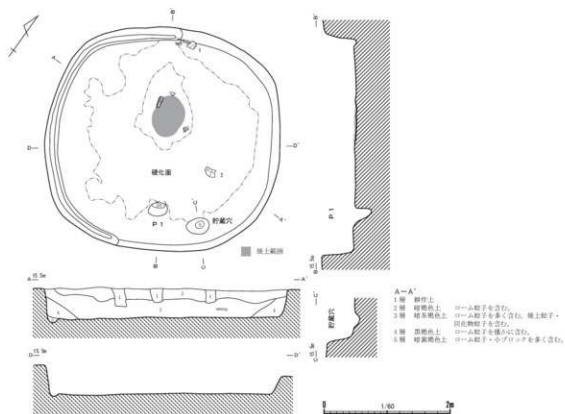
[遺 物] 壺 (無頸壺含む)・甕形土器が出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

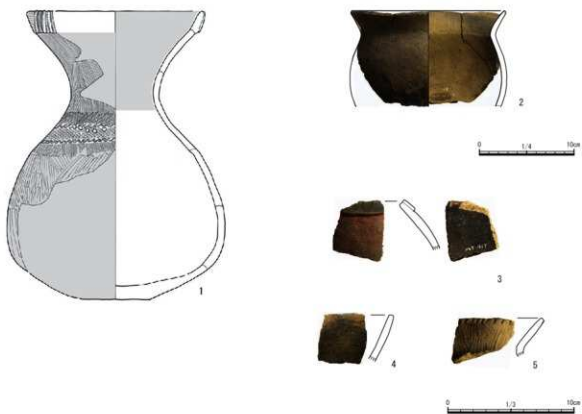
遺 物 (第171図、図版127-1、第73表)

[土 器] (第171図、図版127-1、第73表)

復元個体2点、破片資料3点を図示した。1は壺形土器、2はやや小形の甕形土器、3は無頸壺形土器である。4は壺形土器、5は甕形土器である。



第170図 145号住居跡(1/60)



第171図 145号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第171図1 図版127-1-1	壺	口縁部～ 底部 25%	高 [30.5] 口 (18.6) 底 (7.2) 厚 0.7	胴部は中位よりやや下に最大径を持ち、頸部は緩やかな弓なりに外反する。口縁部は複合口縁を呈す	外面：複合口縁の口縁帯に横位の刷毛ののち棒状貼付文が4本残存/頸部は縦位の刷毛/肩帯には上から無節縄文Lが1段、原体LのS字状結節文が1段、単節縄文R Lが1段、原体RのS字状結節文が1段いずれも横位に施文/上位のS字状結節文の付近に1単位5個(残存3個、遺跡2個)の円形貼付文あり、ほかに4個の円形貼付文が残存/胴部は施文部分の直下に縦位の刷毛、その下に横位の刷毛ののち縦位のと左下がりの磨き/内面：木口状工具による横位のナデ/全体的に摩滅している	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙/砂粒・小礫多量
第171図2 図版127-1-2	甕	口縁部～ 胴部 25%	高 [10.2] 口 (16.4) 厚 0.6	胴部はあまり強らず頸部はくの字に屈曲し、直線的に開く。口径と胴部最大径はほぼ同じ	外面：口縁部に刷毛状工具による刻み、口縁部から頸部まで縦位の細かい刷毛、胴部は右下がりの細かい刷毛/内面：口縁部から頸部の屈曲部分のやや下まで横位の刷毛、胴部は木口状工具による横位のナデ/胴部下位に煤状の付着物あり	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙/赤色粒子、砂粒、小礫少量
第171図3 図版127-1-3	無頭遺	口縁部～ 胴部 破片	厚 0.7	わずかに湾曲して内積する	外面：口縁端部に横位のナデ、口縁帯に横位の刷毛ののち、無節Lの網目状態糸文を横位に施文する。胴部は横位のナデののちに横位の磨き/内面：横位の木口状工具による横ナデ/口縁帯以外の外面と口縁端部、内面に赤彩あり	外面：口縁帯 黒・赤彩部分 赤 内面：黒褐/白色粒子多量、砂粒、赤色粒子少量
第171図4 図版127-1-4	壺	口縁部 破片	厚 0.6	わずかに湾曲して開く	外面：口縁端部に単節縄文LR、横位のナデののち、横位の磨き/内面：横位のナデのち横位の磨き	外面：明赤褐・黒褐 内面：明赤褐/小礫・砂粒、白色粒子少量
第171図5 図版127-1-5	甕	口縁部 破片	厚 0.5	頸部は屈曲して直線的に開く	外面：口縁部に刻み、主に縦位のやや粗い刷毛/内面：横位の細かい刷毛	外面：にぶい黄 内面：にぶい黄橙・にぶい黄褐/砂粒・白色粒子・赤色粒子少量

第73表 145号住居跡出土土器一覽

146号住居跡

遺 構 (第172図)

[位 置] (E-4・5) グリッド。

[検出状況] 112 J を切る。

[構 造] 平面形：円形。規模：長軸 4.56 m / 短軸 4.43 m / 深さ 0.24 ~ 0.31 cm。壁：約 70° で立ち上がる。主軸方位：N - 62° - E。壁溝：全周する。上幅 16 ~ 27 cm・下幅 3 ~ 9 cm・床面からの深さ 3 ~ 11 cm。床面：壁際、炉の周辺を除き硬化している。炉：地床炉。住居中央のやや北寄りに位置する。長軸 79 cm × 短軸 65 cm の焼土範囲が確認された。貯蔵穴：住居南側で確認され、37 × 34 cm の円形で、深さ 19 cm。凸堤は伴わない。柱穴：不明である。赤色砂利層：検出されなかった。

入口施設：P 1 が入口施設と考えられる。38 × 27 cm の円形で、深さ 14 cm。掘り方：検出されなかった。

[覆 土] 6 層 (6 ~ 11 層) に分層される。上層から下層まで、ローム粒子を微量 ~ 多量に含む暗褐色 ~ 暗黄褐色土 (6、8 ~ 10 層) が堆積する。7 層 (ローム再堆積) に見られるように西側半分は埋め戻された状態がみとれる。西側半分にはロームの埋土は床面まで及ぶ。2 ~ 5 層は後世のビットである。

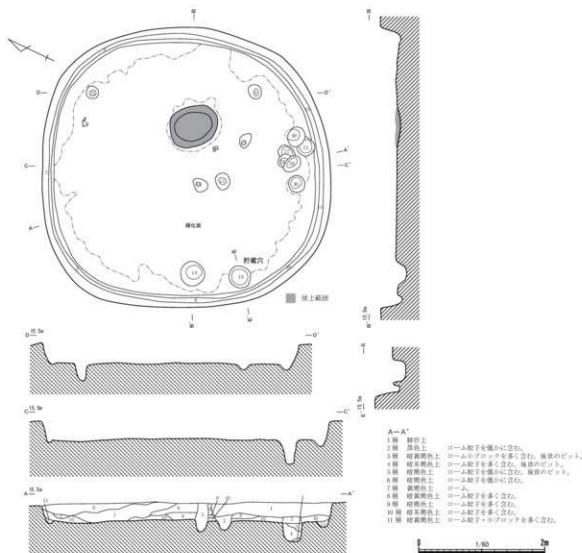
[遺 物] 壺形土器が出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉 ~ 古墳時代前期初頭。

遺 物 (第173図、図版127-2、第74表)

[土 器] (第173図、図版127-2、第74表)

復元個体 1 点を図示した。1 は壺形土器である。



第172図 146号住居跡(1/60)



第173図 146号住居跡出土遺物(1/4)

発掘番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土・色調
第171図1 図版127-2- 1	壺	頸部～ 肩部 破片	高[10.7] 厚0.8	直線的な頸部から 外反した頸部は直 立する	外面：頸部縦位擦磨き・肩部S字状結節文S無筋L3段・車筋 縄文RL・LRの羽状縄文・LRの上に1単位6個以上の円形粘 付文・S字状結節文S無筋L3段・車筋縄文RL・LRの羽状縄 文/内面：頸部左下がり擦磨き・肩部縦位擦磨き・横位・右下 がりナデ/赤彩あり	外面：浅黄褐色・赤彩 部分にふい赤褐色 内 面：淡黄・赤彩部分 にふい赤褐色/白色粒 子、赤色粒子多量、 砂粒、小礫少量

第74表 146号住居跡出土土器一覧

147号住居跡

遺構 (第174図)

[位置] (F-5・6) グリッド。

[検出状況] 217 Dを切り、13 Mに切られる。攪乱が著しい。

[構造] 平面形:円形か。規模:長軸不明/短軸 2.03 m/深さ 12～18cm。壁:約 50°で立ち上がる。主軸方位: N-35°-W。壁溝:住居北側に検出された。上幅 17～24cm・下幅 5～9cm・床面からの深さ 1～6cm。床面:硬化面は検出されなかった。炉:検出されなかった。貯蔵穴:検出されなかった。柱穴:主柱穴は P 1、P 2、P 3と考えられる。P 1は 38×32cmの楕円形で、深さ 15cm。P 2は 27×25cmの円形で、深さ 22cm。P 3は 36×24cmの楕円形で、深さ 13cm。赤色砂利層:検出されなかった。入口施設:検出されなかった。掘り方:検出されなかった。

[覆土] ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 図示できる遺物は検出されなかった。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

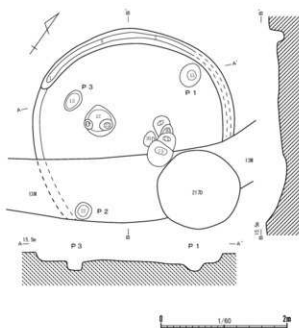
148号住居跡

遺構 (第175図)

[位置] (E・F-4・5) グリッド。

[検出状況] 13 Mに切られる。

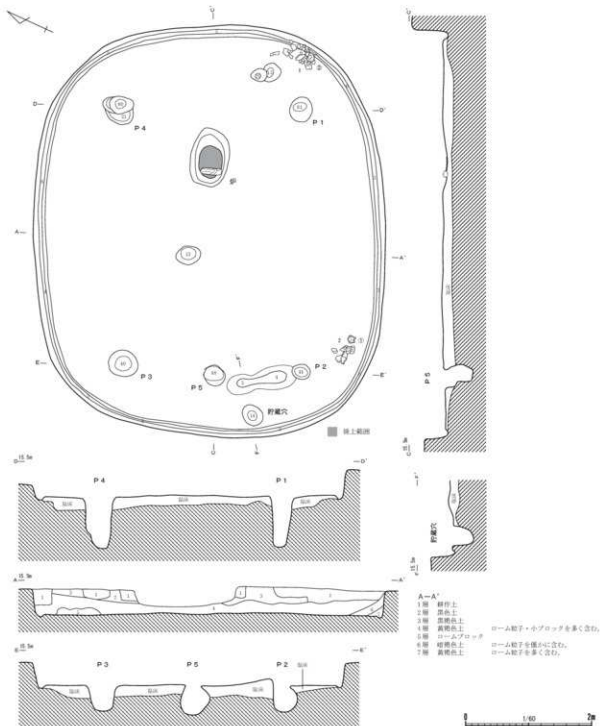
[構造] 平面形:隅丸方形。規模:長軸 6.52 m/短軸 5.61 m/深さ 32～37cm。壁:約 85°で立ち上がる。主軸方位: N-63°-E。壁溝:全周する。上幅 12～20cm・下幅 2～7cm・床面からの深さ 6～8cm。床面:床面は全面が非常に硬化している。炉:地床炉。住居中央のやや東寄りに位置し、礫 1点が出土した。貯蔵穴:住居南西側の壁際に位置し、35×



第174図 147号住居跡 (1/60)

27cmの楕円形で、深さ14cm。東側に高さ4cmの凸堤を有する。柱穴：主柱穴はP1、P2、P3、P4の4本と考えられる。P1は39×35cmの楕円形で、深さ81cm。P2は28×23cmの楕円形で、深さ44cm。P3は47×41cmの楕円形で、深さ40cm。P4は長軸不明×33cmの楕円形と思われ、深さ80cm。赤色砂利層：検出されなかった。入口施設：P5が入口施設と考えられる。34×29cmの楕円形で、深さ48cm。掘り方：住居全体に6～19cmの深さの掘り込みが確認できた。

[覆土] 6層に分層される。上層(2・3層)は黒～黒褐色土を基調とする。中層(4層)はローム粒子・小ブロックを多く含む黄褐色土を基調とする。下層(6・7層)はローム粒子を微量～多量含む黄褐色



第175図 148号住居跡(1/60)

～暗黄褐色土を基調とする。住居下半に床面まで届くロームの堆積（5層）があり、埋め戻しが想定される。

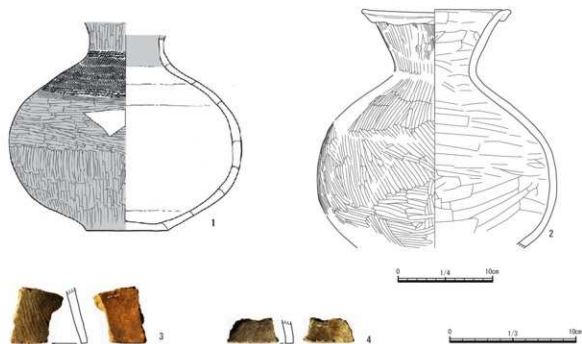
〔遺物〕壺・甕形土器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

〔遺物〕(第176図、図版127-3、第75表)

〔土器〕(第176図、図版127-3、第75表)

復元個体2点、破片資料2点を図示した。1・2は壺形土器、3・4は台付甕形土器である。



第176図 148号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

種別番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第176図1 図版127-3-1	壺	頸部～胴部 80%	高 [22.0] 底 8.7 厚 0.8	つぶれた球胴型の 胴部から頸部はほぼ 直立する	外面：頸部横位のナデで赤彩される / 胴部上から原体RのS 字状結筋文3段、単筋縄文LRの横位、縦位の繰り返しの羽 状縄文が5段、羽状縄文の3段目に円形朱彩文がほぼ等間隔 に11個残存、原体RのS字状結筋文が3段施文され、直下に 横位の刷毛 / 胴部上位は横位、中位は縦位の擦書き、下位は横 位のナデで下端に縦位の刷毛の痕跡を残し赤彩される / 内面： 横位のナデで頸部は赤彩される	外面：にぶい黄褐色・ 赤彩部分赤褐色 内面： にぶい黄褐色・赤 彩部分赤褐色 / 赤色粒 子多量
第176図2 図版127-3-2	壺	口縁部～ 胴部 40%	高 [25.2] 口 15.9 厚 0.7	胴部はややつぶれた 球胴型で、縦やか なくの字に屈曲 する頸部から直線 的に開く 口縁部 は折り返し口縁を 呈する	外面：折り返し口縁部は横位の刷毛のち横位のナデ / 口 縁部には縦位の刷毛 / 胴部・胴部とその付近は縦位の擦書き / 胴部は右下がりの擦書きで一部に横位、胴部下端付近に縦位 の擦書き / 内面：口縁部は横位の刷毛のち横位の擦書き / 胴 部とその付近は横位の刷毛のち横位のナデ / 胴部から胴部は 横位のナデ	外面：明黄褐色 内面： 黄褐色 / 白色粒子多量、 赤色粒子、砂粒、小 礫少量
第176図3 図版127-3-3	台付甕	脚台部 破片	厚 0.6	直線的に開く	外面：右下がり刷毛のち一部にナデ / 内面：横位のナデ	外面：黄褐色 内面： 明褐色 / 小礫・砂粒中 量、白色粒子少量
第176図4 図版127-3-4	台付甕	脚台部 破片	厚 0.6	わずかに内湾して、 やや直立して開く	外面：木口状工具による横位のナデ / 内面：木口状工具による 横位のナデ	外面：灰黄褐色 内面： 灰白 / 小礫・砂粒中 量、白色粒子・赤色 粒子少量

第75表 148号住居跡出土土器一覧

(3) 方形周溝墓

5号方形周溝墓

遺 構 (第177図)

[位 置] (B-4・5、C-4・5) グリッド。

[検出状況] 105 J、213 Dを切る。

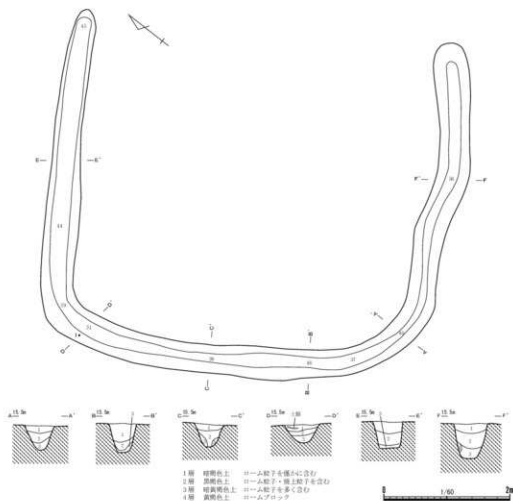
[構 造] 規模：長軸6.63 m／短軸5.82 m。主体部規模：不明。溝：住居との重複のため西側の溝の確認は困難であった。コ字状の形態になるのか。上幅34～54 cm、下幅9～30 cm、深さ28～53 cm。溝底はしっかりしている。南側の溝がやや蛇行する。

[覆 土] 4層に分層される。上層(1層)はローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。中層(2層)はローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。下層(3・4層)は暗黄褐色～黄褐色土を基調とし、3層には多量のローム粒子、4層にはロームブロックを含む。

[遺 物] 壺形土器が出土し、三叉文の描かれた「記号土器」(第178図1)が溝内から出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

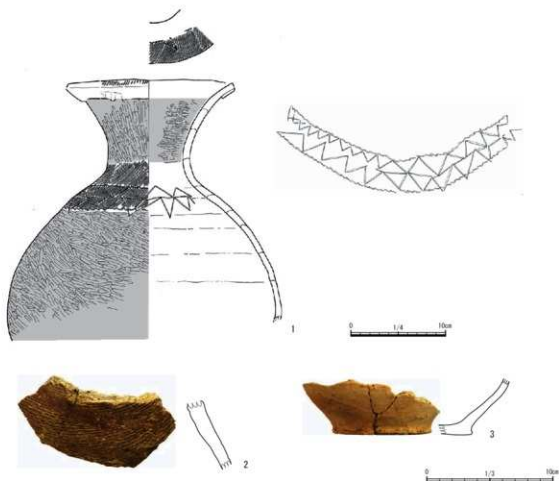
遺 物 (第178図、図版128、第76表)



第177図 5号方形周溝墓 (1/60)

[土器] (第178図、図版128、第76表)

復元個体1点、破片資料2点を図示した。1～3はいずれも壺形土器で、1は口縁部内面の縄文施文部分に三叉文の「記号」が描かれている。2は遺構外出土の破片(第204図103-1～3)と同一個体の可能性がある。



第178図 5号方形周溝墓出土遺物(1/4・1/3)

神岡番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第178図1 図版128-1	壺	口縁部～ 胴部 40%	高29.0 口(17.3) 厚0.8	胴部はやや下膨れ 気味を呈すと思われ、ゆるやかに外 反する頸部から折 り返し口縁を呈す	外面：口縁部は複合口縁で口縁端面に単節縄文L Rが施文され、口縁部下側に粗い連続した押圧のち横位の刷毛が施される / 頸部は主に縦位の節書き / 胴部は単節縄文L Rが1段と原形Rの端未結束のS字状結節文が1段の組み合わせが2節施文され、下段の単節縄文とS字状結節文の上に2段の縦刷毛が先端が鋭い工具で施文される / 縦刷毛の間に縦位の沈線が手廻くくらい通る / 胴部は主に右下がりの節書き / 内面：口縁部に単節縄文L Rと原形RのS字状結節文が1段ずつ施文され、縄文の上から三叉文の「記号」が描かれている / 頸部は横位のナデで赤彩される / 胴部は横位のナデ	外面：にぶい黄褐色・ 赤彩部分暗赤 内面： にぶい黄褐色～赤褐色 / 赤色粒子・砂粒微量
第178図2 図版128-2	壺	胴部 破片	厚1.1	直線的に開く	外面：上から原形Rの節書きが1段、原形RのS字状結節文が1段、横位の節書き部分が赤彩され、原形Rの節書きが1段、原形RのS字状結節文が1段、原形Rの節書きが1段 / 内面：横位のナデ / 遺構外出土の破片(第204図103-1～3)と同一個体の可能性がある	外面：にぶい黄褐色・ 赤彩部分にぶい赤褐色 / 内面：にぶい黄褐色 / 白色粒子、小礫少量、 砂粒、赤色粒子微量
第178図3 図版128-3	壺	底部 破片	高13.9 底7.8 厚0.6	やや内湾して開く	外面：胴部には横位の節書き、底部に近づくと縦位の刷毛のち横位のナデ / 底面は木口工具によるナデ / 内面：横位のナデ	外面：浅黄褐色 内面： 明褐色 / 白色粒子多 量、小礫、砂粒少量

第76表 5号方形周溝墓出土土器一覽

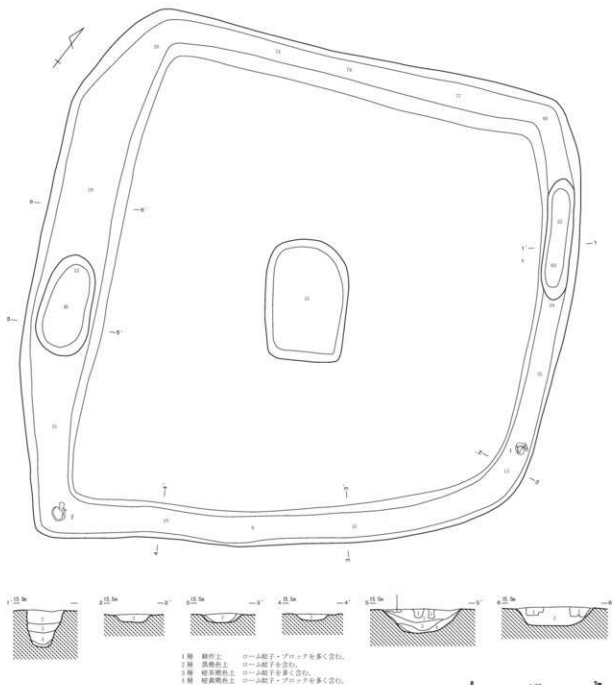
6号方形周溝墓

遺 構 (第179・180図)

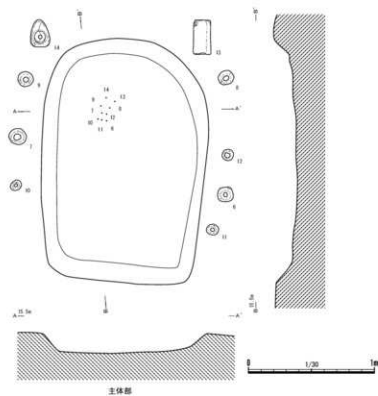
[位 置] (B-3・4、C-3・4) グリッド。

[検出状況] 105・108・109 J、202・213～215 Dを切る。

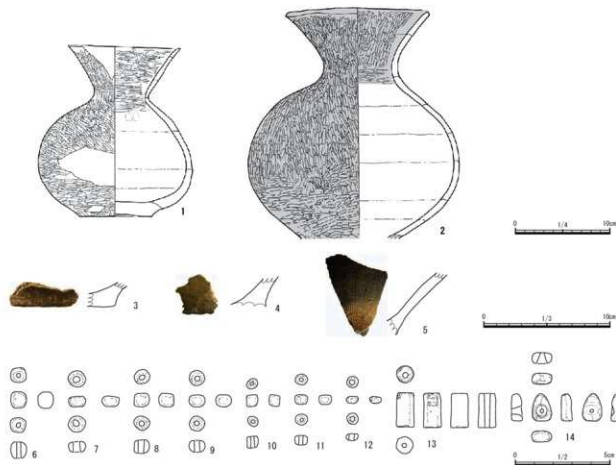
[構 造] 規模：長軸 8.47 m / 短軸 8.41 m。主体部規模：長軸 1.93 m / 短軸 1.31 m / 深さ 12～13 cm。溝：上幅 46～124 cm、下幅 33～92 cm、深さ 9～27 cm。溝は1周するものの、やや歪んでおり、西側の溝は他の溝と比べて幅が広がっている。東側、西側の溝内に一段深くなっている部分があり、深さはそれぞれ 57 cm、38 cm を測る。



第179図 6号方形周溝墓 (1/60)



第180図 6号方形周溝墓主体部(1/30)



第181図 6号方形周溝墓出土遺物(1/2・1/3・1/4)

[覆 土] 主体部の覆土はローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。溝の覆土は3層に分層される。ローム粒子を含む黒褐色土(2層)を基調とする。東側、西側の深くなる部分では下層(3・4層)でローム粒子を多く含む暗茶褐色～暗黄褐色土を基調とする。

[遺 物] 壺形土器、台付甕形土器が溝内から出土し、主体部からガラス製小玉、碧玉製管玉、翡翠製小玉が出土した。溝内から出土した2は底部穿孔土器の可能性ある。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

[遺 物] (第181図、図版129、第77・78表)

[土 器] (第181図1～5、図版129、第77表)

復元個体2点、破片資料3点を図示した。1～3は壺形土器、4・5は甕形土器である。

[石製品・ガラス製品] (第181図6～14、図版129、第78表)

9点を図示した。6～12はガラス製小玉、13は碧玉製管玉、14は翡翠製小玉である。

検出番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土・色調
第181図1 図版129-1	(小型) 壺	口縁部～ 底部 60%	高18.2 口11.9 底7.6 厚0.7	胴部はややつぶれた球胴定で、くの字に屈曲する頸部から直線的に開く。単口縁を呈する。	外面：口縁部上部が横位のナデ。その下に縦位の段差き/胴部から胴部は右下がりから横位の段差き/内面：口縁部から頸部は横位の段差き/ほかは横位のナデだが胴部に指頭痕が認められる。	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色/赤色粒子・小礫少量
第181図2 図版129-2	壺	口縁部～ 胴部 60%	高12.4 口15.1 厚0.6	胴部はややつぶれた球胴定で、緩やかに外反する頸部から直線的に開く。単口縁を呈する。	外面：口縁部から胴部中位まで主に縦位の段差き/胴部下部は主に横位の段差き/内面：口縁部は主に縦位の段差き/頸部は横位の段差き/胴部から胴部は横位のナデ/底部穿孔土器の可能性ある。	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色/赤色粒子・小礫少量
第181図3 図版129-3	壺	底部 破片	高12.1 底(6.8) 厚0.9	やや外反して開く。	外面：木口状工具によるナデと縦位の段差き/内面：木口状工具によるナデ	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色/白色粒子少量、砂粒少量
第181図4 図版129-4	壺	底部 破片	厚1.1	やや外反して開く。	外面：縦位の刷毛のち横位のナデ。一部に段差き/内面：ナデ/底面はほとんどなし。	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄/砂粒、白色粒子、赤色粒子少量
第181図5 図版129-5	台付甕 合部 破片	胴部～接 合部 破片	厚0.7	直線的に開く。	外面：縦位の刷毛/内面：木口状工具による主に横位のナデ	外面：にぶい褐色・黒褐色 内面：灰黄褐色/白色粒子少量、砂粒少量

第77表 6号方形周溝墓出土土器一覽

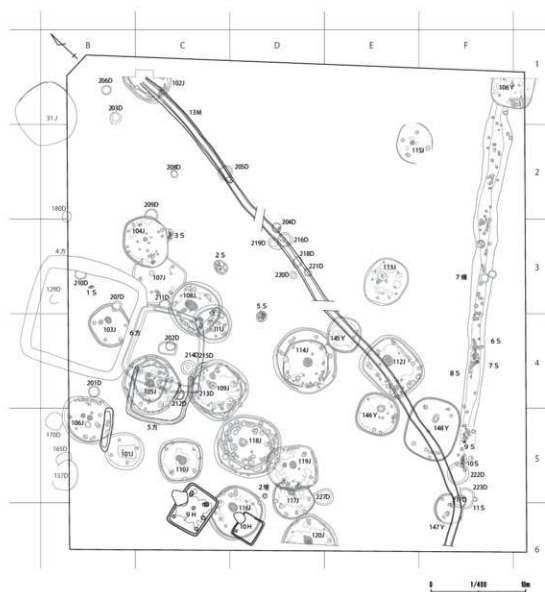
検出番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ×径 (cm)		孔径 (cm) 上孔径 (cm)/ 下孔径 (cm)	重量 (g)	色	備考	出土 位置
			長軸/短軸/厚さ (cm)	径					
第181図6 図版129-6	ガラス 製小玉	完形	0.85/0.8	0.2	0.8	濃紺色	気泡あり		主体部
第181図7 図版129-7	ガラス 製小玉	完形	0.6/0.85～0.9	0.4	0.5	濃紺色	気泡あり		主体部
第181図8 図版129-8	ガラス 製小玉	完形	0.7/0.8	0.3	0.5	濃紺色	気泡あり/上面、側面に1mm程の孔が1ヶ所ずつあり、貫通はしていない		主体部
第181図9 図版129-9	ガラス 製小玉	完形	0.6/0.8～0.85	0.3	0.5	濃紺色	気泡あり		主体部
第181図10 図版129-10	ガラス 製小玉	完形	0.65/0.55～0.6	0.2	0.3	濃紺色	気泡あり		主体部
第181図11 図版129-11	ガラス 製小玉	完形	0.5/0.6～0.7	0.2	0.3	うすめの 紺色	気泡あり		主体部
第181図12 図版129-12	ガラス 製小玉	完形	0.35/0.6	0.3	0.1	うすめの 紺色	気泡あり/側面に1mm程の孔が1ヶ所あり、貫通はしていない/側面に僅かに欠けた部分が見られる		主体部
第181図13 図版129-13	碧玉製 管玉	50%程か	[1.8]/0.9	0.3/0.25	2.2	白っぽい 青緑色	5mm程の欠けが見られる		主体部
第181図14 図版129-14	翡翠製 小玉	完形	1.4/1.0/0.6	0.6～0.65/0.2	1.4	緑白色 (白い部 分が多い)	形状は隅丸三角状/斜めにひびが入っている		主体部

第78表 6号方形周溝墓出土石製品・ガラス製品一覽

第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物

(1) 概要

奈良・平安時代の遺構は住居跡2軒（9・10H）、溝跡2本（12・13M）を検出した。9号住居跡からは石製紡錘車、鉄製刀子などが出土した。



第182図 奈良・平安時代遺構全体図（1/400）

(2) 住居跡

9号住居跡

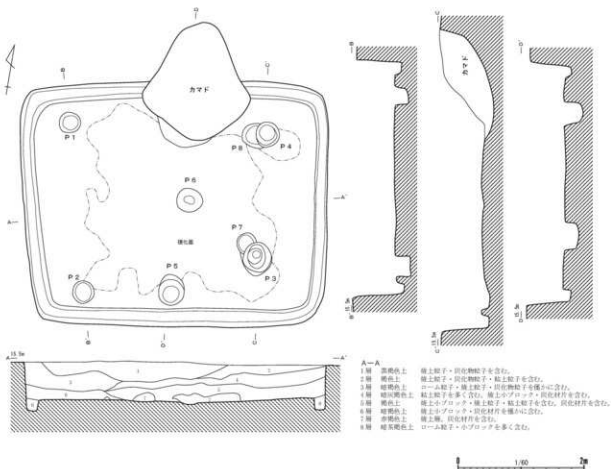
遺 構 (第183・184図)

[位 置] (C-5・6) グリッド。

[検出状況] 116 Jを切る。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸4.83 m／短軸3.84 m／深さ0.51～0.56cm。壁：約90°で立ち上がる。主軸方位：N-9°-W。壁溝：1周するものが1条検出された。上幅19～30cm・下幅9～16cm・床面からの深さ11～17cm。床面：住居中央は硬化するが、壁際は軟弱である。カマド：北壁の中央よりやや東側に位置する。主軸方位はN-5°-E。長さ186cm／幅165cm／壁への掘り込み100cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されたと考えられる。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：主柱穴はP1、P2、P3、P4の4本と考えられる。P1は34×33cmの円形と思われ、深さ20cm。P2は34×36cmの円形で、深さ26cm。P3は47×45cmの円形で、深さ27cm。P4は40×37cmの円形で、深さ28cm。入口施設：P5が入口施設と考えられる。48×38cmの楕円形。

[覆 土] 8層に分層される。上層(1・2層)は焼土粒子・炭化物粒子を含む褐色～黒褐色土を基調とし、2層には粘土粒子も含まれる。中層(3・4層)は暗褐色～暗灰黄褐色を基調とし、3層にはローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量含み、4層には粘土粒子を多量含み、焼土小ブロック、炭化材を含む。下



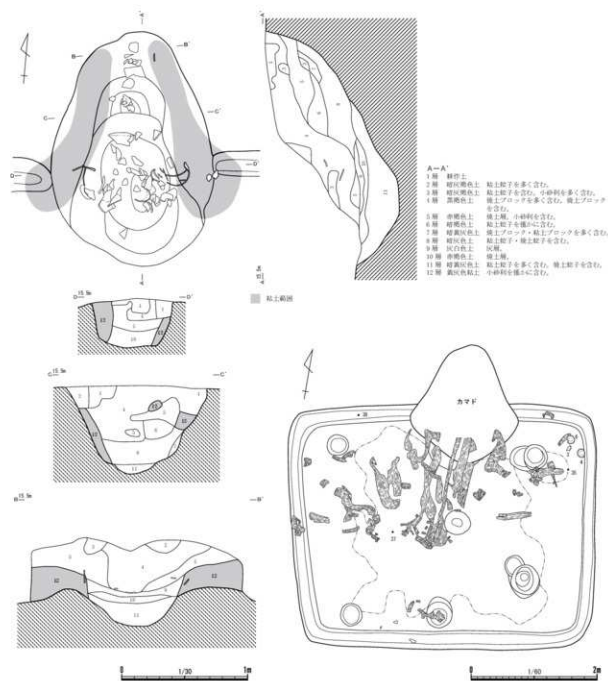
第183図 9号住居跡(1/60)

層（5・6層）は焼土小ブロックを微量～中量含む褐色～暗褐色土を基調とし、5層には焼土粒子・粘土粒子、炭化材片を含み、6層には炭化材片を僅かに含む。床面直上の7層は赤褐色の焼土層で、炭化材を含む。8層は壁溝で、全体的に不整合な堆積状態で、埋め戻された可能性もある。

〔遺物〕 須恵器杯・蓋・甕形土器、須恵系土師質土器杯、土師器杯・甕形土器、鉄製刀子、石製紡錘車が出土した。カマド内から複数の長裏（23～31）と須恵器杯（1）、須恵器甕（16）が出土している。

〔時期〕 奈良時代（8世紀中葉）。

〔所見〕 焼失住居である。覆土には焼土が非常に多く含まれる。また、覆土は全体的に不整合な堆

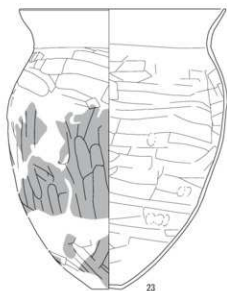


第184図 9号住居跡カマド・遺物出土状態（1/30・1/60）

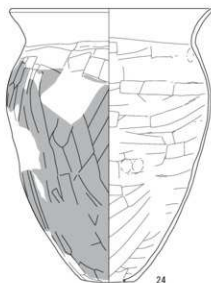
第3章 検出された遺構と遺物



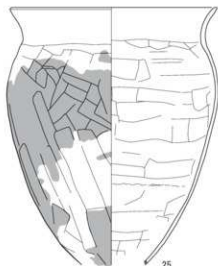
第185図 9号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



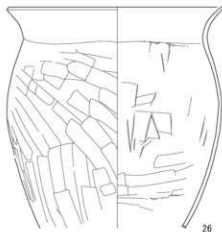
23 粘土付香瓶圖



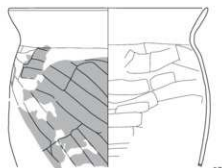
24 粘土付香瓶圖



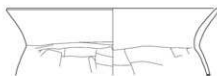
25 粘土付香瓶圖



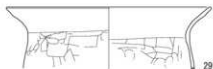
26



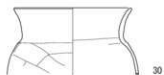
27 粘土付香瓶圖



28



29



30



第186図 9号住居跡出土遺物2 (1/4)

積をしており、埋め戻された可能性がある。炭化材の多くはブロック状で、散在している。カマド前面に北壁に直行する形で炭化材が並んだ状態で出土している。壁が倒れこんだような形ではあるが、壁体にそのような太い木材を使うのかどうかは不明である。カマド右には砕けた炭化材や焼土、灰を多く含む層があり貝殻を包含している。

遺物 (第185～187図・図版130～132-1、第79～81表)

[土器] (第185・186図・第187図31・32、図版130～132-1、第79表)

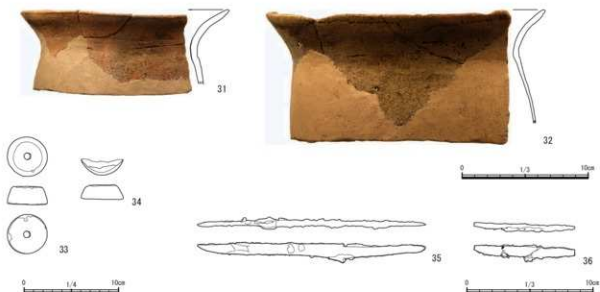
復元個体23点、破片資料9点を図示した。1～11・13～16は須恵器で、1～11は坏、13～15は蓋、16は裏である。12は須恵系土師質土器坏である。17～32は土師器で、17～22は坏、23～32は長裏である。

[石製品] (第187図33・34、図版132-1、第80表)

2点を図示した。33・34は紡錘車である。

[鉄製品] (第187図35・36、図版132-1、第81表)

2点を図示した。35・36は刀子である。



第187図 9号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)

標頭番号 図版番号	器種	部位 保存状態	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第185図1 図版130-1	須恵器 坏	口縁部～ 底部 ほぼ完形	高13.2 口3.9 底8.3	外面：青灰/内面：青灰	白色粒子・白色針 状物質・砂粒・小 礫少量	底部周縁部回転磨削り/回転ナデ/底面に 窪抜き「×」印あり/カマド内より出土	南比企窯産
第185図2 図版130-2	須恵器 坏	口縁部～ 底部 ほぼ完形	高13.5 口3.9 底8.0	外面：灰～黒褐/内面：灰 ～褐	白色粒子・白色針 状物質・砂粒・小 礫少量	底部周縁部回転磨削り/回転ナデ	南比企窯産
第185図3 図版130-3	須恵器 坏	口縁部～ 底部 80%	高(13.0) 口3.2 底7.4	外面：暗緑灰/内面：灰	白色粒子微量、白 色針状物質多量、 砂粒・小礫微量	底部回転糸切り磨し後周縁部磨削り/回転 ナデ	南比企窯産
第185図4 図版130-4	須恵器 坏	口縁部～ 底部 ほぼ完形	高13.4 口4.2 底7.6	外面：灰/内面：灰	白色粒子多量、砂 粒微量	底部回転糸切り磨し後周縁部磨削り/回転 ナデ	東金子窯産

第79表 9号住居跡出土土器一覧1

神岡番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第185図5 図版130-5	須恵器 環	口縁部～ 底部 60%	高(12.9) 口3.5 底7.2	外面：灰/内面：オリーブ 灰	白色粒子、砂粒微 量	底部回転糸切り難し後周縁部磨削り/回転 ナデ	東金子窯産
第185図6 図版130-6	須恵器 環	口縁部～ 底部 90%	高13.2 口3.8 底7.4	外面：黄灰/内面：黄灰	砂粒・小礫微量	底部周縁部回転磨削り/回転ナデ	東金子窯産
第185図7 図版130-7	須恵器 環	口縁部～ 底部 10%	高(14.5) 口3.5 底(9.0)	外面：灰/内面：灰	白色粒子中量、砂 粒少量	回転ナデ	東金子窯産
第185図8 図版130-8	須恵器 環	口縁部～ 底部 10%	高(14.3) 口5.1 底(6.5)	外面：灰～黒/内面：灰	黒色粒子・砂粒微 量	底部回転磨削り/回転ナデ	東金子窯産
第185図9 図版130-9	須恵器 環	口縁部～ 底部 10%	高(12.6) 口[6.4]	外面：灰/内面：暗灰	白色粒子少量、砂 粒微量	回転ナデ	東金子窯産
第185図10 図版130-10	須恵器 環	口縁部～ 底部 10%	高(14.6) 口[4.3]	外面：灰/内面：灰	白色粒子・砂粒・ 小礫少量	回転ナデ	東金子窯産
第185図11 図版130-11	須恵器 環	口縁部～ 底部 15%	高(16.4) 口[5.1]	外面：灰/内面：灰	白色粒子・砂粒少 量	回転ナデ/内面：口縁上端直下に沈線	東金子窯産
第185図12 図版130-12	須恵系 土師器 土器環	口縁部～ 底部 30%	高(13.5) 口[4.0]	外面：灰/内面：灰	白色粒子・黒色粒 子・砂粒少量	回転ナデ	東金子窯産
第185図13 図版130-13	須恵器 蓋	天井部～ かえし部 20%	高(18.0) 口[2.0]	外面：灰/内面：灰	白色針状物質中 量、砂粒小礫・少 量	天井部上面回転磨削り/回転ナデ	南比企窯産
第185図14 図版130-14	須恵器 蓋	天井部～ かえし部 10%	高(16.2) 口[1.3]	外面：黄灰/内面：黄灰	白色針状物質・白 色粒子中量、小礫 少量	回転ナデ	南比企窯産
第185図15 図版130-15	須恵器 蓋	つまみ部 10%	口[1.7]	外面：灰/内面：灰	白色粒子・砂粒少 量、黒色粒子微量	回転ナデ	東金子窯産
第185図16 図版130-16	須恵器 甕	口縁部 5%	高(32.0) 口[10.0]	外面：にぶい黄橙/内面： 褐灰	砂粒・小礫少量	回転ナデ/カマド内左より出土	東金子窯産
第185図17 図版130-17	土師器 環	口縁部～ 底部 10%	高(12.0) 口[2.7]	外面：橙/内面：橙	角閃石・砂粒少量、 白色粒子微量	内面：口縁部横ナデ、底部磨ナデ/外面： 口縁部横ナデ、底部～底部磨削り	北武蔵型環
第185図18 図版130-18	土師器 環	口縁部～ 底部 10%	高(12.4) 口[2.6]	外面：橙/内面：橙	角閃石・小礫少量、 赤色粒子・砂粒微 量	内面：口縁部横ナデ、底部磨ナデ/外面： 口縁部横ナデ、底部～底部磨削り	北武蔵型環
第185図19 図版130-19	土師器 環	口縁部 10%	厚0.7	外面：にぶい濁・赤彩部分 明赤濁/内面：にぶい濁・ 赤彩部分明赤濁	白色粒子少量、砂 粒微量	内面～外面口縁部赤彩/内面：口縁部横ナ デ/外面：口縁部横ナデ、粘土帯の直路	落合型環
第185図20 図版130-20	土師器 環	口縁部 10%	厚0.5	外面：橙・赤彩部分明赤 濁/内面：橙・赤彩部分明赤 濁	白色粒子少量、砂 粒微量	内面～外面口縁部赤彩/内面：口縁部横ナ デ/外面：口縁部横ナデ、粘土帯の直路	落合型環
第185図21 図版130-21	土師器 環	口縁部 10%	厚0.6	外面：にぶい黄橙・赤彩部 分明赤濁/内面：にぶい黄 橙・赤彩部分明赤濁	白色粒子少量、砂 粒微量	内面～外面口縁部赤彩/内面：口縁部横ナ デ/外面：口縁部横ナデ、粘土帯の直路	落合型環
第185図22 図版130-22	土師器 環	底部 10%	厚0.6	外面：にぶい黄橙/内面： にぶい黄橙・積載部分にぶ い赤濁	白色粒子・砂粒微 量	内面赤彩/内面：底部磨ナデ/外面：底部 ～底部磨削り	落合型環
第186図23 図版131-23	土師器 甕	口縁部～ 底部 60%	高21.2 口29.6 底2.8	外面：橙/内面：橙	砂粒少量	外面粘土付着/内面：横ナデ/外面：口縁 部横ナデ、胴部磨削り/底部：磨削り/カ マド前・右より出土	武蔵型甕
第186図24 図版131-24	土師器 甕	口縁部～ 底部 60%	高21.9 口28.9 底4.3	外面：橙/内面：明赤濁	雲母少量、砂粒微 量	外面粘土付着/内面：横ナデ/外面：口縁 部横ナデ、胴部磨削り/底部：磨削り/カ マド内右より出土	武蔵型甕
第186図25 図版131-25	土師器 甕	口縁部～ 胴部 40%	高22.2 口27.2	外面：橙/内面：橙	赤色粒子・雲母 ・小礫少量、砂粒中 量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 磨削り/カマド内右より出土	武蔵型甕
第186図26 図版131-26	土師器 甕	口縁部～ 胴部 60%	高22.4 口[23.4]	外面：橙/内面：明濁	砂粒微量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 磨削り/カマド内右より出土	武蔵型甕
第186図27 図版131-27	土師器 甕	口縁部～ 胴部 40%	高21.0 口[16.8]	外面：明赤濁～にぶい濁/ 内面：橙	角閃石・砂粒微量	外面粘土付着/内面：横ナデ/外面：口縁 部横ナデ、胴部磨削り/カマド内左より出 土	武蔵型甕
第186図28 図版131-28	土師器 甕	口縁部～ 胴部 10%	高(22.4) 口[7.1]	外面：濁/内面：赤濁	角閃石・砂粒少量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 磨削り/カマド内左より出土	武蔵型甕

第79表 9号住居跡出土土器一覽2

第3章 検出された遺構と遺物

検出番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第186図29 図版132-1-29	土師器 甕	口縁部～ 胴部 10%	高(21.9) 口[6.6]	外面：橙/内面：明赤褐	角閃石少量、砂粒 微量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 鹿柄り/カマド内左より出土	武蔵型甕
第186図30 図版132-1-30	土師器 小型甕	口縁部～ 胴部 10%	高(12.4) 口[7.0]	外面：暗赤褐/内面：赤褐	砂粒少量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 鹿柄り/カマド内左より出土	武蔵型甕
第187図31 図版132-1-131	土師器 甕	口縁部～ 胴部 10%	高(23.4) 口[9.0]	外面：明褐/内面：明褐	角閃石微量、砂粒 少量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 鹿柄り/カマド内より出土	武蔵型甕
第187図32 図版132-1-32	土師器 甕	口縁部～ 胴部 10%	高(22.6) 口[5.9]	外面：明赤褐/内面：明赤 褐	角閃石微量、砂粒 少量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 鹿柄り	武蔵型甕

第79表 9号住居跡出土土器一覧3

検出番号 図版番号	種別	遺存状態	形状	高さ(cm) 上面径(cm)/ 下面径(cm)	上孔径(cm)/ 下孔径(cm)	重量(g)	石材	出土 位置
第187図33 図版132-1-33	石製紡錘車	完形	上面円形/下面円形/側面台形	1.9/3.2/4.2	0.7 0.7	59.5	蛇紋岩	北東隅 付近
第187図34 図版132-1-34	石製紡錘車	20%	上面円形/下面円形/側面台形	1.5/不明/不明	不明	12.2	蛇紋岩	不明

第80表 9号住居跡出土石製品一覧

検出番号 図版番号	種別	遺存状態	材質	現存長/幅/厚さ(cm)	重さ(g)	備考	出土 位置
第187図35 図版132-1-35	鉄製刀子	完形	鉄	18.4/0.5～1.6/0.2～0.8	22.9	-	中央やや西寄り
第187図36 図版132-1-36	鉄製刀子	50%程か	鉄	8.1/0.5～1.2/0.2～0.6	6.5	-	北側溝溝内

第81表 9号住居跡出土鉄製品一覧

10号住居跡

遺構(第188図)

[位置] (D-6) グリッド。

[検出状況] 116 Jを切る。

[構造] 平面形：方形。規模：長軸2.79m/短軸2.70m/深さ0.43～0.52cm。壁：約85°で立ち上がる。主軸方位：N-15°-W。壁溝：1条検出された。東側コーナー部分壁溝確認できないがほぼ全周すると思われる。上幅10～22cm・下幅3～6cm・床面からの深さ5～9cm。床面：全面が軟弱である。カマド：北壁の東側に位置する。主軸方位はN-11°-E。長さ134cm/幅105cm/壁への掘り込み81cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されたと考えられる。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。入口施設：検出されなかった。

[覆土] 3層に分層される。上層(4層)はローム粒子。焼土粒子を含む黒褐色土、下層上位(5層)はローム粒子を多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土、下層下位(6層)はローム粒子・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土である。

[遺物] 須恵器椀、土師器長甕が出土した。図示した遺物はいずれもカマド内から出土している。

[時期] 奈良時代(8世紀中葉)。

遺物(第189・190図、図版132-2・133-1、第82表)

[土器] (第189・190図、図版132-2・133-1、第82表)

復元個体5点を図示した。1は須恵器椀、2～5は土師器で、長甕である。

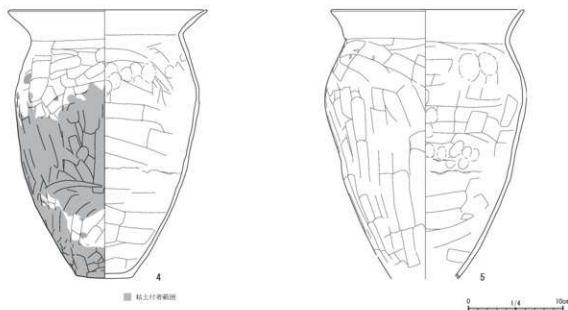


図 190 土付有刺網

第190図 10号住居跡出土遺物2(1/4)

発掘番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第189図1 図版132-2-1	須恵器 坏	体部～ 底部 60%	高12.9 底8.6	外面：灰/内面：灰	砂粒・黒色粒子・小礫 少量	底部糸切り離し後割縁部磨削り/回転ナデ	東金子系 産
第189図2 図版132-2-2	土師器 甕	口縁部～ 底部 90%	高21.2 口28.0 底5.0	外面：橙/内面：橙	雲母・角閃石・赤色粒 子・砂粒少量	外面スス付着/内面：横ナデ/外面：口縁部 横ナデ、胴部磨削り/底部：磨削り/カマド 内前で出土	武蔵型甕
第189図3 図版132-2-3	土師器 甕	口縁部～ 底部 90%	高19.8 口26.5 底5.0	外面：橙/内面：橙	角閃石少量、赤色粒 子微量、砂粒中量、小礫 微量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 磨削り/カマド内前で出土	武蔵型甕
第190図4 図版133-1-4	土師器 甕	口縁部～ 底部 90%	高21.8 口28.5 底5.8	外面：橙/内面：橙	角閃石・雲母少量、赤 色粒子微量、砂粒中量	外面粘土付着/内面：横ナデ/外面：口縁部 横ナデ・指頭痕、胴部磨削り/カマド内 で出土	武蔵型甕
第190図5 図版133-1-5	土師器 甕	口縁部～ 胴部 70%	高20.8 口28.4	外面：明赤褐色～に ぶい黄橙/内面：明赤 褐色	角閃石・砂粒中量、赤 色粒子・小礫少量	内面：横ナデ/外面：口縁部横ナデ、胴部 磨削り/カマド内前で出土	武蔵型甕

第82表 10号住居跡出土土器一覧

(3) 溝跡

12号溝跡

遺 構 (第191図)

[位 置] (B-5) グリッド。

[検出状況] 101・106 Jを切る。

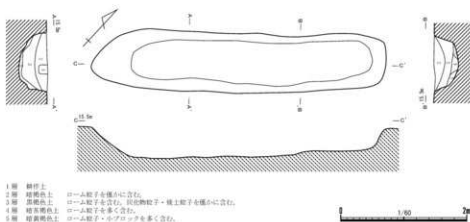
[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長さ4.65m/上幅0.74～0.94m/下幅0.57～0.67m/深さ38～42cm。断面形：逆台形。

[覆 土] 上層(2層)はローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とする。中層(3層)はローム粒子を含み、炭化物粒子、焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。下層(4・5層)はローム粒子を多く含む暗茶褐色～暗黄褐色土を基調とし、5層にはローム小ブロックも多く含む。

[遺 物] 当該期の遺物は検出されなかった。

[時 期] 奈良・平安時代。

[所 見] 方形周溝墓の溝の一部の可能性もある。



第191図 12号溝跡(1/60)

13号溝跡

遺 構 (第192図)

〔位 置〕(B-1~C-1・2~D-2・3~E-3・4・5~F-5・6)グリッド。

〔検出状況〕北端、南端は調査区外となる。102・112 J、145・147・148 Y、204・205・216 ~ 219・221~223 Dを切る。

〔構 造〕平面形：南北に伸びる溝で、南側は調査区境付近で南西方向に曲がる。北側にいくにつれて幅も広く、深くなる。規模：長さは調査区内で61.1 m。4.65 m/上幅0.68~1.11 m/下幅0.26~0.77 m/深さ9~65 cm。断面形：皿状~逆台形。

〔覆 土〕上層(2・5層)はローム粒子を微量~中量含む暗褐色~黒褐色土を基調とする。中層(3層)はローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。下層(4・6層)はA-A'でローム粒子を含む暗褐色土、C-C'でローム粒子・小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺 物〕須恵器環、甕形土器が出土した。

〔時 期〕奈良・平安時代

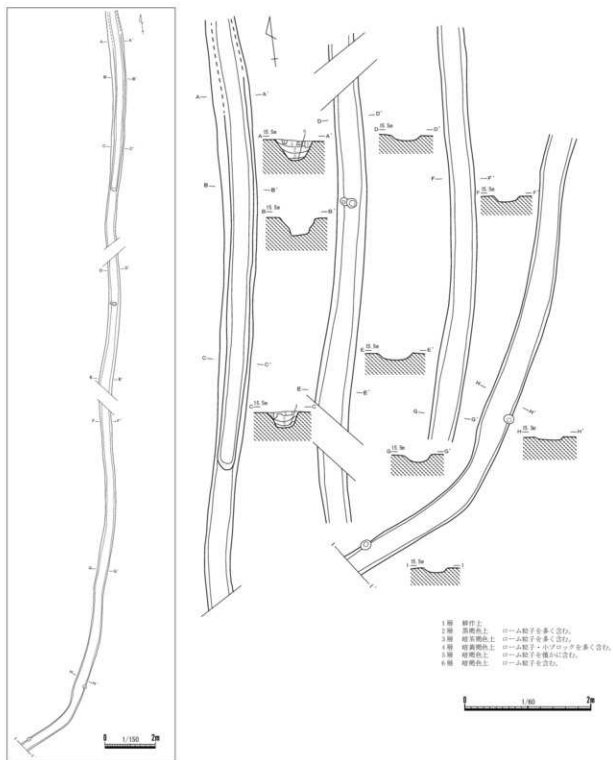
遺 物 (第193図、図版133-2、第83表)

〔土 器〕(第193図、図版133-2、第83表)

破片資料6点を図示した。1~5は須恵器で、1~3は環、4・5は甕である。

調査番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	色 調	胎 土	特徴	備考
第193図1 図版133-2-1	須恵器 環	口縁部 5%	厚0.6	外面：灰/内面： 灰	白色粒子・白色針状物質少量、 砂粒微量	回転ナデ	南比企業産
第193図2 図版133-2-2	須恵器 環	環部~底 部5%	厚0.6	外面：灰/内面： 灰	白色粒子・白色針状物質少量、 砂粒微量	底部周縁部回転器周り/回転ナデ	南比企業産
第193図3 図版133-2-3	須恵器 環	環部~底 部5%	厚0.6	外面：灰/内面： 褐灰	白色粒子・白色針状物質・砂 粒・小礫微量	回転ナデ	南比企業産
第193図4 図版133-2-4	須恵器 甕	胴部5%	厚0.6	外面：灰黄/内面： 黄灰	白色粒子少量、砂粒微量	自然軸/ナデ	東金子窯産
第193図5 図版133-2-5	須恵器 甕	胴部5%	厚0.6	外面：灰~暗灰/ 内面：灰	白色粒子中量、砂粒・小礫少 量	内面：ナデ/外面：タタキ目	東金子窯産

第83表 13号溝跡出土土器一覧



第192図 13号溝跡(1/60・1/150)



第193図 13号溝跡出土遺物(1/3)

第4節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

中世以降の遺構は柵列1本(7柵)、集石5基(6~10 S)を検出した。集石と柵列は関連のある可能性が考えられる。

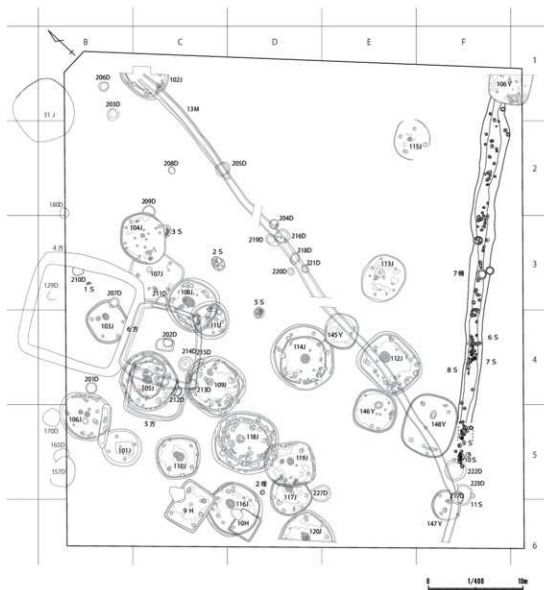
(2) 柵列

7号柵列

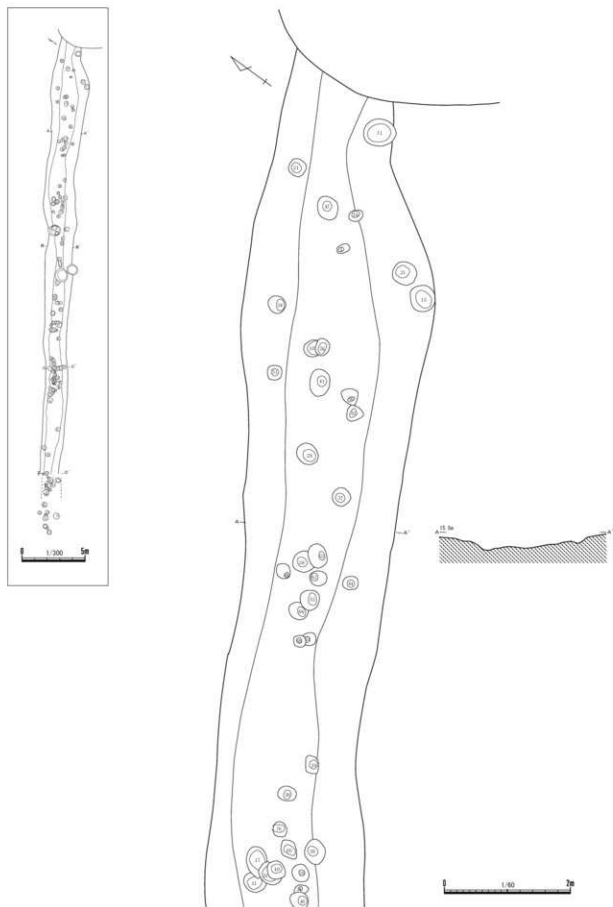
遺構(第195~197図)

[位置] (F-1~6) グリッド。

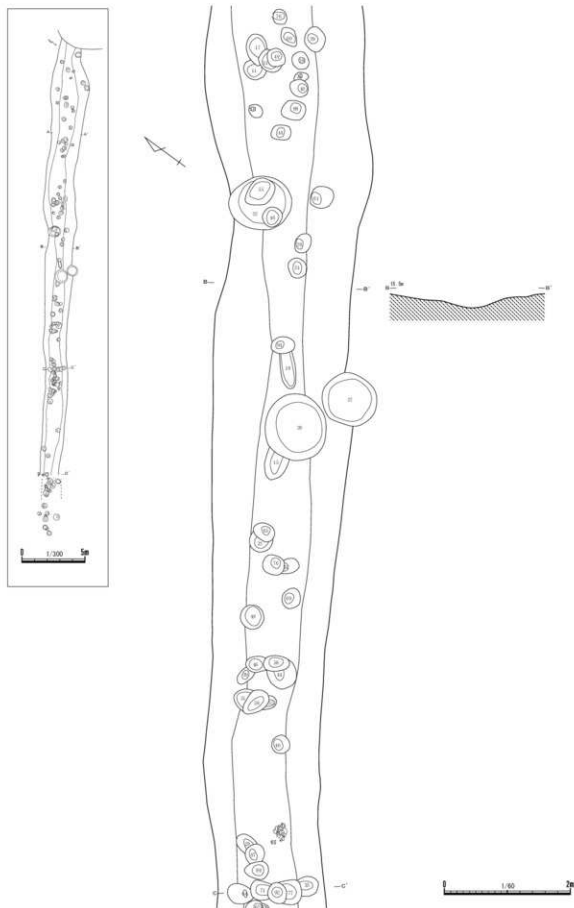
[検出状況] 北端、南端は遺構と切り合い、106・148 Yを切る。13 Mと重複するが13 Mより新しい。6~10 Sとは重複し、関連があるものと考えられる。



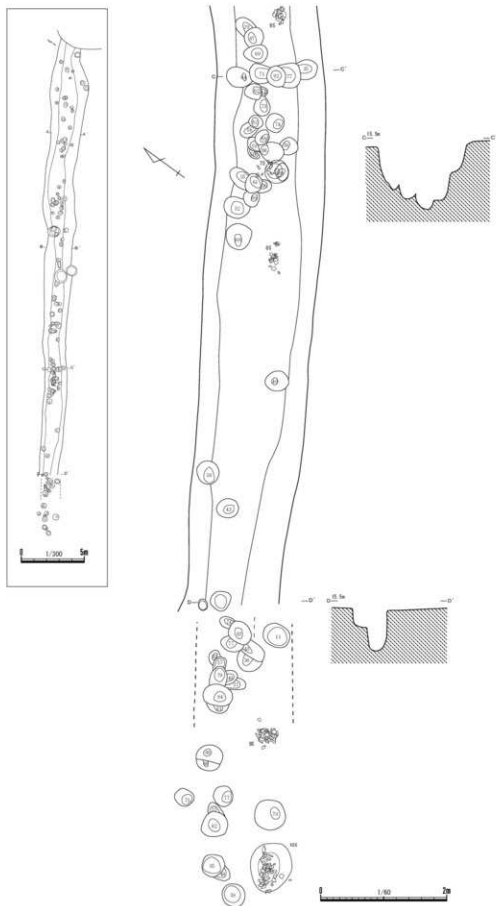
第194図 中世以降遺構全体図(1/400)



第195図 7号櫛列1 (1/60・1/300)



第196図 7号柵列2 (1/60・1/300)



第197図 7号柵列3 (1/60・1/300)

[構造] 平面形：南北に伸びる掘り込みの浅い溝状。溝の内側にピットが並ぶ。一部ピットは土坑状。規模：長さは調査区内残存部で37.9m。／上幅1.33～3.04m／下幅0.55～1.54m／深さ5～24cm。断面形：皿状。ピット：ピットは溝状の掘り込み全体に分布するが、密集している部分が見られる。また、多くは溝底部分に分布する。平面形は円形～楕円状で、径は30～40cm程のものが多く。

[覆土] ローム粒子を備かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 陶器類、鉄滓などが出土した。

[時期] 中世以降。

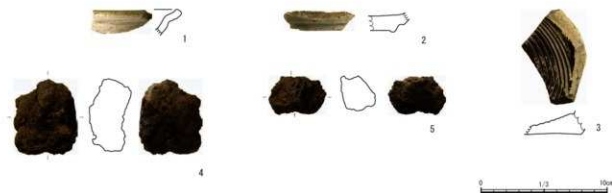
遺物 (第198図、図版133-3、第84・85表)

土器 (第198図1～3、図版133-3、第84表)

破片資料3点を図示した。1～3は陶器で、1は折縁中皿、2は小皿、3は摺鉢である。

鉄製品 (第198図4・5、図版133-3、第85表)

2点を図示した。4・5は鉄滓である。



第198図 7号櫛列出土遺物(1/3)

標記番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第198図1 図版133-3-1	陶器折縁 中皿	口縁部 破片	-	外面：灰白／内面： 灰白～オリーブ黄	砂粒・長石微量	内面の軸は口縁部のみ、外面の軸は 口縁端面のみ／灰軸	瀬戸・美濃系／15世 紀後葉の輪壳皿
第198図2 図版133-3-2	陶器小皿	底部 破片	-	外面：灰白～浅黄 ／内面：浅黄	砂粒・長石微量	底部：削り出し高台／高台内露胎／ 内面ペン／灰軸	瀬戸・美濃系／近世 (17世紀)
第198図3 図版133-3-3	摺鉢	胴部～底部 破片	-	外面：暗褐／内面： 暗褐	砂粒微量	内面：縞目／外面縞縞目／鉄軸	瀬戸・美濃系／16世 紀末～17世紀初頭

第84表 7号櫛列出土土器一覧

標記番号 図版番号	種別	遺存状態	材質	現存長／幅／厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第198図4 図版133-3-4	鉄滓	-	鉄	6.0/5.1/3.2	140.6	-
第198図5 図版133-3-5	鉄滓	-	鉄	4.6/3.1/3.1	45.3	-

第85表 7号櫛列出土鉄製品一覧

(3) 集石

6号集石

【遺 構】(第199図)

【位 置】(F-4)グリッド。

【検出状況】7号柵列中に検出された。

【構 造】平面形:検出されなかった。断面形:検出されなかった。規模:長軸なし/短軸なし/深さなし。

礫の分布:中央に集中して分布している。

【遺 物】当該期の遺物は検出されなかった。

【時 期】中世以降。

7号集石

【遺 構】(第199図)

【位 置】(F-4)グリッド。

【検出状況】7号柵列中に検出された。

【構 造】平面形:検出されなかった。断面形:検出されなかった。規模:長軸なし/短軸なし/深さなし。

礫の分布:北側にやや広がって分布している。ピットに沿ってやや落ち込んでいる礫が見られる。

【遺 物】当該期の遺物は検出されなかった。

【時 期】中世以降。

8号集石

【遺 構】(第199図)

【位 置】(F-4)グリッド。

【検出状況】7号柵列中に検出された。

【構 造】平面形:検出されなかった。断面形:検出されなかった。規模:長軸なし/短軸なし/深さなし。

礫の分布:西側に集中して分布している。

【遺 物】当該期の遺物は検出されなかった。

【時 期】中世以降。

9号集石

【遺 構】(第199図)

【位 置】(F-5)グリッド。

【検出状況】7号柵列中に検出された。

【構 造】平面形:検出されなかった。断面形:検出されなかった。規模:長軸なし/短軸なし/深さなし。

礫の分布:中央に集中して分布している。

【遺 物】当該期の遺物は検出されなかった。

【時 期】中世以降。

10号集石

遺 構 (第199図)

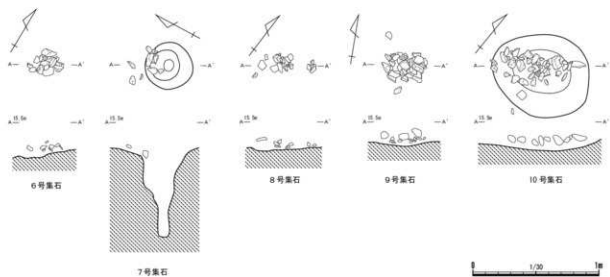
[位 置] (F-4) グリッド。

[検出状況] 7号柵列中に検出された。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：皿状。規模：長軸 1.59 m / 短軸 1.33 m。礎の分布：中央付近から左右に広がって分布している。

[遺 物] 当該期の遺物は検出されなかった。

[時 期] 中世以降。



第199図 6～10号集石 (1 / 30)

第5節 遺構外出土遺物

(1) 概要

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、遺物包含層出土以外の遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの核時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

(2) 縄文時代の土器 (第200～202図・第203図68～75、図版134～136、第86表)

復元資料5点、破片資料70点を図示した。1は勝坂3b新式の深鉢形土器である。口縁部に2つの突起を持ち、突起から伸びる隆帯は胴部文様帯まで垂下する。胴部上半に文様帯があり、沈線による渦巻文、U字状の文様を施文する。一部の沈線には押圧文を付す。2は加曽利E1b式の深鉢形土器である。2本1対の直状の隆帯と、1本の波状の隆帯が垂下する。3は中期中葉～後葉の深鉢形土器である。残存部は無文である。4は小形の深鉢形土器底部である。残存部は無文である。5はミニチュア土器の底部である。残存部は無文である。6は条痕文系、7、8は黒浜式、9～11は阿玉台式、12～34は勝坂式、35～57は加曽利E式、58～64は曾利式、65～70は連弧文、71は堀之内式、72、73は加曽利B式、74は後期安行の深鉢形土器である。75は加曽利E1式の浅鉢形土器である。

(3) 縄文時代の土製品 (第203図76～101、図版136、第87表)

26点を図示した。76～95は土器片錘、96～101は土製円盤である。

(4) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物 (第204図、図版137-1、第88表)

復元資料1点、破片資料1点を図示した。102、103とも壺形土器である。103は同一個体と思われる3点で、5方出土の破片(第178図2)と同一個体の可能性がある。

(5) 奈良・平安時代の遺物 (第205図、図版137-2、第89表)

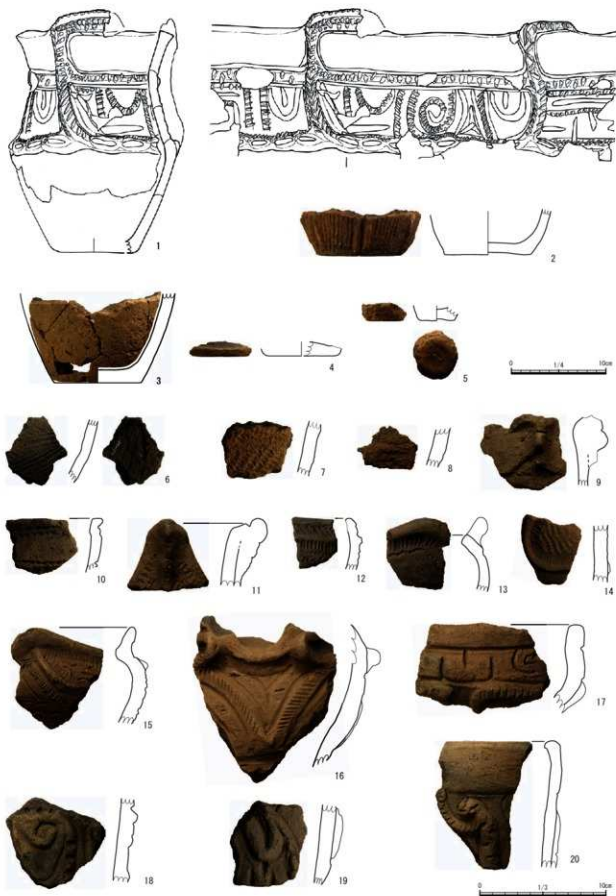
復元資料2点を図示した。104、105とも須恵器で、104は椀、105は杯である。

(6) 中世以降の遺物 (第206図、図版137-3、第90表)

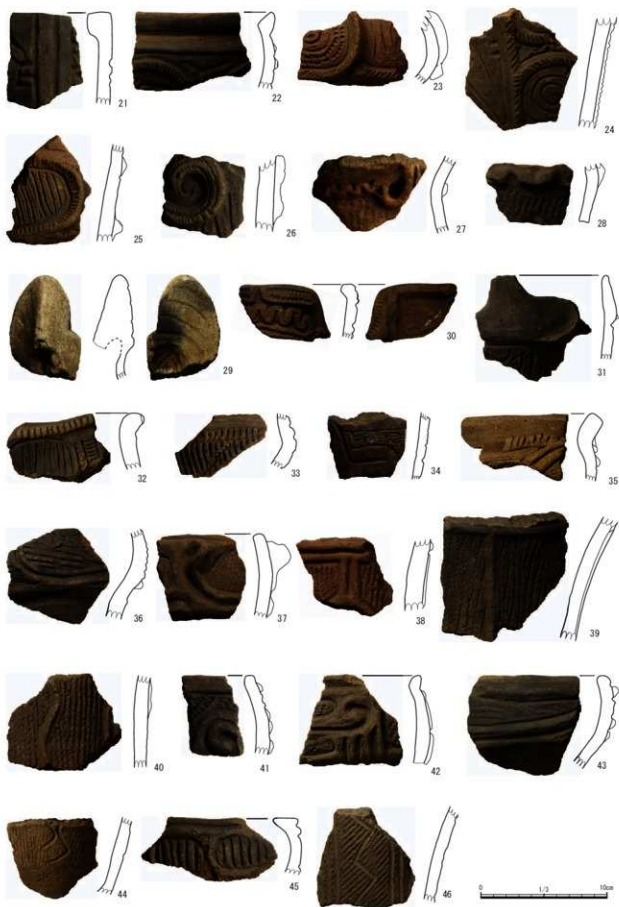
破片資料3点を図示した。106、107は陶器で、106は直縁大皿、107は播鉢、108はほうろくである。

(7) 石器 (第207～209図、図版138・139、第91表)

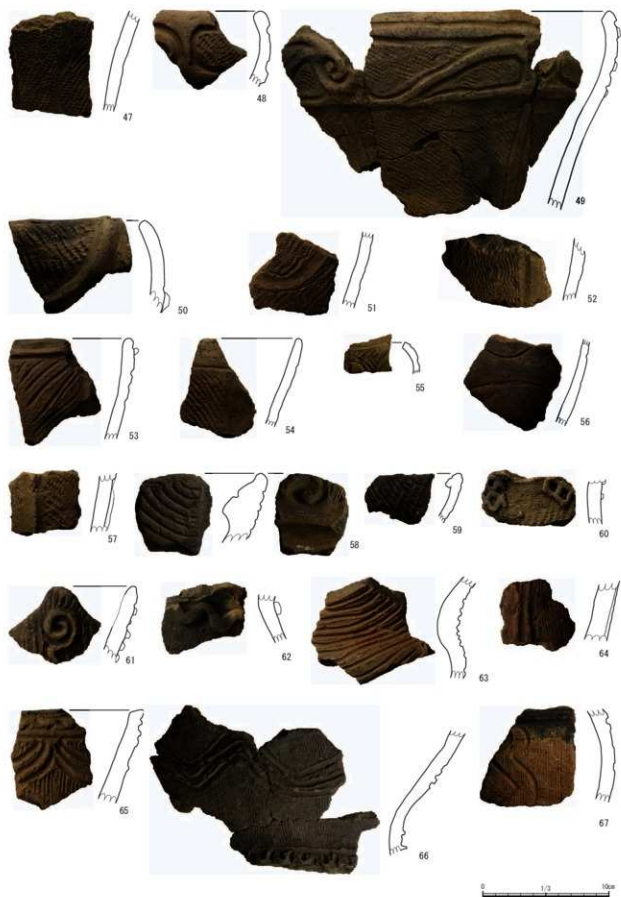
35点を図示した。109・110は石鏃である。111・112は楔形石器である。113～134は打製石斧である。135は横刃形石器である。136～139は二次加工剥片である。140は石核である。141は磨+敲石である。142・143は敲石である。



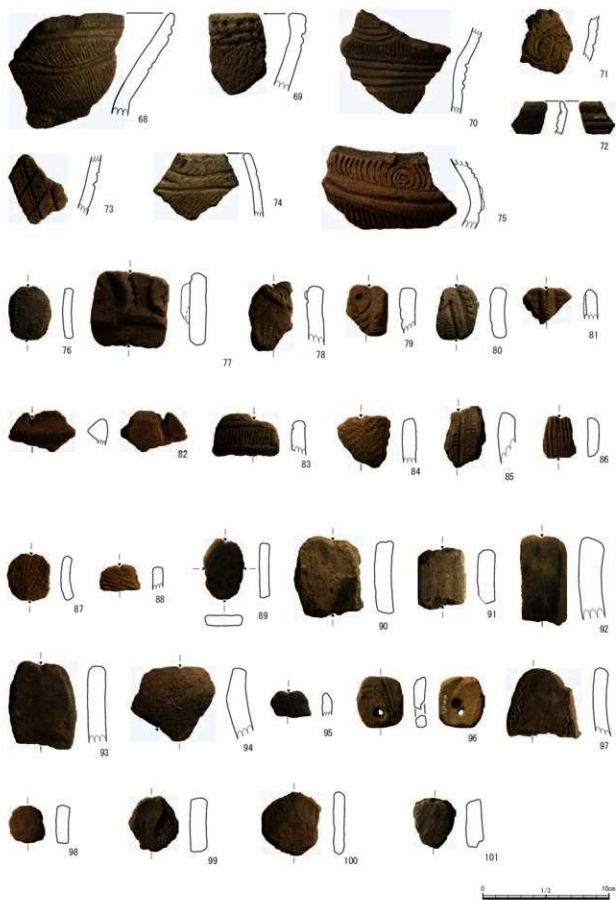
第200图 縄文時代遺構外出土遺物1 (1/4・1/3)



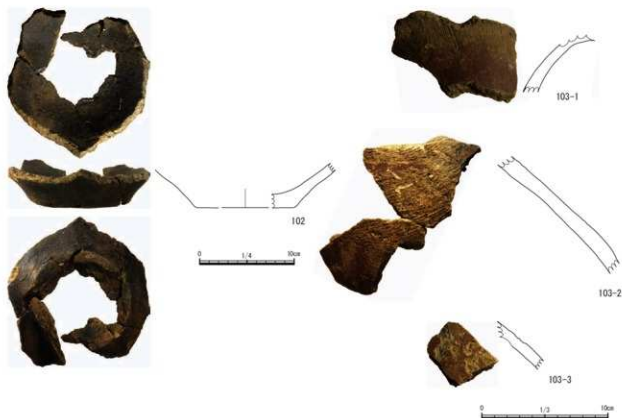
第201図 縄文時代遺構外出土遺物2 (1/3)



第202図 縄文時代遺構外出土遺物3 (1/3)



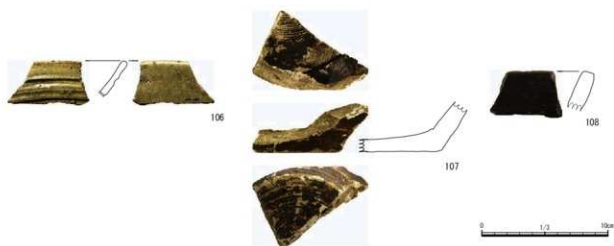
第 203 図 縄文時代遺構外出土遺物 4 (1/3)



第204図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構外出土遺物（1/4・1/3）



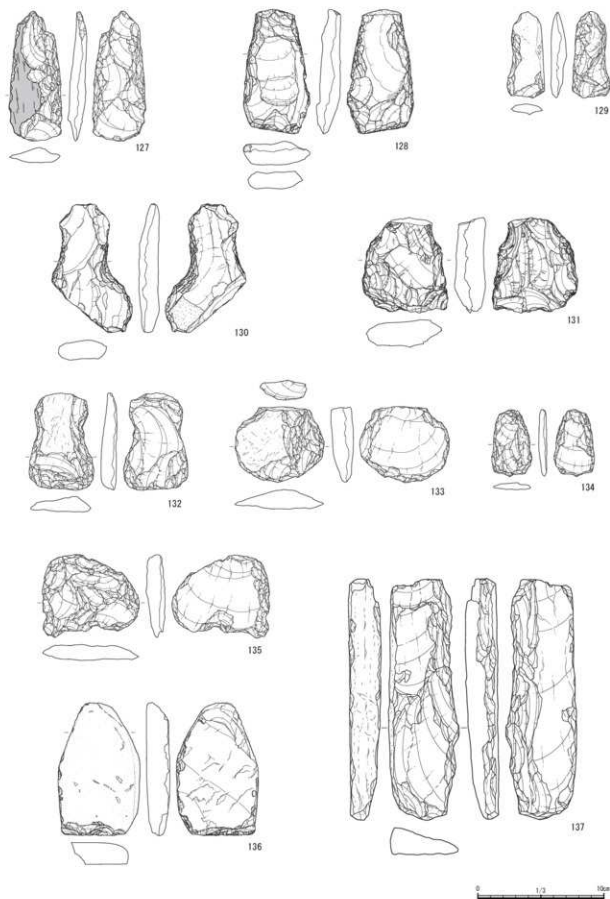
第205図 奈良・平安時代遺構外出土遺物（1/4・1/3）



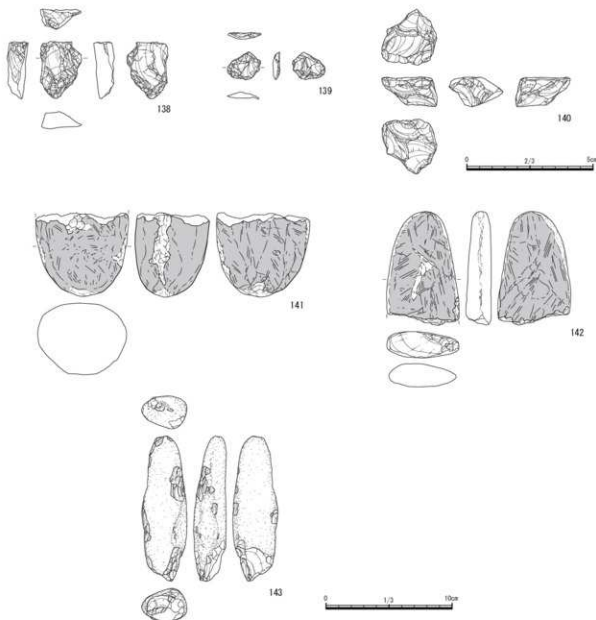
第206図 中世以降遺構外出土遺物（1/3）



第 207 図 遺構外出土石器 1 (1/3・2/3)



第208図 遺構外出土石器2 (1/3)



第209図 遺構外出土石器3 (1/3・2/3)

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第200図1 図版134-1	深鉢	口縁部~ 底部 80%	高24.7 底16.6 底(7.3) 厚0.9	下位は外桶し中位 で内側に屈折する 胴部/外積する口 縁部/平坦な底部	口縁部無文/対面に1単位ずつ逆し字状の隆帯による突起 で隆帯は胴部文様帯に垂下、隆帯に押圧文・矢羽根状刺突 文を付すもの1単位、押圧文・鋸歯状に付した押圧文・矢 羽根状刺突文を付すもの1単位/胴部上半に文様帯、口縁 部との境に押圧文を付した隆帯が1本横走、胴部下半との 境に連続状隆帯が1本横走し隆帯上端に押圧文が沿う/文 様帯内には三文文・沈線によるJ字状の文様・渦巻文等や や幅広い沈線による文様施文、一部沈線内に押圧文施文	に高・粗/ 砂粒少量、 礫中量	勝板3b 新式	(B-3)
第200図2 図版134-2	深鉢	底部	高14.6 底9.0 厚1.1	外積する胴部/平 坦な底部	地文は器系L層位か/2本1対の隆帯が直状に垂下したも のが2単位続き、1本の波状隆帯が1単位垂下/隆帯断面 カマボコ状/底面副代直無し	明濁/砂粒 中量、礫少 量	加曾利 E1b式	(B-3)
第200図3 図版134-3	深鉢	胴部~底 部 50%	高19.4 底9.2 厚1.3	外積する胴部/平 坦な底部	残存部無文/底面に副代直無し	明濁/砂粒 中量、礫微 量	中期中 葉~後 葉	13M

第86表 縄文時代遺構外出土石器一覽1

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第200図4 図版134-4	小形 深鉢	底部 40%	高11.5 底(7.0)	平坦な底部	残存部無文/底面に網代敷無し	褐/砂粒・ 礫微量	中期中 葉～後 葉	(C-4)
第200図5 図版134-5	ミニ チュア 土器	底部 100%	高1.7 底3.6 厚1.1	平坦な底部	残存部無文/底面に網代敷無し	褐/砂粒・ 礫微量	中期中 葉～後 葉	148Y
第200図6 図版134-6	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外積する胴部	内外面条痕文飾文	灰黄褐/砂 粒・礫微量 繊維多量	条痕文 系	13M
第200図7 図版134-7	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外積する胴部	地文は単筋LR縦位・横位の羽状縄文	明褐/砂 粒・礫微量 繊維	黒褐色	7欄
第200図8 図版134-8	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外積する胴部	地文は単筋LRの羽状縄文か	明赤褐/砂 粒・礫微量 繊維	黒褐色	145Y
第200図9 図版134-9	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	やや内湾する口縁部/口唇部付近は外積	1本の粘土を芯とし粘土帯で覆った突起	明褐/砂粒 中量、礫微 量、雲母多 量	阿玉台 1a～ b式	(C-5)
第200図 10 図版134-10	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部	口縁に沿って2列の結節沈線文飾文、破片下端にも見られる	褐/砂粒・ 礫微量、雲 母多量	阿玉台 1b式	12M
第200図 11 図版134-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	直立する口縁部	波状口縁の先端/波頂部から隆帯が垂下/波状口縁側面に押圧文飾文/口縁部に沿って押圧文・半円形刺突文による平行沈線・結節沈線文飾文	明褐/砂粒 中量、礫少 量、雲母多 量	阿玉台 目式	(B-3)
第200図 12 図版134-12	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部	1本の隆帯を横位に貼付/隆帯上端と口縁に先端が丸みを帯びた押引文が沿う、間を斜位の押引文が充填/横位隆帯下端に幅広角押文、横位直状の押引文、横位波状の押引文が沿う/隆帯断面台形状	灰黄褐/砂 粒少量、礫 微量	勝飯1a	9H
第200図 13 図版134-13	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	内湾する口縁部/口唇部は外積	口縁に沿って幅広角押文と三角押文飾文/三角押文はやや短行して施文される	暗褐/砂 粒・礫微量	勝飯1a 式	(C-3)
第200図 14 図版134-14	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する胴部	単筋LR縦位/隆帯による楕円状の区画/隆帯脇に爪形文飾文/区画中央に隅文飾文/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯2a 式	(B-3)
第200図 15 図版134-15	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	内湾する口縁部	口縁部に半円形の突起あり/弧状の隆帯による口縁部区画/口縁と隆帯に押圧文・半円形刺突文・沈線が沿う/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯2b 式	(B-3)
第200図 16 図版134-16	深鉢	口縁部付 近 破片	厚1.4	内湾する口縁部付近	上端に把手の痕跡あり/押圧文を付した隆帯をV字状に貼付、中央に三叉文飾文/隆帯断面台形状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯3b 新式	13M
第200図 17 図版134-17	深鉢	口縁部 破片	厚1.4	上位は直立し下位は内湾する口縁部	U字状の沈線と縦位沈線を組み合わせた蛇行文状の文様/右端に2本の沈線による楕円状の文様/押圧文を付した隆帯による方形状の文様か/隆帯断面カマボコ状	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯3b 式	(B-2)
第200図 18 図版134-18	深鉢	胴部 破片	厚1.3	ほぼ直立する胴部	楕円状の粘土帯を貼付、沈線による渦巻文・三叉文飾文/粘土板の縁に押圧文飾文	にぶい・黄褐 /砂粒少量、 礫微量	勝飯3b 新式	(B-3)
第200図 19 図版134-19	深鉢	胴部 破片	厚1.2	ほぼ直立する胴部	隆帯による文様、一部隆帯上押圧文飾文/文様下位に押圧文/隆帯断面カマボコ状	にぶい・黄褐 /砂粒少量、 礫微量	勝飯3b 新式	(D.5)
第200図 20 図版134-20	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚0.8	直立する口縁部～胴部	口縁部無文/押圧文を付した隆帯による文様、一部胴部の突起状になる部分あり/隆帯断面カマボコ状、隆帯脇1本の単沈線が沿う	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯3b 式	(B-2)
第201図 21 図版134-21	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	直立する口縁部/口唇部は内側に肥厚	沈線が直状に垂下/破片右端に交互刺突文/破片左側に沈線による弧状の文様と押圧文	黒褐/砂 粒中量、礫 微量	勝飯3b 式	145Y
第201図 22 図版134-22	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する口縁部/口唇部付近は外積	口縁上位は無文/押圧文を付した隆帯を弧状に貼付/沈線による三叉文/隆帯断面台形状/隆帯脇1本の単沈線が沿う	黒褐/砂粒 中量、礫微 量	勝飯3b 式	(B-1)
第201図 23 図版134-23	深鉢	口縁部付 近 破片	厚0.9	内湾する口縁部付近	押圧文を付した隆帯による区画/左側の楕円状区画内側には2列の押引文と沈線が沿う/右側の区画内は縦位沈線を充填/隆帯断面三角状・台形状	赤褐/砂粒 中量、礫微 量	勝飯3b 式	5方
第201図 24 図版134-24	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外積する胴部	押圧文を付した隆帯が直状に垂下、右側から弧状に2本隆帯が伸びる/弧状の隆帯間に交互刺突文/右下の弧状の隆帯内側に沈線による渦巻文/直状の隆帯左側には2つの押圧文、1本の沈線が波状に垂下/隆帯断面台形状、隆帯に1本又は2本の単沈線が沿う	褐/砂粒少 量、礫微量	勝飯3b 式	13M

第86表 縄文時代遺構外出土土器一覧2

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎 土	時期 型式	出土 位置
第201図 25 図版134-25	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	やや外傾する胴部	押印文を付した隆帯による楕円状の区画 / 区画内縦位沈線 充填 / 隆帯断面三角状・カマボコ状	黒褐 / 砂粒少 量、礫微量	勝飯3b 式	146Y
第201図 26 図版134-26	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	ほぼ直立する胴部	2列の三角押文を付した隆帯による渦巻文、隆帯側面には 押印文施文 / 隆帯内側には2列による渦巻文 / 渦巻文外側 には縦位・横位沈線施文 / 隆帯断面台形状	灰黄褐 / 砂 粒中量、礫 微量	勝飯3b 式	(B-2)
第201図 27 図版134-27	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外反する胴部	地文は単筋の渦巻文 / 交互刺突文を付した1本の隆帯が横 位に走る / 円形の窪みのある突起、突起から上位に隆帯が 直状に伸びる / 隆帯上位無文、下位は地文施文 / 隆帯断面 カマボコ状	明赤褐 / 砂 粒中量、礫 微量	勝飯3b 式	146Y
第201図 28 図版135-28	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	やや内湾する胴部	地文は0段多条乱斜位 / 上端に交互刺突文を付した隆帯 を横位に貼付 / 隆帯断面カマボコ状	黒褐 / 砂粒 少量、礫微 量	勝飯3b 式	(E-5)
第201図 29 図版135-29	深鉢	把手 破片	厚 1.2 ~ 2.9	ほぼ直立する把手	破片下端に窪みがあり、窪みの上位に弧状の沈線を複数施 文	に、黄褐 / 砂粒中量、 礫微量	勝飯3 式	(E-5)
第201図 30 図版135-30	深鉢	口縁部か 破片	厚 0.8	直立する口縁部が	横位の蛇行状の文様 / 上下に2列の三角押文 / 内面左側 に沿って爪形文が沿う	に、赤褐 / 砂粒少量、 礫微量	勝飯3 式	145Y
第201図 31 図版135-31	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	直立する口縁部	口縁部に突起あり / 口縁部無文部に断面三角状の隆帯を反 転したC字状に貼付 / 沈線による文様、縦位沈線、U字状 の沈線	黒褐 / 砂粒 中量、礫微 量	勝飯3 式	(B-2)
第201図 32 図版135-32	深鉢	口縁部 破片	厚 1.3	外反する口縁部	口縁に沿って押印文施文 / 沈線による楕円状の区画、内側 に縦位沈線充填 / 楕円状区画の右側に2列の三角押文を縦 位に施文、三角押文の右側に押印文を縦位に施文	黒褐 / 砂粒 少量、礫微 量	勝飯3 式	7横
第201図 33 図版135-33	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	内湾する胴部	平行沈線による区画 / 区画内は手載竹管状工具の断面を用 いた縦位平行沈線を充填 / 区画に沿って三角押印文施文	黒褐 / 砂粒 粒・礫微量	勝飯3 式	7横
第201図 34 図版135-34	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	外傾する胴部	平行沈線状の沈線による文様 / 沈線間押印文充填 / 沈線に よる渦巻文 / 交互刺突文	黒褐 / 砂粒 粒・礫微量	勝飯3 式	(C-3)
第201図 35 図版135-35	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	内湾する口縁部	地文は帯系L横位 / 口縁部上位無文 / 無文部を帯系施文部 の端に押印文を付した1本の隆帯を横位に貼付 / 隆帯を弧 状に貼付、隆帯に沿って隆帯上1本の沈線を付す	明赤褐 / 砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E1a式	(C-3)
第201図 36 図版135-36	深鉢	口縁部付 近～胴部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部付 近 / 外反する胴部	地文は帯系L横位 / 隆帯による口縁部区画、下端1本の隆 帯 / 隆帯による横位S字状の文様か、隆帯に沿って隆帯上 1本の沈線を付す	黒褐 / 砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1a式	(C-4)
第201図 37 図版135-37	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部	地文は帯系L縦位 / 隆帯による口縁部区画 / 沈線による渦 巻文、渦巻文部分は突起状 / 破片左下に沈線による小さい 渦巻文 / 隆帯断面カマボコ状	黒 / 砂粒・ 礫微量	加曾利 E1b式	(C-4)
第201図 38 図版135-38	深鉢	胴部 破片	厚 1.4	やや外反する胴部	地文は帯系L縦位 / 破片上端に2本の隆帯が走る、横位隆 帯から2本の隆帯が直状に垂下し下端の弧状 / 隆帯に接す る / 隆帯断面カマボコ状	明赤褐 / 砂 粒・礫少量	加曾利 E1b式	5方
第201図 39 図版135-39	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外反する胴部	地文は帯系L縦位 / 上端に1本の隆帯が横走 / 横位隆帯か ら1本の隆帯が直状に垂下 / 隆帯断面カマボコ状	黒褐 / 砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E1b式	(B-3)
第201図 40 図版135-40	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	ほぼ直立する胴部	地文は帯系L縦位 / 2本1対の隆帯が直状に垂下 / 1本の隆 帯が弧状に垂下 / 隆帯断面カマボコ状	黒 / 砂粒中 量、礫微量	加曾利 E1b式	(E-4)
第201図 41 図版135-41	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部	地文は単筋乱横位 / 口縁部は隆帯によって面す、上端1 本 / 口縁部区画内にr2本1対の隆帯による渦巻文 / 隆帯断 面カマボコ状	黒褐 / 砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E1c式	146Y
第201図 42 図版135-42	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	内湾する口縁部	地文は単筋乱横位 / 隆帯による口縁部区画 / 沈線による 渦巻文 / 渦巻文下位に隆帯が4本直状に垂下 / 隆帯断面カ マボコ状	明赤 / 砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E1c式	(B-3)
第201図 43 図版135-43	深鉢	口縁部～ 胴部 破片	厚 0.9	外傾する胴部 / 内 湾する口縁部	地文は単筋乱横位・斜位 / 口縁部は上端1本、下端1本の 隆帯で面す / 区画内に1本の隆帯を弧状に貼付 / 胴部無 文 / 隆帯断面カマボコ状	灰黄褐 / 砂 粒中量、礫 微量	加曾利 E1c～ E2a式	(D-5)
第201図 44 図版135-44	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外傾する胴部	地文は縦位条線文 / 2本1対の沈線が弧状に垂下	明赤 / 砂粒 少量、礫微 量	加曾利 E2c式	146Y
第201図 45 図版135-45	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	内湾する口縁部、 口縁部は内側に肥 厚	楕円状の区画、区画内側に縦位沈線充填	黒褐 / 砂粒 中量、礫微 量	加曾利 E2式	7横
第201図 46 図版135-46	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外反する胴部	地文は単筋乱横位 / 3本1対の沈線が直状に垂下 / 直状の 沈線間に1本の沈線が弧状に垂下	に、黄褐 / 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E2式	13M
第202図 47 図版135-47	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外反する胴部	地文は単筋乱横位 / 1本の沈線が弧状に垂下 / 1本の沈線 が弧状に垂下	に、黄褐 / 砂粒少量、 礫微量	加曾利 E2式	(B-5)

第86表 縄文時代遺構外出土土器一覧3

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第202図 48 図版135-48	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	内湾する口縁部	地文は卑部 LR 縦位 / 隆帯による口縁部区画 / 左側の区画内には弧状の隆帯 / 隆帯断面形状	にぶい黄褐色 / 砂粒 / 礫少量	加曾利 E2 ~ 3	6方
第202図 49 図版135-49	深鉢	口縁部~ 胴部 破片	厚 1.1	外積する胴部 / や 内湾する口縁部	地文は卑部 LR 縦位 / 口縁部は上端 1 本、下端 1 本の隆帯で画す / 口縁部区画内には隆帯を横位 S 字状に貼付、片側の先端には渦巻文 / 胴部に逆 U 字状の沈線、沈線内側地文磨消し / 隆帯断面形状	にぶい黄褐色 / 砂粒・礫中量	加曾利 E3a 式	12M
第202図 50 図版135-50	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する口縁部	地文は卑部 LR 縦位 / 口縁に隆帯を弧状に貼付、口縁部区画か / 隆帯断面力マボコ状	灰黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E3b ~ c 式	5方
第202図 51 図版135-51	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外積する胴部	地文は卑部 RL 縦位 / 幅広の沈線による弧状の文様	にぶい濁 / 砂粒・礫微量	加曾利 E3 式	(B-2)
第202図 52 図版135-52	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外積する胴部	地文は波状の条線文 / 沈線が直状に垂下し右側は地文を磨消す	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫中量	加曾利 E3 式	(C-4)
第202図 53 図版135-53	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	やや外積する口縁部	口縁に沿って 1 本の隆帯が横走 / 縦位隆帯が僅かに残存 / 斜位沈線を充填 / 隆帯断面力マボコ状	にぶい濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E3 並行	(D-6)
第202図 54 図版135-54	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	外積する口縁部	地文は卑部 RL 横位 / 口縁に沿う 1 本の沈線、沈線上位無文 / 沈線による逆 U 字状の文様、沈線内側地文磨消し	濁 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E4 式	6方
第202図 55 図版135-55	深鉢	口縁部 破片	厚 0.6	内湾する口縁部	地文は卑部 LR 縦位・横位の羽状横文 / 口縁に 1 本の沈線が沿う / 沈線による逆 U 字状の文様、内側は地文なし	にぶい黄褐色 / 砂粒・礫微量	加曾利 E4 式	7横
第202図 56 図版135-56	深鉢	胴部 破片	厚 0.6	外積する胴部	地文は卑部 RL 縦位・横位 / 沈線を U 字状・逆 U 字状に施文 / 沈線内側に横文充填	濁 / 砂粒・礫微量	加曾利 E4 式	(C-4)
第202図 57 図版135-57	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外積する胴部	地文は卑部 LR 縦位 / 微隆起帯をやや弧状に貼付、微隆起帯内側は地文無し / 微隆起帯断面三角状	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	加曾利 E4 式	9H
第202図 58 図版136-58	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	外積する口縁部	沈線を斜位に施文、上に組状の隆帯を斜位に貼付	暗褐色 / 砂粒少量、礫微量	曾利 II 式	9H 下 部
第202図 59 図版136-59	深鉢	口縁部 破片	厚 1.7	外積する口縁部	半截竹管状工具の腹面による重弧文 / 僅かに組状の縦位隆帯が残存 / 口縁内側に沈線による渦巻文施文	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	曾利 II 式	(B-5)
第202図 60 図版136-60	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	やや外反する胴部	地文は卑部 RL 縦位 / 組状の隆帯を格子状に貼付、一部剥落	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	曾利 II 式	6方
第202図 61 図版136-61	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	外積する口縁部	波状口縁の波頂部 / 地文は縦位条線文施文後に縦位沈線を施文 / 波頂部に隆帯による渦巻文、隆帯は下位に伸びる / 隆帯断面力マボコ状	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	曾利 II ~ III 式	(B-2)
第202図 62 図版136-62	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	括れる胴部	地文は縦位条線文 / 胴部に 1 本の波状隆帯が横位に貼付 / 隆帯上位は無文	黒褐色~明黄褐色 / 砂粒・礫微量	曾利 III 式	(B-3)
第202図 63 図版136-63	深鉢	胴部 破片	厚 1.4	括れる胴部	上位は弧状の沈線、下位は横位沈線 / 破片の右端に隆帯の様な痕跡	明褐色 / 砂粒少量、礫微量	曾利 III 式	9H
第202図 64 図版136-64	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	外積する胴部	地文は縦位条線文 / 2 本 1 対の隆帯が直状に垂下 / 隆帯断面力マボコ状	濁 / 砂粒中量、礫微量	曾利 III 式	遺構外
第202図 65 図版136-65	深鉢	口縁部 破片	厚 1.4	外積する口縁部	地文は縦位条線文 / 口縁部に沿って沈線施文、沈線間に交互刺突文施文 / 3 本 1 対の沈線による連弧文	濁 / 砂粒少量、礫微量	連弧文 2b 段階	E-4)
第202図 66 図版136-66	深鉢	口縁部付 近~胴部 破片	厚 0.9	外積する口縁部付 近 / 括れる胴部	地文は縦位条線文 / 3 本 1 対の沈線による連弧文 / 括れ部には沈線を横位に施文、沈線間に交互刺突文を施し蛇行文状に成形	黒褐色 / 砂粒中量、礫少量、赤褐色の粒を多量含む	連弧文 2b 段階	6方
第202図 67 図版136-67	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	内湾する胴部	地文は縦位条線文 / 破片上端に 2 本の沈線が横走 / 2 本の沈線が波状に垂下	黒~暗 / 砂粒中量、礫少量	連弧文 2b 段階	6方
第203図 68 図版136-68	深鉢	口縁部~ 胴部 破片	厚 1.2	外積する口縁部~ 胴部	地文は隠系 L 縦位 / 口縁に 2 本 1 対の沈線が沿う / 2 本 1 対の沈線による波状文 / 断面の一部に黒色の付着物あり	にぶい黄褐色 / 砂粒・礫微量	連弧文 2 段階	148Y
第203図 69 図版136-69	深鉢	口縁部 破片	厚 1.2	下位は外積し上位 は内湾する口縁部	地文は隠系 L 縦位 / 口縁部に 3 本の沈線が横走、沈線上には円形刺突文施文	にぶい黄褐色 / 砂粒少量、礫微量	連弧文 2 ~ 3 段階	遺構外

第 86 表 縄文時代遺構外出土土器一覧 4

第3章 検出された遺構と遺物

発掘番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第203図 70 図版136-70	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外反する胴部	地文は断糸L縦文、胎体を引きずったためか糠状となる部分が多い/3本1対の沈線を弧状に施文/4本1対の沈線が横走/沈線部の地文は磨消し	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	連文式3段部	6方
第203図 71 図版136-71	深鉢	胴部 破片	厚0.6	やや外傾する胴部	地文は0段多糸LR横文/沈線による文様	褐/砂粒・礫微量	壺之内式	7層
第203図 72 図版136-72	深鉢	口縁部 破片	厚0.5	外傾する口縁部	口唇部に押圧/外面口縁部に沿う押圧文/内面口縁部に沿って凹形刺突文、沈線施文	黒/砂粒、礫微量	加曾利B式	7層
第203図 73 図版136-73	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾する胴部	沈線による斜格子文	褐/砂粒・礫微量	加曾利B式	9H
第203図 74 図版136-74	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	やや内湾する口縁部	地文は単筋LR横文/2本1対の沈線を口縁に沿って施文、部分的に沈線間の中央に1本の沈線が見られる/沈線間はほぼ地文は見られないが、一部に地文が見られる	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	後期安行	7層
第203図 75 図版136-75	浅鉢	体部 破片	厚0.9	内湾する体部	2本1対の隆帯を弧状に貼付/隆帯上側に沈線による渦巻文、周囲に弧状の沈線を充填/隆帯下位に縦文沈線充填/隆帯断面力でボコ状	明赤褐/砂粒中量、礫微量	加曾利E1式	遺構外

第86表 縄文時代遺構外出土土器一覧5

発掘番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第203図76 図版136-76	土器 片断	完形	4.3/3.3/0.6	13.5	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/角押文による文様	黒褐/砂粒少量、礫微量、雲母多量	何玉台1a式	9H
第203図77 図版136-77	土器 片断	完形	5.8/6.0/1.3	84.1	方形/挾部は2ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/縦文隆帯にC字状の隆帯を貼付し楕円状の区画を成形/隆帯脇に三角押文が沿う/区画内僅かに横位の三角押文が見られる/隆帯断面形状、カマボコ状	暗褐/砂粒少量、礫微量	磨板1b遺構式	遺構外
第203図78 図版136-78	土器 片断	40%	[5.1]/[3.5]/1.2	29	楕円形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は単筋LR/押圧文を付した隆帯を貼付、隆帯片側に三角押文、片側に角押文が沿う/角押文僅かに三角押文が見られる	明褐/砂粒少量、礫微量	磨板1式	9H
第203図79 図版136-79	土器 片断	80%	4.0/3.3/1.1	17.4	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/中央に窪みのある凹形の文様、横に押圧文	明褐/砂粒中量、礫微量	磨板2式	(C-4)
第203図80 図版136-80	土器 片断	完形	4.3/3.2/1.2	22.8	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/平行沈線による区画、区画内側に押圧文が沿い中央に沈線による文様か/区画外側にも押圧文が沿う	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	磨板3式	(B2)
第203図81 図版136-81	土器 片断	20%	[3.0]/[3.9]/0.8	11.1	形状不明/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/押圧文を付した直状の隆帯/隆帯の左側には三角押文列、右側には沈線列/隆帯断面カマボコ状	明褐/砂粒少量、礫微量	磨板3式	(D-4)
第203図82 図版136-82	土器 片断	20%	[3.3]/[5.2]/1.9	26.3	形状不明/挾部は1ヶ所残存、有孔跨付土器の孔を利用、内面が糠状に深く削られる/周縁の磨耗は未発達/脚部を利用	赤褐/砂粒中量、礫微量、雲母中量	磨板式	(F-5)
第203図83 図版136-83	土器 片断	40%	[3.5]/[5.3]/1.0	25.3	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/地文は断糸L/半載竹筴状工具の横面による平行沈線	褐/砂粒少量、礫微量	加曾利E1a式	(D3)
第203図84 図版136-84	土器 片断	60%	[4.2]/[4.2]/1.1	20.9	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/地文は単筋RL/1本の直状の沈線	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	加曾利E式	148Y
第203図85 図版136-85	土器 片断	60%	[4.8]/[3.2]/1.1	21.6	形状不明/挾部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/胴部片利用/地文は縦文縦線か/沈線を2本施文	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期後葉	BSG
第203図86 図版136-86	土器 片断	90%	3.3/[2.5]/0.8	9.6	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/断糸R	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉	(C-6)
第203図87 図版136-87	土器 片断	完形	3.7/3.3/0.7	12	楕円形/挾部は2ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/地文は単筋RL	褐/砂粒・礫微量	中期中葉～後葉	7層
第203図88 図版136-88	土器 片断	40%	[2.0]/[3.1]/0.9	7.5	方形か/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/胴部片利用/地文は無筋Rか	褐/砂粒少量・礫微量	中期中葉～後葉	7層
第203図89 図版136-89	土器 片断	完形	4.7/3.2/0.8	16.9	楕円形/挾部は4ヶ所/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	黒褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉	7層
第203図90 図版136-90	土器 片断	完形	6.4/5.1/1.5	64.3	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/胴部片利用/残存部無文	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉	145Y
第203図91 図版136-91	土器 片断	90%	[4.8]/[3.8]/1.4	34	方形/挾部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文	黒/黄褐色/砂粒中量、礫微量	中期中葉～後葉	5方
第203図92 図版136-92	土器 片断	80%	[7.0]/[3.4]/1.8	62.9	方形/挾部は1ヶ所残存/周縁は一部磨耗/口縁部片利用/無文	黒/黄褐色/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉	(D3)
第203図93 図版136-93	土器 片断	70%	[7.0]/[5.3]/1.3	70.6	楕円形/挾部は1ヶ所残存/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/無文	暗褐/砂粒少量、礫微量	中期中葉～後葉	(B1)

第87表 縄文時代遺構外出土土器製品一覧1

神岡番号 図版番号	種別	遺存 状態	長さ/幅/厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式	出土 位置
第203図94 図版136-94	土製 片蝋	60%	15.9/16.6/1.6	63.9	形状不明/残部は2ヶ所/周縁は一部磨耗/底部片利用/ 残存部無文/観代直無し	赤褐/砂粒・礫 少量	中期中葉 ～後葉	146Y
第203図95 図版136-95	土製 片蝋	40%	12.2/13.1/0.9	6.7	楕円形か/残部は1ヶ所残存/周縁の磨耗は未発達/胴 部片利用/残存部無文	黒褐/砂粒中量、 礫微量	中期中葉 ～後葉	145Y
第203図96 図版136-96	土製 円盤	完形	4.1/3.7/0.9	19.3	方形/周縁は顕著に磨耗/胴部片利用/角押文による文 様/外面から内面に向けて1ヶ所(貫通)、内面から外面 に向けて1ヶ所(未貫通)の穿孔あり	にぶい黄褐/砂 粒・礫微量	7種 磨版1a 式	
第203図97 図版136-97	土製 円盤	50%	15.2/5.7/1.0	46.2	楕円形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/押圧文に波状沈 線が沿う	暗褐/砂粒少量、 礫微量	磨版2b 式	145Y
第203図98 図版136-98	土製 円盤	完形	3.1/2.8/0.9	10.5	楕円形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	明褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉	9H
第203図99 図版136-99	土製 円盤	完形	4.3/3.9/1.3	24.8	楕円形/周縁はごく一部磨耗/胴部片利用/残存部無文	にぶい黄褐/砂 粒中量、礫微量	中期中葉 ～後葉	148Y
第203図100 図版136-100	土製 円盤	90%	5.0/4.5/0.9	26	楕円形/周縁は磨耗が未発達/胴部片利用/残存部無文	褐/砂粒少量、 礫微量	中期中葉 ～後葉	(C)3
第203図101 図版136-101	土製 円盤	80%	3.8/3.3/1.2	19.3	楕円形/周縁は一部磨耗/胴部片利用/無文	灰黄褐/砂粒・ 礫微量	中期中葉 ～後葉	(E)5

第87表 縄文時代遺構外出土土製品一覽2

神岡番号 図版番号	器種	部位 遺存 状態	法 量 (cm)	器形・形 態	文様・特徴	胎土	出土 位置
第204図102 図版137-1- 102	甕	底部 破片	高14.0 底10.2 厚1.1	胴部はやや外反 してゆるやかに 立ち上がる	外面:胴部には横位または縦位のナデで一部は磨き状になっ ている/底面はナデ/内面:横位のナデで一部は磨き状になっ ている	外面:黒 内面: 黒褐/白色粒子 少量	209D
第204図103 図版137-1- 103	甕	頸部 ～胴 部破片	厚1.1	胴部は大きく可 なり外反し、 頸部は直線的で ある	外面:頸部屈曲付近上位に縦位と右下からの刺毛、下位の縦位の 磨き部分が赤彩される/胴部は上から原体Rの磨余文が1段、 原体RのS字状結節文が1段、横位の磨き部分が赤彩され、 原体Rの磨余文が1段、原体RのS字状結節文が1段、原体Rの磨 余文が1段、原体RのS字状結節文が1段、胴面文の上側に横位の ナデ、胴面文の下側に赤彩され、縦位の磨き部分が認められる 内面:頸部は赤彩され、横位の磨き部分/胴部は横位のナデ/方 出土の破片(第178図2)と同一個体の可能性がある/胴部内 外面、胴部外面に赤彩あり/内外面とも剥落が著しい	外面:にぶい黄 褐・赤彩部分に ぶい赤褐/内面: にぶい黄褐/白 色粒子、小礫少 量、砂粒、赤色 粒子微量	201D

第88表 弥生時代後期～古墳時代前期遺構外出土土器一覽

神岡番号 図版番号	器種	部位 遺存 状態	法 量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考	出土 位置
第205図104 図版137-2-104	須恵器 碗形土器	体部～高 部20%	口12.7 底7.4	外面:青灰/ 内面:青灰	白色粒子少量、小礫微 量	高台内回転盤割り/回転ナデ	東金子窯産	(C)6
第205図105 図版137-2-105	須恵器 碗形土器	底部 破片	厚0.6	外面:青灰/ 内面:青灰	白色針状物質・砂粒少 量、長石・石英微量	底部回転盤割り/回転ナデ	胎山窯産	116J

第89表 奈良・平安時代遺構外出土土器一覽

神岡番号 図版番号	器種	部位 遺存 状態	法 量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考	出土 位置
第206図106 図版137-3-106	陶器直縁 大皿	口縁部 破片	厚0.5	外面:オリーブ灰/ 内面:オリーブ灰	砂粒・長石微量	内外面とも灰釉	古瀬戸後期/ 15世紀前期	146Y
第206図107 図版137-3-107	漆鉢	胴部～底部 破片	高14.0 厚1.5	外面:黒褐/内面: 黒褐	砂粒微量	内面:漆目/外面:轆轤目/鉄軸	瀬戸・美濃系 /17世紀以降	(F)3
第206図108 図版137-3-108	ほうろく	口縁部5%	厚0.6	外面:オリーブ黒/ 内面:灰白	白色粒子少量	外面:スス付着/横ナデ		7種

第90表 中世以降遺構外出土土器一覽

神岡番号 図版番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴	出土 位置
第207図109 図版138-109	石鏡	チャート	22.6	14.9	4.2	1.2	凹基無茎/側縁は緩やかな弧状を呈する/縁は深く弧 状	(D)3
第207図110 図版138-110	石鏡	黒曜石	16.5	15.3	4.1	0.8	凹基無茎/側縁は直線状で副衝縁/縁は浅く弧状/片 部欠損	(C)4

第91表 縄文時代遺構外出土土器一覽1

第3章 検出された遺構と遺物

神岡番号 図版番号	器 種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴	出土 位置
第 207 図 111 図版 138-111	楔形石器	黒曜石	15.0	17.0	7.1	1.6	敲打痕が下端にみられる	(B-6)
第 207 図 112 図版 138-112	楔形石器	黒曜石	12.2	10.8	7.6	0.8	上下に両側剥離が認められる	6 方
第 207 図 113 図版 138-113	打製石斧	頁岩	96.6	38.7	14.7	70.2	短冊形 / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	7 種
第 207 図 114 図版 138-114	打製石斧	砂岩	94.6	40.5	16.2	82.4	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の中央部の稜上に潰れが認められ、面状になっている	13M
第 207 図 115 図版 138-115	打製石斧	黒色片岩	103.1	39.4	14.8	79.5	短冊形 / 基部は折れて欠損している / 裏面が赤色化しており、焼熟の可能性がある	6 方
第 207 図 116 図版 138-116	打製石斧	砂岩	120.1	41.7	14.7	88.0	短冊形 / 裏面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	遺構外
第 207 図 117 図版 138-117	打製石斧	ホルンフェルス	121.7	43.0	23.2	175.0	短冊形 / 刃部は一部折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	遺構外
第 207 図 118 図版 138-118	打製石斧	緑色 凝灰岩	124.4	40.5	22.5	129.8	短冊形 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 磨製石斧の転用	(F-3)
第 207 図 119 図版 138-119	打製石斧	砂岩	69.4	27.1	15.2	39.5	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる / 両側縁の上部の稜上に潰れが認められる	(C-5)
第 207 図 120 図版 138-120	打製石斧	緑色 凝灰岩	78.7	33.5	14.5	39.0	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	5 方
第 207 図 121 図版 138-121	打製石斧	緑色 凝灰岩	72.3	43.1	19.5	78.4	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 裏面に一部原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	(C-5)
第 207 図 122 図版 138-122	打製石斧	ホルンフェルス	82.1	44.5	18.1	89.9	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	(F-3)
第 207 図 123 図版 138-123	打製石斧	砂岩	87.7	48.2	25.5	135.8	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	遺構外
第 207 図 124 図版 138-124	打製石斧	砂岩	93.4	48.6	33.3	168.8	短冊形 / 刃部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	(B-3)
第 207 図 125 図版 138-125	打製石斧	砂岩	79.8	52.3	23.0	108.5	短冊形 / 刃部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる	(B-3)
第 207 図 126 図版 138-126	打製石斧	砂岩	56.4	32.5	16.0	37.4	短冊形 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる / 左側縁の稜上に潰れが認められる、面状になっている	13M
第 208 図 127 図版 138-127	打製石斧	砂岩	102.5	42.4	13.5	58.8	楕形 / 基部は折れて欠損している / 表面に一部原礫面が残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	(B-5)
第 208 図 128 図版 138-128	打製石斧	砂岩	99.2	53.2	19.4	110.2	楕形 / 両側縁に敲打剥離が認められる	7 種
第 208 図 129 図版 138-129	打製石斧	頁岩	67.4	30.0	12.6	28.7	楕形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	遺構外
第 208 図 130 図版 139-130	打製石斧	砂岩	77.4	51.7	12.4	57.4	楕形 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	9H
第 208 図 131 図版 139-131	打製石斧	ホルンフェルス	102.5	62.5	16.5	98.9	楕形 / 刃部の一部は折れて欠損している / 両側縁に敲打剥離が認められる	7 種
第 208 図 132 図版 139-132	打製石斧	頁岩	77.0	68.4	23.5	146.7	楕形 / 刃部のみ残存	12M
第 208 図 133 図版 139-133	打製石斧	砂岩	60.0	71.2	17.8	86.0	楕形 / 刃部のみ残存 / 表面は原礫面が広く残存し、両側縁に敲打剥離が認められる	9H
第 208 図 134 図版 139-134	打製石斧	結晶片岩	53.2	32.5	6.6	14.0	平面形状は不明 / 基部のみ残存 / 両側縁に敲打剥離が認められる	147Y
第 208 図 135 図版 139-135	横刃形石器	砂岩	65.3	79.5	14.0	82.0	両面側末端に不連続な二次的剥離が認められる	148Y
第 208 図 136 図版 139-136	二次加工 刮片	砂岩	107.1	66.8	18.2	203.7	裏面側末端に連続的な二次的剥離が認められる	145Y
第 208 図 137 図版 139-137	二次加工 刮片	緑泥片岩	190.6	55.5	25.8	401.4	表面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる	遺構外
第 209 図 138 図版 139-138	二次加工 刮片	黒曜石	23.1	16.5	7.3	2.7	表面側両側縁に不連続な二次的剥離が認められる	6 方
第 209 図 139 図版 139-139	二次加工 刮片	黒曜石	11.5	12.7	2.9	0.4	裏面側末端に不連続な二次的剥離が認められる	6 方
第 209 図 140 図版 139-140	石核	黒曜石	12.3	22.5	11.9	4.8	正面側において、上面を打面として刮片が行われている	(E-4)
第 209 図 141 図版 139-141	磨石	安山岩	71.2	76.0	59.0	386.1	表裏面に磨痕 / 敲打痕が両側縁にみられる / 焼熟の可能性があり / 焼熟の可能性が高い	(B-2)
第 209 図 142 図版 139-142	敲石	閃緑岩	90.8	57.0	20.5	149.3	敲打痕が両側縁にみられる	(D-5)
第 209 図 143 図版 139-143	敲石	緑色 凝灰岩	115.6	34.7	26.1	146.4	敲打痕が両側縁にみられる	12M

第 91 表 縄文時代遺構外出土石器一覧 2

第4章 調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代中期の住居跡20軒・土坑26基・埋葬1基・集石5基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡5軒・方形周溝墓2基・奈良・平安時代の住居跡2軒、溝跡2本、中世以降の柵列1本・集石5基を検出した。

ここでは、本地点から検出された主な遺構・遺物について、順次時代順に述べることとする。

第1節 西原大塚遺跡第35地点出土の縄文時代中期の土器について

(1) 編年の枠組み

ここでは、本地点から出土した縄文時代中期に帰属する復元個体について、既存の土器型式編年を参照しながら、その編年の位置付けを行うこととする。

中期土器編年の枠組と呼称については黒尾和久の研究成果(黒尾 1995)に基づきつつ、その細別時期・型式の特徴や内容等については、新地平編年(小林・中山・黒尾 2004、黒尾 2016、中山 2016)や、新地平編年との対比が明らかな編年研究(中山・宇佐美・武川・黒尾 2004、大綱 2016、柳原 2016)を参照した。

以上のような編年の枠組を用いながら、今回出土した土器を個体レベルで編年的な位置づけを検討した結果、下記の1～9期を設定することとなった。以下、各期の土器様相について述べる。

(2) 各期の土器様相

1期：勝坂3b古式期

本期の特徴は、区画文を形成する隆帯上に押圧文を付すこと、区画文内に単沈線や並行沈線による縦位沈線文列や角押文列を密に充填することなどである。

1・2はキャリパー形深鉢である。1は無文の口縁部を持ち、やや外反する胴部には断面台形の隆帯による区画文を配し、区画文内には沈線文列の充填が目立つ。2は口縁部、胴部上半、胴部下半が無文部によって画され、3段の文様帯を持つ。口縁部の区画文を形成する隆帯上の押圧文が密に付されるが、胴部上半及び下半の区画文を形成する隆帯上には一部を除き押圧文は付されない。胴部上半・下半の区画文内には、沈線による三角文ないし三叉文が充填され、空白部が目立たない。

3は樽型の深鉢で、無文の口縁部にイノシシを模したと思われる把手が付くことに加え、胴部上半の文様帯内には、ヘビを模したと思われる区画文が配されており、特徴的な資料と言える。

4は円筒形深鉢と思われ、幅広の隆帯による人体意匠文が配し、区画文間には沈線文列が充填される。

5は円筒形深鉢で、胴部上半にはパネル文が配され、胴部下半は無文となる。

2期：勝坂3b新式期

本期の特徴は、区画文を形成する隆帯や隆帯上加飾である角押文・交互刺突文等が粗大化または矮小化すること、隆帯上加飾に沈線が用いられること、区画文内の副文様が低調になること、文様帯内にも地文が施されることなどである。

本期は勝坂式の終末期であると同時に、加曽利E式成立直前期であることから、勝坂式・阿玉台式・

加曾利E式・大木式といった各型式の要素が複雑に絡まりながら多様な土器様相を示しており、上記の特徴を備えていない土器も多く認められている。ここでは各個体を本期に比定させた根拠の一つとして、これまで認識されてきた類型名(中山・宇佐美・武川・黒尾 2004)を適宜付して説明する。

6は幅広の背割隆帯による横位のS字ないし波状文が配され、区画文内の一部に沈線文列や渦巻文が配されるほかは空白部が目立ち、地文は施されない。「勝坂タイプ(口縁部一体型)」と呼称される。

7～9は「加納リタイプ」と呼称される一群で、6は5単位、7・8は4単位の波状口縁を持つ。いずれも沈線や押圧文で加飾された粗大な隆帯により、十字文等の区画文が配されている。

10は「多喜窪タイプ」と呼称される土器で、口縁部には人面把手、へび状把手、へび状貼付文などが施されており、特徴的な資料である。当該資料の位置づけについては、付編1を参照されたい。

11は「キャリバー形細文・燃糸文系」と呼称される土器で、大形の把手が配されていたと思われる。

12～15は「パネル文崩れ」と呼称される一群で、12は無文の口縁部が省略され、13は長胴で、14は区画文を持たない。

16は無文の直立する波状口縁(4単位)を持ち、口縁部に文様帯を配する土器である。口縁部文様帯が比較的狭いこと、区画文内に交互刺突文を多用すること、頸部以下の地文が単節RL横位施文を主体としていることを東関東系の特徴と捉え、「下総(中峠)系」に比定する。

17～29は「小型円筒形深鉢」と呼称される一群である。胴部上半に隆帯による区画文を配し、下半に地文を施す資料(16～24)を典例型とし、胴部下半は無文とするもの(25・26)、縦位沈線のみ施文するもの(27)がある。28は、やや樽形を呈しており、東関東ないし北関東の特徴といえようか。

30は口縁部に交互刺突を付した隆帯が巡り、胴部には隆帯による十字文が配される土器である。「パネル文崩れ」もしくは「大木系」に比定されよう。

31～36は「中帯文系」と呼称される一群で、樽形の器形と胴部上半に文様帯を配することが特徴である。32～35は、口縁部に筒状ないしへび状の把手が付いていることが特徴的である。

37～39は浅鉢形土器である。39は、2本1対の細い隆帯による波状文や十字状文が配されており、大木8a式に比定される。本資料のようなティピカルな大木8a式は、志木市を含む武蔵野台地北東部においては希少例である。

口縁部に文様帯を持つキャリバー形深鉢と、胴部上半に文様帯を持つ円筒形深鉢を主体にした土器様相は、本遺跡や周辺地域を対象とした分析例(新藤2009、高橋2003、徳留2022)と共通している。

3期：加曾利E1a式期

本期の特徴は、武蔵野台地型 先述の加曾利E式成立の「要件」(黒尾 2004・2016・2017)全てを満たしている個体とその伴出資料を本期に比定した。黒尾の示した要件は「①燃糸(L燃)の全面施文(頸部は素文になるものもある)、②隆起帯によって口縁部文様帯の上下区画をする、③口縁部には横位のL燃地文の施文、④文様要素として、2本の並行粘土紐を使用、⑤屈折底の痕跡化(キャリバー器形の成立)、⑥口縁部文様帯内の「横S字モチーフ」の連結・連続化」(黒尾 2017)である。しかし③について筆者は、口縁部から胴部まで燃糸Lを縦位に施文する資料も加曾利E式に含まるべきと考えており(徳留 2019)、今回も45を本期に含めている。

40～45はキャリバー形深鉢で「武蔵野台地型加曾利E式」(谷井 1987)とされる土器である。いずれも燃糸Lを地文として施文した後、隆帯や半截竹管状工具による並行沈線で口縁部と胴部を画し、口縁部には2本1対の隆帯によるS字状文を配する土器である。

46は地文に単節RLを採用し、やや幅狭の口縁部文様帯には、断面が角状を呈した細めの隆帯によりS字状ないし蕨手状文が配され、胴部には3本1対の直状沈線や1本の波状沈線が垂下しており、大木式の影響を強く受けていると思われる資料である。

47は「小型円筒形深鉢」と呼称される土器であるが、胴部上半の区画文は隆帯ではなく沈線のみで描出され、下半は無文となる。48は攪系R縦位施文に、抑えの甘い隆帯による十字状文等を配する土器で、「パネル文崩れ」に比定される。47・48ともに勝坂式系の土器であるが、隆帯による区画文と副文様を特徴とする伝統的な勝坂式ではなく、「変異した勝坂式」（徳留2019）として位置づける。

49～53は「大木系（武蔵野台地型）」と呼称される一群である。いずれも口縁部が小波状を呈し、口縁部上端に加飾された隆帯が巡る。49は胴部が地文のみ、50～52は並行沈線による横位沈線や波状沈線が巡る。53は胴部に単節RL縦位施文後、3本1対の単沈線による直状文やクランク状文、単沈線による波状文が垂下しており、大木式の強い影響が看取される。

54～57は浅鉢で、54・55は有文、55・56は無文である。

4期：加曾利E 1 b 式期

本期の特徴は、攪系を地文とし、口縁部には2本1対の隆帯によるS字状文・弧状文が配され、その端部には沈線で小さめの渦巻文が付されること、橋状・逆C字状の大型中空把手が顕著に認められることである。また、胴部に1本ないし2本1対の直状・波状隆帯が垂下することなども本期の特徴である。文様構成では、口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部文様帯の3帯構成をとるもので占められる。

地文は攪系L縦位施文を主体とするが、61・62のように単節縄文がされるもの、69・71の口縁部のように縦位沈線文が充填されるものもある。

口縁部の単位文様に着目すると、58～62のようにS字状文の端部が大きいもの、63～68のようにS字状文が波状文ないし半楕円区画文化するとともに端部が渦巻文化するもの、69～72のように逆C字状や箱状の中空把手を有するものがある。

胴部文様では、2本1対ないし1本の隆帯による直上・波状隆帯が垂下するものを主体に、2・69・73・74のように渦巻状文を配するものも目立つ。

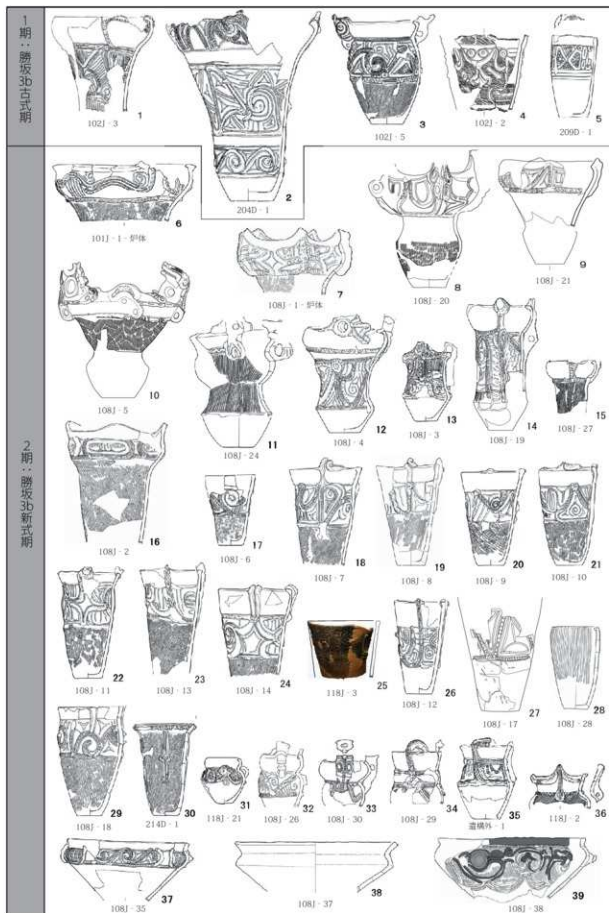
75は沈線による多重の渦巻状文を胴部に施す土器で、「複弧文系」に比定される。

以上、本期はほぼ全ての資料がキャリパー形の「武蔵野台地型加曾利E式」で占められ、土器群の斉一性が進行している様相が看取できる一方、口縁部文様帯におけるS字状文や区画文のあり方、地文の種類、中空把手の有無などに、小さくない変異幅が認められることが特徴といえる。

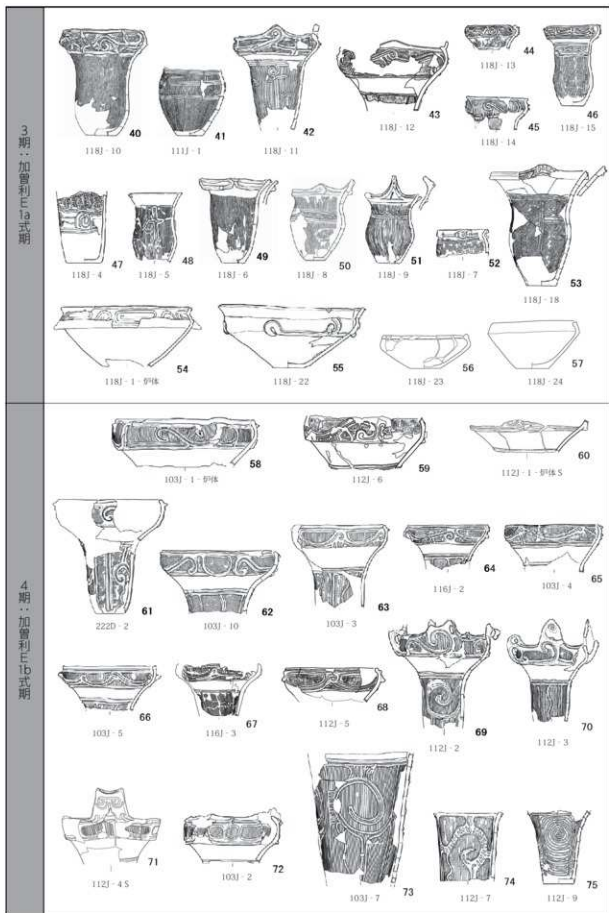
5期：加曾利E 1 c 式期／曾利II a 式期

本期の特徴は、大形把手の衰退、縄文地文の増加、口縁部の平縁化、口縁部S字状文の端部渦巻状文の大形化などが挙げられる。

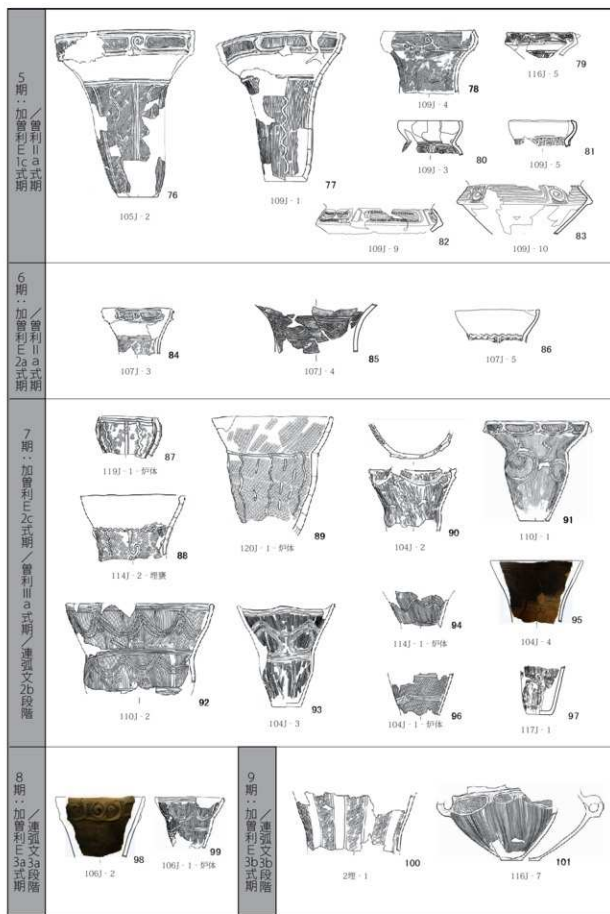
76～79はいずれも平縁のキャリパー形深鉢である。76・77は、口縁部に単位文化した半肉形状の渦巻状文と楕円区画文を配する。78は、口縁部に細い断面角状の隆帯による渦巻状文等を配し、胴部には3本1対の沈線による「几」字状の垂下文が施される。79は比較的狭い口縁部文様帯内に不定形の区画文が配され、胴部には3本1対の垂下文が配される。78・79ともに、大木式の要素が看取できる。胴部文様に沈線による垂下文を配することは、次期の加曾利E 2式の特徴であるが、口縁部の単位文様がやや古相であることや、同時期の大木8b式の胴部文様に3本1対の沈線が採用されていることを踏まえ、本期に比定した。



第210図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図①(1/12)



第211図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図② (1/12)



第212図 西原大塚遺跡第35地点出土土器編年図③(1/12)

80・81は、いずれも無文の内湾する口縁部を持つ曾利式系の土器である。ただし、80は撚糸L縦位施文を地文とし、また沈線で抑えられた2本1対の隆帯が頸部区画文や胴部垂下文に用いられる点、さらに、81の頸部に巡る抑えの甘い短い隆帯による斜格子目文の下に撚糸L縦位施文が施されている点などは、加曾利E式の特徴であり、曾利式・加曾利E式の特徴が混在していることが指摘できる。

82・83は浅鉢で、いずれも沈線による同心円状の方形区画や渦巻文等が配されている。

6期：加曾利E 2 a 式期／曾利II a 式期

本期の特徴としては、加曾利E式では、口縁部は平縁、地文は単節縄文、胴部文様には1・2本1対の沈線が直状・波状に垂下するものにほぼ統一されることである。また、曾利系の個体が伴うこと、加曾利E式土器に曾利系の要素が伴うことも特徴的である。

84・85は加曾利E式である。84は口縁部に渦巻状文を配するが、区画文内に短沈線による綾杉状文が施されており、曾利系の要素を看取できる。85は胴部に単節縄文を採用するものの、2～3本1対の横位波状沈線が巡り、やや古手の印象を受ける。

86は曾利式である。依存度が悪く、時期比定が困難であるが、頸部に抑えの甘い波状隆帯が1本巡ることや、地文に単節縄文が施されること、伴出資料などから本期に帰属させた。

7期：加曾利E 2 c 式期／曾利III a 式期／連弧文2 b 段階

本期の特徴としては、曾利式や連弧文系土器が主体を占めることである。

87～89は、いずれも時期比定が困難であるが、頸部に巡る区画線が沈線や1本の隆帯のみであることに加え、地文が口縁部にも及んでおり、口縁部と胴部の区画が比較的曖昧であること、胴部に垂下する隆帯が1本のみであることなどから、本期に比定する。

90・91は「つなぎ弧文類型」と呼称される一群である。口縁部に1本ないし2本1対の隆帯による半楕円区画文を配し、区画文内には縦位沈線文列を充填する。区画文の連結部分には渦巻状文を伴う。胴部には1～3本の沈線による垂下文や渦巻状文が配される。90の口唇部に確認できる斜行沈線は、斜行沈線土器の影響であろうか。

92～97は連弧文土器である。92・93のように主文様である連弧状文の他に副文様を配するものが特徴的である。94・95のように波状文化したものや、96のように横位の区画線のみのものである。

8期：加曾利E 3 a 式期／連弧文3 a 段階

本期の特徴としては、加曾利E式で胴部文様に磨消縄文が採用されることである。

98は口縁部文様帯に太い隆帯による区画文が配され、区画文内に円形刺突文が充填される。胴部にはやや幅広の磨消部を伴う。

99は連弧文土器で、口縁部と胴部の屈曲は比較的明瞭であるものの、口縁部の弧状文は沈線間に一部磨消を伴うことから、本期に比定した。

9期：加曾利E 3 b 式期／連弧文3 b 段階

本期の特徴は、加曾利E式では胴部の磨消部が幅広になることや、口縁部と胴部の区画が曖昧化することである。

100は口縁部を欠損しているものの、縄文部と磨消部が概ね同一幅である。

101は両耳壺で、口縁部文様帯と体部は太い沈線でのみ画され、体部には条線地文となる。

以上、本地点で出土した縄文土器について、時期を追って述べてきた。最後に、全体を通観した初見を述べることにする。

まず、1・2期とした勝坂式終末期の資料が豊富に得られた点が上げられる。中でも108 Jから出土した復元個体は38点を数えるとともに、周辺でも類例の少ない人面・蛇状把手付土器(10)が含まれている。特徴的な文様を有する資料としては、他にも、イノシシ状把手(3)や、人体意匠文(4)を有する土器が目されるだろう。

次に、勝坂式終末期から加曾利E式初頭期における大木式関連資料が得られたことである。加曾利E式の成立にあたっては大木式の強い影響が指摘される一方、当該地域においては大木式そのものの出土が僅少である。その中で、大木8a式の復元個体としては市内初の事例である39、そして大木式の影響を強く受けたと思われる46や53は、加曾利E式の成立を検討する上で重要な資料となるだろう。

また、曾利式や連弧文土器の動態も注目される。本地点では、5期で80・81といった曾利式系土器が出現し、6・7期にいたっては加曾利E式系の土器は殆ど確認されず、ほぼ曾利式や連弧文土器のみで占められる。次節で述べるように、8・9期では本遺跡全体で遺構数が減少していることと関連し、資料数は少なく判然としなが、概ね8期では僅かに連弧文土器が含まれ、9期では再び加曾利E式のみで構成されるようになると言えよう。

今後、本地点で得られた所見を踏まえつつ、本遺跡全体における編年を構築した上で、周辺地域を含めた土器様相の把握に努めたい。

引用・参考文献

- 大網信良 2016 「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：連弧文系」『シンポジウム縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築—発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討(1)」『論集 宇津木台 第1集 宇津木台地区考古学研究会』
- 黒尾和久 2016 「基調報告3：加曾利E式」『シンポジウム縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築—発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
- 黒尾和久 2017 「加曾利E1式の多様な系統と勝坂3式の「間」～武蔵野台地型加曾利E式の成立(勝坂式から加曾利Eへ)～について」『研究集会縄文研究の地平2017—土器から探る勝坂式と加曾利E式の間—発表要旨・資料集』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 「1. 多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『シンポジウム縄文研究の新地平3—勝坂式から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 谷井 彪 1987 「加曾利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集 埼玉の考古学』新人物往来社
- 徳留彰紀 2019 「武蔵野台地北東部および大宮台地における勝坂式終末期から加曾利E式初頭期の土器様相」『考古学の地平II—縄文時代中期の土器論と生業研究の新視点—』山本典幸・考古学の地平グループ編
- 永瀬史人 2008 「連弧文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 中山真治・宇佐美哲也・武川夏樹・黒尾和久 2004 「東京編年表(『東京①・②』)とその解説」『シンポジウム縄文研究の新地平3—勝坂式から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会

第2節 西原大塚遺跡の縄文時代中期集落の変遷について

(1) はじめに

西原大塚遺跡では、昭和48年度から令和5年度までの約50年間で、245地点にも及ぶ確認調査・発掘調査の結果、縄文時代中期に帰属すると思われる住居跡約200軒、土坑約560基と、数多くの遺構が検出されている(第213図)。これらの遺構群に対し、これまでいくつかの発掘調査報告書等において、集落の規模や分布傾向などが示されてきた(坂上2010、佐々木2010、徳留2015a・2015b、大久保2020)。しかしながら、本地点を含む未報告地点が残されていたこともあり、縄文集落研究においては基礎的な内容となる、集落の时期的推移については、提示されてこなかった。

ここでは、本報告により、本発掘調査が実施された地点の報告が概ね出揃ったことを受け、今後の調査・研究の検討材料とするべく、西原大塚遺跡における縄文時代中期集落の変遷について、暫定的に提示することとする(図版140・第92表)。なお、対象は出土遺物から時期比定が可能な住居跡のみとし、時期の呼称や編年の枠組みについては、前節と同様、既存の土器型式編年を参照した(註1)。

(2) 遺構の分布傾向について

集落の変遷を述べる前に、遺跡全体の遺構分布状況について、概要を整理しておく(註2)。

集落全体でみると、住居跡は北限を76 J(区36地点)、南限を157 J(第108地点)、西限を11 J(8地点)、東限を97 J(区41 II地点)とし、規模はおおよそ南北290 m×東西260 mである。

集落の中央には土坑群が分布し、その土坑群を取り巻くように、住居跡が円環状に分布している様相が看取され、所謂「環状集落」を形成しているといえる。遺跡西部域を中心に、未調査部分を多く残しており、不明瞭ではあるものの、概ね区25 IV地点周辺が集落の中心部分として捉えられようか。

(3) 中期集落の変遷

勝坂2式期/阿玉台Ⅱ式新～Ⅲ式期

住居跡9軒が該当する。疎らではあるものの、概ね円環状に分布している状況が看取できる。また、143 J・153 J、180 J・184 J、130 J・137 Jは、それぞれ近接しており、「分節構造」(谷口2005)を想起させる。本期が集落の開始期に位置づけられる。なお、83 J・181 Jが本期よりも古い阿玉台Ⅰb～Ⅱ式古期に位置づけられる可能性があるが、出土遺物が僅少であり、時期の特定が困難であったため、今回は割愛した。

勝坂3式期/阿玉台Ⅳ式期

住居跡41軒が該当し、直前の勝坂2式期に比して急増する。集落東部の第174地点・区17地点付近で特に凝集的に分布する一方、集落北部の区25 VII地点・第35地点東部・34地点・228地点東部、集落南部の区67南東部など、集落外縁部においても、一定の分布が認められ、全時期を通じて最も広範囲に分布している。

加曾利EⅠ式期/曾利Ⅰ～Ⅱ(古)式期

住居跡39軒が該当する。凝集性も高く、特に第35地点西部や第174地点では濃密に分布している。また、集落北西部の第222地点・区71地点、集落南西部の第172地点・区25 I地点・区4 I地点



第213図 西部大塚遺跡縄文時代遺構分布図(1/1500)

住居番号	調査区	時期	第2表報告書№ 及び備考
1	1(A)	加賀利E3b	№1
2	1(A)	加賀利E3c	№1
3	1(A)	加賀利E3	№1
4	1(A)	加賀利E3	№1
5	1(A)	加賀利E3	№1
6	3(C)	加賀利E3	№3
7	3(C)	加賀利E3b / 産気文3b	№3
8	3(C)	加賀利E3b	№3
9	3(C)	加賀利E3a-b	№3
10	3(C)	加賀利E3b	№3
11	8	加賀利E3e	№3
12	区17	加賀利E1a	№38
13	区8	加賀利E1	№38
14	区11	加賀利E1	№38
15	区13	加賀利E1	№38
16	区13	加賀利E1	№38
17	34	加賀利E1	№19
18	区4、区13	加賀利E1a	№38
19	区17	加賀利E2	№38
20	区17、区30	加賀利E2	№38
21	区17	加賀利E2	№38
22	区17、区24	加賀利E2c	№38
23	区17	加賀利E2	№38
24	区17	加賀利E1a	№38
25	区17	加賀利E2	№38
26	区22、区130	加賀利E2	№38
27	区22	加賀利E2c / 加賀利Ea	№38
28	区24 / 区3	加賀利E3a	№38 / №25
29	区24	加賀利E3	№38
30	区27	加賀利E1b	№38
31	区27	加賀利E2	№38
32	区27	加賀利E2	№38
33	区27	加賀利E2	№38
34	区27	加賀利E1b	№38
35	区7、区38	加賀利E2c	№22 / №38
36	区38	加賀利E1b	№38
37	区38 / 区17a	加賀利E1b	№38
38	区38	加賀利E2	№38
39	区38 / 区17a	加賀利E2	№38
40	区38	加賀利E2	№38
41	区38 / 区17a	加賀利E2	№38 / №30
42	区38	加賀利E2	№38
43	区10	加賀利E2	№38
44	区24	加賀利E1b	№38
45	区24	加賀利E2	№38 / 詳細不明
46	区25	加賀利E3	№38
47	区25	加賀利E3	№38
48	区25	加賀利E1b	№38
49	区25	加賀利E3a	№38
50	区25	加賀利E2	№38
51	区25	加賀利E2	№38
52	区25	加賀利E2	№38
53	区25	加賀利E2c	№38
54	区25	加賀利E2	№38
55	区25	加賀利E2c	№38
56	区26	加賀利E2c	№38
57	区29	加賀利E2	№38
58	区30	加賀利E3	№38
59	区30	加賀利E3a	№38
60	区30	加賀利E2c / 産気文2b	№38
61	39	加賀利E3b	№22
62	39	加賀利E2	№22
63	39	加賀利E1b-c	№22
64	区30	加賀利E2	№38 / 詳細不明
65	43	加賀利E3a / 産気文3a	№25
66	区33	加賀利E2	№38
67	区33	加賀利E2	№38
68	43	加賀利E2	№25
69	43	加賀利E2c / 産気文2a	№25
70	43	加賀利E2c / 産気文2a	№25
71	43	加賀利E2	№25
72	43	加賀利E2	№25
73	43	加賀利E2	№25
74	区13	加賀利E1b	№25
75	区36	加賀利E3	№38
76	区36	加賀利E2	№38
77	区36	加賀利E2	№38
78	区13	加賀利E1a	№38
79	区24	加賀利E1a	№38
80	区24	加賀利E2	№38
81	区24	加賀利E1b	№38
82	区24	加賀利E1b	№38
83	区24 / 区30	阿玉付E1	№38
84	区13	加賀利E2	№38
85	区13	加賀利E2b	№38
86	区13	加賀利E2	№38
87	区13	加賀利E2	№38
88	区13	加賀利E2c / 産気文2b	№38 / №84
89	区13	加賀利E2c / 産気文2b	№38 / №38
90	区13	加賀利E1b	№38 / №84
91	区13	加賀利E2	№38
92	区13	加賀利E2	№38
93	区13	加賀利E2	№38
94	区13	加賀利E2	№38
95	区13	加賀利E2	№38
96	区13	加賀利E2	№38
97	区13	加賀利E2	№38
98	区13	加賀利E2	№38
99	区13	加賀利E2	№38
100	70	加賀利E3	№100
101	35	加賀利E2	№38
102	35	加賀利E2	№38

住居番号	調査区	時期	第2表報告書№ 及び備考
103	35	加賀利E1b	№38
104	35	加賀利E2c / 産気文2b	№38
105	35	加賀利E1c	№38
106	35	加賀利E2a / 産気文3a	№38
107	35	加賀利E2	№38
108	35	加賀利E2	№38
109	35	加賀利E2	№38
110	35	加賀利E2	№38
111	35	加賀利E1a	№38
112	35	加賀利E1b	№38
113	35	阿玉付E1	№38
114	35	加賀利E2c / 産気文2b	№38
115	35	加賀利E2	№38
116	35	加賀利E1b	№38
117	35	加賀利E2c / 産気文2b	№38
118	35	加賀利E2	№38
119	35	加賀利E2c	№38
120	区130、35	加賀利E2c / 加賀利Ea	№38 / 本報告
121	70	加賀利E2	№38
122	区25	加賀利E2	№38
123	区25	加賀利E1b	№38
124	区25	加賀利E2	№38
125	区7	加賀利E1b	№38
126	区25	加賀利E2	№38
127	区25	加賀利E2	№38
128	区38	加賀利E3	№38
129	区25	加賀利E2	№38
130	区25	加賀利E2	№38
131	67	加賀利E2c / 産気文2a	№35
132	67	加賀利E2a / 加賀利E1a	№35
133	67	加賀利E2a / 加賀利E1a	№35
134	67	加賀利E2a / 産気文3a	№35
135	67	加賀利E1c	№35
136	67	加賀利E1c	№35
137	区25	加賀利E2	№38
138	区7	加賀利E1b	№38
139	区7	加賀利E1b	№38
140	120	加賀利E2	№41
141	区130	加賀利E2b	№38
142	区130	加賀利E2	№38
143	区130	加賀利E2	№38
144	区130	加賀利E1c	№38
145	区130	加賀利E2	№38
146	区130	加賀利E2	№38
147	区130	加賀利E1b	№38
148	区130	加賀利E2a-b / 加賀利E1a-b	№38
149	区130	加賀利E2	№38
150	区130	加賀利E2	№38
151	区130	加賀利E3a	№38
152	区130	加賀利E2	№38
153	区130	加賀利E2	№38
154	区130	加賀利E2	№38
155	区130	加賀利E2c / 産気文2b	№38
156	区130	加賀利E2	№38
157	108	加賀利E2	№38
158	172	加賀利E3	№69
159	172	加賀利E3	№69
160	172	加賀利E1c	№69
161	172	加賀利E3	№69
162	172	加賀利E2	№69
163	172	加賀利E3	№69
164	172	加賀利E2	№69
165	172	加賀利E1b	№69
166	172	加賀利E4	№69
167	172	加賀利E2	№69
168	172	加賀利E2	№69
169	172	加賀利E1a	№69
170	172	加賀利E2	№69
171	172	加賀利E2	№69
172	172	加賀利E2c / 阿玉付E1	№69
173	172	加賀利E2c / 産気文2b	№69
174	174	加賀利E1c / 加賀利E2	№69
175	174	加賀利E2	№69
176	174	加賀利E2	№69
177	174	加賀利E2a-b	№69
178	174	加賀利E1b	№69
179	174	加賀利E1b	№69
180	174	加賀利E2	№69
181	174	阿玉付E1	№69
182	174	加賀利E2	№69
183	180	加賀利E2	№75
184	174	加賀利E2	№69
185	174	加賀利E2	№69
186	174	加賀利E1b	№69
187	222	加賀利E1b	№69
188	222	加賀利E1b	№69
189	222	加賀利E2	№69
190	222	加賀利E2	№69
191	222	加賀利E1c	№69
192	222	加賀利E2	№69
193	222	加賀利E2	№69
194	222	加賀利E2	№69
195	228	加賀利E2c / 産気文2b	№84
196	228	加賀利E2	№84
197	228	加賀利E2	№84
198	228	加賀利E2c / 産気文2b	№84
199	228	加賀利E2	№84
200	228	加賀利E2	№84
201	228	加賀利E2	№84
202	228	加賀利E2	№84
203	228	加賀利E2	№84
204	228	加賀利E2	№84

第92表 西原大塚遺跡縄文時代住居跡一覧

でも検出されており、最も円環状を呈している時期といえる。一方で、直前の勝坂3式期に比べ、やや分布域が狭まっている様相が看取される。

加曾利E 2式期/曾利II（新）～III（古）式期/連弧文1～2段階

住居跡45軒が該当する。直前の加曾利E 1式期から増加し、全時期を通じて最も多くの住居跡が該当する。住居軒数も多く、集落北東部の第35地点西部・区130地点・第67地点・第43地点では凝集的に分布している。集落中央西端に位置する区26地点の55J・56Jは、未調査部分の多い西部にあって、環状集落の形態を示す貴重な事例である。また、集落南西端に位置する11Jを除けば、直前の加曾利E 1式期に比べ、特に遺跡南側の分布域が狭まっていることが指摘できる。一方、集落東端に位置する195J・197J・201Jについても、集落外縁部に所在する住居跡として注意しておく必要がある。なお、遺物では、曾利式系や連弧文系といった、異系統土器が多く出土する傾向にある。

加曾利E 3式期/曾利III（新）～V（古）式期/連弧文3段階

住居跡31軒が該当する。直前の加曾利E 2式期から激減するものの、環状集落を維持している。第1（A）地点や第3（C）地点で顕著なように、集落中央に住居跡の分布が進行する。また、区130地点と第1（A）地点、第3（C）地点と第43地点、区25Ⅰ・Ⅱ地点と第39地点の概ね3か所に凝集的に分布している。一方で、集落の東端に位置する96Jや97Jの存在についても、直前の加曾利E 2式期に続き、注目される。

加曾利E 4式期/曾利V（新）式期

住居跡1軒が該当する。数が激減し、環状形態は看取できない。

以上、本遺跡における縄文時代中期集落の変遷について、住居跡の軒数と分布に着目して概観した。全体を通観すると、勝坂2式期に集落の形成が始まり、勝坂3式期に急増して広範囲・高密度に展開して盛期を迎え、続く加曾利E 1式期も安定して集落が形成され、加曾利E 2式期で増加に転じて最盛期を迎えつつ分布範囲をやや縮小させ、加曾利E 3式期では減少と縮小が進行し、加曾利E 4式期には1軒のみの検出となることが判明した。また、所謂「環状集落」としては、集落開始期の勝坂2式期から加曾利E 3式期まで継続して形成されていたと思われる。

今回は、大まかな変遷を捉えることを目的としたため、土器型式編年上の時間幅を大きくとったが、今後は、遺物・遺構の検討を進め、より細かな時期設定により、集落遺跡の形成過程の機微を捉える必要がある。また、中期中葉期では勝坂式系と阿玉台式系、中期後葉期では加曾利E式系と曾利式系や連弧文系といった、土器系統を踏まえた検討も必要となるだろう。

【註】

- 註1 本来であれば、住居跡のみならず、土坑や柱穴、埋裏、集石、包含層、遺構外出土土器を含め、すべての遺構を対象とした上で、遺物の出土状況や各遺構の切合関係、遺構間接合の結果等を踏まえて時期比定を行うべきであるが、今回は、それらの検討が不十分であることから、暫定的かつ大枠の提示であることを断っておく。また、今回は図版140の時期別分布図上で大まかな変遷を視覚的に捉えることを目的としたため、時期の標記（色分け）は、勝坂1・2・3期、加曾利E 1・2・3・4期とした上で、並行する土器型式を併記することとした。
- 註2 西原大塚遺跡における発掘調査は、区画整理事業に伴う調査と、それ以外の事業に伴う調査の2つに分けられる。両者を区別するため、便宜的に前者の地点面に「区画整理」と付し、略号についても先頭に「区」を表記する。なお、各調査地点の調査成果概要については第2・3表を参照されたい。

【引用・参考文献】

- 尾形剛敏 2007「第3章第2節 縄文時代中期後葉の土器について」『志木市遺跡群 15 西原大塚遺跡第 67 地点』志木市の文化財 第 37 集 埼玉県志木市教育委員会
- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 徳留彰紀 2013「第4章第1節 縄文時代中期の住居跡について」『西原大塚遺跡第 174 ①地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財 第 55 集 埼玉県志木市教育委員会
- 2015a「第4章第1節 縄文時代」『志木市遺跡群 22 西原大塚遺跡第 172 ①～④地点』志木市の文化財 第 67 集 埼玉県志木市教育委員会
- 2015b「埼玉県志木市西原大塚遺跡における縄文中期集落研究の基礎的資料」『あらかわ』第 16 号 あらかわ考古談話会
- 2022「第4章第1節 縄文時代の土器について」『志木市遺跡群 25 西原大塚遺跡第 174 ②～⑤地点』志木市の文化財 第 67 集 埼玉県志木市教育委員会
- 大久保聡 2020「第5章第2節 西原大塚遺跡第 222 地点の調査成果」『西原大塚遺跡第 220 地点 西原大塚遺跡第 222 地点 西原大塚遺跡第 227 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財 第 75 集 埼玉県志木市教育委員会

第3節 西原大塚遺跡出土の記号土器について

今回の調査では弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構として住居跡 5 軒と方形周溝墓が 2 基検出された。6 号方形周溝墓からは主体部が検出され、その覆土からはガラス小玉 7 点と碧玉製の管玉、ヒスイ製の小玉が各 1 点出土している。周溝内からは壺形土器が 2 個体検出されている。その 2 個体とも周溝のコーナー部分から出土しており典型的な出土パターンの範疇として捉えられる。一方、5 号方形周溝墓からもほぼ完形の壺形土器がコーナー付近から検出されている。その壺形土器の口縁部内面文様帯に三つ又の矢印状の線刻が認められ、所謂、『記号土器』と呼ばれる一群のものである。

5 号方形周溝墓出土の記号土器について

今回の調査で 5 号方形周溝墓から三又状の記号が記された弥生時代後期の壺形土器が検出された。土器は方形周溝墓の溝部西側コーナー付近から検出されている。

土器に記された記号は沈線で三又状に描いたものが口縁部内面の LR の単節縄文と R の S 字状節文が施文されている部分に 1ヶ所認められた。

三又状の沈線は中央の線を最初に引き、次に左線、そして最後に右線を引いていると思われる。

記号土器は梅原末治、森本六爾両氏によって注目され、小林行雄氏の唐古遺跡の報告書（小林 1943）で研究を推進させた。その後、佐原眞氏の研究（佐原 1980）や藤田三郎氏の分析により体系的な分類が行われた（藤田 1982）。その後、橋本裕行氏が藤田氏の分類を一部改変して提示し、東日本に分布する絵画・記号土器をまとめている（橋本 1988）。

今回の資料に関しては橋本裕行氏の 1988 年の「東日本弥生土器絵画・記号総論」の中で用いられた分類に準拠した（第 214 図）。それによると「分類上、絵画は Drawing の頭文字をとって D、記号は Mark の頭文字をとって M」とするとしている。その分類と分類表を見てゆくと本資料の記号は MB-IB²型に分類される（第 178 図 1）。この記号は橋本氏の上記論文では「MBIB²」が全体の 60% を占める。しかも、それが I 期～IV 期のすべての時期に認められる点が注目される」とし「長年にわたって使用されていることと使用頻度の高さから見て、弥生人にとって特殊な意味をもつ記号であった可能

性が強い。」と指摘している。関東地方の記号土器についても「②記号はⅣ期に盛行し、とくにMB-IB²型が記される場合が多い。③記号は細頸か広口の壺形土器に描かれるのが一般的である。」としている。

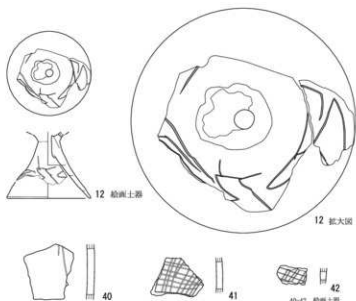
今回の調査で検出された記号土器の記号はMB-IB²型にあたる。壺形土器の口縁部内面文に描かれているが東日本で最も多く見られる記号の一群であると確認された。

周辺地域を概観すると志木市内では同じ西原大塚遺跡の第72地点405号住居跡(405Y)から絵画土器が検出されている(尾形 2024)。絵画土器は高環の脚台部をめぐる様に描かれており、「龍」か「鹿」を思わせるような線画である。その他、格子目状のものが2点と2本の直線が描かれているものが1点検出されており、格子目状のものは切妻の屋根を表していると想定している。断片資料であり、明確ではないがこの2点は記号土器のMIAⁿ型とも考えられる。隣接する朝霞市では向山遺跡第3地点C-3区第6号住居跡から三叉状のMB-IB²型の記号が記された土器が検出されている。土器は弥生時代中期宮ノ台式土器で、頸部に少なくとも3箇所認められる。その他、中道・岡台遺跡第6地点第3号住居跡からは船を描いたと思われる絵画土器が検出されている。土器は弥生時代後期の壺形土器で

A 柄 描	I (直 線)	A ₁		A ₂		A ₃		A ₄		A ₅		A ₆		A ₇		A ₈		A ₉		A ₁₀							
		A ₁₁	—	A ₁₂	=	A ₁₃	≡	A ₁₄	≡≡	A ₁₅	≡≡≡	A ₁₆	≡≡≡≡	A ₁₇	≡≡≡≡≡	A ₁₈	≡≡≡≡≡≡	A ₁₉	≡≡≡≡≡≡≡	A ₂₀	≡≡≡≡≡≡≡≡						
		A ₂₁	T	A ₂₂	TT	A ₂₃	TTT	A ₂₄	TTTT	A ₂₅	TTTTT	A ₂₆	TTTTTT	A ₂₇	TTTTTTT	A ₂₈	TTTTTTTT	A ₂₉	TTTTTTTTT	A ₃₀	TTTTTTTTTT	A ₃₁	TTTTTTTTTTT				
		A ₃₂	+	A ₃₃	+	A ₃₄	+	A ₃₅	+	A ₃₆	+	A ₃₇	+	A ₃₈	+	A ₃₉	+	A ₄₀	+	A ₄₁	+	A ₄₂	+				
		B ₁	/	B ₂	//	B ₃	///	B ₄	////	B ₅	/////	B ₆	//////	B ₇	///////	B ₈	////////	B ₉	/////////	B ₁₀	/////////	B ₁₁	/////////				
		B ₁₂	X	B ₁₃	XX	B ₁₄	XXX	B ₁₅	XXXX	B ₁₆	XXXXX	B ₁₇	XXXXXX	B ₁₈	XXXXXXX	B ₁₉	XXXXXXXX	B ₂₀	XXXXXXXXX	B ₂₁	XXXXXXXXXX	B ₂₂	XXXXXXXXXX	B ₂₃	XXXXXXXXXX		
		B ₂₄	△	B ₂₅	△△	B ₂₆	△△△	B ₂₇	△△△△	B ₂₈	△△△△△	B ₂₉	△△△△△△	B ₃₀	△△△△△△△	B ₃₁	△△△△△△△△	B ₃₂	△△△△△△△△△	B ₃₃	△△△△△△△△△△	B ₃₄	△△△△△△△△△△△	B ₃₅	△△△△△△△△△△△△		
		C ₁	∩	C ₂	∩∩	C ₃	∩∩∩	C ₄	∩∩∩∩	C ₅	∩∩∩∩∩	C ₆	∩∩∩∩∩∩	C ₇	∩∩∩∩∩∩∩	C ₈	∩∩∩∩∩∩∩∩	C ₉	∩∩∩∩∩∩∩∩∩	C ₁₀	∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩	C ₁₁	∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩	C ₁₂	∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩∩		
		C ₁₃	∩	C ₁₄	∩	C ₁₅	∩	C ₁₆	∩	C ₁₇	∩	C ₁₈	∩	C ₁₉	∩	C ₂₀	∩	C ₂₁	∩	C ₂₂	∩	C ₂₃	∩	C ₂₄	∩		
		C ₂₅	○	C ₂₆	○	C ₂₇	○	C ₂₈	○	C ₂₉	○	C ₃₀	○	C ₃₁	○	C ₃₂	○	C ₃₃	○	C ₃₄	○	C ₃₅	○	C ₃₆	○		
B 裏 描	II (曲 線)	D ₁	∪	D ₂	∪∪	D ₃	∪∪∪	D ₄	∪∪∪∪	D ₅	∪∪∪∪∪	D ₆	∪∪∪∪∪∪	D ₇	∪∪∪∪∪∪∪	D ₈	∪∪∪∪∪∪∪∪	D ₉	∪∪∪∪∪∪∪∪∪	D ₁₀	∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪	D ₁₁	∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪				
		D ₁₂	∪	D ₁₃	∪	D ₁₄	∪	D ₁₅	∪	D ₁₆	∪	D ₁₇	∪	D ₁₈	∪	D ₁₉	∪	D ₂₀	∪	D ₂₁	∪	D ₂₂	∪				
		D ₂₃	∪	D ₂₄	∪	D ₂₅	∪	D ₂₆	∪	D ₂₇	∪	D ₂₈	∪	D ₂₉	∪	D ₃₀	∪	D ₃₁	∪	D ₃₂	∪	D ₃₃	∪	D ₃₄	∪		
		D ₃₅	∪	D ₃₆	∪	D ₃₇	∪	D ₃₈	∪	D ₃₉	∪	D ₄₀	∪	D ₄₁	∪	D ₄₂	∪	D ₄₃	∪	D ₄₄	∪	D ₄₅	∪	D ₄₆	∪		
		D ₄₇	∪	D ₄₈	∪	D ₄₉	∪	D ₅₀	∪	D ₅₁	∪	D ₅₂	∪	D ₅₃	∪	D ₅₄	∪	D ₅₅	∪	D ₅₆	∪	D ₅₇	∪	D ₅₈	∪		
		D ₅₉	∪	D ₆₀	∪	D ₆₁	∪	D ₆₂	∪	D ₆₃	∪	D ₆₄	∪	D ₆₅	∪	D ₆₆	∪	D ₆₇	∪	D ₆₈	∪	D ₆₉	∪	D ₇₀	∪	D ₇₁	∪
		D ₇₂	∪	D ₇₃	∪	D ₇₄	∪	D ₇₅	∪	D ₇₆	∪	D ₇₇	∪	D ₇₈	∪	D ₇₉	∪	D ₈₀	∪	D ₈₁	∪	D ₈₂	∪	D ₈₃	∪	D ₈₄	∪
		D ₈₅	∪	D ₈₆	∪	D ₈₇	∪	D ₈₈	∪	D ₈₉	∪	D ₉₀	∪	D ₉₁	∪	D ₉₂	∪	D ₉₃	∪	D ₉₄	∪	D ₉₅	∪	D ₉₆	∪	D ₉₇	∪
		D ₉₈	∪	D ₉₉	∪	D ₁₀₀	∪	D ₁₀₁	∪	D ₁₀₂	∪	D ₁₀₃	∪	D ₁₀₄	∪	D ₁₀₅	∪	D ₁₀₆	∪	D ₁₀₇	∪	D ₁₀₈	∪	D ₁₀₉	∪	D ₁₁₀	∪
		D ₁₁₁	∪	D ₁₁₂	∪	D ₁₁₃	∪	D ₁₁₄	∪	D ₁₁₅	∪	D ₁₁₆	∪	D ₁₁₇	∪	D ₁₁₈	∪	D ₁₁₉	∪	D ₁₂₀	∪	D ₁₂₁	∪	D ₁₂₂	∪	D ₁₂₃	∪
C 竹 管	III (点 状)	E ₁	∪	E ₂	∪∪	E ₃	∪∪∪	E ₄	∪∪∪∪	E ₅	∪∪∪∪∪	E ₆	∪∪∪∪∪∪	E ₇	∪∪∪∪∪∪∪	E ₈	∪∪∪∪∪∪∪∪	E ₉	∪∪∪∪∪∪∪∪∪	E ₁₀	∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪	E ₁₁	∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪∪				
		E ₁₂	∪	E ₁₃	∪	E ₁₄	∪	E ₁₅	∪	E ₁₆	∪	E ₁₇	∪	E ₁₈	∪	E ₁₉	∪	E ₂₀	∪	E ₂₁	∪	E ₂₂	∪				
		E ₂₃	∪	E ₂₄	∪	E ₂₅	∪	E ₂₆	∪	E ₂₇	∪	E ₂₈	∪	E ₂₉	∪	E ₃₀	∪	E ₃₁	∪	E ₃₂	∪	E ₃₃	∪	E ₃₄	∪		
		E ₃₅	∪	E ₃₆	∪	E ₃₇	∪	E ₃₈	∪	E ₃₉	∪	E ₄₀	∪	E ₄₁	∪	E ₄₂	∪	E ₄₃	∪	E ₄₄	∪	E ₄₅	∪	E ₄₆	∪		
		E ₄₇	∪	E ₄₈	∪	E ₄₉	∪	E ₅₀	∪	E ₅₁	∪	E ₅₂	∪	E ₅₃	∪	E ₅₄	∪	E ₅₅	∪	E ₅₆	∪	E ₅₇	∪	E ₅₈	∪		
		E ₅₉	∪	E ₆₀	∪	E ₆₁	∪	E ₆₂	∪	E ₆₃	∪	E ₆₄	∪	E ₆₅	∪	E ₆₆	∪	E ₆₇	∪	E ₆₈	∪	E ₆₉	∪	E ₇₀	∪		
		E ₇₁	∪	E ₇₂	∪	E ₇₃	∪	E ₇₄	∪	E ₇₅	∪	E ₇₆	∪	E ₇₇	∪	E ₇₈	∪	E ₇₉	∪	E ₈₀	∪	E ₈₁	∪	E ₈₂	∪	E ₈₃	∪
		E ₈₄	∪	E ₈₅	∪	E ₈₆	∪	E ₈₇	∪	E ₈₈	∪	E ₈₉	∪	E ₉₀	∪	E ₉₁	∪	E ₉₂	∪	E ₉₃	∪	E ₉₄	∪	E ₉₅	∪	E ₉₆	∪
		E ₉₇	∪	E ₉₈	∪	E ₉₉	∪	E ₁₀₀	∪	E ₁₀₁	∪	E ₁₀₂	∪	E ₁₀₃	∪	E ₁₀₄	∪	E ₁₀₅	∪	E ₁₀₆	∪	E ₁₀₇	∪	E ₁₀₈	∪	E ₁₀₉	∪
		E ₁₁₀	∪	E ₁₁₁	∪	E ₁₁₂	∪	E ₁₁₃	∪	E ₁₁₄	∪	E ₁₁₅	∪	E ₁₁₆	∪	E ₁₁₇	∪	E ₁₁₈	∪	E ₁₁₉	∪	E ₁₂₀	∪	E ₁₂₁	∪	E ₁₂₂	∪
D 船 付	IV (点 状)	F ₁	∪	F ₂	∪	F ₃	∪	F ₄	∪	F ₅	∪	F ₆	∪	F ₇	∪	F ₈	∪	F ₉	∪	F ₁₀	∪	F ₁₁	∪				
		F ₁₂	∪	F ₁₃	∪	F ₁₄	∪	F ₁₅	∪	F ₁₆	∪	F ₁₇	∪	F ₁₈	∪	F ₁₉	∪	F ₂₀	∪	F ₂₁	∪	F ₂₂	∪				
		F ₂₃	∪	F ₂₄	∪	F ₂₅	∪	F ₂₆	∪	F ₂₇	∪	F ₂₈	∪	F ₂₉	∪	F ₃₀	∪	F ₃₁	∪	F ₃₂	∪	F ₃₃	∪	F ₃₄	∪		
		F ₃₅	∪	F ₃₆	∪	F ₃₇	∪	F ₃₈	∪	F ₃₉	∪	F ₄₀	∪	F ₄₁	∪	F ₄₂	∪	F ₄₃	∪	F ₄₄	∪	F ₄₅	∪	F ₄₆	∪		
		F ₄₇	∪	F ₄₈	∪	F ₄₉	∪	F ₅₀	∪	F ₅₁	∪	F ₅₂	∪	F ₅₃	∪	F ₅₄	∪	F ₅₅	∪	F ₅₆	∪	F ₅₇	∪	F ₅₈	∪		
		F ₅₉	∪	F ₆₀	∪	F ₆₁	∪	F ₆₂	∪	F ₆₃	∪	F ₆₄	∪	F ₆₅	∪	F ₆₆	∪	F ₆₇	∪	F ₆₈	∪	F ₆₉	∪	F ₇₀	∪		
		F ₇₁	∪	F ₇₂	∪	F ₇₃	∪	F ₇₄	∪	F ₇₅	∪	F ₇₆	∪	F ₇₇	∪	F ₇₈	∪	F ₇₉	∪	F ₈₀	∪	F ₈₁	∪	F ₈₂	∪		
		F ₈₃	∪	F ₈₄	∪	F ₈₅	∪	F ₈₆	∪	F ₈₇	∪	F ₈₈	∪	F ₈₉	∪	F ₉₀	∪	F ₉₁	∪	F ₉₂	∪	F ₉₃	∪	F ₉₄	∪		
		F ₉₅	∪	F ₉₆	∪	F ₉₇	∪	F ₉₈	∪	F ₉₉	∪	F ₁₀₀	∪	F ₁₀₁	∪	F ₁₀₂	∪	F ₁₀₃	∪	F ₁₀₄	∪	F ₁₀₅	∪	F ₁₀₆	∪		
		F ₁₀₇	∪	F ₁₀₈	∪	F ₁₀₉	∪	F ₁₁₀	∪	F ₁₁₁	∪	F ₁₁₂	∪	F ₁₁₃	∪	F ₁₁₄	∪	F ₁₁₅	∪	F ₁₁₆	∪	F ₁₁₇	∪	F ₁₁₈	∪		
E 点 彩	V (点 状)	G ₁	○	G ₂	○○	G ₃	○○○	G ₄	○○○○	G ₅	○○○○○	G ₆	○○○○○○	G ₇	○○○○○○○	G ₈	○○○○○○○○	G ₉	○○○○○○○○○	G ₁₀	○○○○○○○○○○	G ₁₁	○○○○○○○○○○○	G ₁₂	○○○○○○○○○○○		
		G ₁₃	○	G ₁₄	○	G ₁₅	○	G ₁₆	○	G ₁₇	○	G ₁₈	○	G ₁₉	○	G ₂₀	○	G ₂₁	○	G ₂₂	○	G ₂₃	○	G ₂₄	○		
		G ₂₅	○	G ₂₆	○	G ₂₇	○	G ₂₈	○	G ₂₉	○	G ₃₀	○	G ₃₁	○	G ₃₂	○	G ₃₃	○	G ₃₄	○	G ₃₅	○	G ₃₆	○		
		G ₃₇	○	G ₃₈	○	G ₃₉	○	G ₄₀	○	G ₄₁	○	G ₄₂	○	G ₄₃	○	G ₄₄	○	G									



5号方形周溝墓出土記号土器（第178図1 図版128-1）



西原大塚遺跡第72地点405号住居跡出土絵画土器



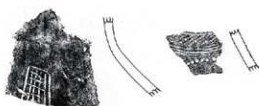
朝霞市中道・同台遺跡第6地点3号住居跡出土
箱が描かれた壺形土器胴部破片（下）



朝霞市向山遺跡C-3区6号住居跡出土記号土器



板橋区四葉遺跡（西部台地北側
環濠内集落16号環濠）出土記号土器



板橋区赤塚水川神社北方遺跡出土記号土器



板橋区西上台遺跡
S15 出土記号土器

第215図 遺跡内及び周辺遺跡出土の絵画土器・記号土器

函文と縄文で構成される文様帯よりも下位の胴部に描かれている。

さらにもう少し広い範囲で見てゆくと、荒川をさらに少し下った板橋区内では四葉遺跡群から1例と赤塚氷川神社北方遺跡から2例、西上台遺跡で2例検出されている。四葉遺跡群では沖山遺跡対象区域の16号環濠から宮ノ台式の小型台付甕の胴部に9条の沈線と方向を違えた4条の沈線が交差する形の記号が認められる。橋本氏の分類ではMB-IB4+IB9型とされている。赤塚氷川神社北方遺跡では住居跡の覆土からMB-IA6+IA'n型とMC-II G6?型の2点が確認されている。西上台遺跡ではMB-IB*1型とMB-IB*2型が一破片上で各1例検出されており、いずれも弥生時代中期後半の宮ノ台式土器の甕形土器頸部付近に記されている(第215図)。

このように、今回の調査で検出されたMB-IB*2型は市内で初めての事例となった。記号は最もポピュラーなタイプではあるものの絶対数としては少なく、周辺では弥生時代中期後半の宮ノ台式土器に認められるものが多いMB-IB*2型が後期の土器に認められる貴重な資料の追加となった。今後も更なる追加資料が本遺跡で認められるかも知れない。

[引用・参考文献]

- 橋本裕行 1988 「東日本弥生土器絵画・記号総論」『権原考古学研究所論集 第八 創立五十周年記念』権原考古学研究所編 吉川弘文館
- 春成秀爾 1991 「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の盛衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
- 田原本町教育委員会 2006 『田原本の遺跡4 弥生の絵画 ～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画～』
- 坂下 実 2009 「滋賀県出土の土器記号文について —弥生時代～古墳時代前期を中心として—」『紀要 第22号』財団法人滋賀県文化財保護協会
- 朝霞市博物館 2009 『第24回企画展「邪馬台国時代の朝霞 ～土器が語る交流の時代～」』
- 朝霞市博物館 2017 『第32回企画展「装飾壺からみた弥生時代の朝霞」』
- 共和開発株式会社 2021 『東京都板橋区西上台遺跡発掘調査報告書 —西台二丁目5番10号地点—』
- 朝霞市博物館 2022 『第36回企画展 台の城山遺跡と向山遺跡～弥生の斧を手に入れたムラ～』

付 編

I. 勝坂式土器の複雑化と 西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器

国立歴史民俗博物館 准教授 中村耕作

(1) 西原大塚例の特徴

今回報告される西原大塚遺跡 108 号住居跡出土の顔面把手・蛇体把手¹を伴う深鉢(以下、西原大塚例)は、顔面把手と蛇体把手が向き合う点、口縁部に比べて小さい底部が強く屈曲する器形である点、2つの把手の間に小さな突起があり、その間にも複数の動物・身体装飾を伴う点で、他の顔面把手付深鉢とは大きく異なる特徴を持っている。

本稿では、これらの特徴に注目し、勝坂式最終末期における土器群の器形・装飾の多様化・複雑化、特に動物・顔面表現の複雑な状況下における産物としての西原大塚例の位置付けを図る。

(2) 勝坂式の諸系統と顔面把手との関係

勝坂式²には、他の様式と比べても多様なバリエーションが知られ、文様・器形による諸系統に整理されてきた。例えば、『縄文土器大観』(安孫子 1988・谷口 1988)では、顔面把手付深鉢を第VI群とし、このうち「胴の張った樽形の器形」を第22系統、「胴のくびれたキャリパー形の器形」を第23系統とした。また、今福利恵(2011)は、22系統に相当するものを「第9類 いわゆる出産文土器」とした(23系統に相当するものは14類)。顔面把手付深鉢が一定の系統として認知されてきたわけである。

顔面把手付深鉢は古くから集成が続けられてきたが(中村 1970～1981、上川名 1983、吉本・渡辺 1994・1999・2004)、編年・系統整理は中山真治(2000)の研究にほぼ限られる。キャリパー形をA器形、円筒形(樽形)をB器形とし、それぞれ、口縁部無文帯の有無でA1・A2、B1・B2に細分し、口縁部に文様を有するものをA3とした。A2器形は西関東を中心に分布し、輪郭が蛇行する顔面把手が付されることが多いこと、B器形には中部高地に分布し、輪郭が丸みを帯びた顔面把手が付されることが多いことを指摘している。

これらの先行研究をふまえ、西原大塚例の器形の特徴を確認するため、器形が判明する顔面把手付深鉢を、改めて時期・器形ごとに整理した(第216図)。顔面把手は350個以上が知られるが(小松 2008)、器形が判明するのは約50個にすぎない。近年新たに報告された例を含めても、安孫子・谷口や中山の指摘と同様、樽形とキャリパー形に大別され、前者が多くを占める。

これ以外の器形を見てみよう。村上例(第216図52)は、口縁部に縦位の細長い蛇行隆帯が巡るので、中山は褶曲文土器(「狐塚タイプ」)との関係を指摘している。一の沢西例①(第216図45)は、4単位と考えられる大形突起と屈曲する底部をもつ「多喜窪重文タイプ」であり、2つ遺存しているうちの1つの突起の内側に通常とは異なる表情の顔面を付すものである。一の沢西②(第216図46)例は、4単位の大形突起を有し、その突起付け根部の外側に顔面(目鼻口を表現しないもの:吉本・渡辺 2004)を付すものである。器形全体は不明だが、後呂例・九鬼Ⅱ例・三口神平①例・野呂原例・田名花ヶ谷戸例(第216図47～51)もその類例と考えられている。一の沢西②例は対向する2つ、後呂例は4単位のうち隣り合う2つに顔が付く(他の2つには渦巻文)。これらは、そもそも顔面把手付深鉢の

1. 湯瓶式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器



第 216 図 顔面把手付深鉢・関連土器の器形 (S=1:20) 時期は中山 (2000・2015) を参考に作成

範疇と言えらるかも検討の余地があり、筆者は典型的な顔面付土器が消滅していく際の変容形の1パターンと理解しているが(中村 2022)、西原大塚例を理解するうえでは重要な一群である。つまり、西原大塚例は、これら変容した顔面表現をもった土器と同じ「多喜窪重文タイプ」の器形を持っているのである。両者の類似は器形に留まらない。詳細は後述するが、対向する2つの大形把手の間に複数の動物・身体装飾を伴うという点でも類似している。

「多喜窪重文タイプ」(鈴木 1981:「多喜窪タイプ」「多喜窪型」などの呼称もある)について改めて確認すると、勝坂式の最終末期(新地平編年 9b~9c期:中山 1995・2017、井戸尻 2~3段階:今福 2008)に出現する、底部が強く屈曲し、口縁部に主に4単位の大きな突起(把手)が配される一群で、多喜窪例(第218図10)を指標とする。谷口康浩(1994)は、勝坂式の「型式(タイプ)」に、型式の分布が異なる局地型・漸移型・広域型の違いを指摘したが、武蔵野台地から上伊那までの広範囲に「規則性の高い瓜二つの土器群」が広がる広域型の代表として取り上げられたのがこのタイプと、後述する蛇体把手付土器のタイプであり、その社会的重要性を伺うことができる。この種の土器についても中山(2022)が詳しく検討している。中山は、4単位の突起をもつ「広義的多喜窪タイプ」(本稿の「多喜窪重文タイプ」)を、突起形態からⅠ類:多喜窪1住型深鉢(環状把手+胴部縄文:狭義的多喜窪タイプ)、Ⅱ類:一の沢56土坑型深鉢(環状把手+胴部沈線文)、Ⅲ類:井戸尻4住型深鉢(箱状把手)、Ⅳ類:西上1住型深鉢(山形突起:西上タイプ)、Ⅴ類:Ⅰ~Ⅳ類の折衷の5つに細別し、分布の特徴を検討した³⁾。なお、中山(2017)は、類似した器形で、2つの大形突起を伴うものを「駒木野タイプ」として類型化している。近年、細田勝(2023)は、変動期の状況の1つとして、屈曲した口縁部上の文様の系譜を東北・北関東の大木式に求める見解を示している。

このように、西原大塚例は、顔面把手付深鉢として一般的な樽形・キャリパー形ではなく、伝統的な顔面把手を持ちながらも、勝坂式最終末期に出現した「多喜窪重文タイプ」の器形をもつ点で特異な存在と言える。

(3) 勝坂式土器における動物装飾・顔面装飾の関係

1. 先行研究

西原大塚例や「多喜窪重文タイプ」に見られる複数の顔面・身体・動物表現を理解するには、研究史を遡って、それらを他の文様から区別する視点を確認しておく必要がある。

勝坂式に具象的な文様が目立つことは戦前より知られており、谷川磐雄(1922~23)は、当時の欧州の宗教学を援用して石器時代の宗教思想(トーテミズム)を論じる中で、諸儀式の獣面把手、黒駒土偶、顔面把手その他の土偶・土製品・土器把手などを取り上げてそれらが動物を表したものと説いた。一方、同年、鳥居龍藏(1922)は土偶・土版と共に顔面把手をとりあげ、「明らかに女性」とし、さらには「土器が破損せず完全でありますと、其の土器の胴部は衣服になって居って、即ち土器其物が一種の女性の立体を明らかに示して居ります」とし、「宗教上の儀式の際に使用したのではあるまいか」と指摘する。つまりこの段階では、顔面把手の造形上のモデルは動物と人間の女性の2説があったが、やがて後者が通説化していく(藤森 1968 など)⁴⁾。その後、口縁部上に土偶装飾を持つ一群は「土偶付土器」(小野 1989a、新津 2019)、口縁部上から胴部にかけて張りつくように全身表現を持つ一群については「土偶装飾付土器」として独立した系統性が認められ(櫛原 2000、和田 2022)、それぞれ検討が進められている。



第217図 各種の「腕」(S=1:15)

小林 2011 をもとに作成

これらは細部や、背景となる思考⁷、農耕や神話的世界の関わりなどの解釈は別として、文様素レベルでは概ね共通認識が得られており、今福利恵(2019)はこの成果を集大成している。

このほか、西原大塚例を解釈するうえで、手・腕の文様も重要である。小林公明(2011)は、腕の文様を3種に分けて詳しく検討している。1つ目は「半人半蛙文有孔罎付土器」のうち半人半蛙文の上に挙げた腕＝「三日月形の両腕」、2つ目は同じ土器の反対側に配される円輪の下の文様＝「上手から巻く両腕」、3つ目は「神像筒形土器」の腕＝「下手から巻く両腕」で、これらに起源をもつ各種の腕の文様を抽出した(第217図)。小野正文(2005・2015)は外向きの顔面把手である九兵衛尾根^②例(第219図11)の左手の先がへびの頭となっていることに注目し、蛇頭を伴わないものを含めて「九兵衛尾根型文」と呼んだ。すでに西原大塚例についても、「円面と蛇頭の蛇と腕手が分離されて、4つの突起の間に施文される。熟語を単語に戻して、施文している」と説明している(小野2015)。多喜窪タイプや蛇体把手付土器にみられるほか、梨ノ木遺跡の顔面把手付深鉢の胴部文様(第216図37)にも付されていること、顔面把手後頭部(第219図12)にもみられることを指摘している。三上徹也(2018)は、顔面把手裏面(小野のいう後頭部と同じ)および「蛇体裝飾付アーチ状把手」を持つ土器の口縁部に「円+手のひら文」が付されることを指摘し、両者の結びつきを主張している。小野はへびの

これに対し、勝板式の動物裝飾については、江上波夫(1963)がへびを取り上げるとともに、それらが先行する土器文様に誘導されて出現したことを指摘している。小林達雄(1986)はこの時期の文様を「物語性文様」と呼び、「裝飾性文様」との現象面での際立った違いを指摘している。小林は具体的な文様の意味は不明としたが、個々の文様の同定は可能であるという立場(小野1989b)や、さらに神話的意味まで読み取るという立場もあり、へび文(小野1989b、小林2005、藤森2006、永瀬2006・2007・2008、富士見市立水子貝塚考古資料館2010・2012)・カエル文(小林1984)・イノシシ文(小野1984・1989b、新津2003・2007a・2007b、和田2011・2012)・抽象へび文^⑤(榎原2001、末木2010、小野2010、今福2020)などの同定・変化の過程の研究が進められた(ほかに小林1991、春成1997、小野2002・2008、野代2006、末木2009など)。また、顔面把手を含めて異種同士が対峙・融合・互換(置換)する例が具体的に指摘された(渡辺1992、小野1992・2002、新津2003、小林2003、小杉2007・2013:(第219図8~15)^⑥。こ

文様としての性格を重視しているが、ここでは総称として手腕文と仮称しておく。

2. 「多喜窪重文タイプ」・獣面把手付土器の動物裝飾

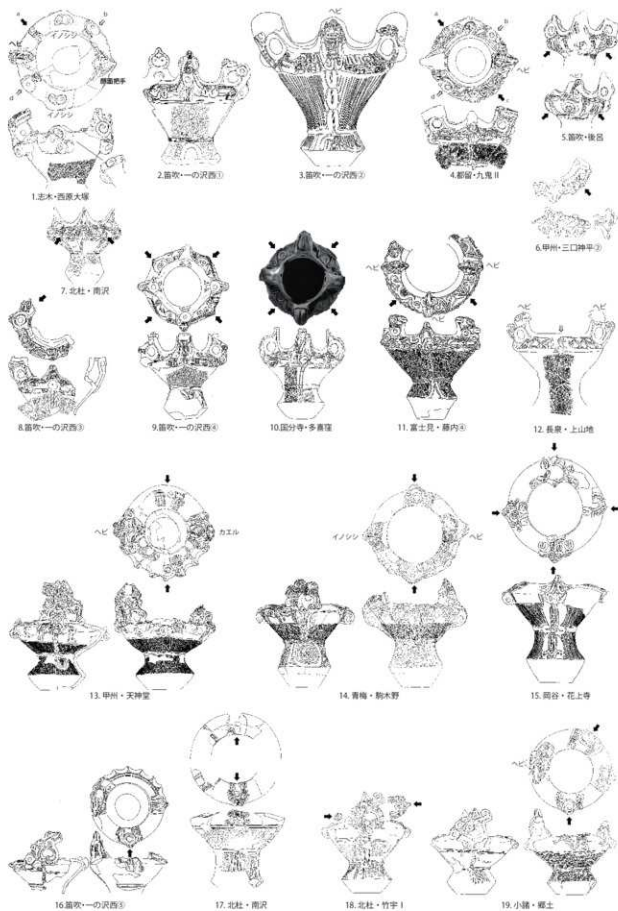
以上の先行研究をふまえて、西原大塚例および関連資料の動物裝飾をみていきたい。まず、西原大塚例であるが、顔面把手に対向する位置の大形把手は内側を向いたヘビ文である（以下、蛇体把手）。今福（2019）の集成から類例を挙げると、西上例（第219図2）が最も近い。また、顔面把手と蛇体把手の軸に直交する位置にも小さな突起がある。左右と内側に向けて円孔が穿たれているが、リアルな北原例と抽象化した宮の前例・一の沢例という釣手土器頂部裝飾の比較（小野1989b、今福2019）（第219図5～7）からイノシシ文と判断される。器形が似たものとしては野塩前原例（おそらく土偶付土器の土偶部と対向する：第219図10）がある。さらに、これらの把手の間に、右巻きのヘビ文（第218図1-b・d）と、三本指文（第218図1-a）が交互に配置されている（前述の小野が指摘した部分）。

次に、「多喜窪重文タイプ」・駒木野タイプの器形をもった諸例と比較する。顔面裝飾を伴う例のうち、一の沢①例（第218図2）、横並びに2個の把手しか残存していないのが本来は4単位把手であり、顔面裝飾を取り囲む把手部はイノシシ文、それに直交する把手はヘビ文と考えられ、今福はイノシシ把手に「人面」が融合したものと解釈している。把手間には、「ひ」字状の文様が見られるが、これは手腕文（「上手から巻く両腕」）であろう。一の沢②（第218図3）例は顔面裝飾を伴う把手の上部は欠損しているが、これらに直交する2つの把手には外向きのヘビ文がみられる。九鬼Ⅱ例（第218図4）は、ヘビ文（第218図4-b・d）と「上手から巻く両腕」（第218図4-a・c）が交互に配されている。後呂例（第218図5）は、4単位の把手のうち全形が遺存しているのは1つのみだが、ヘビ文の可能性もある。各突起の間には、同心円とその下から左右にW字状に伸びる2本指文（「上手から巻く両腕」）が配される。三口神平②例（第218図6）は、把手間に先端が外側に渦を巻くY字状の文様（「下手から巻く両腕」）がみられる。

続いて、前述の通り小野・小林・三上らが言及しているものを含め、これらと同様の器形をもった諸例のうち、動物把手や、把手間に手腕文を持つものを集めた⁵。但し、花上寺例（第218図15）は把手間ではなく、把手付け根部から手腕文が伸びている。このうち第218図7～12は「多喜窪重文タイプ」だが、中山分類のⅠ・Ⅱ類のみで、Ⅲ・Ⅳ類には明瞭な例は見られない。他方、第218図13～19は駒木野タイプであり、大形の蛇体把手（ないし「鶏冠状把手」）を特徴とする。天神堂例・駒木野例・一の沢西④例・郷土例（第218図13・14・16・18）は藤森英二（2006・2012）による蛇体裝飾把手付土器の3段階に位置づけられ、藤森は未報告資料だが4段階として富士見町下原例も紹介している。櫛原功一（2008）は天神堂例の報告にあたり、駒木野例・郷土例・一の沢西④例・下原例を挙げて、藤森の指摘以外に口縁部無文帯の「人体文」（本稿の手腕文）の共通性を指摘している。藤森の研究に従い大形の突起を蛇体把手とした場合、対向する小形把手については、カエル文（天神堂例；櫛原2008）、イノシシ文（駒木野例；富士見市立水子貝塚資料館2010）とする見解もあるが、今福（2019）は竹字例（第218図18）の蛇体裝飾の先端がイノシシ文（口吻）となったものとしており、多様な組み合わせが存在したことが想定できる。

以上のように、「多喜窪重文タイプ」に類似した器形においては、把手にヘビ文・イノシシ文・カエル文、その間に手腕文を持つものが一定数知られる。また、上山地例（第218図12）のように大形把手に直交する軸に小さいヘビ文を配するものもある。西原大塚例もまた、こうした諸類例の中に位置づけられるものである。但し、こうした中で顔面把手を伴う点は異例と言える。

1. 湯坂式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器



第 218 図 「多喜窪重文タイプ」関連資料 (S=1:15)



第 219 図 関連資料 (S=1:12)

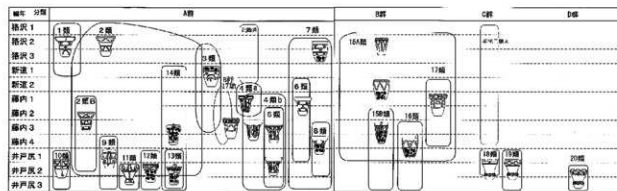
(4) 勝坂式諸系統の多様化と顔面・動物表現の多様化・融合

では、こうした多様な動物・身体装飾の共存・融合、あるいは「多喜窪重文タイプ」の出現は歴史的にはどのように位置づけられるのであろうか。土器様式全体をみると勝坂式以後は、山梨を中心として広がる勝坂式直系の曾利式のほか、東関東と共通する東側の加曾利E式や、長野県の中南信を中心とした唐草文土器に大きく分化する。「多喜窪重文タイプ」の出現はこの大きな変化の直前にあたる。

第 220 図は今福利恵 (2011) が勝坂式の諸系統を整理したもので、勝坂式のうち、藤内 1 段階 (新地平編年 7a 期) 前後と井戸尻 1 段階 (9a 期) 前後に系統分岐の画期がみられる⁹⁾。「多喜窪重文タイプ」に相当する第 11 類は若干遅れて井戸尻 2 段階 (9b 期) に登場し、次の 3 段階 (9c 期) で消滅する短い系統である。この消長は、西南関東の各器形・施文域を網羅的に検討した高橋大地 (2003) の集計でも明らかであり、9a 期から 9c 期にかけて、A 器形中心→C 器形中心+B 器形→A 器形中心という変化をたどる (高橋の B4・B5 タイプが「多喜窪重文タイプ」)。

次に、顔面や動物表現をもった土器の変化を確認しておく。各氏の分析をふまえた結論として、ヒト形や動物の対峙、類型の分化・変容・交代、最終的な融合というプロセスを描くことができる。

小杉康 (2007・2013) は、中期初頭から中葉にかけての動物装飾をもった一群とあわせて「人獣土器」と総称し、全体的な変化を論じた。それによると、五領ヶ台式期～藤内式期に人面と半巻突起が交互に 4 単位配されるもの (「同種対向 2 対 4 単位」) →向かい合う人体文 (「同種対向 1 対 2 単位」) →向かい合う人体文と獣身文 (「異種対向 1 対 2 単位」) と変化して「人獣土器 A」が成立し、さらに藤内式期に算盤玉状の無文口縁部が採用されることで、頭と胴が切り離され、人面・人体 (下半身 = 「首無し人体文」)・獣体がそれぞれ置換可能な状態になり、口縁部に頭部をもつ一群は、人と獣が同一個体に共存するもの = 合体系人獣土器 A、人面のみのも = 人体系人獣土器 A (第 216 図 37)、獣身のみのも = 獣身系人獣土器 A (= 蛇体把手付土器: 第 219 図 1)、複合系人獣土器 A (2 対 4 単位構成: 第 218 図 2) に



第220図 今福恵による「勝坂式土器の型式分岐」概念図（今福2011）

分化すること、それ以前の段階で、土器胴部に人体文をもつもの（人獣土器B）、土器胴部に獣身文をもつもの（人獣土器C＝抽象文土器）が分化すると説明した。これらは、レヴィ＝ストロースによる神話の構造分析で示された神話素の変換による異本（ヴァリエント）と同様のものと説明された。歴史性を重視する小杉は、〈人体のメタファーとしての土器造形〉というのは普遍的なものではなく、口縁部無文帯によって頭部が独立した人体文系人獣土器Aの出現によって初めて達成されたものと位置づける。

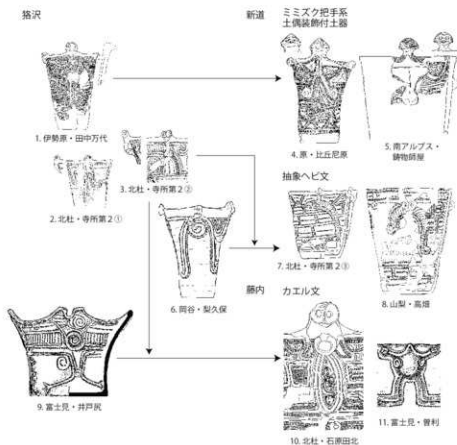
寺内隆夫（2014）は、五領ケ台式から勝坂式への「立体装飾」化の過程を整理する中で、「人面状装飾・土偶装飾」を取り上げ、顔のせり上がり、顔だけから身体付へ、身体強調と器自身からの分離という変化を指摘した。これらは、五領ケ台式期に口頸部と体部という土器の上下の空間構造が確立し、勝坂式期に入って後者の文様・装飾が複雑化する中で、主文様を目立たせる工夫として立体化が進行するという一連の変化（寺内1987）の中に位置づけられている。

三上（2018）は、勝坂式期の顔面表現を、「顔面把手」（柿の実状の目）、「三角状突起」（目鼻口を表現しない）、「ミミズク把手」（双環状の目）、「蛇体装飾付アーチ状把手」（顔面表現は無いが密接に関係するもの）の4種に分けて、それぞれが背面文様の共有など密接な関係を持ちながら変遷し、最終的には「箱状把手」（ヒ多喜窪重文タイプ）を経て、曾利1式の水煙把手へと変化すると説明した。

今福（2019）は、動物装飾を類型化して時期的な変化を整理するとともに、その対峙・融合についても指摘している。第222図によると、猪沢3段階に抽象ヘビ文（第221図7・8）とカエル文（第221図9）が出現し、これらはその後、交互に配置されたり（第219図13）、ヘビを抽象ヘビ文が啣える構図（第219図14）などから「対峙」関係にあるものとされた。次の画期が井戸尻式期である。新たにイノシシ文（第219図5～7）が登場するとともに、抽象ヘビ文に代わって多様なヘビ文（第219図1～4）が出現する。今福は、カエル・イノシシ・ヘビの3種が、生態や土器造形上の特徴として1：2の関係になることを指摘し、「このような3種の動物の形態や生態による1：2の対立項が縄文人の思考を表現しているのであって、動物そのものの特徴からだけで多産だの生命力だのを語るのには意味をなさない」という構造主義的な見方を示している。そして、これらは顔面把手を含めて、複数個体が対峙したり、融合したりするのである。顔面把手との融合は「擬人化・逆擬人化」という概念で説明している。これは、この勝坂式の動物装飾の変遷における最終段階の、動物表現の多様化・対峙の複合化と表裏一体の現象なのである。なお、これ以前に小林公明（1984）は、カエル文の変化において、藤内式期の「半人半蛙文」に対して、井戸尻式期の林王子例（第219図15）を「神人」と表現して変化を指摘している。「人」や「神人」の解釈が問題となるが、現象的には今福の「擬人化」と小林の用語を

用いた「神人化」は同じことを指している。

これらの研究に加え、「土偶装飾付土器」に関する櫛原功一(2000)や和田晋治(2022)の研究、「土偶付土器」に関する新津健(2019)の研究などをふまえて、筆者(中村2022)は、五領ヶ台式期～新道式期に獣面把手由来のミミズク把手¹⁾の顔面(小林2014の「円い眼」・和田の「丸目」)と土偶と同じハート形の顔面(小林の「雫形の眼」・和田の「つり目」)の2系統を認



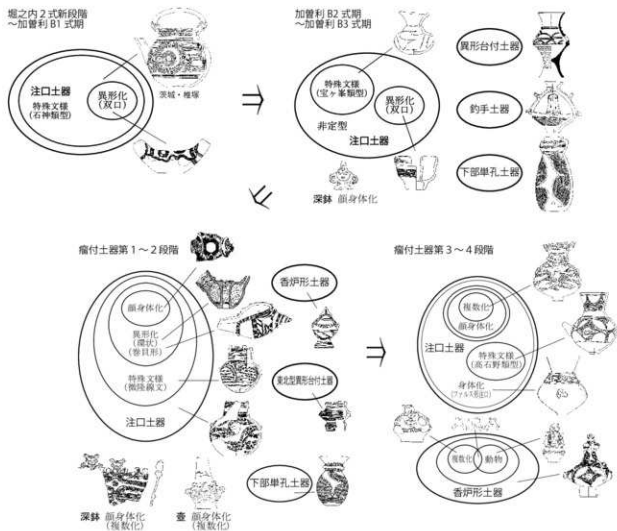
第221図 土偶装飾付土器・抽象へび文・カエル文の関係性試案 (S=1:12)

め、前者の系統は藤内式期以降、脚表現さらには胴表現が土器文様化していくのに対し、この時期に登場する土偶付土器は当初は尻までだったのが、最終的には脚まで表現できるようになること、藤内式期にはハート形顔面由来の顔面把手付深鉢が盛行すること、その顔面を打ち欠いた頭部をモデルに鈎手土器が出現することを整理した。つまり、藤内式期には終焉をむかえつつあるミミズク把手系土偶装飾付土器を含めて4つの系統が並存していた。

なお、そこでも若干触れたが、カエル文(第221図10・11)の祖型の1つとして寺所第2①・②例(第221図2・3)などの獣面把手まで遡る可能性がある。今福利恵(2020)は抽象へび文が先行する懸垂文(第221図6)から発生したとして、初期の例として寺所第2③例(第221図7)などを挙げるが、縦位の橋状把手の下から逆U字形に膨らんだ文様が垂れ下がる状況は、寺所第2①・②例とも共通している(小野2010)。懸垂文と共にこうした動物造形の脚部が抽象へび文に変化していった可能性も考えておきたい。つまり、獣面把手をもつ獣身文からは、ミミズク把手系土偶装飾付土器(第221図4・5)のほか、カエル文・抽象へび文をも生み出したという仮説である。勝坂式前半期にこれらは少しずつ分化していったことになる。

(5) 儀礼具多様化の中の西原大塚例

このように、勝坂式土器様式は系統・器形が次々に分化し、最後の井戸尻式段階は土器群全体で最も多様化が進んだ時期であった。顔面・動物表現も主流の系統が交代しながら、分化を遂げており井戸尻式期はそれらの融合も進んだ複雑化の極致といえる。



第 224 図 後期中葉～後葉の儀礼用土器の複雑化 (S=1:12)

註

- 1 「顔面把手」・「蛇舌把手」および後述する「ミミズク把手」は本来「突起」であるが、慣例に従い「把手」の語を使用する。
- 2 本稿では土器様式の総称として勝版式、時期細分名称として括弧式→新道式→藤内式→井戸尻式を用い、さらに細分する場合は新地平編年 (中山 1995・2017) を用いる。また、顔面把手付深鉢の時期は中山真治 (2000・2015) に準拠して判断した。西原大塚例は本書第 4 章第 1 節では新地平編年 9c 期に相当する勝版 3b 新时期に位置づけられているが、中山は 9b 期としており、本稿では他の資料との統一をはかるため後者を採用している。
- 3 Ⅰ類は谷口の指摘通り広域に分布し、Ⅱ類は甲府盆地～西南関東、Ⅲ類は八ヶ岳西南麓～甲府盆地、Ⅳ類は多摩川中流域～相模川流域を中心に八ヶ岳西南麓まで広域に分布する。
- 4 この間、八幡一郎 (1956) は顔面把手について、「人面というより、獣面と見られるものがあるが、多くの例が人面であるから、その異化したものとする方が妥当であろう」としている。また、近年永瀬史人 (2009) は谷川の獣面説を再評価している。
- 5 抽象・サンショウウオウオ文などと呼ばれてきた文様については、近年山梨県の研究者を中心にへびとする見解が有力視されている (小野 2010、末木 2010、今福 2019)。カエルを啜える造形 (第 219 図 14) や、初期の例の形状 (第 221 図 7) などを根拠としており、今福 (2019) は抽象へび文と呼称した。本稿でもこれを支持する。
- 6 顔面把手頭頂部などの円文をイノシシ、三角文をカエル、後頭部の双環把手・菱形文をカエルとみるような抽象度の高い見解もあるが、論者によって見解の相違もあり、本稿では保留しておく。本稿では小野正文 (1989b) による解説レベル 1～2 程度に限定し、縄文文化では珍しいリアルな造形 (物語性文様) が出現することに注目する。これは共通性を見出す志向とは異なる、「違い」を見出す志向である。また、造形のモデルとその造形の正体・意味は別の可能性もあり、本稿では前

1. 勝版式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器

者に限定して話を進める。

- 7 例えば、渡辺（1992）はイノシシとヘビの「対」（笛吹市一の沢西例）を、他時期の顔面・土偶裝飾付土器の女との関係と同義とし、縄文文化全体の中で（普遍性を重視して）解釈している。一方、小杉（2013）は、人体文と獣身文の対峙から「対照性」を、両者の造形が類似してくるから「対称性」を読み取ったうえで「コントラスト（対称性）からシンメトリー（対称性）へと転換する〈主題〉」を当該コンテキストの中で（歴史性を重視して）主張している。但し、そもそもこうした議論の前提となる認識については異論もある。小野（1992）は、富士見市羽沢例のイノシシ把手と対峙する双環裝飾（本稿のミヅク把手）の上の裝飾をヘビと解釈したが、和田晋治（2012）はこれをヘビとは解釈せず、むしろ双環裝飾との対峙関係を重視している。同様に新津（2003）がイノシシとヘビの対峙とみる甲府市上の平例（第219図8）についても、ヘビが小さいことからその下部の双環裝飾を重視している。和田も双環裝飾を顔面表現と解釈しており、渡辺の見解に従うならば女同士の対峙関係と解釈されることになることから、議論全体の再考を促している。
- 8 ほかに手取文の一部である指の文様をもつものは、町田市忠生遺跡、駒ヶ根市高見原遺跡、三島市押出シ遺跡の多喜窪重文タイプや、裾野市尾畑遺跡の土偶付土器など広範囲に広がっている。
- 9 この分化には、中部高地と西南関東の地域差の顕在化とも関わっている（三上1986、中山2005）。
- 10 小林による「半人半蛙」や、小杉や永瀬史人（2009）の「半人半獣」の指摘通り、藤内式期には融合現象がみられるが、井戸尻文よりもリアルな人体表現に近づくといい点が重要である。
- 11 ミヅク把手は目を強調した顔面表現とされ、双眼（小林2001）、双環状突起（小杉2007）、環状把手（永瀬2009）などの呼称もあるが、ひとまず旧来の名称を使用しておく（三上2018）。
- 12 動物裝飾も若干例が曾利1式の前半期に残る程度で、以後は潜在化する（長野県立歴史館2021）。

引用参考文献

- 安彦子昭二 1988 『勝版式土器様式』『縄文土器大観2』小学館
- 今福利恵 2008 『勝版式土器』『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 今福利恵 2011 『縄文土器の文様生構成造の研究』アム・プロモーション
- 今福利恵 2019 『勝版式土器における動物文様と人体表現』『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』35
- 今福利恵 2020 『勝版式土器における抽象文』『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』36
- 江上波夫 1963 『勝版式系土器の動物意匠について』『国華』855
- 小野正文 1984 『縄文時代における猪鬃養問題』『甲府盆地 その歴史と地域性』鎌山園出版
- 小野正文 1989a 『土偶付土器について』『下総考古学』11
- 小野正文 1989b 『土器文様解説の一研究方法』『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
- 小野正文 1992 『イノヘビ—猪蛇裝飾のある土器について—』『月刊考古学ジャーナル』No.346
- 小野正文 2002 『物語性文様について』『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 小野正文 2005 『蛇頭の腕をもつ人面裝飾付土器について』『長沢宏昌氏退職記念考古論叢集』長沢宏昌氏退職記念考古論叢集発行会
- 小野正文 2008 『物語性文様—勝版式土器様式を中心として—』『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小野正文 2010 『物語性文様について2』『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』26
- 小野正文 2015 『縄文土器文様の物語性』シンポジウム「土器から読む縄文世界」山梨県埋蔵文化財センター https://www.pref.yamanashi.jp/documents/34469/kichoukouen-ono_1.pdf
- 上川名昭 1983 『中期縄文文化論』奈良明日社
- 柳原功一 2000 『土偶裝飾付土器』について『土偶研究の地平4』勉誠社
- 柳原功一 2001 『抽象文（山椒魚文）土器の分布と消長』『石原北遺跡』マート地点発掘調査報告書
- 柳原功一 2008 『蛇体突起付土器について』『天神堂遺跡』甲州市教育委員会
- 小杉 康 2007 『物語性文様—縄文中期の人獣土器論—』『縄文時代の考古学11 心と信仰』同成社
- 小杉 康 2013 『縄文土器造形に見る「ヒト—動物関係」の始まり』『生物という文化—人と生物の多様な関わり—』北海道大学出版会
- 小林公明 1984 『月神話の発掘』『山麓考古』16
- 小林公明 1991 『新石器時代中期の民俗と文化』『富士見町史 上』富士見町
- 小林公明 2001 『眼を戴く土器』『山麓考古』19
- 小林公明 2011 『土器図像の研究』『藤内』富士見町教育委員会
- 小林公明 2014 『藤内遺跡の土器図像の研究 続編』『山麓考古』21

- 小林達雄 1986 「文様が語る縄文人の世界観」『日本古代史3 宇宙への祈り』集英社
- 小林広和 2003 「蛇身埴輪について」『山梨考古学ノート』田代孝氏退職記念誌刊行会
- 小林広和 2005 「U字蛇頭を冠する突起の類系」『長沢宏昌氏退職記念考古論文集』長沢宏昌氏退職記念考古論文集刊行会
- 小松 学 2008 『顔面把手』『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 末木 健 2009 『縄文時代の動物・人休文様を解く』『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
- 末木 健 2010 『縄文中期の抽象文土器』『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』26
- 鈴木保彦 1981 『勝坂式土器』『縄文土器大成2 中期』講談社
- 高橋大地 2003 「西関東東地域における勝坂式終末期の土器にみられる地域性—勝坂式から加曾利E・曾利式へ—」『セツルメント研究』4号
- 谷川勝雄 1922～1923 「石器時代宗教思想の一端（一～三）」『考古学雑誌』第13巻第4号・5号・8号
- 谷口康浩 1988 「系統解説」『縄文土器大観2』小学館
- 谷口康浩 1994 「勝坂式土器の地域性—土器型式の広域型・漸移型・局地型—」『季刊考古学』第48号
- 寺内隆夫 1987 「五箇ヶ台式土器から勝坂式土器へ型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 寺内隆夫 2014 「立体的な土器装飾への道—縄紋時代中期、勝坂式土器の成立過程—」『長野県立歴史館研究紀要』第20号
- 永瀬史人 2006 「山梨県上野原遺跡出土の人面付土器と蛇体装飾—青山学院大学所蔵の縄紋時代未報告資料—」『青山考古』第23号
- 永瀬史人 2007 「勝坂式土器終末期の蛇体表現」『青山史学』第25号
- 永瀬史人 2008 「動物装飾とS字文」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 長野県立歴史館（水沢敦子）2021 『全盛期の縄文土器—圧倒する褶曲文—』
- 中村耕作 2021 「注口土器・香形土器の異形化・顔身体化と社会背景」『季刊考古学』第155号
- 中村耕作 2022 「顔身体土器群の展開過程と身体部位表現」『モノ・構造・社会の考古学—今福利恵博士追悼論文集—』今福利恵博士追悼論文集刊行委員会
- 中村日出男 1970～1981 「顔面把手 1～6」『郵政考古』1～4・6・7
- 中山真治 2000 「顔面把手付土器小考」『東京考古』18
- 中山真治 2015 「顔面把手付土器小考2」『東京考古』35
- 中山真治 2005 「勝坂式土器の型式と地域—西関東・中部地方の縄文時代中期中葉を例に」『地域と文化の考古学』六一書房
- 中山真治 2017 「9c～10期の武蔵野・多摩地域の土器類型再考」『研究集会 縄文研究の地平2017—土器から探る勝坂式と加曾利E式の間』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
- 中山真治 2022 「多喜窪タイプ」の系譜—南関東・中部地方縄文中期中葉の大型4単位把手付土器—『東京考古』40
- 新津 健 2003 「上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』19
- 新津 健 2007a 「土器を飾る猪—山梨を中心とした猪造形の展開—」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』23
- 新津 健 2007b 「猪の文化史 考古編」雄山閣
- 新津 健 2019 「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
- 野代幸和 2006 「中部高地に分布する縄文土器文様とその意味について—既成概念と民俗事例から—」『考古学の諸相Ⅱ 坂語秀一先生古稀記念論文集』匠出版
- 高橋龍三郎 2017 「縄文時代の結社組織」『二十一世紀への考古学』六一書房
- 細田 勝 2023 「多喜窪タイプとその系譜関係」『楚草と縄紋と考古学』土肥孝追悼論文集刊行会
- 富士見市立水子貝塚資料館（和田晋治）2010 『縄文土器と動物装飾』
- 富士見市立水子貝塚資料館（和田晋治）2012 『縄文土器と動物装飾2 蛇』
- 藤森森一 1968 「顔面把手付土器論—縄文農耕肯定論の資料として—」『月刊文化財』16号
- 藤森森二 2006 「縄文時代中期中葉後半における、ある土器の系譜—尖石遺跡蛇体把手土器の子孫遺—」『長野県考古学会誌』118号
- 藤森森二 2012 「鉱物分析を利用した縄文時代中期中部中葉における同一系統土器の伝播経路—尖石蛇体把手土器の子孫遺その2—」『長野県考古学会誌』140号
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後集土器への移行」『長野県考古学会誌』51
- 三上徹也 2018 「縄文時代中期・顔面様装飾把手の変遷から水煙把手への変質と背景」『日本考古学』45
- 八幡一郎 1956 「縄文式土器の人物意匠について」『考古学雑誌』第41巻第4号
- 吉本洋子・渡辺誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号

1. 磨版式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器

- 吉本洋子・渡辺誠 1999 「人面・土偶裝飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補)」『日本考古学』第8号
 吉本洋子・渡辺誠 2004 「目鼻口を欠く人面裝飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会
 吉本洋子・渡辺誠 2005 「人面・土偶裝飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補2)」『日本考古学』第19号
 和田晋治 2011 『縄文中期磨版式土器の猪裝飾』『あらかわ』第13号
 和田晋治 2012 『縄文中期磨版式土器の猪裝飾(追補)』『あらかわ』第14号
 和田晋治 2022 『縄文中期磨版式土器の土偶裝飾付土器』『富士見市立資料館調査報告書』第1号
 渡辺 誠 1999 『縄文土器の形と心』『月刊考古学ジャーナル』No.346

図版出典

- 第216図 1: 塩尻市教委 1979 『小段遺跡』(掲載図を合成) 2: 長野県教委 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 昭和49年度(諏訪市その3)』 3: 同 1974 『同 昭和48年度(上伊那郡辰野町その2)』 4: 箕輪町 1986 『箕輪町誌 歴史篇』 5: 岡谷市教委 2005 『日切・清水田遺跡』 6: 尖石考古館 1976 『尖石考古館図録』 7: 山形村教委 1987 『殿村遺跡』 8: 箕輪町教委 1990 『丸山遺跡』 9・19・21: 井戸尻考古館 2019 『井戸尻の縄文土器7』 10: 伊那市教委 1969 『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』 11: 岡谷市教委 1991 『榎垣外・広畑・新井南遺跡発掘調査報告書(複製)』 12: 佐野隆 1997 『平林遺跡』『八ヶ岳考古—平成8年度年報—』 13: 千葉県文化財センター 2002 『茂原市川代遺跡』 14: 東京都建設局府中市遺跡調査会 1985 『清水ヶ丘遺跡』 15: 塩尻市教委 1986 『廻原遺跡』 16・23・41: 吉本・渡辺 1994 17: 相模原市立博物館 2019 『大日野原遺跡資料調査報告書』 18: 塩山市 1996 『塩山市史 史料編』第1巻
 20: 山梨県埋文 1998 『甲斐原遺跡IV』 22: かながわ考古学財団 2002 『原口遺跡III』 24: 山梨県埋文 2005 『香香場遺跡 第1-3次遺物編』 25: 同 2000 『古塚遺跡・大林上遺跡・宮の前遺跡・海道前C遺跡・大林遺跡』 26: 塩尻市教委 2015 『史跡平出遺跡』 27: 山梨県埋文 2005 『原町農業高校前遺跡第2次』 28: 北杜市教委 2009 『向原遺跡』 29: 武相文化財研究所 2016 『神奈川県厚木市温水上原遺跡 第2地点』 30: 川合剛 1998 『名古屋博物館所蔵の土偶関係資料』『名古屋市立博物館研究紀要』21 31・39: 北杜市教委 2020 『南沢遺跡』 32: 須玉町教委 1987 『津金御所前遺跡』 33: 北杜市教委 2016 『竹宇1遺跡』 34: 長野県埋文 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20』 35: 長野県埋文 2024 『沢尻東原遺跡』 36: 横浜市埋文 2000 『大熊仲町遺跡』 37: 茅野市教委 2003 『梨ノ木遺跡』 38: 渡辺忠胤 1963 『八王子市中原遺跡調査報告』『多摩考古』5 40: 八王子市榎田遺跡調査会 1976 『榎田遺跡群 1975年度調査概要』 42: 甲野勇 1961 『顔面土器について』『多摩考古』2 43: 松本市教委 2018 『エリ穴遺跡(第2分冊)』 44: 本書 45・46・52: 山梨県教委 1986 『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』 47: 中道町教委 2000 『供養寺遺跡・後呂遺跡』 48: 山梨県埋文 1996 『九鬼Ⅱ遺跡』 49・56: 同 1987 『釈迦堂Ⅱ』 50: 同 1987 『釈迦堂Ⅲ』 51: 相武考古学研究所 1993 『田名塩田原地区遺跡群 田名花ヶ谷遺跡(資料編)』 53: 財団法人山梨文化財研究所 2008 『天神堂遺跡』 54: 鳥居龍藏 1926 『先史及び原史時代の伊那』 55: 長野県考古学会 1967 『海戸・安源寺』 57: 裾野市 1992 『裾野市史』第1巻(掲載図を合成) 58: 和光市教委 2015 『吹上原遺跡(第2次A区から第6次)』 59: 山梨県埋文 2019 『上コブケ遺跡E区』
 第217図 1・5・7・9: 富士見町教委 2011 『藤内』 2: 井戸尻考古館 2017 『井戸尻の縄文土器6』 3: 前掲 第216図 25 4: 東京都埋文 1998 『多摩ニュータウン遺跡 No.72-795-796 遺跡(17)』 6: 山梨県教委 1972 『重原遺跡』 8: 八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1989 『宇津木台遺跡群XⅢ(上)』
 第218図 1~9・11・16~18 前掲 10: 国分寺市 1986 『国分寺市史 上』 山内清男 1964 『日本原始美術1』 12: 長泉町教委 1990 『上山地遺跡』 13: 山梨文化財研究所 2008 『天神堂遺跡』 14: 青梅市遺跡調査会 1998 『東京都青梅市駒木野遺跡発掘調査報告書』 15: 岡谷市教委 1996 『花上寺遺跡』 19: 長野県埋文 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』
 第219図 1: 茅野市教委 2022 『国特別史跡尖石石器時代遺跡総括報告書』 2: 昭島市教委 1986 『西上遺跡Ⅱ(第4次~6次調査)』 3: 志木市遺跡調査会 2009 『西原大塚遺跡』 4: 山梨県教委 1978 『安道寺遺跡調査報告書』 5: 上川名昭 1971 『甲斐北原・柳田遺跡の研究』 6: 西桂町教委 1993 『宮の前遺跡』 7: 山梨県埋文 1989 『一の沢遺跡調査報告書』 8: 小林 2003 9: 山梨県埋文 1987 『上の平遺跡第4次・第5次』 10: 清瀬市教委 1982 『野塩前原』 11: 井戸尻考古館・田枝幹宏 1988 『八ヶ岳縄文世界再現』新潮社 12: 前掲 第216図 25 13: 富士見町教委 1978 『曾利』 14: 駒ヶ根市教委 1977 『丸山南遺跡』・国立歴史民俗博物館 1996 『動物とのつきあい』 15: 厚木市 1985 『厚木市史 地形地質編・原始編』
 第221図 1: かながわ考古学財団 2001 『田中・万代遺跡』 2・3・7: 伊藤公明 2011 『寺所第2遺跡出土の人獣意匠裝飾土器』『山梨県考古学協会誌』20 4: 原村教委 2005 『比丘原遺跡(第2次発掘調査)』 5: 巖村町教委 1994 『鑄物師屋遺跡』 6: 岡谷市教委 2009 『梨久保遺跡』 8: 山梨文化財研究所 2005 『高畑遺跡』 9: 藤森栄一編 1965 『井戸尻』 10: 前掲 第219図 13

II. ガラス小玉蛍光X線分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

分析に供された試料は、埼玉県志木市西原大塚遺跡第35地点の方形周溝墓の主体部から出土したガラス製小玉である。本報告は、この試料に関して情報を得ることを目的として、ガラス製小玉に蛍光X線分析を実施する。

1. 試料

試料は、ガラス小玉7点である(第181図6～12)。

2. 分析方法

(1) 蛍光X線分析

日本電子(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(JSX-1000S)を利用し、Rh管球、管電圧:50kV、管電流:自動、測定時間:300秒(live time)、コリメーター:2mmφ、真空雰囲気の中で元素分析を実施した。なお、本装置は下面照射型の装置であるため、分析にあたっては試料を薄膜(プロレンフィルム、4μm(chemplex CatNo.426))を底部に張った試料カップで保持して測定を実施した。取得した特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、成分形態を酸化物とした条件でFP法(ファンダメンタルパラメーター法)を用いたスタンダードレス分析によって相対含有率(質量%)を求めたが、算出された結果はあくまでも半定量的なものであることに留意されたい。

3. 結果

蛍光X線分析

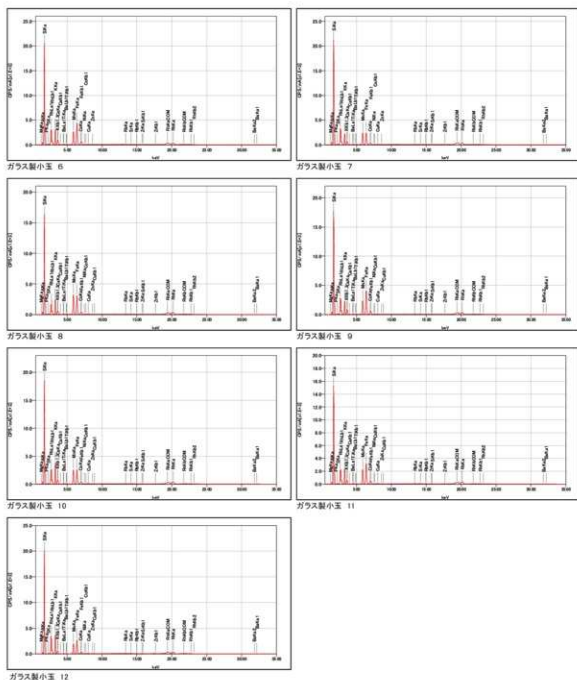
蛍光X線スペクトルを第225図に掲げ、FP法による定量結果を第93表に示す。

各試料から検出された元素は、Mg(マグネシウム)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、S(硫黄)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Co(コバルト)、Ni(ニッケル)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)、Ba(バリウム)の18元素である。酸化物換算した場合の質量百分率(質量%)によれば、およそSiO₂が80%、Al₂O₃が3～5%程度、K₂Oが6～10%を占める。また、MnOとFe₂O₃が2%前後含まれるほか、CoOが0.05～0.11%検出されている点にも特徴が見られる。

なお、本調査では網目形成酸化物であるSiO₂や、修飾酸化物となり得るK₂O、CaO、また中間酸化物となり得るAl₂O₃等について一応の定量は行っているものの、基本的に表面風化層の除去を行っていないため本来の材質を反映した結果とは成り得ていないことに留意しておく必要がある。

4. 考察

ガラスは珪酸原料に融剤および着色剤を調合し、溶融・冷却という過程を経て製品となるが、肥塚(1995,1999,2001)によれば融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス、鉛珪酸塩ガラス、アルカリ鉛珪酸塩ガラスのグループに分類され、さらに構成酸化物の種類と量から、アルカリ珪酸塩ガラスは $K_2O\text{-}SiO_2$ 系・ $Na_2O\text{-}CaO\text{-}SiO_2$ 系・ $K_2O\text{-}CaO\text{-}SiO_2$ 系・ $Na_2O\text{-}Al_2O_3\text{-}CaO\text{-}SiO_2$ 系・ $(Na_2O/K_2O)\text{-}CaO\text{-}SiO_2$ 系に、鉛珪酸塩ガラスは $PbO\text{-}SiO_2$ 系・ $PbO\text{-}BaO\text{-}SiO_2$ 系に、アルカリ鉛珪酸塩ガラスは $K_2O\text{-}PbO\text{-}SiO_2$ 系に分類される。また、肥塚(1999)はガラスの風化表面と内部新鮮面を調査し、風化による成分変動を検討し、 $K_2O\text{-}SiO_2$ 系や $K_2O\text{-}PbO\text{-}SiO_2$ 系では風化表面で K_2O が減少し、 SiO_2 および Al_2O_3 の増加 ($K_2O\text{-}SiO_2$



第 225 図 蛍光 X 線スペクトル

試料名	6	7	8	9	10	11	12	
色	紺色	紺色	紺色	紺色	紺色	紺色	紺色	
透明度	透明	透明	透明	透明	透明	透明	透明	
FP 定量結果 (質量%)	MgO	0.486□	0.458□	0.471□	0.533□	0.407□	0.451□	0.388□
	Al ₂ O ₃	4.162□	4.323□	4.862□	4.501□	4.091□	3.629□	2.911□
	SiO ₂	79.880□	83.700□	79.230□	80.160□	78.520□	80.000□	81.450□
	P ₂ O ₅	0.378□	0.363□	0.347□	0.414□	0.342□	0.302□	0.201□
	SO ₃	0.510□	0.410□	0.427□	0.520□	0.452□	0.433□	0.419□
	K ₂ O	7.680□	5.819□	7.545□	6.683□	10.080□	7.995□	9.783□
	CaO	2.001□	1.471□	1.588□	2.041□	1.771□	1.829□	1.195□
	TiO ₂	0.186□	0.174□	0.213□	0.207□	0.178□	0.208□	0.152□
	MnO	1.763□	1.576□	2.676□	1.847□	1.951□	2.127□	1.452□
	Fe ₂ O ₃	2.574□	1.323□	2.139□	2.706□	1.668□	2.548□	1.690□
	CoO	0.070□	0.075□	0.089□	0.075□	0.108□	0.075□	0.054□
	NiO	0.010□	0.011□	0.011□	0.010□	0.012□	0.010□	0.010□
	CuO	0.042□	0.038□	0.055□	0.044□	0.059□	0.047□	0.036□
	ZnO	0.006□	0.004□	0.005□	0.007□	0.006□	0.006□	0.004□
	Rb ₂ O	0.019□	0.012□	0.022□	0.020□	0.017□	0.025□	0.017□
	SrO	0.015□	0.012□	0.016□	0.016□	0.018□	0.020□	0.014□
	ZrO ₂	0.007□	0.005□	0.010□	0.007□	0.006□	0.008□	0.008□
	BaO	0.212□	0.226□	0.298□	0.207□	0.312□	0.289□	0.222□

第 93 表 ガラス製小玉の FP 定量結果

系) ないし PbO の増加 (K₂O-PbO-SiO₂ 系) する傾向が、Na₂O-CaO-SiO₂ 系や Na₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ 系では風化表面で Na₂O が減少し、SiO₂、Al₂O₃ が増加する傾向があることを指摘している。

調査試料は、いずれもアルカリ珪酸塩ガラスに区分される材質で、修飾酸化物である K₂O が多く、CaO は 1～2% で、Na₂O は検出されていない点からカリガラス (K₂O-SiO₂ 系) と判断される。なお、カリガラスは K₂O と SiO₂ を主成分とした二成分系のガラスであり、Al₂O₃ を数% 含有し、Na₂O および CaO を 1～2% 前後以下しか含有しない特徴を持つガラスで、K₂O は平均で約 17% である (肥塚 2001)。調査試料における K₂O は 6～10% と少ない傾向にあるが、カリガラスでは風化表面で K₂O が減少し、SiO₂ や Al₂O₃ が増加する傾向があるため (肥塚 1999)、元々の K₂O はより多く、Al₂O₃ はより少ない可能性がある。

一方、これらガラス製小玉は紺色を呈したガラスで、微量の CoO が認められている。コバルトイオンによって着色されたカリガラスには、Fe₂O₃ と MnO が 1% 以上含有される特徴があることも含めると、これら試料の発色にはコバルトの寄与が指摘されよう。

引用文献

- 肥塚隆保 1995 「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』クバプロ 94-108。
 肥塚隆保 1999 「出土遺物の材質調査 - 日本で出土した古代ガラスの研究 -」『理学電気ジャーナル』30.1 理学電気工業 33-40。
 肥塚隆保 2001 「古代ガラスの材質と鉛同位体比、同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究」『国立歴史民族博物館研究報告』第 86 集 財団法人歴史民族博物館振興会 233-268。

